

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■

11月号



11-November · 1967

奇譚クラブ

昭和四十二年十一月号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukiryupan

Osaka Japan



11月号 ¥ 350

サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊 花と蛇

《小説・絵画》 特集号

乞う直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」 テーマ画集 十六葉

1. 折り曲げられて弄ばれる女体
2. 逆エビ縛りて引き回される女体
3. 汚水を顔面に浴びせかける男
4. 汚水と薬品の洗禮を受ける女
5. 洗禮とオシメカバの羞恥女体
6. ガラス製一〇〇Cの洗腸器
7. 強烈なイルリガートの洗腸器
8. 洗腸器

団鬼六作 長篇小説「花と蛇」内容見出し一覧

第一章 密室の秘密シヨ
第二章 洗面器
第三章 脱走の失敗
第四章 鬼女の計画
第五章 美津子の脱走
第六章 美津子の脱走
第七章 美津子の脱走
第八章 美津子の脱走
第九章 美津子の脱走
第十章 美津子の脱走
第十一章 美津子の脱走
第十二章 美津子の脱走
第十三章 美津子の脱走
第十四章 美津子の脱走
第十五章 美津子の脱走
第十六章 美津子の脱走
第十七章 美津子の脱走
第十八章 美津子の脱走
第十九章 美津子の脱走
第二十章 美津子の脱走
第二十一章 美津子の脱走
第二十二章 美津子の脱走
第二十三章 美津子の脱走
第二十四章 美津子の脱走
第二十五章 美津子の脱走
第二十六章 美津子の脱走
第二十七章 美津子の脱走
第二十八章 美津子の脱走
第二十九章 美津子の脱走
第三十章 美津子の脱走
第三十一章 美津子の脱走
第三十二章 美津子の脱走
第三十三章 美津子の脱走
第三十四章 美津子の脱走
第三十五章 美津子の脱走
第三十六章 美津子の脱走
第三十七章 美津子の脱走
第三十八章 美津子の脱走
第三十九章 美津子の脱走
第四十章 美津子の脱走
第四十一章 美津子の脱走
第四十二章 美津子の脱走
第四十三章 美津子の脱走
第四十四章 美津子の脱走
第四十五章 美津子の脱走
第四十六章 美津子の脱走
第四十七章 美津子の脱走
第四十八章 美津子の脱走
第四十九章 美津子の脱走
第五十章 美津子の脱走
第五十一章 美津子の脱走
第五十二章 美津子の脱走
第五十三章 美津子の脱走
第五十四章 美津子の脱走
第五十五章 美津子の脱走
第五十六章 美津子の脱走
第五十七章 美津子の脱走
第五十八章 美津子の脱走
第五十九章 美津子の脱走
第六十章 美津子の脱走
第六十一章 美津子の脱走
第六十二章 美津子の脱走
第六十三章 美津子の脱走
第六十四章 美津子の脱走
第六十五章 美津子の脱走
第六十六章 美津子の脱走
第六十七章 美津子の脱走
第六十八章 美津子の脱走
第六十九章 美津子の脱走
第七十章 美津子の脱走
第七十一章 美津子の脱走
第七十二章 美津子の脱走
第七十三章 美津子の脱走
第七十四章 美津子の脱走
第七十五章 美津子の脱走
第七十六章 美津子の脱走
第七十七章 美津子の脱走
第七十八章 美津子の脱走
第七十九章 美津子の脱走
第八十章 美津子の脱走
第八十一章 美津子の脱走
第八十二章 美津子の脱走
第八十三章 美津子の脱走
第八十四章 美津子の脱走
第八十五章 美津子の脱走
第八十六章 美津子の脱走
第八十七章 美津子の脱走
第八十八章 美津子の脱走
第八十九章 美津子の脱走
第九十章 美津子の脱走
第九十一章 美津子の脱走
第九十二章 美津子の脱走
第九十三章 美津子の脱走
第九十四章 美津子の脱走
第九十五章 美津子の脱走
第九十六章 美津子の脱走
第九十七章 美津子の脱走
第九十八章 美津子の脱走
第九十九章 美津子の脱走
第一百章 美津子の脱走

第十六章 落花無残の修羅場
第十七章 淫らな美女の調教
第十八章 二人の花形
第十九章 密談
第二十章 舌と唇
第二十一章 汚水にまみれた宝石
第二十二章 流石の血
第二十三章 舞台衣
第二十四章 バラ夫人の心得
第二十五章 華々しき美女の屈伏
第二十六章 酔った
第二十七章 身体検査
第二十八章 対峙する
第二十九章 美女と美女
第三十章 嵐に立つ令嬢
第三十一章 美女対峙
第三十二章 悲しき説得
第三十三章 調教開始
第三十四章 第二十二章 あくどい陥穽
第三十五章 修羅 図
第三十六章 失心する小夜子
第三十七章 悪の部屋
第三十八章 第二十三章 羞恥図絵の展開
第三十九章 復讐の生贄
第四十章 汚辱に泣く令嬢
第四十一章 小夜子の屈辱

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集

山原清子 妖艶緊縛 **刺青の魅力を探ぐる** 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(共) 略号「美7」

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉り出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じいポーズ満載)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開
◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第九集

〔女性刑罰拷問特集〕 西洋篇

革具に拘束される女 七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号「美9」

モデル 清楚な美女乃々子 グラマーで美貌の大塚啓子 真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラフィック写真集として、ここに提供します。

〔女性刑罰拷問特集〕(日本篇)「略号美5」は売却。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号 箕田京二へ。

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第四集

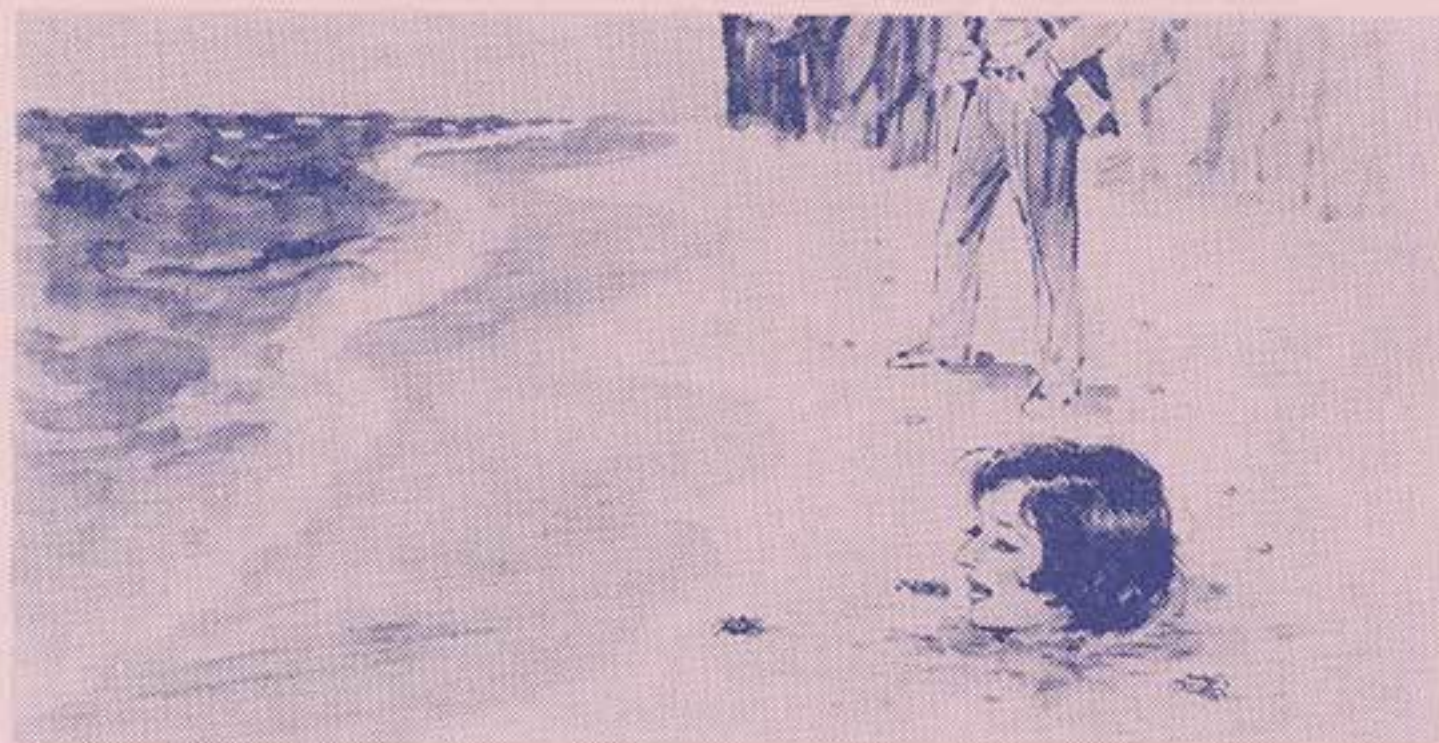
〔登場モデル〕 山原清子・木村洋子・玉田美佐子・大塚啓子

◎縛られた美女ばかりのフォト八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責(山原清子) 鉄扉に緊縛晒し責(玉田美佐子) ブロックの石抱き責(木村洋子) 箱子と洗腸器の鼻責(大塚啓子) 両足吊に刺青女(山原清子) 古墳に後手吊組写真(木村洋子) 両手吊に悶える女体(山原清子) 逆さ吊に揺れる女体(木村洋子) 猿ぐつわ百態組写真(大塚啓子)

革拘束具アラカルト(大塚啓子) 柱縛りの庭園晒し(玉田美佐子) セーラー服緊縛姿(大塚啓子) 野外に於ける晒し責(山原清子) 刺青女体の柱縛り責(山原清子) 捕獲された女の悶え(大塚啓子) 入墨女の緊縛絵模様(山原清子) 両足吊りの表と裏(山原清子) 以上緊縛フォト八十葉

大手札四枚一組 五〇〇円
大島照代 略号「せに」
仰向けにされた豊かな裸身に下
敷きとなった後手が痛さに痺れ喰
い込む二の腕の縄目がむごい。



昭和四十二年十一月号

＜第21巻第11号・通刊第233号＞

奇譚クラブ 11月号 目次

◇奇クサロン◇

○疎外者の悲哀……余田満(9) ○責めにもだえる女性……長田実(10) ○短歌
・流鶯責め……山本羊子(11) ○私のイメージュ……黒川隆(12) ○料理教室……桐原菜門(13) ○落
・藤岡エネマより(12) ○私の犬……黒川隆(14) ○映画……黒川隆(15) ○小説……黒川隆(16) ○詩……黒川隆(17) ○文壇……黒川隆(18) ○演劇……黒川隆(19) ○音楽……黒川隆(20) ○美術……黒川隆(21) ○その他……黒川隆(22) ○おんなマゾヒスト奇譚……黒川隆(23) ○群魔児(24) ○便り……黒川隆(25)

△本文△

本誌自粛の徹底……………	編集部……………(25)
憎縄の記(ある若妻の抗議)……………	寺宇治久美……………(26)
贗作残酷記……………	みはらひろし……………(36)
懸賞告白「大島照代との顛末記」……………	河本光三……………(40)
連載サディズム小説 心傷たむ遍歴……………	西条操……………(48)
S・Mカメラハント△芝梨枝子の巻△……………	辻村隆……………(68)
「快樂の紋章」……………	牧高志……………(86)
フィクション「女装と腰巻の誘惑」……………	千草忠夫……………(91)
夢幻譜Ⅱ過ぎさつた夏Ⅱ……………	斎藤夜居……………(94)
稿談 性風俗資料入門……………	芳野眉美……………(102)
水中花……………	馬場好男……………(108)
私のマゾ雑記帳……………	

無惨女斗美模様「裸女決笑」……………	女斗彦……………(116)
或る女装マニアの告白……………	常盤かおる……………(120)
△ガンベッタ△「復讐」……………	千葉青鬼……………(122)
私流的諸本乱読記……………	夜乃探郎……………(130)
連載小説「花と蛇」(続第三十六回)……………	団鬼六……………(138)
ゴムプレイの醍醐味……………	菅原敏夫……………(152)
浣腸告白Ⅱ虜となるまでⅡ……………	山本羊子……………(157)
懸賞入選作品「狂獣の宴」(上)……………	能美積……………(160)
被虐の空想的断片……………	三原寛……………(178)
女性の乳房礼讃……………	御木本三郎……………(181)
会津のジャンヌダルク……………	中康弘通……………(184)
私の手製責具 皮革の魅力……………	長田実……………(186)
濡れにぞ濡れし……………	芳野眉美……………(188)
女相撲「花の女斗美たち」……………	奮斗士好太……………(194)
懸賞告白「背信の記」……………	堀夏彦……………(204)
愛奴讃歌(あいどさんか)……………	平みどり……………(212)
ミモザ館Ⅱ背徳の記録……………	睦月笛一郎……………(214)
野坂昭如の「好色の魂」について……………	久我庄一……………(226)
カメラ・ルポ「この女と」△続左近麻里子△……………	山本一章……………(228)
告白 紐のある青春……………	予世場良三……………(234)
奇譚雑話 夜の徒然草……………	中宮栄……………(238)
青木順子のサディズム・ショウ……………	居眠偶太郎……………(247)
読者通信……………	編集部選……………(250)

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる
 大手札四枚一組 略号(あと) 〇〇〇円
 素足の脂がべっとり
 大手札五枚一組 略号(あて) 〇〇〇円
 縛った男をムチで料理
 大手札十枚一組 略号(あさ) 〇〇〇円
 女王様の間便器になる
 大手札十枚一組 略号(あす) 〇〇〇円
 蟻涙の雨を全身に浴びる
 大手札四枚一組 略号(あせ) 〇〇〇円
 尻の下につぶされた男
 大手札二枚一組 略号(あた) 〇〇〇円
 エビ責めに弄ぶ女
 大手札六枚一組 略号(あそ) 〇〇〇円
 神酒を与える女神
 大手札六枚一組 略号(あち) 〇〇〇円
 咽喉輪を股責極楽
 大手札四枚一組 略号(あつ) 〇〇〇円
 素足の足舐と嗅香
 大手札五枚一組 略号(あこ) 〇〇〇円
 M男性を尻に敷く

人間椅子の御褒美
 大手札五枚一組 略号(まお) 〇〇〇円
 飼犬に餌を与える
 大手札四枚一組 略号(みた) 〇〇〇円
 浣腸器で男を弄ぶ女
 大手札三枚一組 略号(みつ) 〇〇〇円
 股で絞められる首
 大手札三枚一組 略号(みな) 〇〇〇円
 芳香を嗅がす尻
 大手札二枚一組 略号(まの) 〇〇〇円
 人間馬の調教プレイ
 大手札三枚一組 略号(まわ) 〇〇〇円
 足舐めの奉仕と強制
 大手札三枚一組 略号(また) 〇〇〇円
 股責めにあう男の顔
 大手札三枚一組 略号(まひ) 〇〇〇円
 女に縛られて弄られる
 大手札三枚一組 略号(まな) 〇〇〇円
 踏みにじられる顔面
 大手札三枚一組 略号(まは) 〇〇〇円
 肩車に奉仕する青年
 大手札三枚一組 略号(みか) 〇〇〇円
 男を馬にする美女
 大手札五枚一組 略号(みく) 〇〇〇円
 汚物を戴く男
 大手札六枚一組 略号(みれ) 〇〇〇円
 女の足下にうごめく顔
 大手札六枚一組 略号(みら) 〇〇〇円
 男を刺し殺す美女
 大手札十枚一組 略号(みむ) 〇〇〇円
 男を尻の下に敷く
 大手札十枚一組 略号(みお) 〇〇〇円
 人間の芸仕込み
 大手札十枚一組 略号(あえ) 〇〇〇円
 女の尻に顔がつぶれる
 大手札三枚一組 略号(あく) 〇〇〇円
 足指に挟んだ菓子
 大手札二枚一組 略号(あひ) 〇〇〇円
 男を縛って弄ぶ女
 大手札十枚一組 略号(あに) 〇〇〇円
 尻責めと股責め
 大手札十枚一組 略号(あぬ) 〇〇〇円
 大男の訓練風景
 大手札十枚一組 略号(あせ) 〇〇〇円
 尻の下につぶされた男
 大手札二枚一組 略号(あた) 〇〇〇円
 エビ責めに弄ぶ女
 大手札六枚一組 略号(あそ) 〇〇〇円
 神酒を与える女神
 大手札六枚一組 略号(あち) 〇〇〇円
 咽喉輪を股責極楽
 大手札四枚一組 略号(あつ) 〇〇〇円
 素足の足舐と嗅香
 大手札五枚一組 略号(あこ) 〇〇〇円
 M男性を尻に敷く

男を縛って玩具にする
 大手札三枚一組 略号(まで) 〇〇〇円
 首を太股で絞めあげる
 大手札三枚一組 略号(まや) 〇〇〇円
 灰皿にされた男
 大手札四枚一組 略号(そほ) 〇〇〇円
 裸女の長靴に悶ゆ
 大手札四枚一組 略号(そに) 〇〇〇円
 美女に飼われる犬の生態
 大手札三枚一組 略号(そろ) 〇〇〇円
 美女の手で縛られる過程
 大手札四枚一組 略号(そと) 〇〇〇円
 女御主人に使役される男
 大手札四枚一組 略号(そち) 〇〇〇円
 美女のおいしい足を戴く
 大手札四枚一組 略号(そぬ) 〇〇〇円
 むしゃぶりつく素足の味
 大手札三枚一組 略号(そは) 〇〇〇円
 凌辱と美女のなぶり者
 大手札五枚一組 略号(そり) 〇〇〇円
 素足を舐める構図
 大手札四枚一組 略号(そへ) 〇〇〇円
 男を縛って玩具にする
 大手札三枚一組 略号(まで) 〇〇〇円
 首を太股で絞めあげる
 大手札三枚一組 略号(まや) 〇〇〇円
 灰皿にされた男
 大手札四枚一組 略号(そほ) 〇〇〇円
 裸女の長靴に悶ゆ
 大手札四枚一組 略号(そに) 〇〇〇円
 美女に飼われる犬の生態
 大手札三枚一組 略号(そろ) 〇〇〇円
 美女の手で縛られる過程
 大手札四枚一組 略号(そと) 〇〇〇円
 女御主人に使役される男
 大手札四枚一組 略号(そち) 〇〇〇円
 美女のおいしい足を戴く
 大手札四枚一組 略号(そぬ) 〇〇〇円
 むしゃぶりつく素足の味
 大手札三枚一組 略号(そは) 〇〇〇円
 凌辱と美女のなぶり者
 大手札五枚一組 略号(そり) 〇〇〇円
 素足を舐める構図
 大手札四枚一組 略号(そへ) 〇〇〇円



奇クの愛読も想えばすでに久しいが、最近の奇クには昔の面影はすっかり影をひそめ魅力もうすらいだ。私にはそれが寂しく思われる。勿論、いろいろな圧力が編集面に制限を余儀なくさせている事情はよくわかるが、しかし私が愛読した貴誌は、もう昔語りのものなのか。毎号頁をひらいて、すぐに失望と淋しさを感じる。

新しい風俗文献誌というタイトルを内容知らずして表紙をはじめて見る人が想像すると、まともな専門誌のような感じを受けるが悪書追放運動となれば、いの一に槍玉にあげられるのもその内容のせいとすれば仕方がない。だが私にとっては永い歲月、発行日の待ち遠しい恋人のような楽しい雑誌であった。それが現在、このような状態とは寂しい限りである。私が女の責めに不思議な興味を

抱いたのは、まだ小学校の六年生の頃だったと思う。当時（昭和六年頃）の講談雑誌に、作者は憶えていないが挿画は清水三重三で、素ッ裸で後手に縛られた女の画を見て奇妙な衝動を感じた。それ以来、中学に進学してから、いよいよその傾向が強くなったように覚えていいる。夜店の本屋を漁ったりして古雑誌の中から責場の挿画をさがし、勉強部屋で人知れず甘美な陶醉に浸った楽しさも、まだ昨日のことのように鮮かに記憶に残っている。

かして見に行った。しかし映画の方は期待はずれで失望したことを憶えている。井川洗涯の責めの挿画が大好きで、古雑誌から切り取り大学ノートに貼りつけて楽しんだこともある。終戦後はじめて奇クを手にしたとき、敗戦のおかげで、こういう雑誌も、自由に手に入るようになったかと、すっかりうれしくなったものだ。それ以来今日迄、ずっと欠かさず親しんできたが、しかし最近は何んとも、もの足りない雑誌になってしまった。寂しい限りである。風当りのきつい現在、編集の困難なことはよくわかるのだが、最近は何んと我慢しても私には歯がゆいことばかりである。見る雑誌から読む文献誌へという大義名分も、私にも納得がゆかない。この傾向の雑誌は、何よりも見ることが楽しみで、読むことはそのあとでいい。しかも読まされる内容が理屈っぽくなれば、いよいよ頭が痛くなる。特に投書マニアらしい夜乃探郎、保藤久人氏の文章は、私には何をいつている

のかよくわからない。よく消化されていない辞書から引き出したばかりのような文字を矢鱈と並べたてて、何でもかんでも正面きって力んでいるみたいで、俺はこんなおかしい投稿を読むために、この本を買ったのかと思うと、いよいよ情なくなってしまう。

といて、現今の社会情勢を考えてみると、私の奇クに対する期待が満たされないばかりか、これから益々強化される規制によって骨抜きにされることは必至である。と見てよい。徒らに過去のよき時代を懐しみ、既刊の旧号を回顧して、羨むことになりかねない。しかし、これは私ごときがいくら泣き言を述べたところで詮ないことである。大きな時の流れに押し流される笹小舟は、所詮ちりあくたとなつて社会の片隅へ押しやられ疎外される運命にあるということでは、否定することは出来ない。想えば二十年という永い歲月、私の人生にとって貴重な伴侶として少なからぬ影響を与えてくれた奇クが、脱皮に脱皮を重ねて次第に私の視野から遠ざかるうとしている現在、私は限らない愛着の念を、この雑誌に捧げて悔いないものである。

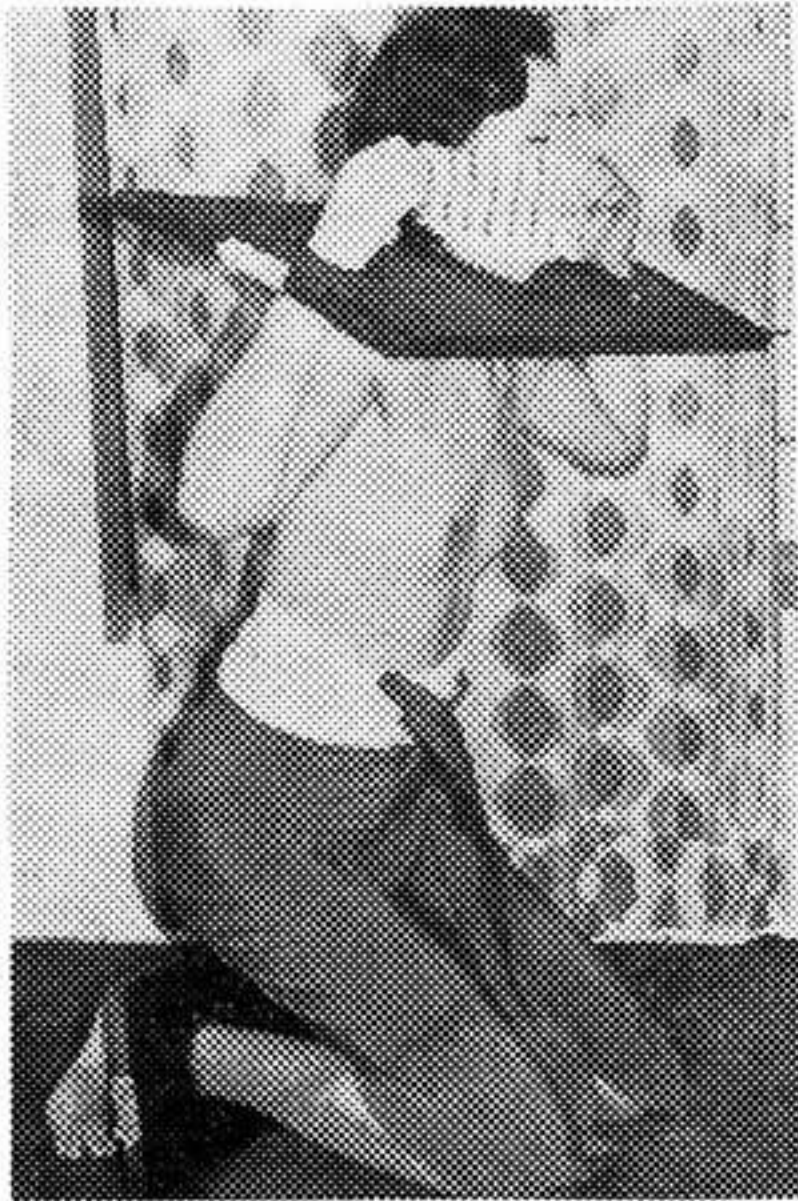
疎外者の悲哀

桑田 満

責めにもだえる女性

(夫婦プレイの一時)

長田 実



最近の奇クサロンに夫婦プレイ
同好者の投稿が多くなり、我々同
好者としては、誠によろこばしい
ことであります。しかし同じ同好
者といっても、その方法や趣味に
よって違って来ています。縛りに
おいても、器材の種類も数多くあ
るし、またその方法も種々異って
いるので、多彩であるといえます
が、結果的には一女性を責めると
いうことにおいては変りがない。
私の場合も、始めは普通のロープ

にて縛りを始めて、数々の方法を
取って来たが、何時も変りばえし
ないので、ロープの代り皮製品を
使用して来た。これも既製のもの
を使用していたが、最近では原皮
を購入して自分で、モデルに合っ
たものを自作している。それも、
変った型のものを考案しているが
これもだんだんアイデアにつまっ
て来ているのである。全身拘束具
から、部分拘束具にかけて数十点
のものを作って来ており、まだ友

人のものまで作
ってあげたほど
であるので製作
用工具も一式た
まっている。し
かし最近ではこ
れにもあきて、
木製にて何かよ
いものができな
いものかと考え
出して、写真に
あるような、最

も初期的な道具ですが、木
製では木工道具が多く必要
とするので、私ごとき素人
では、大変むずかしく、な
かなか上手にできません。
首と腕と一緒にした首枷と
両足を入れるようにした足枷
の二種類ですが、腕と足の
自由がとられるため、責に
対する要素ははたせます。
長時間放置されることによ
って、責に対する必要性が
増加しますので効果的で、
今まで使用した器材の中で
一番よかったように考えら
れます。

製作方法は(材木)厚さ
二厘または三厘のラワン材
適當の大きさのものを買い、二枚
を同一の大きさにして、始めに首
の穴をあけ、次に腕首の大きさに
穴をあけます。その時、腕が首の
所へ来るのに一番よい間隔にして
おきます。

足の場合は、両足が少々開く程
度の間隔にして、足首の周囲の大
きさに穴をあけます。この時の道
具としては、片引きの“こ”が最
も便利です。そして、ふち取りを
して、ニスをかけて仕上げ、その
後、片側に錠前用の掛金と、もう



一方に、掛金の中の蝶つがいを付
ければ終りですが、蝶番がないの
で、掛金を使って自作しました。
材木が硬いことと、重いので仕事
はしにくいですが、出来上ると大
変効果的なものなので嬉しく思っ
ます。苦勞のかいがあったと思っ
ています。そして木製の首枷、足
枷の状態で歩かせたり、寝かせた
りして責行為を続けます。次に紹
介する予定ですが、その時に自家
製の皮むちにて、追い立てたりも
しました。背中や腹部が空いてい

＜短歌＞

浣腸責め

山本羊子

おぞましと人は言うらめ浣腸の責めを待ちつつわが血騒ぐも

縛られてかつ強いられし浣腸に齒をかみしめて尚わが耐えがたし

後手に括られてのちはかざるオシメカバーをうなだれて見る

吊り縛りされし背骨のきしみより更に切なく便意つのり来

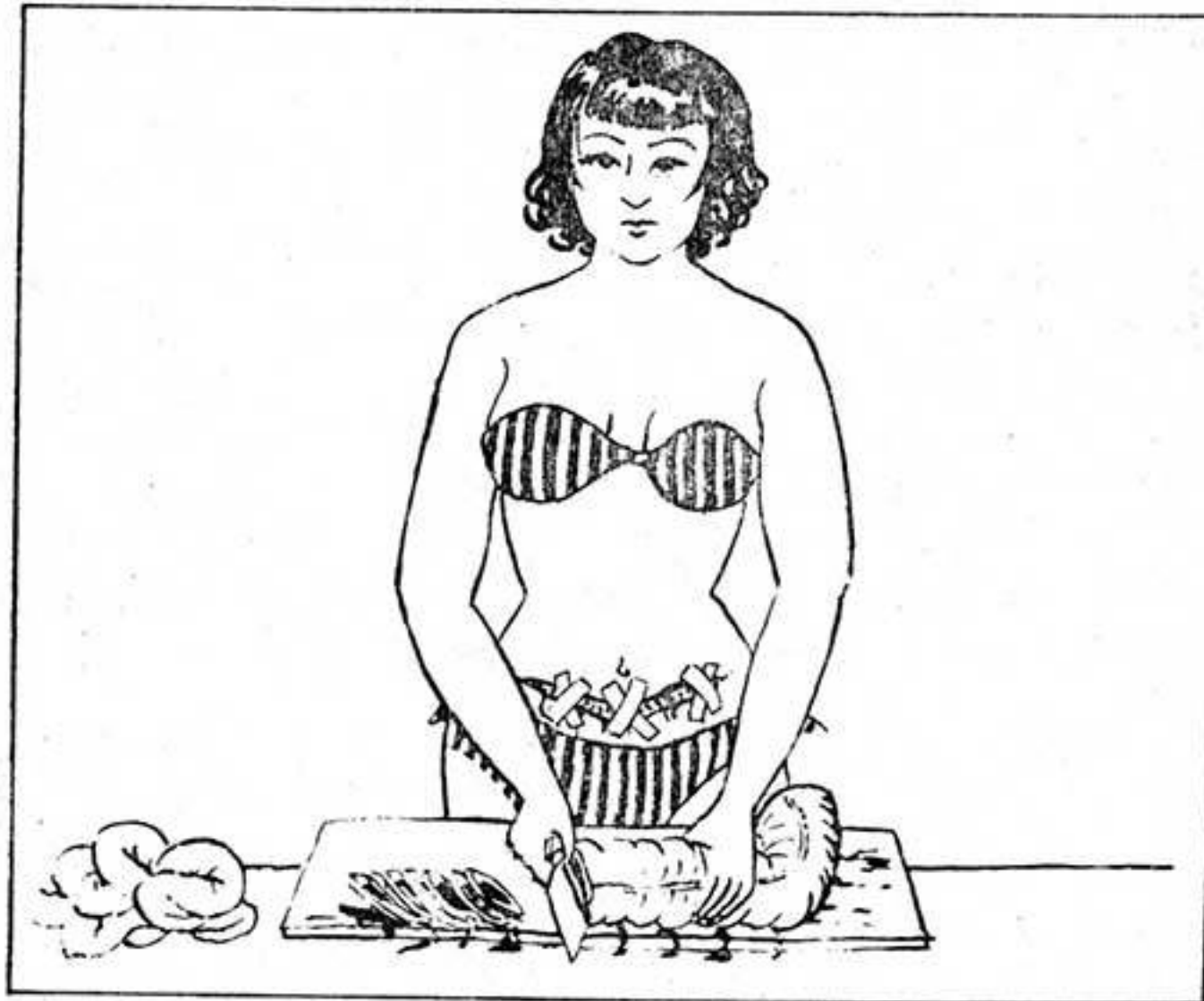
たかぶりて今は切なき排泄のお許しを乞う口ごもりつつ

排便のおぞましき音聴かれいてわが眸にいたき真昼のカンナ

鞭打ちのきわみにてふと漏れたるか尿きさらきと腿伝い落つ

縛られしままどろみていし我が濡れし襦袢の冷たさに覚む

錆び槍に突かれし夢を見し夕そこはかとなく嘴管見ており



料理教室

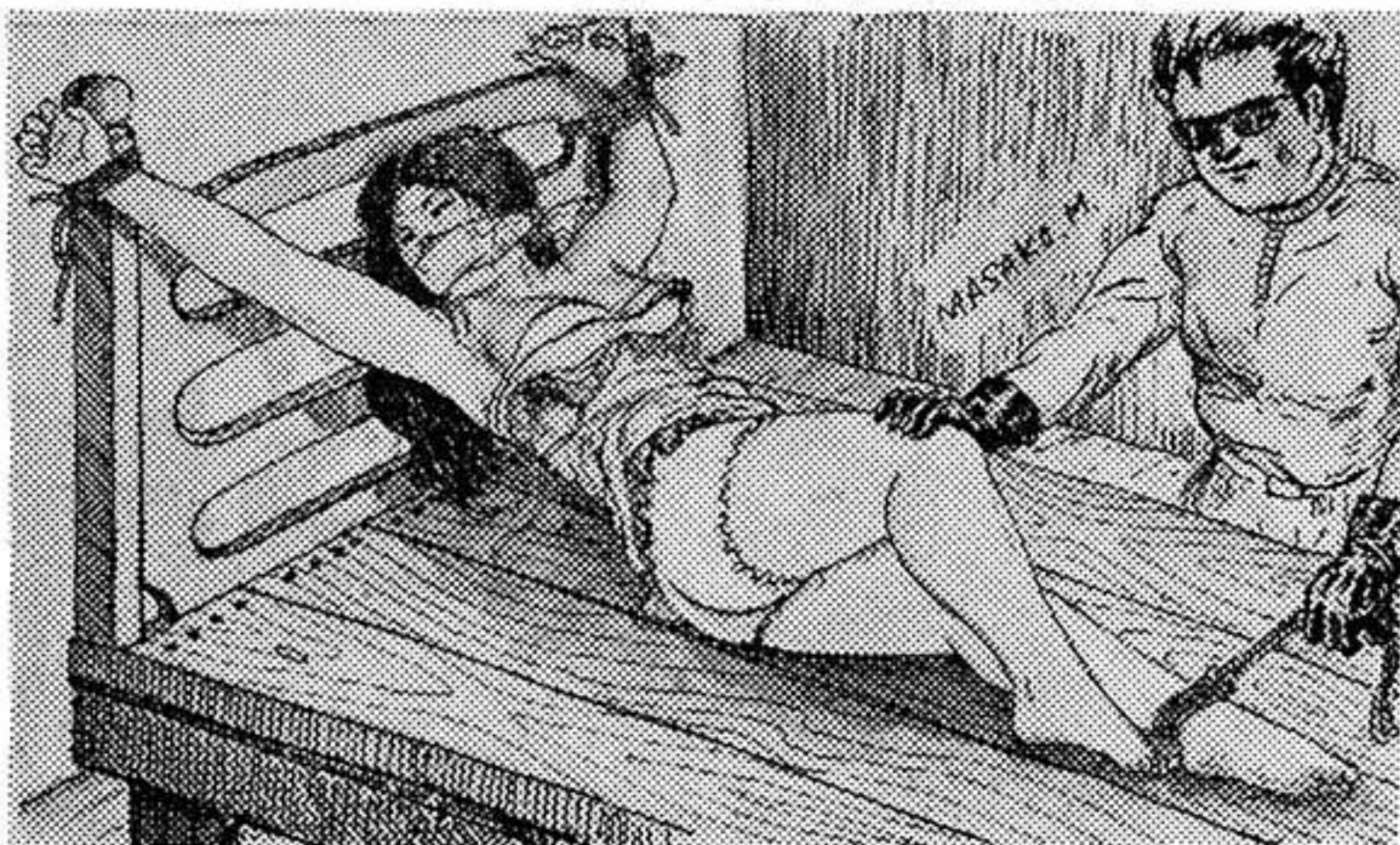
桐原紫門画

(材料は貴重品です。気をつけて刻んで下さい)

落花狼籍

宮城昌子画

(こんなにされたら？ 夢なら素晴らしいんだけど)



私のイメージ画集

るので、むちで責めるのは自由です。

私達夫婦はこのようにして、何時も変ったプレイを楽しんでいますが、何時もアイデアに困っていますので、つい研究して、種々の変った責具の製作に時間が取られ

ます。ただロープでのプレイの場合ですと、縛り方を変えることで変化を付けられますが、肌の縄痕が付いて、仲々取れませんので、日中は出来ません。木製を作ってから

用しています。数多くの同好の人達がおられますので、私達夫婦のようなプレイについての記事を、どしどし投稿して、奇クサロンを通じて意見の交換をしたく思っていますので、同好の方は是非投稿して下さい。



(第四十一回)

辻村 隆

夙川のY氏のご好意に甘えて、彼の別邸をいつでも自由な時に使用してもいいというので、次々と二人の女性をここで撮らせていただいた。何しろビデオ・テープ併用だから、プレイの模様が、忽ちテレビの受像機に写る。恥ずかしがる娘。すぐ興味をもって、わが被虐の状態に見入る娘と、さまざまだが、Y氏不在で、Y氏の愛人から饗応をうけた上、自由に駆使出来る部屋なんて、そうざらにはない。秋山夫妻をここへ呼び出して、同好の人相集って、一夕を懇談会をかねてプレイしてみたいなどと考えているが、近畿地方在住の方なら大いに有望である。編集長とも相談の上、一度プランを練ってみたいと思っている。Y氏の素姓を詮索しない人に限るが：

× × ×
ピアッシングのことについて、私はさして興味を惹かなかったがその真偽は別として、名古屋のM七〇生から頻繁にお便りが来て彼遂々乳頭を穿孔し、自らピアッシングの実験者となったのには恐れ入った。鼻孔の穿孔といい、乳頭といい、その実行力にはたじたじであるが、いつしか幻想と錯覚を起して、私にピアッシングに對するアドバイスをしきりに要求してこられる。誌上でもってピアッシングに對し、M七〇生にアドバイスされる方があれば幸甚である。彼にもその過程を私宛ではなしに、誌上へ発表するようお奨めしておいたが、何しろ彼の迷文難解？なので編集部辺りでも珍奇な実例ながら、少々修正に弱っているというのが本音か——。

× × ×
家族にねだられて、夏休み中にドライブをしたが、なるべく混雑しないところをねらって行ったのが、瑠璃峡という溪谷美。京都の西大路五条から国道九号線を走って、亀岡市を経て園部町で左折、約十分で到着。平日のせいもあつたが、峡谷の入口に車を置いて、水源の通天湖まで約四キロの行程を歩いて、出逢ったのは、洋裁塾らしい十人許りの女だけのハイカーのみという閑寂さである。谷あり、滝あり、渚ありで、野外の夏場の緊縛プレイにはもってこいの穴場である。頂上の通天湖からは能勢を経て大阪府下の池田市へも抜けられるが、炎天下、女房や子供達と水遊びしながら、溪谷での緊縛のプレイの想念しきりであつた。峡谷の入口に茶店一軒、通天湖に二軒の水屋の出店あるきりでお弁当は必携だが、この夏中に、是非もう一度ハントした女性と同行して、下界より八度は涼しいという、この閑静なるり峡で、心ゆくまでプレイフットをとってみたいと念願している。

× × ×
突然、田宮恭介氏の訪問を受けた。編集長より連絡したのだろうが、電話もなかっただけに一寸途迷った。夫婦プレイへの誘致であるが、Y氏の方に熱を上げていた時だけに、かねがね、夫妻のものをとりたいたいと思いつつ、日を過していた。彼の持参したプレイのフットの数々には一驚した。逆吊り

辻村隆さまへ
藤岡エネマより
小生五月下旬より所用のため東南アへ出かけ日本をはなれておりました。帰国しまして、懐しの奇ク七月号八月号九月号まとめて一読しました。八月号のサロン楽我記による辻村様のご好意に感謝すると同時に返信の意味にて一筆啓上いたします。

小生大阪在でなく非常に残念であります。奇クの本拠地大阪へは年三回ほど行きますが、ほとんど日帰りの状態です。一度機会がありますれば辻村様にお会いしたく小生のつたない体験などお聞かせしたく思っております。

奇クの今後のことが気になり余計なことですが、二、三お知らせしたいことがあります。

九月号の読者通信でET生氏の希望もありましたが、現実と類似したもののがかなりあり、これとケースは違いますが、神田のある古本屋では顔見知りの者のみ全盛期の奇ク(昭和二十七年から昭和三十年五月号まで)を抜萃して小冊

短 信 往 来

猪吊り、開股逆吊りなど、吊りの連続である。僅か数カ月の間に、よくもここまで夫人を飼育したものだ。彼の熱意に敬意を表した。

私の

牝犬

飼育

日記

黒川好次

「牝犬飼育」などというと、女性の人権じゅうりんだと叱られそうですが、私の体験はまことに他愛のないものでして、決してそんな固苦しいものではないのです。

私は今、心もうきうきしています。あと三日すれば、彼女と逢うことが出来るのです。彼女とあつてプレイが出来る、とそう思っただけで、私の心の中をバラ色の人生がよぎるのです。とにかく、思っているだけで楽しいのです。私は女性を一匹の牝犬として飼

近々、彼の自宅を訪問して、強烈なプレイを実施することを確約したが、かねて山本章氏からの要請もあったので、同行すること

育することが長年の夢だったので、私が彼女——町子と知り合ってから、徐々にではあります。夢の実現への可能性が増してきたのです。私は町子に自分の性癖について正直に話しました。彼女は無邪気でお芝居気のある女性でしたので、「そりゃ面白いわ。私も最高の演技で、あんたを喜ばせてあげるわよ」といつてくれたのです。といて、私も今まで特別に経験があるわけでもありません。で、初めはかく後手に縛りベツドの上に、うつ伏せに寝かせておくくらいでした。

彼女は私の期待にこたえて両脚をばたばたさせ、身もだえして悲鳴を挙げました。そこで私は彼女の演技に呼応して、お尻を掌で軽く叩きました。第一日はそれで終り、一週間目に逢う約束で別れたのですが、ほんとうに、その一週間ほど待ち遠しかった時はなかったです。それから二回目、三回目と回をかさねる毎に、彼女は色々と新しいアイデアで私を啓発し

になるかも知れない。ここにまた新しい夫婦プレイの一组の誕生があり、私の記録の二頁に収録されることになった。

私は気易い気持で彼女に対する愛情も縛り方も次第に強烈となつてゆきました。

そして第四回目の会合が、いよいよあと三日に迫っています。これから私は町子に対する責手を楽ししく考えることにします。今までに一度も経験はありませんが私は浣腸を自分の手で施したいと思っています。後手縛りのまま町子に施す浣腸、私はその時の光景を瞼に思い浮かべて胸がわくわくする思いなのです。次に私が町子に施したいと考えているのは、首輪をつけて鎖で部屋中を引き回すことと、鞭打ち、それに足舐めです。それから、私は外では友達どうしであつても、一旦部屋に入ると主人と牝犬という立場を守らせるため、素裸で四つ這いというポーズで常時首輪をつけて、飼育したいと思っております。町子がこの私の飼育に対して果して、どのような態度を示すか興味を持っています。第四回目以後のことについては、また改めてご報告します。

子にして売っております。小生も「恵美子の浣腸日記特集」「浣腸される女特集」の二冊を持っており、後者は奇クばかりでなく風俗奇譚のものも入っております。この小冊子はゼロックスなる複写機で作ったそうです。

次に今後の希望としてSの占めるページ量が多いのは仕方がありませんがEは一種のSに通じる要素が多分にあると思われ、特に男対女、夫婦もの然り。Sのストリー中に少しEを混入させればS関係の人も問題にしないのではないでしようか。最近の奇クに度々登場の秋根登志雄氏はS的要素が多分にあると思われ、辻村様への返信が意外な方へ展開し申訳ありません。私事に亘ることを一つ。小生不在のため奇クの前記三冊は家内に買い求めさせました。結婚歴は今年で六年。Eもここ二年前より素直に受け入れるようになり、最近では月に二度乃至三度行います。小生はこれを浣腸前戯と称しております。色々辻村様に聞いていただきたいこともあり、枚数に限度がありますので、この辺で失礼させていただきます。奇クの次号に期待して毎日がんばるつもりです。

編集部だより

○結婚前の最後の夏のバカンスを存分に楽しんだ中河恵子嬢からの電話連絡によると、今年はスキューバ・ダイビングを試みたとのこと。小型ボンベを背負い、真赤なウェットスーツに身を固めた恵子嬢の颯爽としたスタイルは、さぞ見事だったろうと思う。

○とにかく、その時の想い出を書いて呉れと頼んでおいたので、いずれ素晴らしい文章が送られてくることだろう。秋には婚約するかもしれないとのこと。彼女を手中にする幸せなS男は、果して誰だろうか。今から氣がもめることだ。

○懸賞応募原稿は日を追って数多く投稿されてくるのは嬉しい。殊に長枚数の力作が最近が多い。これはと思うものは努めて早く発表したいと考えているが、残念ながら、文句なしに入選作として推せる作品の極めて少いことだ。満天下の読者を沸かすに足る一大傑作の投稿を心からお待ちする。

○ここ数カ月に亘って投稿されてきた読者通信の投稿を見ると、どうも三行広告的なものが多くなっ

「氣の毒」賞

予世場良三

私の悪友の一人に、全然アルコールに弱いG君がいる。そしてもう一人、全然アルコールには目がないT君がいる。なぜか氣の合う三人はよく夜のネオンに浮れる。三人ともお色氣のあるお店には弱い。この場合の「弱い」は、そこを素通りすることに弱いということとで、お互いが、誰かの懷をアテにして、いつの間にか、美形により添われてアルサロのボックスに沈み、ニヤニヤする時が多い。最初にネを挙げるのが、きまって私だ。ホンの少しなら飲めるのが禍いしてすぐに酔う。T君は少々ではケロツとし、G君は一滴もやらないでケロツとしている。

私の知る限り、二人は、三、四度ずつは店の美形と、閉店後のデートに成功している筈。私も二度ばかり、彼等の努力で据え膳された覚えがある。

三人とも趣味が違う。一度だけデートの翌々日に、その店で六人が揃って再会？したことがある。

G君の発案でカップル交換。デートの首尾をバラシ合おうとは、仲々悪趣味な妙案。ホステス達は嫌がったが、G君の「一番氣の毒だったと思う人に謝罪の意味で」と一萬円の賞金を呈示されると様子が変わった。

「私、酔いを醒せって、バスで水をぶっかけられたワ、何杯も」

G君のパートナーが私に云う。

「この人、ナメルんだもの、ぞつとしたワ。それが朝までよ。ウイスキーと交替にチビチビやられたんよ。あんたどう思う？」

これまた氣の毒。T君はスッパヌカレて頭をかくと、大急ぎでトイレに立った。

「ワタシ、ブジョクされた」

私のパートナーが云いだす。例により酔いに負けた私は、ボンヤリした記憶しかないが、ブジョクされたとは心外だった。

「サービスしたげようとすると、ウルサイって怒鳴って、両手を後ろでククルンヨ。足もよ」

「ククル？ それで？」

両君が、身をのり出す。

「ワタシをククッてオッポリ出したら、ご本人はグウグウ高いびき。こんなんである？」

「賞金はキミだ」

G君が断定して、私に金を出せという。ツマラン話だ。私は一寝入してから楽しむつもりだった。

それが不覚にも眼醒めたときには早や彼女の姿がなかっただけ。

「美女と泊っていながら、手出しも出来んようにククッておいて、自分はグウグウとは。なんというブジョクノ、ホントに氣の毒」

五人の眼が、一斉に私をネメつける。誰も異論はなさそうだ。

ククルったって、手首と足首をチョイとまとめただけ。私はまずそうして、はぐべきものをはぎとってから、じっくりと縛り直すつもりだったのが、酔いがじゃまして出来なかっただけのこと。

私は無実を有罪と宣告された被告よろしく、クシュンとなつて、空になった紙入れを握りしめた。それにしても、酔醒しに水をかけられたり、チビチビとナメ（どこをかは知らない）られるような氣の毒な目に遭ったホステス達までが、カブトを脱いだといわんばかりに、口を揃えて「ククラレタなんてお氣の毒」と来たのは、意外にして心外。私にはどうしても解せない。……そんなもんですかね。

てきた傾向がある。大部分没にしているのだが、それでも掲載された読者通信の中に、そういったものが比較的多いという評がある。大多数の読者が読んで楽しめる通信がほしいものである。

○秋山夫妻のサディズムショーが本誌上で華々しく紹介され、凄惨な響きを見せているが、嘗て辻村隆氏の第一回カメラハントで登場した青木順子が大坂府下を巡業しているという読者からの便りを過日貰った。秋山ショーは鞭打ちと蠟責めが主体だったが、青木ショーは水責めと蠟責めが中心のようだ。

○秋山ショーも青木ショーも、いずれも股間縛りを売物にしている点に変わりはないが、その縛り方には、いささか違いがあるようだ。

○本誌九月号のカメラルポ「この女と」で山本章氏によって紹介された左近麻里子さんは、その愁いを帯びた美貌と均斉のとれた肢体、強烈な緊縛によって至って好評である。その後、彼女の希望によって編集部にて数回撮影した。

○左近嬢のバックスタイルの良さや肌に喰い込む縄目など、折角の力作を誌上に紹介できないのが残念であるが、カメラルポの麗筆に依って御想像頂くより仕方ない。



最近の縛り映画

<大奥(秘)物語>

東山映史

東映、大映作品にも緊縛のサジスティック・シーンや、同性愛のレスポス・シーンが現われてきたことは非常に喜ばしい。

東映作品の『大奥秘物語』で、ピカ一女優の佐久間良子の猿ぐつわの後手縛りが見られたのは歓喜の極みだった。染物職人の恋人をもちながら、大奥に入った飛鳥井(岩崎加根子)の部屋子おちやが將軍の目にとまり中老になる。だが彼女は恋人のことが忘れられな

い。飛鳥井のはからいで代参に行き、恋人に会い離れまいとするが恋人は斬られ彼女は逆上する。そして一室に閉じ込められる。將軍のねやにいけば全ては許されるという。飛鳥井が行くと、彼女は紫色の紐で猿ぐつわをはめられ後手に縛りあげられている。舌を噛んで死のうとしたので猿ぐつわをはめられた。背面からぎゅちり縛りあげられている両手も映される。そして、ねやに上り將軍に斬りつけ、大火になる。岸田今日子のお年寄浦尾と小川知子の篠の井のレスポスシーンも、妖しいムードをかもし出している。

大映作品、『眠狂四郎・魔肌の肌』では、美女の吊し責め。緋の長襦袢一枚にむかれ、荒縄で縛りあげられて、いかさまばくちのか

けにされた女郎。そして最後は久保菜穂子まで、裏切り者のコクインの十字を胸にきざまれ、吊るされて殺される。しかし、ポスターの逆さ吊し責めや、裸の十字架のハリツケなど画面になかったのは少しどうかと思う。

エロダクションでは、おなじみ『花と蛇』の団鬼六先生の「柔肌しぐれ」が『花と蛇』のシリーズ「京子の巻」というところか。林美樹の女やくざが、バクチ場に乗り込み、イカサマをあばくが、遂に手取り足取りされて納屋に運び込まれ、パンティ一枚にはがれ、豊満な乳房の上下をぎゅうぎゅうと四重、五重に緊縛され、柱に立縛りにされる。

柱を抱いた後手の指の動きなどもありアルである。そして迫るやぐざを蹴り上げて、抵抗したため、足までぎゅちり縛り上げられる。そしてパンティをずり下ろされようとするところへ助けが現われるのは定石通り。

また、やくざの女房が親分にかどかわされ、床の間に縛られるシーンも頂けた。

荒縄でくびれた乳房を、子分がいたぶるところなど、なかなか芸がこまかい。

S M きれぎれ帖

黒井珍平

奇クはすみからすみまで読む。特に読者通信。さりながら今の若い方々のあっぱれな直接行動の呼びかけ、私にはびっくりもし、又ピンと来ない。人間と人間のむすびつき、そんな気軽に成功するのかしら。もはや私が古いのか。たとえば愛なんて、どうなっちゃってるの。

すみからすみまでといっても、どうしても、いや何とか読もうとしても読めないのが、西条さんの「心傷む遍歴」海野さんの「娘相撲」自分にも判らないが、かくれたファンが多いという編集子のお言葉をよむと、私はサディズムが判らない人間なのかしら。何だか心傷んでしまって、どうしても読めない。決して悪口ではない。こんなに長くつづいていて二大作品に対して申し訳ないと思う。

○ ミシュレの「魔女」(桃源社)
(上) 沢沢氏の「黒魔術の手帖」(桃源社)、風俗の歴史(3)フ

ックスの魔女の項、世界教養全集20(平凡社)魔法—その歴史と正体(K・セリゲマン)。

たてつづけによんで、魔女裁判の恐ろしさに、あらためてびっくり。引用は止めましょう。

ミュプレンガーの「魔女の槌」なんてのが日の目をみたら奇クの読者でさえ肝をつぶすでしょう。

中世の文化人始め、デューラーや画家、文学者まで、教会の坊さんが先頭になって、今というベストセラーを重ねたとのこと。もちろん私はよんだわけではないが、上記四冊から推測してのこと。

ギリシヤからローマも必要になって、ギボンのローマ帝国衰亡史(岩波文庫全10巻)をよみだしたら、面白くて又々やみつきになりそう。哲学皇帝マルクス・アウレリウスのような聖人型皇帝の息子がコンモルス帝になって、美女三千、美少年三千を後宮に容れ、ギボンをして(古代の歴史家は明細に冗述しているがと断って)と

てもその残虐さを詠すをはばかる(残念です)とある。何か、この対称的な親子の因果は面白い。同書十巻、最終の、平家滅亡にも比すべき、東ローマ帝国のコンスタンヌス・チヌス十一世の最後。東ローマ帝国の滅亡。オスマン・トルコのムハメッド二世の勝利。手に汗にぎる。

ふと思ひ出して、昭和四十年七月、八月の奇クを出して、黒淵氏の「SM」より見た世界史シリーズ「殉教の娘バジリカ」をよむ。同じ場面で、あらためて氏のすばらしさにたまげる。ギボンでは、バジリカ、スーピア、カタリナの話以外は全くぴたり。何とか氏にSMシリーズをつづけられたいと思う。(出典も教えていただけるとありがたいのですが)

武智氏の黒い雪、裁判についての「さばかれるエロス」なる本をよみ、検事さんが、夫婦生活も又ワイセツなりとおっしゃったとかワイセツであるが、法として見のがしてやっているんだという考え方。あきれれるより、その一見識は見上げたもの。いかなる好色本もピンク映画も、本物の夫婦生活にくらべたら、それ以上のワイセツはありますまい。そういう目から

みれば、トルストイにならって、全人類滅亡より他に手はない。もっとも近頃は、ギリシヤ、ローマにこりかたまって、夫婦生活の方も、とんとごぶさたであるから、検事さんからほめていただくかしら。SMも消えたらSEXも消えてしまった。

歴史をよめばよむほど、現代がエロティックな時代だなんてのが、おかしく思う。気のぬけたビールのような、さっぱり色気がない。奇クは、せめてものオアシスか。以上、二、三日前のんびりかいていたら、又々大津波。プルターク英雄伝に夢中になっていたのに我が妻が夕刊を切り抜け(スクラップ)という。すでに毒を含んだ語調。「老女がしばられて殺された」とのこと。「お気の毒に。犯人め、けしからん」と思うだけ。なお、妻がからんでくる。「好きなんですよ、こういうの。早く切り抜きなさいよ」殺人はおろか、血や傷をした記事も、又、後手ではなく前しりでも嫌悪しか感じないのに。「いやだよ。君は心理的サジストだよ」といってしまう。私が何をしたのか。妻に横面をはられたことはあっても、手をあげたことのない私。又、むしかえし

針の刺激とロープの刺激

愛知葉子



『彼女が“天女”の刺青を彫るまで』

女性自身八月二十八日号のシリーズ人間、の記事の女主人公が、刺青をほる時の気持を、告白しています。

『刺青の痛み。あの、糸ノコギ

リで、肌を切られるようなたまらない苦痛の中で、私はあッ、あッ

……とうめきながら——（中略）

そうして、痛みを必死にこらえているうち、もう神経がマヒしてくるんでしょうか、だんだんしびれてきて、なんともいい気持……

てからんでくる。「殺しなさいよどうぞ」何のことだ一体。何んで殺さなくてはならないのだ。死んでしまえということか。「奇ク」を、こっそりよむのは死刑に値するのか。ただよむだけで、いつまでこれでは煉獄どころか地獄だ。結婚するんじゃないか。以下バリゾーゴン。気でも狂ったのか。興味もない老女の殺害記事をどうしても好きだろうから切り抜けという妻は、お茶漬が好きだろうからと、私の嫌いなゴキブリ（あ

ぶらむし）を御飯の上にのっけてお茶をかけて、のど元につきつけられたようなもの。

まだまだ生きたい。ギリシヤ、ローマ、人間、すばらしい美、そして奇ク。生きていたい。砂ばくのらくだのように、オアシス（奇ク）を待ちこがれる。

私が何カ月も手紙を出さなくなったから自殺したと思って下さい。生きていく限りは何か書きます。死んでしまったら誰一人知らしてくれないのだから。

痛さと、苦しみのいりまじった、ふるえるような快感で、たまらなくなってきたものです。……』

と、自虐のエクスタシーにおぼ

れたと話しています。さらに、『私、初恋の学生さんがどうしても忘れられなくて、夫に抱かれながら、あの天井裏に学生を殺しておしこめておこうか。そこから真赤な血がポタッ、ポタッと滴ったらどうだろう』

そんな夢にうなされた晩もあつたという。又、

『痛い、だけど彫りつけた胸をそっとひとりで抱きしめてぞくぞくするほどうれしかった』『刺青の

刺激は、麻薬とおなじ。いちど味わったら忘れられず、病みつきになる』

と刺青の味を話しています。

『快樂の女性』の刺青とは違う表現をし、これはMの真ずいを語っているように思う。私が夫に縛られ手足がしびれて来て、それが苦痛からいつか快感に変わるあの時の味と似ているのではないかと、思いながら読みました。古い週刊誌は求めにくいことでしょうが、刺青をほった女性の気持を知るために一読されては……。

（カットは、そのタイトル頁）

映画通信

私の観た緊縛映画

細川 英治

私も、今までいろいろと縛りの場面の出てくる映画を観てきたが、その中でちょっと変わったやり方と思った映画を二、三、紹介しようと思う。

これはフランス映画だったと思うが（地獄のランデブ）という中に、敵方の女スパイをつかまえて泥を吐かせるために水着姿にしておいて、一人が女の手を後手に縛

りあげ押さえつけておいて、その頬を力一杯なぐりつける。そうして、水槽の中に投げ込み、這い上る女を何度も蹴落しては水をのませる。女は泳げないらしく、苦悶の表情も凄じく、あっぱあっぱする。いわゆる水責めである。どうしても白状しないと、バンドで身体をゆわえつけられ、徐々に水槽の中につけられる。しかも

口や鼻は水にひたさず、首だけ出させておいて電気を流すのである。ビリビリ、ブルブル。ほんとうに身の毛のよだつ思いである。

女の絶叫の凄じさや、髪の毛の逆立ちが、ほんとうにやっているのではないかと、錯覚を起させるぐらいであった。

同じフランス映画の（モデル連続殺人事件）では、女に麻酔薬をかがせて自由を失わせ浴槽につける。そして入れたり出したりを繰り返す。それを何度もやるものだから女は気がつき、もがく。すると、よく切れるカミソリで女の

頸動脈をグサリとやる。たちまち浴槽に血潮が広がり、女は苦痛と恐怖の表情も凄じく、もがきながら死んで行く。

もだえる女の首根っ子を押さえつけて、何度も何度も浴槽につける。モデル女の苦痛の表情と、悲しそうな泣き声を聞きながらうす笑いを浮かべる主人公は、S性の強い男なのだろうと思われた。

また（殺しのビジネス）。これはイギリス映画であるが、女を冬眠させるのをビジネスとする男が現われる。そして自分の気に入った女となれば、引っ捕えてプラスチックの中にしまいこみ、冷凍ならぬ冬眠させるのである。しかも女は真裸。生かすも殺すも主人公の思い通りという筋書きである。

日本シネマの（くされ縁）では実父に犯された妻に、罰としてパンティのみの素裸にして、鴨居から紐を垂らして前手縛りにして吊り上げ、妻の後に廻ってパンティの中にコップに入っている水を流し込んだり、鞭で打ったりする。

日本映画では、（異常者。冒瀆の民。半処女。いつわりの処女。女学生のふるえ。泣きどころ。鉛の墓標）などが、縛りやむちうち場面が多い。

ジンタ、そして

骨なしオンナ……

「アクロ雑感」 讃

夜乃 探郎

九月号に、ぼくはサーカス文庫資料出でよ！と本誌への感想に託して呼びかけた。最近、ぼくは伊藤晴雨著の『責の話』の文中、見世物の章（化け物屋敷実見記と

も評されるもの）に、より刺激された。いままで朝倉無声の「見世物研究」や藤沢衛彦の「変態見世物史」などなど。まさしく定評あるだけにこれらの研究は立派だ。しかし、なぜか物足りなかった。伊藤晴雨の書を見て、それが判った。机上の著述だけでは文章が生まれていないのである。自分の耳でたしかめ、足でもって実験したところに資料として迫力があるのだ。見世物ルポともいふべき物こそ、ぼくの最も願うものである。

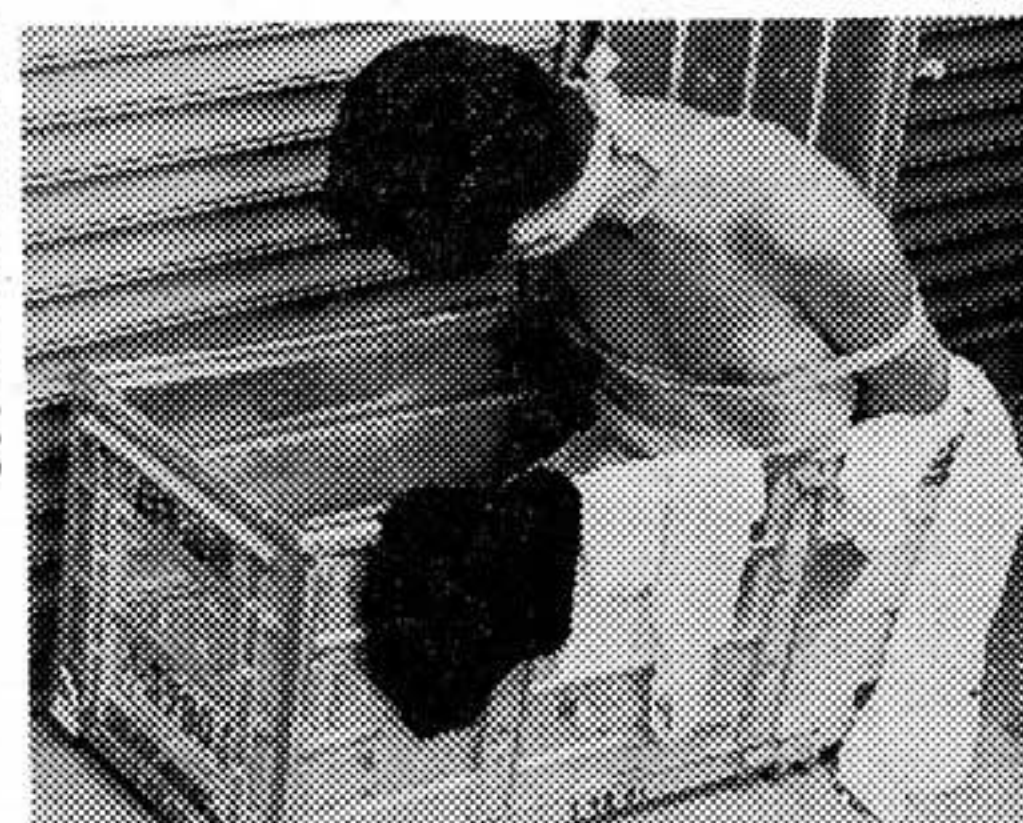
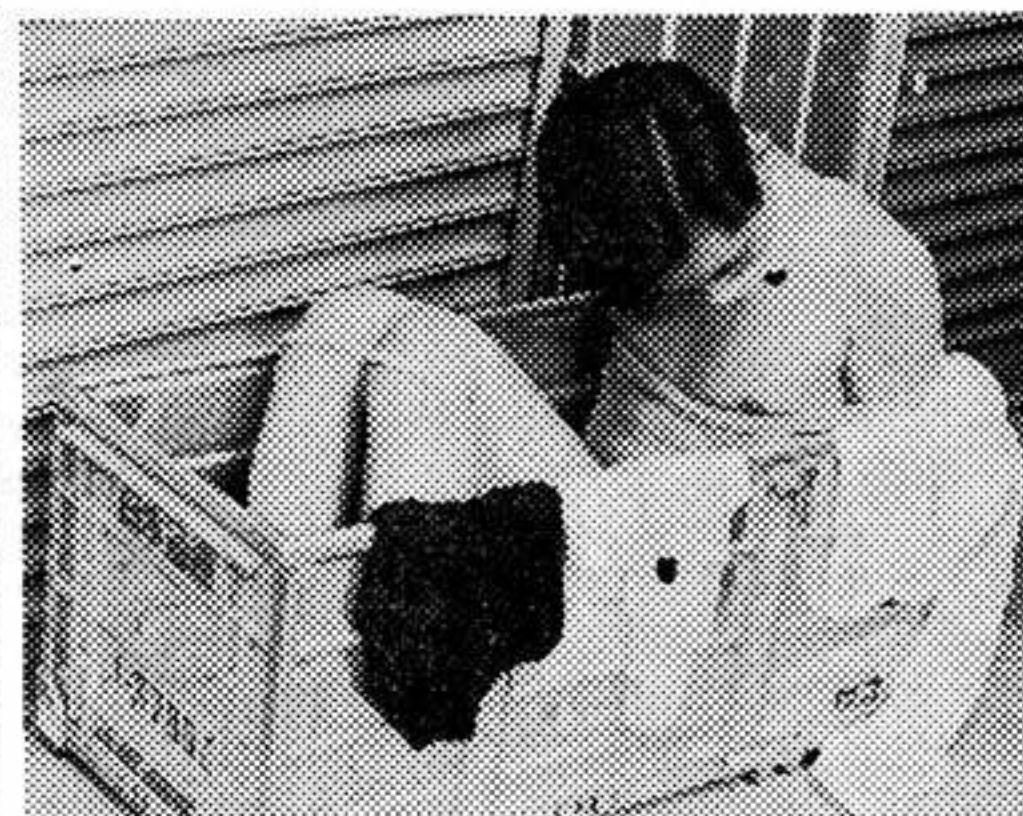
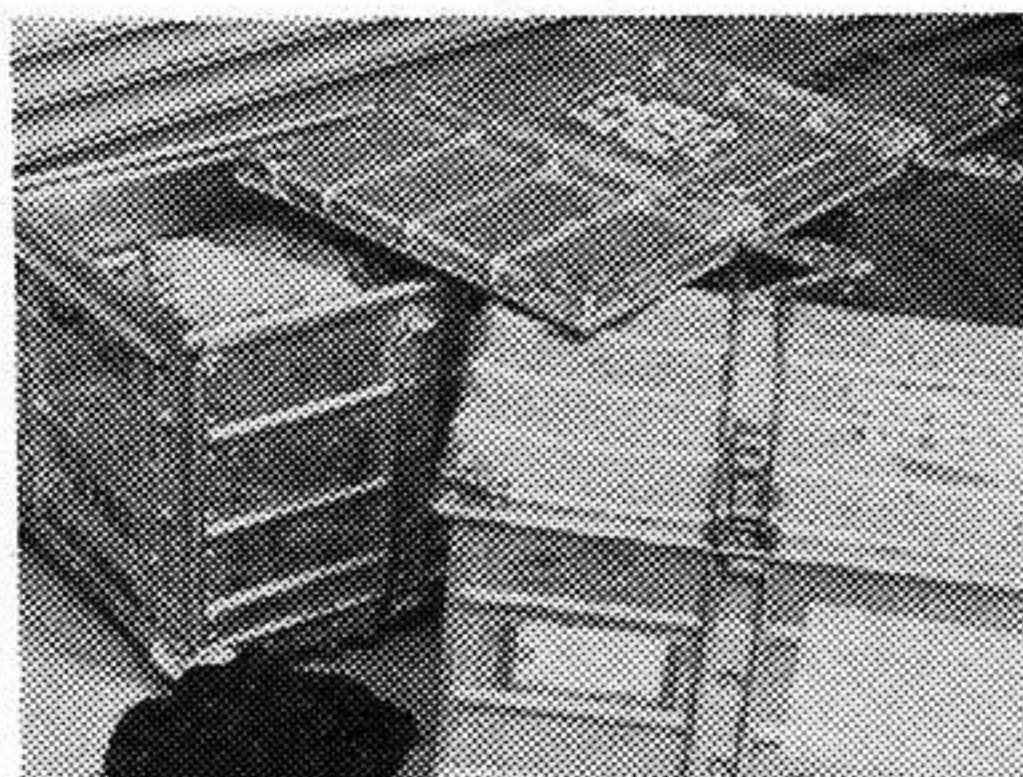
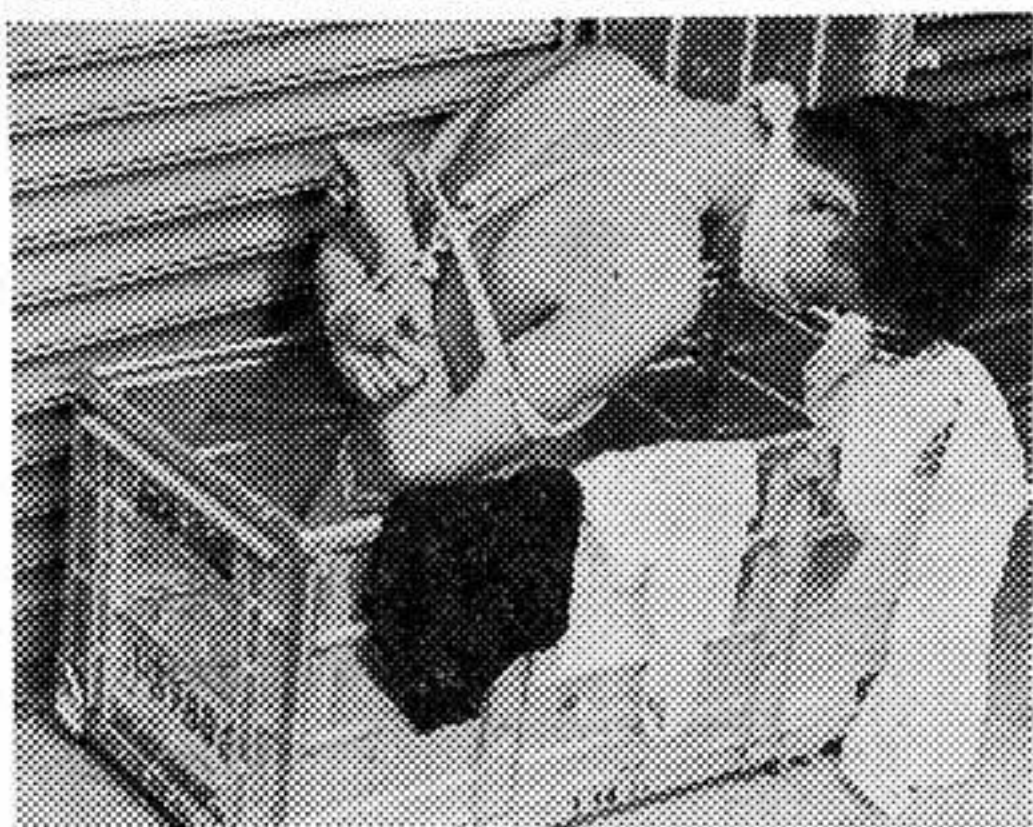
十月号に谷三太郎兄が『アクロ雑感』を寄せられた。作者が実際

に見たところの回想から、アクロバット考が構成されている。だから、ぼくをして充分に楽しませてくれた。兄の「アクロ千夜一夜」シリーズを大いに期待できる故である。そして、これを口火としてまだ本誌としては開拓の余地十分である生きた見世物研究が開花されるよう祈る。そしてまた、この分野は「夢と楽しさ」という編集部（サロン・僕のイメージ）の考え、十月号より）とも一致しており、そこに異常な美も詩も流れる谷三太郎兄の自筆画、これまた近頃まれな絶品である。

M フォト ————— 組 写 真

日通コンテナで
送られて来た男

美 枷 輪 生





「へなぶり」の想い出

残酷

柴 利 好

『へなぶり』は今日でこそ耳慣れない言葉になったが、一般社会現象を川柳風に、それを三十一文字に表現する短歌形式の一つで、戦前まで広く大衆に親しまれていた。その起源と現状については詳かにしないけれども当時は長谷川蝶松氏に主宰された機関誌も刊行され独自のファンを確保していたものだ。その機関誌に『残酷』と題する特集が試みられたことがあって、その時の特選と入選作品の二、三を未だに忘れられない。

『残酷』という事柄が何のような意図で特集されたものか知る処ではないが、少くともいわれるS・M的嗜好に迎合してのとではないように思われる。これを一つの社会現象の一例として採り上げたに過ぎないものか、あるいは人間の本質の奥底を見抜いての出題であったのかも知れない。さて、作品を紹介しよう。先ず入選作品の一つから……

親方の鞭に泣いてるサーカスの娘に寒々みぞれ降る宵

当時の「曲馬団」の持つ一般的概念は、S・M愛好者ならずとも悲惨、残酷の典型であった。殊にうら若い娘達が苛酷な訓練や仕置きのために昼夜を分たず鞭打たれているという観念を、われわれは

未だに拭い去ることができない実情である。舞台上の失敗、懈怠、反抗その他団員に加えられる懲罰の理由は好色惨忍な団長の胸三寸の内にあった。テント裏の片隅で剥き玉子のように肌着まで剥ぎ取られた娘の臀部に炸裂する皮鞭の響が、みぞれ降りしきる寒夜の静寂を破って、許しを請う娘の弱々しい哀訴の声と交錯する。

残酷な想い出に浮く鞭の跡うづく夜もありサーカスのクイン
今は一座のクインの座についている女ではあるが、彼女にも、悲しいサーカス暮しの想い出があるのだ。思えばよくもこれまで耐えてこられたものだ。彼女の肌につに今もなお残る鞭の痕を見るにつけて過ぎ去った日々の残酷な想い出が甦ってくる。早朝から深夜まで牛馬のようにコキ使われる過重な肉体労働に加えて、サジスチックな団長の鞭が、情容赦なく打ち下されていた当時の苦しい生活。殊に女団員に対しては殊さらに厳しい折檻が行われていた。『責められ、お仕置を受けた回数など到底数え切れませんでした。わたし達は鞭打たれなかった日の方が少なかつたように思います。それも只、打たれるばかりではありませ

んのよ。高梁からの宙吊り。柱縛り。箱詰。断食。その他わたし達の生活の場には吊り環。滑車。ロープ。丸太。鞭など折檻に使われる全てといってよいほどの道具が揃っていますもの。長期刑では二日も三日も縛られ責め折檻されましたわ。今でもこうして肌に残って消えない傷痕をご覧下さいまし。最愛の妹の逃亡を扶けて失敗した揚句の果て受けた時のお仕置の名残りなのです。その時、団長さんは昔の刑罰の本さえ持ち出して来て、それを参考にしながらわたしを責め立てました。思い出しただけでも、ゾツとする酷いお仕置でしたのよ』

特選

身をかけて国際魔都に拒む娘の白蟻の肌皮鞭が飛び

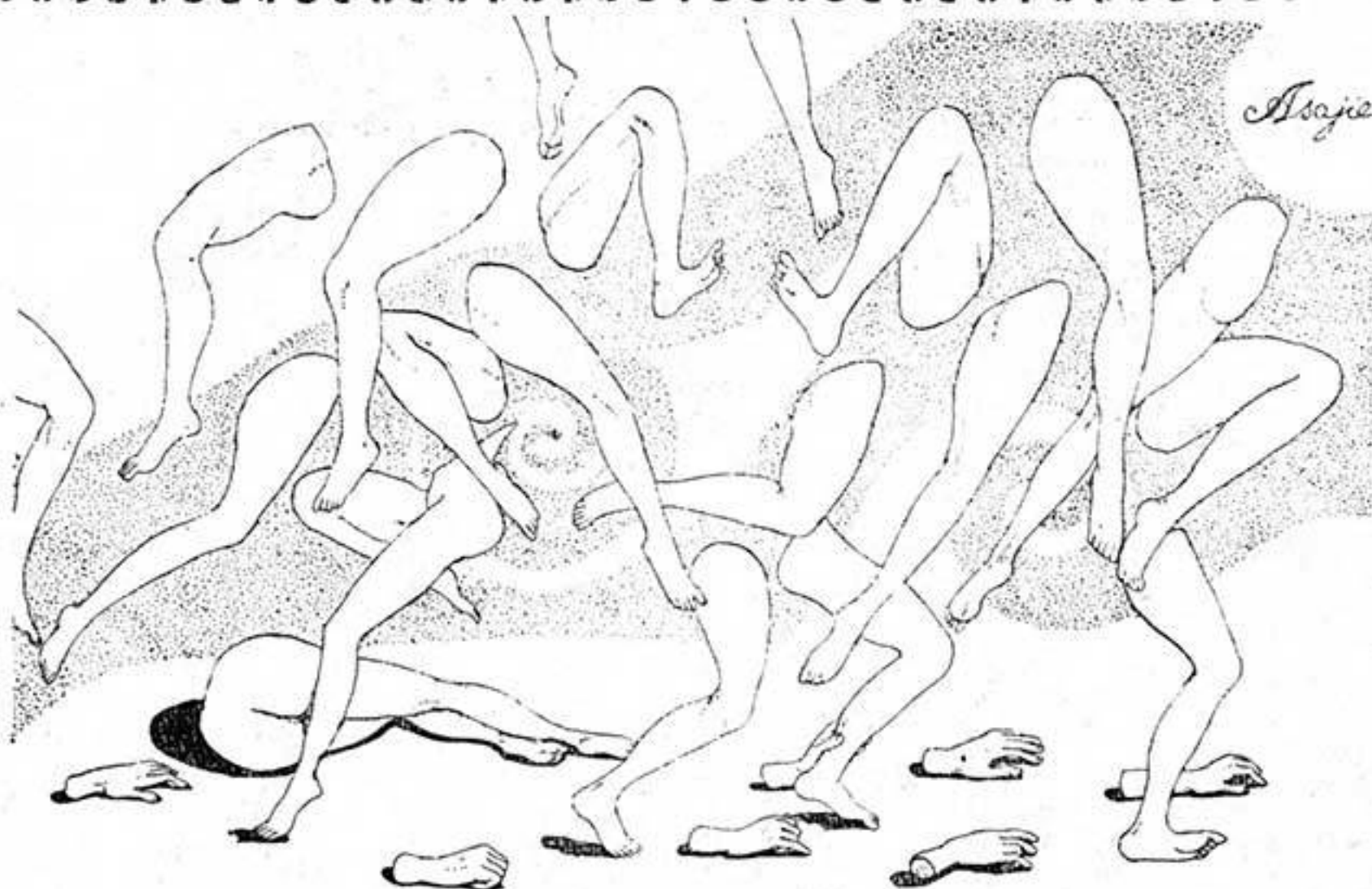
当時いわれた国際魔都とは多分上海辺りであろう。白蟻の肌とあるのはいわゆる白人の女を意味する。即ちホワイト・スレーブとして売られた娘が、買主の要求を拒み続けている。その場所は魔窟の地下密室でもあろうか。娘は素裸に剥がれている。両股を固く閉ざし、両腕で乳房を抱き締め、身を屈めながら部屋隅に逃げ、うずくまる。その水々しい処女の肉

僕のイメージ画集

室井亜砂路

大襲来

こわいぞー。エ、チートモ？
襲われてみたい？ 呆れたッ！



狐族追放

化かしに行つてマゾに仕込ま
れるとは！ 人間に堕ちろ！



体に降りかかる鞭音は何時まで続くことか。やがては手枷、足枷の出番となり、彼女の果敢な抵抗も終ることであろう。女性であるが故に受けなければならぬ悲惨な境遇の典型をここに見ることができ。

以上の三つの作品は文学的に特に秀れているとはいわれないかも知れないし、描き出された光景が余りに月並みで独創性が乏しいとの批判もあろう。しかしながら私はこれらが『へなぶり』誌上に掲載された事実。即ちS・Mを対象とした特殊な専門誌ではない一機関誌に、しかも時代的にもS・Mの風潮が一般化しない時点において採り上げられたということに意義と価値とを見出すことができると思う。

これらの作品に触れて感動した私は、当時幾つかの作品を創った。その一、二……。

素裸かの四つ手吊るしに鳴る鞭は鬼畜にまさる継子折檻
物置の柱に今日も縛られて泣き寝入りする継子折檻
魔窟。サーカス。継子いじめ。
世に在る残酷の三幅対が出来上った処で本稿を終ることしよう。

〔カット・野江三郎画〕

耳に穴をあける時代

川崎進一

「耳に穴をあける時代」——何とショッキングな題名ではないか。これが今をときめく女性週刊誌のトップをゆく、某誌の最新化粧情報と銘打ったものだから、楽しくなる。

以下、そのレポート（写真が入らないのが残念だが）その説明だけでもマニアにとっては嬉しい文章だ。

「耳に刺すイヤリング」これがサブ・タイトル。

「耳に穴をあける——日本では、まだチラホラですが、外国女性の間ではすごい流行！」

とは、センシショナルです。

「真夏、個性的にみせる大胆な化粧法を！」

さて、次にグラビアでその方法を開陳する。

1、穴をあける位置に印を——両耳の同じ位置に穴をあけることが大切。（あたりまえ。左右、違ったら変なもの）マーキユロで印をつければ、消毒にもなる。（はふざけている）

2、氷で冷やす——感覚がなくなるまで氷で冷やします。およそ十五分で、穴をあけても痛くない状態になります。（かなり大きな氷でないと駄目でしょうね。それにしても大した努力がいります。

先に手先の感覚がなくならないかと心配です。ドライアイスの方が手っとり早いと思いますが、やけどするかしら）

3、耳をよく消毒——冷やしたら、耳たぶをアルコールでよく消毒する。（マーキユロの印位では危険でしょうね。これから外科手術ですもの）

4、針の準備を——耳を刺す木綿針や、穴をあけたあと、すぐはめるイヤリングもアルコールで消毒。（木綿針でねえ。お手軽なことです。大丈夫かしら）

5、針で穴をあける——耳たぶの後ろをコルクでささえて、針を通す。つきぬけてもすぐ針がぬけます。（コルクは消毒するとは書いてなかったが）

6、できあがり——穴をあけた

後十日間、ごく小さなイヤリングをつけたまま、穴がふさがらないようにする。（木綿針でさした位で、小さなイヤリングでも通るのかしら）

ま、これででき上ったのだから大変結構です。それにしても、耳たぶの穴あけとは楽しい。ついでに鼻壁の穴あけまでやってくれた

秋

梶 天平

すっかり黄色くなった葉たちの体温にうずもれて

丸くなった芋虫を想ってみる

はらはらと音かすかに積もる
落葉の重量を想ってみる

そのくびれのひだにもぐりかかる
僕の指は

かすかにあの青みどろに染っている

それでまた
芋虫をころっと、ころがしてみる

のだ
裏返った腹のあたり

ら、もっと楽しいのだが。

それにしても「父母よりうけし身体、我敢えてこれを毀損せず」と教えられた私達にとっては、堂々と耳たぶを毀損する時代に、何か、とまどいをすら感ずる。

とはいいい条、これがイヤリングでなしに鎖だったら、などと勝手な空想するのは、行きすぎなのだろうか。

泪がたまったのか
なめてみれば
ぴりっと塩っからい

○

もうお金がないのね

女がいう

そして出かける支度をする

さらさらっと着物の音がして

あら困るわ、このところ赤くな
って

腕時計がなくなったので、そう
なのだ

秋なのだから仕方がないさ

男がいう

なぜ秋なの？

また女がいう……

サロン展望台

一女性からの或る便り

目出鯛三

この間のこと、差し出し人不明の親書を手にした鯛三、気もそぞろに早速、開封、思わずアッと息を呑む文面に驚嘆の声を禁じ得ず一気に読破。何だか狐狸に化かされたのではないかと、再度確認したが、まぎれもない文章の内容。狼ばいをかくし切れぬまま、想いはすでに桃源の境地をさまよい歩く一匹の畜獣……。それにしても鯛三、近来にない喜びを覚えた次第である。

かくいう手紙とは、ある露出願望性向の女性が鯛三のF性を知り文通、若くはプレーを決意し、信頼と秘密厳守、出来るなら一度会いたいとの積極的な要望が連綿と書き込まれ、あなたの性向である下着等、もしやさしい方でしたら私のもの差し上げ、お役にたてば何より、と加筆してあり、これを読んだ時の鯛三は、余りのうれしさに、万才を叫んでしまった。し

かし一体、どこで、どのようにして鯛三の住所氏名を手にしたのかいささか謎めいていて、信頼に足り得るものかの疑いも手伝って、ともかく返信文をしたためたものである。

待ち受けていたように、折り返し返事が到着。当惑も当然のこと、あるお方様から偶然見せて頂いた奇ク誌の読者通信欄が取りもつ奇縁の由、云々とあり、鯛三もようやくにして合点。それにしても大した決断力の持主と、彼女に對して大いなる感激を覚えた鯛三である。

奇クの同志であれば、それだけで旧友、親友も同然。後は開襟の文通を三度、交信。そしてつい先日、彼女の豊満なヒップにまつわりついたブルーの下着が嚴重な包装で届けられた次第である。フリルのついた華かなナイロン製の物件を指先に感じた時、鯛三



梨花悠紀子

は感謝感激もさることながら、そこに歴然として残されている、かすかな変色と、山百合にも似た薫香の、あの名状しがたい悩ましさに、五官のふるえを抑えようもないほどの激昂を覚え、怪しからぬ行為に没我した鯛三である。

このまま、二人だけの極秘とするには何か惜しい気もし、相手の方の理解ある了解を求めた結果、ここに愛読者諸兄に一服の茶のみ話としてご紹介させて頂いた点、不悪ご諒承を乞う次第。

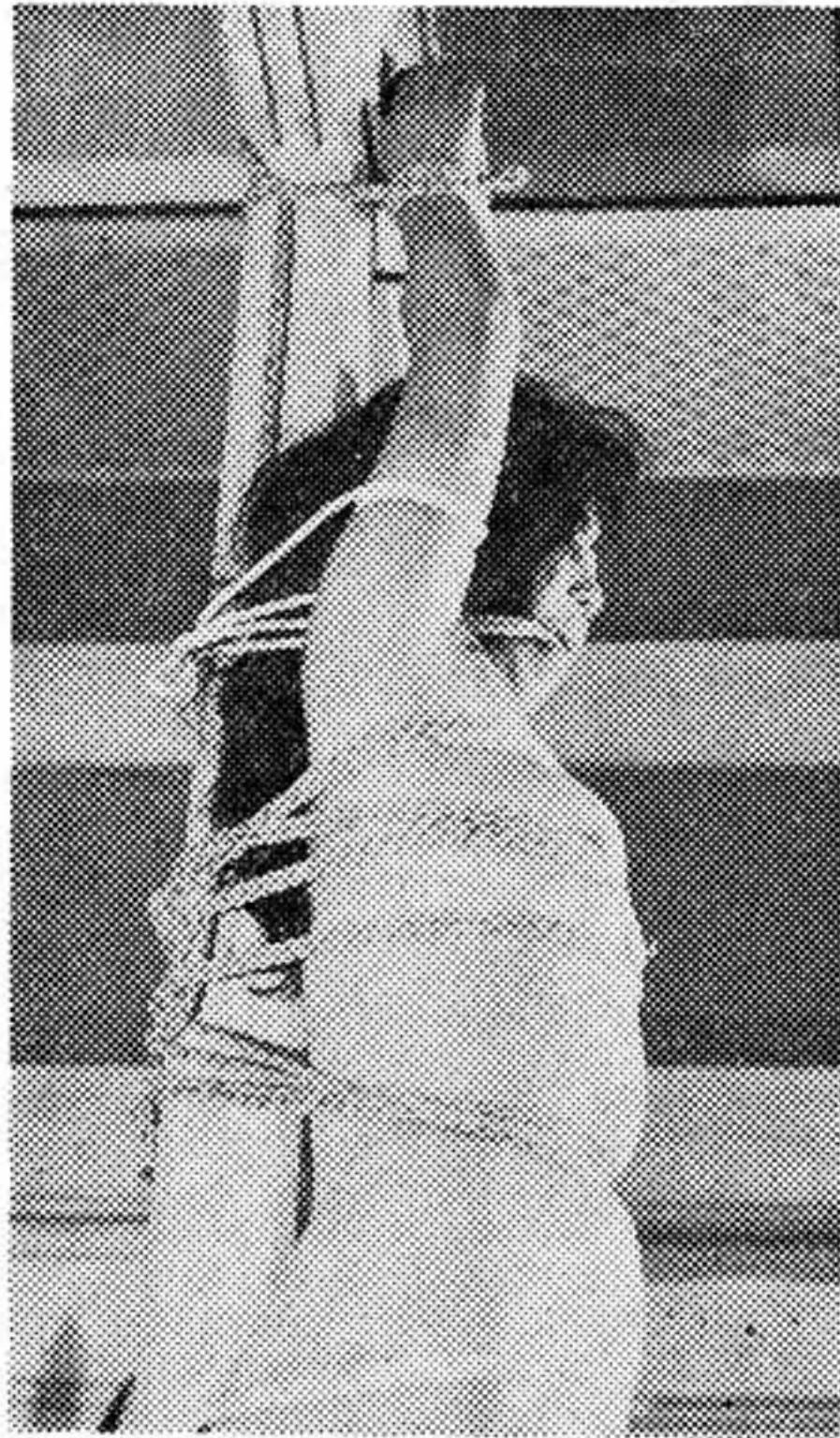
ついでながら、彼女、この秋、めでたくご結婚の由。プレーこそ実現し得なかったが、好意ある贈物を頂くことが出来、鯛三、大まじめでお祝いの品を物色中。幸せな生活を送られんことを念願し、交信を断念しました。

なお、十月号の天道光男様、ありがとうございます。今後とも宜しくお願い致します。その他、鯛三と同系のFマニアの諸兄、いろいろお呼びかけ下さい。

軟体動物のおんな……………

△マゾヒスト奇譚▽

群魔児



私は最初、気づかなかったのです。しかし今となって、ありとあらゆる異性の体を知りつくした今になって、はじめて、彼女がどんなに変わった女であるかということが、わかったのです。こんなことを申し上げても、世の中に何の役に立つ話でもありませんが、本誌の読者でしたら、きっと私の話に共感を持って下さるだろうと思つて拙いペンをとったわけです。

昭和三十三年から三十六年にか

けての株式ブームで金回りもよく派手に遊んでいた頃の事です。

毎年神戸新聞社主催で神戸港で海の女王や各国の美女を集めてモデル撮影会が催されたものです。当時私は写真同好会のピンボケクラブの会員をしていたので、この撮影会にはよく参加しました。昭和三十六年七月に行われた撮影会で私はモデルの白川照美を知ったのです。それから一月経った八月の中頃、私は照美と一緒に須磨の

海岸へ遊びに行きました。

泳ぎ疲れて砂浜で休憩していたとき、突然、照美が「私、柔軟体操するわ」といって体を前後左右に曲げだしました。しなやかな彼女の体の曲線にはゾクゾクとするような不思議な色気が漂っていました。脚を真一文字に開き、上半身を前後左右に曲げる。恐ろしいほどよく曲がる女体、そのまま脚をせばめて立ち上ります。

立ち上って体を後に曲げて、足首を握り、そして両脚を開いてニッコリと笑います。そしてそのまま上半身を一回転させます。彼女の屈曲肢体の妖しい魅力に、私は只々驚嘆しました。私は彼女を誘って海浜ホテル福寿荘へ行きました。五十三号室、それは三階の一番はしの洋室でした。

彼女は自分の年齢は最後まで言いませんでしたが、十九か二十でしょう。海岸で見た水着姿の彼女は瑞々しく生長していました。特にアクロバットの踊りをやったという話もしないのに、まるで軟体動物のように身体が柔かいのです。部屋で一服、互いに煙草を出して吸いました。照美は暑いのでシユミーズ一枚になりました。私は照美の左手をとり腕を背中

に回して捻じ上げてみました。一五八糎、五三疋の照美はむしろ小柄な方ですが、肉づきは処女特有の艶を放って、むちむちと適度のふくらみを見せています。私は力いっぱい腕を首筋近くまで捻ってゆきました。照美は足をバタバタさせ「ううっ」と呻めき声を出しましたが、掌は自分の耳が掴める位、上へあがるのです。

それからの私は、もう夢中でした。背中へ回した腕をますます上へ持ってゆきます。次は脚です。両足をあぐらに組ませて胴体を二つ折りにしました。顔が両足の間にめり込むようになって、照美は平気なのです。まるで骨無しの子魚のような女体です。私は更に両足首を彼女の首の上まで挙げさせました。さすがに「ウーッ」と呻めいて苦悶の声を低く出しましたが、綺麗な足の指が私の目の前に揃ったのを見ると、たまたまなくなつて、その爪先に噛みついていました。

「私、ハンカチのように二つに折り畳むことだって出来るのよ」照美はそんな事を言っていました。その後、会う機会もなく離れてしまいました。今から思うと惜しい女でした。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 42 年 11 月 号

(1967年・11月号<第21巻第11号・通刊第233号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

ぞうじょうのき

憎

縄

の

記

ある若妻の抗議

寺 宇 治 久 美

暑いさ中、お忙しい編集部のお方さま、このお手紙をご開封下さった上は、少しはお読み下さるかと思いますが、最後まではどうかと案じながら書いております。長々と眼を通していただいた上で、なんだ筋違いじゃないか、とお怒りになるとご多忙中お気の毒ですので、前以ってお断りしておきます。このお手紙は、人生の岐路に立たされた女のく・り・言というより八ツ当りです。お返事など当然戴こうとも思っておりませんので、ご相談でもございません。御社の眼からみれば、とるに足らないような部類のことかも知れないので

すが、私にとっては、重大な運命がついて廻ることですので、どうしても一筆残しておきたいから書いたまでのことです。いわば、イタチの最後なんとかの心情ですので、投函さえすれば、私自身の気持は済みます。だから、肚がおたちなら、すぐに破り捨てて下さいませ。

私はいま、一年にも満たない結婚生活に、涙をこらえてピリオドを打つ決心をし、実行に移そうとしているところなのです。

別れるのです。いえ、逃げて行くのです。

私が結婚したのは、月並ですが、貧しくとも楽しく、愛の満ちた、よい家庭を創り上げたいと願ったからで、夫の玩具や奴隷になり来たものではありません。

もうこれだけでおわかりでしょう。そうです。夫は私をしばって、いたぶることに懸命になり出しているのです。以前はこんなにひどくはなかったのに……。まるで、結婚はそのためだけにしたようで、正気の沙汰ではないのです。

夫とは、見合いでした。でも交際期間は一年余りあって、当時二十一才を迎えたばかり

の私には、二十八才の年令に似合わぬ落着きのあった夫が、すぐく頼り甲斐のあるように思えたし、事に当っての処理方法も、悪くいえば中年男の匂いがする程の読みの深さをみせ、無条件で懐にとび込んで行ける素晴らしい人に想えたのです。

いえ事実、立派なといえるだけの要素を持った人で、私には過ぎた夫といえるのです。

夫をはめるのはオノロケだそうですが、一年間の生活でしたが、益々その感を強くする程なのです。例の一点を除いては……。

昔のことをいっても詮ないことですが、お見合の時。及び、週に一、二度のデートでしたが、一年余りの交際期間中には、夫の趣味は音楽と魚釣、それに観るスポーツだった筈でした。縄を捌く趣味などがあるとはオクビにもみせてくれなかったのに……。

私は、娘時代から日記だけは欠かさずに続けております。今、涙をこらえ乍ら回想の助けに頁を繰っていますが、これを引写的にここに書くだけの勇氣はございません。都合のよいところの抜萃だけは、羞かしついでにしてみようと思っています。

……もっと勉強して早く大人にならなければ。独り取残されるのは堪えられない……。

これは挙式後四月目位の日付の一節です。

私が、夫から最初に観せられた写真に驚いたことを書いた後の感想です。それが、ハダカで無残にしばらく上げられた女の人のものだったのは、おわかりでしょう。

夫のその時に言った言葉は日記を見るまでもなく、私の耳にコビリついています。

「女には、男以上の耐苦性が備っているし、マゾの要素が共通してあるものだ。男は一般にその正反対のことが言い得て、その具体化がこう言う形になる。見た目には残酷と映るだろうがこれが、夫婦の間のことなら、最高の愛の表現となるんだ。見てごらん、この女の幸福げな満ち足りた顔付を……」

私は、正直言って、その時は彼にスッカリ参っていました。だからこそ結婚したのですが、「ベタ惚れ」の形容詞ぴったりの気持でしたので、他の何かにつけてそうであったように、未知のことを指導して貰うという態度で、素直に受取っていました。彼は、女性の持つ耐苦性の実例として、その言葉の後に続けて、お産のことや、手術台上的データー。戦時における女性の果して来た超人的な記録などをつけ加え、女性が、苦しみの中に悦びを見出す特技的なものを共通して持っている

ものだと強調しました。

私は、それらの話を極めて好意的な誠意をもって一生懸命に聞きました。納得のいかない点は、私の精神年令の故に実感が伴わないのだろうと解釈したのです。夫が示したハダカの肌に痛々しくロープを巻かれている「愛の表現」写真も、どう観察しても泣き出しさえ出来ないくらい苦しそうな「幸福げな満ち足りた顔付」に、正解を見出し得なかったクイズのような心残りを感しながらコックリしたものです。そして本当に日記の引用のように大人になろうと真剣に考えたのですから、われ乍らイジラシク、彼の眼にはたまらなく可愛い妻と映ったに違いありません。

私の日記は、一日遅れでつけています。夫が帰宅してからはすべてのことが夫を対象にする関係上時間がなく、翌日、彼の出勤後に前日の分を綴ることにしています。

……今日、どうしても理解出来ず、彼の帰宅を待ち兼ねて尋ねる。「実感サ」と、彼は答え「試すのが一番」といってベッドの上で写真通りにされる。余り強いしほり方でなかったが、やはり痛い。とても幸福とは思えない。変だ。私には女としての欠陥があるのかしら。彼の言う女性共通のものが、私だけに

欠けているのでは……。

翌日の日記の一節です。この日が、今、私が涙をのんで離婚を決意するに至るスタートを切った日になったわけです。こうして読み返してみると、益々私は可愛い女だったと思います、無条件に夫の言を信じられたのですから。

その日の私の「愛の表現」は大いに彼の気にいったらしいのです。私は気にいりませんでした。彼がブルブル慄えながら喰いつきそうにしばらく私を眺め、グルグルとベッドを廻って奇妙なウナリ声のような声で盛んに感謝詞を並べ立て本当の愛の表現「キス」の雨を降らせたのを、ハッキリと覚えています。しばらくされることには、彼の強調する喜びなど髪の毛ほども覚えませんでした。彼の恐ろしい程の「感激」ぶりに異質の充足感を覚えたのは確かでした。夫をこんなに私が惹きつけることが出来たという喜びです。私はその瞬間に、何かわかったような気がしました。けれどそれは彼のいう「しばらくされることに喜びを感じるマゾ性」とは違います。今、冷静に振り返ってみると、それはわが身を犠牲にして愛するものを満足させ、その満足したさまをみて自分が満足する。……一言でい

ってつまり母性愛の働きに他ならないと思うのです。しばらくされることを喜ぶのではありません。彼の話しの中にこの母性愛という言葉が一言はいつていたら、そして彼がもっと早く自分の欲望（私をしばらくしたいという）を打明けてくれたら、この半年ばかりの私の悩みも又、別の解決策を求めてすこしは軽く済んでいたかも知れなかったでしょうに……。

その翌日分からの日記は、必ず「しばらくされて」という文字がいくつか並んでいます。そして「痛かった」「苦しい」「どうしてこんな」という字がだんだん多くなっていますし「彼が嬉しそう」「彼が夢中」「彼がすごく」というような表現が盛んに出てくるのです。その中から読みとれるものは、何度もいうようですが、全くわれ乍らアホラシクなる程、彼の欲心を買うための心情が記されていて、ベタ惚れになった妻のイジラシサが書き連ねてあるのです。

その日記が突然、大いに怒った文章になっているのがあります。日付は拳式から二百数十日目、すなわち八カ月ぐらい経った頃のものです。勿論その時のことはよく覚えています。惚れた主人との初喧嘩のことですもの……。

いきさつは書きません。勿論いろいろあったのです。夫も私も人間ですもの虫のいどこの悪い時もありますし、それに悪条件が重なった訳ですが、とにかくきっかけは「お前はしばらくされているときだけが美しい」という夫の言葉でした。夫としては何気なく言ったのでしようが、これは私の自尊心を大いに傷つけました。「じゃあ、しばらくしていない時には美しくはないってことね」いつもは口答えしない私が、うって返したものですから彼は驚いたようでした。

私だって女です。彼のいう「共通のマゾ性」は、持ち合わせていないのではないかと思います。共通のウヌボレ心は自覚しています。少なくとも十人以上のフェースを誇り、お友達から羨ましがられてひそかに悦に入った、スナナリとして肉付の良い肢体、色白の肌などに私なりの自信があるのです。街を歩いても、自分がとても及ばないと思えるような、女の人に行き合うことは少なく、振り返えられた覚えは、一再ならずあります。が、ひけ目を感じた覚えは、滅多にないのです。だからこそ、美しくないという話になると黙っている訳には参りません。

「しばらくしないと美しくないような女でどうも

済みませんでした”

“なにもそんな意味じゃあ……。今夜はどうにかしているよ、キミは”

そうです、どうにかしていたんです。いえ、どうにかさせられたのです。彼の巧みな話術と誘導に乗って“しばらくの女の悦び”を見出だそうと努力し“共通のマゾ性”を自覚して他の女性一般の水準にまで早く到達しようと言う一心で、毎夜思わず出る身憚りを無理に押えて、みじめにしばらく上げられることに耐えていたのです。彼はどう受けとっていたか知れませんが、ゾツとするような嫌悪を押えて、自分から両手を背に廻す私の気持を察していたとは思えません。それどころか細紐を私の肌にくい込ませながら“こんなしばらく方はどうだ”とか“こういうふうに締めつけた方が嬉しいだろう”などの言葉尻から察すると、私が本当に自分のいう“悦び”を覚えているように誤解しているらしいのでした。とんでもないことです。私が黙ってしばらく彼のなすままに任せておれたのは私のこれだけは大きいに自覚している“愛情”と“母性愛”があったればこそなのです。

自己の欲望を正当化する為の詭弁。……そう気付いたのはその喧嘩の二、三日まえのよ

うでした。どうしてもしばらくされるということに馴染めない私が、遠回しに、やはり、しばらくしながらそれとなく言うと、彼は“もっとよくアレを読むことだな”と、こともなげに言っただけに強く紐を私の肌に喰い込ませたのです。私は、彼が少しも私の真意を理解しない、いえ、しようとしないうちに少しハラ立ちを覚え、その夜は、しばらくたまま思いきり転げまわり、猿ぐつわを噛まされるまで、大声で泣いてやりました。ひょっとすると、近所の人に聞かれたのではないかとも思っています。

その翌日。彼を会社へ送り出した後、悩みが更に深くなり、最初の写真と一緒に出された雑誌、彼のいう“アレ”すなわち御社の出版された雑誌を読み返しているうちに余計、夫の言葉に疑問を感じ始めたのです。これを主人の側からいえばヤブ蛇というのだと思いますが、私にはどうしても理解できない点があり、というより強い反発を感じる点が多々出て来たのです。

文章が下手で話が前後してしまっていますが、要はあれやこれやで疑問だらけになって来て私の頭は混乱しました。

彼の言葉も、こと“しばらく”云々に関して

は、他の事に対しての処理方法のアドバイスを受けるときのような無条件に信用し得る言葉とは受けとれなくなりました。だってそうでしょう。彼は大新聞の政治欄や、株式の予想欄でもウ・ノ・ミにすることは滅多にないのです。若いクセに、老年者のようにじつくりと構えてその裏を読みとろうとするのです。週刊誌の記事など頭から信用しません。信憑性がないというのがログセです。それはそれで私としても肯けるのですが、御誌の記事や縛りを伴う事件報道となると、私の目からでも明らかに興味本位、小説に過ぎないと思えるものでも、眼を輝して私に示し、解説までつけ加えるのです。初めは私も、内心はオカシクても抵抗なく合いづちも打てましたが、一旦疑問を感じ始めると、もう駄目です。自分の都合のよいように私をひきずっている……。うまくあしらわれている……。そう思うつくと、夫婦としての愛情以外の、全然別な怒りに似た感情が湧いて来たのです。

私は容貌に対するほどの自信ではありませんが、見下げられる程の馬鹿でもないと思自負しています。

“ベタ惚れ”は変りありません。愛してもらえ自信も強いのです。でも、いえ、だから

こそこういう場合、大いに怒り、大いにふくめるのが妻の権利であり、義務だと解釈しました。そういう下地があったから喧嘩になったのでしよう。ひょっとすると私から仕掛けた形だったかも知れません。とにかくどうかしていたのには違いないのです。

「四六時中しばられていたい人と結婚されたらよかったのに」

「どうしたというんだ！」

「私には女としての資格がないんです！」

「そんなことはないよ」

「いえ、ありませんッ！」

「どうしてまた急にそんなことを」

「いやなんです。死にたい程、いやなの！」

「いや？ 何が」

「しばられることです。寒気がする」

「でもキミ、まい晩……」

「ワカラズヤッ！」

「ほんとに？」

「マゾ性のないのは女の資格がないんでしょ

う！ 私にはありません！」

「そんな！」

「しばられて悦ばない女は失格者でしょ！」

「ブーム」

「しばられないと美しくない女が、しばられ

るのをいやがったら何が残るノッ！」

「……」

「私はいやよッ。もう絶対にしばられないからッ！」

喧嘩といってもこの程度でした。私のワンスライド的な臭いが強かったようでしたが、突然の変りようと、泣きじゃくりには彼は手をやいたようでした。そしてその夜は四カ月程ぶりに私の肌は紐に噛まれることなく、結婚後初めての独り床ですすり泣く結果になったのです。

正直に言って淋しかったのは事実です。慣れというものは恐ろしいと思いました。当然触れるべきとしていたものが、突然に空しく消え去った感じで奈落の底に独りほうり出された思いが、耐えようとする涙を強引に誘い出してくるのです。

でも後悔はしませんでした。夫そのものに対する慕情と尊敬の念は確かに変りはありません。でも納得ずくならとも角、頭から詭弁を弄して、自分をあくまで正当化しながら、相手を玩具的に扱おうとするやり方には、心底からの怒りを感じます。何故、だまそうとするの。何故、もっと素直に要求してくれないの。打ち明けて言ってさえくれれば嫌なこ

とでも私は甘んじて努力したのに。しばられることぐらいは何です。羞かしいことなどありません。いくら丸ハダカで、どんなみじめなしばられ方をしてもいいのです。夫婦ですもの。しばるのは強盗や他人ではないのです。身心を、いえ生命までを託した夫の手でしばられるのですもの。いささかの不安も恐怖もあるわけがないのです。

でも、そう割り切って、夫婦間の一つの遊戯、テクニクとして没入するには、精神的な抛りどころが欲しいのです。

他の女の人はどうか知りません。でも私にとってはそれが必要なのです。理屈っぽい女と思われるでしょう。情のコワイ女といわれるかも知れません。でも、愛している夫ですが、こういうやり方には絶対賛成出来ないのです。卑怯なやり方です。妻といっても一人の人間です。夫婦間で他人にいけないようなことを実行しても一向に差支えはないと思います。どこの家庭にでもプライバシーというものとは当然あるものでしょう。それはそれでいいと思いますが、当事者自身にまで詐術を用いるなどとは、絶対に従服出来ないことです。私は結婚した以上、柔順でありたいとは思いますが、暗中模索のままの盲従とは根本

的に違うものだと思います。

眠れぬままにいろいろ考えました。

「女をしばって愛するのが好き」とは、私にはわからない心情です。「しばられて愛を感じ悦ぶ心情」は更に理解し難く、とても信じられないことです。でも、世の中にはそういう人が居る……らしい。どういうことでしょう。感覚的なもの？ 精神的なもの？

私には、どうしてもわかりません。でも否定しようとは思いません。お肉の好きな方、お野菜を好む方。歌の好き嫌い。趣味の違い。人間には、さまざまな好みの相違があるのですから。

私は好きで読んだ訳ではありませんが、御誌を夫からあてがわれて、好意的な観点から読みました。全部で二十冊近くかとも思いますが、今、冷静に思い出してみますと、ハッキリ言って決して立派なご本とは申し上げられません。夫は現代人の真実の声を集めた文献誌だと申します。満たされない者の渴望を慰めるに重要な役割を果していると価値づけているのです。そしてよく読んで理解できるようになれということです。

なる程、そうかも知れませんが、でも私に遠慮なく言わしていただくなら、御誌は文献誌

のタイトルの代りに「性誌」とすべきではないでしょうか。ズバリというのが真実の声であるし、性につながる事項を赤裸々に描写することが、満されない者の慰さめというのなら、名作といわれる文学や、一流新聞の報道記事より秘密に出版されていると聞く小冊子や、興味本位の赤新聞、週刊誌の方が高い価値を持つともいい得るのではないのでしょうか。生意気なお気に触るようでしたらすぐに焼くなり破くなりして、お捨て下さいませ。悪口はもう少し続けるつもりでありますから……。

夫の言によりますと、御誌はワザとプロ作家を敬遠され、投稿、投書の紹介発表に止めていられる故に、偽らざる声だということですが、それは確かにそうだろうと思います。ですが読んでいて、私のような幼稚な女にでもすぐに嘘だと分るような空想小説？ が告白として堂々と載せられているのはどういうことでしょうか。女の名前で書かれていて、どうも男の人の手になったと思えるようなのは、少女雑誌や、婦人雑誌にもよく見受けられることで、別に珍らしくもないでしょうが、そういう人達が空想したものだから文献的価値がある、というのでしょうか。「変態性慾」

という言葉は、私もずっと以前から聞き知っていました。恐しいイメージがついて廻るのも否めません。でも、他人に危害、もしくは迷惑をかけない以上、やたらに排撃する資格は誰にもないことぐらいは、私にもよく納得できます。だからといって、その人達の好き勝手なことを「性」というものを伏線にして喚きちらし、これが真実の声だと言われると抵抗を覚えてしまいます。こういう人も世の中に居るのだ、という紹介なら話は別になるのかも知れませんが……。

喧かましく言われている悪書云々の運動。私の住む団地の中でも熱心な方がいらして、私にも誘いが参りましたが、私にはとてもそんな資格はないので、カンベンして戴いていただきますけれど、そんな問題とは全く別に、私自身が直接の被害者として、御誌に好意を持てと言われても出来ない相談だということはわかり下さるものと思います。

特異な人間生態を記録することは、それなりの意義はあるものでしょう。生れつきの嗜好を人為的に変えることは出来ないでしょう。たとえそれが世間で眉をひそめられるものであろうと、好きなコトをしてはいけなさと強制する権利を持つ人間はいない筈だし、

そうすることはその人の人権を蹂躪することでしょう。それは本当によくわかるのです。でもそれを持ち上げるようなコトは控えるべきではないでしょうか。少くとも、マゾ気のない女は、女としての資格に欠けるというような錯覚に陥いる書き振りをする方に、何らかの行き過ぎは正を促す編集方針を望むのは無理なことでしょうか。

こんなことを書いたからといって、そうして下さいとお願いしているわけではありませんから、お間違いない下さいませんように……。坊主憎けりやなんとやらで、私は被害者として筋違いかも知れませんが、御誌に好意はもっていないのですから……。

もう捨てられているかも知れませんが、書き続けても無駄ではないかとも思いますが、私の気の済むまで書きましよう。

マンジリとも出来なかった夜がようやく明け、夫も私も、何か白々しい空気を破ることが出来ないままに、彼を送り出しました。

……淋しい気持、悲しくなって涙が自然と出る。でも、しばらくのことはいや。しばらくさえすれば、自然と仲直りは出来そうな気がするけれど、そんな一時逃れはしたくないし、本当の仲直りとはいえない。彼は好きだ

けれど、こんなに誠意をつくしているのに、彼の方で誠意で応じてくれない以上、信用できない。彼のわがままは通してあげたいけれど、将来のこともあるし、安易な盲従はしない方がよいと思う……。

その日の日記は、こんな書き出しでいつもの優に三倍以上になっています。

私達二人は、氣拙く白々しい雰囲気になりきれない気持で、その日から一週間ばかりを過しました。二DKの二間に別れて寝んだのはあの日だけでしたが、同室に枕を並べているというだけで、夫婦の間の交流はせきとめられた感じでした。私としては、私の気持や考え方をじっくりと話し合えるチャンスを探えようと狙っていたのですが、彼の方はどうだったかわかりません。その態度の奥には「主人の意に反する妻が、どんな淋しい気持で日を送らなければならないか、よく味って考えろ」というような考えがあったのではなにかと思います。私の勘ぐりだけでなく、夜のTVドラマなどにかこつけての口裏から察しがついたのです。彼は私の降伏を待っていたに違いないのです。夫の独善が顔を出した感じでした。

正直いって、冷戦？ 六、七日目ともなる

頃には、私の神経は相当に参って来ておりました。「夫の手でしばらくられるぐらいが、なぜそんなにいやなの。形の上でしばらくられることをいやがっても、現に妻という座を貰った以上は、夫に無形の鎖でガンジガラメにしばらくられているじゃないの。細紐を彼に手渡した方が、得じゃないの？ 自尊心と、現在のやり切れない気持とをハカリに掛けてみたら？

しばらくして身憚りする嫌悪感さえ耐えれば、彼は心からの愛を示してくれるじゃない。彼の前に紐を出して、両手を背中に組むだけで、そのわびしさは解消されるのよ。強情をはってても、いつまで続くものですか」「いえ駄目。目先の一時逃れをしても、それは解決というものじゃないわ。しばらくられるみじめさを我慢したとしても、仕方なく、嫌々しばられていたのでは長続きする訳はないでしょう。夫婦のお遊びなら形だけでは済まないわ。私だって彼の腕の中で幸福感に浸りたい。けれど、しばらくたるとたんに、折角酔いかけた幸福感がフットンでしまうのをどうすればいいのよ。しかも、彼の気持は、その時に限って私を妻とは思ってないのよ。自分が捉えた生きた玩具。ただ、歪んだ獣欲の対象として、しばらくいいじり廻すだけの白い肉

塊。その上、その惨めさを喜ぶのが女だって？ 冗談じゃないわ。昼は淑女で夜は娼婦になれというのなら話はわかるけど、娼婦というのがしられる女のことなの？ 私は心の底から夫を愛することが出来る状態が欲しいのよ。しばられるのが当然で、それでこそ女だ、妻だなんて理屈をこじつけることを反省さえしてくれば、私だってしばられた時のみじめな嫌悪が、気持の上で多少は和らぐと思うの。しばられることが好きになれるなんて自信はないけれど……。とにかく話し合う必要はあるわよ、絶対に”

私の胸の内での葛藤は続きました。そしてそれは、彼の帰宅が遅くなり始め、連日、午前様になり出してから、余計に激しくなったのでした。夫婦としての交りが途絶えてから二十日以上も経っていました。

私の気持は焦りを増しました。話し合うどころか、彼が家に居るのは一日の内、深夜、いえ明け方の四、五時間だけになってはどうしようもありません。しかも泥酔して。

浮気？ しばられることを喜ぶ女の人と？ そう案じないことはなかったのです。でも彼の、例の一件以外は信じる事の出来た私は、その心配より、容易に降伏しない私に対する

夫の作戦だと解釈し、話し合いに応じてくれるよう仕向けるべきだと思いました。

一生懸命になって考えました。そして、ようやく一つの計画をまとめ、土曜日を選んで実行に移したのです。

その夜、彼の帰宅は午前二時を廻っていましたが、私は、まるハダカで迎えました。夫はさすがに驚いた顔付になりましたが、すぐ眼を反らして床にゴロ寝をキメコミました。

”お願い、座って”

私は彼の枕許に正座して声をかけました。必死でした。悩み抜いた揚句ですもの。

”ボクは眠いんだ”

彼は冷たくいいます。ワザとだということぐらいはわかります。

”お願い、座って”

私は繰り返して強くいいました。彼は仕方がないという態度でノロノロと起き上り、対座してアグラをかいてくれました。

”そこに紐を用意してあります。しばっても……”

いいから、私の話を、親身になって聞いてちょうだい……と、私は言おうとしたのですが、駄目でした。

”無理することはないぜ”

という夫の言葉がさえぎったからです。私はその位いのことは覚悟していました。冷戦の最中に待ってましたとばかりには出来ないでしょうね、彼は男ですもの。

”ね、お願い。私の話も聞いてよ”

私は出来るだけ優しくいいました。感情を押えていたつもりでしたが、こう言ったとたんに、涙がスツと流れてしまいました。

後で考えてみると、これが不覚でした。もっと冷静でいるべきでした。この涙が彼に奇妙な自信を持たしたらしいのです。

”寒気の出る程いやなんだろう？ だからこそ、こんな味気ない家にしたんだろう。ボクはネ、好きでしばるんじゃないよ”

私は思わず彼の顔をみました。好きでしばるんじゃない？

”キミの心の中から、本当に女として喜びと独占されている美しさを引出してやろうと思っただけなんだぜ。女はしばられている時の姿が一番美しいんだ。それは、どうでもしてください、どんなことでもあなたの意のままですという心根を、形で表現しているからなんだ。肌に紐をくいこませたら、実感として従順の気持が湧くだろう。どんな苦しみでもアタタの為にならという妻の心意気を肌に感じ

られる筈だ。しばってでも独占しようとしてくれる夫に対して、愛情をかき立てられて、喜びを覚える。そうなるのが女であり妻なんだ。そこに妻として値打と悦びがあり、幸福感が溢れてくる。その気持ちを、キミに味わしやるためにしるんだ。それを寒気がする程いやとはなんだ。それとも、よくわかったから是非しばって欲しいのかい？”

私は一言もありませんでした。夫のいうことがわかったからではありません。呆れてしまったからです。二の句がつけないというのは、この時の私の気持ちのようなをいうのだと思います。よくまあ、こんなヘリクツを……。私はポカンとしてしまいました。

一刻の後、衝き上げてくる激しい憤りをどうしようもありませんでした。折角、好きなようにしてもらおうと思った素肌がカッと火照るのを覚え、無意識のうちに隣室へ走り込みました。

まだ彼は、自分自身をあくまで正当化しようとしている。自分の異常な嗜好を、妻たる者にも隠しながら妻の責任にすり代えて、優越の座を確保しつつ獣欲を満たそうというのです。夫婦の営みは、その形態が如何ようであらうと、神聖、とまでいえなくとも通常の

ものとして通じるでしょう。けれど、彼のよきな卑怯さがあれば、それは例え夫婦といえども獣欲としか言いようがないと思います。

私はむしろ悲しく情けなく下着一つ着ることも忘れて、四畳半の畳をころげまわり拳を叩きつけてオイオイ泣き出してしまいました。勿論、腕組みして仁王立ちで見降していた彼など、しばらくは眼にも入りませんでした。

私の懸命に練った計画は、余りにもアツケなく、そのスタートさえ切らぬ間にフットバサレてしまいました。結果は、益々悪化してしまっただけです。

翌日曜日、彼は、意識して眼をそらし、食事の支度もつい義務的になり勝ちな私に、どういう観方をしていたのか知りませんが、とにかく、眠そうな顔付きで釣竿を提げて出て行きました。私は何かホッとした気持ちになり、何気なく鏡台の前に座って驚きました。

写真が二、三十枚も置いてあるのです。例の女の人がしばられた写真です。全部一度や二度は見せつけられたものばかりですが、日頃は鍵付の手に彼が秘蔵しているものです。私はまたも怒りに火をつけられた想いでした。一体どういうつもりなんでしょう。ヒト

をバカにするにもホドがあります。カッと頭にきた私は、それを丹念に裂き始めました。ウラミをこめて。怒りをこめて……。

全部を破り終ってもまだ気が納らず、次にはベランダで焼きにかかりました。魔女どもは焼かれるのが当然です。勢いに乗じて、彼の秘蔵の箱を引出して錠を外そうとしましたが意外に堅固で手に負えず、無念の涙で睨みつけるより方法がありませんでした。

彼は、どこで何を釣って来たのか知りませんが、四時間ばかりで帰って来ました。私は冷戦中でも、時間の如何によらず出迎えは欠かしませんでした。けれど、その日だけは扉を開けに立つ気になれなかったのです。ノックに習慣で浮かした腰を、無理に落着けました。尤も、そっと洋服箆笥の服を探ぐり、彼がいつも持っている扉の鍵のないことを確認はしましたけれど。

ここへ越して来てから自分で鍵を開けて我家に入ったのは、彼にとって、おそらく初めてではないでしょうか。

私は、写真を焼却してしまった今、彼がどんな態度に出るかが気掛りでした。でも叱られるのをこわいとは、奇妙に思えなかったのです。そんなことは問題にならない程の覚悟

があったのです。ただ、それをどう切り出してきて、どうするかが心に掛けていただけでした。サアどこからでもいらっしゃい！昨日までの私とは訳が違ってヨ！……。そんな心構えだったのです。

ところが、彼は扉から直接、私の前まで来ました。写真の有無を確かめようとしないうです。まっすぐ私をみつめたまま、ツカツカと近寄って来られると、又もや、想いの違った私は出鼻をくじかれた形で、身構えを崩されてしまったのでした。

私は彼の眸から眼を外し、何か言わなければと思った時です。突然に自分の体が宙に浮いて、したたかに畳に投げつけられました。どうなったのかわかりませんでした。次の瞬間には彼の膝が私の背中を抑えつけ、両手が捻じ上げられていました。

余りこのことは書きたくありません。私の敵方に廻る御誌の中の小説みたいな感じになるからです。

とにかくそれから、私の一番いやな紐が私の自由を奪って、夫の手でむしり取られた普断着の上を、転げまわって泣かなければならなかったでした。猿ぐつわまで噛まされてそれはまるで、映画で観た拷問以上の光景だ

ったに違いありません。

彼は、私を呻かせたり泣かせたりしながら奇妙な感嘆詞を並べ、変なおだて方をしたり例のヘリクツをまことしやかにまくし立てていました。これが昨夜だったら、少しは耳にも入ったかも知れませんが、その時にはもう情なさど、みじめさと、嫌悪と、うらみ。それらがミックスされた苦痛以外に何も感じられませんでした。ベタ惚れのはずだった彼に初めて悪感情を抱き、尊敬していたはずが、軽蔑すべき人間だと想えて来たのです。

紐から解放されたのは深夜でした。自由に動かせる筈の手足が、ジンジン痛むだけで意志通りには動いてくれず、混乱しきった頭の中は悲しさが一杯で、何かさかんに話しかける彼の言葉がわずらわしく、何をいつてるのか理解出来ないままに、ウンウンとゴックリを続けて、布団の衿を涙で濡らしていたのでした。

翌日は一日中ボンヤリと過しました。昨夜の思いがけないきつい苛められ方と、何日も考え抜いて、何一つ希望の持てるいとぐちも掴み得なかったことに神経が疲れきったのでしょうか。家にいながら夕食の支度をしなかったのも結婚以来、始めてでした。

その日の彼の帰宅は、久方ぶりに早かったのです。ボンヤリと迎えた私を、彼は気味悪いほど上機嫌でいたわり、食事を取り寄せたりお風呂をわかしたりしたものです。

私はもの憂い頭の隅で、彼が謝罪の意味でしているのだと思いました。ですから、気は滅入っていましたが、微笑も見せて食欲のない夕食も摂りました。

しかし、これも又、私の思い違いだったのです。早目に床についた彼は、まだ痛む節々をお風呂で揉んだばかりの私を、又もや押し倒して、しばり上げてしまったのでした。

驚いてなじる私に、彼は、約束が違うといった顔付きで、昨夜、私が、明日から毎夜、二時間ずつしばらくという彼の提案を承諾したというのです。その上、私が本当に、しばらくしていたがられることが嬉しくなったと言ったというのです。自分は余り気のりしないのだが、キミの望みだから、こうしてしばらくあげたというのです。

私は、もう反論する気はありません。バカくさくって、どうのこうのと言ひ合う価値はもう失せました。どうとでもなさい。私はヤケじみた気持で、しばられた痛さとみじめさを噛みしめたのです。

そして、それから又、連夜の嫌悪と斗かわ

ざるを得なくなりました。と同時に短い結婚生活に別れをつける決心をしたのです。

性質が性質だけに、あからさまに相談出来るのは、四ツ齡上の姉だけでした。姉も初めのうちは信用しませんでした。とにかく別居という形をとることに賛成してくれたのですが、まだ半信半疑のようです。

私は明日、黙ってこの家を出ます。あのいやな細紐も、今夜さえ我慢すれば、もう再び私の肌を襲ってくることはないでしょう。

どうも長々と済みませんでした。雑誌にはリーダー・シップがあると伺っています。生意気なようですが、私のような悲しい思いをする女性を、出来るだけ少なくして行くよう

にお願いしたいと思います。

ベタ惚れだった彼には、せめて今夜だけでも、勇をこして、笑顔を以ってしばらくと存じます。私の人並な幸福を奪いさった、憎い憎い、うらみ深いあの細紐を甘受して。でも、私にもハサミが味方としてついていきます。明日はきつとズタズタにしてやります。

贗 作 殘 酷 記

み は ら ・ ひ ろ し

一、生神様のおみあし

年頃は十六、七才、匂うように血色の美しいふっくらした頬や、黒く澄んだ切れ長の目や、きめのこまやかな、やや長めの青いほど

白い首筋や、ひたいから頬にかけてハラリとこぼれかかる漆黒の前髪に、女よりも艶冶な美しさをもった少年であった。

すらりとしたからだにまとったのは振袖ではない。脇をとめた仕立ではあるが、濃い紫

の匂い染めの紋服で、袖の下部に乱菊を染め出してある。紫紺の地に色系で亀甲を織り出した袴をはき、金糸と銀色とで引両を繡い出した猊々緋の羽織をはおって、目のさめるような華美な服装であった。

寛助は、この花のような若小姓を土下座したまま上眼遣いでチラと見上げたが目の眩む思いで再びまた額を砂利の上に摺りつけた。

「ふむ、そちが今度、殿に獲られた男か。なかなか、しぶとそうだな」

濡れた紅い唇からはろびでる声までが、何かしらねばねばと粘っこい糸をひき、かすかな衣摺れのため芳香が漂い、土百姓の寛助は目の前に立ちはだかっている若小姓が、いま殿の御寵愛を一身に集めて飛ぶ鳥落す権勢を揮っている淡路左織であるとは知るよしもなく、ますますかしこまって、鼻先につき

出された華奢で巧緻な蠟細工のような足指の爪の一つ一つまでが、磨かれた桜貝のように艶やかに美しいのを痴呆のように見つめていた。左織の片足が上り、絹ごしの若い女の手の掌より柔らかい素足の裏が、ひたと寛助のひれ伏した首筋をおさえつけ、やがてぐいと力が加わってくると、寛助は苦しさと同時に薄い汗がからだ中ににじみ、全身がむずがゆく、蛇にからまれた蛙のように身動き一つ出来ず、呼吸だけが次第にあえいで、気が遠くなりそうであった。一日中、泥水の中を這いずり廻っている土百姓の寛助などの領民にとって、紫の雲の上の神聖な別世界のように思われていた御屋敷内である。

雑木林で粗朶を折っていた寛助は、猪狩りの帰りで山道を下ってきた殿の一行に出会い土下坐して這いつくばるひまもなくいきなり引っ立てられ、そのまま御屋敷の土牢の中に十日ほども放り込まれていたのだが、今日とつぜんに引きずり出されて、縁先の砂利の敷き詰めてある中庭に突き出され、寛助にとっては白い生神様のように高貴な、そして邪宗門の魔女のような妖美さを漂わす若小姓の前に引きすえられたのである。

「どうじゃ、ちっとはこたえるかの。それと

も、もそつと強うして欲しいか」

筋骨たくましく赤銅色の寛助の肩の上を、左織の雪のように白い華奢な足が情容赦なくぐいぐいと踏み込んで、寛助は額を砂利の上に摺りつけたまま、醜い蛙のように踏み潰されていった。そして、ぐりぐりと踏みにじられるたびに、胸や腹に喰い込む砂利の痛さとともに、寛助は不思議な陶醉に浸っていった。

二、君臨する奈々姫

ぎしぎしと砂利の上を近づいてくる車の軋みが、まだ地面の上に這いつくばって左織の白い、まるで人魚の手のようななまめかしいそれでいて無慈悲に意地の悪いおみ足にいたぶり続けられていた寛助の耳を、遠くから聞えてくるからくりの囃子ののように夢うつつくすぐったと思う間に、

「広之進、お前が拾うてきてくれたというのは、この男かえ」

脂あぶらっこい女性の声が頭上に聞え、いきなり烈しい空気を引き裂くような音がして、下帯一つに剥がれて土下座している寛助の背中を斜めに、魂の芯まで痺れあがるような激痛が走って、思わず「ひーいっ」と悲鳴を上げて崩折れた。

「何と堪こらえ性のない。それでは使いものにならぬぞえ。これ、面おもてを見せや」

再び脂っこい声がして、おそろおそろ顔を上げた寛助は、目玉がとび出すほど驚いた。眼の前の地べたに、自分と同じ下帯一つになって四つん這いになっているのは、確かに自分を雑木林で捕らえた領主の広之進に相違なかった。四つん這いの両手は、黒漆塗りの金蒔絵の二輪の車輪の軸を支えて、馬の恰好になっっているのである。この領主の名を呼び捨てにした尊大な女性は、広之進の背中にふんぞり返って馬乗りになり、手には黒革の鞭を握っていた。目にするだけで圧倒されるほどに見事に盛り上った胸、重量感のある雄大な臀部、細くくびれた腰、そして引きしまった腹から股のつけ根まで艶々と黒光りする革で包み、豹の毛皮を鞍代りに馬乗りになった股のつけ根から真白い大理石のような脚をすらりと伸ばして、四つん這いになった広之進の両側に垂らしていた。

この女性こそ、この地方一帯の領土に、事実上の絶対権力者として君臨する奈々姫である。領主の三原広之進は、関ヶ原の戦いでは会津百二十万石、上杉景勝の幕下で一方の旗頭として相当の働きを示したのであるが、戦

いが西軍の敗北と決まるや、手勢二百騎を率いて四国まで落ちのび、この谷間の村落を占領して領地としたのである。この村落は三方を峻嶒な山嶽に囲まれ、一方が広い高台となり、その眼下に両側を絶壁ではさまれた細い谷間があつて、これが外界に通じる唯一の出入口となつていた。この高台に領主、三原広之進の屋敷が築かれた。地理的にこの村落は全くの独立した別天地で、徳川幕府の時代となつても、どこからの侵略もなく、一つの小さな王国を形成していた。

三原広之進はこの地に落ち着いて、租税を徴集し年貢を取り立てて地方一帯を統治するようになったが、一時どうなることかと心配した村民も、広之進が高台で睨みをきかすようになつてから略奪者の侵入もなくなり却つて平和が保たれるようになり、温情主義の広之進の統治は、むしろ善政として村民に喜ばれていたのである。当時三十才の広之進は独身で、質実剛健を旨とするきわめて簡素な生活をしていた。

ところが、広之進がこの地について五年目に重い熱病を患い、これを境にして事情がガラリと一変したのである。もともと広之進一族は、自分らが食べていけるだけの年貢米し

か要求しなかったのが、或日、突然のお触れで重税が課せられることになり、徹底的に最後の一粒まで絞り上げる苛斂誅求の政策に変えられ、高台の屋敷は鞭に追われた村民の強制労働で豪華な御殿に一変した。そして、この小さな王国の実権者として奈々姫が君臨するようになったのである。

広之進が熱病を患つた時、ふらりとこの村にやってきたのが奈々である。奈々は巫女として広之進の病室に招かれ祈禱にあたつた。淡路左織は奈々の介添え役であつた。人払いを命じられた病室で、高熱で頭も上らぬ広之進の枕元に、四つん這いの左織を床几代りに奈々は傲然とふんぞり返つた。異国風にすだ

れのように額を覆つて眉の線で切り揃えた前髪、長く肩の上を波打つて背中に垂れなびく豊かな髪、細く剃りこまれて吊り上つた眉、青味がかった爬虫類を思わせる眼、高慢に反り気味の鼻、薄い唇は嗜虐的に紅く濡れ、そしてその残忍な表情で広之進をじっと見下して尊大に声をかけたのである。

「どうじゃ、広之進、お前も左織と同じ目に遭わされたくはないかえ。見るがいい」

熱で苦しむ広之進の面前で、奈々と左織は痴態の限りをつくしたのである。というより

大柄の奈々が、女のように華奢な美少年の左織を責めて責めつくしたのである。そして広之進は魂の髓まで奈々の魔力に魅せられ、すっかりその虜となつてしまつたのである。その場で広之進は奈々に奴隷服従を誓わせられ揚句の果ては絶対服従の印として、床に仰向けになつたまま額を真向から踏みつけられ、足の裏を舐めさせられ、額の上から尿をかけられたのである。

三、生き地獄

世間から全く隔離されたこの小さな王国を広之進をその魔力の虜にすることで簡単に手に入れた奈々は、広之進に諫言するような頭の固い老臣どもは片っ端しから虐殺させた。

広之進は今や領主とは名のみ、唯々諾々、奈々の操る木偶に過ぎず、あまつさえ広之進は羅切りの刑を受けるに至つたのである。小さいとはいへ、いやしくも一国一城の主が旅廻りの巫女づれに国を奪われたばかりか、羅切りの刑まで受けたというのは、少くとも日本の歴史で他に例をみない。

しかし、男を被虐に狂わせ永久に自己の足下に屈伏せしめる方法として、羅切し男の根を断つほど効き目のある方法は他に見い出せ

ない。男を如何に仕込んで、被虐に狂わせ尿まで飲ませて誓わせても、男に射精の途がある限り、如何なる被虐、屈従の苦難も射精の快感に結びついて、絶対の隷属関係を保持することが難かしくなるのである。尠くとも射精の直後に男が正気に返って、この馬鹿げた茶番劇に気付いて絶対的支配者である嗜虐の女主人に対し不遜の念を起さぬでもない。

男に射精の快感を与えてはならなかった。

その代りに奈々は広之進の目の前で、左織とのあらんかぎりの痴戯痴態をみせつけたのである。豊かな腰をくねらせて、真白な左織のからだを組み敷いたぶる奈々の妖しい残酷な観世物に、広之進は狂ったように身を悶え呻くのみで、永久に満たされることのない色欲の餓鬼道に墮とされたのである。広之進は散歩する奈々が吐き捨てる唾液にまでとびつき命じられれば奈々の排泄した汚物にまでむさぼりつくようになったのである。

又、実権者としての奈々は領民を徹底的に絞り上げた。そして領民の不満に対しては武力による弾圧を行った。領民どもは、働いても働いても収穫物は、一粒残さず召し上げられ雑草で辛くも生命をつなぎ、骨と皮ばかりになって、それでもなお鞭で追われて働かさ

れた。奈々には胸算用があったのである。こうして最後の血の一滴まで絞るだけ絞り切ったら、もはや、こんな絞りかすには見切りをつけて別口の餌食を探せばよいのである。奈々は、自分のような嗜虐の女の生犠牲^{いけにえ}となり肥料となる素質のある男を一目で見抜いた。甘い汁を吸うだけ吸い切ったら、また愛玩用の左織に奉仕させながら、諸国廻りの旅に出ればよいのである。すでに、この国で絞り上げた蓄財は、かなりの額に達していた。今度は九州の奥地に入ってみるつもりである。そこにも、平家の落人部落など世間から隔離された別社会があり、奈々にとって絶好の稼ぎ場所とみえた。そろそろ、この国を見限るについて、奈々は自分の嗜虐の欲望を出来るだけ満たすために、このところ広之進に命じて人狩りをやらせているのである。

寛助には、このような実情のわかるすべもなかった。まして、これから自分が奈々姫の鞭の下、瀕死の苦しみを味わされ、それから大俎板の上に仰向けに四肢を縛られて、一寸試し五分試し料理された上、息も絶え絶えの身を、奈々姫の寝室の一隅に堀り下げられた深い穴蔵に投げ込まれて、蓋代りの硝子板^{ぎやまん}を通して奈々姫と左織との恥知らずな痴態を見

上げながら、この廁がわりに使われている穴の中で、奈々姫の排泄した汚物に埋もれて死んでゆく運命にあるとは見当もつかねことであつた。絞るだけ絞りつくしてしまった百姓どもの命など、もはや惜しくはなかった。鞭の下で芋虫のように身をよじり苦悶する男をじーっと足で踏みつけ、或いは大鋸、錐、太い畳針や焼火箸等を手にして、大俎板に四肢を固定されて残忍な拷問の苦痛に耐えかねてこの世のものとも思えぬ悲鳴の絶叫を上げる男の髪を驚づかみにし、

「これ、左様に大声をたてると、もっと酷い目に遭うのじゃぞ。じっと耐えていれば、これで勘忍してつかわすほどに、我慢しや」

脂汗を流し齒をくいしばって、必死に激痛に耐える表情をのぞき込んで、ぞくぞくとする嗜虐の欲びに酔いしれる奈々であつた。硝子板^{ぎやまん}の上に左織を組み敷いて、広之進に足の裏に唇を当てさせ、あるいは舌でねぶらせて色欲にふけり、汚物に首までつかって苦痛に呻吟しながら息絶えていく男どもを見下すとき、奈々の満足感は絶頂に達した。寛助もこのような奈々姫の色欲を満たす肥料としてとらえられてきたのである。

(未完)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

大島照代との顛末記

河 本 光 三

私が始めて奇クを手にしたのは、昭和三十八年頃で、グラビヤに梨花悠紀子嬢の美しい後手縛りがあでやかに出ており、梨花嬢の可愛い魅惑的な微笑みが私の心を捉らえて放しませんでした。未だに稚ささえ残しているほっそりとした清純な肢体、それでいて要所要所にはコケットリーに肉がついていて、私にとって、もう目くるめくばかりの女性でした。そんな大好きな女性が縛られているのですから有頂天になるのも当然でした。

その当時、私は女体の縛りに限らない興味

と憧れを抱いていましたが、誰一人として話し合う友達とてなく、只雑誌を見ることによつてのみ、淋しく心の憂さをまぎらわしていました。

でも女性を縛りたいという一心は、益々さかるばかりで、只雑誌のグラビヤを見ているだけではそれは容易に消すことは出来ませんでした。女性への憧れは、もう熾烈なばかりの勢いで私の全身を灼きつくし、僅かに自分と同じマニヤが身近かにいるということが、私を慰めていました。

その頃、今まで勤めていた会社をやめた私は、婦人用生理バンドの販売を始めました。それは少しでも女性に近寄りたいと思い、考えた末に思いついた商売でした。仕入れに行く工場には、大勢の若い女の子達がいます。誰か私の思いを遂げさせてくれる娘はいないものかと物色しますが、そういう下心のある私は、素直に彼女達と話すことさえ出来かねていました。

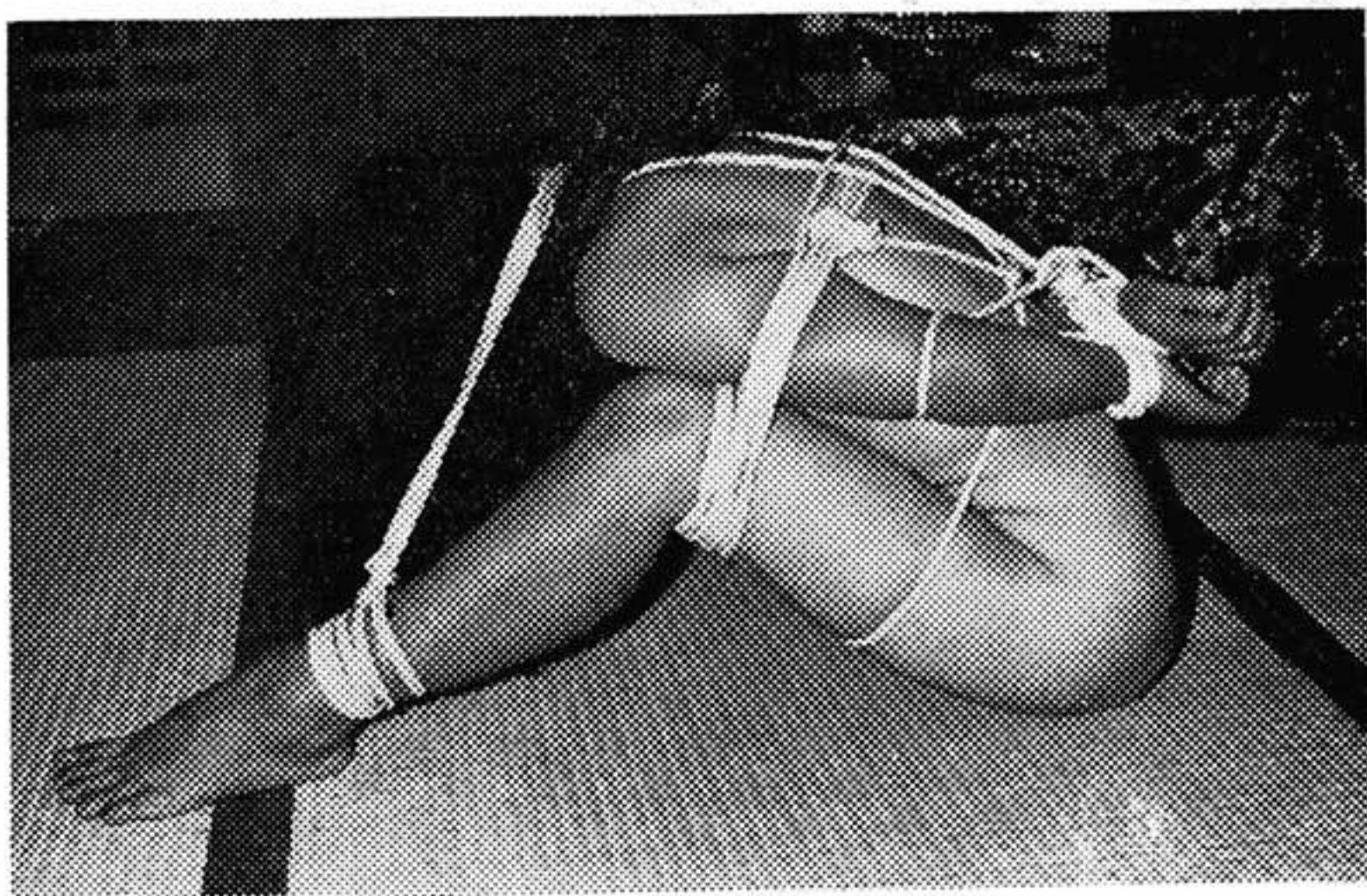
中には、こんな工場の工員にしておくのは惜しいような可愛い娘もいますが、その

顔をじかに見ると、とても話し出せないのです。色の浅黒くて、きさくに私なんかにも冗談口の一つもたたく、朗かな娘に一度、何とか説き伏せようと思い、それとなく「縛り」の事を話してみますと、「馬鹿、エッチ！」と、その娘は真赤な顔をして逃げてしまいました。

その失敗以来、私はその工場でのハントは思い諦めてしまいました。でも、夜になるとその娘さんの裸の肌に縄を掛けている自分を夢みるのでした。空想の上では、私は思いのまま奔放にふるまって、多くの若い女性を縛り上げているのです。

そんな頃、ある母子寮へ生理バンドを売りに行ったのです。幼児を連れた女性が快く迎え入れてくれ、色々話を聞いてくれたのですが、上品な物腰のそこはかとなく哀愁を帯びた目なざしの中に、何となく過去のあるような淋しげな様子でした。母親のワンピースの裾を握っている女の児も、どことなく可細い一人ぼっちといった風情です。

私は何とかして、彼女の過去を知りたいという気持が動きました。母子寮に子供と二人っきりで生活しているのですから、決して幸福な生活ではないということは容易に想像出



来ました。しかし今まで私が接してきた若い女性にない上品な物腰、それにも増して、私は彼女の丁寧な言葉づかいにひかれました。きっと、よい育ちのお嬢さんで、学校も相当上まで行っているのでしょう。それが夫運が悪くて、生別したか、死別したか、今では子

供と二人で淋しく暮しているといった身の上なのでしょう。

私は、「お子さんに何か買ってあげて下さい」と二百円、渡しました。彼女は「初めての方にいただいいかしら」と手を出しませんでしたが、私は無理に彼女の手に握らせますと、にっこりと微笑んで受取りました。

「有難うございます」彼女の丁寧なお礼の言葉に、かえって僅かな金額に私の方が赤面しました。事実、前の会社の退職金も残り少なくなっていて、私の暮しも余り楽でもなかったのです。

この女性が大島照代だったのです。

その日から私は彼女が忘れられなくなり、暇があれば、その母子寮へしげしげと通いました。経済的に余裕のない母子寮の住人に対して生理バンドをすすめても余り商売になりませんでした。私は彼女に逢いたいばかりに訪れているようなものでした。

彼女を数度訪れた或る日のことでした。私は知りたい知りたいと思っていた彼女の身の上のことについて、勇気を出して尋ねてみました。

「私、主人とは別れましたの」

愁いを含んだつぶらな瞳をまたたきながら

そう答えました。彼女の結婚生活もあながち幸福であったとはいえないようです。事業に失敗したこと、それから主人の性格がすっかり変ってしまったいきさつをぼつぼつ語りだしました。

「主人は変わった人で私を縛って喜んでいたのです」

そう言ったとき、私はギクリとしました。なんとなく出た彼女の言葉に私は思わず相手の顔を見直しました。女を縛りたい男がここにもいる、そう答えない気持でした。少くとも、縛りの洗礼を受けた女性であるということが、私をして益々彼女に執着させていったのです。でも、私はどうしても、自分の思いを告白する気にはなれませんでした。

こうして数十日が過ぎ去りました。私と大島照代は逢うたびに段々と親



しくなっていてゆきましたが、縛りのことについて言い出す機会はありませんでした。空想の中では照代の裸身をぎりぎり縛りつけている私でしたが、さて実際になると縛るところか言葉にもよう出さなかったのです。

その頃、奇クの『女性写真モデル』の記事が目についたのです。この時私は、照代をモデルにして、緊縛に馴れさせようと考えました。これが空想を現実につつ最短距離だと思ったのです。それで、照代には何も知らさず照代の名前で編集部へモデル応募の手紙を出しました。

早速、編集部から返信が届き、一度会いたいというのです。照代にどのような話そうかと迷いましたが、次の日、意を決して彼女に問いかけました。

「あんた、モデルになってくれないか」
さりげない風に私は言

いました。故意に縛りのことは言いませんでした。照代は

「私なんか駄目よ、自信ないわ」

クスクス笑いながら答えます。私は熱心にくどいてみました。その熱心さに彼女は根負けして

「貴方の言うことなら聞いわ」

と承知してくれました。私は飛び上りたい気持でした。その翌々日、私は照代をキャロルに乗せて大阪へ向いました。なんとということなく胸の高鳴りを覚えました。

地下鉄の駅から編集部へ電話しました。待つ程もなく高級車の紳士が車の窓を開けて声を掛けてきました。編集長でした。

編集長の車に乗せてもらって、近くの喫茶店へ向いました。この時、照代がガタガタふるえているのを隣りに坐っている私は、切ない思いで感じていました。自分の愛している女性を緊縛モデルにしてしまうのか。しかも彼女は何にも知らないでいる。私は複雑な気持でとまどっていました。

しかし、編集長は私達のそんな気持には、一向に頓着することなく、事務的にテキパキと第一回目の撮影日をきめ、モデル料の額もこれこれと切り出していました。今日プレイ

するものばかり思って、緊張していた私は少し気落ちしましたが、照代はほっとした顔をしていました。総べては次の日に譲られたのです。

約束の日、私は照代をキャロルに乗せて待合せ場所である十三公園へ向いました。途中照代は「いややワ、恥しいわ」と何度も何度もつぶやいていました。私は縛りの写真を撮るということは一言も照代には知らせていなかったのです。その場になれば何んとかないと樂觀していました。照代も生娘ではないのだし、相手はベテランなのですから。

待つほどもなく編集長の外車が私達の横をこするようになって前に停りました。二人は早速、編集長の車に乗せてもらいました。

「この方は山本一章さん、御存じでしょう。痴人の糧を書いておられる方です」

そういつて一人の紳士を紹介されました。山本さんは自分の車で、私達のあとをついてきました。ホテルの交渉は編集長がしてくれましたので、私達二人は只じっとしているだけでよかったのです。

風呂から出てきた照代は、私の耳に口を寄せて「帰りたいワ、怖いわ」と言っています。が、私は彼女の胸の中を思っているだけで一

杯になりながらも、「今更帰れると思うか」と冷やかに突き放しました。

「では始めますよ」

編集長の声に、照代はガウンを脱ぎすて、私の手に渡しました。輝くライトの前に照代は全裸のまま立ちました。何にも知らされていない彼女はヌード写真だと思っているのです。カメラの位置をきめた編集長は縄の束を持って近寄ってきました。この時、照代は始めて自分が縛られるという事を知ったのです。顔をつき出すようにして坐っている私の心をもってか、編集長の命ずるまま、手をうしろへ回しました。

「今日はカメラテストですから、私は簡単に数ポーズをやるだけにします。あとは山本さんにやってもらいますから——」

編集長はそう言つて、手馴れた手つきで照代の裸身を後手に縛つてゆきました。私はこの時ほど照代をいじらしく思ったことはありませんでした。肌に縄目がかかり、羞恥と苦痛に耐えている照代の表情を見ると、何か私は、そんな照代が可哀そうでなりませんでした。一度はうまく誘いだしたと有頂点になっていた。但实际上に照代の肌に他人の手で縄が掛けられているのを見ると、可哀そうな

気持が起ってくるのが不思議でした。

柱に立縛りにされた照代の美しさは、私の目を思わず見はらせました。私はカメラの横に立膝したままで我を忘れて照代の縛られた姿を鑑賞しました。

それは女体の縛りに憑かれた私にとって、強い刺激でした。全く無防備の照代は、今、私の目の前にその豊満な裸身を晒しているのです。私の長年の夢が、現実となってここに果されたのです。最大の感激でした。

私にとつても照代にとつても、この第一回目のプレイは、余りにも強い刺激でした。僅か二時間ばかりでしたが、二人は完全に縄のとりこになってしまったのです。山本さんの縛りは照代の乳房をぺちゃんこにする程、きわめて強烈でした。

第二回目の日、私は照代を連れて待合せ場所まで行きました。編集長は姿を見せず山本一章氏だけ来られました。山本氏は私が同席するのなら撮影を中止すると言います。私は身を切られる思いで、照代を山本氏にまかせたのです。四時には迎えにくると言つて別れたのですが、私は山本氏と照代の入ったホテルの横に車を停めて待つていました。とても家へ帰つて仕事をする気にはなれなかった

のです。この時ほど時間が長いと感じた日はありませんでした。

やっと出てきた照代を私はかかえるようにして助手席に乗せました。照代は私の顔を見るなり無言で目に涙を浮かべていました。

私はその附近を只やたらに、ぐるぐると同じところを回っていました。

「今日は吊りをしはったの。まだ頭がふらふらするわ」

そう言って照代は私に身体をすり寄せてくるのです。私は照代いとしさで一杯でした。公園の樹立のかけに車を置いて私は思わず照代の身体を強く抱きしめていました
「タテに縄を掛けられたので、ここが痛むのよ」

熱いくちづけの合間に照代は羞かしげに、そんなことを言います。きつと股間縛りにされたのでしょう。彼女の言葉の一つ一つが、私の胸に突き刺さり私の全身をかっかつと熱くさせるのです。

黒く燃え上る嫉妬と羨望。その劣等感の中で私の血はふっふつと沸き立ってきます。すると、今までに嘗て味ったことのないリビドが私の全身を貫いたのです。照代を抱きしめる両手にぐつと力が入りました。

「ああ、私、幸福よ」

照代が絶叫しました。何が幸福なのか、縛られることか、今、私とこうして一緒にいることなのか。私は後者であってほしいと念じましたが、照代は只、恍惚として喘いでいるばかりです。

この照代が、自分以外の男性に、むちゃくちゃに縛られ、あられもない痴態を演じたのだろう。そして、この今の照代は、その残るかすの一片ではないのか。私はもう狂わんばかりの疑惑の虜になっていました。

そうだ、自分のこの手で、照代の裸身を縛ってやろう。そうすれば、この心のもやもやも、少しは晴れることだろう。私の手の中には、さっき貰ったモデル代があります。

「照代、さっきのホテルへ行こう」

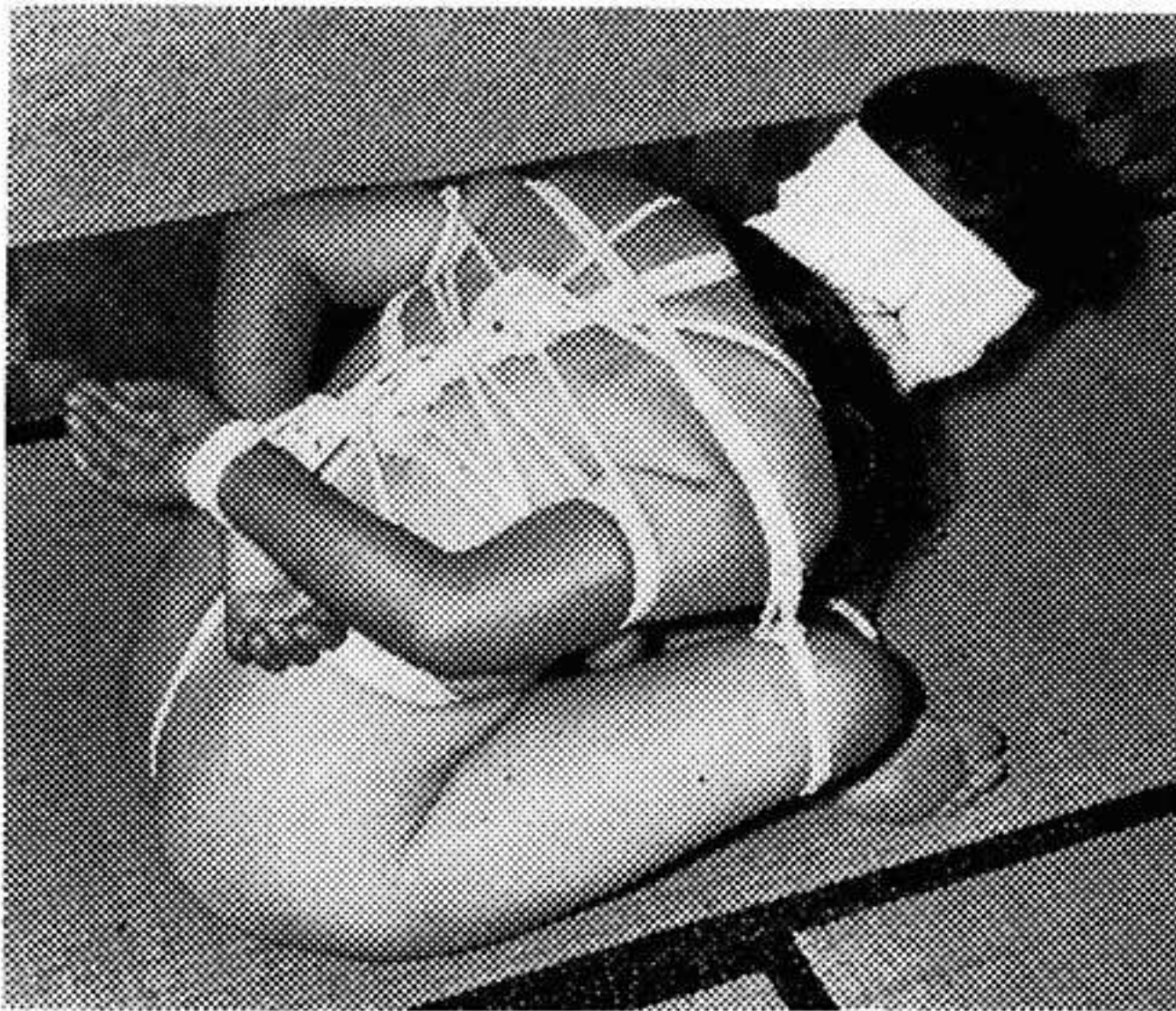
私は照代の身体を突き放して、確かめるように言いました。照代は一瞬、不審な目なざしを向けましたが、私の心の中を察したのでしょう。無言でうなずきました。

さっき、山本氏と照代の入った同じ部屋へ入りたかったのですが、同じ女が男を変えて再びホテルを訪れるという弱味があるので女中に、そんな要求は言い出せません

でした。

部屋へ入るなり、私は照代を後手に縛りあげ、縄尻を引っぱって畳の上に押し倒しました。彼女は悲しげな瞳を私に向けましたが、その眼の中に非難めいたかげりがなかったことは、私にとっては救いでした。

ああ、私は生れて始めて女性の肌を縛ったのです。夢にまで描いていた望みが、今こそ果されたのです。いとしい照代、いついつま



でも、僕のそばを離れないでくれ。そんな切ない思いで、胸いっぱいでした。

「山本さんには、こうされたのか？」

私は照代を柱に縛りつけて、寝巻の紐で脇腹や太股を乱打しました。声を挙げて感泣する、いじらしい照代。この日の私は何かしら物に憑かれたように積極的でした。

山本氏の方が、もっとももっと上手に、照代を泣かしたのではないか。そんな疑惑と劣等感がムラムラと湧き上ってきて私をさいなみそして平常の私に似ないハッスルぶりをしてしまったのでした。

しかし、この日の縛りプレイで、二人は完全に結ばれてしまったのです。女体縛しめという悲願の達成と私にとっては二重の喜びでした。もう照代は私のものなのです。

次の約束の日、彼女の子供が発熱していました。私も取引先の用で、どうしても、その時間に行けないので、お断りするよう照代に言いました。しかし照代は、

「山本さんに悪いから、約束の場所へ行くだけは行きますワ」

そう言って、子供を知合いに預けて、いそいそと出掛けてゆきました。誠実な照代の性質としては無理からぬこととは思えるのでし

たが、病気の子供を置いてまで出かけてゆく彼女に、私は又、一沫の未練と疑惑にかられるのでした。

「今頃、照代はどんな縛り方をされているのだろうか。どんな表情をしているだろうか」そんなことを思うと、もう私は仕事も手につきませんでした。取引先を早々に引き揚げると、彼女のアパートを訪ねました。（この頃、彼女は母子寮を出て、アパートの一室を借りていました。私は退職金の残り全部をはいて権利金を払ってやったのです）

彼女はまだ帰っていませんでした。私はアパートの前に車を停めて、じりじりしながら照代を待ちました。

「電車が大変こんでいて――」

四時半すぎ、照代はほてった顔で帰ってきました。私が待っているのを見ると、にっこり笑って、アパートの入口を入りました。

「今日はコタツを使って開股縛りにされましたの」

アパートの一室に落着いた照代は、こともなげに、そんなことを言うのです。

「痛かったワ。山本さんの縛りって、それはそれは、きついよ。それに……」

皆まで言わず、私は照代を力いっぱい抱

きしめていました。照代の身体は燃えるように熱いのです。私はドキッとしました。

「身体中キッスしはった」

私の頭は混乱しました。無言のまま、照代から手を放し、正座していました。

「おこった？」

ショックに呆然とする私に、彼女はなぐさめ顔に私の膝に手をやりました。

「子供を迎えに行つてこなくちゃ」

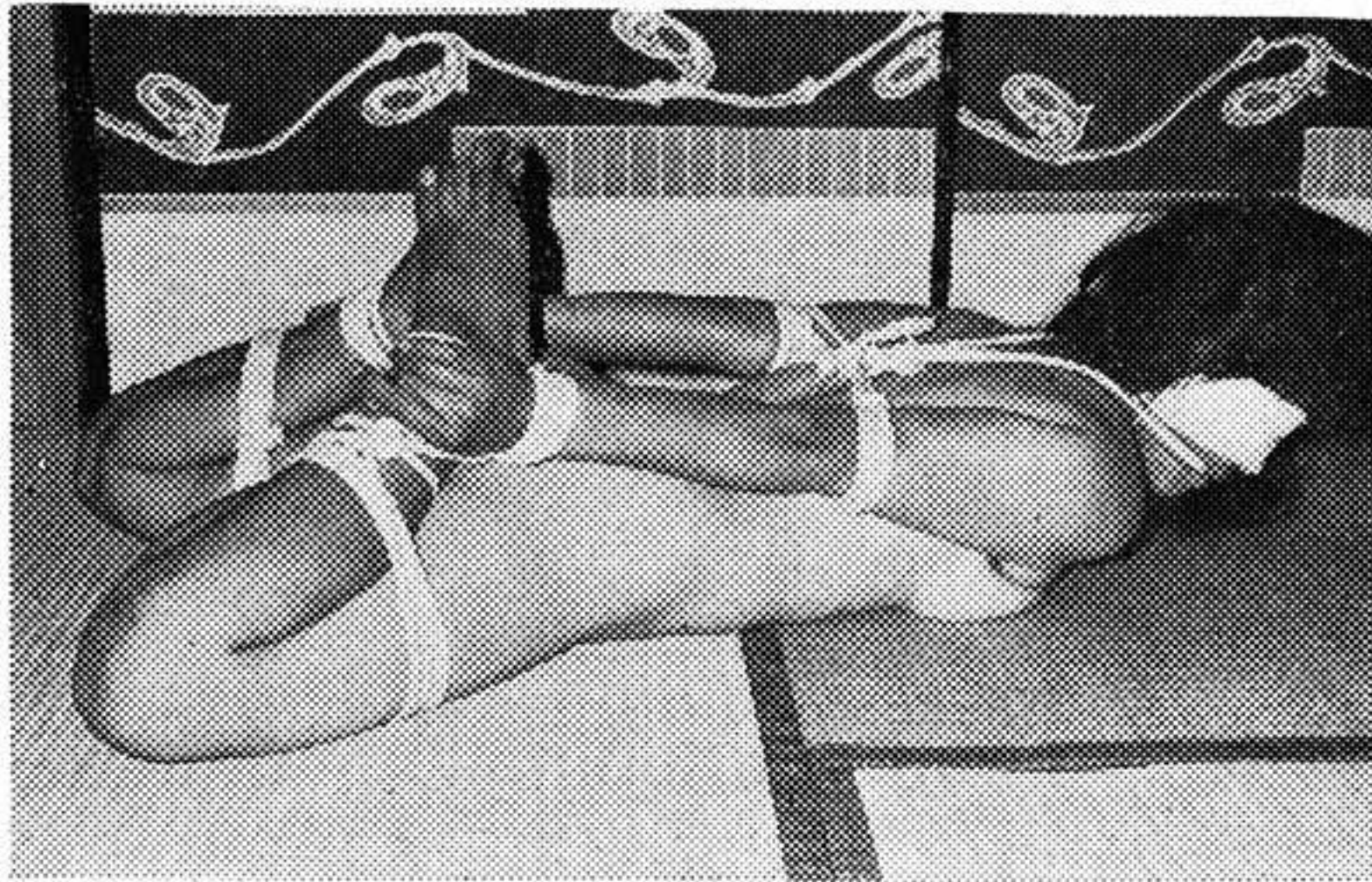
身づくろいを直した照代は立上りました。始めて編集長に会ったのが九月末、そしてもう、あわただしい年の暮が迫っています。

照代を試験台として、私の縛りの手並みも次第に上達してきました。そして、二人の愛情もお互いに確かめあってきました。

正月の休み、私達二人は、照代の案内で過日、山本氏と照代がプレイしたという部屋を訪れました。照代が部屋の名前を手帖に控えておいたので、今度こそ、まぎれもなく、その部屋へ入ることが出来たのです。同じ部屋で同じプレイを再現するのです。同じ照代をモデルとして。只、山本さんが、この私に代るだけなのです。

「ここで、こんな縛り方されたワ」

照代の言う通り私は従ってゆきます。両足



を大きく開いた逆さ吊りは、小柄な私には、とても重荷で途中までしか出来ません。私は用意したローソクに火をつけて、蟬涙を照代の肌へ落してゆきました。

年が明けても、編集部からは連絡がありませんでした。何かしら空ろな淋しさが二人の

間に漂いはじめました。それに貰えるモデル料も私達にとっては少なからぬ魅力でした。私は照代の名前でもう一度モデルに使ってもらえるよう頼んで見たのです。

約束の日、編集長が一人で見えました。彼は当然のように私も一緒に連れて行ってくださいました。帰れと言われるとばかり思っていた私にとっては大きな感激でした。

「今日は助手を連れて来なかったから、君がみんなやり給え」

編集長はカメラを据えて椅子に腰を下ろすと、只シャッターを切るだけで、ライトの位置の変更や点滅、縛り役に解き役、みんな私がやるのです。編集長の指示通り、照代の裸身を縛ったり解いたりする私は、最高に幸福でした。色々な縛り方も覚ええました。

卓上に縛り上げられた照代の脚を持ち上げたり、髪を鷲づかみにして捻じったり、ポーズに変化をつけるため、言われる通り介添えました。縄を解いたあとの肌の縄目をさすってやっている、気をきかした編集長は浴室へ飛び込んでゆきました。

道具の後片づけ、運搬と、私はまめめしく働きました。こんな助手だったら、毎日でもやってみたいと思いました。

三月になって編集部から連絡があり、いよいよ辻村隆氏が来られました。やはり私は一緒に来なくてもよい、ということで照代だけ連れて行かれました。私はボンヤリ公園のベンチに腰かけて待っていました。

始めは自分からモデルとしてお願いした照代なのですが、いざ他人の手にゆだねてみると、いても立ってもいられない焦そうにかられるのです。いとしい照代が、今頃はベテランの手によって調教されている——そう考えただけで、胸の中が熱くなってくるのです。

ひとり淋しく公園のベンチに待っているとそんな自分がむしろに侘しくなってくるのです。こんなことだったら、何とか辻村さんに懇願して抱持ちでもいいから一緒に連れて行って貰ったら、よかったのにと悔まれてなりません。それにもまして、照代の縛られた姿をじかに眺めたいという欲望が、しきりに私をさいなむのです。

私は公園のベンチを離れて車の置いてある方へ歩いてゆきました。座席に坐ってみても一向に落着かないのです。車のドアにロックすると待合せ場所である十三駅の方へ向かいました。時計を見ました。あれから、まだ二時間しか経っていません。

今頃、照代はどんないじめられ方をしているだろうか。ああだろうか、こうだろうか。とどのつまり、今度こそ帰ってきたら、思いきりみじめに縛りあげてやろう。そう考えることで、僅かに憂さを晴すのでした。駅構内の雑踏さえ、私のいらだたしさを更に増すに役立つだけでした。

見馴れた照代の花模様のワンピースが人混みの中に見えかくれました。私は辻村さんに見られてはまずいと思い、柱のかげから二人の様子を眺めていました。親しげに別れの言葉を交す二人、思ひなしか照代の表情にもいきいきとしたものが見られます。

がっちりとした広い肩幅の辻村さんにかくれて照代は、まるで抱きかかえられるようにして、しきりに何か話しています。私のところからは、何を言っているのか一向にわかりません。辻村さんは照代の肩を叩いて、くると雑踏の中へ消えてゆきました。

「今日はクリスタル・プレイで最高に恥かかったわ、貴方の馬鹿！」

照代は私の前に来るなり、そんなことを言うのです。恥しい、恥しいと言いながら、照代は縛られて浣腸されたことに最高の喜びを感じたらしく、盛んに浣腸プレイのことを口にするのです。

にするのです。

照代を車に乗せてアパートへ送る間、私は彼女の言葉に相槌を打ち、それから、それからどうした？ と話の糸口を引きずり出しながら、次々とそのときの光景を再現させていました、アパートの一室へ帰ってきたとき、二人の胸の中は、お互いの言葉のやりとりで最高に燃え上っていました。

私は照代を知って、本当に幸福だと思っております。そして奇クが照代を完全に調教して呉れて、私達の人生に明るい灯火をともして下さったことに感謝しております。

ごく最近のことです。縛りプレイの終わったあとで、照代がこんなことを言いました。「私、この頃、なんだか多くの人に鑑賞されてみたいの」

そして、こんなことも言い出すのです。

「沢山の人に見物されてみたいわ」

内気で、あのように淑やかだった照代が、僅かの間に、このように進況してしまったのです。時折り、山本さんや辻村さんに、もっと縛られてみたいわ。貴方、連絡してみてください。と私に冗談ともつかず、せがむのです。

もうこれ以上、照代が先に進んでいったら自分の手におえなくなるかもしれない、とい

った危惧が私の心の中に巣くっています。

でも、照代の身体を実験台として、私は思いのままに縛りプレイを楽しむことが出来るのですから、今の私は幸福の絶頂にあるといつてよいでしょう。

「辻村さんからね、貴方のことをしつこく尋ねられたわ。私、ただ連絡場所にあの人の住所をかりただけで、考えられておられるような関係は何にもございせんって、答えておいたの。そのかわり、前の主人との夫婦生活のことは、大分詳しくお話したわ」

そんなことを言う照代の真意は、押しはかれませんでした。辻村さんや山本さんのことを話すときの照代の表情には、平常には見られない明るさと、いきいきとした生気がみなぎっているのが、私にとっては何とも複雑な感情を抱かせるのです。

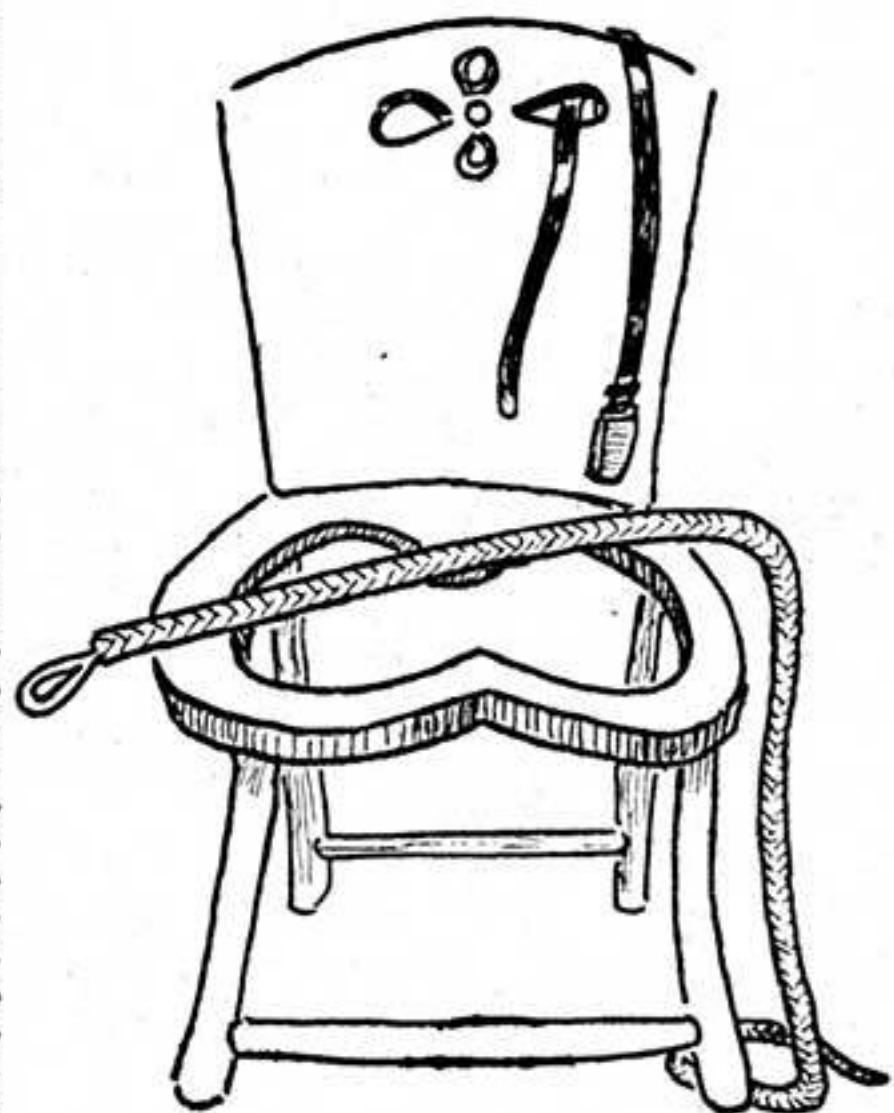
大島照代と私のことを、もっといろいろ書くつもりでしたが、文章を書くことに馴れていないところへ、気ばかり焦ってしまつて、思っていることの何分の一も書けませんでした。次に機会があれば、照代とのプレイのことなど、私の撮った写真を添えてお送りしたいと思っております。

(編集部註、挿入写真は山本一章撮影)

心傷^{こころ}たむ^い遍^{へん}歴^{れき}

△第三十五章 女囚ミシユリーヌ (十五) ▽

西 条 操



イヴェットとモレシェンヌは新聞に名前が載り、ジョアンヌ女史の顎は数日間ゆるみ放しだった。去年の暮の三監の失態——ミシユリーヌ連れ出し事件は別としても、ミルドレーヌとジャンヌ婦人看守の件については、これでもう、充分に埋め合わせがついたのだ。

女史は殊勲者二人を褒めそやし、イヴェットとモレシェンヌは浮かぬ顔だった。数年ぶりに発生した逃走事故——しかも、保安課が一枚カンでのことだから、女囚ソフィアに対するヤキ入れぶりは、伝え聞くだに凄まじいイキリ立ちようなのだった。

ファルマン縫製工場への外勤は、勿論、その翌日から保留にされた。保留とは云え、そのまま中止されるだろう。

「ファルマンだって経営状態が交って来てるし、ま、こんどのがなくなっちゃって——」

気落ちしたコリンヌ課長は負け惜しみを云うが、本省のコチコチを向うに回してまで、強行し続けるつもりはないだろう。なにしろ受刑者を一般社会人とともに働かせるなんてことは、自由刑の本旨にそむくことだ。

イヴェットはその雲行きを知って喜んだ。ミシユリーヌ奥さまが喜々として加わらない

外勤など、彼女にとってはむしろ苦痛の種だった。これでもう、ミシユリーヌ奥さまの悲しげなお顔を見ずに済む。いったん緩められた処遇を自分独りだけが再び元に戻されると、囚われの身の常としてひがんでしまうのだ。ミシユリーヌとても例外ではなかったのであつた。

ミシユリーヌさまでさえ、やっぱりね。でも、無理ないわ。パンの大きさが喧嘩の種になる世界なんだもの。御自分では恥じていらっしやるようだけど、ここ二、三日、ミシユリーヌさまの嬉しそうなこと——。

イヴェットは点呼前の夜の監舎で踵を返した。第十房の六名は、全員が壁に向って膝をそろえている。声高い交話をベルディーヌに聞きつけられ、全員が反省を命じられているのだ。コリンヌ課長が来てからというものは正座の効果が再認識され、何かと云えばすぐに正座と来る。課長は東洋かぶれなのよ、とか陰で云いながらも、手軽にネをあげさせ得て便利なので、近來もっぱら流行している。

九房の三七二号が石臼のような腰を踵の上でよじり、背の双腕を解いて鼻先の壁を打った。石臼と赤毛の二人は、寝台に腰掛けるのを禁じられているクラスのおぼずれだ。

「——どうしてあたしたちだけがこんなにされてるのよ——毎日々々、いつまでこんな思いをさせるのよ。話もしちゃいけないなんて。くそッ。ほかの連中は——」

「そうよ。おんなじ懲役人じゃないか——」赤毛も涙声で身もだえる。同房の四名が寝台に楽々と腰をおろし、天下晴れての交話に忍び笑いさえしているの、それを禁じられて久しい二人がひがんでしまったのだ。

イヴェットは二人を引き摺り出し、有無を云わせずビンタを鳴らせ、嵌口具で口を封じた。大柄な女体二つが恨めしげに無抵抗だ。

「命令されたとおりにしてりゃいいの。分った？ 文句いうだけ自分の損——」

イヴェットは、さらに後手錠をかけた。

「壁を撲ったりするからよ。明朝までこうしてるがいいわ。さ。おや？ まあ——」

赤毛は合掌して哀願したものの、すぐに観念して両手を背にそろえた。しかし、石臼の方は恨めしげに睨む。イヴェットは太い双腕を背にねじ、抵抗を感じて語気を荒げた。

「ここをどこだと思ってるのッ」

当直デスクのキャスリーヌが面白そうに頬杖をつき、イヴェットは力をこめた。このおぼずれには常々手を焼いているし、ミシユリーヌ奥さまに妙な素振りなどしている女だ。

イヴェットは太い腕の急所を痛めつけ、少し可哀想だったが斜手錠を背負わせてやった。

遅ましい肩がボキリと鳴り、太い両手首を鋼鉄環が短く繋ぎ合わせて喰い込むと、石臼は苦痛の呻きに、小鼻をひろげた。この肉づきと骨の太さでは、さぞかし苦痛も並大抵ではなからうが、反抗を示した女囚の懲罰としては軽過ぎるくらい。

イヴェットとしては精一杯のお仕置きを加え、二人を元の壁際へ追い立てた。

点呼のとき、イヴェットは後悔した。石臼

女囚が肩を脱臼していたのだ。訴える術を奪われた石臼は、脱臼を発見して貰ったときには脂汗にまみれていた。

「なあに、気にすることないんだよ、イヴェット。自分の体の規格はずれも考えずにものがからさ。すべて囚人の落度にしちゃうよ」

ジョアンヌ女史はそう云って平気だった。

「あのあばずれはまったく仕様がないわね。囚人としての姿勢がなっていないんだから。でもイヴェットにしちゃ、珍しくきついことやったもんだこと。その調子でね。なあに、あいつ、お陰で二、三日、楽が出来て喜んでるさ」

しかし、石臼を病監の寝台に繋いで来たイヴェットは、もうあんな仕打ちには絶対にするまいと誓い直したことであった。

自責の念に胸を痛めたイヴェットは、引き続いて、さらに心を傷ためた。逃走女囚ソフィアが見るも哀れな姿で各監舎を引回され、その姿を晒して見せしめにするべく、第三監舎へも追い立てられて来たのだった。

点呼後もそのまま正座を命じられていた女囚たちは、鉄格子の向うにソフィアの姿を見て、シュンとして思わず息を呑んだ。

獄衣を剥がれたソフィアは「ベルト」を締

め込まれ、両手両足をそれぞれ鎖で繋がれ、四つ這い姿で追われていた。全身に革鞭の痕が凄まじく、弱々しく這う床に鎖が重々しく鳴る。首には鉄製首環を嵌められ、それに結ぶロープを保安課スカートが無慈悲に引張っている。さらに、ベルトの縦部分中央あたりにもロープが結ばれていて、それを握るもう一人が尻の後ろから追いたてる。ロープが容赦なくしゃくりあげられ、深くめり込んだベルトが喰い入ったままゆすぶられ、ソフィアは呻いて尻をプリプリ震わせもだえた。

トコトン締めあげられた縦ベルトの金具あたりを、ああも手荒にしやぐられては堪まらないだろう。眺める女囚たちは、思わず自分の腰に痛みを感じたのだった。

しかし、女囚たちにショックだったのは、ソフィアの頭が丸坊主に刈られていたことであつた。涙も涸れ果てている風情のソフィアだったが、それでもときどきは床に涙を散らせる。あの豊かだった自慢の金髪を、こうも綺麗サッパリ刈られてしまったのだから、涙の一滴まで絞り出すのも無理からぬことだ。

ソフィアは各監房ごとに鉄格子に向い、両膝で立たされ、逃走女囚の末路を晒して回つた。首環の前に大きな札をぶら下げ、それに

は「逃走囚」と書いてある。

「ふえ——。やっぱし頭ばかりじゃない」

「そりゃそうさ。お上のなさるこた公平よ」あばずれたちは眸を凝らし、気の弱い連中は眼を伏せた。

「こらッ。不心得者の姿をよおく見るッ」

「さ、とっとと這うんだよッ。いつまでチンチンしてるのさ」

ガツと首環が引かれ、ソフィアは呻いて両手を落とした。そうかと思えば

「こらッ。まだ早いよッ。木戸銭ぶんだけは御高覧に供しなきゃ。チンチンをするッ」

と、と、今度は「ベルト」を後ろからしゃくりあげられる。早く這えとて首環を曳かれ晒し足りないとして縦ベルトをゆすぶられ、いずれにしても、どちらかで責められるのだ。

ミシュリーヌは息を詰めて眺め、痛ましさに胸ふるわせた。あまりにも変り果てた姿だったので、この逃走女囚ソフィアが警視庁留置場で一緒だった娘とは気付かなかったのであつた。ソフィアは鎖の音とともに去り、「みんな、よおく見たかい？ 肝に銘じて、あんなザマにはならないようにおし。分ったかい。分った者から就寝待ちの位置ヘッ」女囚たちは呻いて両腕をもがき、鉄格子の

根元から漸くのことていざり去った。

「おそくなっちゃったわア」

帰り支度に忙がしいエディスがぼやいた。彼女はこの四月から配属されている新米娘、ジャンヌ免職の欠員が漸く補充されて、ジョアンヌ女史も一年半ぶりで肩の荷がおりたらしく、またぞろ油の売り方が激しい此頃だ。「ね、ねえ。さっきの逃走囚だけど、あんなに頭刈っちゃって大丈夫？ 裁判のとき困りやしないかしら。まずくないこと？」

「エディスは権力の絶対をまだ信じてないのね。公判までにはかなり伸びるわ。刈った理由なんていくらでもあってよ。頭が皮膚病になったから治療の必要上やむなく——それでケリよ。全然、平気々々——」

「フフフ。キャスリーヌだって分っちゃないのね。起訴猶予の見込みがついたもんで刈っちゃったのよ。ホルダー、新しいのを貰おうと。歩きたんびにカチャカチャ鳴って——」マリー婦人看守はそう云ってあくびをし、手錠ホルダーを太腿からはずしてソファに投げた——。

六月初めの日曜日——ジョアンヌ看守長女史は珍しくも朝早くやって来た。

三監の婦人看守も全員出勤を命じられ、ふ

くれツラで集まった彼女たちは、女史に気合を入れられた。このところ、三監舎の労役成績が最低線に沈み放しなのだ。

女史は、さらに女囚たちを広間に引き出して並べ、正座させてお説教を始めた。

「——いいかえ。たまに、というのなら仕方ないよ。だけど、お前たちの成績はこの二カ月の間というものの、ずっと六番目。せいぜい五位と上がってすぐにビリです。割当てを満足にこなしたことは珍しいし、不良品の数だけではトップを独走——。いったい、まじめに刑を勤める気があるのかい？」

女史は豊かな腰を振って歩き回り、地響き立てて床を踏む。女囚たちは正座の膝をキチンとそろえ、身動き一つせずになだれた。

「——私はね、お前たち受刑者のためを思う気持は、看守長たちの誰にも負けないつもりなのよ。私だけじゃないわ。うちの担当さんたち全部が、ほかに劣らず一生懸命よ。お前たちを何とか真人間にしてあげよう、どうしても更生してくれるだろうかってね。それなのに、お前たちはどうだろう。お陰で、私たちは肩身の狭い思いをさせられてます。ま、それは我慢するとして、お前たち、ほかの監舎の仲間たちに対して恥かしくないのかえ」

「——すみません」

「もうしわけございません——」

女囚たちはひたすらに縮み畏こまって、口々に神妙に呟く。労役成績が良い悪いと云ったって、そのときの材料にもよるし、同じ仕事三日と続かないでマゴマゴすることであるし、一概には云えない。

「ふん。そんなに働かせたいんなら、もっとチャンとした物を喰べさせやがれ」

「そうとも。夜だってさ、三日に一度は好きなことさせるがいいわ」

「床に正座させると、傷^{いた}じまうのは脚だけじゃないよ。手の指にまで響くんだから」

あばずれどもが忌々しげに囁き合った。

「こらッ」と、女史が忽ち眼を剥いた。

「何をベチャクチャしゃべくってるッ」

あばずれたちは蹴り倒されて床にもがき、女史が胸をゆすって呷鳴った。

「両手を前に延ばすッ。指もそろえるッ」

女囚たちは両腕を水平に宙で支え、鼻を嚙りあげ、女史のお説教は、なおも続いた。

「性根を入れてやるんだよッ」

「は、はい——」

女囚たちは脂汗を浮べて苦吟した。

「今日一日、よく反省しなさいッ。そして

明日からキリキリおやり。分ったわッ」

女囚たちは呻きながら精励を誓った。

「ふむ。口先だけじゃ駄目さ。今日は面会も文通も一切中止。交話も禁じます。心ゆくまで正座して反省させてあげる」

女囚たちから嚙り泣きが湧いた。

「泣くだけの気持があったら、その気持を労役に注ぎ込むんだ。だいたいの話、勤労意欲が乏しいから、こんなところへ来るようになるんだね。身を粉にして働いていれば、雑念や妄想が湧く筈がないよ。そうそう、忘れてたけど、明日の朝まで首環を嵌めてあげる」

数名が駆り出され、ロープに通した鉄具の山を運び入れた。一昔前に全廃された鋼鉄製首環だ。ずっと以前には常に用いられ、その後も新入りや劣悪囚に対して装着されていたのだが、廃止されてから倉庫に眠っていたので、ごつい鉄肌も黒々と、錆さえ浮いている。

一個ずつを膝に投げられ、女囚たちは硬張る両手に押し頂いて涙をこぼした。ミシユリ一又はおぞましさに肩ふるわせる。とうの昔に姿を消した筈の中世紀風枷具——この重い鉄枷を首に嵌め込まれるのだ。

女囚たちは自分の首枷をそれぞれ捧げて持

ち、啜りあげながら順番を待った。

愛情派は尻込みして顔をそむけ、峻厳派の制服たちが片っ端しから嵌めて回る。

重々しく冷たい鉄の音とともに、ミルドレーヌがウツと呻いた。隣りで首差し延べるシモーヌがヒーと鳴咽し、ひったくったベルディーヌが髪を掴んで押さえつけ、細い首に鋼鉄を巻きつける。

ミシュリーヌは齒を喰いしばって首を差し延べ、うなじに音立てる錠の響きを聞いた。

「こらっ。いじくるんじゃないッ」

キャスリーヌの革ロープがダイアナの背に鳴り、ダイアナは感極まって悲鳴をあげた。

「嬉しいがってるわよ。仕様がなかったら」

マリーが眺めて舌打ちし、珍しくロレッタが、オイオイ泣き出したが、流石のキャスリーヌもロレッタには鞭を当てず、頭を小突いただけだ。ミシュリーヌは鉄枷の冷たさを首に味わいつつ、じっと眼をつぶって耐えた。

「こら、おメメをあげな」

と、ベルディーヌがその膝を蹴り飛ばす。

女囚たちはおぞましい首環を黒々と首にまとい、啜りあげながら再び両腕を延ばし、怨めしげにジョアンヌ女史を盗み見た。

「ちよっとどうかと思わない？」

「そうよ。ちよっとどころじゃないわ」

と、マジョーリがモレシェンヌに囁く。

「あんな物、倉庫を探してまで持ち出すなんて。まるで——」

イヴェットは涙ぐんで呟いた。

「そう、まるで中世紀に逆戻り。メルセデスが点もした松明の火は、一つ一つ消えて行くんだわ。先棒担ぐのは保安課だけ——」

マジョーリはそう呟いて、フォンティーヌと顔見合わせたのだった。

メルセデスは、マルティーヌの前々任者のことだ。メルセデス刑務課長は、女性には稀な剛腹さを示し、陰惨な陋習を快刀乱麻と断ち切って、緩急自在の刑政を実行した名課長だった。不幸にして病いに倒れ、その任期は短かったが、マジョーリにとっては、敬愛措く能わざる上司であった。いま、女囚たちがいとわしさに哭いている首環は、メルセデスが絶対に禁じた戒具の一つであった。

「完全に破棄しておかなかったのが、メルセデスの失敗ね。『ベルト』だってそうだし」

フォンティーヌも吐息を洩らして云ったことだった。

女囚たちはお互いの姿を盗み見て涙し、札付きのあばずれたちも声がなかった。

「どうだえ。え？ さすがにシュンとした、ようだねえ。結構々々。フッフ。性根が、ふらふらしてると冬にだって巻きつけてやるから。真冬に鉄の襟巻きは暖かいこったろ」

厳冬にこんな物を嵌めこまれた日には、凍りついてしまう。女史は満足げだ。

「だけど、お前たちは仕合わせさ。先輩たちはね、毎日毎日、朝から晩まで、晩から朝まで、寝ても覚めてもそうやって暮らしてたんだよ。ジャン・バルジャンを読んだら？」

腕のたるさに、二、三人が呻き悶えた。忽ち峻厳派が駆け寄り、首環を掴んで手荒くゆすぶった。こいつはこたえる。

「正直な話、さぞかしイヤだろねえ。首環てものは、人非人のトレードマークと昔から決まってるものね。でも労役に精出さない囚人は救い難い人非人さ。誰のせいでそんな思いさせられてるわけでもないよ。みーんなお前たち自身のせいさ。明朝までそうやって反省おし。そして、悔悛と覚悟を新たにしてくるがいい。分ったかいッ」

哀れな女囚たちは脂汗と涙をタッピーと浮べ、口々に反省を誓った。隙あらばズルけるのが当然と考えているあばずれどもは仕方ないとしても、神妙に精根すりへらして過ごし

て来た女たちは頬を濡らした。ミシュリーヌとても口惜しくて胸が煮える。しかし、電信柱が高いのも、お日さまが西から昇らないのも、すべて囚人の方が悪いのだ。ここは理屈の通らぬ世界で、監舎としての不面目は全女囚が一連托生——そして、監舎の好成績は制服女性たちの手柄となるのが常であった。

女囚たちは監房の壁に向って膝をそろえ、双腕を背に正座させられた。

手紙や面会を待ち焦がれていたのがあちこちで嗚咽を絞り、忽ち嵌口具の憂き目に逢った。ジョアンヌ女史はデスクに陣取り、無言のサボタージュを示す愛情派に舌打ちする。監舎の責任者たる女史として見れば、最下位を低迷し続ける労役成績には業を煮やしているのだ。折角エディスを補充してやったのにこのザマは何なの？ とコリンヌにハッパをかけられたのが昨夕のことだから、このヤキ入れも無理はなかった。

ダイアナが苦悶して上体をのた打たせ、ひろげた両膝の間に両手をついて呻いた。張り切ってデスクに頑張るキャスルーヌが監視ミラーで忽ち発見して叫ぶ。

「一機撃墜。十一房五番——」

「ホイ、またかい。忙しいねえ。でも、レー

ダーて便利なこと。こんだ捕縄が御入用」

待ち構えていたベルディーヌが飛んで行った。看守長女史おじきじきの一斉ヤキ入れなのだから、こんなときに忠勤を示せば、昇給に響くこと受け合いというものだ。

飛び込んだベルディーヌは矢庭に首環を掴み、ダイアナを後ろざまにひっくり返した。

「こら、まだ序曲も終ってないというのに何ちゅうダラシなさい」

ダイアナは足留め縄をひしひしとかけられた。両足首をキッチリと括り合わされ、腰をきつくくびられ、正座の姿勢で足首と腰を結びつけられるのだ。両足首から前後それぞれに捕縄が延び、まず、後ろ腰に締めあげられる。前へ回る捕縄は腹部で腰縄に潜らされ、グイと締められてカッチリ結ばれた。これでもう、お尻を載せた両足の踵はその重味に押しつぶされたままビクとも動かせない。

カチャンと金属音が鳴り、ダイアナは更に悲鳴をあげた。手錠の喰い込んだ左手が下から背にねじあげられ、掴まれた右手を肩越しに押し下げられたのだ。

「——かにん——ゆるして——」

しかし、情容赦もあらばこそ、ダイアナは肩甲骨きしませて、斜め手錠を背負わされて

しまった。

「壁に向くんだ。仲間と一列に並ぶッ」

ダイアナは辛ろうじて膝小僧でにじり、バランスを失ってよろめき、隣りのミシュリーヌに倒れかかった。ミシュリーヌは思わず肩で支えてやり、勇を鼓して背の両腕を解き、苦痛に呻くダイアナの上体を扶け起してやった。もちろん、ミシュリーヌの腰に制靴の先がしたたかに飛び、たちまち両手首にも後手錠が喰い入った。

「ウッ、すごい閉め方。耳がこわれちまう」
鉄格子に最も近いクリスチーヌがボヤク。
「行っちゃまいやがった。あれで女かねえ。ところでダイアナ、あんたらしくもないじゃないか。男に苛められてると思ったらどう？」
「——ああ、苦しい——」

マゾ女囚ダイアナは責苦にあえいだ。

「今日は気が乗らないのよ。首環は嬉しくてジンとしちゃったけど、この正座は苦手なの。みんな、よく我慢してるわねえ」

「ふん。やっぱりお遊びみたいには行かないんだねえ。そりゃまあ、床に正座で一日暮らすなんてのは、あんたのナントカ、クラブのスペシャルコースにだってなからうさ。ああちくしょう、足の甲にタコが出来ちまう」

クリスチーヌも正座に脂汗浮べ、鉄の首環をうるさげに振り動かした。

「ちょっと云々とくわ。おミシユちゃんのおトイレの世話はあたしがやるからね。いいかい？ 誰も手出ししないでくれ」

後手錠のミシユリーヌは頬を赤らめた。

翌朝、女囚たちは床に額すりつけて精励を誓い、漸くはずされた首環の跡をそっと撫でたのだった。

三四五号がただならぬ声をあげ、素破、とマジョーリが飛んで行く。三四五号はポンポン大きいチャン——臨月も間近かで、来週には病監へ移す予定だったが、昨日の朝からの貴苦のせいで産気づいたらしい。

「だから昨日、ジョアンヌに云ったのよ。無茶だわ。冷えたのよね、きつと。可哀想に」一騒動納まった監舎で、マジョーリはイヴェットあたりにそう云って嘆息し、ミシユリーヌも胸を痛めたのだった——。

そのつぎの日曜日——イヴェットは当直デスクで、心嬉しく出入簿にペンを走らせた。眼の前には、モレシエンヌに縄尻取られてミシユリーヌが立っている。三人は顔見合わせて微笑み合った。

今日は、待ちに待った仮釈放面接審査の日

なのであった。

「もうすぐにおひるよ。どうせ待たせるに決まってるわ。午後からにすりゃいいのに」

「でもねえ、モレシエンヌ。ともかく面接して頂かなくちゃ。じゃ、奥さ……いえ、四五三号、よくお願いするのよ」

ミシユリーヌは眼を輝かせて、コックリした。たまらなくなつたイヴェットの手が延びて、その柔らかな金髪をやさしく搔きあげ、黒ネットをキツチリと直す。

「卒業試験に我が子を送り出す母親の心境なのね、イヴェットは。ヘアスタイルもお帽子も、端正にして優雅の極みだわ」

モレシエンヌは咽喉で笑い

「さ、参りましょ、奥さま」

と、縄尻を握り直した。イヴェットは胸躍らせつつも心配だった。ファルマン縫製工場での反則が祟って、模範囚から降等されたまま、ミシユリーヌはまだ一般囚クラスだ。模範囚として面接するのところが、かなりハンディキャップがあるだろう。

でも、会ってお人柄を見て貰えば大丈夫だわ。あの反則だって、理由が理由だもの——イヴェットは鉄格子扉を閉じて見送り、そつと十字を切って幸運を祈ったのだった。

「あの、モレシエンヌさま。私一人だけでの？」ミシユリーヌは地下通路で訊ねた。

「そうよ、三監からはね」

「それで——あの——やっぱり、こうしたままで皆さまに——」

ミシユリーヌは両手を悲しく見下ろした。嘗てルーシーが、仮釈放許可の喜びもさることながら、その屈辱を思い出しては泣いていた。この姿のまま多勢の人々から視線を集中され、いろいろと品定めやら訊問やらを受けるのは情けなかりう。

「そう。規則なのよ」

と、モレシエンヌも吐息を洩らした。

「我慢するの。釈放して頂けるのよ」

モレシエンヌは更に溜息した。この春頃から、悲しい装身具は、手錠だけでは済まなくなっている。どんな姿で引き摺り出されるのか、それはじきに分かることだ。モレシエンヌは黙ったまま、女囚の腕を軽く叩いた。

ミシユリーヌは、ついこの間、本館でコリンヌのお説教を受けた。だから、本館の室へ入る女囚がどのような処置を施されるのか、教えられずとも分っている筈であった。しかし、ミシユリーヌは首を垂れて見下ろし、「はずしては頂けませんわね。辛抱します」

と、呑気なことを悲しげに呟いた。

各監舎から連行された女囚が五名、本館との仕切り鉄格子の内側に横一列に正座した。

一監から二名、三、四、五監舎から各一名ずつだ。イザベル婦人看守に連れられて来たのはクラリス——ミシュリーヌの眸を覗き込んで片眼をつぶった。キャプシーヌもいる。

鉄格子の向うのデスクで、保安課のマーゴットがやおら立ち上がってあくびをした。胸に泌み渡る音とともに鉄格子扉を開ける。

「そろったかい。一匹ずつここへ来な」

保安課の鬼ババアたちの口の利き方は、常に、女囚の劣等感を掻き立ててあげつない。「ホウ。トップは絶世の美形かね。だけど、私のセンスで云や、お前ぐらいの器量なら、場末の酒場にゴマンといえるねえ。ま、殿御もお二人いらっしゃるよ。さめざめと泣いて見て見な。こら、じっとしてなッ」

キャプシーヌは身を揉んで顔を掩い、残る女囚たちも悲痛な色を走らせた。あの情けなくも恥かしい股バンド革具を締め込まれるのだ。股布だけでも顔から火が出るのに——。

「次ッ」

一監の一五〇号がシュクツと噉りあげて立ち、マーゴットの前に立つ。

「お前はヴェトナムかい？ なに？ ジャポネだって!!ゲイシャだったんだね？ 枕探してもやらかしたんだろ」

スラリとしたジャポネ娘は屈辱の唇を噛みしめた。彼女は元スチューワーデスで、真珠密輸の片棒を担いだのだ。

「ち、ちがいますわ。私は……」

「黙んな。リハーサル充分のセリフはおあとで喚くんだね。でも、まあ、なんとか言葉は通じるんだよねえ。ヨイショ——と」

縦バンドがイヤというほどに締め上げられて、ジャポネ娘は身をよじった。

ミシュリーヌは観念してバンドを受け、かたわらに立つモレシェンヌが手錠から捕縄を解きながら、頬を歪めた。例によって、縦バンドが手荒く締めあげられ、革の音をききませたからだ。

「お前も、なんとか漕ぎつけたわけだね。晴れの舞台、一世一代の大芝居だよ。ま、せいぜい魅力的に振舞って来な。けど、お前の方があの美形より綺麗だね。あの事件、お前でなくてよかったこと。陸軍大臣の辞職ぐらいじゃ納まらなかったよねえ」

マーゴットは本当のことを遠慮なく云い、キャプシーヌが口惜しげな色を浮べた。容色

一筋で内閣一つを震駭せしめたヒロインとしては、こんな姿にされてはいても、ほかの女性と較べて器量にケチつけられるのは無念至極であろう。

「お手々をおろすッ」

ミシュリーヌの手錠は腹部で金具に結合され、彼女はおずおずと縦バンドをゆすぶった。締め込まれて押さえつけられたので、OMPEの錠が腹に喰い込んでいたからだ。

五名の女囚は後ろ腰にロープを通して珠数繋ぎにされ、まず、刑務課でコリンヌのお説教を受けた。

「——いいかい。仮釈放というものはお前たちの権利じゃないのよ。受刑者は、言い渡された刑期を刑務所で勤めるのが当然です。いい？ 仮釈放というのは飽くまでお慈悲なんだから、それを肝に銘じて御審査を受けさせて頂くことね。絶対に不平は許しませんッ」

給仕娘がやって来て、コリンヌに囁いた。「なんだって!! ビフテキの焼き加減をもう訊きに来たの？ アキれた。私はホンの焦げ目だけでいいの。ポテトは要らないからレタスをタップリ添えるように云っというてね」

コリンヌは、しばし紫煙をくゆらせた。委員の方々とのお会食の席で、気の利いたことの

二つや三つはしゃべらねばならないわけだから、そこらを思案したのだろう。

キャプシーヌが一きわ強く嚙りあげ、手錠の音立てて身もだえた。

「——こ、こんな風にしたままで——このままで突き出されるんですのね——かんにんして——。決して不心得なことは——」

「誓っておとなしく致します。ですから——せめて、手錠だけに——」

ジャポネ娘も精一杯の外国訛で哀願した。

「へえ。そりゃまた何故？」

コリンヌは優雅に小首かしげ、デスクに腰かけて脚を組む。

「ここは刑務所、お前たちは女囚よ。罪ある女が縛られてるのに不思議があつて？」

キャプシーヌが肩をふるわせ、背を丸めて革具をきしませたが、眼には届かぬ指先が悲しく宙にもがいた。

「——恥かしゅうございますの。いくらなんでも——こんな——こんな物をかけられてるなんて——お、おねがい、課長さま」

キャプシーヌには初めての戒具だ。

近寄って手をあげる制服を制して、コリンヌは溜息をついて見せた。

「私の言ってきかせたこと、まだよく分かつ

てくれないのね。あんまり世話焼かせないで。いいこと？ 悪いことしたらフン縛られて牢屋で暮らすことになるのは子供でも知ってるわ。縛られるのがイヤなら、悪いことしないようにおし。とは云っても、恥かしいのは分かることよ。恥かしがるのは、まだ更生の見込があるってことも知れないし——。

ま、そうやって珠数繋ぎの恰好は、眺めたところ、あんまりいいザマじゃないわねえ。ホホ。でも安心おし。そのときには、珠数繋ぎだけは解いてあげます。ほかはダメ」

女囚たちは打ちうなだれて、どうする術もない鋼鉄と革具の縛しめを見詰める。

「手錠やバンドがそんなに恥かしいんなら、なにも御審査を受けることはなくってよ」

コリンヌはキツと形を改めた。

「いい？ 仮釈放はお慈悲なのよ。何度云わせるのよ。イヤならば、無理して行くことはないんだから、嘆願を取り下げなさいッ」

女囚たちは声もなく、わなないた。

「だけどね、いったん取り下げたら、裁判と同じことよ。もう二度と受付けないからね。それだけは云っておくわ。さ、どうなのッ」

「——す、すみません——」

キャプシーヌが声ふるわせた。

「そう。やっぱり取り下げないのね？」

「——は、はい——」

「ほかの者はどう？ 手数かけないでね」

「——お、おねがいます——」

「行かせて下さいまし——」

女囚たちの声は血を吐くようだった。

「そう。では、分際を固く守って神妙にするのよ。そして、身も心も、洗いざらい吟味して頂くことね。分った？ かりそめにも失礼なことがあったら承知しないことよ。くれぐれも身のほどをわきまえて——そのための戒具です。いいねッ」

コリンヌはキメつけて満足げだった。今日の連中は粒がそろっている。それはいいのだが、入獄前の暮しが暮しだけに、かえって逆上してしまうおそれがあるのだ。そして、また、屈辱感というものは、しばしば人間を兇暴にさせる。これだけ打ちのめしておいてやれば、まあ大丈夫だろう。

その方が結局のところ本人たちのためなのよ。掟だものね。この五人なら、ひよっとすると全員合格するかも知れないわねえ——

「お行き」コリンヌは珠数繋ぎを追払った。

女囚たちは、二階の殺風景な室に追い込まれた。所長室がある一画で、面接審査室に隣

接している。ミシュリーヌたち五人は、上方に小さな窓がある壁際に立たされた。鼻先一尺の壁はザラザラだし、床には敷物などのある筈もない。しかし、板張りの床は、コンクリートを踏み馴れた足裏にとって、ほの温かくて柔らかかった。現われたマルタ女史が囚衣の背を見回した。

「ふむ。今日は五個だね」

その太い声を聞いて、ミシュリーヌとクラリス、それに五二五号がビクリとふるえた。この三人は、保安課の恐怖を骨に叩き込まれている。

「縦横ともにバンドがゆるいね。あれじゃ精神が引き締まらないわ」

マーゴットが思い切り締め上げたバンドなのに、なおも締め足りないというのだ。心得たテレエヌが、後ろ腰の一つ一つをトコトンまで締めあげて回る。革がきしみ、錠が鳴り女囚たちは順々に悲鳴を洩らした。

「コルセットが済んだらこっち向いて」

マルタ保安課長は、一人ずつ点検した。「膝をくつつける。だらしない姿勢をするんじゃない。ここは、いやしくも本館だよ」

女囚たちは、突きあげて喰い込む革バンドを切なく堪え、懸命に両膝をそろえた。

「膝が曲っちゃったのはいいようね」

「そうね。まだ正座が足りないのよ」

イザベルとアンリエットが、コンクリート床に正座の苦しみも知らないで囁き合う。

「三一六号。前布をキチンと出しな」

「——はいッ。すみません——」

クラリスは神妙に答え、ひとしきりもがいて手錠を鳴らし、苦心惨胆の末、きついバンドの下の赤縞の布を、両側にキチンとシゴキそろえた。布の方がバンドより幅が広い。

「一五〇号の黄色いの——。お前もだよ」

ジャポネ娘は飛びあがってわななき、泣き声で詫び、ままたらぬ両手に身もだえた。

「心掛けというものは形にも現われるものだよ。ことに今日は、なんのためにどのような御方たちに眺めて頂くのか、よく分ってるだろ。いくらお前たちが懲役女だからって、土まみれのままの野菜を料理する気にならないうだろが。皆さまの中には、シブリー男前がお二人もいらっしゃるんだよ。とは云ったって、髪形やツラの塗り具合なんかはどうでもいいんだ。罪に服する女としてのケジメさえついてりゃ——おや？」

マルタ女史がツカツカと靴を鳴らし、ミシュリーヌは唇をわななかせた。

「こりゃなんだえ。全然タルんでるわ。拘束具の用を果たしてやしない」

女史は太い腕を延ばして、ミシュリーヌの手錠を掴んだ。モレシエンヌに嵌められたままだから、両手首ともガタガタにゆるい。

「おやまあ、ストップかけたりして——。ふむ。お前かい、四五三号。たしか、三監ピカ一の可愛い子ちゃん——一昨年の暮だったか、私たちに世話焼かせたじゃないか。ファルマン工場の一件、私たちの耳に入らなくてよかったねえ。もう一度シメあげられてさ、今日こうしてここに来るた出来なかったとこだよ。えーと、三監の担当は？ ああ、お前さんかい。モレシエンヌだったね。これじゃ保安の責任を持てないよ」

モレシエンヌは鍵を取り出しながら、唇を噛んだ。

「でも、抜けはしませんわ、絶対に」

「誰が抜けると云ったい？ マジョーリの弟子を気取ってちゃ駄目だね。なんとか云ったつけ——そう、イヴェットとやらしい二番弟子と競争で甘やかしてるんじゃないね？ そんなだから三監舎の成績が……」

マルタ女史はズケズケ云いつつも、そこで口を噤んだ。イヴェットの名が出たので、ミ

シユリーヌは思わず眸をあげた。モレシェンヌが溜息吐いて前に立ち、女囚は精一杯に両手をさし出す。まず、ストップが解かれた。

「そうそう。さっきみたいなんじゃ、嵌められてる方だってキマリがつかなくて気持が悪いよ。そうだろ？ 四五三号」

「——は、はい——」

鍵穴に差し込まれて回される鍵、カチカチと締められる鋼鉄の環、そして、再び抜き取られてポケットに納められる鍵——それらを哀しく見詰めるミシユリーヌだった。

「おや？ なにを首振ってンだい？」

「——は、はい。痒くて——すみません」

ミシユリーヌは首をねじて肩を動かし、鼻の横の痒さに身もだえた。叶わぬことは知りつつ背を丸めて、手錠を鳴らして見る。極めて窮屈にされてしまった両手の指先は、どんなに地団駄踏んだとて届きはしない。

「ここあたり？ え？」

と、モレシェンヌの白い指に触れた。

「またそんなことを——。ほっとくよ、モレシェンヌ。そんなことはマジョーリの年頃になってからやることだね。まだチャキチャキの若手じゃないの、あんたは」
モレシェンヌは顔をしかめた。

「こら、四五三号ッ。痒いとか掻ぐつたいとかホザいてられる段かえ？ 正念場だよ」

「——すみません」

ミシユリーヌは詫びながら涙を流した。

「お前たち、よくお聞き。お呼びがかかるまですここで待つんだよ。たとえ僅かでも反則があれば、御審査は受けさせないからねッ。いま懲罰喰ったらどうなるか——全部パアさ。分ったかいッ。回れ右ッ、正座ッ」

五人の女囚はおののいて壁に向き直り、板張りの床に脚を折った。革具がギシギシ音を立て、わずかでも当りをゆるめようとするのか、両手が遠慮勝ちに動き、革具をおずおずとゆすぶって鋼鉄を鳴らせた。

「もぞもぞするんじゃないッ」

マルタ女史の靴が、五二五号の腰を蹴る。さなきだに大きな臀部——くびれ込む革具にそれが更に際立ってふくらみ、皮も分厚く荒れ果てた踵の上で、切なげによじり悶えた。

「さあて、と。おひるにしない？ テレーヌ」

「あら。皆さん、お隣りにお集まりですわ」

「なあに、書類ひろげただけで食堂行きさ」

「そうでしょうねえ。じゃ——」

「ウン。ちょっと、あんたたち、頼むわよ」

イザベルと一監の制服とは古株で、マルタ

女史と連れ立って出て行く。モレシェンヌとアンリエットは見送って肩をすくめた。

「甘やかせるんじゃないよ。いいねッ」

と、女史がふり返って念を押した。

「ワ、カッ、テ、マ、ス」

「なんだって！」

「つまり、温情を秘めて凜としてればいいんでしょ？ きびしき愛の鞭——」

「いうことだけは一人前だねえ」

アンリエットは、モレシェンヌに舌を出して見せた。

「ちえッ、威張っちゃって——。お偉方、早いとこおっぱじめないかしら。そしたら泡喰って飛んで帰るわ、フォークほうり出して」

「でも、会食するんじゃないのかしら？」

「あら、そうよね。分った。席上では上品に振舞って売り込まなきゃいけないのよ。だもんで、先に少し詰め込んでこうってわけ。あの体だもん。こらッ、一一〇号。背をまっすぐに立ててッ」

制服娘二人は椅子を引き寄せた。

「ねえ、アンリエット。うちの課長も保安課も、ずい分とポンポンどやしつけたわねえ。御覧なさいな」

モレシェンヌは小声で囁やく。

「不安と期待にふるえてるわ。いじらしくって——。励ましてやりたいくらいよ、私」

「バカね。かえってタメにならなくてよ。脚もよろよると、唇わななかせておいてやった方がいいってわけ。悶れんで貰わなきゃ」

アンリエットは椅子の背に腕と顎を乗せ、壁際に並ぶ女囚たちの後姿を平然と眺めた。

「ね、ね、ねええ。今日の合格率、当てっこしないこと？」

モレシェンヌはアキれて黙った。いくら支配者側の人間とは云え、そんなことは不遜というものだ。

「一一〇号のキャプシーヌは大丈夫ね。ほかはデータ不足。うちの五二五号はどうか。どう思う？ モレシェンヌ」

「ファルマン工場へ二、三回付添っただけなのよ。データ不足ね」

と、モレシェンヌも釣り込まれて云う。

「あのね、ルーアンの素封家の家付き娘。尻に敷かれた御亭主が女中に手を出したの。彼女、雄叫び狂っちゃって女中を責め折檻、あぐくの果てが、虐待と傷害致死で四年半というわけ」

「へーえ。で、何年勤めてるの？」

「二年と二カ月。私、あの女の収監を初めて

手伝わされたのでよく憶えてんのよ。はじめのうちは生意気で生意気で、ほんとに仕様がない女囚だったわ。でも、変れば変わるものよねえ。しおらしくなっちゃって、いまじゃ模範囚。ちよっと、これッ、五二五号ッ」

「は、はいッ——アンリエットさま」

嘗ての驕慢な家つきマダムは大柄な体をビクッとするわけ、十は年下の制服娘の声に敬意と恭順を示し、向き直ろうと膝をにじる。

「そのままでもいいったら。呼んで見ただけなんだから」

「——は、はい。すみません、はい——」

「どう？ モレシェンヌ。あの反省ぶり。矯

正は充分に行なわれたと思わない？」

「そうね。おおむね満足すべき状態ね。でもねえ、そんなマダムがああなるまでには——」

モレシェンヌは言葉を切り、深々とした眸で獄衣の背を見やったことだった。

「今日のは、まず全員パスするんじゃないかって？ スジのいいのがそろってるもの」

「そうね。じゃ、賭けにならないわ、私もそう思うもん」

ヒソヒソ話を洩れ聞いて、女囚たちの全身がホッとゆるんだ。不安と期待に満ちた身には、気休めでもいいから、薬にでも縋りつき

たい心地なのだった。

隣室では、委員たちが優雅に話し合う。広広とした部屋は、落着いた調度に整えられ、コの字形に置かれたマホガニーの会議机に、今しがた所長応接室から引き移った七名の男が陣取っていた。行刑審査委員たちは時計を気にしながら、かねて配布の資料や書類を机上にひろげ、しかつめらしく眺めた。

「もう集まってるんじゃないですか」

と、紳士の一人が眼鏡を拭き、女囚控え室からの扉に顎をしゃくろ。

「ええ。待たせてありますわ」

と、コリンヌ刑務課長がスラリと立ったまま答えた。コリンヌにして見れば、大体の様子は見ずとも分かっているが、マルタ保安課長が連絡はおろか姿も見せず、どうやら食堂へ先回りした気配なのが癪にさわっている。

そしてまた、午後の面会室のことも、いささか気になる今日のコリンヌであった。

シュバリエ老夫人は委員長——女囚が入ってくる扉に向いて中央席に陣取り、待つこと久しき瞬間を目前に見て、武者ぶるいする心地を押えかねていた。あの扉から、あの憎いミシュリーヌが哀れな姿で入ってくるのだ。そして、この私を委員長と知って驚愕すること

とだろう。見ておいで、ミシュリーヌ——。
「今日の五名は、みんな、まあまああってとこですわね」と、ブリジットが云った。

「左様——。元婦人警官と元伯爵夫人。それにエキゾティックなジャポネのお嬢さんか」
「ああら、ムッシュウ・クレマンソーたら、お目当てはキャプシーヌでしょ？ ねええ、フロレンス。彼はイササカ不正直ねえ」

「そう。御覧なさいました。派手なネクタイなんぞお召しになって。ホホホ」

クレマンソー氏はもとより、経験三年半のモントルイユ氏も照れて顎を撫で、机上の資料を仔細らしくひっくり返す。

「順番は？ いつものとおりの監舎順で行きましようね。どうお？ 皆さん——」

「そうね、マダム・オッセン。ところで、そろそろ始める？ それともおひるにする？」

「あら、もうそろっちゃってるんでしょ？」

少しでも早く始めてやったらどうかしら？」

「フロレンスたら、囚人の都合ばかり考えてやるのね。私、お腹減ったわ」

「女だてらに乘馬なんかやらかしてるからだわ。そして、朝御飯は又キなんでしょ？ あなた、此の頃肥えて来たものね」

「あら、ジュースを二杯も飲んで来たわよ。」

ムッシュウたちはどう？ 腹ごしらえしてからゆっくり吟味なさりたいわねえ。なにしろ、シヨっぱながキャプシーヌだもの、ホホホ」
「ブリジットたら、全然、お仕事に精出さないのね。二、三週間ここで鍛えて貰いなさいな。私ねえ、女囚たちが息詰めて待ってると思うと、ろくろくスーパも咽喉を通らないのよ。縛られたまま、おひるも又キで待たされるんじゃない？ 可哀想よ」

「あなたは想像力過剰ね。見ぬもの清しっていうわ。私はね、見なけりゃ平気よ。どうせどこかに繋がれて暮す女たちじゃないの」

「あらま、ブリジットは案外とやり手タイプなのね」と、オッセン夫人が髪を直す。

「そんなこと云ってる癖に、赤縞さんたちを見ちゃうとオロオロするんだものねえ」

「そ、そうなのよ。手錠かけられてシヨンボリしてるのを見ると、こんどは不憫が先に立ってしまつて——。現実派なのよね、私」

「挿絵のない御本は読まないってわけね。私なんか、眼の前に見ちゃうとシャッキリするわ」と、今度はフロレンスが巻き返した。

「知性派なのよねえ、私は。囚人の顔を面と見れば、不憫さよりも、罪を憎む気持の方が先に立つわよ、ええ」

「おやまあ、フロレンスはお父さまの跡を継いで社長になれるわねえ」

「おだてちゃダメよ、マダム・オッセン。そんなこと口走っちゃってるけどねえ、フロレンス。あんな服着せられた気持になって見たら？ こないだから腰に締めさせてる革の道具、まともに眺めたことないのよ、私は」
「へええ。道理で、あなたとこのシエパードには首環もつけてないのね。私、お訪ねするたびにハラハラしちゃってるの。鞍も手綱もなしに乘馬するといひ。私なんか、去年からの新囚人服はスゴク機能的でいいと思ってるのよ。あの服を着て、革のバンドなんかを

かけられてるのを見ると、かえって気が楽になるわ。まともな人間を相手にしてるんじゃないって——。あんな恰好させとくのが肝心なのよ。人並みの恰好させたら、それこそつけ上がってしまつて——」

「いや、これはどうも——。傾聴するに足る衣裳哲学ですな。カーライル顔負けですて」
「なんですって？ カーライル？」

「このひと、カーライルを知らないんですって。挿絵どころか、口絵グラビアのない御本は見るのもキライなのよ、フロレンスは」
ブリジットが仕返しをして肩をすくめた。

「どうなさいますか？ マダム・シュバリエ委員長」と、オッセン夫人が顎を引く。

「そうね。じゃ、今日も午後から、ということにしましょうか」

コリンヌがニヤリとし、食堂への電話を取り上げた。

「みなさん。いつも申しあげておき、審査はあらゆる角度から、厳正に、きびしく吟味して下さいませ。受刑者個人の更生も大切ですけど、社会防衛の方がより大切だと思いますわ」

シュバリエ夫人は一座を見渡した。いつもの枕言葉ながらも、今日の語調はこのほかに強かった。

「それからねえ、ちょっと申しあげておきたいんですけど——。つまり、今日の四五三号ミシュリーヌ・ダリュウという女囚なんです。が、実は私、少しばかり関係がありますの。いえ、そりゃもう、ずっと昔のことですけどね。先方は忘れていても、という程度ですよ。でも、審査は厳正な上にも厳正でなくちゃ——。ですから、四五三号のときには、私、委員長を返上しますわ。マダム・オッセンに代行して頂くということに——」

「そ、そんな四角張ったこと——。そんなに

窮屈にお考えにならないでも。ねえ皆さん」

「そうよ。伯爵夫人は昔のこと、もう相手は受刑者じゃありません？」

「マダム・シュバリエの御人格のほどは、よく存じあげておりますでな」

しかし、シュバリエ夫人は頑くなに言い張り、とどのつまり、オブザーヴァーとして参考意見を述べ、それを尊重するということでケリがついた。

ヤレヤレ、手間のかかること。おんなじことじゃないの——。

コリンヌ課長はあくびを噛み殺して苦笑いし、午餐準備完了を告げる電話が鳴った。

「ね、ねええ。ちょっと待合室を覗いて見ないこと？」とフロレンスが誘う。

「楽屋裏や女中部屋なんか、むやみにハシタなく覗くもんじゃなくてよ、フロレンス」

「自分だって見たい癖に。紳士がたは御賛成でしょ？ キャプシーヌよ！ どうお？」

「いや、あとで逢えますからな」

「予断と先入観念はいけませんで」

七名の男女は廊下で意見が分かれ、若夫人二人が、女囚控え室のドアを押した。珍しやレニエ夫人も何思ったか続いて入り、二人の男たちも強情を折って覗き込む。コリンヌが

押し分けて飛び込み、モレシェンヌとアンリエットは踵を鳴らせた。

男二人は微かに舌打ちした。五人の女囚たちは、みんなこちらに背を向けている。

背後の気配に、女囚たちは身を硬張らせ、やり切れない屈辱を味わった。

「こうして待ってるのよね。手錠もかけてあるんでしょ？」若夫人、二人が囁き合う。

「当り前だわ。でも、おひるヌキってのは可哀想じゃない？ ホントにヌキなの？」

「はあ。規則ですから——」

コリンヌ課長は顔をしかめて答えた。御覧になるとおっしゃれば拒絶は出来ぬ相手なのだが、刑務所当局としては、見せたくないところだって沢山ある。この審査待ちの女囚たちに昼食を与えないのは、連行して往復するのが面倒だからに過ぎない。

こっちの都合も確かめずに飛び込むなんて!! これだから、奥さまの世間知らずは困っちゃう。あら、腰ロープをそのままにしてるわ。マルタったら仕様ないひとねえ——。

コリンヌはもう一度舌打ちし、キャプシーヌがク、ク、と肩をふるわせ、そして、突如五二五号が上体を激しく揉んだ。

「これッ」と、アンリエットが走り寄る。

優雅なお方々は顔見合わせて扉に向った。一度は鎮まった五二五号だったが、忽ちにして再び身を揉み、後ろざまに身をねじって、床に肩を支えた。

「——おねがいでございますッ——」

と、人々の背に哀願の声を絞りあげる。

「出して下さいましッ。お、おねがい——」。

今后はもう決して——誓います。ここを、ここを出して下さいましよウ——」

若夫人たちが足を止めて振り向き、アンリエットが泡を喰った。適度に手荒く、適度にやさしく、肩を掴んで引き起こし、壁に向き直らせて押えつける。

「あとでチャンとおねがいするのッ。いまはダメ。みなさまはこれからお食事なんだからね。おとなしくお待ち申しあげるのです」

女囚は嗚咽しながら激しくうなずき、またもや身をねじて、両手を腹のあたりで合掌した。鋼鉄と革具が音を立てて軋み鳴り、アンリエットの右手が頬に飛んだ。

「神妙にしないと監舎に戻すわよ。いい？」

コリンヌが腕組みのまま冷たく云い、五二五号は悲鳴をあげて背をおのかせ、委員たちは意見の発表を差し控えたまま、扉の向うへ去ったのだった。

「どうお？ モレシエンヌ。さっきの私、慈愛溢れて威厳に満ちてたでしょ？ ホホホ」

人々を送り出して、アンリエットがモレシエンヌに威張った。

「そうね。全女囚たちの畏敬的——。胸像を建ててくれるそうよ。でも、あの女もバカねえ。そりゃまあ、我慢出来なくなった気持は分かるけど——」

五二五号は上体を突伏し、いまもお肉付き豊かな体を、三つに折って泣き出した。

「——も、もう——駄目ですわね、私——」。

どうしてあんなことを——担当さまッ、どうすれば——。ああ、もう死んでしまいたい」

「いま頃、後悔したって始まらなくてよ。

可哀想だけど大減点ね。委員の皆さま、おひる御飯がまづくなっちゃったってさ」

「アンリエットったら、そんなことを——」

「舌を噛みかねない悔みぶりね。だけど、秩序を乱す囚人は最もいけないのよ」

モレシエンヌは聞き流して、よその監舎の女囚五二五号の頬を拭いてやった。五二五号は打ち仰いで声を詰まらせ、新たな涙を溢れさせた。

「私、ちょっと詰め込んで来るわよ。いいかしら？ 大丈夫よね、モレシエンヌ」

「どうぞ。私はねえ、威厳を秘めた温愛の手で見張ってるわ」

残ったモレシエンヌは独り椅子に寄り、獄衣の背を一つ一つ眺めやった。沈黙が流れ、女囚たちが鼻を吸る。

「みんなパスできるといいわねえ」

モレシエンヌはポツリと呟き、吸りあげる鼻の音がしばし激しくなった——。

刑務所の中とは思えぬほどの特別食堂——その大テーブルの純白を囲んで、委員たちをもてなす会食が始められた。

「ま、フロレンスったら、欠食児童みたい」
「だって、早く済ませてやらなきゃ。床に脚折って待ってるのよ」

フロレンスのスープレは真先に空になる。「バカねえ。あなただけ急いだってダメよ。でも、それで気が済むんなら、一足飛びにデザートを持って来させたら？」

ブリジットの指に招かれて、給仕女が飛んできた。純白のエプロンと髪押え——右袖に縫いつけた番号布さえなければ、ちょっとしたレストランのウェイトレスだ。

「このお方にだけはどんどん持って来てね」
「バカ。気にしないでいいのよ、あんた。おや？ あんた、まだ居たの？」

「後釜をこさえてやらなきゃいけないのよ。そうしないと、鉄格子が木の扉に変わっただけで、いつまで経っても……」

ブリジットは口を押えた。うるさ方の女性三人が眸を光らせたからだ。仮釈放の実行は委員会決定後三カ月以内ということになっているし、使役女囚が不足すると、本館の連中が労働力欠乏で不自由する。だから、ブリジットの言葉は的を射ているのだ。

「だけど、ホントだよ。適当におっぱり出さなきゃつかえちゃう。ここだって、一、二、五、六の監舎は満員の盛況なんだって」「ふえる一方じゃなくて？ だいたい、考え方が根本的に間違ってるわ。拘留所や刑務所の設置となると、決まって地元が反対するし——。私考えるんだけど、今のやり方じゃ見せしめ効果ってものが全然ゼロよ。そう思わない？」

「そうね。あなたのお邸の地所を法務省に貸したら？ ホホホ。例えば、さっきの五人ね、あんな風にして珠数繋ぎにして、盛り場なんかを引き回してやったら効果絶大よね。ヘーグ協定なんて寝言だわ。あら、いけない。晒し刑は中世紀の遺物——近代社会には禁物だったわ。文明社会においては、犯罪の防止よ

りも罪人の更正ね」

「中世紀の遺物じゃありませんよ」

と、オッセン夫人が口を挟み、一切れ食べただけのオートレを下げさせ、

「晒し刑が廃止されたのは一八三三年、十九世紀もいいところなのよ」

と、博識ぶりを披露した。

「あら、ちがいましたよ」

刑務所幹部連中との会話を半ばに、こんどはレニエ夫人が割り込み、

「公式にはそうなってますけどねえ。一八五九年の冬、四人の娼婦が三日三晩、晒し台に立たされて、二人が凍え死んだという記録が残ってますわ。オルレアンでのお話です」

と、さらに該博な行刑史の蘊蓄を示した。

「いや、まったくの話、おろかなヒューマニズムは人類をスポイルしますわ。アルジェリアのゴタゴタだって——ねえ」

と、マルタ保安課長女史が、オートレの最後の一片を頬張った。

「平和、ヒューマニズム、社会福祉、基本的人権、そして、人間性とやらに基づくエロテイズム——この五つが錦の御旗ですな。浅はかなことで——。いまいましたら」

「あら、クレマンソーさまはスゴイ思想家。

見直しましたわ。じゃ、たとえば仮釈放なんて生まぬるいことには御反対なのね？」

「いや——その、つまり——」

「つまり？ ホホホ。キャプシーヌの仮釈放には反対しませんから御安心を。でも、今日の四五三号なんか、写真で見ても相当な美人ですわよ。ま、とっくりと御覧あそばせな」

「——いや、つまりですな。僕は、その——要するに、悪平等がいかに、といっとるんです。大衆は、すぐに公平、平等と来る。それが腹に据えかねますな。社会福祉、デモクラシー——要するに、弱い者勝ちの衆愚政治ですからなあ。うむ——」

「ニイチエとヒットラー万才。偉大なるフランス革命も色褪せたり——」

「黒人とアラブ民族を抹殺せよ。ついでに労働組合も——」

「ま、ま、若奥さまがた、そう興奮なさらずに——。人種的偏見はいけません。僕は常々悩んどるです。すべての人間が平等であるべきや否や、とね。ハハハ」

「平等、公平、自由——みんな幻想よ」

シュバリエ夫人が眸を光らせて割り込む。

「いいこと？ 平等な権利あるところ競争あり、競争あるところ自由なし、ですよ」

「そりゃ逆じゃありませんかねえ？ 自由あるところ平等なし、じゃないですか？」

シュバリエ夫人はモントルイユ氏をジロリと見やったのだった——。

女囚控え室でモレシエンヌは溜息を吐き、意を決して云った。

「脚を崩していいわ。楽におし」

女囚たちの背に喜びが浮び、固い床の上で十本の脚がもがいた。膝を伸ばすことは許される筈もなく、手を使えないので、横坐りも難かしい。女囚たちは両足先をひろげ、その間の床の上に尻をおろし、僅かにホッと身をゆるめた。ジャポネ娘が横坐わりの器用さを見せたが、痺れに忽ちぐらついて、隣りのミシュリーヌによろけかかる。

アンリエットが戻って来て肩をすくめた。

「あなたも掻き込んで来たらどう？ モレシエンヌ。今日は車エビのいいのがあるわ」

「ええ。でも——。じゃ、ちょっと」

モレシエンヌが去るや、アンリエットは忽ちキメつけた。

「姿勢を直してッ。なによ、甘ったれて」

女囚たちは腰をもだえ、痺れ果てた脚に呻いた。腰部を緊縛されていると痺れも早い。

「こら、四五三号ッ。こっち向いて」

ミシュリーヌは膝頭を床ににじった。

「私を憶えてるわね？」

「——は、はい。いつぞやは、いろいろとお手数かけました。ありがとう存じます——」

ミシュリーヌは唇を噛んだ。この娘看守の血も涙もない摘発にかかって外勤処遇を剝奪され、その上に重謹慎二週間を呻吟したミシュリーヌだった。

「まだ自分のやったことをいいと思って？」

「——いい、いえ。悪うございました。もう、充分に反省させて頂きました。はい——」

「そう。私ね、さっきはああ云ったけど、この五人の中じゃ、お前が一番危いと思ってるのよ。模範囚でないのはお前だけだわ」

ミシュリーヌの胸は不安におののいた。

「そんな眸で私を見ないでよ。自業自得じゃない？ 泣いたって仕様がないわよ。さ、向うむいてお祈りすることね、ホホホ」

モレシエンヌが戻って来て眼を光らせた。

「あら、ずいぶんと早飯ね。そうお、おトイレだったの。いえね、四五三号に思い出させてやってたのよ、ファルマン工場での反則。ところで、休憩時間はお仕舞いにしたわ」

二人の制服娘は睨み合い、保安課のテレヌが戻って来て、モレシエンヌも諦らめた。

保安課長女史も姿を見せ、境の扉から女の子が覗き込んだ。

——その少し前、おなじく本館ではあるが陽当りの悪い一室で、マジヨリーとイヴェットが小柄な女囚の両腕を抱えていた。そこは面会室で、女囚は三二三号ロレッタだ。

「——さ、時間よ。戻りましょう——ね」

二人の婦人看守は、やさしくロレッタを促がす。特にやかましく注意されて来た面会時間だったが、それを三分間ほど黙過してやったマジヨリーであった。もちろん、イヴェットにも異存はない。イヴェットも特に指名されて、デスク当直を引継ぐや否や同行したわけなのだが、二名の婦人看守が付添うというのも、ロレッタなればこそであった。

このロレッタは、面会するときには、大なり小なり昂ぶってしまうのだ。ことに、今日の面会の相手はウルサ方で、当局の身とすれば「要警戒」というわけなのだった。

鉄格子の向うから注ぐ眼襖を感じて、マジヨリーとイヴェットはやり切れない心地だ。その眼襖は、非難の色はもとよりのこと、軽蔑さえも浮べて制服に突き刺さっていた。そんな視線の主のお歴々は、「ロレッタを救う会」の主要メンバーだ。その会員の一人や二

人がやって来てロレッタを慰さめ励ますということは、今までも屢々あったことだった。しかし、大挙してやって来られるのは神経に触れることなので、なんとか拒んで来た当局なのだったが、とうとう抗し切れなくなったと見えて、弁護士に引率された七、八名の御婦人たちが、義憤と同情に燃えて押し寄せて来た今日なのである。

ロレッタが獄中からの再審請求も、また特別抗告も、とうに却下されていた。だから、その点ではマジヨリも気が楽だった。その却下の報らせを弁護士が持って来たときに付き添ったのは、二度ともマジヨリだった。あのときのことを思い出すと、ロレッタの無実を信じるマジヨリは、いまでも胸がつぶれる心地なのであった。

御婦人たちは「仮釈放の推進」を強調して慰さめ、手錠腰バンドも痛ましい姿にハンカチを取り出し、腰縄握る婦人看守二人に対して、筋違いの怒りを呟きさえした。

そして、マジヨリとイヴェットは、職務とは云え、やはり、小さくなくてもいたのだった。

小柄な女囚の頬を拭いてやり、通路に連れ出して扉を閉め、二人の婦人看守はホッと

した。面会室に居た間は針のムシロに坐る心地で、いま正念場に臨んでいるミシユリー又奥さまのことさえも忘れていたイヴェットであった。

「——さ、元気出して。お前のことを、多勢のひとたちが心配して下さってるんでしょ」
「——はい」ロレッタは嚙りあげた。滅多には涙を見せない彼女だが、「天使」マジヨリには心の壁を開いて見せる。

「今日は大丈夫ね？ もう、昂ぶらないと思っ
ていいわね？ お願いだから——ね」
「すみません、マジヨリさま。もう、御迷惑はかけません。なるようにしかならないんです——」女囚は嗚咽をこらえた。

「——なにかも空しいんです——私が払った犠牲が何の役にも立たないんですもの。なにひとつとして信じられませんか、もう」
「そんなこと云っちゃいけないわ。そんな風に云われると、私——悲しくて……」

「——ね、行きましょう」
と、イヴェットも声を湿らせる。
「さ、行きましょうね。早く解いてあげたいもの。今日は、お前の好きなアップルパイが出る筈よ」

「はい——すみません。あなたがただと、つ

い、甘えてしまつて——。でも——愛する夫を不意に奪われて——お葬らしいの涙も乾かない中に捕まえられて、そして——その夫を殺したのはお前だ——とキメつけられて——。どんな気持がしたことか——」

「よく分つてよ、ロレッタ。泣かないで」
「——名を呼んで頂けると——ほんとに嬉しくて嬉しくて——すみません。もう、泣きませんわ」女囚三二三号は咽喉を硬張らせた。

「——でも、子供たちは——どうして来てくれなかったのです？ どうしてかしら？ 三人とも来ないなんて——」

「きっと、手を離せない御用があったのよ。来週は来ると思うわ、きっとね——」

「——いえ、私には分つてます。やっぱり、お腹を痛めた子供たちじゃありませんもの。もう、それぞれに大きくなったし、無理もないことですわ。——でも、あの子たちさえ仕合せなら——それで嬉しいんです——」

二人の婦人看守は、小柄な体を両側から抱えるようにしながら、暗然とした。

「——そんなの、いけないことよ。お子さんたちまでも信じないなんて」

「ね。三人とも、小さいときから育てたんでしょ？ ホラ、いつだったか、自慢して話し

てくれたじゃないの。三人とも賢くて、ほんとの母親同然に慕ってくれてるって——。

大丈夫よ。最後のものだけは疑わないで」

ロレッタは沈黙して答えず、保安課のヤカマシンスカートも、そんな三人を見て見ぬふりをし、そして、地下通路で女囚が呟いた。

「——子供たちさえ仕合せに暮してくれるなら——それなら——。でも——やっぱり、この私は真犯人を探して見付け出します、この手で——。あと五年と六カ月と十四日——それだけを辛抱すればいいんです。そして、きつと見付けますわ、きつと——」

——コリンヌ刑務課長は面接室にスラリと立ち、デスクに居並ぶ委員たちとニコヤかに応待し、気を配っていた。ふと、時計を見て、隣室を覗き込む女の子を背後から制止した。今日の審査第一号が連れ込まれる前に、よもやとは思うものの、気懸りなことを確かめておきたいのだった。

コリンヌは電話を取って三監を呼んだ。

「——あ。コリンヌだけど——三二三号はどんな調子？ え？ そう。なら、よかった」と、手短かに打切ってホッとす。またぞろ逆上なんかされて、やむを得ずどうのこうのと報告されたんじゃ、さしものコリンヌと

て、やり切れない気持ちに襲われてしまう。

「——あの、課長さん」

と、フロレンス若奥さまが声をあげた。

「——三二三号で、ホラ、例の女囚でしょ？

無実を叫んでどうかって騒がれてる——」

「ええ。左様です。ちょっと——」

「ちょっと——どうしたの？」

と、ブリジット若奥さまも興味を示した。

「——いえ、その——大したことじゃありませんわ」

「あ、そうか」

と、モントルイユ氏がうなずいた。

「——御婦人がたが多勢、面会にお見えでしたな。『ロレッタを救う会』のお歴々——ジエラルディン女史も顔を見せてましたなあ」

「ああ。ジエラルディンで、あの——作家のジエラルディン？ まあ!!」

「ホント？ ちっとも気が付かなかったわ」

「——ちょっと、あなたがた」

と、シュバリエ老夫人は苦々しげだ。

「そんなことは、いまの私たちには関係ございませんことよ」

「——だって、あのロレッタのことも、広い意味からすれば私たちのお仕事じゃありません？ ねええ、ブリジット」

「私もそう思っよ。ねえ、課長さん。課長さんなんかはどうお考えかしら？ あのロレッタのこと——。無実の罪に哭いてると思いい？ それとも——。個人的な意見で結構なのよ、もちろん——」

コリンヌ刑務課長は頬を引締めた。

「お答え出来ません。残念ですけど——」

シュバリエ老夫人はもとよりのこと、二人の紳士もコリンヌの言葉にうなずいた。

「——ま、ともかくですな、情においては忍びない点もあるかとは思いますがね。だが、再審などというものは、そう軽々しくはね」

「そうですね!! いったん確定した裁判をやり直すなどということは、ほんとに大変なことですよ。そんなこととしてたらケジメがつかなくなりましてよ。そうでなくてさえ、いまの社会の乱れ方と来たら——」

「そう。レニエ奥さまのおっしゃるとおりです。そのロレッタ——いえ、三二三号囚のことで世間が騒ぐのは、言論の自由とでも申しますか、それは勝手ですよ。でも、法の権威と云いますか、裁判の重みと云いますか、そう云ったきびしさを社会の人々に示してやるのが大切です。私たちはね、軽々しく口を開くべきではありませんことよ。分る？」

「いや、マダム・シュバリエのおっしゃるとおりです。ちょっとやそっとのことで再審などとは——。ま、ロレッタさんには、或いはお気の毒かも知れんが、社会全体から見ればですな、辛抱して貰う方がね。そして、結局は、その方が彼女を生かす道ですて——」

「——あの、一言だけ——」

コリンヌが口を挟み、なにやら不平顔の若奥さまがたを眺めた。

「——問題の三二三号ですけど、あの女は一審で服罪しましたのよ。無実ならば、それを主張できる権利があったのに、自分で放棄してしまつたのです。御存知でしょうけど」

「そう。それなのよ。いいこと？ 法という

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の紹介には一切応じておりません故御諒承下さい。手紙の転送は誌上に可能と但書きしたものに限りません。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への御訪問は固くお断りいたします。御用件はすべて書面にて大阪住吉局私書箱四十一号暁出版株式会社宛へ願ひします。

○編集者へ面会をお求めの方は住所氏名職業を明記の上、お便り下されば電話番号、連絡場所等をお返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお会い出来ません。

ものはね、自ら権利を守ろうとしない者に対しては、法も守ってはやらないんだわ」

「いや、恐れ入った。マダム・オッセンは徹底していらっしゃる。……法も守ってはやらない」と云うのはチトひどいですな。ま、法も消極的になる」と云うべきですか」

「——あの、それからですね」

と、コリンヌが言い添える。

「——あの女囚は、私たちには滅多に涙を見せませんのよ。いえ、別に、それがどうのこのうというわけではありませんけど——」

「ま、いろいろなことがありますわな。再審なんかで波風立てて、いまさら黒白を争わなかつたってね——。それはそれなりに、彼女を救済してやって、償いをしてやる方法だつてありますからな」

「まあ!! 世の中って、そんなものかしら」

「有罪判決を勝ち取って、それを維持するのが検事さんたちのお仕事——でも、ひどい」

若奥さまがたは感情に走って涙ぐんだ。

「——なら、一日も早く仮釈放してやるべきじゃない? そうでしょ? むごいわ」

「そうよ、そうよ。仮釈放の儀なら、それこそ私たちの舞台だわ、ねええ——」

「あなたがた。御自分たちの立場と身分を考

えなさいな」と、オッセン夫人が叱った。

「——新聞や雑誌なんかを拾い読みしただけで判断してはいけません。私たちは、そんな軽率なことを許されない社会的地位にあるのです。常に、社会全体のことを考えなきゃ」

「ンまあ!! スゴイ自負心ですこと」

「あのね」と、シュバリエ夫人が咳払いし

「——人間の社会にはね、冷静な憎まれ役というものが必要なのよ。大衆の感傷に迎合してはいけません。茶の間の正義」だけでは社会が崩壊しますよ。そしてね——いい? 三二三号囚からは仮釈放嘆願書が提出されて

いないのです。私たちがタッチする段階ではありません。——それにね、犠牲というものはね、うわべは空しく見えても、必ず役に立っているものです」

と、締めくくつたのであった。

「——では、初めましょう。一一〇号ね?」

コリンヌが髪を直して合図し、女の子は欠伸を抑えながら、再び、女囚控え室を覗き込んだ。

「一一〇号をお願いします。入れて頂戴な」

キャプシーヌがビクリと慄え、女囚たちの腰から、ロープが解かれて抜き取られた。

(未完)

S・Mカメラ・ハント

／＼芝 梨枝子の巻

快 楽 の 紋 章

辻 村 隆

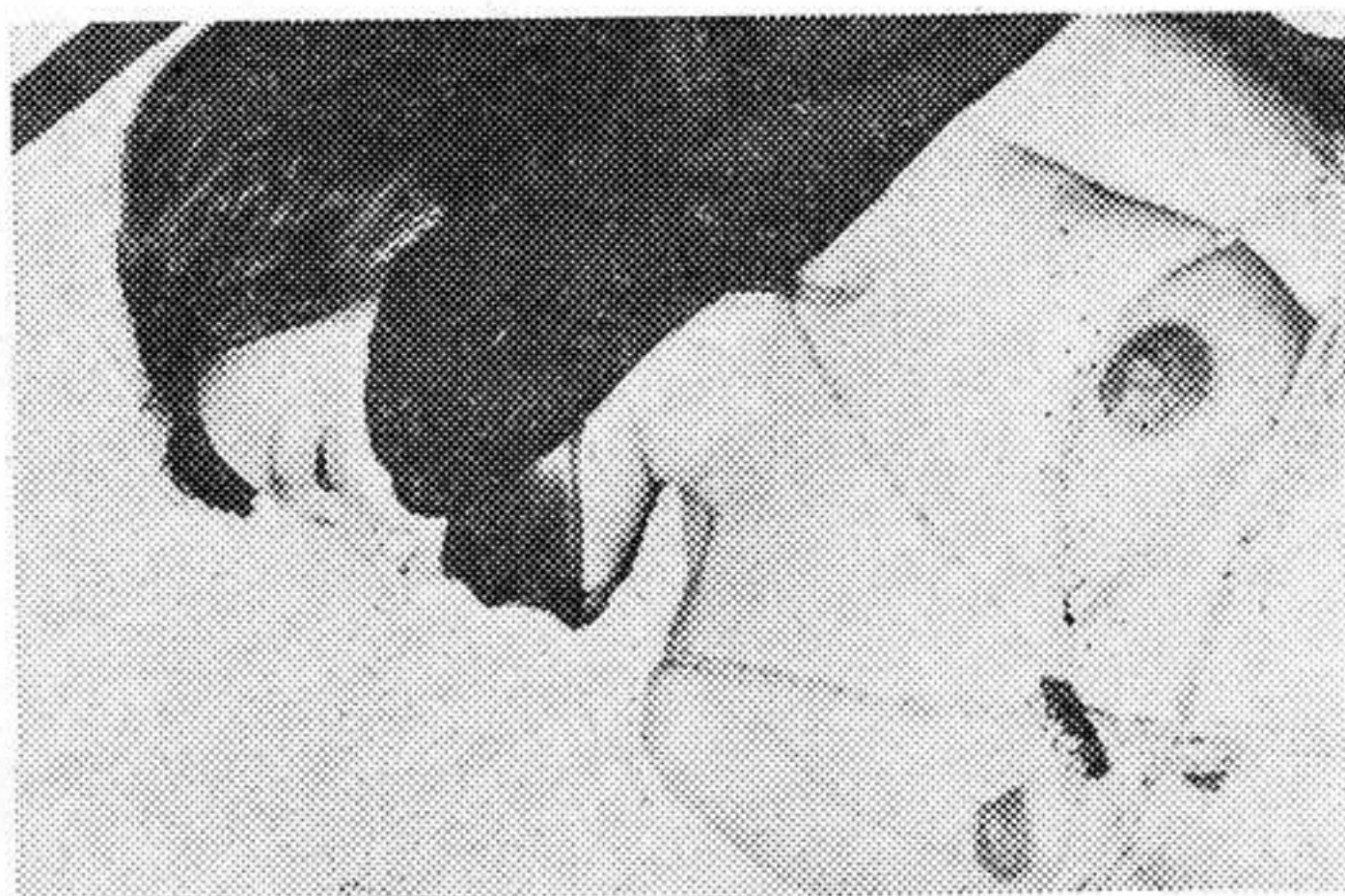
不快指数は高い。うだるような猛暑が今日も続いている。

七月二十五日——その日、私は、阪急神戸線の夙川駅で支線に乗換え、苦楽園口で降りると、流れ出る汗を拭いもならず、右手には黒のバッグ、左手にしわくちゃになったメモの地図を頼りに、日盛りの乾ききったアス

ファルトの道を辿っていった。

東京のK氏に、かなり以前紹介してもらった山田氏（関西の財界では有名な方なので、山田氏と仮称しておこう）の別宅を、やっと訪問する気になったのである。

山田氏の本宅は神戸の御影にあって、造船関係の大会社の会長さんである。現在は第一



線から引退されて、悠々自適の生活をされているが、戦後のあの混乱時代、辣腕を謳われた方であった。

満地谷近くの、この別邸は、財界仲間やゴルフ友達なんかと、時々会食されたり、秘かな愉しみに耽けられる、謂わば山田氏の息抜き憩いの場とも言うべきものであった。

K氏に紹介されたものの、何しろ相手が余りにも大物すぎて、無位無冠の私如き、到底相手にもして貰えぬ存在と、勝手に独り合点して敬遠していたら、先日K氏の便りで、山田氏が私との会合を希んでいるが、辻村隆から全然何の音沙汰もないと言っておられるとの事であった。それ程までに若輩の私如きものに興味をお持ちなら、会わずにいるのも失礼に当ると、神戸のK造船に三度許りお電話したが、いつも会議中か御不在。思い切つて、電話帳で調べた御影の本宅へ夜お電話したら、やっと山田氏じきじきのお声がきかれた。

「私が恐るおそる、辻村隆であると名乗ると、一寸考えておられたが、

「ああ、辻村君——例のオ・モ・シ・ロイ人だね。

東京のK氏から折々は噂をきいていましたよ。こちら（御影）の方は何だから夙川の方へ是非来て呉れ給え。一席設けようじゃないか。なるべく車を使わないで来給えよ。帰りには送らせるからね。待っていますよ。日はいつでもいい、ワシの方で都合つけるからね」

という御返事であった。

私は日程を素早く調べて、七月二十五日に

お伺いすることを約した。

「ウン、何曜日になるかね。えッ火曜日、いいじゃろう。閑職のワシじゃし、暑い折柄、うんざりしとるんで、ひとつ暑氣払いをやらかすかね」

圧倒されて、ハイ、ハイと電話で専ら頭を下げている私は、最後に肝心の要点のみ、喰い入っておいた。

「それで、K氏のお話によると、ハント用のモデルになる方を、沢山御存知ときいておりました、その点は？」

「ああ、その方かね。心得ていますよ。じゃあ、いづれ」

未だ聞きたいこともあったのに、電話は先方から切れてしまった。

訪問の時間、持参するもの、その日の構成など、SM的なことに関して、ききたいことは一杯あったのに。唯、心得ているという、その一言で山田氏はあっさり片付けられてしまった。電話口でクドクド言わなくても、面接の相手が、私であるとすれば、自ずから、その日のやることぐらい、彼自身とくに承知のことらしかった。

西宮市での高級住宅地帯、芦屋にも匹敵する、この夙川の苦楽園一帯は、どっしりした

大邸宅が多かった。

目指す、山田氏の別邸は、それらの大邸宅に比して、小じんまりしていたが、瀟洒な和洋折衷の、閑静な構えであった。表札は唯、山田寓とのみあった。

正面入口の、立派な両開の鉄をうった厚い扉は、日頃は滅多に使わないのか、仕切垣で囲まれている。玄関の扉を挟んで向って左手に石垣を削って作ったらしいシャッターのガレージ、右側に潜り戸の入口。潜り戸のわきにインターホンがあった。ボタンを押す。電源が入って、

「誰方様でございますか？」

女の声が伝わって来た。

「辻村というものですが……」

「御苦勞様でございます。すぐお開け致しますから」

ちゃんと聞いていたらしい。人の氣配を彼方に感じて潜り戸が開いた。

三十七、八の、眼を瞞るような淑やかな臍たけた美人が私に微笑みかけた。

「どうぞ、こちらの方へ」

植込みを縫って、邸宅をぐるりと廻り、廊下伝いの離れ屋に案内された。前栽の配置が無風流の私と雖ども、判然とする手のこみよ

うである。一木一石に万金が投ぜられてあることは想像に難くなかった。

和室造りの部屋であつたが、一步部屋に踏み入れると、スーッと全身に冷氣が流れた。どこかに隠しクーラーがとりつけられているに違いない。

「御本宅から、こちらへお見えになりますまで、御自由にお過し下さいとの、おことづけでございます。どうぞお氣楽になさって下さいませ」

女性はそういつて立上ると、間もなく、大きな盆の上に、ビール数本と、大皿のオードブル、洋酒瓶、おしぼりなどのせて運んできた。洋酒は樽にはきいたことのある、ナポレオンという横文字が読まれた。

女性は手なれた手附きでビールの栓をぬくと、さあ、どうぞと奨めて、瓶を傾けた。誘われて私はコップを差出す。

「会長様がお見えになるまで、およろしければお酌いたしましょうか」

「いいえ結構です。私自分でやりますから。失礼ですが、ここは貴女お一人？」

「ええ、まあ今の処、私だけでございます」

「広いので大変でしょう」

「一週間に三度、ハウス・キーパーのような

方が来られて、午前中片付けてゆかれます」

この女性は、或いは会長の囲い者であるのかも知れない。が、それにしても水商売上りらしい風情もなく、至極端麗で上品だった。

「今日は私一人なんですか」

「いいえ、若い女の方が見えてられますよ」

「どこに？」

うっかり言って、ハッとした。無粋なきき方である。

「なんなら、御案内しましょうか？」

女性は訳を知っているらしく、刹那淫らな笑みがよぎったが、忽ち元の素顔に戻っていた。

「構わないでしょうか」

「ええ、いずれのちほど会長さまが御紹介なさいますでしょうが……」

女性は立ち上って、私に目顔で、ついてくるよういった。

渡り廊下を通って本家の棟に入り、風鈴のそよと微かに響くのを耳にし乍ら、突き当りの階段を昇っていった。二階はどっしりとした洋風造らえの居間が、独立していくつかあった。

「この部屋におられますわ」

女性は扉を指さすと、そこを素通りして、

つと、その隣側の物置めいた部屋に入った。

カーテンで廊下との仕切りがしてあるのみでリノタイルがしきつめてあって、ゴルフ道具や、折たたみ机、什器などのダンボール箱、折たたみの椅子などが、その周囲をしめていた。その折たたみ椅子の並んでいる壁の中間に、二、三の油絵が、やや古びて宙ぶらりんにぶら下げられてある。

女性は黙って、その油絵の一つを横手にずり開いた。

三十センチ四方ぐらいの、マジックミラーがそこにあつた。

女性は私に視線を送ると、心なしか頬を赤らめていた。眼顔で私に覗くように合図した。そこに、明るいアトリエ風の応接間が、マジックミラーの彼方に開けていた。或る種のときめきを覚えて、私は近々とミラーに顔をよせる。

応接間のソファアに、髪を無造作に垂らした、若い娘がひとり、仰向けに長々とねそべって、かざすようにした週刊誌を、見るともなく無心に眺めているのが、私の網膜にありありと灼きついた。

二十才前後だろうか、広いひたいや、澄んだまなざしに、私は関連もなく、女子大生を



ろうか。激しい興味がモクモクと湧き上ってくるのを覚える。これが覗き見のダイゴ味なのであろうか。

「ああして、ハダカになるよう命じてあるんですね」

「ええ、ここへ呼ばれるヒトは、一様にそういう風に命じられているようでございます」

私の視野の彼方の、若い娘は、時間を持て余すように、バタリと週刊誌を落すと、小さく欠伸をした。ううんとノビをする様に両手を

連想した。かたい体の線はくずれもなく、清純な化粧のない顔付に、心なしか危惧と不安の交錯のかけが流れていた。

ソファの前の円型テーブルの上に、喰べ終った俵の食器具がその俵残されており、ジュースの瓶やコップもその俵になっていた。

「少しの間、いいのでしょうか？」

「ええ、構わないと思いますわ」

「すごく興味がありますね。しばらく観察していただけますよ」

女性は声をこらえて、微笑をくずした。以前にもこの様な経験を誰かにさせているのだ

ここで、どのような淫靡なケースが繰り返されているのだろうか。私の想念は果てしもなく拡大していった。

女性は右手でささえていた絵をもとのように直した。このミラーの彼方での、若い娘達の、赤裸々な行動が、手にとるように見える

のだが、誰が覗くのだろう。会長か、将又、招かれた客か、それともこの女性だろうか。すべての部屋は、防音装置になっているのか、女性はさして音を忍ばせず、ごく自然に行動していた。

私はいささか毒気を抜かれて、元の部屋に戻った。女性はつつましく一礼すると、部屋を退いていった。

謎めいた閑静な別邸で唯一人、私はオードブルをつまみ乍ら、妖しい思索に沈潜していた。

× × ×

心持ち酔いが廻ったような気がする。

道路に面した彼方で、クラクションの音。閑静さが破られて、母屋の方に人の気配を感じ、私は会長の到着を察した。

女性が御影の方に私の来訪を連絡し、会長のおでましとなったに違いなかった。

私は緊張と尿意を覚えた。相手が大物だけに威圧されそうな息苦しさを感じる。とはいえ私と会長の間には、何の損得も貸借もない、謂わば単なる同好の士に過ぎない筈ではないか。彼が私に興味を持ち、私がそれに応じただけのことである。唯一つ、借りといえば、今日のカメラ・ハントの女性が私のハントに

よるものではなく、会長の贈りものという一点であった。その一点が、辻村隆という自称SMのプレイボーイにとっては、最大のハンディになっていることは確かであった。

「やあ、お待たせしました。辻村君ですネ」

「ハア、どうも、勝手に頂戴しております。」

「ついお言葉に甘えまして」

「待っていただいて当然ですよ。ところで、

君、ずい分女の子を撮りましたネ。本をよんで羨ましく思っていたが、今日はその方法をひとつ御伝授願おうと思つてね」

「とんでもない、殆どフィクションですよ。

私はこの様にお見掛け通りの、到って平凡な男でして」

「いや、御謙遜——。ワシも十数年来、かなりのオナゴを、君流にいうと、ハントしたわけじゃが、生来の無器用で、よう筆にしよう。まあ、お互いに胸衿を開いて語り合ひましょうや」

会長は呵々一笑した。酒類は余りたしなまないらしく、私のおつき合いに、ビールをコップに注いだが、一寸口をつけただけであつた。六十年配とみたが、貫録と栄養の足った若々しさがそうみせるのか、実際はもう少し上かも知れない。一見好々爺めいたおだやか

さの奥に、秘めた激しさがチラリと時々ひらめく。長い交友中にも、私の同好の範疇に、山田氏のようなタイプの人はなかった。とあれ、会長自身にしても、彼のハイド氏の面を覗かせた、辻村隆個人との初対面であつた。徐々に私は会長が、単なるSM同好者の一人に思え出して来たから不思議である。

「会長のプレイへの御趣味はどの様な」

「そう、ワシの好きなことと言えば、全然M気もS気もない、こんな遊びは何にも知らんオナゴをいじめて見ることだな。一種の回春剤じゃよ」

「最初はびっくりするでしょうね」

「勿論、泣く奴もいるさ。それが又愉快なんじゃね。おとなしく、待っていた様に縛らせるヤツは興味がうすい」

「どうして次々とハントしてくるんです？」

「宴会でフラリとワシ自身が、出掛けて口説く折もあるし、秘書課長が心得て口説いてきてくれることもある」

「そううまくゆきますか」

「君のハントも毎月、うまくいってるとるじゃろう。だから案外いけるもんじゃよ」

「だけど、私のハントは、書いていないものにずい分失敗がありますよ」

「それはワシにもいえることじゃよ。あつたていいじゃないか。それがハントの愉しさといえるんじゃないかね」

「会長は、娘をここへ呼びよせる時は、いつもハダカにしておくんですネ」

「誰がいった、そんなこと」

「さきほど、ちよいと覗かせてもらいましたよ」

「あの出しゃばり女の仕業じゃな。今夜は又うんと仕置せにやいかん」

「許して上げて下さいよ」

「心配せんでええ。あいつはああして、ワシに仕置されるタネをつくつとるんじゃよ。それがワシの一番喜ぶ時だと知っている。ニクイ奴じゃよ」

「あの人は会長のさんのいい人なんでしょう」

「飼いの殺しの奴隷だよ。金をやるから仕事をするか、くにへ帰れと言っても帰りよらん。ワシに虐められて喜んでおる」

「そう飼育したのでしょう」

「ハハ、飼育かね。かも知れんな」

磊落な会長だった。ざくばらんで、ちっとも飾り気がなくて、私にとっては快よかった。ズバリと聞いても眉をしかめない処が太ッ腹であつた。

「君は、ズケズケと言う方だね。ワシの知つとる君ぐらいの連中は、皆遠慮しおって、言いたいことを言いおらん。Kより連絡があったが、君はやはり面白い男だよ」

「立場が違うからですよ。同好者同志なら年令に関係なく一対一ですものね。私はどんな地位の人と話しても、プレイ以外は、相手を利用したり、コネをつくったりしませんから、御安心下さい。SMのプレイ仲間というだけで嬉しいんです。それだけのことです」

「それぞれ、そういう処が面白い。勿論わしだって、君と知合いになったからといって、君が僕に借金を申込んででも鉦一文出しゃない。何もやらないよ」

「考えてもいませんよ」

「よしよし、それじゃそろそろ、君のプレイ振りを拝見するとするか。今オナゴを連れてくるからね。勝手に縛って、好きな様にすればよろしい。僕は君のプレイ振りを見乍ら、ビデオを撮ることにするよ」

会長は卓上の小さい呼鈴を振った。さきほどの女性が現われると

「あの娘を連れて来なさい。ああ、それからビデオの準備をしておきなさい」

そう命じて、ゆっくり葉巻を啜えた。

「会長——、モデルはどんな素性の子なんです」と私は訊く。

「僕もしつとりやせん。今日始めてのオナゴなんじゃよ。わしの秘書の男が、辻村君のために探して来てくれたんだよ」

「じゃあ、モデルというような娘じゃなく、あるいはズブの何も知らぬ子かも知れませんね」

「ウン、そうかも知れんね。辻村君に興味が湧いて、ききたければきいてもよろしい。ききたくなければ、何処の馬の骨とも分らぬヒトリのオナゴとして扱えばいいじゃないか」

「そうします。ところで何処で撮るのでしょうか」

「隣の居間だよ。それとも何なら応接間へでも行くかね」

「いや、どこだっていいんです」

「隣の間なら、少し細工してあるから、いろいろと出来るよ」

会長の意味あり気な言葉だった。

「お連れしました」

くだんの女性が、つつましかにしらせに来了。

「よしよし、じゃあ、呼ぶまで下っていなさい」

会長は鷹揚に腰を上げると、境いの唐紙を開いた。

何の変哲もない、これと言った飾りも調度もない居間であったがフォートを撮った場合、それとすぐ分る特徴らしきもののうつるのを避けるための、わざと一見して平凡な居間にしつらえた会長の深い配慮が、何となく読みとれる思いであった。会長について居間に入っていく。

勝手馴れたように、会長は境の壁のはめ込みのスイッチを押した。パツと部屋中が、平均した明るさで、万遍なく照らし出された。三百ワットぐらいであろうか。ストロボなしでは少し暗い感じだが、強いて撮れぬこともない明るさであった。

娘は全裸のまま、部屋の片隅でうなだれて正座していた。眼隠しをされて、両手を後ろに廻しているのは、あるいは手首だけを縛り合わされているのかも知れなかった。人の気配で娘はギクツとしたように首を上げ、肩をこころもち震わせた。眼隠しされた暗黒の中の、これから行われる未知への、いい知れぬ恐怖が、彼女の琴線を震わせたのだろう。

床の間横の押入れまがいの唐紙を会長は両方に開いた。そこには一杯に大きい鏡がはめ

こまれてあって、プレイを助長するように反射して、背面の彼女の後手がありありと写し出されていた。

「辻村君、あれがビデオなんだ。大相撲なんかで、よく使っているだろう。テープによって、その場の有様が、すぐさま録画、録音されて再生出来るんだよ」

会長の指さした片隅の座敷机に、ビデオの器械一式がのっていた。

ビデオの本体はかなり大きく、一見して大型のテープレコーダーのような形態である。それにモニタテレビとビデオカメラが雑多な線によって繋がれている。

会長はどっかと座敷机の正面に坐ると、ビデオテープレコーダーの蓋をとった。普通のテープのリールにくらべて、倍ぐらいも太いテープが巻かれてある。その前面に棒状のマイクがこちらを向いていた。

会長はカメラを手にとり上げると、軽くフリンダーをのぞき、パチリとカメラにスイッチを入れた。録画のボタンを押してから、しばらく受像機をみつめていたが、

「じゃあ、辻村君、始め給え——」

その声は部下に命令する口調であった。始めよと仰言っても仕事をするわけではない。

プレイにはプレイのルールがあつて、そこにおのずからプレイのムードが漂わなくてはビジネス的に割切れるものではない。私は急にムカムカツとして来た。私は彼の部下ではない。少くともSM的な面でなら、むしろ会長よりは場数も踏み、その方では対等であった筈だ。何もモデルを提供されたからといって、ペコペコして、会長のいいなりになって始める必要はないのだ。えらい奴というものは、案外こんな僅かな人情の機微が分らぬものらしい。私は向う腹が立って、黙った儘で突っ立っていた。

秘書や庇護をうけている愛人ならそれも通用しようが、無位無官とはいえ、何の恩恵も受けていない私が、易々としてヘイコラ言われる俚にやる必要がどこにあるか。それでは私の矜持が許さない。

「始めないのかね？」

「何からやるんです」

つい私の声は尖っていた。出ようによっては、この儘、席を蹴って帰る気でいたのだ。

寸時、気拙い沈黙が流れた。

「そうだね、無理だね。じゃあ、

しばらく辻村君に時を藉そう。よろしくやり給え。僕はちょっと一風呂浴びてくるからね」

流石に老獺な会長だった。私の突きさすようなまなじりの出鼻をさっさとかわして、よしよしと立上ると、さっさと居間を出てしまった。

私が、彼女にどの様に接し、プレイして行くかという、その過程を、一部始終ビデオに納める腹らしかったが、その意図は私の強い態度で脆くも挫けたようであった。

これからプレイを始めようとする間際になつて、腹を立てる馬鹿もあるまい。それを腹を立てるところが、私の未だ未だ若いとこ



のかも知れない。私にとってのもう一つの不満は、モデルになる女性の意志を全然無視してしまつて、一方的にコトを運ぼうとするやり方だった。秘密パーティや、会員制度のプレイゲーム会ならそれもよからうが、ここには私と女との一対一が残されているのみであつた。私の不満以上に、彼女自身にとつてもこの何者とも知れぬ私に、種々緊縛を加えられるのは不安に思うのではなからうか。先ずプレイ以前の問題として、この違和感をなくさなくては、愉しいプレイの雰囲気など成立するものではない。逸早く咄嗟にそれを察して会長は席を外したのかも知れなかった。

大人気なく尖つた私が急にチツポケな人間に感じられて来た。私の心は徐々に平静に戻つた。

私は静かに娘に近づいて、そつと眼隠しを外してやつた。明るい灯火の下に曝されて、未知の私の前に全裸を余すところなくさらけ出した彼女は、私の視線を真ともに受けて、たじろぐように腰をくねらせて頬を染めた。理智的な眸が羞らうようにまたいた。

「私一人だよ」

娘はうなずいた。会長との先刻来のやりとりを、娘の耳は全身でうけとめていたに違ひ

なかつた。

「私は辻村隆——、会長さんの御招待をうけて、あなたを撮ることになったんだけど、承知なんですね」

「……」

彼女はためらい乍ら、無言で微かにうなずく。

「何て呼べばいいの？」

「シバリエコ……」

「縛り？」

「芝生の芝なんです。名前はくだものの梨と枝と子」

「ああ、芝梨枝子さん——いい名だね。そうだ、後ろ手の縄をとこうか？」

「苦しくありませんから構いません」

「会長さんのこと知っているの？」

「全然……。お友達にいいアルバイトあるって誘われたものですから」

「学生なんだね」

「絵の方なんです。」

「アルバイトの意味を知っていたの？」

「うすうすは……。モデルって聞いたから、

絵の方かと思ったのですけど……」

「それで、来るなりいきなり裸になつても、さして驚かなかつたんだね」

「……」

彼女はコクリと又うなずいた。会長のことだ、恐らくアルバイトという名目で、金に糸目をつけず、万金を積んで、フレッシュな娘を探し出させたに違ひない。彼女も覚悟の上だろうが、SMのプレイの真相は、ある程度説明しておかざるまい。

「これから私達のやること分つてゐるの？」

「いいえ、存じませんわ。けれど多分、ヌードをお撮しになるんでしょう」

「単なるヌードじゃないんだ。ヌードプラスアルファがあるんだよ。そのアルファとは、今、君が後手に縛られているだろう。そうした行為の、もう少しきつい程度。きつく縛るから緊縛というのだが、あるいは、縛って少しぐらいは責めるかも知れない」

「そんなことなんですね。アルバイトのヌードモデルにしては、少しよすぎると思ひましたわ」

「じゃあ承知なんだね」

「乗リかかった船ですわ。今更引き下れませんもの」

「じゃあ、始めよう」

「会長さん、お呼びしないと悪いでしょう」
「なあに、すぐお出でだよ。おそらくは、私

と君とのやりとりは、先刻御承知でしょう」
私は既に、前面一杯に開かれてある鏡が、マジックミラーであることにらんでいた。あっさり引き下った会長の腹の裏にある、何かの魂胆が読めていた。

私は鏡に向ってニタリと笑い掛けた。ニタリとした私の顔が鏡にその俤うつっているがその裏の会長に、私の呼びかけはおそらく通じていると推察した。

兎も角持参した、愛用のだんだら紐をバッグから引出し、カメラを装填すると三脚に据えつけ、レリーズを伸ばした。電池式の自動カメラだから、足でレリーズを踏むだけで、次々とフィルムを送ってくれる。

縄をとり上げて、芝梨枝子に近づいた。流石に刹那、緊張の色が彼女の表情をよぎって流れた。

「縛られるなんて始めてだろ」

「勿論、始めてだわ」

「うんと、きつく縛ってやる」

「覚悟の上だけど、お手柔らかにね」

私と芝梨枝子の間には、心の交流がなかった。芝梨枝子は高価なアルバイトにつられてここを訪れ、私は会長の同好者という親誼で数分前までは未知であった女性を、事務的に

縛ろうとしている。心の通い合う筈がなかった。私の心はSMに割り切りつつあった。

縄を握って、正に後手に縛り始めようとした時、会長が音もなく這入って来た。振返る私にニヤリと笑って、ビデオの前にどっかと腰をおとし、しきりにモニタテレビの画像に見入っていた。あの九寸のテレビの画面に、私達二人の姿が、まざまざと写し出されているに違いなかった。菓子箱程度の大きさの、テレビカメラのレンズが、ピタリと私達に狙いをつけていたのだ。

無雑作に真中から分けた髪はパーマのあともなく、やや広いひたいと眼許に南田洋子の若かりし頃のおもかげがあった。白いかた肥りの弾力性のある肌は、コリコリとして、運動をした健康な女性特有の、若さと堅さに溢れている。

彼女は神妙で協力的であった。私の縄にあがらなくても、かなり強くしめあげた後手縛りにも無言で耐えていた。肩から胸へ廻して順次しめつけて縛ってゆく、その間にも、折々、私の踏む球の彼方で、ストロボの閃光がきらめいていた。

会長の方に眼をやると、無言でうなずいて頬が崩れた。満足している証左であろうか。

彼は私を手招いた。近づく、黙って、懐ろから、黒いなめし皮の猿轡をとり出して、私に差出す。これを使えというのか。

「猿轡をするんですね」

会長はうなずいたが、パチンとビデオのスイッチを切った。

「そうだよ、わしの感覚では、猿轡をしないと全然気分がのらないんじゃないよ。わしのプレイの必須条件というやつかな。口中に何か適当に押し込んでやってくれ給え。そうだ、こんなものもいい、これを少々いやがっても無理に押しこんでくれ給え」

会長は袂から薄汚れたハンカチをとり出した。しわくちゃになったハンカチが、あちこち固くこわばっていた。鼻かみ用に使うハンカチに違いなかった。

若い女への征服慾と、与える屈辱感というものが会長の趣味なのであろうか。ハンカチを押し込んだ場合、彼女の唾液にとけて、シオっぱい感触が、じわじわと口中一杯に拡がってゆくことだろう。

私は女の方へ引返した。それを握って――。既に彼女は、私に半ば緊縛された体をあえがせてかがみ込んでいた。

会長の要望に応えるべく、私は彼女の髪を

毛を握ると、ぐいと顔を持ち上げた。つぶった尻に諦観の念が走っていた。

腕で顔を抱え込むようにして、可憐な口許に手をかけると、ぐいとこじあけるように唇を開かせる。真赤な、のどちんこがペラペラと口腔の奥で慄えていた。汚穢にまみれたハシカチを素早く口中へ押し込むと、その上から、黒革の猿轡をきつく締め、ぼんのくぼで尾錠をかける。かん骨が突き出て、豊かな頬がそそけて硬ばった。

ハンカチの味が口の中ににじみ始めたのか、芝梨枝子は眉をしかめ、苦悶の形相に変わり、必死にそれを吐き出そうと、果敢ない抵抗をこころみていた。単なる形式的な猿轡には見られない、抵抗の形相がありありとあった。それが会長の嗜虐を満喫せしめたことはいうまでもなかった。

私の縄のプレイは一時断絶していたが、氣をとり直して、体に纏わりついた余剰の縄を捌き始める。胸の中心で、新たに別の縄となぎ、それは股下を潜って双臀にわけ入り、ぐいと背で引き上げる。ウエストからヒップにかけて、ぎりぎり縄でしめつけて行く。縄で挟まれた乳房が大きく盛り上って張り切っていた。乳首が心持ちくろずんでいるの

が氣に掛った。女子大生といえども、それは処女の代名詞ではあるまい。私はその乳の色に芝梨枝子の体に男を知った。しかし仮に彼女が男を知った体であったとはいえ、この私とは何の関係があるというのか。ここには単なるプレイヤーとモデルとのみの関連しか存在していないのではなからうか。関心をもって詮索してみたとして、それはプレイをエンジョイする何ものにもなり得ないことだった。

猿轡の口辺がしきりに動き、芝梨枝子は苦悶の眉根をよせて、何か訴えたげに歪んだ。思いもかけぬ成行に、彼女は何かを訴えたかったのだらう。

会長はさも愉しげに両手を大きく組んで、私達をひたすらに見守っていた。Sの狂血が体内で急激に泡立ち始めた。どの様にSを求道しようとしても、その責任は会長がもつてくれることだらう。しからばと、私は会長を喜ばすためにも、ひとつは私自身の荒れ始めたSの欲求をみたすためにも、かなり残酷に振舞いたくなって来た。

私はその場に芝梨枝子を縄尻を曳いて押し転がした。二の腕をきりきりとしめつけて、かなり上まで引き絞った後手の緊縛は、彼女自身の体重を受けて、たたみと体重の境界で

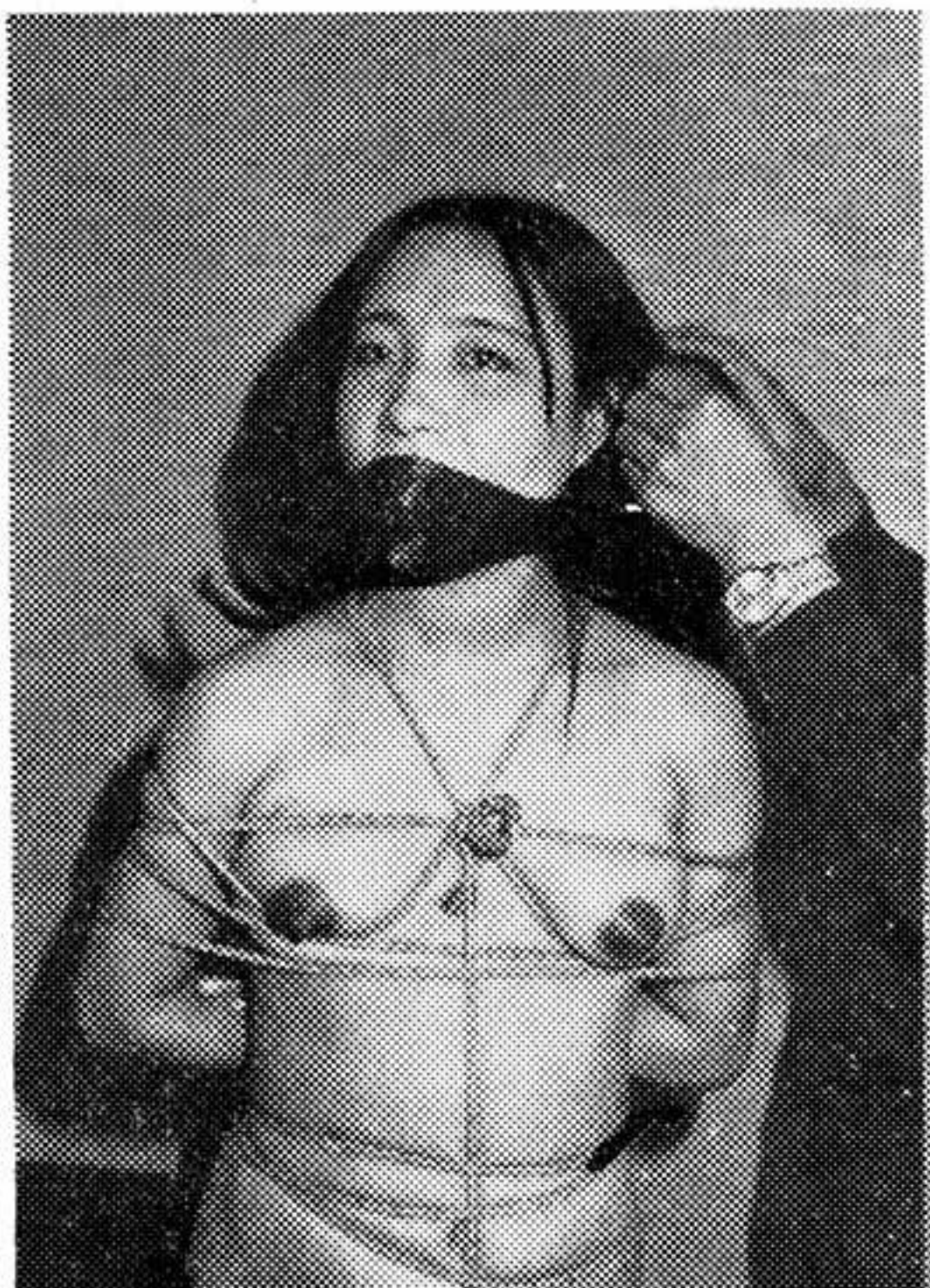
ひしめいてうずいた。体をぐいと反り上げて弯曲させ、両手の痛みをこらえようと、彼女は果敢ない運動を始める。私の容赦ない片足は、ぐいとその腹部を押えつけ、足は移動して、白磁の顔を力まかせに踏みこじつけた。

ごりごりと、顔の半面を押しつけてたたみにこすりつける。声にならぬ呻きが洩れて、彼女は身をよじって悶えた。

黒髪を驚攔みにすると、ズルズルと引曳り廻してゆく。私の視野のどこかに、それをねらって移動するカメラのレンズが、私のこの粗野な強烈な動作を的確にとらえているのが汲みとれた。

黒髪を離すと、藻と乱れて頭は鈍い音をたててたたみに落ちた。ほっと一息つくと、私は、女体を足で蹴り乍ら転がし始めた、二、三回転して、女の二の腕の縄の深みは、陥没して、皮肉にじんと喰い込んで、みるも無惨に痛々しげにねじれていた。

私はチラッと会長を見た。彼は顎を突き出して、もっとやれという動作を示した。いいのだらうか。さらばよし――。私は芝梨枝子の乳の黒ずみの証左を、更にこの眼で確かめたい衝動にかられた。愛用の太いだん



だらの縄をとり上げて、彼女の膝に巻きつけると、仰向いた俣の体の背を通して、一方の足にぐいと引き絞って巻きつけていった。両足が高くかかげられて、女の羞恥の体位があらさまに、そこに現出した。股間縛りの一本の縄が、その谷間に痛々しく喰い込んでいく。私は二度三度、縄先で、軽く臀部の辺りを打擲した。ピクッピクッとその都度、体はケイレンした様に、ビリビリ動いた。

会長がボンとものさしの様な竹べらを投げてよこした。これで打てという意だろう。パチリと、振りおろすという音がして、太

腿の裏が薄赤く染まった。ひとつの緊縛に始まった連続プレイが、もう三十分近くもつづいている。とことんまで責めてみたい衝動がしきりに突き上げてくる。その原因の帰する処は、始めて逢って、一度限りでもう赤の他人となるこの女に、ゆきずりに似た無責任の感情が、この様な残酷なプレイへと駆り立てているようであった。私は彼女の頭の方へ立ちかだかつて、宙に浮き足だっている両足を振り、ぐんと力任せに弯曲した。ウウンと激しい呻きがもれて、彼女の顔は赤く染まっていった。豊かな双臀が天井を向いて屹立して

いた。ぐるりと廻して一回転させた拍子に運悪く、長尺リリースが、彼女の体の下になり、回転と共に引っ張られて、そのはずみで、呀っと思う間もなく、ドサソソと大きな音を立てて三脚が倒れた。失敗ったノと思っただが後の祭りであった。ショックをうけたカメラは三脚にとりついた俣横倒しになっていたが、ストロボは線が千切れて、数米先ま

で転がっていた。一瞬の不幸な出来事であったが、私自身の夢中のプレイが、思わず惹起した事故であれば誰も恨めなかった。

私は慌てて彼女の両脚をはなすなり、カメラにかけよって、その安否を確かめてみた。幸いレンズも破損なく、カメラは、どうやら無事のものであったが、ストロボの方はコンデンサの故障か、それとも破壊したのか、私の再三の点検にもかかわらず閃光しなくなっていた。

会長もこの咄嗟の不測の事故に、少し驚いた様であった。ビデオのスイッチを切ると、

「辻村君、大丈夫かい——」

と私の傍らに近寄って来た。

「夢中だったものですから、リリースが体の下になって引っ張られたのに気付かなかったのです。多分いけると思います」

「まあ、そうハッスルすることもないよ。じゃあ、ここで一度、解放してやり給え」

会長の言葉は、いつしか命令調になっている。私もそろそろ汐時と思っていたから、大急ぎで彼女を解き放してやった。

口中からとり出したハンカチは、ぐっしょりと唾液で濡れきっていた。私は指先でさも汚なそうにつまみ上げて、その捨場所に困っ

ていると、

「辻村君、それをここへ持って来給え」

と、会長の声が響いた。

「構わないんですか、机の上におきますよ」

「ああ、いいよ」

どうするつもりなんだろう。これをその俣乾かして、又次のハントの女の口中へでも押しこむつもりなのか――。

芝梨枝子は全身縄目痕で染め上げられた体を、あちこちさすっていたが、私の行為に対しては一言も言わなかった。肯定しているのだろうか。会長はその彼女に向って、初めて自分の方から声をかけた。

「どうかね君、もう少し痛い思いをさせてやろうかね。辻村君も物足りないだろう」

女は顔をあげた。屈辱が蘇がえって来た顔付であったが、がっくりした様に、ボソボソと応えた。

「こんな非道い目にあったこと生れて始めてですわ。でもお二人共おのぞみなら己むを得ませんわ」

「ハハ、君、この場限りだよ。じゃあ、もう少しいいんだネ。辻村君、これを使ってみたらどうかね」

会長は又ぞろ袂をまさぐっていたが、小さ

いビニール袋をとり出した。中に何か白いものが入っている。奇妙な性癖の人だ。この次は何を口中へ押しこめというのだろうか。恐らくハンカチ以上のものに違いあるまい。これの使用は先ず緊縛してからのことだ。私は今のプレイで非常にのどがかわいていた。「会長、少しのどがかわいたのですが」「よしよし、じゃあ、このヒトを縛り終わったらすぐ飲物を持ってこさせよう」

私はあきらめて、のどの渴きを耐え乍ら、芝梨枝子を改めて縛り始めた。今度は前手縛りにすることにした。後手に比して、前手縛りは一見変化に乏しいが、縛られる女性にとっては、縛られた自分の両手を見つめられることから、屈辱感は優ると思った。

彼女の両手首を合掌型に揃えて、腰で固定させ、手首を中心に一本の縄は首を通して、背後から胸へ8の字に掛け、一本は手首から下へ股下を通して腰でしめ上げた。彼女は私のなすが俣になって一言も発しなかった。なる様になれという気持なのかも知れない。

立ったポーズの縛りはこれで終り、私は女にあぐらをかかせた。両脚をぐるぐる巻きに縛り、縄の余白を両手の縄目に通して引きしめる。座禅をくんだ恰好で、女は鎮座して

る。私はビニール袋の口を開く、フト軽い女臭が匂った。覚えのある生理の匂いだ。丸めた綿花の奥が赤く、微かな醗えた匂いがその辺りから漂って来た。

彼女は口を開くのを、かなり頑強に否定した。私は力づくで顎に力をかけ、両唇を引きはがす様にして、漸くにしてそれを押し込んだ。大急ぎで革帯で猿轡をしっかりとめる。異様な味覚に、女の頬は歪んで眉がよった。

「辻村君、それは、あのオナゴのだよ」

「えッ、どなた？」

「わしのあれじゃがな」

ああ、そうか、あの臍たけたこの家の女あるじのものなのか。それならそうと、早く知らせてくれれば、もっとゆっくり拝ませてもらったものを――。

会長は何と思ったかモニタテレビの画像を私達に見える様向きを変えた。テープの巻き戻しの音が静かに流れている。

「縛ったヒトをここ迄運んで来給え。我々と一緒に、今のプレイをビデオで見ようじゃないか。辻村君ももうカメラうつさないう。芝梨枝子に向って」君も見たいだろう。おおそうじゃろう、見せてあげるよ」

会長は、さも愉しげに相好をくずして笑っ

た。

「これは四十分のリールでね。あらかた使い終わったところを見ると、かなりハッスルした様だね。さあ、始まるよ」

チカチカと走査線が走ると見るや、パッと画像が浮んだ。それは、ほんの小一時間許り前、芝梨枝子に挑みかかっていった私の緊縛の縄捌きから、何の前触れもなく始まっていた。私の吐息、時々しゃべるタワ言。彼女の微かな呻きまでが画面と共に刻明に流れた。

「八ミリなんてもう時代おくれじゃよ。第一危ない思いをして現像する必要もないし、編集もいらん。それにスピード時代にふさわしく手っ取り早いことじゃ。どうかね辻村君、面白いだろ。いやになればすぐ消せるしね」

「ハア、これはもう……」
と絶句してしまった。いきんだり、気張ったり、鼻をこすったり、眼鏡をずり上げたり考え込んだり、太腿を搔いたりで、私の演技も仲々忙がしい。それと共に甚だ照れ臭い。私の緊縛が一段落した頃、何を思ったか、会長はパチンとビデオを切った。

「そうだ、君ノドがかわいていたんだね。飲物をもってこさせついでにオナゴにもみせてやろう」

芝梨枝子は、同性に対する嫌悪を感じて、しきりに首を振って否定していた。

「何、いやかね。益々面白い。どうかね辻村君、二人のオナゴを縛った後、これを見せるのは愉快とは思わんかね」

「それは」

「名案じゃろ。飲物をもって来たら、君が縛り給え。わしが命じるからね」

会長はしきりにウキウキしていた。例の呼鈴を振ると、あの人がつつましやかに一礼して入って来た。チラリと芝梨枝子に一瞥をくれたが、平静さはくずれない。余程SMに對して訓練が行き届いていると見える。この美女を間もなく縛り得る段階にあるかと思えば、私は身内の激しく疼くのを覚えた。芝梨枝子のやや硬調な体軀に比して、年こそ倍近くとっているとはいえ、楚々としたあの臍たけた瑞々しい美女の緊縛には垂涎の趣きがあった。それが私の年令から来る一方的な感覚であるとはいえ、プレイの醍醐味を知悉した女性への、Sの慾求であることは否めなかった。

「会長、あの方の名は？」

「名前か、聞いたところで意味ないじゃないか、わしのオナゴで充分だよ。キセという名

じゃが——」

「きせですか？」

「そうじゃ、平仮名のキセじゃ。本人はむづかしい字を当嵌めおって、季候の季と、伊勢の勢の字を使いおるが、名なんぞどうでもよいとは思わんかね」

（思わないです）といったかったが言葉をのんで黙して、詮方なくうなずいた。きせさんか、古風ないい名だ。私の悪い癖で、きりょうがいいと、名前が皆よく感じるのだからダラシがない。きせさんが間もなくコーラとジュースを盆にのせて淑やかに入って来た。

コップに注ぐと、私と会長にさし出した。「おい、一寸待ちなさい。辻村君がお前を縛りたいそうだ。わしが許した。縛らしてやれよ」

「えッ、今なんですか」

「そう、今、ここですぐにじゃ」

「でも私——」

きせさんは、私の方をまじまじと見つめて困惑の表情をうかべた。

「いえ、構わないんです」

思わずそういつてしまった。

「君、構わないと、いうことがあるものか。早くやり給え。おい、早く脱ぐんだ」

Sは横暴な会長の習性を知っているのか、きせさんは諦めた様に、部屋の片隅でシュッシュと帯をとき始めた。

芝梨枝子が、激しい興味の眼で縛られた体をねじ曲げて、その成行きを見守っていた。

「辻村君、うんと強く縛り給え。ただしひとつ条件があるが、わしの可愛いオナゴだから、シャシンだけはとらずにおいてくれ給えよ。プレイだけなら構わん」

さらりと裸身から着ていたものを滑らせてきせさんは胸をかかえて蹲まっていた。

「さあ、やり給え」

会長にうながされて、私は思いもかけぬ、緊縛の連続に、逸る心を押えて彼女に近づいた。白い玉の様な柔肌であった。押えたらえくぼの出来る、とろけそうな白磁の肌に、しばし私は見惚れていた。その柔肌のあちこちに、浅黒いあざの跡が点々とあった。会長のつけたものであることはすぐに判然とした。

私が背後に廻ると、彼女は自から両手を後へ廻して組んだ。型通り、首へ廻し、ふくよかな乳房を圧迫する様に胸縛りにして、かなりつよく締め上げた。腹部の方へ眼を落して、そのところに陰影は認めなかった。この人も又、関谷富佐子夫人と同様、体毛は綺麗

に除去されてあったのだった。

芝梨枝子の、ありの尻が、反射的にむさくるしく私の眼に移った。彼女とて視線はそこへ流れ、きせさんの清潔さを、どんな思考で監視していることであろうか。

「辻村君、えらく簡単じゃないか。それでいいのかね。このオナゴは、どんなことにも耐えることの出来るやつだよ。一寸、期待外れだったな」

「どうも、会長の御寵愛の方と思うと、どうも縄もつ手が鈍りまして」

「フンフン、まあ、ええだろう。よし」

会長は立上ると机上のハンカチを掴んだ。先刻、芝梨枝子の唾液がたっぷり吸われてある、べとついた汚穢のあのかたまりを――。

ずかずかと、きせさんに近づくと思えるや、そのハンカチを、ぐいと口中深く押し込み、袂からとり出した細いゴムの中袋で、端麗な顔がひん曲るほど強く荒々しく締め上げたのであった。

改めて最初からビデオが、生々しいプレイの状況を再現し始めていた。

芝梨枝子は羞恥に眼を閉じては開き、身悶えしてみつめ、きせさんは眸をしっかりとるませ、見る見る全身に紅を撒きちらした様

に、真白な肌を紅潮させ乍ら、喰い入るようにつめた。その体はたしかに濡れつつあった。会長はビデオよりも二人の女身に眼をそそぎ、私はきせさんの挙動をチラチラと窺視し乍ら、ビデオの己れの姿に照れ臭がっていたのである。四人四様の想いの中で、ビデオの画像はプレイの様相を刻明に再現していた。会長自身、この刺激の極致の中で、必死に回春を試みていたのではなからうか――。

会長の手は、いつしか、きせさんの体を、まさぐっていたのである。会長の胸に凭れ込もうとする、きせさんの心に去来するものは濡れにぞ濡れた情念の、ほむら一筋に外ならなかった。

× × ×

ビデオは終わった。スイッチを切る手も憶劫げに、会長は、きせさんを全身に抱え込んでいた。

「辻村君、わしは一寸消えるからね。あとは君達で適当にやり給え」

酔っ払った様に会長は、ゆらゆらと立上り縛った尻のきせさんをだき抱えるようにしてこの居間を出ていった。何もかも放ったらかしにして。会長自身、久方振りに燃えたぎっているに違いなかった。

残された私と梨枝子との間に、奇妙な気拙い雰囲気漂っていた。私の想念はきせさんに走り、そのくせ現実には、若い女体が、三十分以上も緊縛された後、私の横に息づいてゐるのだ。私の情念が、芝梨枝子に走っていたら、私は会長のこの粹な計らいを、大感謝の大感激で恩恵を受けとって喜んでいたに違ひなかった。或いは芝梨枝子とでも、この大物の老会長に畏敬と乾いた愛情を覚えていたのではなからうか。

しかるに現実には奇妙な二人が取り残されたのである。情念の転換は咄嗟には無理であった。のろのろと私は彼女に近づいた。

「解いてやろうか」

彼女は二三度うなずいた。早くしてくれと言わん許りに体を振った。縄を順次ときほぐし革の猿轡を外すと、彼女はパツと勢よく中のものを吐いた。桃色に化した綿花はたたみに花びらの様に散った。ゲーツ、ゲーツと彼女はえづいてのどをならし、あわてて灰皿をとり上げると唾を吐いた。薄い桃色に唾液は染まっていた。

「ああ、いや——苦しかったわ。何を押し込しこんだの」

私は言えなかった。

彼女は机上のジュースをラップ飲みにして一度吐くと、ゴクリと飲んだ。

「どうする？」と私。

「早く帰りたいわ」と彼女。

私と彼女を結ぶ一線は何もない。

「勝手に帰るといけないわね」

「と思うね」

「ハダカでは、どうしようもないわ」

手持不沙汰と奇妙な違和感の交錯した中に二人はあった。どうしようもない乾いた空白の谷間。

「あの会長の愛人をどう思う？」

「綺麗な人ね。でも、

あの人、何だか……」

「何だか、どうしたっ

ていうの？」

「女奴隷みたい」

ずばり適確な表現だった。たしかに彼女は会長に心身共に隷属し会長の為なら命すら惜しくないといった従順



さであった。その点に私は惹かれたのかも知れない。女の弱さを全身に漲らせた、きせさんに、私はSの慾望を存分に果したかったのかも知れなかった。

「君は恋人いるの？」

「いるわよ。過去に何人も——。捨てたり、

捨てられたり」

「女子大生って、そんなものかね。割切って

いるんだね」

「二度許りアウスしたわ。誰の

子か分らない芽生えを」

「道理でオッパイが黒ずんでいた。それで真剣に結婚考えたことある？」

「いつも真剣なの。真剣だから

逃げられたり、嫌になって捨て

たりするんだわ。理想の男性っ

て、なかなか見つからないもの

ネ。つき合ってみたら、心とう

わべが全然違うのよ」

「案外、純粋なんだネ。今日の

様なプレイをどう思う」

「いい人生勉強になったわ。こ

んな淫靡な世界の実存を、この

体で判っきり確め得て、ひとつ

賢くなくなったみたい」

「興味ある」

「なくもないわ。会長さんは過去の人生に疲れているのよ。こんなことをしないとふるいたたないのネ。気の毒な人。自分の愛人をあししてあなたに縛らせたでしょう。あれも自分の力を体内から引き出そうとする、テクニクのひとつとみたわ。違う？」

「多分そうだろう。あの人をあしして曝しものにするのは私だけではないかも知れない。気の許せる相手になら、あしして、自分自身の活力源に使っているかも知れないね」

「私もあなたも、本当はさしみのツマかも知れなくてよ」

「ズバリだ」

私達は顔見合せて笑った。私はあることを感じて、ツト、芝梨枝子に体を近づけた。ギョツとして彼女はあとじさりする。私は声をひそめて、さりげなくささやく。

「気をつけ給え。あの唐紙の開いてある大鏡は、多分マジックミラーと思うんだ。私達の行動が鏡の向うで、手にとる様に見える筈なんだ。会長はあの密室で、愛人を抱き乍ら、私達の行動を見て愉しんでいると思うんだ。どうする、御芝居してみる？ 鏡の方を

見ないで、さりげなく返事し給え」

「あなたの淫らな想像でしょう」

「と思うだろうね。ところが、私は君が応接間でソファにねそべって、週刊誌よんだり、あくびしたりして、待っている間を、マジックミラーで覗いてみた」

「ひどい、本当？」

「本当だとも、あの部屋にも、ソファに向って鏡なかった？」

「ああ、そういえばあったわ。飾り鏡が」

「会長の意図は、私達ゆきずりの男女二人をこの部屋に放っておいて、どう成行が展開してゆくか、それを見ているのが愉しみなんだよ。それをハッスルさせる材料のひとつとしてね」

「分ったわ。どうすればいいの？」

芝梨枝子の眸は、妖しく光り出した。予測も出来ぬ、謎めいた仕組みに、大いに興味をそそられたらしい。

「単なるセックスじゃ、恐らく会長はがっかりだろう。会長の喜ぶのはサジステックなプレイなんだ」

「嗜虐的なことなのネ。あなたも会長も、本なんかで読んだことのある。所謂サジストなのね」

「いやな言葉だが、その通りだ。それを私達はSという字で表現している。虐められて喜ぶ男や女をMといってマゾヒストのイニシャルで呼んでいる。総称してSMのプレイと謂うのだが――」

「あなた誰？ 怖い人ね」

「辻村といただろう。名もない男だが、同好者の間では、少しは知られている。市井の心理探究者だ」

「変った人も世間にいるのネ。じゃあ協力するわ。どうすればいいの？」

芝梨枝子は、急に私という人間に、不思議な興味をそそられたらしい。いつしか二人の間の違和感は除かれていた。

「君を強烈に緊縛してバンドで鞭打ちする。

嗜虐の慾求が頂点に達した時、私は乗りかかってゆく。そこであの鏡の唐紙をしめる。会長にことの成行を想像させるのさ」

「本当にバンドで強くぶつの」

「勿論手加減はするさ。しかし見たためには強く叩く様に見せる。君は調子を合せてのたち廻ればいい。ある程度は当って、少し痛いかも知れないけど」

「やって見るわ。ただどうまく手加減してぶってネ。私、あなたの言うMじゃないから、

ぶたれると痛い許りだもの」

「分った。君は立って帰りかけ給え。私は引戻して争った末、縛ってゆく。いいネ」

二人の間に默契は纏った。改めて、私自身仮に芝居がかったプレイとはいえ、このドライな娘を再び縛ることに、新たな昂奮を覚え始めた。さりげなく振舞い、私達は鏡に眼をやらぬ様つとめた。

「帰るわ」と彼女は立上る。突然に――。

私はあわてて女の手をとって引戻す。縛れて絡む寸時、私は女の手を強く引っ張って、鏡に近く女を倒す。乗りかかっていって、激しく拒む女を、雁字搦目に縛り始めた。ホッと一息ついて、私は身につけていたものを脱ぎ始め、パンツ一枚になると、靴下の一足を彼女の口に押し込む。ウムムと唸る女の頬をバシリと打ち、縄で口に喰い込む程に猿轡すると、ズボンのバンドを引抜いた。

一曳、二曳、体にスレスレに触れて、女の体は派手にのたうって軋々反測する。

プレイらしきプレイに、私はしばし芝居気も忘れて耽溺していった。薄赤いみみず腫れが数カ所、実際に彼女の皮膚に痕をつけていた。私達はわざと鏡にすれすれに近附いてプレイしていたが、少々疲れも覚えて来て、バ

ンドを投出すと、女の体へのしかかっていた。そして、女の足をずるずる引曳って、鏡の死角へ入っていった。

「苦しかった？」

囁やく様に口を近づけると、女の瞳は濡れていた。猿轡をとくと、靴下がはき出され、パッと唾液が私の顔に飛んだ。そのとんだ唇へ私は俄破と唇を押しつける。ムムと呻いて刹那、女の舌は縛れ込んで来た。

縄を解こうとせず、私はしばし、その尽のポーズで、芝梨枝子の緊縛の体を抱きしめていた。私のまさぐる指先に、濡れた体があった。

「やめてえ」

呻くように女はつぶやいた。芝居は本当となりつつあった。

ミシリ、ミシリ、微かに隣室に気配を感じて、私は身を起した。死角に入った私達をのぞきに来た会長の、足音を忍ばせるきしみに相違なかった。

「隣の部屋に來ているよ。どうする？」

囁やきかけると、女は言った。

「いいわ、なるようにならしましょう。この尽じっとして……」

喘ぐ吐息が、私の唇を求めて来た。

× × ×

夙川駅前のお茶店――。

私と芝梨枝子はアイスクリームを前に向き合っていた。私は大阪へ――。彼女は神戸の方へ――。別れにふさわしい分岐点だった。

「アルバイト料よかった？」

娘は笑って指を二本出した。

「私にビデオ貸してくれるらしい。愉しいものを撮れていってね。私にしても始めての奇妙な経験だった」

酔後の冷めたいクリームは喉に快かった。夕食の歓待は豪華そのものだった。会長はオコリが落ちたようによく喋べり、私達にワインを奨めた。給仕するきせさんの、うなじのはつれ毛、そして首筋に赤く残るキスマークは、会長との充実した情事の経過報告のようでありありと烙印を残していた。

「おいしかったわね、あの御馳走。私生れて始めて」

「随分飲んでたじゃないか」

「何もかも忘れてしまふためよ」

「私との事も」

「……」

彼女は応えず、仄赤く染めたまぶたの下で笑った。

「会長すっかり満足していたようね」

「君のプレイ振りがよかったからだろう」

「うそ、辻村さん真剣だったわ」

「でも会長さん、遂に入って来なかったわ」

「気をきかしたのだろう」

私は受け流した。帰り際、会長に、そっと鏡の秘密をきいたら、きょとした顔をして、大きく笑った。

「あれは唯の鏡さ。しかしそいつはいいアイデアだね。うん、やって見よう」

「会長に見せるため、随分無理をしてハッスルしてプレイしたんですよ」

「そいつは残念だった。次の機会には是非、拝見させてもらおうよ」

会長はさして残念そうな顔もしなかった。その真意は奈辺にあるか分らない。きせ女との満足感からか、或いは裏の裏の、ちゃんと見終ったという満足感からか、死角に入っ間もなく聞こえた、忍びの足音は何を意味するのか――。

会長が狸で、飽くまで空とぼけているのか――。喜ばすつもりで大汗かいて一芝居うったつもりの、牡と牝の二匹の狐が、あざむいたつもりで欺されているのか――。潜り戸まで送りにきた、きせさんにそと

手をやったら、ずっと引っ込めた白い指先が私の視野に灼きついている。その癖、あの端麗な白い頬は、私に向って柔らかに微笑んでいた様であった。

歓待に暮れて、会長の車で、大阪まで運転手に送らせようというのを固辞して、私と芝梨枝子は揃って夕闇濃い道を辿った。

アイスクリームの容器は空になっていた。

芝梨枝子は喫茶のテレビに見入っていた。オールスター第一戦がたけなわであった。

「辻村さん、どこのファン？」

「近鉄なんだ」

「弱いところね」

「弱いから応援するのさ。ホラ打った。土井のホームランだ」

テールエンドの近鉄にあって、打撃ベストテンの一位で気を吐く土井がホームランを打ったのをシオに私達は立上る。

夙川の駅のレールを挟んで、反対のホームに、私と梨枝子は、数米へだてて、二人のみに分る微笑を交換し合っていた。

神戸行が裏音をとどろかせて入って来て、窓から彼女はあわてて手を振った。

電車は走り去る。入れ違いに大阪行が入ってくる。

又逢えそうな気もする。或いはもう逢えぬかも知れない。私は名刺を渡し、彼女は私のもう一枚の名刺のウラに、アドレスと電話を書いた。話し合えばさばと割切った面白い娘だった。その場限りの交渉であったかも知れない。しかし彼女は私に興味をもったことは事実だった。

車中は窓よりの風を受けて涼しかった。腰を降して瞑想する私の脳裡に、あの時もだえて呻いた梨枝子のイメージは果敢なく消えて、あの楚々たる優雅な、きせ女の真白な肌にかけて縄目に悶えた姿が、ありありと浮かんで来た。

妖しい魅力で、男を惹き込まずにはおかないあのニンフの微笑。私は無性に、きせ女が恋しかった。

折あらば、きっと会長宅を訪れる私であろう。しかし目的はあの、きせ女に又逢えるという事を告白したら、会長は怒るだろうか。「又打ちよった！」

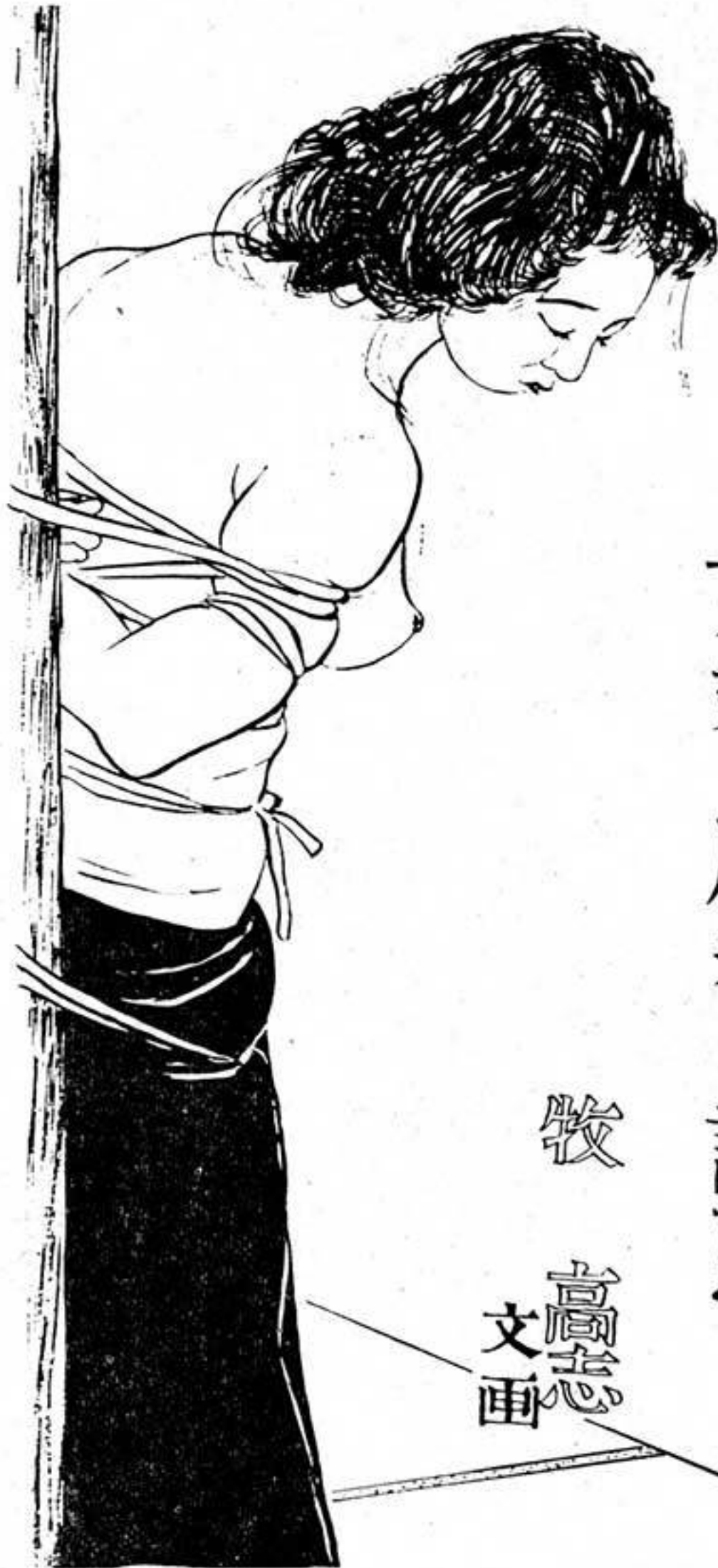
トランジスタラジオをきいていた車中の若者が叫んだ。土井の又してもものホームー、六打点――。そんな叫びすら遠く、私は、きせ女の面影をひたすらに追いつづけていた。

フィクション物語

女装と腰巻の誘惑

牧

高志
文画



やすなが半兵衛（無職）は今や六十の坂を越した老境人であるが、なかなかどうして、今もって屈することを知らない精力家でもある（内心はどうだか判らぬが……）

その彼がなすこと、話すことを総合するに、いや、どう転てろんでも変っているといいようがないから面白い。第一、彼のすべでは物の経済性をはるかに飛躍しているとい

うことだ。例えば、彼は田舎芝居などに貸す衣裳屋に、腰元の着る紫矢絰のおひきずりを立矢の帯ごと、いやそればかりじゃない、足袋から腰紐から緋の長襦袢に、さては真赤な湯文字に至るまで事こまかに出物を注文して置いて、金に糸目はつけませんよと云わんばかりに、唐草模様の大風呂敷をもっていそいそと取りに行く……。これは所詮、莫大など

陰居料が毎月きちんと大本家からおりる関係もあるが、もしも金を使い込んで手元不如意にでもなるうものなら、ちゃんと霞と水だけを喰って、じっと我慢しているあたりはともじゃないが常人では出来ない芸当だ。もともと近頃は、売れば何億にでもなる山林を少しずつ手放しているという噂さもないでもない。

もともと老人ナンてものは、あるチャンスやきっかけを境にして突如ハッスルしたり逆にしぼりするものだ。

実は、ひい孫みたいないな十一番目の男の子につい先頃、今時珍しく古典趣味たっぷりな嫁を迎えた……。って云うところから、この物語は始まる。さて早速、その嫁の話だが、この嫁は一体誰から教わったのか、紫式部風。いや、もっと近代のか。ともかく、いともしとやかに、そして純日本風に、つまり往年の大和撫子……。と云うタイプを粧っているのだから、半兵衛ならずとも大いに食指が動くと云うものだ。

毎週月曜日ともなると、おも屋の横に建てられたきゃしゃな洗濯ほし場に、白い紐のついた今時珍らしい真赤なお腰が翻える……。こ

とになっている。風にほどよく翻っている以上いやでも誰の眼の中にも飛び込んでくるだろう。そいつを横目でにらんでいるうちはすこぶる無難だが、この嫁がそれから日課のよう、粋な姉さん冠りでお太鼓帯の横をちょいとつまんで裾をくるりとはしより、これまた真新しい簪とちりはたきで、お部屋のお掃除をいともおしとやかに遊ばされる。

『いやその姿かっこうのよかこと。……紺券の芸者に演ってみろって云ったってこうは行かねえ。』

つまり何んと云うのかな、動く芸術品とでも云ったらあたるかも知れねえ。だから半兵衛は云った……俺も十番目の男の子までは一人一人吟味して、嫁を貰ってやったもんじゃが、こんな所作事の綺麗な嫁は初めてじゃ。ここだけの話じゃが後添えに俺の方が貰いてえ位だ。どだにおだやかじゃないねえな。

お嫁さんと云えば、わしの家内、つまり婆さんのお波も、この嫁に似て生前にはこのわしをひどく慌てさせたものじゃった。

そう、そう。古びた水車小屋のある村の鎮守の社で式を挙げ、陽の沈む庄屋の縁側でお雛さまのようにならんで坐って、もう式は終

ったべ、早よう二人きりになりてえでばさ、ここはまずい何処さにいゆっか？ 何処さ？ 箱根？ そんなに小さな声で云わんでもええ。おいたちゃあ夫婦になったんじゃ。遠慮はいらねえ、何処へでもいくさ。大きな声でさ笑い声を立ててみれや、堂々と……。てなぐあいで、それから次の朝、マッチ箱みたいな登山鉄道に乗って相州は大湧谷まで来たんじゃが、そこから先は女子供には難所だ。さでどうすべえとわしが思案するまでもなく、最愛のお波さん。真びる間というのに、人多勢いる前でいきなり道行の訪問着の裾を高々と捲くりあげ下から燃えるような紋羽二重の長襦袢を大巾にオッポリ出して歩き出したからびっくりした。これは後に四国でお編路さんをやった時も同んじことじゃった。別に人なみはずれての露出症でも何んでもないんじゃが、感極まるとつい裾が割れてくるといふよか癖が、死ぬまで抜け切らなかったものと見える。わしはその時夢の中で、天国でも歩いているような気がしてならなかった。足元から白い霧がフワッと湧いてくる。しかもそれは一方的に吹き上げてくる奴だからなおさら始末におえねえ。野暮くさい男のわしの

方は一向にかまわぬが、女房であるお波さんの方はそうは行かねえ。赤い裳裾がもろに吹きあげられて、その都度メリンスの赤い腰巻が、吹き流しの鯉のように白い脛から上部に向って遊離しよるんじゃ。おまけに道は、火山のゴロゴロした石ころを敷きつめたような道じゃから、足元は曰く付の不如意と云ってもよからうがの。短いみちのりじゃったからよかったものの、ヘレンケラー女史を箱根へ案内したらこうもなるだろうみたいな三重苦じゃった、まったく。

まアその頃は、老人のぐちっばい想い出話に花を咲かせる訳じゃないけれど、すぐくええもんじゃった。その時分は、家内のお波さんばかりでなく、大かたの御婦人連中がオールきものでして、遠くから眺めるとまるで天国を美女群強行軍するなりなんて云う情景じゃった。まるで品川沖や羽田沖で毎年行われる潮干狩風景を、そっくりそのまま無修正で箱根の天下の嶮へ移したような絶景じゃったのう。それが今は居眠りしているひまにマイカーのドライブで素飛ぶんだから何んとも味気ない話じゃござんせんか……。いや、いま何んの話をしていましたかのう？

そう云う訳で……、それからと云うものは……
 ……そうそう、せがれの出来過ぎた嫁の話でし
 たのう。いや、実はその嫁が……やっぱり何
 処かに手ばかりがあったものと見えて、ある
 日十一番目の倅と口喧嘩の挙句……だろうと
 思うのじゃが本当はひょっとしたらたわいも
 ない痴わ喧嘩じゃったかも知れんのじゃ……
 とにかく、造り立ての床柱に、派手な赤ずく
 めの長襦袢に伊達巻一本と云う恥ずかしい姿
 で縛りつけられていましたのう。確か、後手
 首のあたりも別の細紐でキチンと二重に縛り
 合せてあったと思うのですじゃ。この眼でち
 ゃんと見ちゃったンじゃから確かですア、サ
 アてそれから、どうしたと思召します？ 別
 にどうもしはせなんだ。ただ倅の奴、身じろ
 ぎもしないで縛りつけられている嫁の前にと
 っかとあぐらをかきよって、じっと眼を三白
 眼にして嫁の姿を眺めとるンじゃ。ただそれ
 だけで、別に今時流行の革鞭でたたいたり、
 誇張過ぎたこづき廻わしみたいなことは、一
 切演らなかつたようなンじゃ。若しも、やっ
 たてえと、それは嘘になりますじゃ。何処か
 の広い舞台ならいざ知らず、近所隣のある長
 屋みてえな中で、そんな荒療治が出来る訳が

ねえ。ただ、嫁を縛った細引だけは、折角の
 長襦袢がきゅうツといたむ位いに肉に喰い込
 んでいたっけ。それともう一つ——は、例の
 物ほし場で翻える真赤なお腰が、脚や腰のあ
 たりを動かすたびに少しずつ長襦袢の裾から
 はみ出てくるのが、劇的シーンだと云えば
 云えたのかも知れせんじゃ。

ところが、この時はこれで何んとなく終っ
 たンじゃが、これがきつかけとなったかどう
 かは知らねえが、それからしばらく経って、
 今度は変てこりんな風景を見てしまったので
 すじゃ。

その前に一寸断って置きやすが、空で物を
 云っているンじゃござんせんぜ。実は何回か
 繰り返しているうちに、とうとうそれ専門
 ののぞき穴が出来ちまつたてえわけで……。

じっと見てるてえと、その晩はいつもと様
 子が一寸違うようなンじゃ。視力の衰えかけ
 たわしの眼ン玉を、皿のようにしてみてるてえ
 と、瘠せ細った馬鹿息子の奴が、嫁の手伝い
 で、事もあろうに素裸になり、順々に女の物
 を身体につけている真盛中……。耳を澄ます
 と、小声じゃが声まで聞えてくるようなンじ
 ゃ。

「いくら何んでも、女ならこれから巻いてい
 かなければなりませんワね。ハイ、こちらを
 向いて……」

てな調子で、嫁の前にぬーぼうと突立った
 倅の胴体に、白い腰布のついた真赤なお腰を
 巻きつけていくのですじゃ。

「さア、その次はこれですよ……」

嫁と背丈がどっついどっつい倅に、燃え
 るような赤い錦紗の長襦袢が着せられ、二寸
 ばかり余まつた裾をお端折りにしよりました
 じゃ。

それから先、デパートの呉服部で見かける
 ような既製品の仕立上りの中振みたいなきも
 のが重ねられ、続いて部厚い袋帯が胸高に締
 められていったンですワ。

それからどうしよったと思います？ どう
 もこうなると、どっちもどっちじゃと云う気
 にもなるが、今度は倅の方が猿轡されて床柱
 に縛りつけられよったのですじゃ。そして普
 通ならその前であぐらをかく筈の嫁はこれま
 た立ったまま、縛られた倅の顔をせつせと
 化粧直しをし始めたんすじゃ。しかも何処で
 工面したものか、頭にはショートカットとか
 いう、洋髪かつらまで冠せられているンだか

ら、ただただもう驚きやしたよ、まったくの話が……。

つまり早い話が、堂々と女装を試みた上、主客を転倒したお娛しみを二人で演つとるんですワ。この分でいくとその内、伴の奴一つずつ罌丸を抜かれるのじゃねえかって、いらぬ心配さえも起きてきたものですじゃ。

ところが、本人達はそうでもないらしい。ひる間貞女で通つた嫁の眼からみると、夜になるてえと、もう一人の姉か妹かが出来る位に、かるく思つとるらしいんでやす。そんな風な見方をしてのぞいてみると、欲目かも知れんが、みるみるうちに美女が二人真夜中の薄暗い部屋に浮び上つて来るんじゃから……思わず生つばを呑んだと云う訳なんじゃ。

女装して責められる……。それはわしの若い頃演つた、つまり自作自演したことの繰返えしなんじゃが、なんにも知らねえ筈の伴と嫁が……。なんせ血のつながりは怖ろしいやネ。そんな時、死んだ婆さんはいつも笑っていた。そして、よくこんなことを云つたものですじゃ。

「わたしがお嫁入りした時、お爺さんは、押入れの行李一杯に、何処でどうしてお蒐めに

なつたものやら、おなごの肌着やお腰が何十枚となく入っていて、わたしや、またどこぞのチンドン屋にお嫁入りのかとおびつくりしましたっけ……。けどそれがお爺さんの道楽だと聞かされた時には、そんなものかと別に変な気持ちにもならず、せっせと手入れなど手伝つたものでした。それには、花ノ山の遊廊の何んとか云うお女郎さんのものもあつたし、紺券とやらの芸妓さんのものもあつたようです。ホッホッホ……。男の人ってどうしてこんなに多種多趣味なんでしょかね」

それでわしは、すかさず云つてやりましたのじゃ。

「婆さんや、いちいち嘆きなさんなよ。これで先祖代々の家屋敷がつぶれる訳でもあるまいし、たかが、ボロ屑に毛の生えたようなものを何処のどいつが蒐めて拝もうと大きなお世話だよ。世の中にもっともつと人様に迷惑のかかることをしでかして、朝晩平気でひげをあたつてゐる奴がいるんだ……。それに盗品じゃないんだよ。ちゃんと納得ずくめの戦利品なんだからあと味が大変よろしい。たとえどつぺりと汚れていてもさ……」てな具合

にナ。

ところが、この伴夫婦の道楽——お娛みが結構わしの方へ感染してしもうて、どうにも我慢出来なくなつたンじゃから、年寄りなンてものはどだい世話が焼けらアなあ。と云つてもこちらは独り者、今更嫁にちゅうわけにもいかねえものだから、角の煙草屋の女主人に相談してみたんじゃが、とたんにヘッヘッ……と笑われたっけ……。

「いい齡をして、そんな阿呆なことが出来ますか」って訳じゃ。

わしは昔、本郷の市村座で播州皿屋敷を観たことがある。番町皿屋敷の方は腰元のお菊を庭に曳き出して土下座させて、極めて平凡に首を斬るんじゃが、播州皿屋敷の方は、例の車井戸の中にお菊を吊つて斬る、いわゆる残酷芝居ですじゃ。

どちらがよいかは好きずきだろうけれど、やっぱりお色気のあるのは井戸の宙吊りの方でござんしょうなあ。と云つてそう易々とそんな芝居が出来るもんでもねえですじゃ。

一体、女を宙吊りにしたり、磔にしたりする場合、色気がなくっちゃいけねえ。ただもう残酷で、赤は赤でもやたらに血ばかりふ

っ飛ばすのが能じゃねえと思えますじゃ。

市村座の時は市川松蔦という役者がお菊に扮したのでやしたが、つい先頃新橋演舞場で演った、武智鉄二氏演出のお菊は、どういふわけか知らねえが、白づくめの長襦袢に白のしごきと云う姿じゃったのと違って、こちらさんの方は黒づくめのきものに前結びの帯一つという姿で、髪はザンバラ髪じゃった。

ただその頃は、きもの全盛の世の中じゃったから、舞台の照明は今程ではないにしても朱がかったぜいたくな長襦袢に緋色の蹴出しが、実になまめかしく点滅したのをよう覚えとりますじゃ。

そのお菊が宙吊りにつるべに吊られたじゃが、流石は舞台で鍛^{きた}えた役者だけあって、素人のわしらにぎこちなく裾を蹴散らかすのは大違い……。もっとも近頃の芸者衆は年寄が浅いと見えて長着でも着せようものなら、すぐさま手前の裾がからみ合つて満足にさばき切れない妓が多いといひますのう。一見のんきなように見えて、案外むずかしいんじやから嫌やになちまう。

で、つまり殿さまの青山鉄山氏に刀の先でしかも宙吊りになったままで、責めさいなま

れるわけじゃが、こんな時でも万事わざとらしさが無いから嬉しいじゃござんせんか。浅草のストリップみたいにお菊さんの方から帯を解くのせがむようではつや消しですじや。総じてわしは、怪の綺麗な人、滑めらかな人でなくっちゃ、腰巻をしめる資格はないと思うとるんじやが、どんなもんでしようかねえ？

いや、実はこんなことから腰巻菟めをやつてみたんですワ。じゃから匂いを嗅ぐこともあるが、それよりも……こう云えば絵空事になるかも知れんが、腰巻の魅力は女の肌への誘惑に通ずる……って訳です。

で、その昔、若い頃に親爺の伴^{とも}で、材木買いによく秋田や新潟方面に行ったものじゃったが、今でもそうじゃがなんせどちらも美人の本場……。居るものですよ。ほどよく飲んで、ほどよく買って、適当に譲って貰ったのが何枚もある、いや、あった。見せろと仰言つたつて、戦災で全部焼いちゃったンじやから、残念ながら今は一枚も無いって訳ですじゃ。嘘じゃねえよ。

さアて、話がいつの間にか変な方へ飛んじまったねえ。そもそもわしの悪口を書くつ

もりで書き出したのじゃろうが、正直に書こうとすれば骨が折れるもンじやよ。

十一番目の嫁かい？ その嫁は今では子供が出来て、ますます脂が乗ってきた。嬉しいじゃござんせんか。今だに……って、伴の方？ ヘッヘ……もうそんな馬鹿げた女装はとうの昔に卒業して、鼻にもひっかけないらしく、涼しい顔をしてけつかる。……けど、嫁の方は違いますじゃ。何んと云うか赤への郷愁とでも云うのがしようか。いまだにノーパンだそうでのう。

「お爺ちゃん、とても縁がいいンだから、これお締めなさいよ……」とは云わねえけれど、よかつたらどうぞと云わんばかりに、この一月からつい先頃の五月頃まで十日置き位に物干台に赤い腰巻をほして呉れましたワ。亭主の好きな赤えぼし……ほんとに有難いと思うとりますじゃ。もうこのあたりで勘弁して下さい。入れ歯もガタガタしてきよりましたでのう」

とまアこれが半兵衛氏の半ばオノロケじみた弁論なのだ。

常人にして奇人の氏、いつまでもお元気で居なさいよ……。

夢 幻 譜

過ぎ去った夏



夫 忠 草 千

白熱した夏は去った。

吹きさらされるゴミの堆積の中で、浜茶屋はしらちゃけた骨組みを晒し、泥濁りの海は幾人かの犠牲者を飲みこんだ恐しさを白波にむき出しにして、砂浜に噛みついていてる。

まばゆくふくれあがった入道雲は消えた。それと共に、君の胸にふくれあがっていた欲

情の圧力もなえしぼんでしまった。

いま君は、やさしさを取り戻した太陽のもと、ひと気のない砂浜のしめりけに腰を降ろして、むなしく過ぎ去った夏の、果たされなかった期待にさいなまれている。

ああ、ひとを狂わせる、あの太陽はどこへ行ったのか。あの熱気の中でなら、何事も可

能であったものを。きみひとりを残して、あの狂熱はどこへ消え去ったのか……

あれは、つい半月もたたない前のことではなかったか？ 今は人影さえない砂浜が、裸体の群れにおおわれ、君の鼻の先に若い女たちが笑いさざめき、奔放な姿態をおしげもなくさらして見せてくれたのは？

君の欲しいものはつい鼻の先、手を伸ばしさえすれば、すぐにでも手掴みできる所にいくらでもいた。

「やつらは、そうされたがっているんだ」

と君は、つぶやきさえた。

だが君は、ただ腕をこまねいて眺めているだけだった。

そしていま、君は遠い水平線の上に、過ぎ去ったあの白い雲を追いかけている。

君は聞いたはずだ。仄暗い松林の中で若い女の悲鳴があがるのを。男たちの荒々しい嘲笑を。呻きを。そして、すすり泣きを。

君は見たはずだ、暗闇の奥で白い四肢が押し拡げられ、猛々しい影が襲いかかってゆくのを。細く白いものが深海の藻のようにゆらめきながら、やがては息を切らして萎えしぼんでゆくのを、君はザラザラした松の幹に頬をこすりつけて見ていたはずだ。

ああ、君はその時どれほど、はやりたって飛び出して行きたかったか。その暗闇の中でどれほど野獣の悦びにひたりたかったか。

だが君はザラザラした松の幹に爪を食い込ませて、目をこらしてただけだったのだ。

嵐の去ったあと、白いイソギンチャクは砂浜に打ちあげられて乾からびていた。

「おれは新鮮な肉にしか興味がないんだ」

君はわれとわが胸に慰めの言葉を吐いた。

いま年老いたハイエナは、あの時見捨てた

腐肉の幻影に、空き腹をさいなまれている。

誇りを捨てきれなかったことで、後悔のホゾを噛んでいる。

ああ、腐肉あさりのハイエナに誇りがなんの役に立つか。その夜、君は薄ぎたない誇りなど脱ぎ捨てて、ひとり寝の床に腐肉の幻をかき抱いたのではなかったか？

寝苦しい夜だった。新鮮な肉さえ、すぐにくされてゆくような夜だった。

君は坐したまま、まだういいういしい少女を拉らしてくると、その幻を閉じこめるために、目をしっかと閉ざした。

君は泣いていやがる少女の四肢を大の字に広げきった恰好でベッドに縛りつけた。小麦色に日焼けした肌を覆っているのは、花模様

のビキニだけだった。その布切れのずれ動いたところは、異色のものを継ぎ合わせたようだった。明確に塗り分けたと思わせる蒼白さに直面して、君の全身に力が溢れ湧き、はち切れそうになった。その塗り分けられた未開拓の聖地は君の手によってはじめて土を掘り返されて、白日のもとにさらけ出されようとしているのだ。

少女は長い睫毛を固く伏せて、猿轡を噛まされた顔をいやいやするように振っていた。

猿轡にひしがれたかぼそいすすり泣きを、君

は征服者の優しさをもって聞いていた。聞き

ながら目は少女の肢体のあらゆる表情をどん

らんに追っていた。まだ幼なさをとどめた白

くほっそりした肢体が、羞恥をたたえて伸縮

をくりかえす。その筋肉のほんのわずかな変

化でさえもが、君の勝利のあかしなのだ。

ああ、君のまなざしにとらえられた、一匹の可憐な生き物——うら若い雌。

君は指をさしのべて、その貴重な獲物に触れようとする。熟れはじめたすももの肌ざわりを楽しもうとする。だが君の指はあのなっ

かしいぬくもりも、心をときめかす少女のふ

るえも伝えてくれず、ただ少女のものがきと反

応の鋭さだけが、君のしっかりと閉じた視覚

を通してのみ、伝わってくるのに気付いたのではなかったか？ しなやかな体を弓なりにそり返えらして、生まれたままの姿に剥がれようとする屈辱に呻いている少女——だが少女をそんなに泣き悶えさせているのは、君であって君ではなかった。君はいつのまにか、ただ見ているだけの傍観者にしか過ぎなくなっていた。

君は君の影に、視覚以外のあらゆる感覚を盗みとられていた。

君はいらだった。まだ固そうな乳房のふく

らみとその頂点のちっちな蕾のしこりをた

しかめようと、君は幾度も手を伸し、指を動

かし、その度に、手応えのない空しさにしか

めていた。いたいたいほどに白い大きな三

角形にも、視覚以外に手応えのないいらだた

しさ。それでも尚、君は、求め得ぬものをま

さぐろうと、指先を小さきぎみに動かして捉え

ようとし、空を掴んでいた。

ああ、君の感覚は完全に盗まれてしまっている。君は、君の黒い影がいたいたしいほど白い少女をおおいつくし、少女を泣かせ、叫

ばせ、呻かせているのを、指をくわえて傍観

しているより仕方がなかった。

君は五感のすべてを奪われながら、その影

にとつて替りたい欲望にうごめきまわる芋虫だった。

そしていまようやく君は気付く、その少女に顔がないことに。なだらかにまるい肩、白桃を思わせるういいういしい乳房、喘ぐ腹、細くくびれたウエストから、幼なさの割にたくましく張ったヒップ、しなやかな四肢——それらのものは申し分のない完璧さでそなわっているが、その少女には顔がなかった。拉して来た時にはたしかにあった。猿ぐつわも噛ました筈だ。だがその顔は覚えていない。美しかったのは確かだが……。その顔がなくなっている。

しかし、君は、君の好みの顔を、その少女の体にすることはできた筈なのだ。昼間見たポップスタイルのピチピチしたお嬢さんのそれでも、強い日射しに耐えられないかのように、たえずさしうつむいていた色白なあの箱入り娘ふうの少女の顔でも、好きなものを取ってつけばよかったのだ。

だがそれが君にはできなかった。君がいくら眉をしかめ、思いをこめてくつつけてみても、その顔はたちまち脱落してしまうのだ。君の困惑をよそに、君の影は少女をいつのまにか大の字から解き放し、後ろ手にガッチ

リと縛りあげていた。はち切れそうな腕は背中に折り曲げられて固い縄が食い込み、まだ蕾の乳房をことさらにいためつけるように、上下をくびりあげた縄は、赤くちいさな乳首を喘がせている。

肩を抱いて引き寄せると、少女の喘ぎが全身に伝わってくる……。いや、君はそう思いこもうとした。だが君の影が、その喘ぎすら横取りした。

少女は泣いていた。せめてその泣き声を、君の耳に快よいものに変えさせようと、君は息をつめた。

息をつめ、盲人の手さぐりのように指をはわせ、口をうつろに開けて舌をのぞかせ、焦点を結ばない視点を集中しようと眉をしかめながら……

だが、またしても黒い影が、君から最後の快樂まで奪い去ろうと、しのび寄ってくる。

君は影を追ひ払うために更に眉をひそめ、全神経を一点に集中する。

だめだ。それでも足りない。君は君の快樂を影に奪い去られないためには、君自身をその少女に変身させるより外にないことを、突然、さとる。

君は少女の呻きを君自身の口の中からもら

し、少女の身悶えを君が身悶え、思わず口からもらしてしまう被虐のつぶやきを唇からはとばしらせ、少女の屈辱を君の屈辱として、全身を緊張させ背をそらし、やがて荒々しい君の影の暴力のもとに屈伏し、かなえたのではなかったか？

暑苦しい夜だった。いつの間にか消え去った少女を探すこともせず君は額に汗の玉を浮かしたまま呆然として天井を見つめていた。君はそうしたまま、身動きもしなかった。少しでも動けば、かろうじて保たれている灰色のむなしさが、音をたてて君の体に崩れ落ちてくるように思われたからだ。

ああ、君は今でも少女の冷たいむくろをかき抱いて汗を流していた時の、あのみじめさが忘れられないでいる。あのむなしさを抱いて過ごさねばならないこれからの夜毎のことを思って、冷たい砂浜を立ち去りがたげにさまようている。

夕陽は、あの夏の日日と同じように赤い。が、君の夏は去ったのだ。

はつらつとした若い少女たちに、たくましい青年たちに、夏はふたたびめぐってくるのだらう。だが、老いたハイエナに二度と夏はめぐってこないだらう。

稿談性風俗資料入門

(8)

○戦後特殊出版の前提としての性雑誌

○特殊性資料誌一覧 ○『造化』書誌

斎 藤 夜 居

戦後にあれ程、繁栄をきわめた「カストリ雑誌」に最後の止めを刺し、龐大なる紙屑と化さしめ、さしものカストリ雑誌の全盛時代を彼岸に追いやるために、一臂の力を副えたものに『夫婦生活』（創刊・昭和24・4）とこのがある。悪貨が、悪貨を駆逐しただけことではあるが、薄っぺらな仙花紙文化というものの精神は依然として残されるのだが、雑誌形態という点に就いては変化して行く：『夫婦生活』は実によく売れた雑誌で、発売日になると大口取次店の前には、小売書

店の番頭さんたちが、リユクサックを背負って長蛇の列をつくった、ということが『風俗科学』（昭和29・7）に「戦後の桃色出版ブーム」岩泉増吉、と題して語られている。たちまち、夫婦もの大流行で『結婚生活』とか『新婚生活』『夫婦雑誌』『夫婦読物』等々の類似誌がワンサと出版された。何ら変哲もない言葉だが、雑誌の誌名ともなれば、これには馬鹿に甘ったるいムードが生じて、なんとなく秘密めかした、男女のセックスが赤裸々に書いてあるような錯覚が起きるから

不思議だ。この種の桃色読物雑誌というのは実におびただしい数にのぼるのだが、今日では資料価値という点で、まったく無意味なものである。特に『夫婦生活』などに至っては、どの号を読んでも、取柄の無い内容で、表紙の絵がちがうだけと称しても過言ではない。

前記の岩泉稿の桃色出版ブームは、この時代の風俗雑誌の流れに就いて概観するに便利なので、要点を摘録すると、エロ雑誌発行の安定期、ということとはつま

り最も盛んだった時期で、昭和二十四年から同二十七年夏までだった。然し何も事件が起らなかったという意味ではなく、チャタレー事件、石中先生行状記、裸者と死者、などの発禁問題が論議されたのはこの期間であるが「要するに、エロ出版社は如何にすればエロっぽいものを造ることが出来るかに、粉骨砕身した時代であり、各雑誌（このことは風俗雑誌のみに限らず、著名な月刊読物雑誌に於いても然り）は、性交場面の描写を、いかにカモフラージュして、たくみに読者に受けるかを考え、これが一つの限界に達すると、今度は、性愛の解剖に名を借りて、ひどいものになると性交態位にまで及んで、これを誠にやかに説き、エロの刺激をより強めるように努力して来たのである」と。

しかしこれは昭和二十七年秋までで、エロ本氾濫に業を煮やした警視庁は、東京都下のエロ出版社と見られる二十数社を招き今後は性交を連想させるような描写の文章・絵画、性器に関する文章・絵画の一切を取締まるから協力を要請すると通達し、この事は更に当局から雑誌販売取次店にも行われたため、遂にエロ出版社は降参してしまう——。これ以後に於ける群小エロ出版社の右往左往の狼狽

ぶりに就いては、一箇の話題ともなるべき事柄だが、此処では省略する。以下、本章と関連する部分を原文のママ次に写す。

「性交と性器のことを取扱えないならば、それでよろしい。我々にも策がない訳ではないといふので、次に出現したのは、グロテスクな分野の開拓である。縛り、打つ、蹴る、なぐる、という変態性慾を耽美的に描写するものの誕生。これは大阪の『奇譚クラブ』が最初にとり上げた。それ迄は一万五、六千部しか出していなかったこの雑誌は、グロを取扱うことになってから急激に上昇して、いつしか十萬部になんなんとする出版部数を出すに至った。

これを見て、お前ばかり甘い汁を吸うのはけしからんと、対抗馬として進めて来たのが、東京の『風俗草紙』である。すっかり奇譚クラブを真似し、しかも東京の作家や画家を動員したため、本家の奇譚クラブを超越する隆盛ぶりを示すに至った。驚いたのは『奇譚クラブ』である。うかうかしていたら本家の株を奪われるといふので、頁数を厚くし、口絵も十数枚ふやして、サービスこれつとめた。まことに一時はグロテスク全盛を誇り、如何になり行くことか

と、片唾をのんで、この血みどろの闘争を見守った」

◇ ◇ ◇

この時代における、代表的な特殊風俗出版は、いわゆるカストリ式のお色気雑誌を除くと、『人間探究』『あまとりあ』そして、『奇譚クラブ』『風俗草紙』と続く。『あまとりあ』は始め『人間探究』の対抗馬として出発した雑誌だったが、これは本家を凌駕するに至った。然し、上記の如く昭和二十七年秋以降における風俗出版物の大弾圧に遇って、それらすべてが、やがて姿を消してしまふのだが、（奇譚クラブだけは現在も孤塁を守っている）『人間探究』と『あまとりあ』の二誌を主軸として、その裏面における傍系特殊雑誌や、それに附随する刊行資料は、まったく貴重なる性文化財だった。それらに就いて語る前に、市販雑誌として、戦後における特殊風俗雑誌の元祖『人間探究』に就いて記す。

『人間探究』は、昭和二十五年五月に創刊号を世におくった。奥付は、編集奥田十三生、発行酒井孝、発行所は第一出版社となっている。表紙に、「文化人の性科学誌」というタイトルをうたっていた。昭和二十一年秋以来

のカストリ雑誌の異常な氾濫も下火になり、大衆読者から飽きられて来た。いつまでも交らぬ空疎な内容だったから、時流を共にして行くには、例えていうなら色褪せたルージュの女の肌荒れを見るようで、見捨てられても仕方がない運命だった。どぎついカストリ雑誌という大味な妖婦で味を占めた読者たちはもっとキメのこまかい、人間の△性▽の水源を追究したい欲求があった。大衆は、もっと実の入ったエロ出版を待望していた。

以前には、特殊雑誌の会員に加入するということとは、相当の努力と忍耐と金銭が必要だった。軟派出版を通じて性風俗資料を入手し、読むという苦心は生易しい事柄ではなく、刊行者の苦心は勿論だが、購読者側だって、苛酷な取締りの隙間を縫って、発禁だ押収だ、という騒ぎのなかから、やっと珍書一冊を手に入れるのだから、その喜びも亦深かった。戦争という思想の暗黒時代が過ぎ、闇から引きずり出された牛のように、自由の光明に眼玉をパチクリしているうちに、桃色出版の洪水を浴びるといふ幸運な戦後派とちがって、多少なりとも戦前における特殊雑誌に関する知識がある者だったら、その現状をよるこぶべきか、はた又悲しむべきか、途惑うて

しまう△良識▽をも持っていたのである。何故なら、特殊雑誌の会員であることを継続するには、社会的地位や少しく豊かな経済力が必要だったし、然らずんばそれ以上に熱烈な蒐集精神が認められることを必要としたからである。軟派出版物というものは、誰れでも金さえ出せば買えるという訳ではなかった。

それなのに、いくら日本が戦争に負けてしまったからと云って、とうとうこんな雑誌が市販されるようになったのか。と、書店頭で顔を背け、視線のやり場に困ってしまう雑誌が並ぶようになった……。発売当初の『人間探究』は、それでも隠され続けて来たセックスを真正面から追究し、その創刊の言葉にもあるように、人間自身への無智は、各人が心の底に隠匿しているモノがあるからで、そのヴェールを一枚々々剥ぎとって、頭脳革命を敢行させるために、この雑誌が誕生した。と宣言し、また実行したのは、時流に対する役目（使命感）という意味でも間違いはなかった。がむしゃらな感じがする位に、荒々しくセックスに対抗して行く姿は、先ずは一寸した革命家気どりで、勇ましく正直で、敗戦後の性道徳のみだれや、あやまった自由思想

の波に便乗気味の営業政策であったとしても、とにかく一部の本当の文化人も、その所論を披露している。

『人間探究』は、谷沢永一助教授（関西大）の調査によれば、昭和二十五年五月創刊、昭和二十八年八月に停刊全三十六冊か、と推定されている。

この雑誌は停刊までに数回編集者が変わって居り、内容が充実しているのは初期の号で、しまい頃はまるっきり気拔けのした桃色読物雑誌化して、表紙から『文化人の性科学誌』というタイトルも自ら外してしまった。いま倉卒の間の調べであるが、『人間探究』誌の執筆者のリストを、分類すると次の如くである。

◇ ◇ ◇

医学部門では、

竹村文祥。中根巖。押鐘篤。寺田文次郎。

橋爪檳榔子。藤本文桂。西島実。宇佐美正夫。

雪吹周。岡田道一。平島侃一。比企雄三。

竹内茂代。伊藤千鶴子。

社会評論家としては、

クロタキ・チカラ。神近市子。羽仁説子。

大宅壮一。山本杉。高木健夫。赤神良讓。

赤岩栄。阿部静枝。

作家・文芸研究家には、

日夏耿之介。吉田精一。矢野目源一。椿八郎。高橋邦太郎。武野藤介。小西茂也。楠田匡介。岩倉具栄。佐藤垢石。池田みち子。秦豊吉。小島政二郎。武林無想庵。江戸川乱歩。黒沼健。

法医学関係では、

金子準二。浅田一。井上泰宏。

美術評論家・画家に、

西田正秋。原比露志。寺田竹雄。峰岸義一。

荒城季夫。鴨下晁湖。

書誌・書物研究家では、

斎藤昌三。池田文痴庵。青山繁。山崎基次。



「人間探究」創刊号表紙

郎。三宅一朗。森山太郎。尾崎久弥。宮武外骨。森銑三。平井蒼太（書鬼海二）。

次に戦前ではまったく陽の当たらない場所にいた、風俗研究家には、

藤沢衛彦。岡田甫。宮尾しげを。中野栄三。坂ノ上言夫。山路閑古。宮川曼魚。伊藤晴雨。川上三太郎。正岡容。佐藤紅霞。足立

逸郎。小倉ミチヨ。添田さつき。吉田機司。広橋梵。鹿火屋一彦。

その他、中国艶笑文献の紹介に精力的に健

筆をふるった伏見冲敬。演劇方面では北里俊

夫と渥美清太郎。映画の南部僑一郎。性教育

では西村伊作と霜田静志。カメラでは福田勝

治と秋山庄太郎。音楽の田辺尚雄。植物学者

の牧野富太郎。料理の多田鉄之助。観相の田

口二州。アメリカ人で日本研究家のR・レー

ン。切腹研究家の中康弘通。厚生技官の篠崎

信男。宗教では松井大周。

次に、この特異な風俗雑誌『人間探究』の

創刊事情を略記すると、昭和二十五年当時世

相はまだ混乱のうちにあったが、そろそろ物

心両面において安定への方向を目指し、国民

は既に敗戦による虚脱感から立直る気配を示

していた。その頃のある日。もと『改

造』編集長だったS・S、同編集員だったS

・K、そして後に日本の性ジャーナリズムの

世界を独走した高橋鉄、この三名が新橋第一

ホテル前のガード下の一部で、第一出版社と

称して開始したのである。改造解散後は文芸

雑誌や皇室名鑑などというものを出していた

が、面白からずおもい遂に戦後流行の性雑誌

に転向したのであった。精神分析派の高橋は

とにかく、伝統ある改造社出身の両名が、時

流とは申せ、実に思いきった転進だった。流

石に当時でも正統派ジャーナリストはこの二

人を邪道なりとした。そして、ふたりは一般

ジャーナリズムから転落してしまった。『人

間探究』初期の号から、意外におもう程すぐ

れた論考を見出すことができるのは、旧改造

社系の編集者だったからである。然し、編集

仲間では人間探究を旧交のよしみで毎号贈呈

されても、身辺の若い人には見せたくなく

て、その置き処がなくて困った、という話が

伝えられている。以って、この種の特殊雑誌

のおかれた「位置」がわかるであろう。

しかし魚が水を得たように、わが世の春を

謳歌し、広い世界を相手に自由に游泳する場

所を得た、恐らくは後の世までもその名を記

録されるべき、「高橋鉄」が大きく浮び上っ

て来たのもこの時代である。毀譽褒貶のいずれにあるとしても、戦後日本の生んだ稀代の人物であることは確かである。高橋鉄が『人間探究』を通じて大胆な所論を展開した論考は、ご参考までに表題を示すと、次の如くで、その思想の源流はフロイト学派・大槻憲二の東京精神分析研究所における学業に負う所が多かった。

性交為に於ける表情の研究	(昭和25・5)
猥褻論	(昭和25・6)
猥褻人性学	(昭和25・8)
近代科学から見た古川柳	(昭和25・9)
性交態度論	(昭和25・10)
春画鑑賞の心理	(昭和25・11)
男性初夜訓	(昭和26・1)
女性初夜訓	(昭和26・4)
日本性犯罪史	(昭和26・5)
性交戒	(昭和26・6)
陰核の心理	(昭和26・7)
チャタレイ夫人の性交為	(昭和26・8)
艶本人物史	増刊号日本性人物史
曲技的態位考	(昭和26・11)
性愛処方箋	増刊性の悩み解決号
性力性格別性交態度論	(昭和26・12)
艶本艶語分析抄	(昭和27・4)

男根憎悪の分析

(昭和27・6)

仲々この表題を見ただけでもお分りのように、実にどぎつい生々しいもので、戦前では絶対に公開できなかった古川柳艶句、江戸期艶本、東西古今の性科学書などを縦横に駆使して、所謂タカハシ性分析論を思いきり気持ちよくぶちまけ、禁じられたる言葉なども要所々に適度に挿入し、ギリシャ語・ラテン語なども原字で示し、日本の古語辞典をもふるに活用すると云った、目新しい論法であった。四十八手というべき所を「曲技的態位」とやり、また「陰核の心理」とは一体なにを云うのであろうか？ 只あれよあれよと云う



気持で、とにかく実際の所は、なにがなんだか訳が分らなかったが、オルガスムスなどという性用語が大衆に通用するようになったのは、確かに高橋性学に負う所が多であった。

『文化人の性科学誌』『人間探究』をすっかり踏襲した、『文化人の性風俗誌』『あまとりあ』が創刊されたのが昭和二十六年二月、早速東京その他一部の都市で、発売中止騒ぎを起し、発行時期も申し分のない良き時代で人気はたちまち上昇。物凄い売行きで、創刊当初の頃は、私も書店から毎号確実に入手するためには、早目に直接申込みして置いてくれ、などと言われたものである。この両誌を通じて余りにも高橋鉄の文筆活動がはげしいので、両誌を同氏主宰誌と信じきっていた読者も多かったと思う。私もその一入だった。『あまとりあ』社長高橋鉄様、という手紙がずいぶん来たという。(直話)。

落下して行く石を途中で停められないように、もう此処まで来ると、市販性雑誌の、江戸艶本の春画から大切な部分をカットした写真版や、いつまでたっても奥歯に物がはさまったような文献紹介では、もう読者側の一部では、納りがつかなくなってくる、これは自

然の理で、本誌以外の学術的な素肌の文献資料を欲しがらる……。其処の人情の機微を知らぬという風俗出版社はいない。下地はもう十分に出来上っているのだから——否、つくったのだ。愈々未曾有の地下出版・潜行出版ラッシュの時代がやって来る！

◇ ◇ ◇

この時代の潜行風俗出版を正確にキャッチした記録があるので、次にご紹介する。

『近代日本文学史の構想』谷沢永一著（昭和三十九年十一月初版 晶文社発行 三〇六頁 定価六五〇円）のうちにある「文学研究の前提となる性知識の問題」の章で、左記の文献の存在を明示している。

日本生活心理学会（会長・高橋鉄）が、特定少数会員の共同製作者保管用私家版として緊密な組織のもとに、あらゆる悪条件と戦いながら刊行している、

『セイシン・レポート』

『りんが・よに参考資料図譜』

〔註〕。両誌とも現在は刊行が中絶状態だがセイシン・レポートは約30輯まで、りんが・よに図鑑は約18輯まで発行されたという。

レポートは毎号頁数不定、孔版、孔版タイ

プ、活版などにて印刷。図鑑は袋付写真製版数枚ずつ。内容は現代日本唯一の赤裸々な性体験報告研究資料文献となっている『人性体験記録』一冊 孔版・活版
『新小岩娼街に於て売笑生活体験を訊く』正篇及び補遺。

『明治大正性風俗あるばむ』 五冊

〔以上三点も日本生活心理学会の編集発行、人生体験と新小岩はレポートの前身とも謂うべきもの。あるばむは参考図譜資料〕

『雅俗』三冊のみ所見（昭和23・10～昭和23・12）

『奇書』（東京限定版クラブ）。『稀書』

（芋小屋山房）。『奇譚クラブ』（42・6）

拙稿参照。

『生活文化』（昭和28・2～昭和29・5）十

四冊 生活文化資料研究会

『造化』（昭和29・7～昭和30・4）十冊

造化研究会

『新生』五冊 孔版・活版

『風俗資料』三冊 造化研究会内、風俗資料

刊行会

『近世庶民文化』（昭和25・10～昭和42・3）

百一冊 近世庶民文化研究所

『相对会研究報告』（昭和27・9～昭和30・

12）三十四冊 相对会第一組合

以上、此処では先ず谷沢永一著書よりその誌名を転載した。いずれも性風俗史資料として貴重であるが、今日ではバックナンバーを完全な揃物として、入手・被見共に不可能となってしまう。また、それ等の根幹資料に附随した、夥しい数にのぼる別文献、絵画、衛生器具、錦絵複製、催物、見学・実見・旅行会、写真撮影会、座談会、等々の記録洩れを調査したら、我国に於ける性文化の実態を詳しく精査・研究できる筈である。

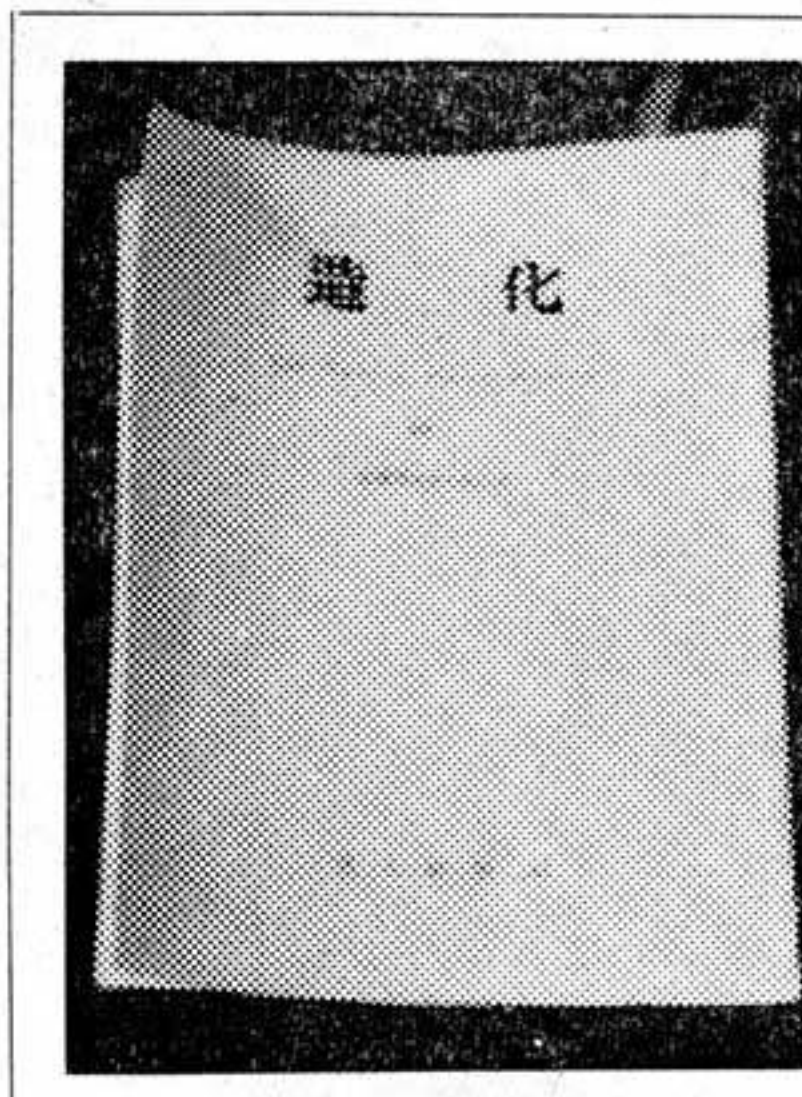
また、男色会員雑誌には、『アドニス』『マン』『羅信』などがあった。ソドミアの機関誌というのの一般には、まったく興味の対象とはならず、門外者が直接文献を入手するのは困難きわまる——男色文献は、独立した別章を用意して説明したいと思っている。

会員制の特殊性科学、性風俗資料誌は今日では益々属目する機会に乏しい。十年か十五年位の歳月きり経っていないのだが、湮滅しようとしている。

◇ ◇ ◇

『造化』に就いて。これの刊行は『生活文化』につづくものであった。

会員雑誌「造化」表紙



創刊号（昭和29・7） 70頁

巻頭口絵写真・裸弁天像6図。創刊の辞。

妖魔の魅惑 坂ノ上信夫。大正の珍本「四季ざくら」青山繁。艶本に現はれたシャレ

岡鹿郎。奇書探求十二年 糸田太平。裸

弁天考 菅原次郎。艶本序文集（4）中野栄

三。明治の珍本「ゑもりの黒焼」岡田甫。

閨房秘戯指南（1）デイブンプート博士、羽

田新一訳。燈草禪師伝（3）伏見冲敬。はこ

やのひめごと（1）新井常雄。

第二号（昭和29・8）81頁

口絵写真、裸体主義者たち「ゾンネン・フ

ロインデ」。去勢の文化史 坂ノ上信夫。

陰名随筆 花咲一男。艶笑落語・豆男マン
遊記 青山繁。四十八手俗名 蓮池一邦。

千夜一夜挿画考 大場正史。明治の破れ句
広橋梵。性のコレクション 竜胆寺雄。現
代アメリカ文学に於ける性愛描写 大野観
はこやのひめごと（2）。燈草禪師（4）。

第三号（昭和29・9）71頁

口絵写真 ヴェランデ「好色歌謡集」挿
絵。処女はつくられるか？ 坂ノ上信夫。

愛慾太平記岡田甫。ハモニカ考 阿南岳史
「ファニー・ヒル」の初交描写 大野観。

産泰神社の彫刻 上野三郎。享楽族物語

春野遊。はこやのひめごと（3）。アート・

オブ・ラブ 羽田新一郎訳。完訳フロッシ

イ（5）広橋梵。燈草禪師伝（5）。

第四号（昭和29・10）71頁

口絵写真 仏蘭西好色画集四図。性的饗宴

坂ノ上信夫。床の梅 並野丈介。駅路の鈴

口 吾妻雄兎子戯編。閨房秘戯指南 羽田

新一。コント・アブテイク 武野藤介。艶

笑秘事類語抄 中野栄三。享楽族物語 春

野遊。会員性史・自慰記補遺 大門兵衛。

姥桜の処女性 二木治。「性」への挑戦

大野観。いつわりの橋 角田庄治。たびな

さけ 南重治。阿部定事件調書 宇佐美正

夫。燈草禪師伝 伏見冲敬。

第五号（昭和29・12）71頁

口絵写真・肉体の門 二枚六図。性的饗宴
（2）坂ノ上信夫。女性の自慰と冷感症 大

野観。おるがずむ俗考 阿南岳史。新選女

学衛生教本 大野鶴郎。無射精完全性交法

大西正之。駅路の鈴口（2）。好色二人女

岡田甫。たびなさけ（2）。閨房秘戯指南

（4）大場正史。性器嗜虐症 風俗資料刊行

会編。フロッシイ（完）。痴婆子伝（1）伏見

冲敬。

第六号 増刊号（昭和29・12）80頁

口絵写真・世界性風俗展三枚七図。西洋婦

人の性愛報告 大野志女須。交會態位異名

集 中野栄三。最新版淫語メモ 糸田太

平。川柳玉手箱 団珠庵主人。大東閨語原

画写真。大東閨語 江古田哲堂。花姉妹

朽木寛。淫楽地獄 桜田左門。

第七号（昭和30・1）68頁

口絵写真・快絶の表情 二枚八図。母神の

饗宴 坂ノ上信夫。アメリカ女性の性生活

大野志女須。オルガズムの随伴現象 阿南

岳史。逢曳日記（1）吉祥寺三郎。子犬つれ

づれ 江古田哲堂。ムーア人の後宮 甘戸

繁多。労働者の性典 角田庄次。ルツボは

たぎる 青山繁。はこやのひめごと(5)。
若い尼僧と唾 羽田新一。痴婆子伝(2)。
駅路の鈴口(3)。

第八号(昭和30・2) 71頁

口絵写真・山海の珍味五図。娼婦の座右書
松戸淳。近親姦の報告 大野志女須。快
絶の表情 阿南岳史。逢曳日記(2)。早熟
少年記 志村喬二。ルツボはたぎる(2)。

三浦三崎の女 荒賀文雄。脐下極楽 風俗
資料刊行会編。三ツ組盃 江古田哲堂。満
久良嘉賀美 団珠庵主人。イヴオンヌ 広
橋梵。はこやのひめごと(6)。痴婆子伝

第九号(昭和30・3) 69頁

口絵写真・了仙寺秘仏二図。性行為につい
て 羽田新一訳述。リングとヨニの具備す
べき必須条件 宇佐美正夫。娼婦の座右書
(2)。艶本の諧謔趣味 並野文介。騒声喃
語集 夢洞山人。会員性史・金髪女の想い
出 青木敏夫。不問語 忍川柳三。現代艶
本ルツボはたぎる(3)。性に目覚める頃
多侃。駅路の鈴口(4)。はこやのひめごと
(完)。痴婆子伝(4)。

第十号(昭和30・4) 71頁

口絵写真・相生源氏挿画四図。正写相生源
氏特輯・解題・貯月亭主人。

読者各位に——只漫然と目次を羅列したと
のみ思わないで下さい。いづれ劣らぬ粒より
の奇稿・秘文・珍文献ばかりで、各位の奇籍
渉猟が進むに従って、思い当る節々が多くな
る筈ですから、また必ず蒐集上の指針ともな
りますから、本誌を大切に保存して下さい。
『生活文化』や『造化』は、江戸時代の艶本
類は別として、また将来の日本の出版文化が
どのように変化するか判らないが、とにかく
近代の我国の出版物では異数のもので、まる
で市販の月刊雑誌と同様に、毎月発行という
点など、この時代の空気をよく現していると
思う。その「創刊の辞」は次の如くである。

今般、其筋の風紀取締に際しまして、『生
活文化』『生心リポート』『近世庶民文
化』『近世風俗語研究』『稀書』などの、
真剣篤実なる会員組織の性愛探求の良書
が、一網打尽となりましたことは、美と平
和を愛し、庶民の良風美俗を打ち立んとす
る、我々、良識あるヒューマニストの誠に
遺憾とする所であります。頑迷無智なる文
化指導者が、性交の表現や肉体美の最も原
始的な自然の部分を削除することは、人間
の生の本能を弾圧し、子宮は愚か地球を破
壊して、死の本能を挑発して、人類滅亡の

世界大戦へと駈り立てることを意味するも
のです。去勢文化人よ、造化(自然)の神
に対して愚劣な反動を試みることはなけれ。
水素爆弾をして、第二のノアの洪水たらし
むること勿れ。世界中の何億兆という、精
子と卵子とは、共に斯くの如く絶叫して、
永久に悲しくも虐げられた、性の十字軍を
くりかえしてゆくことでありましょう。人
間の絶滅する以外に、性行為とその表現は
限りなくつづき、星の数より多い精虫群は
死んでも死んでも、子宮内の卵子を恋し
て、永却つくることはないであります。

(中略) 夫れ人倫の大本は夫婦の和合にあ
り、天地成りゆきに任すことなく、造化の
神の心を以て心となすべく、禁断の木の実
を食べて、各家庭をエデンの花園たらしめ
て下さい。一九五四・七・七 川崎清一
『造化』は、造化研究会(東京都北多摩郡上
保谷)発行。会長は川崎清一。編集人は広橋
梵となっている。この創刊の宣言は、広橋の
草稿で、彼は高橋鉄門下の逸材で、『あまと
りあ』を基点として、『生活文化』『造化』
『新生』という貴重な性文献三誌を世に残し
た。川崎清一は発行名義人にすぎなかった。

花 中 水

(八)

美 眉 野 芳



遠 雷

から梅雨の異常な暑さに悩まされたが、夕方近く遠雷があり、風が冷たく汗をひき、にわかにあたりが暗くなった。

湯上りの匂うような肌をさっぱりしたゆかたに包んで、寿美麗夫人は鬼頭老人の寝室に足を運んだ。

生花の稽古と称して家を出たが、稽古は休んでしまい、中雄一郎をいつものホテルに呼び出して、午後を過ぎた。ホテルでシャワーを浴びたものの、男の強烈な体臭が気になつて、帰宅早々もう一度入念に汗を流したのである。

老人は離れの寝室で一人晩酌を楽しんでいた。この頃、食事は軽くすませるようになった。

だが、酒量はいえってふえたようであった。銘柄は好みがあり、人肌の剣菱が多い。肴は生ものに決めている。

離れの廊下に立ち、暗くなってざわめく庭を見ている寿美麗夫人に、隣りに坐るように老人は声をかけた。

「いつものようにな」

「一雨降りそう」

誰へともなくつぶやいて、寿美麗夫人は老人の側に坐り、膝を立てた。ゆかたの下に、何も着ていない。

銚子をとって杯につぐ。立膝したゆかたの裾に、フと老人の箸がかくれた。老人は寿美麗夫人が側にいると、生ものに紫を使ったことがない。箸がつつく。

寿美麗夫人は、老人のなすがままにまかせて、長い洗い髪を梳っている。

遠雷が近づいた。

「涼しい風」

老人に酌をしながら、寿美麗夫人の眼は、渡り廊下の中ほどにある松の太木にかくれた牧二郎を追っていた。老人は気がついていない。

老人の、夜の激しい求めと、中雄一郎との昼間の逢引で、あれから二郎をかまっていな

い。今夜も行かれそうにないわ、と寿美麗夫人は思う。だるいの、なんとなく。遠雷に係なく、老人の箸は、膳と寿美麗夫人の立膝の間を盛んに往復する。

「痛い」

寿美麗夫人は眉をひそめた。

松の陰の二郎にちらっと視線を投げかけながら、寿美麗夫人は胸の内で中雄一郎のことを考える。老醜の斑点が肌に現れた老人のかわりに、若若しく水々しい青年に魅かれるのは、ごく自然なことだと思う。

女遊びの上手な中雄一郎は相手にしていても面白いし、飽きさせない。女を知っているだけ、女を喜ばせるコツを知っている。いいなりになりながらも、不意に反撃して寿美麗夫人を狂おしくさせる。

二郎は未知を導く楽しさだけのこと、まだ子供すぎる。でも、女を知らなかった子供を大人にする楽しみが残っている。

「あっ」

寿美麗夫人は小さく叫ぶ。

老人の骨のような指が箸のかわりに肴をつまむことは初めてではない。鳥肌が立つこともある。

指だけではなかった。老人の貪欲な唇が箸

の代用になることも珍しくない。

「いけない、二郎が……」

……見ている、とは言葉にならなかった。

二郎、も口の中で消えた。

中雄一郎が求めたと同様に、二時間とおかず老人も求めてくる。寿美麗夫人は老人の勢いに押されてのけぞった。老人と、雄一郎と、二郎と……畳に爪がたてられた。

渡り廊下に足音がする。老人が素早く寿美麗夫人から離れた。二郎が、かわりの銚子を運んで来たのである。ゆかたの乱れを直した寿美麗夫人が、二郎から盆を受取った。

「御苦勞様、あとはわたくしがしますから、お部屋に戻って休んで下さいね」

二郎は伏し眼がちに頷いただけで、老人も寿美麗夫人も見ようとしない。怒っている。寿美麗夫人の頬に微笑が浮かんだ。こわい顔をして何を考えているのかしら。

老人の側で立膝をした寿美麗夫人を見るのは、二郎はこれが始めてではない。廊下を渡りながら、老人の顔が寿美麗夫人の前にかがみ、寿美麗夫人の肩がかすかに振るえているのを、幾度か見たことがある。

しかし、老人の酒席の癖を、二郎ははっきりと眼で確めたわけではない。老人が酒の肴

を、こともあろうに、寿美麗夫人の体を紫代りにして一旦とけこませなければ氣に入らないとは、考えも及ばないことだろう。

「雨戸を閉めなさい」

二郎が去ると、老人は云った。

「閉め切っては暑いわ」

「無双を開けておけばいい」

「でも」

「今夜は風がある。雨戸を閉めてもけっこう涼しいよ」

寿美麗夫人は二郎の熱っぽい視線を気にしていた。部屋に戻らず、二郎は亦あの松の大木の陰から、寝室の二人を見つめているのに違いない。無双を開ければ、そこから覗かれる。

だが、老人は二郎のことなど眼中にないらしい。二郎が様子を伺っていることすら気がついていないのかもしれない。

無双は武者窓ともいわれ、昔の剣道場などによく見られた引き違い窓のことである。全開にも半開にもできるし、風が入って涼しい。

老人の寝室にあてられた離れは、上から引き違いの欄間から暑い空気が外へ、無双雨戸の下から涼しい風が入るように設計されている。

た。老人が人工的なルームクーラーをきらった結果である。

寿美麗夫人は雨戸に手をかけた。寝室の雨戸を閉めることは、それだけで、老人が要求していることは知れた。まだ早いのに。寿美麗夫人は松の大木を見つめながら雨戸を静かに閉めた。

酒の酔は老人の欲求を軽く刺激しているようであった。ゆかたの寿美麗夫人は、だてじめでうしろ手に縛られた。手ぬぐいが荒々しく唇を割る。

お膳の上にあがれ、と老人は低い声で命じた。

寿美麗夫人はよろめきながら膳の上にあがり、なかほどに正座した。と、老人は寿美麗夫人の髪をつかんで前に振り伏せた。

「あっ」

正座がくずれて裾が乱れた。

「尻をあげろ」

老人は容赦無くゆかたの裾を捲り上げる。

澄み通るようなまっ白な丸い寿美麗夫人の臀部が羞しげにくねる。老人のざらざらした皺深い手が、愛玩用の小指をいたずらするように、無遠慮に伸びてくる。

足音を殺して開いている無双にへばりつい

た人の気配がした。守宮やもりのように獲物をねらっている。

膳の上で、羞恥に満ちた肢体の寿美麗夫人は、無双から二郎の鋭い視線を感じて、瞳を閉じた。無双に向かつて坐るのをためらったばかりに、かえって老人の巧妙な罠に落ち込んだようであった。

「そのまま、動くな」

老人は無双に背を向けている。老人は机の上の書きそんじた半紙のすみを破くと一本のコヨリをつくった。オリーブ油をいつもは何に使用しているのか知らないが、コヨリの先にオリーブ油をつける。

そのコヨリで、寿美麗夫人が最もいやがることを、老人は、しようとするのである。

「あっ」

「動くんじゃない」

赤ちゃんには△コヨリ浣腸▽をすることがある。老人は膳の上の大輪の花のような夫人の前にどかっとかぐらをかき、長いコヨリを自由に動かしている。無双から丸見えであった。

くすぐったいのだろう。こそばゆいのだろう。爛熟した妖花の、咲くかと思えばつぼみつぼんだと思えばまた咲く風情。大輪の花は

水々しく美しい。

「やめて」

猿ぐつわの下で、大輪の花はそう叫んでいようであった。

「お願い、許して」

強く食い込んだ手拭に舌をおさえつけられ、水々しい妖花の声は言葉にならない。呻めき声が寝室をふるわせた。

意外なことがおこった。

こきざみにふるえていた大輪の花から、小さな花の実が、ちらっと顔をのぞかせたのである。

老人がコヨリを投げ捨てた。老人の歓喜に満ちた喚声はまるで怒号のようであった。ゆかたの裾が老人の顔をおおった。

遠雷が長く続いた。

いつしか更けて

物置の天井から下がっていたのは、増の面をつけた裸女であった。

それも、逆に……

うしろ手に縛られた女は、天井の梁につけられた滑車から、一本にまとめられた足首を吊るされて、ゆらゆらと揺れていた。

くずされた黒髪がさかさに長くたれ、海の

藻のように右に左になびくのが無気味であった。

能面の下から、逆吊りにされた女の悲鳴は聞こえない。呻めき声も洩れない。能面の下に強烈な猿ぐつわがはめられているのか、女がすでに失神してしまったのか、二郎にはわからない。

たれた黒髪をまとめて握んだ老人が、時計の振り子のように、逆吊りの女体を振り廻した。

二郎は息を呑んだ。こんな残酷なことをしてもいいものなのだろうか。頭に血が下がって女が死んでしまうのではないだろうか。鬼頭老人の背中だけが、やけに冷酷に、無表情に死人をあつかう墓掘りの老人に見えた。

牧二郎は始めて鬼頭三郎太宅を訪れたときこの物置で、老人が増の面をつけた裸女を天井から吊るして責めているのを、偶然覗いている。増女の秘宝とも思えるような、キラキラ輝く水滴が、流れていた。そして滝をなした。それは神秘的な感を二郎に与えた。老人はその滝の真下に立って全身に浴びていた。西日がまるで後光のようであった。

その光景が再現されているのである。大の字に吊るされた以前と違って、逆吊りに女を

責めるのは、二月とたたないうちに、老人の遊戯がそれだけ進行したということなのだろうか。安易な責めに飽きて残酷な遊びを求めようになったのだろうか。

その裏には、老人の精力の低下が認められるのかもしれない。

老人が竹の杖を右手に握ると、いきなり死んだように吊られている女の尻を打擲した。杖の勢に押されて、ぶら下がった裸女は上に飛びはねたように見えた。

二郎は、能面の下から、地獄の悲鳴を聞いたように思った。そら耳だろうか。

予備校の教科書を右手に下げたまま、小さな穴に顔をつけて物置の中を覗いていた牧二郎は、背後に人の気配を感じて飛びのいた。また、見つかった。

が、二郎のうしろに立っているのは、老人ではなかった。いつの間に近づいたのか、寿美麗夫人がひっそりと寄り添うように立っていた。

濃い藍地の翠紗に、秋草を右摺りでほんのりと白く染めだしたきものが、アップにした髪に映えて妙になまめかしく美しい。

二郎が思わず声を立てようとするのを、寿美麗夫人のやわらかな掌が、すっとのびて二

郎の口をふさいだ。静かに首を横に振る。だまって。

二人は物置をそっと離れた。白砂の州を踏み、池のほとりの置石になんとかく坐る。物置と池は母屋にさえぎられている。今しばらくは、老人は増の面をつけた女を責めることに熱中して、物置から出て来ないだろう。

二人の手は、物置から握られたままであった。握り合った掌に、汗がにじみでていた。

「奥様じゃなかったのですね」

「吊るされていたひとのこと」

「ええ」

「わたくしだと思っていたの」

二郎は頷いた。

「それで覗いていたの」

「――」

「わたくしのからだを知っているくせに」

二郎は顔を伏せた。頬がほてる。

「わたくしじゃないわ」

「じゃ、誰なのでしょう」

「香葉さんよ」

寿美麗夫人はこともなげに勘解由小路香葉夫人の名をあげた。どういうわけか知らないけど、主人は、香葉さんには増女の面をつけさせ、わたくしには小面の面をつけさせて責

めるのよ。主人がなんで区別したのかよくわからない。

寿美麗夫人の燃えるような瞳が二郎を射すくめた。

「わたくしが、主人に、今夜はお花の友達のところにとまるって電話をしたら、すぐこれなんだから」

「御主人が勘解由小路の奥様を呼んだのでしようか」

「さあ。香葉さんが、たまたま遊びに来たのかもしれないってよ。どっちも同じことだけど」

寿美麗夫人の甘い香りが二郎を包んだ。二郎は激しく唇を吸われて呻めいた。

「今夜は帰らないことになっているのよ、わたくし」

熱い頬が二郎の顔に押しつけられた。熱い息が二郎の耳をくすぐる。

「二郎さんのお部屋に行きましょう」

「でも」

「大丈夫よ。主人は、二郎さんの部屋を覗くようなことはしないわ」

寿美麗夫人は二郎の両手をはさむように掴んで立ち上った。合掌。

……それが当然のように、寿美麗夫人は押入

れをあけて床をひく。

男ものの殺風景な二郎の布団に、透かし組みした涼しげな羅の帯が長々と延び、さわやかな無地のりんずの帯揚げが落ちた。

麻の長じゅばんを肩にはずし、寿美麗夫人は二郎に背を向けて肌じゅばんを脱いだ。肌は見せない。

「こまごましたものを押入れにかくして」
振り返って寿美麗夫人は云った。

「きものもね」

腰のものと肌じゅばんだけは、二郎の眼に触れることなくしまわれた。

寿美麗夫人は二郎の布団に横たわり、軽い夏がけで胸までかくした。

「どうかしたの」

押入れの前でぼんやり立っている二郎に微笑みかけた。

「抱いてくれないの」

「汗を」

と二郎は息を殺して答えた。

「汗を流してきます」

「いいの」

と寿美麗夫人は云った。

「そのままでもいいの」

「汗くさくて」

「そのほうがいいのよ」

「――」

「早く」

寿美麗夫人は二郎に右手をのばした。

二時間ほどたっただろうか。荒々しい老人の足音が台所に響き、二郎ははっとして寿美麗夫人をかばった。顔を見合わせる。

「二郎、もう寝てしまったのか」

「頭が痛くて」

「そりゃいかな」

水道をひねる音がした。老人は水を飲んでいるらしい。寿美麗夫人が身をちぢめて二郎の背中にかくれた。畳に投げだされた長じゅばんを二郎はあわてて引っ張る。

「腹がへった。寿司でもとろう」

「はい」

老人に部屋に來られてはまずい。二郎は飛び起きると、寝巻きをひっかけて台所に出ていった。どうして早く気がつかなかったのだろう。一瞬、気が動転するのも無理はない。

老人は二郎に風呂をわかすようにたのみ、寿司がきたらたべて寝てくれ、とやさしく云った。

「寿美麗は今夜は帰らない。話があるから生花の友達のところにとまると云ってきたが、

たまにはわしの側から放れてのびのびとするのもいいだろう」

老人の気嫌の良いのは、香葉夫人を気のすむままに責めたからなのかもしれない。

「木戸はわしが閉めよう。女同志の話なんてくだらんと思わないかね、二郎」

二郎は自分のからだに染みついている寿美麗夫人の移り香を気にして、老人から少しはなれ、風下に立って話をきいていた。老人に気がつかれたらどうということになるかわからない。

二郎は老人の顔をまともに見ていられなかった。それにしても、こんな危険なことを、寿美麗夫人はどうしてする気になったのだろう。二郎が三人前の寿司を離れにとどけたとき、平紹の黒も妖しい喪服の香葉夫人が、平然と寿司を受取ったのには驚いた。知人に不幸があつた帰りなのだろうか。

知人の葬式に列席して、香葉夫人の妖しい血が燃えたのだろうか。喪服のままで老人に抱かれたのだろうか。黒は罪の色だ。

香葉夫人の乱れた髪は器用に独特の夜会巻にまとめられていた。

小鳥に親鳥が餌をあたえるように、寿美麗夫人は寿司を口に含んでは、口移しに二郎の

口に運ぶので、二人の夜食はなかなか終らなかった。

食事の最中でも、夜具の中に、鳶のようにしなやかなからだがある。

二郎に何もさせず、寿美麗夫人は火照ったやわらかな肢体をくねらせている。

子供はだまって年上の女のなすがままにされていればいい。

二人とも、一言も交す必要はなかった。

二郎の肩に寿美麗夫人の齒のあとがくつきりと浮かび、さっと青くあざが広がった。

河上遠く降る雨の晴て逢ふ夜を待乳山

あふて嬉しき……

離れから長唄が聞こえてきた。寿美麗夫人が耳をすます。

翅かはしてぬるる夜は

いつしか更けて水の音……

△都鳥▽である。香葉夫人の声であった。

思ひおもふて深見草……

その声がとだえた。老人が喪服の香葉夫人に何かしたのだろうか。

結びつとひつ流れ逢ふたる夜もすがら

と寿美麗夫人が受けた。

早きぬぎぬの鐘の声……

ふと二郎が寿美麗夫人の腕の中から放れようとすると、

「いや」

全身をおののかせて二郎を抱きとめた。

「どこにもいかないで」

「水が飲みたい」

「水」

寿美麗夫人の顔がふわりと二郎の顔をおおひ、豊潤な唾液が二郎の口にあふれた。

「飲むのよ、飲んで」

異常とも思える程の親密感が、渦のように湧き上った。

離れの老人の寝室から、とぎれとぎれに、息もたえだえな香葉夫人の声が続いている。

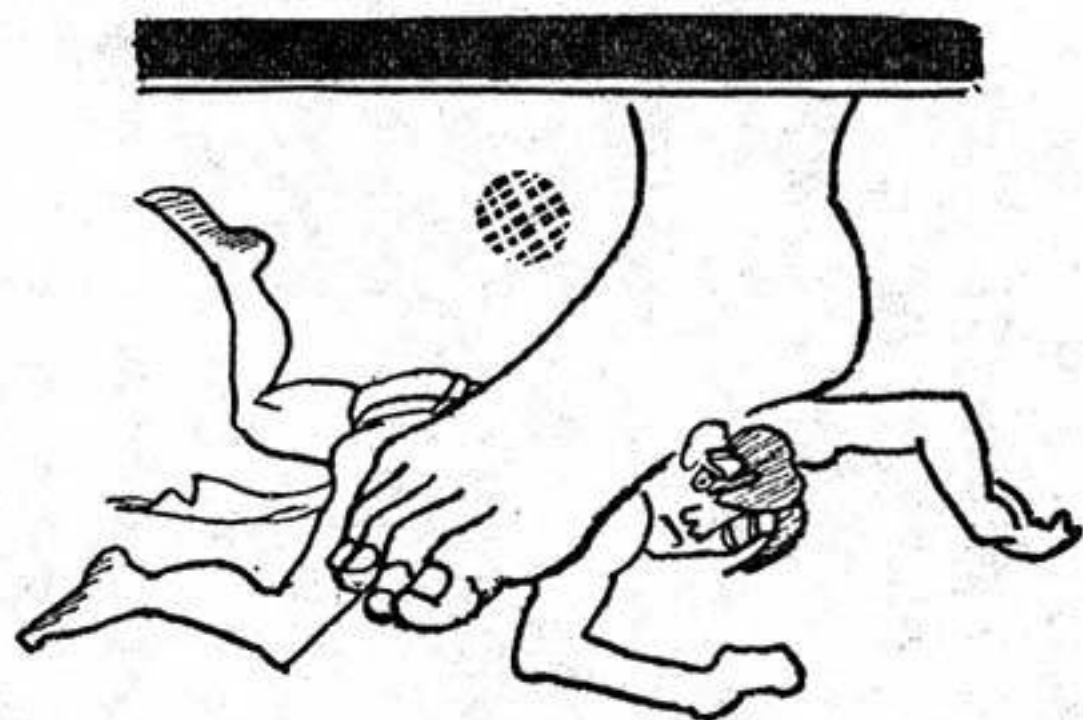
憎や……つれなく……

言葉の間に、言葉にならぬ絶叫が飛んだ。

明る

夏の夜

(続く)



私のマゾ雑記帳

馬場好男

“馬乗りになる”という言葉は、私は子供の頃からタブーのようなものであった。何でもそうなのは明らかでないが、要は自分が女性からそうされたい欲望のとりこになっていたのだ、それを口にするのは、現実にそうされた弱さというか、或はそうされたいと希っていることが、人に知れることを恐れたのかも知れない。だから独りきりになると、落書きのようにこの言葉で文章を綴ったり、口に出してみたりしたものである。

小学校五年生の頃だったが、私の家の近所

にふじ子という娘がいて、当時は女学校の二年生であった。何かとよく面倒をみてくれる娘で、私には女の姉妹（というとおかしいが）がなく、彼女は女ばかりで男の兄弟がいなかった。その故か私は彼女を実の姉のように慕ったし、彼女は又、私を実の弟のように可愛がってくれた。

そろそろ夏休みになろうという頃、学校の帰りに私はたまたま彼女と一緒に、鞆をおいてから近くの川の堤防に遊びに行こうと約束した。私の家の近くに、K川という割

と大きな川があつて、梅雨時になると堤防の辺まで水があふれて裏々と濁水を流すが、ふだんは堤防のあたりは河原となつて、水は青く中央の辺をゆったり流れる川であつた。入道雲がニヨキニヨキと白い綿をつみかさねたように空にひろがっていたが、私とふじ子は気持のよい川風のふく土手を歩いた。この時まで、私は彼女を自分の性癖の対象にしたことは余りなかった……それほど姉のようにしたっていたのかも知れない。

私は、色白く桃色のさした彼女の頬に、川

風になびく黒い髪と、その瞳を横目で見ているうちに、誰も通らないこの静かな堤防から河原におりてみてぎゅうぎゅう抑えつけてもらいたい欲望を感じてしまった。だからといって自分の体の上に跨ってくれとはとても口に出れないし、子供のチエを働らせて私は或る質問をした。

ちょうど学校の勉強で、読方（当時はこちら）の読本の中に、上杉謙信と武田信玄が川中島で相對峙した時、それは戦国時代、越後の謙信と甲斐の信玄が信濃の川中島を中心に、対戦を重ねること前後五回。この四回目がいわゆる海津城から出撃した信玄が、妻女山から千曲川を渡って奇襲攻撃をした謙信との一騎打をした戦いで、その後、両軍から最強の武士を選んで一名ずつ出し、河原で一騎打ちをさせて勝敗を決しようとしたことがあったが、この一騎打ちが、読方の読本の中に出ていたのである。

この時、両軍から出た武士の名前は失念したが、一騎打ちはなかなか勝負がつかず、やがて組打ちとなって謙信側の武士が力勝り、信玄側の武士を組みしき、馬乗りに跨って首をとったと書かれてあるのである。

私はこのくだりは本当は好きでなかった。

挿絵にも組打ちの場面があり、謙信側の武士が馬乗りになって相手の腕を膝でふみしき、あわや首をかきとろうとする絵であった。私は自分がいつも負けている側になった気がして、それにこの馬乗りという言葉が大きき口に出すと顔が火照る思いであったから、この頃は早く終わった方がいいといつも思っていた。そのくせ独りになると此の絵をいつまでも見ていたし、女の武者が上になっていたらどんなにいいだろうと思ったりしていた。

「ねえ、お姉さん、僕、読方の本のことばが違っているのをみつけたよ」

私は、まじまじとふじ子の顔をぬすみ見しながら質問をはじめたのだ。

「あら、教科書が違っていることってないわよ。でも、それ、どこ？」

「あのね、川中島のところでね……」
とまだ習っていないその箇所を説明し（勿論、彼女は既に習っているのでよく知っていた）

「馬にのらないのに、馬乗りって書いてあるよ。あれは人に乗ったので、馬じゃないでしょう？」

今、考えるとよくまあ、私も考えたものであった。

ふじ子は、とつぜん大声で笑いはじめた。「バカねえ。あれはねえ、こういうことなのよ。馬に乗るときは、ほら、こんな恰好をするでしょう」

と彼女は両足をひろげて跨る恰好をしたのに、私は心臓がハリさけるような気がしてしまった。

結局、馬乗りの言葉を、そのように形でみせて判りよく教えてくれたので私は満足してうなずいた。そのくせ、もう自分の心をどうにもすることが出来なかったとみえて、めんみつな？ 計画のまま、突然、ふじ子の背後から堤防のふちの方へぐいとおしたのである。

「きゃア、危いわよッ」

ふじ子が大げさに叫ぶと、私は「やあーいやあーい」と笑いながら逃げ、河原の方へ降りた。

「よくもやったわね。ようし、待てッ」

ふじ子も私のあとを追って河原の方へ降りて来たが、もうすぐつかまる、というところ、そこは河原の中でもやわらかい草の生えたところで、石につまずいたふりをして私はどおっとつんのめってうつぶせになったのである。

「さあどうだ、つかまえたぞ」

ふじ子は私の体の上におおいかぶさるようにして、どっかと背中中に馬乗りになってくれたのだ。ぎゅうとおしつけるふじ子のお尻が背中を通して腹の方に砂地に重みを感じて私は一瞬、酔ってしまった。

「ごめんよ、ごめんよ」

私はうれしそうな声を出して？ あやまった。ふじ子も大声で笑いながら腰をあげてくれたが、私が

「本当に馬乗りされちゃった」

というと、ふじ子は又、大声で笑った。そして私が、又イタズラをしそうな恰好をする

と、

「今度はいつまでも乗るわよ。ごめんっていても許さないわよ」

と、きめつけた。

○

○

大映で、三回目の「痴人の愛」が製作上映された。ナオミ役は清純女優で売出していた安田道代である。

果してこの大役がとっていたら、出来てみるとなかなかの熱演で、身体も立派でマスクもよく、原作にも忠実なこの作品は我々必

見のものとなっている。

新聞、その他の映画評は余りかんばしくないうのだが、私にはその批評がどうであれ、三回もある馬のりシーンに胸をおどらせ、二週間の上映期間中に、五度も同じものを見てしまった。単純といわれても自分さえ満足するのなかまわないことで、入場料を措しむことなくせっせと映画館に足を運ばせたのであるから、我ながら全くおかしい話だ。

映画の中で雑魚寝のシーンも圧巻で、黒いビキニ姿の半裸で、ナオミが大きく脚をひろげて服の中に三人の男を入れ、顔を足でふんだり蹴りつけたり、果はその足にキスさせたりで、生つばをのむシーンの連続であった。馬にするとともに、はじめはビキニの恰好で、やはりパンツ一枚の小沢昭一の譲二にまたがり、部屋の中を幾度となく這い廻らせる。

次は背広に上衣を脱ったワイシャツ姿の譲二に、トレアドル・パンツとブラジャーだけの半裸で跨り、最後はクライマックスの、男を完全に征服するところで、ここは湯上げタオルを裸の上にまきつけての乗馬シーンだ。ムチも、クツベラにしたり、スリッパにしたりで、手綱をつけてこれほど女の男への馬の

りシーンを見せたのは日本映画始まって以来と思われる。

特に、一度はナオミと別れようと決心した譲二が、ナオミの肉体と魅力に負けて、馬になって這い廻りながら、

「もう離さないぞッ」

と叫ぶと、ナオミも

「私だって譲二さんしかいないのよ」

と胸を張って譲二の馬をのりこなしながらやがて泣きじゃくるシーンは、正にサド女性とマゾ男の結びつきのようで面白かった。

大映封切館は、たたみ半分位のポスターを板張りで出していたが、この図柄は安田道代のビキニの肢体が、背広を着た小沢昭一を馬にして跨ったもので、通りすがりの女性たちが、

「あら、すごいわね」

「ほほほほ」

と肩をたたきあって笑ったり、横目でにらんで行ったりで、これをみているのも楽しかった。観客に中年男性が多かったのも、何となくうなずけるようであった。

とにかくよい映画であった。

○

○

サンケイスポーツに連載されている、阿木翁助氏の芸界四季の中にこんなのがあった。女性時代という題で

歌手の芝居や、ミュージカルや西欧古典を上演する劇場には中年老年の女性。ちかごろでは寄席にさえ若い女性の姿がふえた。

飛行機や新幹線にも、集団のあるいはグループの女旅客が一杯だ。

温泉も海も山も、女たちは群ってあそび歩いている。

大学さえも女子学生がふえつつある。

成人学級も講演会も、今や……。

テレビのコマーシャルも、女の購売心をあおるために懸命だ。

電気コメトギ機や電気カツブシ削り機まで出来ているのにはびっくりした。

男はいよいよ働らき蜂となって女に奉仕するためにイノチをすりへらしてゆく。

女性に奉仕する世の中、女権拡張の世の中個々の生活の中には、まだまだ女性は弱きものの域をぬけないものもあるかと思うが、今やマスコミの力で強くなった女性の進出はいちじるしい。勝手なもので、男女同権をいちやく叫び、進取的な考えをもっているかの

如く女性尊重の旗じるしをあげた男共が、男性の女性化で、その権力を失ってくると急にあわてて復古調を希望し、女性のありかたを批判している。

が時すでに遅く、女性の力は津々浦々に充実して、今後、ますます勢よくのびはしても衰えることはあるまい。

読売国際ニュース（八月上旬分）で、団地マダムが暇をもて余してゴルフ、ギャンブル、ボーリングと昼間のタイクツしのぎに一生けんめい励んでいる、いわばレジャーマダムの生活を写していた。

これらの夫は、汗水たらしてあくせくと、百円か二百円もたされて働いているのである。此の頃は、外国はレディ・ファーストであったり家庭第一主義にものを考えるが財布はたいてい夫がにぎり、家を出るとき百円とか二百円をおいてくるので、百円ワイフ、二百円ワイフが実態であるなどと言ったりしている。都合のよい悪いでいろいろとよく変わるものだが、何をいっても女性の力が強くなったからこそ、現われた現象であろう。

朝日新聞の家庭欄に、音楽評論家の蘆原英了氏が次のようなおもしろい一文をのせていた。

どこのだれが決めたのか知らないが、日本の男性の世界的評価は第三十六位、日本女性の評価は世界第一に位するということがつたえられている。

これはおそらく、おもしろ半分のデータだろうが、たぶんそんなものだろうと思わせるところがある。みんながそれに本当らしさを感じるからこそ、これが話題にもなる。

外国人のみた日本女性は、和服を着て美しく、しとやかで、優雅であり、清潔である。それに反して男性の方は、めがねをかけており、レインコートを着てきたならしく、無作法である。

しかしある日本男性がこれに対して、こういうことをいった。なるほど日本の男性はダメで、三十六位であるかもしれない。しかし第一位をかくとくした女性をこしらえたのは、ほかでもない。日本男性である。その功績を認めないのは不都合である、と。

いろんないいかたもあるものだ。なるほどなるほどと私はおもった。

たしかに徳川時代の日本男性は、婦女子に、さきほどあげた「美德」を与えている。しかし同時に大きなマイナスも与えている。

それは女性の向上というものを抑えるために女性の悪口を女性自身にいわせるように仕組んでいることだ。女性の向上を、女性自身によって抑える方法を考案している。そしてその伝統は、今日まで脈々として残っている。

めぐまれた女性がいる。それをうらむのはほかならぬ女性である。だからテレビ番組の人気のあるのはいつも不幸な女性が主人公になっている。つまらぬ例だが、毎日出あっている奥さんがいれば、あの奥さんはいつも出歩いているというのは同性である。

あの奥さんは化粧が濃い、あの奥さんはダシナに皿を洗わせている。亭主をシリにしているとは非難するのは、ほかならぬ女性である。男性はいつだってそういうことには口だしをしない。男性は何の口出しもせずに、女同志の足をひっぱりあうようなシステムを考えたのである。

私は自分が日本男性であるにもかかわらず一日も早く日本の女性がこのシステムを看破して、全女性が手をくんで、女性の向上に努力されることを望むものである。

それには難しい理くつよりも、まず女性が女性同士のつまらぬ悪口をいわぬことから始めるべきだと思う。

そして母親は娘に対してばかりしつけをやかましくせず、ふたことめには「そんなことをしたらお嫁さんにいつて笑われますよ」という前に、男の子をきびしく訓育すべきだ。無作法だったり、暴力をふるうような男性を育てぬことだ。三十六位になるような男性を絶滅させるためにも、全女性は一致団結すべきではなからうか。

これは一と三六の間と題してのものだが、世界的評価の日本の女性が、男性より優位であることはたしかといえよう。

M族のためにも……。

○

○

会社の女子事務員が三人、休暇をとって旅行に出かける相談をしていた。みんな若くて十九才が二人、二十才が一人だ。伊勢志摩の方を廻ってくるということで、何気なく私が此の相談に力をかしていたら、ひょっとしたことから結局、私も彼女らと一緒に出かけようということになってしまった。二十いくつも年の違う彼女らとの旅は、いささか面映ゆくもあったが楽しくもあった。彼女らも、女が三人だし年令が違いすぎる男性なら安心だし、はじめての土地への旅行にも心配なく行

けるといふ気安さがあったらしい。

「経済的にも助かるわよ」

と早くも人にたかりそうな言動をはくのもいてヒヤリとさせられたが、とにかく二泊三日の旅行に出ることとなった。

家の方には出張だとウソをつき、新幹線で名古屋へ出るべく朝早く集った。

全く彼女らは騒々しかった。会社の勤めや家庭から解放されたことも手伝ってかよく喋り、よく食べていた。ピチピチとした躍動的な感覚と匂いがムンムンとして、三人の娘たちにかこまれた私は満足であった。差入れのウイスキーをちびちびとやりながら話の中に入って、二時間という時間が全くアツという間に過ぎて名古屋へ着いてしまった。

旅行のコースは、当日は伊勢の賢島に出て豪華な旅館に泊まり、デラックスな気分になりたいたいということで、次の日は逆に国民宿舎スタイルでとなっていた。

名古屋から中央線で入ったところに定光寺というところがあって、その山あいには私の親戚の別荘があり、そこを借用することにしていただ。この話をしたことから私も此の旅行と一緒に出かけようになったともいえるのだ。

あぐ湾や、鳥羽湾を廻って海女や真珠の養殖場を見物し、むかしと違って伊勢神宮はサツと拝んで通り過す若者の気質に感心したが、夕刻、Kホテルに着いた。

あぐ湾を眼下に見てなかなか感じのいい冷房のきいたきれいな部屋に通されて彼女らは大声をあげてよろこんだ。泳ぎに行きたいとか、時間がないとか、写真をとろうとか全くうるさいほどだが私は少しも苦にならず、却って私がはしゃぎすぎて先頭に立ってゆく有様であった。道中、会社での上司、部下ということは一切ぬきということにしてあったし、旅行での解放感と、恋人とは到底考えられず、むしろ父親と一緒にするような気持ちだから、彼女らの態度もきわめてオープンで、私の前で足を投げ出したり、ゆかたの前がずれてむっちりとした太腿が出て平気であった。海の幸ともいうような種々の御馳走に、四人でビールを一ダースもあける放れ業をやり、みんなそれぞれに酔ってもまだ遊びたらない様子であった。

旅行に出る前、私は同行をすすめられた時、

「一緒に行くのはイヤだよ、君らとだと、日頃の仇とばかりに、何をされるかわからない

から」

と笑ったのだが、その時、布団むしにしようとか、三人で監禁して、拷問にしようなどと、物そんな意見まであって、内心、私は期待をしていたことが現実におこったのである。

私は入口にある次の間のような三畳位の部屋に寝るからという、私達は信用しているのだからそんなに気がねをしないで下さい、ここでみんな一緒に寝ましょう。ということになった。尤も十二畳位の部屋だから楽に布団は四組はしける。私は三つ敷いてある布団の頭の方へ布団を敷いてもらったが、そこへごろりと横になって

「僕は君達に遠りよして次の間に寝ようとしたんじゃないよ。君達にゴウカンされると大変だと思ったのさ」

という、三人はキャアと笑い出した。

「まあ、図々しいわねえ」

「みんなで、やつつけましょうよ」

と、けんけんがくがく。私の誘いの言葉にのって、一人が夏掛けの布団をもって、そつと私の足許にしのびよった。私が知らぬ顔をしていると、うわアとかん声をあげて、私の

体の上に布団をかけてのしかかった。

「みんなで抑えつけるのよ、早くッ」

「それッ」

とばかり三人が私の体の上にとびかかってきたのだ。

「おおいッ、よせよせ。よしてくれッ」

私は大仰にさけんで手足をわざとばたつかせる。ゆかたを通して三人の娘の体が快く暑くのかかるのが肌でわかる……というの顔はうすい布団にくるまれているからだ。はね返しそうな様子を見せて楽しんでる内はよかったが、思わぬ誤算をしたのは、彼女たち、全く天しんらんまん、加減すること知らずにいるばかりか、たまたま用事で入って来た女中さんの前でも平気だったことだ。いい年をしてと思われるのが嫌で、本気になってはねとばそうしたら、酔った勢いもあったのか、腕や膝でおしつけていた彼女らは、これでははね返されるとばかり、その内の二人が私の背と腰の上に、馬のりになってしまった。そして一人は私の両足首をしかとおさえて、ようやく頭の布団をはねのけたものの、身動きも出来ない位、おしつけられてしまった。笑いころげる女中さんの手前もあって、

「若い者にはかなわんよ、見てないで助けて下さいよ」

と照れかくしの悲鳴をあげる。

「日頃、しごかれていたウサ晴らしよ」

「一年に一度位、こんなこともなければね」

と勝手なことを人の体の上でいっている。

ちよっと年のいった女中さんは、

「いい加減にして上げないと、帰ってからこんどはうんと苛められますよ」

という

「ううん大丈夫よ。そんなことをしないように誓わない限り許さないんだから」

と、すましている。あげくに腰の上に乗っているのが、前に乗っているのに抱きついて、足を抑えている娘に

「あなたも乗って、早く」

とせかすと、うなずいたその娘も私の両ものあたりへ腰かけてしまった。肉づきのいい三人の娘で、大体五十七、八キロ位と思われるのだから、まともに抑えつけられて重いの何の、恥ずかしいと思っても、はね返すことが出来ない。

「参りました、降参です。もう許して下さいよ」

と、おどけて謝る始末だ。

「若い方は、本当にいいですねえ。では、ごゆっくり」

女中さんは笑いながら出ていったが、彼女らはそれでも許してくれない。

ようやく解放されたときは、いささかふらふらになってしまふ。だが、あとあとの感しよくと余いんは何ともいえないもので、可愛いい娘たちだとつくづく思ったのだから私もとしをとったひとり苦笑したのである。

翌日の夜は、再び適当に酔わせて？ 今度は両手を後手にゆわかれて、引きまわしをさせられたりしたが、彼女らのいうことがおもしろかった。

「私達、紅衛兵よ」

若返りに役にたった旅行ではあったが、感激の余り、私の財布はカラになってしまった。

○

○

これはHの話だ。

私と半年に一度位ずつ逢うYさんは私と同じM族だが、彼の場合は自分が女性になったつもりでのMで、相手は男の方がいいのだ。本当はどちらでもよいと、豪語しているが、よく聞いてみると女王様がいて、その女王様が他の男に命じて自分のふんする女を苛めてめてくれれば最高だということらしい。

三人、プレーに集れるということは、なかなか出来ないもので、貴方だけでもがまんするというのが、たまたま逢った時の本音らしかった。私は不思議に、女性に対してはMになるが、逆に男に対しては彼の場合と違って私が女性となって男を苛めるのだ。

私はよく新宿の小さなバアにのみに行く。ママさんという人が一人でやっていて、時折り、その妹が手伝いに来ている。五人も入れば店は満員になるほどの小さなところだ。そのママさんとは、もう数年来の知己で、三十二、三才になり、小肥りの肉感的な色白の女性である。ここで私は、MとかSとかの話はしたことはないが、たまたまママさんが「ねえ、何か刺激的なことないかしら。もう平平凡凡で、ちっともおもしろくないのよ。何かスカッとするようなことないかしら」と声をかけたのだ。

「大体どんなこと？」

「貫一、お宮じゃないけど、男の人をポカァンと思いつき蹴つとばすか、反対に私がめっちゃめちゃになぐられてみたいような気になるのよ」

「ふうん、じゃこんなのはどう？」

と私はYさんの話をしたのだ。ただ、あり

のままをいったのでは私に関連するので、そこはうまくとりつくりつて喋ったのである。

実は或る知人だが、この人は大変なお金持ちで遊びにあきてしまっている。そして刺戟をもとめているうちに、MとかSの世界に興味を持って、相手をさせられて弱っている。

こんなことは蹴とばせばよいのだが、よく世話になるし仕方がないんだ。でも何となく面白くもあるし、一度、ママさんに話して一緒に逢ってもらいたいと思っていた、この人はママさんのようなタイプが好きで、それこそ毎晩のようにのみに来るよ、とけしかけたのだ。話は意外にとんとまとまって、日曜日の午後一時、三人は待ち合わせてホテルへ入った。

手はずはママさんと決めてあったので、始めはYさん、ママさんがなかなかきこなく弱ったが、そのうちYさんの持前の図々しさ？ が功を奏して、ママさんは女王様のようふるまい始めた。

「馬場さん、いや違った。馬場ッ。そこへ四つ這いになるんだ」

「ハイ」

私は殊勝にそこへ四つ這う。Yさんは部屋の隅に、後手にしばられ脚も足も固くしばら

れて転がされている。ママさんは私の背に洋服のまま馬のりになって部屋を這いまわらせる。Yさんは、私が馬にさせられているのをしばられたまま見ていたが、

「私を馬にして！私を馬にして！」

と、うめくように叫ぶ。

「よし、馬場、今度はお前が馬にのるんだ」芝居気たっぷりに、私はYさんの紐をとき四つ這いにさせて私が裸のまま跨る。余り大柄でないYさんは、七十キロの私の体重に少々よたつく。ママさんは私のズボンからバンドをぬきとって、ピシッとYさんの尻を打ちすえた。

「さア、部屋中を歩けッ」

ママさんは調教師のように、部屋の真中に私たちはだかつてムチをふるう。Yさんは私を背にのせたまま這い歩いたが、二回も廻らないうちに、ひいひい悲鳴をあげはじめた。ママさんは意地悪く、Yさんがちょっとでもとまるとバンドをふりあげる。私はひとりでいきどおる自分の心を駆りたてながらYさんの背中に悠々と跨って將軍気取りである。五、六回も廻り終えた時、Yさんは汗びっしよりのまま私を背にしてのびてしまった。ママさんはタバコの火をYさんの尻にちよっと

おしつける。

「ヒイツ」

Yさんは私をはねとばしそうにして腰をもちあげる。

「馬場、しっかり抑えつけるのよッ」

「ハイ」

私はYさんの両手を逆手にねじりあげ、しかと馬のりのままふみしく。ママさんは再びYさんのお尻にタバコの火をおしつける。

「うウッ」

再び私の身体はYさんの上でバウンドする「ダメッ、しっかり抑えて」

とママさんは私の背中にタバコをいきなりおしつけたので

「ひやアッ」

と私はとびあがる。思わず私がママさんをにらみつけると、ママさんはニヤッと笑って片眼をつむる。ママさんは私に抱かれてソファに腰をおろす。犬のように私達の前にひざまずくYさんの口もとに、私は自分の足を出す。

「おなめッ」

とママさんの命令に、Yさんは私の足の指にしゃぶりつく。

「馬場、苦しむまでその指をおしこんでやる



のよ」

私は身体をおこして、Yさんの口の中へぎゅうぎゅうおしこむ。

「むッ、むッ」

Yさんは眼をとじたまま苦しむが、その顔は心なしか生き生きとしている。浴室の中でYさんの顔を浴槽の中におしこんで半死半生の目にあわせたり、洋式トイレの中に頭をつっこんで水を流したり、したい放題であ

る。

その後、ママさんがあんなヘンタイのようなことはいやよというので、いつのまにかそんなことにもふれずに、以前通り私はただののみ客として通っていた。ところが数日前、Yさんに逢ったら、彼の話によるとママさんとYさんは二人だけでプレーをしているのだという。裏切られたような気持でYさんの話を聞いてみると、

「馬場さんがいると、思いきりの遊びが出来ないから」

と、いうことだという。

Yさんが、絶対に自分たちのことをママさんにいわないでもらいたい。そうでないと私はプレーが出来なくなるからと、逢うごとにおごってはくれるが、どうも、トンビに油揚げをさらわれたような恰好である。

無惨女斗美模様

裸女血笑

女斗

彦

一

美穂代は愛刀、村正の鞘を払って、師匠、狂志郎ゆずりの、つまさき三尺に切先を落して地摺り下段に構え、じっと相手の五人の刺客と相対した。いずれも並以上の使い手と見てとった美穂代は、油断なく身構えながら、

泉水の石橋の上から微動もせず、呼吸を計って相手の出方を待った。

死と対決のはりつめた気持ながらも、泉水の水面にうつる吾が姿。つややかに結い上げた島田髷に白鉢巻もりりしく、身にまとうものはきりりとしめ上げた緋縮緬のふんどし一丁の、輝くばかりの自己の艶姿をも眺め得る

余裕を持てるのも、剣の奥義に達した故であらうか。

美穂代が、このように女にあるまじきふんどし一つの艶姿で白刃を手にする戦法をとり始めたのは、左様、一カ月前、剣客、外道軒との真剣勝負の際、文金高島田、牡丹の振袖の裾長くひき、勝負の場にのぞんで、村正を構えるや、手妻仕掛けで突如衣服を脱ぎ捨て、緋のふんどし一丁の裸身に、「何事ぞ」といぶかり、とまどう外道軒のすきをみて、満月殺法で抜く手もみせず、身首異にせしめて以来であつた。剣客として邪道ともいえるが、生死ギリギリの場に立つものの覚悟を象徴した奇手と解し、いささかも恥じるところがなかったのだ。

幕閣に巢食う奸佞の臣を側近より退け、数々の改革を行わんと志す水野越前守忠邦は、常々刺客に狙われていたのは勿論であつた。

この美穂代もかつてはその刺客の一人で、奥女中に化けて水野邸へ送りこまれていたのであつた。しかし狂志郎の慧眼に見破られ、捕われの身となるや、水野越前守の塵世浄化の志に打たれ、心を入れかえて、狂志郎を師として以来既に二年。今や、秘剣満月殺法を駆

使して師と共に破邪顕正の剣を振う身に生れ変つた。

半年前、これも反対派にとり入り、自己の野望を果さんとした奸商、備後屋が長崎より送り向けた紅毛の刺客、フォン・エック。それまでに幾人かの刺客がむなしくも貫かれた異国の剣、細^{レピア}の切先を、狂志郎はその満月殺法ではねとばし、燕返しに紅毛の首を宙にとばしたことがあつた。

今日は、そのフォン・エックの仇討とばかりに、五人の紅毛女刺客がさし向けられたのであつた。数日前、備後屋より届けられた果し状を読み終えた狂志郎は、美穂代を呼び寄せて、深い信頼のもとに静かに命じた。

「今度は女じゃ。しかも五人来るそう。女には女を以て迎えるが至当。そなたが立ち向うがよい。わが剣法を見せてやる好機じゃ。外道軒との勝負以来の晴れの舞台とせよ」

「では、此の度は、始めから裸で闘いまする。先生、一つ異人女共も素ッ裸にして先生のお目をお楽しめましょうか」

美穂代のこの突飛な申し出に、狂志郎は苦笑し、心の中ではこれはやりおるわいと、首を縦にふつたのであつた。異国の剣法にいさ

さかの恐れも不安も覚えぬげな美しき愛弟子に、いよいよ信頼の念が増したのだった。

美穂代の返書は、約束の日時と、女は女同士で、裸で勝負したき旨を記したのだった。雑木林の中の無住となつて久しい、旗本の下屋敷の庭がその場所であつた。

二

美穂代は改めて五人の紅毛女刺客の各々に目を注いだ。内心の感嘆は覆うべくもなかった。

いずれもが、美事な体格の持主で、すきとおるような白い肌、すらりとした下肢、とりわけ胸乳、豊腰の美事さは吾が国ではみられぬ、異国の女達の麗肢であつた。

首領格のリズは、流石、頭目に目されるだけあって、エジプト風髪飾、ブレスレットは黄金、宝石もまばゆいばかりの物をつけ、真紅のびろうどふんどしをしめた上に、これも黄金の腰路をかざりつけ、手には半月刀を構えていた。

後の四人も夫々思い思いの飾り物をつけ、紫、海^{ブルー}青色、ピンクなど色とりどりのふんどしで僅かに秘部を装い、ソフィアは槍を、残る三人はいずれも細味の洋剣、レピアを構

えている。

五人は殺氣と憎惡、それにこれらの異人に比べて楚々たる風情の大和撫子、何程のことあらんとばかりの侮りも露わにして、美穂代を押し包むように迫る陣形をとった。

今や、美穂代の村正は満月を描きつつ、泉水の石橋の上を、音もなくツ、ツウと退いた。これが美穂代のさそいであつた。石橋の上は一人だけが相手となる巾しかない。つられてソフィアは槍をさつとくり出した。

「えいッ」

と裂迫の気合がもれて、満月を描き終つた村正を美穂代は右手に構えたとみるや、左手はソフィアの槍の十段巻あたりを掴んだとみるや一瞬の中、槍の穂先は美穂代の手にあつた。一瞬の中に槍先を切り取られたソフィアがひるみをみせるや、美穂代はそれを発止とばかり投げ返した。

「ぎゃあーッ」

けだものめいた絹裂く悲鳴がつんざいて、ソフィアは橋のたもとに崩折れて呻き声をたてた。投げ返された洋槍の穂先は、見事にソフィアのふくよかな腹を深々と刺し貫いて背に抜けた。

思わぬ結果に、たじろぐ四人の輪にくずれがみえたと見るや、美穂代は橋上から、輪の中心へ向つて飛んだ。白刃一光、左右から突き出された洋劔の下へ一瞬早く身を沈ませたとみるや、一本の洋劔が宙に舞い、初夏の陽にきらりと光る。

「う……」

「ぎえーッ」

絶鳴は同時にほとばしつた。花模様のふんどしをしめたアーシユラが村正の一颯で肩より割られ、血しぶきをあげてのけぞり、白い肌を朱に染めて、四肢をぶざまにも大の字にこと切れ、横たわると、返す刃でクロードイーヌが、倒されるのと同時であつた。そのおそろしいまでに大きな乳房の下を刺し貫かれて、噴水の如く血汐をまき散らして崩折れ、紫の細身のふんどしがきりりと絞り上げた見事な臀部が、口惜しげにのたうち、無念さを表現してこと切れた。

一瞬の中に三人を倒した美穂代のたおやかな下帯姿の勇姿は、敵に比してはるかに小柄ながらもさつそうと見え、息は乱れもみせなかった。その艶姿を、虚無的な容貌ながらも会心と賞賛の情を浮べて、広緑から師匠の狂志郎は眺めていた。

忽ちにして三人を倒された刺客側は、その小供にも等しい女の、恐しい腕前に浮足立った。

身をひるがえすや美穂代はエルケと相対した。エルケは五人の中で最も年若く、すらりとした下肢、細くくびれた胴、ハチ切れんばかりの若々しい肉体を海青色のびろうどふんどしでひきしめていた。

エルケはつかれたものの如く、細劔を型の如く、抑勢から突き手、切り返しフアンの電光の如き波状を繰返して美穂代に迫り、その間にも空をうならせてのカットが加えられた。美穂代は一瞬、突き手アタックを身をこめてかわすや、白刃がさつと舞い、陽光をきらりとうけて光ったと見るや、エルケの裸身は血しぶきにかくれんばかりとなり、けだものじみた甲高い悲鳴が耳をついて、黒いものが宙をとび、ころろと地上に転がった。それは青い目を見開き、絶鳴をほとばしらせたままのエルケの生首であつた。二つに折られるように崩折れた、首のない胴体の、腹のあたりから二すじ三すじの紐の如きものが地にはっていると見たのは、断ち切られたはらわたであつた。勝負の悲情とはいえ、むざんな最期である。美穂代は、するどい突き手を外すや、村正

で横薙ぎに、エルケのくびれた胴を両断せんばかりに切り裂き、燕返しに首を宙にはねたのだった。それは筆で表わすにもどかしい位のすべてが一瞬の出来事で美穂代の神技というべき剣の冴えであった。

エルケの返り血で玉の如き肌に牡丹の花を散らせ、髪が崩れかけていたが、息はいささかも乱れをみせず、美穂代は村正を再び地摺り下段に構えた。その肌は紅汐してほんのりと桜色をおび、緋のふんどし一丁の、女ざかりの裸身をいよいよ美々しく、りりしいものにした。

リズは忽ちの中に仲間の四人が、美穂代の秘剣に屠り去られ、空しく死屍を地上に横たえたのを見て、頭目の面目にかけて、美穂代を討ちとらんと、半月刀をぎらぎらさせ、憤怒の形相を、評判の美貌に溢れさせた。

リズは半月刀をぐるぐると水車の如く廻しこれは上下いずれからも斬りかかる刃を防ぐオリエントの術であった。美穂代は冷やかに動きもみせず、しばしこの状をみていたが、一瞬、村正をだらりと下げた。これは敵の次の手をさそいだすためだった。リズはこの手にのった。半月刀を振りかざすや、けさがけに美穂代の手許にとびこんだと思えた。が、

年増ざかりの脂切った、赤ふんどし一つのリズの裸身はそのまま硬くひきつったとみるや「う……う……く、くるしい……」

と声にもならぬ呻きをもらして、ゆっくりと地に崩折れた。はちきれんばかりの左の乳房の下に、美穂代の村正が深々と突き刺さっていた。

美穂代はここではじめて会心の笑を浮べた村正をリズの乳房から引き抜くや、栗色の髪を引摺んで首を起すや、リズの咽喉笛をかき切って止めを刺した上、首をはねた。

はっと一息ついた美穂代の鼻には、強い異人女の体臭、それに女供がつけていた香水と血汐の香が混じった異様な匂を感じた。

愛弟子の美事な活躍を満足気に眺めていた狂志郎の目には、先程まで躍動していた異人女が、白い肉魂と化して血汐の海の中に横たわり、身につけている黄金、宝石の装身具が陽光に鈍く光るのがみえた。

「女達の身につけているものをことごとくはいで参れ。備後屋まで首級と形身の品として届けさせれば、大枚の礼金になって、長屋の連中を喜ばすことになる」

美穂代は女供の首級をかき落とし、泉水の縁で血刀をすすぎ、首級を洗い、身についた返り

血を拭い取っていたが、その声にふり向いた表情は、明るかった。

「先生、まさかふんどしまでも、ではないでしょうね、ほほ……」

へらず口に狂志郎も苦笑した。命ぜられるまま、美穂代は横たわる紅毛裸女の屍からそれらの品々をはぎ集めた。美事な黄金に宝石をちりばめた腰飾り、ブレスレット、ネックレスの数々が縁側に大形な音と共につまれた。つみ終ると美穂代は居住いを正した。

「先生、美穂代は今日こそ、思い通りの技を発揮できました。先生、美穂代は嬉しうございます。いつまでも……先生のお側において下さいませ……」

くっくっとうれし泣きの涙をはりのある両眼に溢れさせた。師弟の関係を超越した、ひたむきな慕情をみせた美穂代の顔をみつめたまま、返事もせずにいた狂志郎は、やさしく両手をさしのべた。

「う、うれしいーッ」

軽口にまぎらわしてはいても、やはり剣による対決は女の身として重荷には違いなかったのだ。美穂代は命を賭けた後の虚無的な気持と、女としての恋情をこめて、その手にひと抱きついた。

(此話了)

或る女装マニア

の告白



常盤かおる

私が女装マニアであるのは、どうも先天的らしいです。私の親族関係をたどってみても別にこの血を引く者はいらしいですが、少々そのケの人は、私の叔父にあたる人で、あったようです。しかしそれも幼少の折のことで、成長後はそのケも消滅したようです。私の容貌もどちらかというと、その叔父に似ていると皆から言われていました。

私は元来、容貌は色白にして肌はもちもちして深毛ではなく、瓜実顔で眉毛、鼻、口付はことごとく優しく、その上幼少より白粉に非常に魅力を感じて居りました。私の立居振

舞、言語動作、総べて無意識に女性的に行動致して居りますのは、先天的と申すより他はありません。

幼少の頃の思い出も有りますが、之は他の機会に譲りまして、此所に告白致しますことは、いつわらざる私の気持と体験であります。私が女装を切実に願うようになりましたのは、終戦後二年程後のことであります。丁度洋裁全盛の時代で、私にとりまして実に好都合でした。頭のメイクアップも、どちらかと申しますと洋装の方に似合います。でも、和装の方も一通りは心得えております。

大抵の方は女装マニアは、和装が多いのではないのでしょうか。何故ならば女性としての欠点のカムフラージュ出来る故です。大体私は出顔です故、洋装にはもってこいです。或る事情で単身上京致しました。その時、ふと私の顔をかすめたものは、女装願望の実現でありました。自宅にいた頃は、仲々家人の目をかすめて実現することも困難でしたし、職業上、とてもそんな暇も得られませんでした。

上京して当座は親戚に厄介になりましたが何んとか口実をもうけて飛び出しました。さて、別に心当りが有ったの計画ではなかったので途々考えたのです。随分無茶だと思われるでしょうが、私にとっては、その時は精一杯の考えでした。先ず第一に麗人社交場即ちキャバレー、バー、洋酒喫茶ですが、酒は口にしたことは有りませんし、苦手ですので、キャバレーなれば、なんとか踊りの方でカムフラージュ出来ると思ったので、都の中心地のキャバレーへ行き、マネージャーと面接の上、テストに合格し、その日より勤めることになりました。

このキャバレーは、この辺きっての店で、この商売に付き物の夏枯れも大して影響なく働き甲斐がありました。何にしる普通の女性

でも、この道のコツに馴れなければ、うまく出来かねますのに、男性の私がやることです。から、マネージャーも一寸首をかしげていたようでした。私も今迄にこのような店に入った経験もなく、勝手がわかりませんでした。

最初の一夜は、見る程度に終わりました。翌日は朋輩達にマネージャーよりの紹介がありました。皆はボーイとしての勤めと思ったのでしよう。馴々しく色々と尋ねたり解らない所は教えてあげますからと、部屋の姉さん株の人から親切に言われ、こちらもその厚意が身に沁みてうれしく、ほろりとなりました。

共同生活には女に付物の色々のトラブルが起り勝ちのようです。その夜、四時頃より皆さん化粧にとりかかるのです。私もホステスの一員として化粧にとりかかりました。その時です。すみれと呼ぶ年輩のホステスが、「貴方、女装するの？」といかにも合点のゆかぬ様子で、私の化粧する側で感心して見ていたのでした。

私のメイクアップは、この道の人達がするようにはあくどく化粧しません。終って、暇がありましたので、すみれねえさんの化粧法を見学して、つくづく感心しました。その人の個性にあうような方法で各自思い思いの方

法で、手際よく進めてゆくには、さすがの私も驚きました。あんな大胆な仕方で大丈夫かしらと思いましたが、後で店に出て納得がゆきました。

なにしろ思い思いにせい一杯粧った女たちが媚をふりまいている場ですから、少々あくどい化粧でもそんなには目立たないのです。

こうして、私のホステス稼業が始まりました。誰に気兼ねすることなく大いばりで女装出来るということは、私にとって何にも勝る楽しさでした。それにも増して、女装した私が本当の女性に混って、本当の女性と同じように、いや、それ以上にお客である男性に媚を売るということは、私の性癖をこよなく満足させてくれました。殆どのお客さんは、私を男性であるとは知らず、女性であるとして遇してくれました。

只、中には一寸肌合いの違う男性がいて、ビールをつぐ私の手元に、一瞬きらりとした刺すような不審の視線を注ぐお客さんがいました。そんなとき、私はドキリとして狼狽をかくすように、殊更そのお客の膝をつねったりしてサービスするのですが、言葉に出してとやかく言った男性は一人もありませんでした。その点、私は自分の女装に自信を持って

いました。

然し、私のこのキャバレー勤めも長くは続きませんでした。朋輩のあるホステスが、私がお客の方をお客をとったとかとらないとか言いばかりをつけ、結局、三人ばかり一緒になってマネージャーに、女装のホステスなんか置いてほしくないと言文句をつけたのです。

別に水商売に未練を持っていたわけではないので、私はすぐにその店をやめてしまいました。その後二度とこのような商売に入りませんでしたので、文字通り私の人生にとって唯一つの経験となってしまいました。

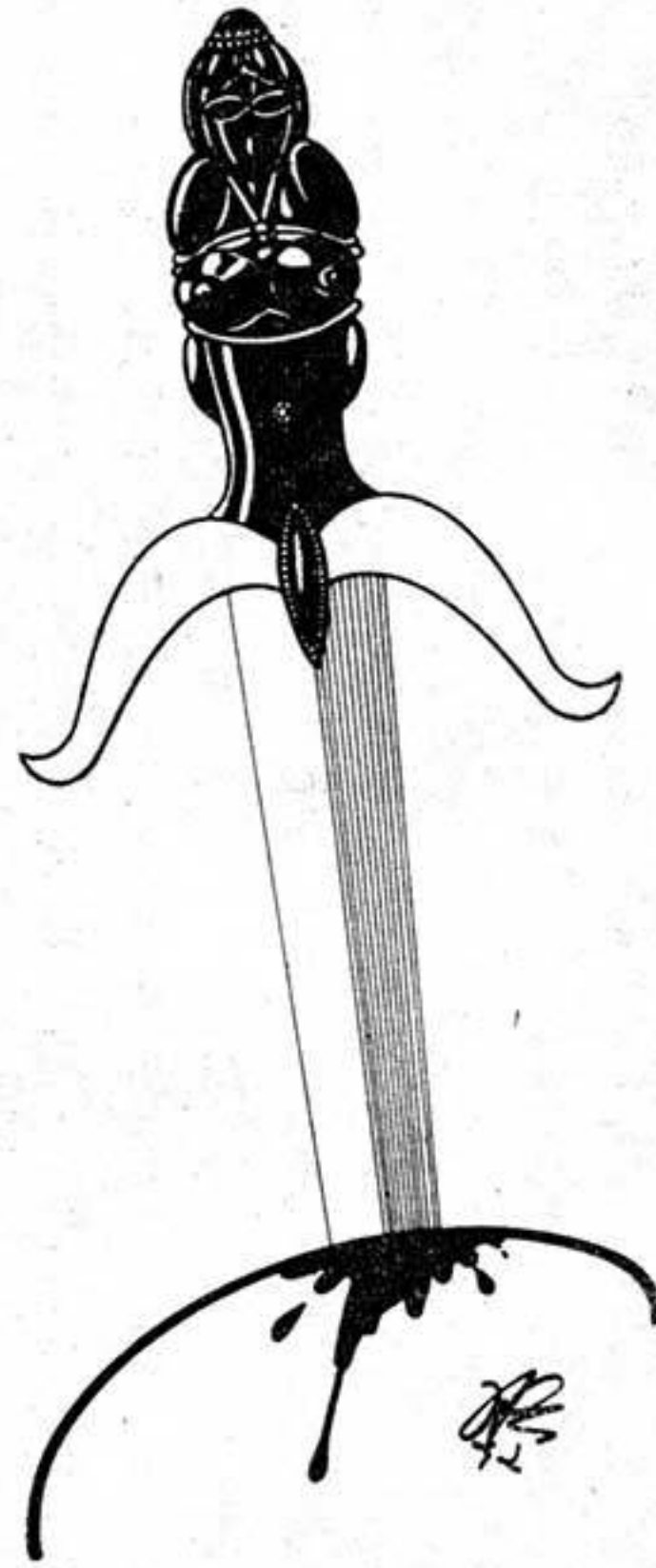
今ではありふれた商事会社に勤めておりますが、休日になると女装への思いが切実で、馴染の小さい旅館の女将に頼んで女装道具一切を預ってもらい、気がむいた時、自分で女装を楽んでおります。中学校かの先生が休日に女装して街を歩いていて、それを見破られたとか、新聞紙上で見たこともあります。私も女装して街を歩くときは、普通の何倍か緊張します。又そのスリルが女装の一つの楽しみにもなっているのです。

でも、大分齢もとってしまったって、キャバレーに勤めていた頃のように、うまく女装も出来ませんので、今ではあの頃のこと、一入なつかしく思い出されるばかりです。

復

讐

(その4)



|| (ガンペッタ) ||

千葉青鬼

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目、歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

スリーパー

「きれいに書くんだぞ」
半ば威すように、半ば嘲るように青年は言
いながら口述をはじめた。

契約書

新藤 明を甲とし、三島恵利香を乙とし

て、何ものにも強制されない双方の自由
意示によって次の通り契約する。

一、甲は乙の切なる願いによって、本日
より一カ月間、乙を自らの家畜として
飼育し、且つ又善良なる管理者の意を
もって乙を調教しこれに必要な畜性
を附与することを承諾した。

二、乙はこの期間中、自らの人間として

の尊厳、自由等の一切を放棄し、盲目
的に甲の命ずることに服従することを
誓った。

三、期間満了後は甲は責任をもって乙の
自由を回復し且つ帰宅せしめることを
約した。

四、期間中、調教の目的で乙に加えられ
る行為は別として、乙の処女としての

純潔は保証される。

五、万一、乙が本契約に違背した場合は直ちに第一条に定められた期限の利益を失うものとする。

右本契約の証として甲乙左に署名するものとする。

西紀一九六×年三月二十一日

甲 新藤 明

乙 三島恵利香

何のことはない、これでは単に恵利香を苦しめるための材料にすぎないではないかと思ひ、再びむせび泣くのに、

「さあ、大きな声で読み返してみろ」

と追い打って来る。その青年の名を、はじめて恵利香は新藤 明と知った。

おろおろと、それでもつかえずに読み終ると、新藤は恵利香にサインさせ、自分も署名した。

「これでお前はもう一匹の家畜になった」

そういいながら、恵利香の首に鉄を打ち込んで太い犬用の首輪を巻きつけ、ピンと施錠してしまう。ここで、やっとのこと、スタンチョンが外され、アグラ縛りもほどかれたのであった。

しかし、ホツと思うのも束の間で、首輪に鎖をひっかけると、その一端を握り、片足で恵利香の美事な臀部を蹴飛ばして、

「犬のように四つん這いになれ。膝をつけてはいかんぞ、尻を上へあげろ」

と怒鳴られてしまう。

いやも応もあつたものではない。無理矢理に手をつかされ腰を上げさせられる。

「私のまわりを三遍、回ってみろ」

鎖をつかまれているので、それを半径として、ノロノロと四ツ足あるきをさせられる。

「膝で立て。手をチンチンしてみろ」

今度は、犬のようにチンチンさせられるのだ。思わず口惜し涙がこみあげてくるのに、

「さあ、ワン、ワンと三回、ほえろ」

何という屈辱だろう。恥ずかしさに、声がつまってしまう。たちまち、電気鞭がとぶ。

恵利香は悲しく叫びながら、転りまわってそれを避けようとするが、首輪につながった鎖のために逃げ切ることは出来ない。

容赦なく、打ち据えられて、平伏して許しを乞うみじめさ。そして、辛じて

「ワン、ワン、ワン」

と三回ほえて、やっとなんて許してもらふ。

「回教徒になるには割礼が要る。私の家畜になるにも、それ相応の儀式が必要だ」

乾いた声で笑いながら新藤はいう。恵利香は再び身を固くして次の苦痛におののくのであった。

新藤は鎖を引く。立つことを許されない恵利香は四つん這いのまま、よろよろとA室に引き込まれた。A室には後ろに緋沙絵夫人を拘束することになる例の自在椅子が置かれていた。四肢が皮紐で縛られ、その上に歯医者にあるような道具で頭部もしっかりと固定された。

ビューンと鋭い金属音に、恵利香がハッと気がつく。新藤は手に電気メスを握っている。そして、左手で恵利香の細い鼻梁をつまみあげると、アツというまに、電気メスをその隔壁にあてた。鮮血がとび散る。勿論、たまぎるような恵利香の悲鳴。麻酔はおろか、消毒さえして貰えないのである。小さな穴が穿たれ、そこに金輪がスリーパーとしてはめられる。鼻輪を入れる準備のためであった。

恵利香は親友の稲葉アサ子と一緒に、コッソリ新橋のJ病院へ行って、耳のピアスをしてもらったことがあった。そのときは到れり尽せりの手当を受け、二週間も通ってやっとなんて

細い針金が通る程の小穴を両耳に開けることが出来た。その時も、目立たぬようにスリーパーの金輪を入れなければならなかった。穴をあけたただけだと、創口がすぐに癒着してしまふからである。しかし、今度はそれが鼻壁に來ようとは神ならぬ身の思いも及ばぬことであつた。

南洋の土人が、そんなことをしているのを写真で見た記憶があつたが、恵利香は自分自身が牛のように鼻輪をはめられてしまふのだということを知つて、さめざめと泣くばかりだつた。

それから約一週間、恵利香の鼻壁は無事に貫通した。約二ミリ位の輪なら造作なく穿められるような穴が、永久的に開けられたのである。

その一週間の間、恵利香がどんな被虐の日々を送らなければならなかつたかは読者の想像に任すこととして、ここでは只、恵利香が新藤の命のままに動く完全な一個の家畜、あるいはペットとして造り変えられてしまったのだという

ことにとどめておこう。

浴槽責め

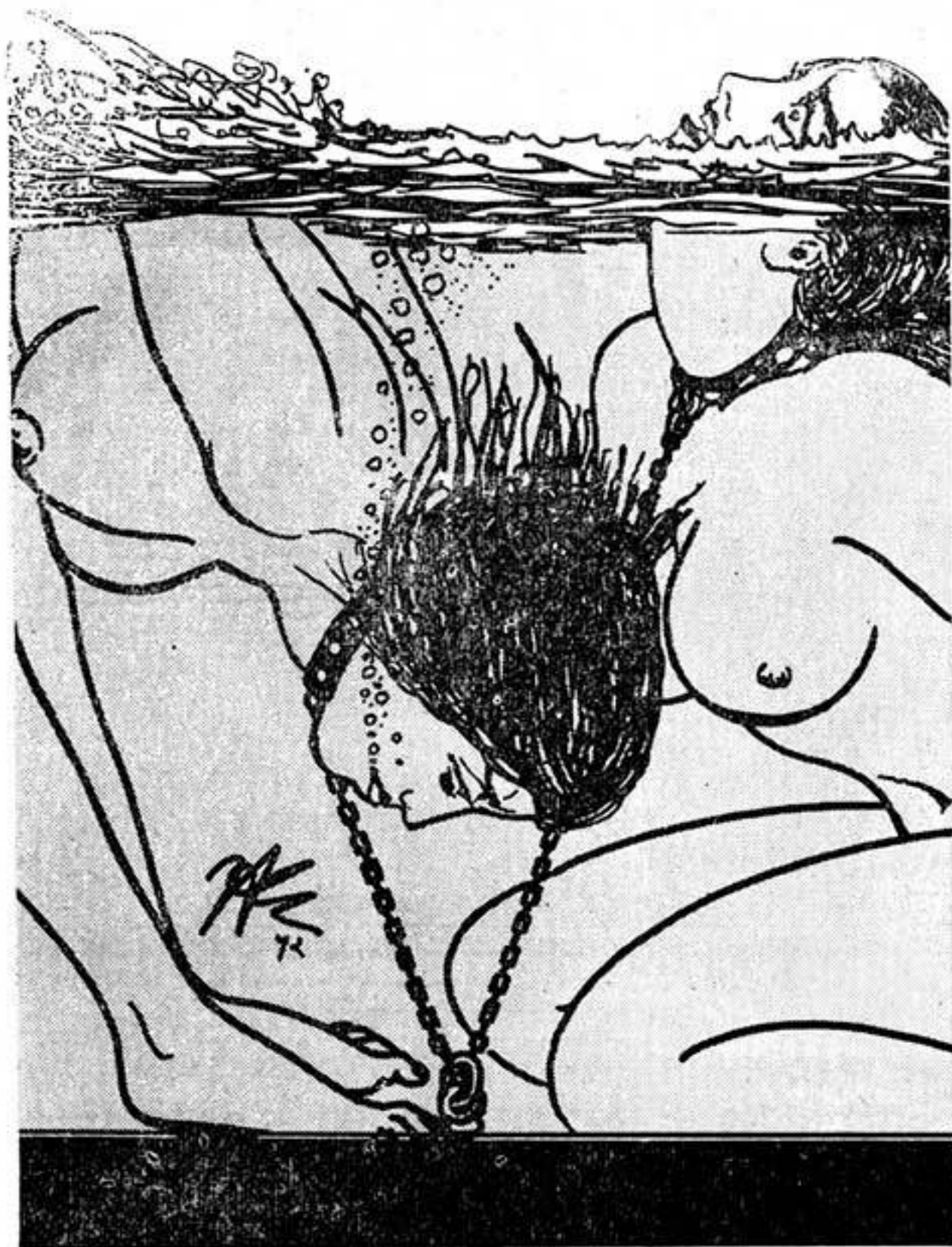
緋沙絵夫人が会つたのは、このように強制的に造りかえられた恵利香なのである。毎日、自尊心や羞恥心を雑巾のように踏みにじられ、汚辱の泥沼につきおとされ、ドロドロになつてもがいている哀れないけにえなのだつた。

話しを、もとへ戻そう。

悲惨な鼻責めに、遂に氣を失つてしまった二人が、再び意識をとりもどしたのは、それから僅か十分位の間にしか過ぎない。

最初にわれにかへつたのは緋沙絵夫人の方だつた。何やら生温い液体が顔をぬらししているのに氣がついて、反射的に手をあてようとして、自由にならない後手縛りを再確認したのである。彼女は狭い浴槽の底に転がされてゐた。そして、恵利香が折重なるようにして彼女のの上に詰め込まれてゐた。狭い浴槽の中

である。正氣のないときに投げ込まれたのだから、まだ幸いであつたといえたかも知れない。しかし、緋沙絵夫人にとって、この状態はあまりにも無残なことであつた。不恰好に四肢を折曲げたまま、恵利香の体重を支えていることも容易なことではない。思わずこれだけは自由になる両足を上に跳上らせて浴槽の底におしつけられている背中をずらそうとした。途端に恵利香の上体は安定を失つて、ズルリと滑つた。どこがどうなつたのか、緋沙絵夫人の両腕に激しい



痛みと、胸に重圧がかかって来た。あまりの痛さに緋沙絵夫人は悲鳴をあげた。とはいっても、ゴルフボールを入れられた口からは、何やら獣の哭くような声が洩れたにすぎなかったのであるが、これでもようやく恵利香も意識をとりもどしたのである。この浴槽は前述したように三方が硝子になっていてどこからでも覗くことが出来る。そして、底の中央部に金環があり、これに五〇センチ程の鎖が通されて、その両端が二人の首輪につながられてあった。

二人が動きはじめるのを待ちうけていたかのように、乾いた新藤の声が降って来た。

「二人ともずいぶん汗をかいたから、風呂へ入れてやるよ。お互いに隅から隅まで、きれいに洗うんだぞ」

ジャーという音がして、浴槽の中に水が流れはじめ。氷のように冷い水だった。次第に水量が増すにつれて、恵利香の身体は緋沙絵夫人の上からはずれて行った。しかし、すぐに、重大な問題が起って来た。

浴槽の深さも約五〇センチである。ところが二人を繋いだ鎖は約五〇センチしかない。それが、浴槽の底の金輪に通されているとすれば、一人が水底に顔を沈めない限り、他の

一人の呼吸が出来ないことになる。水高が二〇センチ位までは、二人ともどうやら首を並べていたけれども、それが二五センチになり三〇センチになると、そうは行かない。目の見えない恵利香は相手と誰ともわからないし寧ろ敵意を持っている位だから、この首輪の綱引きにも負けてはいない。力まかせに引張って行く。反対に、緋沙絵夫人には娘愛しさの念が弱身になっている。どうしても負けて、頭を水底に沈めさせられてしまう。しかし、せい一ぱい我慢をしても、一分と続くものではない。苦しまぎれに首に力を入れて鎖を引張ろうとするが浴槽に尻をつけていたのでは十分に引くことができない。結局、尻をあげて立ち上り、両足に力を入れて無理矢理に鎖を引き上げる他はない。緋沙絵夫人の美事な臀部が浴槽の水面から躍り上った。忽ち今度は恵利香の頭部が水中に引き込まれる。全く同様にして、今度は固い桃のようにな、みずみずしい恵利香の臀部が水を割ってあらわれると、入れ違いに緋沙絵夫人の頭が水面からかくれて行く。

新藤は、それを横から眺めていた。いつの間にか、水中にも照明がつけられて、気泡をあげて苦悶する緋沙絵夫人の表情がつぶさに

照らし出されるのだった。しかし、二人とも段々と要領がわかって来て、お互いに譲り合って交互に、リズムカルに上下するようにになると、新藤はつまらなそうに硝子の壁面から離れてどこかへ行ってしまった。

残された二人にとっては、つまらないどころの話ではない。一寸でも、リズムが狂うと、ガブリと水を飲み込んでしまう。小さい水しぶきを上げて、ブリブリと臀部を上下させて、顔を水面に出したり、又水底に沈めたりという動作を無限に反覆しなければならぬのである。

次第に疲れがつのってくる。

いつの間にか、新藤が帰って来ていた。そして、壁についているスイッチの一つを押した。すると、みるみる二人の動作が激しくなっていく。どちらかが、二秒以上水面に顔を出すと電撃が流れるような仕掛けが作動しはじめたからである。二人のリズムは当然に乱れる。電気ショックは水中では一度に二人を襲う。二人はアップ、アップとしながら、それでも呼吸をしないわけには行かないから、素早く息を吸い込んで、水中に顔を沈めるようになった。これではとてもたまらない。ピストンのような動作を繰り返しているうち

に、再び気が遠くなりかける。そのギリギリの限界を見極めてから、新藤は浴槽の水を流し出した。二人は、浴槽の底に折重なったまま、河岸に積みあげられた魚のように、大きく息づかいしながら、もう身じろぎ一つ出来ないようになってしまっていたのである。

「やっと綺麗になったようだね」

ヌケヌケと、こういうながら新藤は浴室に入って、二人を繋いだ鎖を外した。

最初に引出されたのは恵利香の方だったが、あらあらしく首輪を引っ張られたために、今まで、したたかに呑み込んでいた水をドッと嘔吐してしまう。その水が、浴槽に転がったまま喘いでいる緋沙絵夫人の顔に、モロに降り注ぐのであった。しかし緋沙絵夫人はただもがくばかりで、最早どうすることも出来ない程に打ちのめされていた。

そんなことにお構いなく、ボロボロのタオルを床に投げつけて、今度は

「さあ、拭け」

というのである。とはいっても、両手の自由にならない恵利香は、タオルを口でくわえたり、床に転ったりして水分をとらなければならぬ。目の見えない今は、それも至難の業といわなければならぬ。少しでもまごつく

と、すぐさま尻を蹴とばされる。

ようやく、辛うじて拭い終った彼女は、ヨロヨロと首輪を引かれながら、D室へもどされ、そこで眼蓋にハメ込んであった目かくしをはずしてもらった。彼女の両眼は異物の刺戟で真赤に充血していた。その両眼に薬液が点眼される。刺すような痛みがシミわたってくる。

そうしておいて、再び鼻輪が通されて上へ引っ張りあげられると、恵利香は嫌でも立上らなければならぬ。鎖の端についている鈎を簡単に壁の輪に引っかける。それだけでも恵利香は座ることが出来なくなってしまった。新藤は原則として、日中は恵利香に絶対腰を下させないようにしていた。これも調教の一つであった。恵利香は、休息を与えられなくても、このように鼻を引張られながら足を棒のように立つくしている他はなかったのである。しかし、調教とは必ずしも苦痛のみを与えるものではない。僅か一週間の間ではあったが、恵利香の足腰は以前よりはるかに堅く引き締まって来ていた。男女を問わず、鍛え上げられた肉体ほど美しいものはない。この意味で、ありとあらゆる屈辱と苦痛にのたうち廻りながら、恵利香は一層美しくなって来た

のである。

天 狗 面

新藤は恵利香をそのままにしておいて、再び浴室へ引き返した。緋沙絵夫人は、まだ息もたえだえに浴槽の底に丸くなって倒れていた。それを乱暴に引きずり出すと、三坪ばかりのタイル張りの洗い場の上どころがし、床の四隅にある金輪に大の字なりに両手両足を縛りつけた。シャワーのホースを引っ張り出して来て、柄のついたタワシで恵利香の吐瀉物を洗い流して行く。その痛みで、緋沙絵夫人はわれにかえた。口の中に詰め込まれていたゴルフボールがやっとはずされたが、顎がしびれたようで、思うように動かせない。タワシが鞭に代って胸を打たれたので悲鳴が口を突いて出た。久しぶりに聞く自分の声は、悲しい叫び声でしかなかったのである。どこを、どうされようとも、固定された身はそれを避けることすら出来ない。

突然、鳩尾のあたりを新藤の足が踏みつけた。恵利香と同じように、思いきり水を呑みこまされていた緋沙絵夫人である。鼻から口から噴水のようにそれがふき出して来た。その苦しさ、地獄の苦しみとはこのことかと思

う。ここでは気絶していることすら一種の贅沢で容易に許されないことなのだということを思い知らされる。

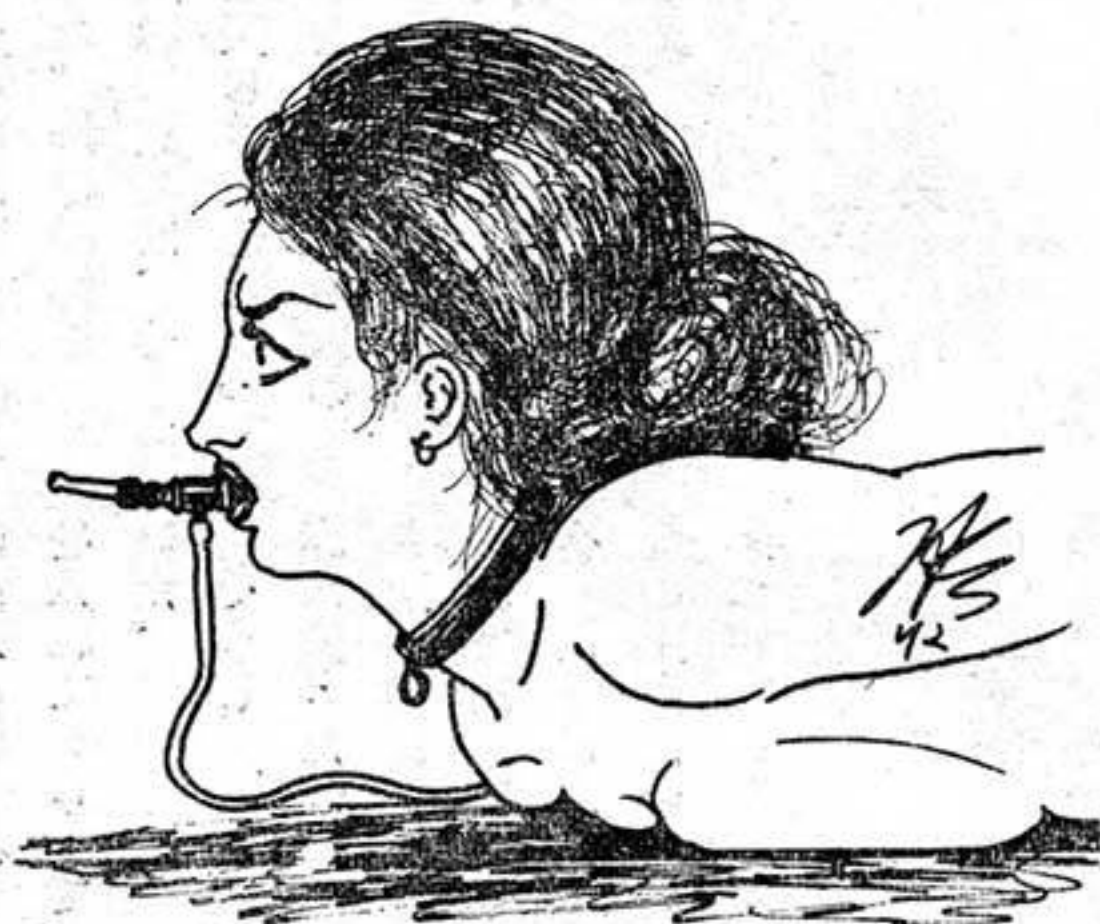
さて、新藤は何やらゴトゴトしていたかと思うと、今度はビショ濡れになった緋沙絵夫人のショートカットのヘアに櫛を入れ出した。みるみる染剤が彼女の髪を脱色して、それを金色に染めて

行った。頭髮が終ると眉毛そして腋の下、くすぐったさに反り身になっても手足はびくとも動かない。泣き顔に笑いの表情がミックスされて、奇妙なコントラストを示している。しかも、当の緋沙絵夫人にとっては、これも新らしい責め手のはじまりであった。

「たすけてッ。あっ、あっ、……」

息もたえだえにのたうつのを、新藤は、わざとゆっくり手を動かして、次第に金色に変って行くさまを楽しむのであった。

全身、油汗にまみれて、くすぐり責めの刺



戟に耐えていた緋沙絵夫人が、又してもふっと気が遠くなりはじめたときに、突然、今度は新手のシヨックが背筋を突きあげて来た。新藤が攻撃の鉾先を変えたからであった。

「あっ、お願いっ。やめてください」

うわずった声で、辛じて首をあげ、位置を移した新藤に、おがむような眼差しで訴えても、石のように黙りこくった彼は、染剤を含んだ櫛を器用に動かしつつづけていた。

今はもう、緋沙絵夫人は絶望のうちに、あきらめる他はなくなってしまう。唇を噛みしめ、キュッと眼を閉じる。金色に染められてしまった睫毛の間から、しぼり出されるように涙がにじみ出していた。濡れた肌に、固いタイルの感触が、ひどく寒む寒むと伝わってくるのを意識していた。

「さあ、出来たよ。金髪のアンジェラさん」

と嘲るような調子で声をかけた新藤は、要所所にホースで水をかけ、余分の染剤をすっきり洗い流してから、やっと緋沙絵夫人の手足を自由にした。緋沙絵夫人にはもう何をやる気力も残っていなかった。ただ、本能的に痛むふしぶしを曲げ身を丸くかがめ、少しでも相手の視線から我身を守ろうと、ノロノロと手足を移動させるのがせい一ぱいの努力だったのである。

しかし、新藤はそんな緋沙絵夫人を、すこしも容赦しようとしなかった。流れる水滴を手早く拭き取るやいなや、首輪につけた犬鎖を乱暴に引っ張り、

「立てっ」

と命令する。その言葉と同時に、又もや彼の右手から電気鞭がとんで、緋沙絵夫人の豊かな臀部をおそった。

「ヒィッ」

と叫んでハネ起きた緋沙絵夫人の弱腰を、今度は、したたかに蹴り上げて、

「あるくんだ」

おどすようにいう。

緋沙絵夫人が引ずり込まれたのは、あのおぞましいA室であった。ゾツとするような、例の椅子へ再び固定される緋沙絵夫人は、抵

抗するすべもなく、ただしゃくりあげてくる涙にむせんでいる。

ガタン、と音がして、緋沙絵夫人の尻は椅子の中にスポンと落ちる。丁度、赤子がお母さんにオシッコをさせてもらうような恰好にさせられてしまったのである。

ふと前方を見た緋沙絵夫人は、思わず

「アッ……」

と、さげんだ。

マジックミラーは、今度は鏡の作用をして緋沙絵夫人のみじめな変身をあますところなく映していた。ただ見る。そこには四十年間見馴れた自分の姿はなかった。異様に輝く金髪。彫りの深い緋沙絵夫人の面立ちは、そうでなくてもエキゾチックな美しさで評判だったのだが、こうなってみると全くの欧米人の顔だった。自分でも、こうも変わるものかと驚くほどの変化に、緋沙絵夫人は、ただボウ然となっていた。

「心配ないよ。そのうちに又、すぐ元通りになるさ」

いつの間にか、椅子のうしろに立っていた新藤は、こういいながら、緋沙絵夫人の両手を椅子の背に縛り直すのだった。

「さんぞ、恵利香にいじめられたんだから今度は仕返しにお仕置の機会を与えてやろう」

新藤の言葉から、何か又、恵利香と一緒にいたぶられるのだと察して、慄然と身を固くした緋沙絵夫人に、たちまち次の攻撃が加えられた。新藤が、いきなり椅子を後に倒したからであった。下敷になった手が、椅子の背もたれと床との間にはさまってしまったので緋沙絵夫人はたまぎるような悲鳴をあげる。

椅子に固定されているので、亀の甲羅をひっくりかえしたように、自力で起き返えることは出来ない。椅子の背もたれに、小さな台木を入れてもらって、やっと痺れた両手首が浮いた。

そうしておいて、新藤が持って来たのは真赤に塗った一個の天狗の面だった。ただ普通と違うのは、全体が弾力性のあるプラスチックで出来ていて装着するとピッタリと顔に合うように工夫されたものらしいのである。

その上内側の唇のあたる部分には大きく突起がついていて、面をかぶると自然に口中に押しこまれ、さるぐつわの役を果すようになっていた。勿論、後頭部へ廻った三本の固定用のベルトは、たださえ密着する面を更にしめつけて、その上に旋錠まで出来る仕掛けであ

る。

それを、いやがる緋沙絵夫人の顔に、おさえつけるようにして装着してしまった。こうなつてはもう、いやいやと首を振って、声にならない音を洩らすばかりである。白く美しい女体をもった、真赤な恐ろしげな顔付の天狗が金髪をふり乱して、固定された身をおのかせてむせび泣いているのだ。

新藤は、部屋を出て恵利香を連れてきた。後手錠の恵利香は、椅子の四脚の間から突き出されて、一廻りも大きく見える緋沙絵夫人の臀部に向って正坐させられた。恵利香に母を連想させるような何ものをも示さなかった。

「この外国婦人は、便通がなくて困っている。手伝ってやれよ」

前に述べたように、あくなき拷苦を味わされた恵利香の潔癖感、大巾に減退しているのが実状だったから、彼女がこの命令に抵抗できなかったからといって、それを責めるわけにはゆかないであろう。

恵利香は口中一杯になるほどのゴム球をくわえさせられた。ゴム球には嘴管がついていて、その先がホースの筒先のようになってい

る。途中に弁があり、長いゴム管が接続されて液を入れたタンクに接続されている。つまり、恵利香が口の中のゴム球を噛んでつぶすと、先端から勢よく液体が噴出されて行く。口を開くとゴム球の中にタンクから再び液が補充される。こうした動作を繰り返してポンプの目的を果たさうというものであった。この奇態なものは使用法により色々の用途に役立つようであった。

緋沙絵夫人の悲痛は想像を絶するものであった。逃れるすべは全くないとわかってはいても、必死に身をよじって奇妙な攻撃をさけようともがいた。固定された椅子は、その反動でガタガタと揺れた。電気鞭に追われて恵利香も目を血走らせて獲物を追った。緋沙絵夫人がどうもがいても、猟犬に追われる小兎のようにはいかない抵抗でしかなかった。やがて、逃げ場を封じられている哀れな仔兎は悪魔のような飼主にせき立てられ、追い上げられた猟犬につかまってしまおうであろう。

不自由な姿勢で強制された狩猟ゲームのために、恵利香の全身は真赤にほてっていた。緋沙絵夫人は絶望のうちに、怖れおののくば

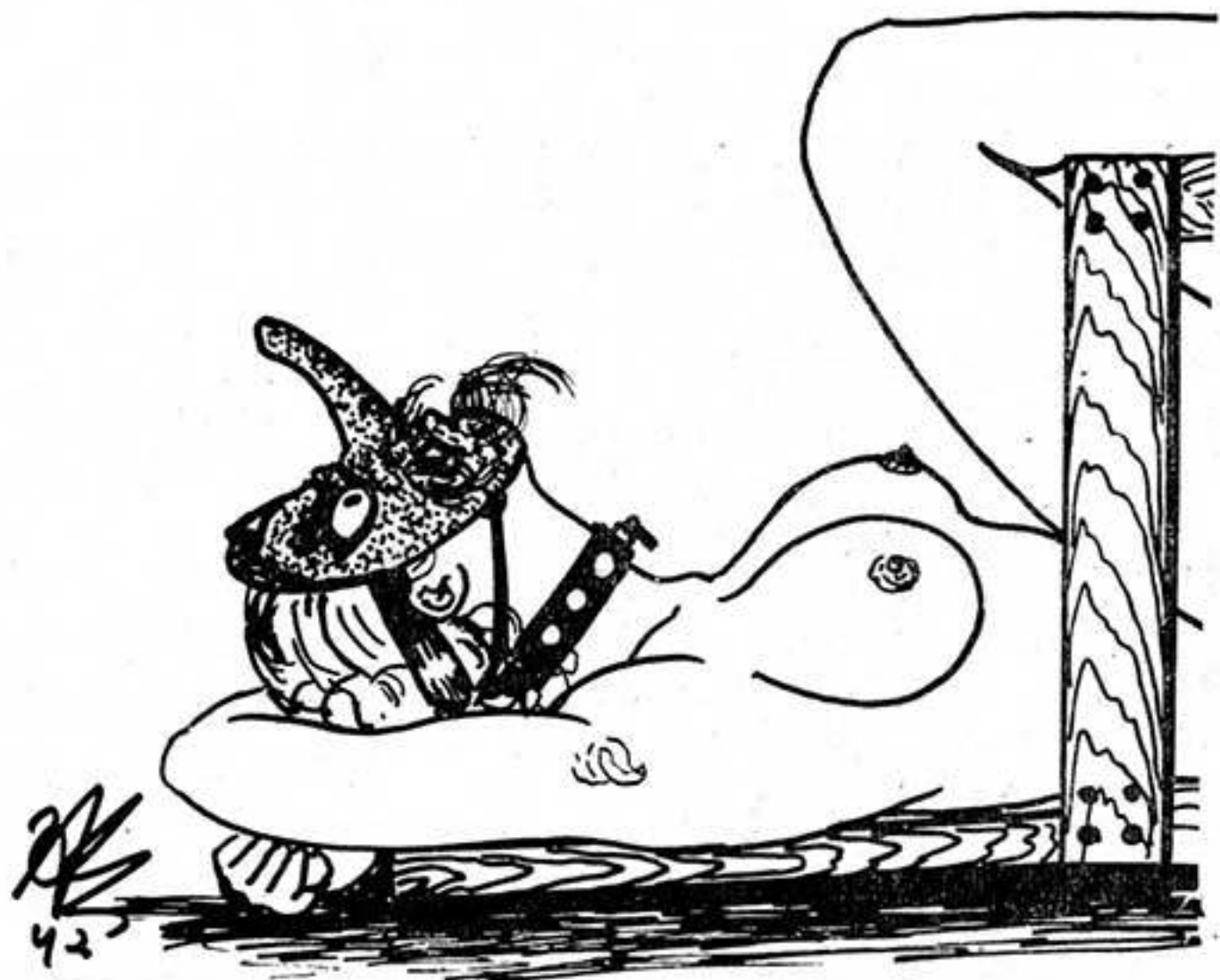
かりである。

新藤は、恵利香の口からゴムポンプを抜き取り、手早く仰向けにひっくり返した。いつの間にか床に凹型の木枕のようなものが固定しており、恵利香の後頭部がそれにすっぽりと嵌められた。両耳のピアスの穴に釘が差込まれ、木枠の凸部に釘づけされると、恵利香は上を向いたまま、ビクとも顔を動かすことが出来なくなってしまう。標本板に刺し止められた蝶のようであった。

一方、死にもの狂いで便意をこらえている天狗面の緋沙絵夫人は、縛られた椅子のまま起きあがらせられた。臀部は相変らず杵に落ち込んだままである。

無残にも新藤はその椅子を押して、羽ばたきも出来ぬ蝶の真上に位置させようとするのであった。今度は恵利香の方で、悲鳴をあげながら顔をずらそうともがくけれど、両耳をおさえつけた二本の釘のために、どうすることも出来ない。むなしく痛撃にさいなまれるばかりであった。

今はもう、緋沙絵夫人も、新藤の悪だくみを嫌でもさとする他はない。こんな仕返しがあるものかと思う。さりとて、悪魔のような薬



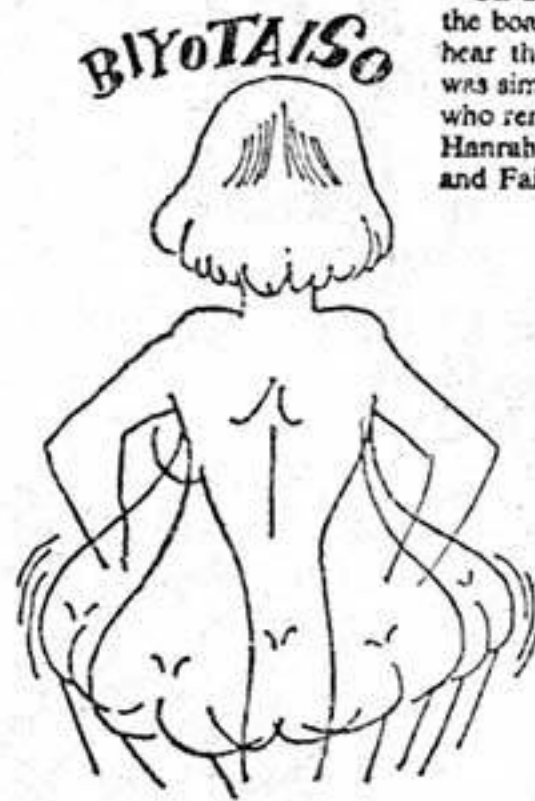
効が我慢すればするほど爆発的に夫人をさいなむ。神も仏もないものか。遂に断末魔のときが来た。

哀れにも奇妙なとらわれの天狗が、長い鼻を天に突き立てるようにして、絶望に金髪をふるわせて泣いた。その面皮の下では、この世で最も哀れな母親の顔が天を仰いで長歎息をしていたのである。

(未完)

目下「花と蛇」を好評、連載されている団鬼六の存在は、どちらかといえば花形作家的である。その系列に位置する者に贋作シリーズが十八番の芳野眉美やカメラ・ハントの辻村隆、山本一章などがある。

書物収集家、斉藤夜居の「稿談・性風俗資料入門」は、前者の存在とくらべて地味なものであるが、K誌に重厚な色彩をそえる意味でこれまた貴重だ。その取り上げられる資料はすべて珍本、稀本のたぐいで、この方面の書物好きにとってはよだれのたれそうなものば



On the fifteenth of December, they met in the boardroom of the Lumberman's Bank to hear the reading of the will. The document was simple and contained only one item, Richard, who remained alive, to Mrs. Hanrahan and to Mark and Faith, joint furnish-



てあたりしだいにほんをよむ

私流的諸本乱読記

夜乃探郎

かり。筆法もまた、理路整然として隙がない。

この資料入門に刺戟されて、私もいつかは何か書いてみようと思っていたが、ああも資料、文献をずらりと並べられると手も足も出ず、興味深く拝読するばかり。結局は表題のように「——諸本乱読記」とし斉藤夜居の労作掲載の支持もふくめて駄弁をろうすることにした。脱線、走り書の不備は前もっておわびして置く。

「——資料入門」に取り上げられている物は、おおむね古書価が強い。現在では入手のむずかしいものばかりだ（それだけ珍重すべき論評）が、まだ探書がある程度できる本の中にも、K・K的な面白い記事はころがっている。つまり穴場というか、それらの物を手あたり次第、適宜抜萃、雑談入りで紹介してみよう（ただし、私好みの作品に片よるのはご了承ください）。

カットは「のぞくべからず」ニピョンコ・トイレ体操、の章、イラスト

9月刊・有紀書房)

苦笑をもってその著に「ノゾキ屋ドクター」とか「助平ドクター」と書いている街の女(売春婦)をのべ十万も検診したという、その異常な性白書だが、文中に「責められる女」という一章がある。

「アタイ、十八よ」由美の声を聞いた時、カルテを取り上げながらふと見上げた私の視線が、彼女の頸すじをとらえていたのである。「うん、こりゃ変だぞ。ただのキス・マークじゃなさそうだが……」

ここより博士は、たんなるキス・マークでなく、うっ血点がある。そして、索溝があるところから、荒縄のようなもので頸をしめた跡としか考えられない症状とみて逆にその由美から「ね、先生。アタイ、この頃、へんなお客がきて困ってんのよ。それが変な爺さんなのよ。でもでも、やっぱり私もいいのよ……」と告白させる。年老いた春画描きから少女への手紙が、本人、由美よりひろうされる。約四頁にわたって、その手紙は(すべて原文のまま)として紹介されてあるが、その内、二つばかり抜萃して置く。

×月×日

また、てがみをかきたくなった。どうした

わけだろう? てがみでもかいていないと、ここがおちつかない。いちにちじゅうソワソワして、なにも、手につかない。ゆみちゃん魔法にでも、かかったようだ。さて、てがみをかこうとしても、べつにあたらしいことはない。れいによってゆみちゃんを縛っていじめたいということばかり。ぼくは、ゆみちゃんの長じばんすがたが見たい。きれいな長じばんがゆみちゃんのその豊かな肩から、すり落ちて色っぽく、横坐りに坐って、せなかに捻じあげられた両ひじがじばんの袖口から、あらわに見え、ギリギリにくいこむ。荒縄の痛さにみもだえしながら、赤いシゴキでさるぐつわをはめられた顔をかすかに振っている姿は美しい絵だ。全裸体でしばらくいるゆみちゃんも美しかったが、ぜひ、長じばんをきかせて責めてみたい。サヨナラ

ゆみちゃん

×月×日

淫らな拷問部屋に立ちこめる女の体臭と、なやましい泣声。ゆみちゃん、裸にしたユミちゃんを引捕え、両手をうしろにねじあげ、二本つないだきれいなシゴキがその手首や腕

や胸やお乳に、きつくきつくくいこむほどきびしくしぼりあげ……。胸にかかった二すじのシゴキの間からとび出している、むっちりとしたお乳を吸ったり、両腿をこじあげたり……。淫らな責めのあと、許しを乞うユミちゃんを、そのままに押し倒して、あの晩のユミちゃんの美しさを思いだすたびに、ぼくは……。

「アタイ、あの人に来ていじめてくれないと他の男じゃ、まるで物足りないのよ……」と告白を続ける少女が、七十才に近い、齒のかけた薄ぎたない老人と、はじめは行きずりの客の一人として簡単にあしらっていたのが、次第にマゾヒストとして成熟してゆくさまを病理学的な立場から実例をもって描写してあるが、この老人の手紙も公表を前提として記したものでないだけ迫力がある。

「随筆・性の残酷物語」記録文学研究家、植木二郎著(昭和38年4月刊・日本文芸社)

いわゆる新書版だが、著者は「まえがき」✓として「これほどひらけた世界において、昔のような残酷は存在しないだろうとは、誰し

もが考えているところだが、さきほど日本でも公開された映画の「世界残酷物語」や「世界女族物語」をみた人びとは、この隠された残酷シーンにアッ!と息をのんだものである。『として』『むかしの残酷』『現代の悪徳と残酷』『国王・皇帝の残酷』などをものかたっているが、酒の肴に娘の「火あぶり」見物の章は凄じい。

「殷^{いん}のチュウという王様は、六百年続いた王朝の最後の人であるが、人民から税をとりあげて広い宮殿を宝石で散りばめ、ハレムの女たちと毎晩、酒席の宴をはっていた」その王様がよく女を罰するのに用いた方法は「まずやり方は、柱に裸の女をのぼらせておいて、下で柱を熱して行く。油のぬられた柱だから、女の白いからだはズルズルとすべり落ちてくる。と、下のほうは熱い。女は自分がどんな恰好になっているかも忘れて懸命に柱に抱きつく。だが、柱はしだいに赤く熱して女の皮膚を焼く。チュウ王はダッキとそんなありさまを見物しながら長夜の宴を張った」長夜の宴とか、酒池肉林とかいった言葉は、この宮中生活からだと言者はいつてゐる。

——奇譚クラブなどは、本社、品切れ号の分からすでに定価に相当額のプレミアが付いて、古書店のドル箱的な存在となっているが同系統の趣味雑誌（すでに廃刊）「風俗草紙」の秘蔵版などは、実に一冊三千五百円近くの古書価をよんでいる。風俗奇譚の昔の号も高価である。カストリ雑誌と評される一群のセシカ紙雑誌も、いつのまにか一括いくらとして、雑本より古書市場のスター? として巾をきかすようになった。いやそれだけでない、ついこの間、発行されていたと思つた週刊誌とても、例えば「三面記事」などは「租本紹介」ものばかり何冊とかPRされて古書目録にチャンと定価の倍増位でおさまっている。関東書房刊、高橋鉄が力こぶを入れていた「ゆまにて」が廃刊されたということ、定価二六〇円にすぐ百円ものプレミアが付く、この揃えとなると、相当の古書価ということだ。

これらの現象を私流に解釈すると、長い間風俗文献市場にわが世の春を唄っていた、いわゆるエロ・グロ・ナンセンス時代（大正末期〜昭和の初期位まで）に出版された梅原北明物などが、ようやく研究も峠を越した感じ

で、新しく終戦後より昭和三十年前後位までに出版された風俗誌関係が単に悪書というところでなく、資料として好事家の間に認識、クローズアップされてきたことを物語っている。俗にくだいて側面からいえば、なにやかといつても戦前よりはまだ出版の自由になつて表現、研究の自由が許されている戦後の物は面白、という点もあるが、昭和三十年前後に出版された風俗誌のおどろくべき値上り（古書価）にくらべて戦前物がその割に値が（例外はあるとして）出ないのは、その割にはその一面を示していると一考される。労作、斎藤夜居の「稿談・性風俗資料入門」は、そのような過渡期にあつて、戦前、戦後と分けてしかも今日の時点に立つて論評の筆をふるっていることに興味がある。

「文芸春秋・増刊・薫風読本」昭和28年六月刊・文芸春秋新社

——サーカス物語。菊岡久利より——

畑が、いつのまにかマンモス団地となり、そのために駅まで新設されるというご時勢であるから、街の空地が年々少なくなってくるのは、当り前のことだ。私の住んでいるF市も

二、三年前までは、秋祭りともなれば昔懐しいサーカスなどを見かけることができたが、昨今は小屋掛けする場所がないので駄目である。おみこしだって、トラックにのせて行列する風景とは相成った。現代に夢がないのではなくて、人々はすべての夢をつぶして行く。それが進歩ある文明社会なのだから仕方ない。ビルの立ちならぶ大通りがあるきながら、私は活気はあるが、余りにも隙間のない街の構図に、白茶けた想いをどうしようもなかった。そんなある日／＼サーカス物語／＼を読んだことは、うれしかった。文中にこんな一節がある。「サーカスは、何よりもあのクラリオネットの「天然の美」だ。空に囀る鳥の声だ。嶺より落つる滝の音だ」

私はこの作者は小説家であろうが、本質的には詩人だと思った。この十一頁あまりの全文を紹介したくなったが、いまはまだ古書店にゆけば入手可能、好む方は是非、よんで下さいとおすすめて置くことに止める。ただ「……サーカスが町の興行を終えて、次の町に去って行ってしまふ。どうしても捉まえておくことの出来ない哀愁こそ、子供たちの最初に経験する「離別」の甘ずっぱい味なの

だ。人生では、この甘ずっぱい、サーカスの「離別」の味あいが、やがて「失恋」や「経営失敗」の時などにもチラと甦えるものなのかも知れない」の作者の言葉をほんの少し引用したい。ここにはだんだん失われつつある本質的な魂の詩とも評すべきサーカスをおしてみた人生のやるせない「哀感」が秘められているからだ。

「のぞくべからず」華房良輔著（昭和42年2月刊・青春出版社）

新書版。カバールの筆者紹介によると「現在児童劇作家および童話作家などで、ひまあるごとに各地のトイレをのぞき、その尨大な落書き収集に要した歳月は、今年で十三年目になるということだ」としてある。また「立入り禁止の秘所へご案内。ハトイレの落書き／＼の展示場

淑女はその時どんなポーズをとりはるのやろ？ 淑女はその十分間何を考えてはるのやろ？ 淑女はトイレの前でなんでピョンコピョンコしはるのやろ？ 和服スタイルの淑女はどない恰好なんやろ？（以下略）」のジャッ句もある。私の知る所、著者の写真が堂々

とかざられ、このように一般書店に並べられている／＼のぞき趣味を満足させる一大コレクション、便所の落書き集大成、十二年の歳月を経てついに完成／＼という書物は他に知らない。本文中にはあられもないそのものズバリの美女のカリカチュアのカット（59頁4男のぞくべからず・女子用トイレの中味「義賊ねずみ小僧悩めるひとを救うの図」として使用中の美女に小窓よりチリ紙を渡す所）など傑作。この筆者などK誌の寄稿家に迎えたもののだが、その「いじわる・トリック・プレイ」の一節にこんなものがある。

「目の前の壁（作者談・便所の内部）に小さい穴があいている。矢印がしてあって、その横に大きな文字。この穴からのぞいてごらん出歯亀氏でなくても、フツとのぞいてしまふ。穴の奥は、真っ暗で行きどまり。ナンダと思ってもとの姿勢に戻ったら、おや、小さい字でまた何か書いてある。なんにもないよ。馬鹿にしてやがってと、水洗の音に送られてドアを開けようとしたところ、目の前に曰く、ハハハ、お前もだまされたか。

なかなかユーモラス筆法もこの書の特徴。

さて、もうひとつ『ピョンコ・トイレ体操』の一節。

「女性の方のために、便所の中でやる美容術をおしえてあげよう。ニコタラという言葉をご存知か。しゃがむ、壁に向かってニコッと笑う。タラリと落とす、またニコッと笑う。タラリと笑とす。これを毎日やれば、あいきようのある、福々しい顔が作られる」

『8・間抜けな大学生』の中にウン学？がひろうされているが、これにはおどろく。

「お手洗、おトイレ、便所にトイレ、はばかり、雪隠、ご不浄、厠、おしも（花柳界）、お下家敷、手水場、ご用場、金閣寺、古くはおかはや、おかは、手水、おとう、閑所、用立場（以下略す）。

——らくがき紹介より、むしろ私にとっては筆者の処々に入っている寸言が面白いのもっぱらそれのみ抜萃する。

「和服の用便スタイル」という章には「着物を着ている女性は、便所へ入った時、どういふ姿勢をとるか、というのは、男性にとつて興味しんしん。そつと教えてあげよう。女が便所へはいると、まず鍵をかける。次に荷物を置くところがなければ、ハンドバッグなどを、口にくわえる（もちものが二つ以上の時や、重い荷物を持っている時は、チリ紙を十枚くらい下に敷き、その上に荷物をのせる）。そして、おもむろに（または、せわしく）両手で、着物、じゅばん、腰巻のスソを上にあげ、前にもつてきて下あごではさむ。そしてパンティを下におろすのだが、この時、長い目のパンティを、上の方まではいっていると大変。帯がしめつけているから、なかなかいふことをきかない。体をひねり、腰をふり、四苦八苦したあげく、やっと下におろすやいなや、じゃあ／とやる。この時、右手で水洗のとお手をつっぱり、自分の音をごまかそうとする者が多い（以下略）。

「江戸と東京・風俗野史」伊藤晴雨著（昭和四十二年一月刊・有光書房）

これは現在、古書価数万の稀本といわれる伊藤晴雨翁の名著復刻版である。これなどは是非、本誌にも取り上げられるべき出版界のトピックだが、特に巻末の高橋鉄の「後序・晴雨讃」がよく晴雨老の側面を語って興味ある。その一節「筆をとれば粹と啖可の江戸戯作者。頭のひきだし一ぱいつまった時代考証

家。人情も礼儀も心得た明治ヒューマニスト。乱れ髪と哀歎まじえた女体美の情調派。異常な記憶力をもつ風俗史家」として「五役早替りの出来る稀代の役者」

「晴雨忌の会」というような、集りをもつたらどうでしょうか。一月二十八日が翁の命日ですが、一月ではまだお寒いことですし、翁の誕生日、三月三日の桃の節句にでも、雨が降ろうが晴れようが、なんとなく寄り合つて、その珍しい画に耽溺するなり「お化け大会」で呑みあかすなりすれば」と提唱。

春の灯も遠く晴雨の絵看板
破れ傘にどてらもおもしろ団子坂
晴雨忌や雪責めと見し壁のしみ
——と、句して結んである。

「図解・結婚科学」第五集など。

——これは36年3月号（季節風書店）で、夫婦雑誌のように、どちらかといえば表も裏もすべて医学的なコロモをまとうて編集されたと違って内容は興味本位。それだけねころがってよむにはもってこい——。さて目次をみると、これまた「いま流行っているサド・マゾゲームの新しい波」とか「変態妻」とか「困

ったセックスに対する防ぎ方」の中には「サドとマゾの組合せ—首をしめて失神させたりする—」とおいでなすった。

また「奇妙な夜を楽しむ人々のルポ」には「死姦を経験した夜」と、いたりつくせりだ。「速報・実話雑誌」一月号（昭和37年判・三世社）にも、グラビヤには「蛇を弄ぶ女魔術師」やら「綱に縛られたヌード」などあり、目次をみると「二大告白集」に「全身をくすぐられて悶絶するヌラヌラ娘」が眼に付き。「女が女を責める異常テクニク分析」という特集もある。「裸か美グラフ」二月号（昭和38年刊・季節風書店）には、画報特集として「世界変態女族物語」。記事特集としては「オール東京変態女族物語」とある。これには「変態女にされた檻の中の四十日間—冷たい鉄格子の中で私の異常な生理が初まったのだ……豊原路子」等々。

内容を引用するより、このような性科学を看板板にしながら、実は編集のバックボーンは通俗的なSM物だというあり方に興味がある。

かってK誌の全盛期には表面きった類似誌が輩出した。この傾向とは違って内容が、ろ

こつなほどにヘンタイを売りものにしていく。歌は世につれ世は歌につれ——という文句があるが、猫もしゃくし？も雑誌出版社が「風俗」という言葉をありがたがった時代から夫婦雑誌ブーム。そして結婚または性科学と名乗り、異常性愛が、わがもの顔にセンセイショナルな編集の下に。それが昨今では家庭雑誌を標榜する「小説現代」などまで本誌でもらいたいようなSMシーンの凄じい？物まで現われる。このような出版の移り変わりも、時代を背景として（奇譚クラブを視点）体系的に一考察したら興味のあることだ。

「特集・人物往来」（人物往来社）

この雑誌は、現在は歴史ブームの波にのってオーソドックスなむしろケレンのない編集特殊歴史研究専門誌として、その名も「歴史読本」と改名、続刊されていることは、大方の知られる所であろうが、これが「特集・人物往来」として、どきついとも考えられる特集を連発していた時がある。

そして、その内容もK・K的な読物がふんだんにあり、私をことのほかよろこばしたものだ。例えば、32年11月号の「日本史を心理分析する」の特集には「信長・秀吉・家康三

傑の異常心理」があり、これを心理学者高橋鉄が筆を取っている。「サディスト・信長」の章に「叡山延暦寺を攻撃したときなどは、めざす荒法師ばかりでなく、逃げ出す稚児や女子供まで容赦なくセンメツすること千六百余人。一五八二和（天正十年）武田勝頼を破って自刃させ、その首実験をやったときは、その生首をフット・ボールのように蹴飛ばし、自分の将兵にまで呆れさせたものである」などある。また「雄略天皇の殺人狂時代」古川復一もあり「雄略帝は性格異常者」として、その大量殺人の心理を分析している。

32年4月号の「着物をぬいだ歴史」の特集でも、その目次は「脳病院のユーモア犯罪」医学博士、式場隆三郎がトップで、その唄い文句が「罌丸や子宮をむしり取り、自殺遊戯で人を殺す別世界の喜劇」とある。「現代版・ジキル博士とハイド氏」作家、平井イサク「魔性の世界史」医学博士、竹村文祥が「サディズムは神の誕生と共に始まる」皮を抉る数々の信仰の祭典と刑罰史——と大上段にうたっている。また「血に呪われた忠直卿の

病理」としては福井新聞編集局次長、青園謙三郎—妖妾にそそのかされて虐殺に狂う福井藩主のサデイズ行状記—。「マゾヒズムの文豪泉鏡花」文学士、吉田精一—迷信や幽霊を信じた明治文壇の巨匠の知られざる奇怪な半面—などなど。この当時の「人物往来」は、まさに特殊風俗文献誌向の素材が多かった。

この昭和32年前後当時の「人物往来」は、いまでも古書店に行けば値段も安く入手できる可能性がある。

「風俗雑誌？」

はだかで鞭を振る女と甘美に浸る男。

ピシリッ／＼四つん這いの夫の肌にムチを当てる狂乱の若妻……横井三郎目次のトップにこう唄われてあると、おや／＼K誌の類似雑誌がセンセイショナルな色彩をこつに、まかり出たのか——と考えられるが、これは例の医学博士級をズラリと筆陣に並べることで人気をよんだ夫婦雑誌群の一冊、家庭新社刊「夫婦生活」昭和34年八月号の内容のひとつ。これらは読みすて雑誌の一種で、紙に再生されつつあるので、その内入手がむずかし

くなりそうだ。

S・Mという世界をこのような雑誌はどのように取り上げたのか、私の意見を加えず一つの参考として記録して置きたい。

その（—甘美に浸る男—）中の／＼肉の生地獄／＼項目の抜萃。

——異性の靴を盗み、ストッキングを盗み、パンティを盗む。こうしたフェティシズム的な行為に走る男性は、そのほとんどがマゾヒストであり、さらに竜一郎は女の足に踏んづけられるのを夢想している。——この夫婦の夜の夫婦生活は、次のような、すさまじいものであった。

「竜ベエ！」

「ん？」

「はいーと、いいなさい」

「はい」

「何よ、不服ったらしい」

「しかし……」

「しかしもへチマもないわ。そんな顔をしてると、もう踏んづけてやらないから」

竜一郎はあわてて、美保子の前にひざまずいた。そうして、彼女の片足を捧げるように持ち、唇を押しつけた。

「馬っ！」と、美保子が命じる。

「裸になるのよっ」

寝間着を脱いで、四つん這いになる竜一郎……。やせた人間馬である。美保子は、その上にまたがった。竜一郎の髪をつかみ、事もなげに両足を彼の首に巻きつける。右手には竜一郎の革バンドがにぎられている。

ピシリッ／＼と尻を叩いた。

「あるけ！あるけ！」

竜一郎がよたよた歩きはじめた。

三分……五分……全身汗びっしりになり、その汗が額をすべり、眼に入った。

ピシリッ……ピシリッ……ベルトの鞭が思い出したように鳴り、疲労と苦痛で、竜一郎の心臓は破裂しそうになっている。——やがて満足した美保子が、その場にペタリと座りこむとそれを待ちかまえたように竜一郎は、いざりより、すがりついて、彼女の足に頬ずりするのである。ペロリ——赤い舌を出して、美保子の足の裏を舐める。陰惨な地獄図絵だ。美保子が、ドンと蹴つとばした。

「うっ」

鼻っ柱をしたたかに突かれ、ドロリと鼻血を出しながらひるまず竜一郎は美保子の足に

しがみついてくる。

この実話と評せられるものは、やがて「しかし、この夜は違っていた。「む…む…う…」尻の下から聞こえるかすかな苦悶の声に酔って、いつまでも、その身体を竜一郎の顔の上からあげようとしなかったのである。

——やがて、窒息^{ちっそく}による死が襲った。はじめに、この事件は、他殺であり、過失致死であり、また自殺でもあるといった。そうだ。案外、竜一郎は、死の危険も知らず、常人には到底想像もできない苦痛の快感を満喫していたのであろうか？」として「いずれにもせよ、近頃珍らしい猟奇犯罪ではあった」と結んでいる。岡崎竜一郎(28才)は、浅草のストリップ劇場の楽士であり、真崎美保子(23才)はストリップパー。

浅草署管内で起きた事件で、幸い竜一郎の日記を警察で押収、それによって稿を成したとしている。

●変態性欲と性生活「特集」

◇変態性欲と性愛

◇マゾキズムとサジズムの性生活

◇マゾキズムとサジズムの性愛

◇同性愛の実際と性生活

◇変態と常態の基準はどこにあるか

○告白手記 変態性欲者の性生活告白

○夜毎全裸の妻の変態的痴戯に圧倒され

○肉体を玩弄しつくし乳房に焼火箸をあてる夫

○性交しない同性愛に結ぶ私の性生活

以上の目次は—夫と妻の娯楽雑誌—「モダン生活」昭和26年3月号(モダン生活社)からの物で、告白の他は執筆者はすべて、医学博士か助教授がズラリ。

この中で医学博士の高堂典右は(変態と常態の基準)こんなことをいっている。

「性欲と、性生活のうえで、変態と常態の基準をはっきりしろと、厄介なことをもちこまれた。気狂^{ききがい}と正気の区別が、境界点では一向はつきりしないと似たりよったりで、気狂の特長はオレは気狂いでないと思っていることなのだが、ひねくれたいい方をする、ふつうのひとは、オレは気狂いだ、とつねに思っていない限り気狂いだ、というおかしなことになる。

性欲も、性生活も、どこまでが変態で、どこまでが常態なのか、わけられるものではない。

い。何も、個々の性生活を硝子ばりのなかで見世物にするのではないから、夫婦二人きりなら、どんな性生活を営もうとお互にそれで満足なら、マゾなのだろうか、サドだろうか常態ともいえて。お二人にとってはおおきなお世話だ、というわけだ」

余談

奇譚クラブの全盛期(約27年〜30年のはじめ位まで)は、類似の風俗誌が続出したが、いまは特殊風俗文献誌と称されるものは文献資料刊行会から発行されている「風俗奇譚」と本誌のみとなった。そしてその編集特色も鮮明になってきた。本誌がSM中心。風奇はホモ(男性的同性愛)が中心。勿論、両誌とも新しい編集をめざし、広く題材を求め、その特色から、より巾のあるジャンルを開拓しようとする命になって来たことはたしかだ。

しかし、単なる悪書として追放されるにはかつてはピンク雑誌とよばれて禁止クン章^{クン章}がサン然と輝やく? かの梅原北明の出版物が、立派に風俗文献資料として、時代を越えて、いまも生命をたもっていると同じく、結果が、庶民の歴史が「否!」とさげんでくれるだろう。

いよ。心の底から尊敬する静子先生と特別の
関係を持つ事が出来たんだからな」

津村は千代と視線を合らし、ニンマリと口
元を歪めるのだった。

千代は、勝ち誇ったような顔つきで、懐か
らチリ紙を出して口に咥えると、身を低め、
夫人の豊かな尻のまわりを結んでいる紐を解
き、静かに道……きとる。

静子夫人は、美しい眉を寄せ、真珠のよう
な歯をカチカチ噛み鳴らしながら、喘ぐよう
に顔をのけぞらせた。

「まあ、奥様、随分と……みになったよう
ね」

千代が、丹念に夫人……を始めると、
それにならって、義雄も小夜子の傍らに近づ
くのである。

「ああー」

小夜子は全身を慄わせ、ねじるように真っ
赤な顔をそらせ、全身に消え入るような羞恥
を漲らせるのだ。

ようやく仕事をすませて立ち上った千代は
屈辱の極致に追いこまれ、顔を伏せて小さく
すすり上げている静子夫人の顎に手をかけ、
ぐいと正面にこじ上げる。そして、芙蓉の花
のように高貴な感のする夫人の美貌をしげし

げと見つめながら、千代は口を開いた。

「さて、奥様。今度は今のようなのではな
く、可愛い一人の女として、捨太郎さんの
愛を受入れて頂きますわ。よろしゅうござい
ますわね」

千代が愉快そうにそういった時、襖が開い
て、井上が入って来た。

「何だ、皆さん、こんな所でお楽しみ中だっ
たのですかい」

井上は、部屋の中央に背中をぴったり合わ
せている美しい二人のさらし者に眼を向け、
ニヤリと口元を歪めた。

「今、この奥様とお嬢さんは、俺達の眼の前
で、深い関係をお誓いになったんだ」

と、田代が眼を細めて井上にいい、

「これから、奥様は、捨太郎の愛情をたっぷ
りお受けになる。お前も見物させてやるよ」

「そいつは有難いが、社長、今、賭場の方は
一段落しましたぜ。そろそろ竹藪の土蔵で美
津子と文夫のショーにかかりたいんですが」

そうか、と田代はうなずき、「そうなら、
呑気にやしてられないぞ」と立ち上った。

「残念だが、捨太郎と静子とのからみはおあ
ずけだ。岩崎親分の御気嫌をとるのが先決だ
からな」

すると、銀子が口をとがらす。

「でも社長、それじゃ捨太郎さんが可哀そう
よ。食べようとした御馳走を、さっと持って
行かれたみたいで——」

「ハハハ、ま、あわてる事はないさ。第一、
今の熱演で奥様も大分お疲れの御様子だ。欲
ばって楽しませ過ぎると身体にガタが来るか
らな」

田代はそういって、チラと捨太郎の方を見
ると、彼は、自分の番を待ちくたびれて焼酎
を飲み過ぎ、座布団を枕にいい気持で酔寝し
てしまっている。

「残念だけど仕方がないわね」

と千代もだらしないう捨太郎の恰好を見て、
視線を静子夫人に戻し、

「ま、楽しみは一度にせず、ゆっくり味わっ
た方がいいわ。そうでしょう、奥様。今の熱
演に免じて、今夜はこれで解放してあげまし
よう」

つづいて鬼源が、静子夫人の前に立つ。

「皆さんの御意見に従って、今夜はこれで打
止めだ。そのかわり明日の夜は、岩崎親分の
前でぶっつけ本番をやるんだ。いいな」

静子夫人はすでに捨太郎の女房である事を
岩崎親分に告げ、彼の眼前で、時代劇調に日

本髪にした静子夫人を捨太郎になぶらせるという計画が鬼源の脳裡に浮かび上る。

「それじゃ鬼源さん、今夜はこの二人の別嬪さんを一緒にして、地下牢へぶちこんでおこうじゃねえか。この立派な部屋は、この奥様が捨太郎とはつきり関係が出来、夫婦となつて暮す所だ。だから今夜は、まだここで寝る資格がねえ。奴隷としてのしつけもきびしくしなきゃな」

と、川田が鬼源に進言する。

たしかにそうだ、と鬼源はうなずき、

「わかったな、静子。皆様のお情けに感謝しな。今夜は、地下牢で小夜子と水いらすずで一晩過させてやる。そのかわり、明日は朝早くから調教開始だ。いいな、七時起床だぞ」

鬼源は、静子夫人の線の綺麗な頬を指ではじき、廊下へ出ると、用意してあったらしい洗面器を二つ持って戻って来る。

その一つを静子夫人の前に、一つを小夜子爪先に配置するのだった。

深くうなだれていた静子夫人の翳の深い、涙にうるんだ美しい瞳が、ふと、足先に置かれた洗面器に気づき、はっと狼狽して、顔をそらせる。

「さ、二人とも、仲良く一緒にすますんだ。」

明日の朝まで行かせてはもらえないんだぜ」

と鬼源は、煙草を口にしながらいう。

小夜子が、狂おしげに首を振り、次には、消え入るように深く首を垂れ、絹糸のようにか細い声ですすり泣く。

「どうしたんだよつ、早くすませねえか。今更、手前達、羞かしいなんていえた義理かっ」

と、鬼源がどなったので、円座の見物人達はゲラゲラ笑った。

「ホホホ、奥様。貴女まで小夜子さんと同じようモジモジなさってはい駄目じゃありませんか。小夜子さんを調教して下さるお約束でしょう。さ、御自身でお手元を示し、小夜子さんと一緒になさって下さいまし」

千代は、しつとりと涙を潤ませている静子夫人の美しい瞳を、のぞきこむようにしながら、ねちねちといたぶり出す。

静子夫人は、毒喰らわば皿まで、といった悲痛な決心をしたのか、ふと美しい容貌をきつと引き緊めた。

「——小夜子さん。私達はもう人間じゃないのよ。ね、お願い、静子と一緒に——」

「嫌っ嫌です。出来ないわ、そんな事——」
「駄目っ、小夜子さん。静子と一緒になら、ど

んな事でもするというお約束だったでしょう。お願い、静子のする通り、貴女も、ねえお願い——」

静子夫人の象牙色の端正な頬に幾筋もの熱い涙が流れ落ちる。

吉沢が、夫人の肢の下に身をかがめて、……しげしげ見つめながら

「へへへ、外へ洩らさねえよう上手にこいつへ入れるんだぜ」

静子夫人は、切なげに眼を閉ざし、口惜しげに唇を噛み、羞恥の塊をぐっと呑みこんだよう顔を横へそらせたが、同時に、むっちりとした成熟し、妖しいばかりの官能美を湛えた太腿が左……き始める。観念して、責め手の望むままにしようと夫人は洗面器を前にして大胆なポーズをとり始めたのだ。

立ったまま洗面器を使う場合には、そのようにしろ、と鬼源に調教されたポーズなのであろう。ねつとりと乳白色の脂肪を乗せた光沢のある夫人の太腿が観念を示すと、その心を溶かすような夫人の色艶に、吉沢は、ごくりと唾を呑みこむ。

銀子も何か陶然とした心地になったが、「フフフ、これが元遠山財閥の令夫人だと思つと笑いが止まらないわ。よくまあ、そう

「いう浅ましい恰好が、お出来になるわねえ、奥様」

などといって、笑いこけるのだ。

「ちよいと、お嬢さん。何時までも、メソメソしてしないで、静子お姉様を見習って、立シヨンポーズを覚えなきゃあ」

と、銀子は次に小夜子の方へ廻り、縄に緊めあげられている小夜子の熟した白桃のような乳房を指ではじくのだ。

「ね、小夜子さん。お願い、静子のように貴女も、——」

ウェーブのかかった房々した黒髪を憐れせ小さくすすり上げていた小夜子は、遂に決心したよう泣き濡れた美しい顔を上へ上げる。

静子夫人と一緒に、生き恥をさらせばいいのだと魂まで売り渡した気持で、かたく眼を閉ざし、きつと唇を噛みしめた小夜子。そんな彼女を頼もしげに見つめていた銀子と朱美は、「そうそう。感心よ、小夜子。そのように素直にならなきゃ駄目」と、手をたたいて笑い出した。

小夜子の華奢だが、しなやかに引き緊った光沢のある太腿が、静子夫人と同じく、洗面器を前にして、静かに動き始めたのだ。

「さ、お始めになって。仲良く御一緒にね」

ズベ公二人と千代は、夫人と小夜子の羞恥にむせぶ美しい横顔に眼をやり、足元の洗面器を指さし、笑い続ける。

「どうしたんだ。早くしねえか、こちとらは忙がしいんだ。ぐずぐずしやがると、最初の予定通り、小夜子はチンピラ部屋入りだぜ」

鬼源が持前のガラガラ声を張り上げた。

「——小、小夜子さん。静子と、静子と一緒に——ね、お願い——」

静子夫人は、祈るようにそういうと、白い光沢のあるねっとりしたうなじを大きく見せて、顔をのけぞらせた。

わっと見物人達の嘲笑、と同時に、洗面器の底をたたく水の音が、小夜子の耳に突き刺すように入ってきたのだ。

「ハハハ、しっかりやれ」

「ホホホ、いい気なもんね」

「何してんのよ、小夜子の方は。奥様一人を笑い者にする気？」

などと、見物の悪男悪女は囁し立てる。

小夜子は、羞恥と恐怖に火照った顔を上げると、遂に決心し、夫人と同じく、大きく首をうしろへのけぞらせる。そうする事によって、苦痛を分かちあい、互をかばいあう、そんな気持もあったのだろう。夫人と共に生恥を

さらせばいいのだと、死んだ気持になった小夜子は——

一きわ激しく周囲を埋める見物人達の間から哄笑が湧き起った。

後手に縛られている夫人と小夜子の手が、この息もつまる屈辱を何とか乗り越えようとすように、しっぴかりつかみあい、ぴったりと背を押しつけあっている。

「いいところの奥様とお嬢様が——ホホホ、まあ、はしたない、立ったままで——」

千代は、二人の緊縛された美女の周りを手をたたいて歩きながら。そんな事をいって嘲笑するのだった。

調教日記

翌日、義雄が眼を覚ましたのは、もう昼近かった。

昨夜は、静子夫人と小夜子のシヨを堪能したあと、岩崎達と一緒に竹藪の中にある密室で、美少年と美少女とのシヨを楽しむ、その興奮は朝眼が開いても、さめやらず、義雄は、ベッドの中で大きく伸びをすると、上体を起して、上衣のポケットから煙草をとり出し、口にした。

美少年と美少女のショーに度胆を抜かれ、有頂天になってしまった岩崎は、こうしたプログラムはまだまだ豊富に用意してある、と田代に聞くと、顔中皺だらけにして喜び、あと二三日この屋敷へ滞在し、自分の名を使って田代が賭場を開く事を承知したのである。一度に全部のショーは見せず、小出しにして岩崎の助平心をくすぐるというのが田代と森田が考えた狙いであったが、その作戦は見事に図に当たったわけである。

義雄は、眼を細め、うまそうに煙草の煙を口から吐いた。

「ざまを見ろ、小夜子の奴、これで俺は完全に昔の恨みをはらしたぜ」

義雄は、ニヤリとして、昨夜、衆人環視の中で、静子夫人と女同志の屈辱にうちのめされ、そのあと、夫人と一緒に、狂うばかりの羞恥をキリキリ噛みしみながら、洗面器へ放出させられた小夜子の事を想い出す。

いくら美人で、上流社会に生れたの、育ったのといったって、一皮剥ぎゃあのだまだ。これからは鬼源達の徹底した調教を受け、あの天性の美貌を誇っていた静子夫人と共に森田組の大スターになる事だ、と、義雄は、口の中でつぶやくのだった。

昨夜、鬼源達に強制され、洗面器を前にして、優雅で、なやかな身悶えを夫人と共にくり返しつつ、俺の目の前で、わずかずつ、洩……め、羞恥と屈辱にのたうちながら、もうどうしようもなくなったよう、次第次第に激しく……し始め、夫人と共に狂おしいばかりの身悶えと哀泣を、埋め尽す見物人達の中で強いられた小夜子——。義雄は、ニヤニヤと口元を歪めながら、何度もその情景を想起している。

義雄が服を着て、二階の食堂へ姿を現わすと、田代と岩崎が早い昼食をとりながら、何か談笑していた。

「どうもどうも、すっかり朝寝してしまいましたよ」

義雄が頭をかきながら食堂へ入って行くと岩崎は上機嫌で、ナフキンで口元を拭きながら、

「わいは興奮して、ろくに寝られずや。値打ちがあったぜ、昨夜のショーは」

と、義雄の前のコップに葡萄酒を注ぐのである。

「昨夜、ショーに出た娘、うちの若い衆は、園マリそっくりの別嬪やというて大騒ぎしよったが、あら何ちゅう娘や」

岩崎は、田代に聞いている。

「美津子というんですよ。未だ十八、夕霧女子高校の才媛だったのですが——おっと、スターの身元についてのお問合わせは御容赦願います」

と、田代は笑いながらいった。

「へへえ。この前、わいが楽しませて貰うた静子ちゅう年増にしる、昨夜の美津子にせよ、田代はん、あんた、すごい別嬪を揃えたもんやな」

「おほめにあずかって恐縮です」

田代も悦に入っている。

「ところで、今夜の出しものは何や」

「桂子という若鮎のようにピチピチ若い娘のショーで、そのあと、親分、お待ち兼ねの静子を出演させる予定なんですが」

「な、田代さん、昨日も一寸いうたように、あの静子は、わいに世話させてくれんか」

「ところが親分、あの女だけは、二千万、三千万、親分がお出し下さるとおっしゃってもお譲りするわけにはいかないんですよ。あれには、捨太郎という薄馬鹿の亭主がついてるんです」

「薄馬鹿？」

田代の説明を聞いて、岩崎は眼を白黒させ

た。

「はあ、二人は、ぴったりと息の合った実演スターですし、すでに子供まである間柄ですから」

と田代は出鱈目を並べて、そういう種の女を親分が妾に持たれるって事は世間態が悪いじゃないですか、といった。

岩崎は、信じられぬといった面持で、小首をかしげたが、

「そうか、それが事実、やったら仕様がなくな。わいかて、天下の岩崎や。そういう薄馬鹿の女房を寝取ったとあっては、^{こけん}沽券にかかわるもんな」

「そうですよ、だから野暮な事はいわず、旅の恥はかき捨て、ここでたっぷり楽しもうじやありませんか」

と、義雄が田代と調子を合わせ、岩崎にいう。

「うん——そやけど、ありゃ、凄い美人や。顔だけやなく、あんなええ身体した女にわいはこれまで出逢うた事はない。それにまた、あの緊り具合、思い出すだけでも、何やこう胸が切のうなってくるわ」

岩崎は、やり切れないような吐息を吐きつつ、阿呆のような表情になって、そんな事を

いうのであった。

田代と義雄は顔を見合わせて、ニヤリと笑う。

そこへ森田が、恐縮した足どりで入って来ると岩崎に告げた。

「親分、和光組、南原一家の親分衆がぜひ御挨拶したいとやって来ましたが——」

関西の大物、岩崎が来たと知って関東方面の渡世人達が今朝方から続々と挨拶につめかけて来るのである。

「そうか」

と岩崎は腰をあげ、森田の後について食堂を出て行った。

岩崎の姿が消えると田代は、ほっとした気分になり、義雄に握手を求めるのである。

「大成功だったよ、津村さん。昨夜のテラ銭

のあたりは、ざっと一千万円にもなる。この調子でいきや岩崎親分がこれから引揚げるまでにや五千万はあがると思うな。貴方のお力添えのおかげだ。あとでたっぷりお礼をさせてもらいますよ」

「いや、そんな事より僕としては、村瀬小夜子に対する長年の恨みを心いくまではらす事が出来た事、これで充分ですよ。それに弟の仇ともここでめぐり逢う事が出来たし——」

そういった義雄は、そうだと腰をあげる。

「一寸、シスターボーイ達の部屋をのぞいてみますよ。あれからどうなったか気がかりですからね」

小夜子を完膚なきまで、苦悩の極に落としこみ、溜飲を下げたが、弟の清次達を空手で倒した京子に対する復讐の結果を見なくてはならない。義雄は、ふと胸を躍らせて食堂を出て、シスターボーイ達のいる部屋へ足を運んだ。

春太郎、夏次郎、京子の三人のスイートホームという事になっている部屋の前に立ち、義雄がノックすると、「どなたですか」と春太郎のしゃがれた声が中でする。

「俺だよ、津村だ」

「まあ、津村さん」

内鍵を外す音がし、ドアが開いて、春太郎が顔を出した。

「どうかね？ 初夜は、とどこおりなくすんだかい」

義雄はそういつて微笑する。

「いやーね。そんな事、はっきりお聞きになるものじゃないわ」

と、春太郎は、とってつけたようなしなを作って、クスクス笑い、

「今、三人揃ってお食事の最中よ。でもいいわ、お入りになって——」

春太郎は義雄を招き入れた。

丸い食卓を囲んで奇妙な三人夫婦の食事である。京子は、相変らず、美しい裸身を後手に麻縄で緊縛され、足はあぐら縛りにされ、食卓の前に坐らされている。

そんな京子に春太郎と夏次郎が左右から、ぴったりと身体をすり寄せるようにして、交互に茶碗と箸を持って、京子に食事させているのだった。

京子は、一切は終わったというような悲しげな表情で、空虚に眼をしばたきながら、昨日まで見せた反抗の色は嘘のように喪失してしまっている。

「さ、京子、お肉よ。アーンと大きくお口を開いて」

春太郎がナイフで細かく切った肉の一切を夏次郎が箸でつまみ、京子の口元へ運んで行くのだ。

京子が悲しげに首を横に振り、眼を伏せると、

「駄目よ、お食事をちゃんととらないとスタミナ不足で満足なお稽古が出来ないじゃないの。ね、いい子だから、アーンとお口を開い

て——」

と、夏次郎は子供をたしなめるようにいいながら、再び、箸を京子の紅唇に近づけるのである。

京子は、静かに首を夏次郎の方に向け、眼を閉ざしながら、羞しげに口を開く。

「どう、京子、おいしいでしょう？」

夏次郎は、口の中のものをつつましやかに噛んでいる京子の美しい横顔をしげしげと見て、楽しそうに声をかけるのだ。

義雄は、そんな珍妙な光景を見ているうちに、昨夜、京子がこの二人のシスターボーイに完全に征伏されたという事をはっきり感じとった。一切の望みを断ち切られたというような悲しい、そして、けだるい諦感の上へ身をゆだねているよう、京子は左右へ寄り添う二人のシスターボーイの手で食事をとらされているのだ。

「ハハハ、なかなか夫婦仲がいいね。何だか当てられた気分だよ」

と、義雄は口に煙草を咥^{くわ}えて笑うと、

「そりゃそうよ。昨夜、京子は完全に私達二人の妻になったのよ、ね、京子」

春太郎は、美しい頬を赤らめ、伏眼している京子の頬のあたりを指でつつき、含み笑

をする。つづいて、夏次郎も浮き浮きした調子で、

「京子はね、津村さん。素直なとてもいい子になったのよ。空手なんか二度と使わない優しい女に必ずなりますと誓って、私達二人の愛情を同時に受入れてくれたのよ」

「同時に？」

「フフフ、そう、同時によ。ね、京子、いいでしょ、あの事を津村さんに聞かせてあげても——」

春太郎がそういって、京子の横顔を見るとさっと耳たぶまで朱に染めた京子は、ひどく狼狽して、モジモジしながら深く首を垂れてしまふのだった。

「ま、これを聞いて下されば、よくわかると思うわ」

春太郎は立ち上って、部屋の隅に置いてあったテープレコーダーを運んで来て、義雄の前に置く。

「あとで社長と一緒に聞いて頂戴。私達三人の愛の記録を全部録音してあるわ。それからね、これから私、毎日、京子の調教日誌をつける事にしたの」

春太郎は青い表紙のノートを義雄に差し出した。表紙には愛情日誌と書かれ、その下に

京子を真中にして、春太郎、夏次郎の名が並んでいる。

義雄は興味をそそられて、一頁を開いた。

それは、京子と二人のシスターボーイとの情事の記録ともいうべきもので義雄は読んでいくうちにクスクス笑い出し、遂には吹き出してしまった。京子が二人の男の愛情を受けるといふ意味がようやくわかったからで、日誌の最後の方には、次のような事が春太郎の字で書かれてあったのである。

「ⅡⅡそのように拒否し続ける京子を夏次と共に説得した結果、京子はAとVと同時に使用させる事をようやく納得せり。ただし、マウスの使用だけは頑強に拒否して泣きじゃくる。妻に愛情あれば、その使用は不自然にあらずと、こちらも意地になりて京子を叱責したる所、明夜は必ず用いると泣く泣く哀願を重ねたる故、いささか不憫にも思い、今夜は京子のAとVのみを使用させる事に決着、一まず京子を立ち上らせ、天井よりロープ一本でつるし立て、前後より攻撃を開始せり。

最初は夏次にVを与え、我はAを用いたれど、Aの方は思いの外、円滑に事は運ばず、京子、大いに取乱し、一そ、殺して、などとわめいて、いささか手古ずりたれど、数分の

のち、充分に……め、遂に予定の同時責めに入れり。その激しき……に京子、身を打震わせて号泣す。時間は約二十分。

京子、涙を流して、今までの横暴を詫び、愛らしき女となる事を誓う。十分休憩、次は我がV、夏次がAを用いる。時間、約一時間京子、積極的に始める。二度ばかり京子、失神す。京子に情事の極限を知らしめたる感。明夜、VAMの三つを使用さす事、かく誓わせ、ようやく解放せり。Ⅱ

「なるほど、よくわかったよ」

義雄は、ニヤリと口元を歪めて春太郎にノートを返した。

「ね、津村さん、それに書いてある通り、昨夜、京子は女として心底から開眼したのよ。私達二人に永遠の愛を誓ってくれたのよ」

春太郎は義雄にそういうと次に京子の方を見て

「さて、京子、そろそろお稽古にかかりましょうか。昨夜は楽しみ過ぎて随分と寝坊しちゃったわ。だから、午後はみっちりお稽古しましょうね」

二人のシスターボーイは食卓を片附けると手に手にハンドバッグと紙袋を持ち、あぐら縛りにされている京子の左右へ再び近寄るの

だった。これから京子に朝化粧をほどこそうというのである。

二人のシスターボーイは馴れた手つきで櫛を使って京子の黒髪をすきあげ、京子の顔を念入りに化粧していく。京子は軽く瞑黙するようにして、二人の手に一切をゆだねてしまっている。夏次郎は、口紅を唾でしめしながら、京子の唇にぬり始めた。

そんな様子をじっと観察していた義雄は、「じゃ、弟の清次達がここへやって来ても、京子は観念して、お仕置を受けるってわけだな」

というと、京子の首筋あたりに香水をふりまいていた春太郎は、

「勿論よ。その事についても京子と約束したのよ。悪びれず清次さん達の復讐を受けるって。そして、心から、暴力を振るった事を詫びるそうよ。ね、そうだね、京子」

春太郎が京子の頬を指で突くと、京子は、伏眼しながら、小さくうなずくのであった。

「ね、津村さん。京子もこういう風に素直になったんだから、京子のこの美しい身体に傷をつけるような責め折檻はしないでね」

京子の化粧をすませた春太郎と夏次郎は、「まあ、きれいになったわ、京子。惚れ惚れ

しちゃうな」

などといいながら、京子をあぐらに縛った縄を解き始め、

「さ、京子、立ってごらん」

左右から京子のふくよかな白い肩とスベスベした背に手を当て、立ち上らせるのだ。

「調教柱に立つのよ、京子」

京子を後手に縛った縄尻をとる春太郎は、軽く京子の背を突き、部屋の壁近くに立っている柱の方へ引き立てていく。

京子は、凄惨なばかりの冷静な表情で歩きためらわず調教用と彼等のいう柱を背にしてすっと立つのである。

春太郎と夏次郎は柱の下に束ねてある縄を取り上げ、キリキリと京子の伸びのある美しい裸身を柱にかちりとつなぎ止めるのだった。

京子は、昨夜、この二人に徹底的に責められ、情事の極限を知らされた疲れがとれぬのか、あくどい責めの数々に精神を麻痺させてしまったのか、ふと疲労の色をにじませ、濡れたような幻想的な眼差しをぼんやりと前方に向けているのだった。

義雄は、柱にきびしく縛りつけられた京子に近づき、ニヤニヤしながら、その美しい全

身に眼を走らす。

いささか疲労の色を帯びた表情とは別に、固く緊ってムンムンするような成熟味を湛えた太腿や腰のあたりのゆるやかな曲線、上下をかたく締めあげている麻縄を今にもはじき返すような弾力のある見事に成熟した乳房、すべて、生々しいばかりに新鮮な美しさであり、義雄は思わずぐくりと生唾を呑みこむのだった。

「昨夜、お前の妹のショーを見たぜ。お前の妹だけあって、なかなかの美人じゃないか。園マリそっくりだといって、若い連中が大喜びしていたよ」

義雄は、京子の観念しきった表情をのぞきこむようにして、そんな事をいった。

義雄の言葉を聞くと、京子は急に悲痛な色を顔面一杯に浮かべ、眼を伏せる。美津子が現在、悪魔達の手で、どのような目に合わされていのか、大体の想像はつく。聞くのさえ怖しく、京子は、深くうなだれてしまうのだった。

春太郎は、そんな京子の横顔に、じっと眼を注いでいたが、

「ね、お夏、京子は一寸、田代百合子ってところに似ているんじゃない。横顔なんか、そ

っくりだわ」

「そうね、そういえば、身体つきまで似ているような気がするわ」

二人のシスターボーイは、そんな事をしゃべり、調教柱に緊縛されている京子をしげしげと眺めるのだった。

「さ、何時までもものんびりとはしていられないわ。社長と約束した通り、私達、京子をスターの座に乘せなきゃならないのよ」

春太郎は、そういって、義雄の方を見、照れたように笑い出す。

「津村さんが見ていると、やりにくいわ。第一、京子が羞しがって、調子を出せないと思うの。悪いけど、ここから出て行って下さらない」

「ヤレヤレ、また追い出しか。けちな事いわず、お前達の仕事を、とっくりと見学させてくれよ」

義雄は、口をとがらせて見せる。

「駄目よ。これから京子にお……をさせてあげなきゃならないし、日課であるおヒゲ剃りもしてあげなきゃならないわ。夫婦水入らずでする事よ。他人にのぞかれるなんて、感じ悪いわ」

ま、社長と一緒にこれを聞いてお楽しみに

なつて、と春太郎はテープレコーダを義雄に渡す。

「仕方がない。お前のいう通りにしよう。その代り、京子をしっかり調教するんだぞ。鬼源に負けないようにな」

「任せておいて。調教師として推薦して下さい。津村さんの顔は潰さないわ」

それを聞くと義雄は満足そうにうなずき、テープレコーダをかかえて、出て行った。

手鏡

津村が部屋を出て行くと、夏次郎は早速、ドアに内鍵をかける。

「邪魔者は出て行つたわ。さて、水入らずでみっちりお稽古しましょうね、京子」

夏次郎は、柱に固定された美しい裸身の傍へ近づき、

「私達の仕事は、妻を秘密ショーのスターとして、肉体的にも精神的にも完成させる事、わかるわね。そのために月十万円も社長からお手当を頂けるのよ。生まれ変わったつもりで私達の仕事に協力して頂戴」

と、京子の柔らかな肩に手をかけ、^{さよ}覚すよ
うな調子でいう。

「昨夜、何度も泣きながら誓ったこと、あれを忘れちゃ駄目よ。いいわね、京子」

と、次に春太郎が、京子の頬を指でつき、口元に微笑を浮かべていった。

京子は、瞼を軽く閉ざしたまま、小さくうなずいた。一切の人間的感情を捨てて、これより、地獄の調教を受け、彼等の望むままに身も心も作り変えようとする悲痛な決意が、水のように冷静な京子の美しい横顔に、はつきりとにじみ出ている。春太郎と夏次郎は、ほくほくした思いになる。

「それじゃ、まず、朝の日課をすましましょうね。おヒゲを剃るのよ」

春太郎は、盆の上に用意してある西洋剃刀を取上げ、皮バンドで磨き始める。

「本当は毛根を全部抜きとってしまった方がさっぱりするんだけど、毎朝、こうして、二人の夫に剃って貰う方が京子も楽しいでしょうからね」

夏次郎は、小皿の中の石鹸水を刷毛でとかしながら、楽しそうにいう。

「さ、京子、少し開いてごらん」

夏次郎は、京子のミルク色に霞んだムチムチする太腿を指で突く。

「——は、羞しいわ」

京子は、頬を薄くバラ色に染め、モジモジと顔をそらせたが、そんな京子の柔肌から、今までには見られなかった妖しいばかりの色気が湧き出した。それは、身も心も、この二人のシスターボーイに屈服した証拠とも受取られる。消え入るように羞恥に悶える様は、意識的に男達をモソモソ喜ばせようとしているとも感じとれるのだ。

「さ、そんなに羞かしがらずに。フッフ、本当は嬉しいのじゃない、京子」

「——うん、意地悪」

京子は、すねるように鼻を鳴らし、熱い吐息と共に身をくねらせ、ぴったりと閉じ合わせていた官能味を湛えた太腿を静かに……：き始めたのである。

春太郎と夏次郎は、しびれるような気分で早速、仕事にとりかかる。

夏次郎が刷毛を使って石鹸水を万遍なくすりつけ、「こっちの方もキレイにしましょうね。見苦しくないようにね」と、刷毛を運ばせると、京子は、再び、鼻を鳴らして、悩ましく身悶えしながら、

「うん、馬鹿、馬鹿」

と熱い吐息を混ぜて、甘い声を立て続けるのだった。

やがて、春太郎の手で剃刀が当てられる。

京子は、美しい頬をバラ色にほんのりと上気させ、綺麗に引き緊った鼻筋を横にそらせて、逃れようもなく、甘受している。

薄い絹のような肌を滑べる刃の動き。京子は、切なげに睫毛の長い瞳を閉ざして、暖かそうに白く輝くうなじをくつきりと見せ、仕事をつづける春太郎の心を溶かすようなうめきをくり返すしかないのだ。

「京子がこうしていると、いじらしい位に可愛いいわ。こないじらしいところを見てみると、京子が空手二段のじゃじゃ馬だったなんて信じられないわ」

などと、クスクス笑っている。

「——お願い、もう、そんな事は、おっしゃらないで」

京子は、甘えかかるともとれるように首を振りながら鼻を鳴らすのだ。

「さてと、じゃ、今度はうしろの方のお手入れをしてあげるわ」

春太郎がそういうと、夏次郎は、京子が軽く左右………いる一方の太腿を両手で抱きかかえるようにし、上へ持上げようとする。

「——ああ、な、何をなさるの」

「お春の仕事がやりいように足を上へあげ

るのよ」

京子は、もう、どうにでもして——、とばかり、夏次郎に片肢をあずけてしまう。羞恥の極に身悶えはしても、反抗的な行為は何一つ示さなくなった京子である。

夏次郎がよいしょと持ち上げ、春太郎は、もぐりこむようにして再び仕事を始めた。

「フフフ、京子って幸せね。亭主二人に、こんな事までしてもらえるんだもの」

春太郎は、まるで自動車の修理工のようなポーズで、器用に剃刀を使いながら、そういつて笑う。

京子は、世にも切なげに夏次郎の肩のあたりにまで引上げられた肢をよじらせながら、首筋まで真っ赤にし、シクシクと声をひそめて、すすり泣くのであった。

「さて、出来上りよ」

ようやく仕事をすませた二人のシスターボーイは、薄い布で、きれいに石鹸水を拭き取って立ち上り、改めて、光沢のある美しい京子を凝視する。

春太郎は、棚の上から、古めかしい大きな手鏡を取ると、ニヤニヤして、再び、京子の足元に身をかがめ、鏡を傾斜さして、写し出そうとする。

「一寸、御覧なさいよ、京子。如何が、お気に召して？」

京子は、ぼんやりと眼を開き、春太郎が下から差し向けている手鏡を見たが、途端に、さっと狼狽して眼をそらせる。

「駄目よ、見なくちゃ。お化粧した顔を見るじゃない。この道のスターになるための京子にとっては、なによりも大事なことのよ」

夏次郎が京子の顎に手をかけて叱咤する。反抗の意志を全く喪失してしまっている京子は、二人の男にせかされて、憂いを含んだ、しつとりと潤む美しい瞳をうつろに手鏡に戻すのだった。

興味深そうに、そんな京子を観察する春太郎と夏次郎である。

「フフフ、いかが。私達に感想を聞かせてよ京子」

夏次郎は、うるんだ美しい瞳を春太郎の傾けている手鏡に落している京子の横顔に見入っていたが、自分も手鏡を見て、

「ね、京子、そうして鏡を見ると自分が女であるという事をしみじみ感じるでしょう。いわね、二度と空手なんか使わぬ優しい女に生まれ変わるのよ」

夏次郎が、京子のふっくらした頬に軽く口

吻して、そういうと、美しい濡れた瞳を鏡に注ぐ京子は、すすり泣きの声と共に、小さくうなずくのだった。

そうした京子のしぐさや身動きに、自分の運命を完全に諦め、男達の好むままに振舞おうとするような情感といじらしさが感じとられ、春太郎と夏次郎は、京子が思う壺通りの女らしさを持ち始めた事を喜ぶのである。そして、追討ちをかけるような調子で、

「これから京子は毎朝、そのようにして、自分の美しさを眺めながら、宣誓するのよ。これを朝の日課にするわ。つまりね、京子は毎朝、自分の成長ぶりを鏡で眺める事が出来るわけよ。毎朝、鏡を見るのが、きっと楽しみになるわ」

二人は、顔を見合わせて、クスクス笑いながら、この際、京子に徹底的な洗脳をほどこし、身も心も作り変え、自分達二人に完全に従属させようと懸命になり出した。

やがて、京子は、魂を抜き取られた女のような二人のシスターボーイの命令を忠実に実行し始めたのである。

涙に濡れて、キラキラ光る美しい瞳をじっと鏡の中に注ぎながら京子は、彼等に教えこまれた通りの宣誓を始めたのだ。

「——京子は、今日も一日、二人の夫の愛情ある調教を喜んでお受けし、可愛い、女らしい女性に成長するつもりでございます。二人の夫には絶体服従、どのような激しい調教を要求されても、京子は喜んで行う事を誓います——」

綺麗な睫毛をそよとも動かさず、じっと鏡の中に眼を落し、そんな事を口にした京子の深い憂愁をこめた美しい横顔を見つめた夏次郎は、満足そうにうなずき、春太郎と並んで腰を低めると

「……を一度はつきり見ておいた方がいいわね」

いきなり指……いた時、京子は驚きと狼狽にはっと全身を硬直させたが、

「駄目っ、大きく眼を開いて、しっかり見ておくのよ」

と、春太郎と夏次郎は、きびしい口調になって動揺を示す京子を叱咤する。

京子は、進退極まったよう哀しげな深い憂いの色を表情に浮かべて、眼を鏡の中へ再び落すのだった。やがて、京子の表情は、凍りつくような凄艶さとなり、喰い入るような熱っぽい眼つきになって鏡の中を見つめ出す。それだけではなく、京子は遂に心の底に巣く

う悪魔を引きずり出されてしまったのか、その眼にうつる効果を一層高めるため、あきればかりの大胆さをみせ始めたのだ。

春太郎と夏次郎は度胆を抜かれた思いで顔を見合わせ、次にこみ上って来る勝利感に互いにニヤリと口元を歪めた。苦勞の末、京子が遂に自分達が期待する型の女体に変貌して来た事、それがたまらなく嬉しく、してやったりとばかり北叟笑むのである。

「大分興味が湧いて来たようね。如何が、女って複雑だと思うでしょう」

更に……げて、充分、京子に確認させ、ようやく立ち上って手鏡を引込めた春太郎と夏次郎は、上気して、熱い吐息を吐き、凄艶な瞳を、ぼんやり前に向けている京子を、ホクホクした思いで見つめながら

「これで私達、京子をこの道のスターに仕上げる自信がついたわ。じゃ、そろそろお稽古に入りましょうね」

京子は、まるで催眠術にでもかかったように彼等にあやつられるままとなってしまうのである。

まず、すまずものはすましておいて、と、彼等がピンク色の小さな可愛い便器を持ち出して来ても、もう狼狽ぶりは示さず、命じ

られるまま、それを………の間ではさみ、
立ったまま跨ったような恰好になる。そして
上の空のような声で、便器を持ち添えるよう
にして、左右へ身をかがめ出した春太郎と夏
次郎に、

「ね、そんなにじろじろ御覧になっちゃ嫌。

京子、出来ないわ」

「馬鹿ね。私達、貴女の夫よ。何も羞かしが
る事ないわよ」

「でも——嫌。ね、お願い、眼をそらしてい
て——」

「駄目。大きく眼をむいて、はっきり見てあ
げる」

「嫌、嫌っ、あっちを向いて、ねえ、お願い
したら——」

京子は鼻を鳴らし、モジモジ肩を揺り動か
して、甘えかかるようにすねて見せる。

「フッフ、夫の命令には絶対服従の約束だっ
たでしょ」

夏次郎が、京子の官能的なむっちりした太
腿を指ではじいて笑う。

「——うん、意地悪」

京子は、再び、鼻を鳴らし、上気した美し
い顔をねじるように横へそむけると、彼等に
とっては心も溶けるような声を、すすり上げ

るように出すのであった。

「あなた、お願い、笑っちゃ嫌よ」

と同時に、静かに、次第に激しく、やがて
火爆布となって——。

「まあ、京子ったら、フッフ、凄いわね」

「レディはもう少し、おしとやかにするもの
よ」

春太郎と夏次郎は、放出する京子に向かっ
て、揶揄し、哄笑する。

「ああ、もういじめないで——」

京子は、火のように熱くなった顔を狂おし
げに右へそらせたり、左へそらせたりしなが
ら啼泣する。

ようやく最後まで見とどけたシスターボー
イ二人は、便器を部屋の隅へ置き、

「フッフ、まるで赤ちゃんね。何でもこちら
任せで楽なもんじゃないの、京子」

と笑いながら、チリ………して………し、次
に、ぐったりと首を垂れている京子の足元へ
よく熟した一房のバナナを置いた。

「これから夕方まで、みっちり、お稽古する
のよ。まだお眼にかかっちゃいけないけど、静
子さんというスターは、上手に出来るんです
ってね。そんなのに負けちゃ駄目よ」

京子がバラ色に染まった線の綺麗な頬をこ

ちらに見せ、深くうなだれているのに気づい
た春太郎は、

「ちょいと、どうしたのよ。お稽古を前にし
て、そんなメソメソした態度は気に喰わない
わ。お互に楽しい気持で、お稽古をしましょ
うよ」

京子は、肩を突かれて、ふっと美しい顔を
正面に上げる。未練を断ち切ったように、息
を呑みこんだ京子は、口元に複雑な気持を秘
めた微笑をそよがせて、

「ごめんなさい、あなた。もう決して、メソ
メソしないわ」

淋しげな微笑を頬に浮かべた京子は、柔か
い睫毛をうっとり閉じ合わせていった。

「さ、京子にお稽古をつけて下さいまし」

何か、甘く妖しいものが京子の全身から匂
い出したようで、春太郎と夏次郎は、そわそ
わとして支度にかかり出した。

手頃な一本を取り上げた春太郎は、ねっと
りした光沢を持つ京子の裸身に寄り添い、一
枚一枚皮を剥ぎ始める。

「全部で十四五本はあるわ。これを全部使い
切る頃には、京子はコツを呑みこんでくれる
と思うわ」

春太郎がそういうと、夏次郎も手にした一

本の皮を剥ぎ取って、

「ねえ、お春。私ね、一寸、京子のお口の練習をさせておきたいのよ。今夜、京子は私達にそうするって約束したでしょう。変ないい方だけど、一口にいったって、むつかしいわよ」

「フフフ、あんた、昔、街に立っていた頃、うまいっていうので名を売ったわね」

「昔の事はいわないでよ。とにかく私、今夜京子とのプレイが楽しみなのよ。いいだろ。」

私が上、あんたが下で京子を調教した方が、うんと能率的じゃないか」

夏次郎はそう言って、すぐに京子の横へ、

ぴったり寄り添うように立つと、優しく片手を京子の艶々とした首に巻きつけた。

「ね、京子。今いった通り、私が京子に教えるわ。いいわね」

京子は、引寄せられ、桜色に上気した頬が夏次郎の頬に触れるのも拒めない。

「いいわ、教えて、あなた——」

可憐な羞らいのこもった瞳をすぐに薄く閉ざした京子は、覚悟して小さくうなずいた。

「じゃ、これが代用品よ。まず——」

夏次郎は、京子の耳に口を寄せる。

「——こうすればいいの」

京子は、目の前へ押しつけられた果物の実にそっと唇を寄せ、いわれた通り幾度も幾度も……け始めた。

夏次郎は、面白そうに見つめている春太郎をいたずらっぽく眼つきでチラと見つめ、更

に京子の耳へささやきつづける。

「わかったわ。こんな風にいうのね」

そして、京子は、何か得体の知れないものにとり憑かれたように、甘いすすり泣きまで洩らしながら、命じられたセリフを声にするのだった。

「ねえ、あなた。京子、こんなにあなたを愛してるのよ。ああ、好き、大好き——」

果物に——と際甘美で激しい……雨を降らせた京子は、くなくと柔軟な白い肩先を揺すりつつ、先程、夏次郎の手でピンクの口紅をひかれた形のいい唇を大きく開いて……み始めた。

「そう、仲々うまいじゃないの。大したもんだわ」

春太郎が鼻をこすって笑い出したが、夏次郎は真剣な眼差しで京子を見つめながら、

「その調子で、さっき教えて上げたとおりにするのよ。さ、やってごらん」

京子は、何か催眠術にでもかかったようにかるく眼を閉ざし、ゆるやかに指示に従い始めた。

「それじゃ、私も調教にかかろうか」

春太郎は、京子の足元に再び片膝を立てて腰を落した。

天星社刊 〆限定版グラビア写真集 在庫案内

緊縛美女八十態〔美しき縛しめ 第四集 一部 一〇〇〇円（送共）略号「美4」

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部 一〇〇〇円（送共）略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」 一部 一〇〇〇円（送共）略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部 一〇〇〇円（送共）略号「美9」

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部 一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。



ゴムマニアの梅川幸子様へ

ゴムプレイの醍醐味

菅 原 敏 夫

九月号にて貴女の告白記「雨の夜のゴムプレイ」を興奮の冷めやらぬうちに楽しく拝見致しました。突然の私の呼びかけに驚かれることでしたが、どうかお許し下さい。私の心が私の感情（告白、体験等）を押さえることを許しません。貴女に私のゴム・プレイを告白しなければ息がつまり、やがて「クタバッ」てしまうような気持になり、この手紙を書いた次第です。

最近に至っては奇ク誌上にてさえもゴム・フェチズムを冒読するような偽者がはびこっている中で、貴女のゴム・プレイは非常にフレッシュでアイデアに富んだ、垢抜けした存在です。貴女こそゴム・フェチズムの真髓で

私はその崇拝者です。

そもそも私がゴムの魅力にとりつかれた原因は、中学二年の初夏でした。

その日は曇り空の、ひどくムシ暑く、ジメジメした一日でした。私は足早やに校門を出て、ふと前方を見ると、体育担当の女教師がその当時、流行のチェックの羽二重ゴム引きレインコートを着て、腰のベルトを締め上げサラサラと何んともいえないゴムずれの音をたてながら歩いてきたのです。その時、私は体中が痺れるような強烈なショックを受け、先生のよく引き締ってムッチリしたお尻をさわりたいという衝動に駆られてしまい、気がつくとい先生のお尻をさわっていたのです。そ

して私は、てっきり大目玉を喰うと思ったのですが意外にも先生は私の行為を予期していたかのように振り返り、軽くほほ笑んだのです。私は顔がほてり真赤になり、しどろもどろに「先生のレインコートにゴミがついていた」と弁解したのです。すると先生は、また軽くほほ笑んで「ありがとう」といい、駅の方へ歩いていったのです。私は、その場にポカンと立ちつくし、先生の後姿を見送っていました。

そのこと以来、私はこの先生が好きになり私の初恋であり、ゴムを意識したきっかけとなりました。今にして思えば、その先生はゴム引きレインコートにつつまれ、汗まみれに

なつてゴムの感触を楽しんでいたのではない
かと思っています。

しかし、私をゴムの世界に引きずり込んで
ゴムの虜として、ゴムとは切っても切れない
性癖としたものは、中学三年の時の冬休み、
母に連れられて千葉の親類の家に遊びに行っ
た時からです。その親類の家は「のり」の養
殖問屋を営んでいたのです。この辺りでは、
かなり大きな問屋で、三十人ぐらいの女工さ
んを使っていました。のりを採取する作業は
女性の仕事で、だいたい午前三時頃から午後
三時頃まで、ほとんど海の中で作業するの
です。途中、午前と昼に休息があります。この
仕事は非常につらく、重労働のため、皆んな
二十才前後の若い女性ばかりです。

私が行った時は、ちょうど昼休みが終り午
後の作業の準備をしていました。三人一組に
なり、胸まである水中胴長をはき、肩まであ
るゴム長手袋をして、その上に防寒用の大き
なフードのついたゴム引き雨合羽を着込み、
腰をゴム・ベルトで締め上げ、二人がのりを入
れる小舟に乗り、一人が小舟のへ先につい
ているロープを腰に縛りつけ、泳ぐようにし
て海の中に入って行きました。

二人の女に舟を引かされて、潮水に濡れて

テラテラと光るゴム装束の上からムチ打たれ
ているかのように、あえぎながら舟を引いて
行く姿は、私の強烈な印象となって、現在で
も頭の中にこびりついて離れません。このよ
うに、ボテボテとしたゴム装束をまとうて重
労働に打ちひしがれた若い女性の姿を見ると
私のゴムに対する情熱は異常なまでにS・M
の方向に発展して行くのです。

以上、私がゴムの虜となった原因です。

次に私のゴム・コレクションとゴム・プレ
イについて書きます。

△ゴム・コレクション▽

(1) 水中胴長靴 一足

水産漁業用のゴム長靴で、長さは胸まであ
り、ゴム・ロープにて肩から吊り下げ、胴に
ベルト通しのあるもの。サイズ特大、色は黒
文数十二文、ゴムの厚さは二ミリほどで、全
体的にゆったりとして、ボテボテした感じ。

(2) 水中胴長靴(改) 一足

(1)の水中胴長靴の足首から先を切り落した
もので長さ、サイズ、色、文数等は(1)に同
じ。

(3) 水中ゴム長靴 一足

釣り、投網等に着用するもので、長さは胴

まであり、ゴム・ベルトにて胴を締め上げる
もの。サイズは特大、色はグリーン、文数は
足にぴったりしたもので十一文。足の爪先は
地下足袋のように二つに分かれていて、ゴム
の厚さは一ミリ程度のしなやかなもの。

(4) ゴム長靴 五足以上

水産、土木用のもので、長さは腰まであり
胴からゴム・ロープで吊り下げるタイプ。色
は茶、黒、グリーン。文数は十一文から十二
文まで。爪先が二つに分かれているものと、
分かれていないものとの二種類。

(5) ゴム長手袋 三本

家庭用炊事ゴム手袋一本と、水産用ゴム手
袋二本で、これは長さが肩まであり、左右の
手袋をゴム・ロープでつなぎ、肩から吊らす
タイプ。サイズは特大、色は茶、グリーン。
ゴムの厚さ一ミリ程度で、指先がゴワゴワし
たもの。五本指と二本指の二種類。

(6) ゴム引き前掛け 二枚

漁屋で使用しているもので、胸あて前掛け
と胴までのものと二種類。ゴムの厚さ一ミリ
サイズは特大、色は表が黒、裏は赤、すそと
胴廻りが長く爪先が隠れて引きずるぐらい。

(7) 胸あて、ゴム・ズボン 一本

水産漁業用のもので、長さは胸まであり、

肩からゴム・ロープで吊り下げるタイプ。サイズは特大、色は表が黒、裏は赤、股下は一ミリ程度あり、爪先をすっぽり隠して引きずるぐらい。ゴムの厚さは一ミリ程度で、全体的にゆったりしてガバガバしたもの。

(8) ゴム引き雨ズボン 五本以上

普通のゴム引きズボンで、雨合羽の下にはいているもの。サイズは特大、色は表が黒、裏が茶、赤。

(9) ゴム引き雨合羽 十着以上

普通の雨合羽ですが全部、手首のピッタリ締まったもの。長さは膝下十センチまでであるロング・タイプ二着と、腰までのショート・タイプです。サイズは特大、色は表が黒、裏は赤、茶。ロング・コートはシングル・ボタンとダブル・ボタン止めの二種類。全部、腰ベルトつき。

(10) その他、ゴム製品

◎フード三枚。一枚は特製でマスクの部分が深く、ノドから鼻までおおい、ボタン三つで止めるもの。サイズは特大、色は黒。

◎帽子二つ。大きなツバのついたもの。サイズは特大、色は黒。

◎ゴム・ロープ（緊縛用）十ミリ程度の長さのもの三本以上。

◎ムチ 三本以上。

◎ホース・ムチ。直径五センチ程度のゴム・ホースの中にスポンジをつめ込んだものと、同じ太さのゴム・ホースにて手元まで切り込みを入れ細く切りさいたもので、手元の握りは一本ですが、先の打つ部分は十本に分かれています。長さは一メートル五十センチと三メートルの二種類。色は赤。

◎ベルト・ムチ。長さ二メートル、巾十センチ程度のゴム・ベルト二枚にて、スポンジを中に入れてはさんだもの。色は黒、厚さ二センチ。

以上が私のゴム・コレクションですが、他にも研究、製作中のものがあります。ゴム・グツワ、緊縛用ゴム拘束衣、ゴム引きワンピース等ですがこの際、省略させて頂きます。

△ゴム・プレイ▽

私のゴム・プレイの信条としては、コソコソ隠れてプレイしたり、室内でのプレイは余り好みません。やはり上記した衣装、器具を使用して、常に誰か他人に監視されているかもしれないという不安と期待に満ちて、自分の犯している行為（ゴム・プレイ）をのぞき

見られていないかという恐怖を感じ、極度の緊張で精神的にも肉体的にも疲労している自分自身を徹頭徹尾、痛めつけることによって自分自身の行為を正当化し、ハートでM・Sを強く感じるのです。私の場合、家族と同居しているため、家の中でプレイを楽しむことは不可能ですし、都内の住宅街に居住していますので、貴女のように家からゴム衣裳をまとってプレイを楽しむに行くことは出来ません。その点、貴女がうらやましいですネ。このような家庭の事情により、いつもプレイするところは決まっています。私の家から車で一時間前後で行けるところです。主に河原です。時間は雨さえ降っていれば昼夜の区別なく、いつでもとび出して行きます。目的地まで何喰わぬ顔をして車を走らせ、今日はどんなプレイをしようかと心が浮き立ち夢心持です。ここ一年ほど愛用している場所は多摩川で、小高い丘、森、池等があり、非常に変化に富んだところです。こちらの川は川巾が非常に広く二百メートルぐらいあり、水の流れに沿ったところには、大小いくつもの溜り池があります。

さて、ここでゴム衣裳を着てプレイを楽しむのですが、先にも述べたように他人の目を

ゴマカス反面、私の特異なゴム衣装をみせびらかし羞恥心を煽りプレイを楽しむのです。そのため私のゴム・プレイを内面的に知られたくないため、常に投網を持って行き魚とりを装っています。これは私の主義に反するのですが止むを得ません。だいぶん能書きが長くなってしまいましたが、これから本題に入ります。

先ず人のいない森の中にゴム衣裳、その他の器具を運びます。そして素裸になり、最初に炊事用のゴム手袋をつけて、ゴム羽二重のオシメ・カバーをあてます。次に雨合羽の短いものと、ゴム・ズボンを前後、逆につけ、その上にゴム引き雨合羽の長いのを着て、普通のフードをかぶりボタンをとめ、その上にゴム引き雨ズボンをはき込み水中胴長（改）のゴム胴長をつけて肩からゴム・ロープで吊り下げます。そして五本指ゴム長手袋をつけて、その上にゴム引き雨合羽の長いものを着込み、特製ゴム・フードのボタンを三つ止めます。更にその上からゴム引き雨ズボンをはき込みます。これだけ衣装をつけますと、異様なゴムの圧迫をひしひしと感じ、まるで真綿で全身を締め上げられているようですが、更にこの上に水中胴長靴をはき、脱げないよ

うに肩からガンジガラメに縛って吊り下げ、肩まである二本指ゴム長手袋をつけます。そしてその上にゴム引き雨合羽の短いのを着てゴム引き胸あてズボンをはき込み肩から吊り下げます。更にその上にゴム引き雨合羽を着込み、最後にゴム引き前掛けを前後逆にお尻を覆うようにつけてゴム引き胸あて前掛けを着用します。これだけのゴム衣装をつけますと、全身の感覚がマヒしてどのような責苦にも耐えられます。ゴムの重圧に今にも倒れそうになりながら、まるでオモチャのロボットが歩くように歩き廻ります。

激しく降りしきる雨に打たれて私のゴム衣装につつまれた体は頭の先から足の先までゴム特有の異様な光沢でテラテラ光り、何んともいえないゴムの感触とゴムのふれ合う音に酔いしれて、ガバ、ゴボ、ガバ、ゴボと鈍い音をたてて、赤土のズルズル滑る斜面を歩き足をとられてぶざまな恰好でひっくりかえりズルズルと斜面の下に泥沼に落ち込みます。（スリバチ状になっていて、上から下まで五メートルぐらいあります）この沼に落ち込むと、腰の辺りまで泥水の中に埋り込みます。沼に落ちるときは意識して足から落ちるようにします。又、落ちる前に脱出用のロープを

垂らしておきます。赤土と水を8と2の割合の泥水の中にズブズブ、ゴボゴボと腰までめり込んで行くのですから、足腰に対する泥水の圧迫は強烈なものです。

このように泥水で下半身を締め上げるという行為は、ゴム衣装によって身体を痛めつけることです。あのゴム特有のネチネチとしたゴムの感触に全身が麻痺してしまい、時のたつのも忘れて下半身を左右にゆすったり、胸が没するところまでしゃがみ込み、太股を手でかかえて体を前後に振ったり、色々なことをします。体中から吹き出る汗は、ゴム衣装をつたわって流れ落ちます。思わず洩れる快樂のうめき声、ゴムの触れ合う音、ETC：に酔いしれるひと時、つくづく「ボクはしあわせだなあ」と感じ、ゴム・マニアならではの陶酔感に浸り、しばらくボンヤリと体を硬直させて泥沼の中に突っ立っています。そうしている中に段々陶酔感からさめ、私が今おかれている現状に気付き、泥沼からの脱出を試みます。

あらかじめ用意しておいたロープをつたわり、這い出すのですが、腰までスッポリとめり込んだ身体を引き出すのに四苦八苦し、やっとの思いで赤土の斜面に這い出します。そ

してロープの先で両手を縛りつけ、雨水を充分に含んだ赤土の斜面を泥まみれになって這い上ります。とにかく、これだけの重装備のゴム衣装をつけて這い上るのですから大変です。ロープに縛りつけた両手と爪先をうまく使い、身体のバランスをとりながら少しずつロープをたぐり寄せて這い上るのですが、ゴム引き胸あて前掛けが邪魔になり、思うように這い上ることが出来ません。三分の二ぐらい上っては、ゴム引き胸あて前掛けに足をとられて、ズルズルした赤土の斜面をスベリ落ちたりしますが、ロープの先端を両手首に縛りつけてあるため、斜面の下で止まり泥沼の中に落ち込むのは、かろうじて避けられます。しかし、滑り落ちる身体の全重量が、ロープがのび切り止まる時にロープで縛った両手に集中するため、ロープが段々と両手首に食い込み、やがて両手の感覚が麻痺してきます。這い上ってはズリ落ち、ズリ落ちては這い上り、何回となくこれらの動作を繰り返しやっとの思いで斜面から這い出し、緊張と恐怖から解放され、その場にへなへたと座り込み、しばらくは立ち上る気力もありません。水草の上に横になり、泥まみれになった全身を打つ雨音を聞きながら、ひとり瞑想にふけ

ります。

今、この場に私と一しょにプレイしてくれる女性がいたらなあ……と、ゴム衣装をつけて痛めつけられている貴女の姿を思い浮かべるのです。

やがて体力が回復してから、溜り池の方へトボトボと歩いて行き、池の中へ音をたてて入り込み、泥まみれになったゴム衣装の洗濯をします。私の場合は間接的に水中に入るのですから、水中胴長靴の中に水が入らないギリギリのところ（胸）まで水中に入ります。

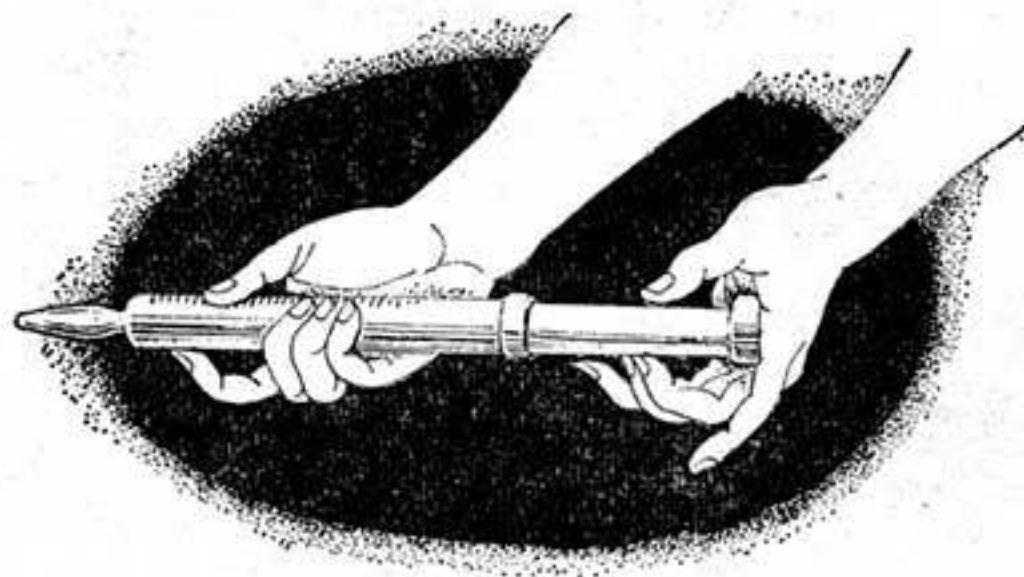
この時の水圧はすさまじいもので、胴、腰、足と、まるで見えないロープでがんじがらめに縛り上げられているようで、異常な圧迫感に全身打ちふるえます。きれいに泥を洗い落とすとザバザバと水を掻き分け池の中から出ます。先程まで全身、泥まみれになり泥人形みたいでしたが、今はすっかり見違え、元のゴム特有のテラテラと光るゴム衣装の光沢に目を見はり、体中を撫で廻し、鏡に写された私の姿を思い浮べ、これからどのようなプレイをしようかと、あれこれ考えます。

後手にガンジガラメに縛り上げられて宙づりにされ、ゴム・ベルト、ゴム・ホース等のムチで引っぱたかれ、打たれた跡は赤くくっ

きり浮かび上り弓なりに身体をのけぞらせて苦痛に耐えている自分の姿。又、これらのゴム衣装をつけて痛めつけられている貴女の姿を連想します。私一人ではこのようなプレイは不可能ですので、せめてものなぐさめとして、両手を前に合わせて縛り上げ、ロープの先端を馬に跨った貴女が引き、速度を変えながら私を引きずり回し、手にしたムチで思う存分、引っぱたかれ痛めつけられている姿を頭の中で想像しがバガボ、ガボガボとゴムの触れ合う音をたてながら、両手を自分で縛り上げ、前につき出して歩き回るのです。

先に書いたようにゴム引き胸アテ前掛けが邪魔になり、思うように歩けず二、三步、歩いては胸アテ前掛けの裾を踏みつけて前のめりにつんのめり、立ち上っては引っくり返ります。又、ゴム・ホースでムチ打ちを繰り返します。ブターン、ブターンと鈍い音をたて、雨に濡れテラテラと光るゴム引き胸アテ前掛けから発するムチ打つ音は、何んともいえないものです。このようにして三、四時間、いろいろなゴム・プレイを楽しみ、又何喰わぬ顔をして家に帰ります。

貴女のアイデアである『お馬の浮き袋』に跨ってアヒルのように泳ぎ回るプレイ、なか



浣腸告白

虜となるまで

山本羊子

なか面白いと思います。私も一度、試してみたいのですが、生憎『お馬の浮き袋』を持っていますので、貴女のプレイの面白さは分りませんが、私の感ずるところでは、女性の場合、何かに跨るといふところにその意味があると思います。ゴム衣装を着て本物の馬の

鞍の上で上下に激しく揺れている貴女の姿を連想します。私のアイデアとしては、自動車のチューブを両足に一本ずつ通して、胴のところにもう一本通し、三角形にその頂点をゴムロープで止め、両足を合わせて上から下まで縛り上げ、足の先におもりをつけたら面白

いと思います。最近では一人でプレイをしていても、マンネリズムに陥り味気なく、昔ほどの新鮮さを感じません。そこで、ゴム・プレイの仲間が集りクラブを結成し、複数でプレイをすれば楽しいと思います。貴女の御意見、御感想をお聞かせ下さい。

ない？」

深い海の底から急速に水面にむかって浮上するときのように、眼のまわりがぐんぐん明るくなって、やがてぱっかり眼をひらいたとき、私は急にはその事態をはっきり理解することができなかった。

私の額には冷たいゴムの氷のうがあてられてあり、両側からM美大の先輩である永井路子さんと、クラスメートの山下恵子が心配そうな表情で私を覗きこんでいた。「どう、もう気分はよくなった？ 頭は痛く

そうだった。——私はその日何人かの級友といっしょに、恩師であるA画伯の個展の飾り付けを手伝いに椿画郎へ行ったのだ。その後、ねぎらいのビールをすこし飲んだあと、親友の恵子に誘われて、郷里の高校の先輩でもある永井さんのお宅を訪れたのだった。永井さんは昨年不幸な結婚を解消したあと、そのアトリエ付きの小さな家にひとり住んでいて、グラフィックデザインを専攻しながら私たち同郷の美大の後輩たちのよき相談役のような存在として、その美貌と共に私たちの人気の中心であった。だから、恵子に誘われたとき、私は喜んでついてきたのだった。

軽いビールの酔いが私たちをいつになく快活に、饒舌にさせていた。だからフランス産のブランドイがでて、永井さんと恵子

がそのチューリップ形のグラスをとりあげたとき、それまでお酒を飲んだ経験のない私も、ほとんどためらわずにそのグラスに手をだしたのだった。そしてその芳醇な香りにたちまちむせて咳きこんだ。

「羊子さんは、ストレートではむりのようね。フィーズにしてあげましょうか」

落子さんはやさしく微笑して、別のタンブラーにブランディフィーズを満たして、私にわたしてくれた。

欧米画壇のニュースや、某々氏の近作の批評に話はずんで、いつの間にか私のタンブラーの中の液体が三分の一くらいに減ったとき、私はにわかに睡気に襲われ、そしていつか意識を喪ってしまったのだった。

「羊子さんはお酒に弱いね。あんなに急に酔いつぶれてしまうんですもの。私たちびっくりしちゃった」

「そうよ、いきなり、ガクン…ですもの。あとは、全然正体なしの太平天国…あきれたひとね」

「そうでしたの……。ごめんなさいね、つにお調子に乗って……」
そう云いながら起き上ろうとしたが、私

は再びめまいがして、ぐらりと上体が揺れた。頭の芯が鉛をつめたように重い。

「あら、まだ起きてはだめよ。もう少しの間静かにしていなさい。もし、よろしかったら泊ってもいいのよ。あまりむりしたら体によくないわ」

「そうよ、あんなに苦しがつてたいへんだっ

たんですもの、急には治らないわよ」
私は再び仰臥に戻りながら、その頃になつて、異様な感触に気がついた。腰のあたりになにかなじめない厚ぼったく嵩ばった感じのものが……それにお尻のまわりが気味わるく生温かいのだ。私は一瞬はっとして思わず手を伸ばした。あわてて身を起すと、ぐにやりとしたものが感じられた。

「あら、わたし……」

羞恥が火の棒のように全身をつらぬいた。私はいつの間にかオムツをあてられ、うすいブルーのオムツカバーまでが、びったりとその上を包んでいるではないか。そればかりでなく、私は恥ずかしい失禁までしてしまっているのだ。私は絶句し、錯乱した。

「ああ、オムツあててるので驚いたのね。それにもう汚れているんですよ。いま替えてあげますからね、大人しくしていच्छい」

「さっきね、あなたうわごとみたいにおトイレへゆくってたいへんだったのよ。ところが全然腰が立たないんですもの、困ったのよ。それに、そのまま臥てて粗相されたいへんだし……お便器あててあげようとおもっても、どちらかわからないですよ。それでオムツをあてることにしたのよ。それならどちらでも間にあうし、幸い大人用のオムツカバーもあったから……」

「そのオムツとオムツカバーね、私が病氣してたとき使っていたものなの。そりゃ始めは恥ずかしかったわ。看護婦さんに替えしてもらっただけで、インターフォンでただお願いしますっていただけでは来てくれないの。必ずオムツが濡れましたから替えて下さいっていわないと……。辛かったわ。殊に大の方のときなどいちいち覗きこんで、お通じがよくなつたわねなんていうのよ。勿論職業的関心でいうんでしょ。けど……。それに、まわりにお見舞いの人なんかいても彼女たちは平気なの。病人のかぼそい神経にいちいち構っていられますかって風なの。人形を扱ってるみたいに容赦なく剥き出して拭くのよ。たまらなくて泣いちゃったこともあるけど、意地の悪い

看護婦さんなんか、そんなにお厭でしたら時間を決めてお浣腸しましょうかっていうのですよ。さあ、オムツを替えましょうね。気持が悪いでしょ。私なんて濡れたままでは十分がまんできなかったわ。さあ一寸、腰をあげて……恵ちゃん手伝ってね」「羊子ちゃん、大人しくいうとおりにしなさい。汚れているのは判ってるのよ、さっき大きな音がしたんだもの。はずかしがらずに、はやくきれいにしないと、オムツカブレができるわよ」

わたしはもう呆然として、ふたりのなすがままにまかせて、汚れを拭かれ、そして再び新しいオムツが、腰の下に敷きこまれるのを、他人ごとのようにじっとしていった。

「ああ、そうだ。ついでお浣腸しておいた方がいいわ。そうしましょうよ。おなかの中にアルコール分が残っているのは回復が遅いから……」

「いやです。そんな……それにいま出たばかりで……」

「だめよ、臥たままの排便って、とても全部きれいには出ないものなの。ということ

は経験者だけが知っていることだけど、あなたは臥たまま挿入便器を使ったことはないでしょ」

「ええ、でも……」

たしかに私は幼い頃とはとにかく、物ごころついてからは病氣らしい病氣もせず、だから挿入便器とか浣腸とか云われても、まったく経験がなかった。ただ、むやみに恥ずかしかった。

「ね、だから私の言うとおりにしなさい。浣腸なんて簡単なことで、すぐに済みますから——。ただあなたは未経験ですから、常ならお薬は少量でも利くとおもうけど、今日は徹底的に洗いだす必要があるから、やっぱり一〇〇CC使いましょうね」

それは、見るもおぞましい偉大な器具だった。落子さんがそのガラスの円筒一ぱいに薬液を吸いあげると、私は恵ちゃんの手で横向きにされた。不安におびえているところへ、ひやりとした感触に襲われ、私は耐えきれず低く呻いた。

「はい、おしまい……すぐにお薬が利いてくるけれど、がまんできるだけはがまんしなさい。最底五分間はだめよ。恵ちゃん押えてい

てあげなさい」

二分、三分、四分——

私は脂汗を流しながら、その激しい薬理作用に必死に耐えた。が、荒れ狂う嵐のような苦しさ。無経験の私が限界に達するのは早かった。

「ああ、もうかんにんして！」

素ばやく挿しこまれた便器。

ふたりの注視を浴びながら、嵐がようやく吹き抜けたとき、私はぐったり疲労していた。目を閉じたまま、再び装着されるオムツも、遠いところの出来事のように思えた。

しかしやはり羞恥はあった。でもその羞恥は、どこかけだるさに似た説明つき難い何かが伴っているようだった。

……………

私がオムツと浣腸の膚となってしまうのは、その突発的の体験の日から百日とはかからなかった。そして、そのような性癖を目ざめさせた上で私を飼育したのは、落子さんと恵子であったのは、いうまでもないでしょう。

(おわり)

懸賞入選作品

狂

きょう

獣

じゅう

の

宴

うたげ

(上)

能 美 積



1 美沙子

雄吉は、一人で酒を呑んでいた。好きな訳ではないのだが、要するに酔ってでもいなければ耐えられぬ、そんな環境におかれているのだ。三カ月前、唯一の友人を失った事に端を発して、徐々にだが生活の歯車が狂い始めたようだった。ヤメ暮しの気楽さで社が退けると、アパートに戻り、近くの飯屋で買ってきた、美味くもない焼肴をつつきながらチビリ、チビリとやっていた。

扉が軽くノックされた。ベニヤ板を打ち付けただけの扉と呼ぶには粗末すぎる扉。ノックされるのは珍現象である。管理人は声から先に入ってくるし、皿を取りにくる飯屋の小娘も例外ではない。

「誰だい。鍵なんか掛けてないぜ」

ベニヤ板が向うに開いて、若い娘が入ってきた。雄吉はもう少しで持ちあげたばかりの四合瓶をとり落す処だった。彼とは、まったく無縁といえる素晴らしい美人が現われたからである。なんとなく羞しように、それでいてまばたきもせず開かれている円らな瞳、上向かげんに形よくとがった鼻筋、処女だけが持つ汚れをしらぬ愛らしい唇、そんな顔の造作

の総てが魅力的な輝きを秘めている娘であった。充分に成熟している事を思わせる其の肉体は、純白のブラウス、紺色のタイトスカートで包まれ、脚は寸分のたるみもないシームレスで覆われて、手にはバッグとハイヒールを別々に持っていた。

「あなたは、全体、なにものです」

そんな奇妙な尋ね方を、雄吉はした。

「鈴木美沙子と申します。あのう、伊藤雄吉さまでいらっしゃいますね」

声さえもが、ぞくりとする程美しかった。

「ナナエのあけみさんに紹介して頂いて参りましたの。お邪魔でしょうか」

「あけみ、ああ房代さんの事ですね」

瞬時だが雄吉の眉が歪んだ。房代。その名も又、雄吉の齒車に関連している事だった。

「とにかく御用なら、お入り下さい」

娘は背を向けて、バッグとヒールを足元において扉を締めた。長い髪がブラウスの白さとは対照的に、黒く艶やかに光っている。薄汚れた畳の上にきちんと膝を折って、娘は其の用件を切り出した。要するに房代の紹介で金を借りに来たのであった。無論、雄吉には無い。

房代は一月程前から雄吉の意志に反してナ

ナエ、という名のナイトクラブで働いている、ナナエの実質的な経営者である蟹浦剛三という男は、種々な事業に手を出している。

雄吉自身も傍系会社である土建会社の技師であった。蟹浦は名目だけをおいて、彼自身は蟹浦商事と称する、サラリーマン相手の金融業をやっている。莫大な資産がある筈なのにそんな事をする変り者であった。ケチな事では有名だが子会社の社員達には低利で金を貸している、それが娘の狙いであった。雄吉はなんとなくがっかりした。房代に対しても腹が立ったが、相手がずばぬけた美人であるだけに無下には断わり切れなかった。

「それで担保はなんですか」

「あの、最近下阪して参りましたので……」

「つまり高価な物は無いという訳ですね」

娘は長い睫毛を伏せた。

「金額は百万といたしましたね。とすると相当値打ちのある品でないと、無理ですよ」

応えはなかった。もっとも相応の抵当物がないからこそ恥をしのんで来たのだらう。

「おっしゃって下さい。出来る限りお力添えはする積りですが——」

「あのう——」

不意に娘は瞳をあげた。まばたきもしない

あの目であった。

「私の、この軀では駄目でしょうか」

雄吉はあっけにとられ、同時に馬鹿馬鹿しくなった。国定忠治の講談に登場する、山形屋なんとかの話でもあるまいし、いまどき時代錯誤も甚だしい。

「あんたが気狂いか、それとも私が悪酔いしたか、そのどっちかですな」

「矢張り駄目ですか……」

娘は、がっくりと肩を落した。

「そりゃあ、あなた程の美人なら私だって貸したい位なもんですよ。然し人間を金銭貸借の抵当にするなんて第一、法に触れますよ」

「正式にはなくて良いのです。ただ蟹浦さんに貸して頂ければ、一カ月後に返済の当てもあります。決して御迷惑になるような事は致しません、お願いです」

すがりつくような目の色だった。

2 雄吉

雄吉は妾の子として生をうけた。四つになるまで母の手で育てられたが、突然に奇妙な女が現われた。母の膝でその頃よく読んで貰っていた童話の中に出てくる狐のような顔をした女であった。女は、主人の子を他人の元

におく訳にはいかないという訳けのわからぬ理屈をつけて、強引に雄吉を引き取っていった。裕福な家庭であったが、女にだらしない父と狐つきのような継母、それに義理の兄姉たちとの板挟みにあって雄吉の少年時代は灰色のそれだった。中学校を終えると勝手に建築の専門学校に入りこんだ。其の頃から彼は既に誰の世話にもならぬ独立の腹を決めていたのだった。学業を卒え、大阪に就職も定まって、さっさと家を飛び出した。大阪を選んだのは別に理由もなかったが、実母が大阪出身であるという事が、そうさせたのかも知れなかった。上阪すると一室で二人共用の安下宿に住みついた。体臭の強い相部屋の男が留守の内に雄吉の荷物まで、ゴッソリ持って去ってから間もなく、同じ下宿人で、ナナエのバンドマスターをしている男が一人の男を連れてきた。東京の大学を出たインテリだったが、どういう訳かナナエの専属バンドマン兼雑用係として就職してきたとバンドマスターは紹介した。都築次郎、と男は名乗った。始めての夜、二人は一つの契約を交した。お互いの過去、家族その他一切について、見ざる言わざる聞かざるで交際しようというものだった。提案したのは雄吉だったが次郎もそれ

を望んでいる様だった。ウマが合うというのだろうか、奇妙な交わりで始まった二人であったが日増しに親密の度を増していった。昼の務めの雄吉は、設計図などを持って帰って勉強し、夜の勤めの次郎の方はどうやら作曲家を志ざしているようだった。机は一つしかなかった。其の抽出しに雄吉には訳の解らぬ五線紙や女名前の手紙などが入れてあったが彼は、約束どおり其の中味を見ようともしなかった。一年程して雄吉は会社を鹹になった。上役に暴行し、揚句は警察に留置されるという不始末だった。が次郎の奔走で、現在の土建会社へ拾われた。その頃から彼は、次郎の事をなんとなく兄貴と呼ぶようになっていた。そして又、一年が経って、今度は次郎の方へ異変が起きた。岩崎房代、という名の美しい娘が鞆一個を提げて家出して来たのである。房代は次郎の学生時代からの愛人だった。雄吉が、うらやましがるに充分な育ちの良さを思わせる、上品な顔立ちの美人であった。

3 高倉

クラブ・ナナエの支配人室には、一方の壁に工業用のテレビ受像器が設置してある。普

通のテレビとなんの変わりもない物だが、ボタン操作に依って隠しカメラが始動し、いながらにして営業状態を把握する、それが目的の物であったが、不測の事態が生じない限り使用される事は余りなかった。が今夜は点け放しにされてある。花田と小池という二人の男がスイッチを入れて交互にカメラを操作し、フロントからホールへとせわしなく写し出している。見られている事を知らない客やホステス達のやりとりは、無声ではあるが結構面白いものだ。謹言実直そうな紳士が女の膝に手をやっていたり、好色そうな親爺によりそって怪しからぬサービスをしている女たち、もっともそんな覗き趣味のためにカメラが廻されている訳ではない。支配人の高倉は見るとせず、しきりに爪を磨いていた。

「あっ」

小池が、すっとんきよな奇声を発した。

「親分、来たようですぜ。あれがそうと違いまっか」

高倉は軽く舌打ちした。いくら注意しても小池には、組時代のやくざ言葉が治らない。通用口から入ってきた、雄吉と美沙子が写し出されていた。蟹浦は雄吉から突飛な話を持ち込まれて、其の会見場所をナナエに指定し

たのだった。彼には娘に会う気持は全然なかった。ただ雄吉が美人である事を強調するので、高倉の方に廻してみる気になったのだ。店で使える女なら些少の契約金でも払って適当に処理しなさい。そう高倉は命じられていたのだった。

「すげえスケですね。それに、ありゃあ、どうみてもトウシロウですぜ」

「アップしてみろ」

そう命じた高倉も、美沙子の美貌に驚いていた。どうせ、どこかの喰いつめ女が金に困って窮余の策。その程度の事だろうと思っていたからであった。三人の男はくいいるように画面に見入った。ホールの隅を横切って美沙子をともなった伊藤という男が、ホステスの一人と鉢合わせした恰好で立ち話を始めた。美沙子の方は、珍しそうに四圍を見まわしている。

「あれは、誰だね」

「ヘッ、ああ店の子ですか。ええっと、ナンバー十六。ああ、あけみですよ。ほら、交通事故でクタばった、バンドマンの女だった娘です」

無論、高倉には解っていた。彼はただ美沙子に眼を奪われた自分の心を、見すかされぬ

ように虚勢を張ったにすぎなかった。

(これは儂の一存ではすまん)

高倉は受話器を取ると、急いでダイヤルした。蟹浦剛三は在宅していた。

「会長、お呼びだとして申し訳ありませんが、例の女、お会いになってみませんか。其の価値は有ります。いいえ、玄人ではありません。余程の事情があると思われませんが、とにかく投資して損のゆくような事は……はい、かしこまりました。では、待たせます」

4 蟹 浦

二十分程で、剛三はやって来た。

「やあ、すまん、済まん。待たせたかね」

肥満体に似ぬ女性的な優しい声帯をしていた。当然の事ながら一斉に立ち上って彼を迎えた人々の中に、美沙子を認めると彼は、まるで信じられない物でも見た時のように視線を据えた。我にかえるまでに時間が掛った。

「ええっと、そうそう伊藤君だったな。この人かね？ 金を借りたいとおっしゃるのは」

「はあ」

ひどく不愛想な返事を、雄吉はした。こんな処で働いている房代に会って、全く異ったドギツイ、メーキャップのそれが雄吉を怒ら

せているのだった。剛三は、それまで高倉のかけていた席に腰をおろした。

「なかなか立派な娘さんじゃあないか。気に入りましたよ。お名前はなんでしたっけ」

「鈴木美沙子と申します。此の度は無理なお願ひにあがり、申し訳ありません」

「いや、あんたなら、一向に無理な話ではない。百万はおろか五百万でも融資しますよ」「いえ百万円でよろしいのです。それだけが必要なのですし、それに返済出来る限度でもありますので」

「御立派。ますます気に入りましたよ。処で条件は、期間は一カ月。質札をつけて蔵にされる訳けにはいかんから返済まで、つまり一カ月間は私の事務所で働く。たしか伊藤くんそういう事だったね」

「はあ」

「よし、決った。私の方に条件は無い。但し期限は厳守してもらいますよ。一カ月後の今日、私の事務所で利子と共に頂戴する」「承知しました。決して御迷惑は御かけいたしません。本当に有難うございます」

「喜んで貰うと私も嬉しい。でも私だって儲けさせて貰うんだからね。そう礼をいわれると困りますよ。はっはっはっ」

剛三の軽い冗談に、美沙子の緊張も解けたようだった。

「高倉君、百万円立て替えておいて呉れ給え。ところで、こういう取引に書類は無効だから、立会者である諸君に証人になって貰おう。異存は無いでしょうか」

雄吉だけが迷惑そうにならずき方をした。

「あんたのような美しい人に働いて貰えるとなると、事務所に出るのが楽しみですね」

そんな剛三の声に送られて二人は帰った。

「高倉君、永生きはするもんだな。これで楽しみが一つ増えたよ。感謝しとるよ」

「あれで返せないとなると会長もお楽しみでしょうが、自信はあるようですよ。あれ程の娘が僅か百万で身売するような馬鹿な真似はしないでしょうからね」

「かえせんようにするんだな」

「はっ、なにかおっしゃいましたか？」

「お前、つんぽか。返せんようにしろといったんだ。では私は帰る」

剛三は、さっさと入口に向った。送ろうとした二人の男を高倉が目で制した。

「二人をつける、すぐにだ。行け」

「か、金を取り戻すんですか」

「馬鹿。慌てるな。いいか、先ず二人の関係

を調べるんだ。あれ程の女に、まさか奴が紐だとも思えんが、念の為だ。嗅ぎ出して来い」

5 房代

房代の父は胃腸外科専門の開業医だった。

病弱な長男に病院を継がせる事が無理だと解ると、房代に婿を取る事を計画した。作曲家志望の次郎などは問題外の存在だった。失意の次郎は東京を捨てた。しかし房代の方は諦めなかった。そして、のっぴきならない結婚話が持ちあがると、総てを捨てて次郎の元へ走ったのだった。一番弱ったのは雄吉だった。三畳一間に三人は暮せない。結局、雄吉が出る以外に術はなかったが、それでは次郎が承知しない。友情の為には房代をも追い帰しかねない男であった。協議の末、三人で住めるアパートへ越す事になった。権利金は雄吉が借りて来た。次郎と房代の婚姻届も雄吉と其の同僚が証印した。こうして、はた目には可笑しな一家が誕生したが、三人は別に変だとも思っていないのだ。雄吉は月給袋を房代に渡し、必要な時は小使銭を持ってゆく。そんな呑気な男であった。彼は房代を姉さんと呼んでいたが、心の隅の何処かで秘かに房

代を慕っているのを怖れてはいた。友人の妻を愛する事は罪悪なのだ。彼は望んでダム工事のために出張していった。突然の不幸が房代を襲ったのは結婚九カ月目の事だった。次郎は酒が好きな方だった。勤めがすむとナナエの傍の屋台店で一杯呑むのが習慣だった。その夜も跡片付けの掃除を終って一杯やり、ナナエに引き返して着替えをすまし、通用口から出た処を車にはねられ、即死したのだった。はねたのは支配人の高倉を自宅に送り届けて、戻って来た高倉抱えの猿渡という中年の運転手だった。拾五年間無事故運転の記録をもつベテランだった。非は、むしろ酔っていた次郎にあった。葬儀は東京の次郎の実家で執行された。喪主である房代は勿論参列したが、その傷心の姿はみる者の涙をさそった。初七日を経ると骨分けをしてもらって房代は一旦、大阪のアパートへ戻った。ミツノ・マンションという洒落た名のそのアパートは、まだ室を借りたままにしてあったので、どうせ東京へ戻らねば生きていけない房代だったが、思い出のつきる事のないその室で、腹の底から泣きたかったのだ。室の中には雄吉が、幽鬼のようにやつ果てて、痴呆のようになり酔いしれていた。事故直後、電報を打っ

ておいたのだが葬式を次郎の実家で行なうという事は、房代自身考える余裕もないほど気が転倒していたのだった。市役所に問い合わせれば住所を調べるのは容易であったが、雄吉はこの場に臨んでも次郎との約束に固執した。みざる、いわざる、きかざるだった。

一夜を、二人は共にすごした。雄吉は浴びるように酒を呑み、房代はたださめざめと泣き明かした。翌日、雄吉は越していった。房代は暫くマンションにとどまる事にした。ナエの支配人高倉の好意で、保険金や慰謝料も入り生活の心配は今の処ないからだった。房代はその半分を雄吉に渡そうとしたが、彼は受け取ろうとはしなかった。むしろ房代が訪ねて行くのを迷惑そうな表情で迎えるのだった。二カ月程して房代は何度目かの訪問をした。大事な相談事があり、その故に高倉の世話でナエに勤める——と半分程切り出した時、酔っていた雄吉は激しく怒鳴った。

「俺は反対だ。いいかい、キャバレーなんて処はな、客に媚を売る商売なんだぜ。次郎がきいたら決つと怒る。あんたは東京に帰ればいいんだ。結婚するんなら反対はせん。次郎だって許すだろう。だがナエはいかん。次郎はあそこで死んだんだ。あいつは勉強の為に働いてたんだ。そして死んだ。そんなところで、あんたは客に媚を売るのか。どうしてもというのなら二度と此処に来ないでくれ」

そう吐き捨てるようにいって飛び出した。

6 杉 田

クラブ・ナエの支配人室では、難かしい顔をした四人の男が夫々の姿態で、夫々の位置に陣取っていた。

「杉田さん、どう解釈したもんかね。僕はまるで見当がつかんのだが」

「そりゃあ、あんた、私の方がききたい位のもんですよ」

杉田と呼ばれた男は、鋭い視線を高倉に向けた。年令的には高倉の方が上だが、この世界では関係の無い事だ。

「親分、あけみを締めあげてみたら、どうなんです。吐かせるのは簡単ですぜ」

小池が言った。この男らしい単刀直入の表現だった。

「馬鹿野郎。関係ねえ事を口にするな」

「馬鹿はあんたと違うかね、高倉さん？」

「なんだって、それはどういう事です」

「あんたはあけみに参っているのと違うか。どうもそんな匂いがするが……」

「冗談は止めて欲しいね。僕は商品に手を出すような馬鹿な真似はせんよ」

「商品以前の問題だよ」

「……………」

「宜敷いか。あけみの亭主、都築次郎とかいったね。奴の死は、いわば自業自得というもんだ。それにもかかわらず、あんたは莫大な報酬を支払った。おまけに就職の世話までした。これはちと行きすぎの嫌がある。……と、まあこれはボスの意見なんですがね」

「それは誤解だ。僕はですな、触らぬ神に何とやらで、其の為の努力をしてる。ただそれだけの事です」

「信用しときましょう。処ですな、もう一遍ぶりがえす事になるが、話を整理しましょうや。まず小池の方が、あの晩、金を受け取った二人はこの近くの喫茶店でお茶を飲んだ。女は男に約一割の金を渡した。そうだな」

「へえ、よくわからねえが、たしかに拾枚ぐらい。ですから、一割ぐらいだと……」

「これで二人の関係は、凡そ察しがつく。礼金としては多すぎるが体を抵当に金を借る、そんな芸当をやったんだから、まあ至当な処だろう。それで二人は別れた。男はバーに行

き女はあけみのマンションへ行った。男、つまり伊藤という男と、あけみとの関係は解っているが、女の方が行ったのは変だ」

「あけみは店に出てるんです。留守の室へ勝手に入って十分位出てこなかったんです」

「あけみの方だが、閉店すると新大阪へ車をとばし名古屋へ行った。一泊して今帰って、そのまま店に出ている、という訳だ」

「……………」

「あけみは名古屋で猿渡にあってゐる。その前にも変な男が猿渡を尋ねている」

「……………」

「高倉さん、どうです。あけみを調べるといふ小池の意見に私は賛成なんですが？」

「しかし、杉田さん。会長に近づこうとしたのは娘の方です。不審の点があるのなら娘を締めあげるのが常識ではないですか」

「高倉さん。あんたも承知の筈だが。ボスはあの娘に熱々なんです。締めあげるなどは口にしないう方があんたの為だ」

「解りました。どうやら、僕の考え違いらしい。あけみを此処に呼びましょう」

「不味いですな。あけみには影で糸を引いてる奴がいるかも知れん。用心せんといかん」

「よろしい、二人にやらせましょう。トイレ

に入った時を狙え。例の通路を使うんだ」

「地下室に招じて貰いたいですな。場合によっては、少々手荒に扱わねばならんかも知れん。あんたには気の毒だが……………」

高倉は渋い顔で、杉田を見上げた。

7 おしの

鈴木美沙子は、蟹浦邸の門をくぐった。蟹浦商事に勤め始めて三日目の夜である。貸ビルの一階にあるその事務所には、所長である剛三は滅多に顔を出さず、営業主任と称する中年の男が、事務一切を受け持っており、三人いる男達は外交専門に走り回っているようだった。つまり美沙子は勤めるといふよりも、担保物件として、ただなんとなく一日を過しておれば良い、という状態だった。昼少しすぎ剛三自身から電話があり、晚餐に招待されたのである。断わる理由はない。

ベルを押すと、老婆、と呼ぶには少し早すぎる年配の女が現われ、案内に立った。通された室は、豪華と呼ぶに相応しい応接室だった。右側に来客用のソファがあり、左側には剛三の物であろう、見事な卓子デスクがデンと据っていた。美沙子は正面を見た。そこは総てが硝子張りで、都会の真ん中にこんな処が、と

思わせる程の素晴らしい庭園が一望出来る仕組みになっている。ただし、すでにあたりは暮色に包まれて、折角の景観は闇に蔽われてしまっていた。

「暫らく、お待ち下さいまし」

女が去ると、それでも美沙子は硝子に顔をくつつけるようにして窓外を見た。遠くで点滅している気の早いネオンのまたたきが美しい。フト、人の気配に振り返った美沙子は、妙な物をみてしまった。壁だとばかり思っていた左側のそれが、音もなく開いて、蟹浦剛三がのうそりと姿を現わしたのである。

「良く来てくれたね。まあ掛け給え」

例の女のような優しい声で剛三は椅子をすすめ、美沙子も一礼して、それに応じた。女が戻ってきた。

「おしのさん、救急箱を用意して欲しい。それから菅沼にもすぐ来るように」

救急箱だとか、菅沼だとかそれがこの際、なにを意味するのか、無論美沙子には解らない。もっと解らないのは、それを命じられた時、おしのかと呼ばれたその女が何とも言えぬ嫌な笑い方をした事であった。剛三は卓上にある受話器を取ってダイヤルを回した。

「杉田君か。どうだね、そっちの方は？」

それっ限り剛三は何も言わず、二、三度、軽くうなずくと、再び受話器を元に戻した。おしのが重そうな箱を提げて戻って来た。それは何のためらいもなく、浅く腰をおろしている、美沙子の足元におかれ、蓋が開かれた。

「旦那様、この箱をみるたびに、しのは昔を思い出すんですございますよ」

剛三は応えない。

「あの頃は旦那様の愛情を、あたくしがひとりじめにしておりましたのに……」

「お前と、このお嬢さんとは比較にならん」

「まあ、むごいおっしゃり方」

コロコロと、おしのは笑った。

「鈴木君、いや美沙子とよぼう。箱の中味を見給え。これは君を拘束する為の道具が一応揃えてあるのだ」

「……………」

「当分の間、君は此処に住んで貰う事になった。いわゆる軟禁という奴だ」

「なぜ、何の為にでしょうか？」

「それは私にも解らん。今の処はな。しかし多分、直ぐに判明するだろう。どっちにしてもあんたに、ウロチヨロされたんでは、私にとって不利な事態が生じる、と言う報告が入

っておるんでな。甚だ不本意ながら、そういう事になった。衣食住は心配ない。当分、いや多分、永久という事になるうが……」

「そんな、無茶な……一方的に……」

「美沙子、私は乱暴な事は好まない。しかし必要上、ある程度の拘束は我慢して貰う。おし、仕度をしなさい」

チロチロ、と鈴の音がした。美沙子は音の方に視線をやった。おしのの手にされた物は皮と鎖で作られた枷であった。手首の部分に嵌める個処は裏毛の付いた皮製で、銀色の二十糎程の鎖が取りつけてあり、皮の部分の音をたてている鈴が施錠の役目を果たす、のだという事は後で知らされた。

美沙子は一気に入口に走った。が扉は外側から開いて其処に若い男が突っ立っていた。

「会長、こ、これが、百万円の……」

菅沼。若い男のそれが名である。彼は美沙子の美貌に驚嘆していた。雄吉が高倉が、そして蟹浦がそうであったように、菅沼も又、圧倒されたのであろう。彼はただ露骨に夫を口に出す事によって表現した。

「す、凄えスケですね。女、女優でもやってるん違いまっか？」

「沼さん、何を目をむいてるんだい。早くと

っ捕まえておくれよ」

それで菅沼は我にかえった。彼は無造作に美沙子の右腕を掴もうとした。が美沙子は逆に菅沼の利き腕を取っていた。あっという間の出来事である。菅沼の巨体は音をたてて引っ繰り返った。美沙子は扉を開こうとしたが開いてはくれなかった。

「此のアマ、護身術を習いやがったな」

たしかに美沙子は、身を守る術を知っている。だがそれは一瞬の隙を見付けて相手を倒し一目散に逃げる為のものでしかない。逃げ場の無い室の中では通用しない。菅沼は立ち直った。彼も又伊達で無駄飯を喰っている男ではない。男と女の、力の相違はどうしようもない。美沙子は追い詰められ、そして組み伏せられた。右腕を軽く背後で捻じあげられただけで抵抗の自由は全くなかった。

「婆さん、早く手錠を嵌めろ」

左手首に皮が巻かれ、カチッという音と一緒に鈴が鳴った。

「サア今度は、そっちのお手々をおくれ」

「待てよ、其の前に剝いとかねえと」

菅沼は剛三の用心棒であるのとは別に一つの仕事を持っている。彼は剛三の奇癖を知っている唯一の子分でもあった。其の剛三の飲

心を得る為に多額の報酬を払って女共を提供してきた。女達は目隠くしをされて連れてこられる。無論、剛三の素性を知られない為である。あらかじめ承知させられていても抵抗しない女は少くない。それを無理矢理、裸に剥いて縛りあげるのが彼の仕事でもあった。それを菅沼は言ったのだった。

「沼さん、折角だけど、それは駄目ですよ」
齒の浮くような笑い方を、おしのはした。

「この娘はね特別製の上玉なんだよ。お前さんなんか、まともに拝める代物じゃあないのさ。そっちの方は旦那様が、ほら、ゆで玉子を剥くように丁寧に、ていねいにお楽しみにするんですよ。で、ござんしょう、旦那さま」

剛三は憶面もなく笑いかえした。

「私の好みは、おしのが一番知つとる。もっとも楽しみ方も種々あってな」

右手首にも皮が巻かれ、あらがう両足にも鈴が鳴った。菅沼は未練たっぷりの表情で追いたてられるように室を去った。

おしのは、新しい拘束具を取り出して剛三に見せた。鎖のついた首枷だった。黒髪を掻きあげておいて、それは細いうなじに締めつけられていった。

「さあ、お立ち、お嬢さん。いつまでも不貞寝してたら甚い目に会いますよ」

後手、足枷、しかも犬同様に首輪までも嵌められ、美沙子の頬に涙の玉が光っていた。
「旦那様、この娘には充分素質があるようですよ。ほれ、もう嬉し泣きをしています」

「おしのは、少し化粧が崩れたようだな」

「お任せなさいまし。茶の間でワインでもお呑みなさい。其の間に、ちゃんと寝化粧をいたしておきます」

剛三は満足気にうなずくと、もう一度舐めるように美沙子を見て、応接室を出た。

「さあ、おいで。あんたは今夜、旦那さまの御寵愛を受けるんですよ」

首枷の鎖をひかれて美沙子はよろめいた。歩幅が狭く今にも転びそうになりながら、それでも歩かなければならなかった。

白い壁の向うの室が剛三の寝室だった。無論、ただの寝室ではない、総ての壁が鏡だった。天井もベッドの上部だけに鏡があった。

そして其の他の個処には、美沙子を戦慄させるに充分な変な道具が数本のレールにぶらさげられている。剛三が金にあかせて秘かに造らせた、楽しむための責具だった。

「良く御覧、これが旦那様の、お趣味なんだ

よ。永い間、あたしが楽しませて貰ったように、あんたもこの室で女の喜びを味わえるのさ。そりゃあ、始めの内は辛い事もあるけどね、其の内に楽しくなるよ。さあ、おしゃべりはおいといて化粧を直してあげようね」
おしのは、手にしていた鎖の一端を、ベッドにつないだ。

8 ヘボ探偵

「お邪魔しても、よろしいですか」

いやにのんびりした声だった。日曜日の午後の事である。伊藤雄吉は扉を背にして午睡の最中であつたが、何度目かの声で眼を醒した。目の玉だけを動かして雄吉は男を見た。

「なかなか、結構なお住まいですな」

ふざけた野郎である。ラジオもなければテレビも無い、三畳一間の仮住居では御世辞にも通用しない言葉を、平然と男は言った。鼻先に差し出された名刺の、太い文字だけを雄吉は判読する事が出来た。立花中央興信所。とそれは読めた。

「実は都築房代さんの件に就きまして」

「あんた、房代さんの客かい？」

「いえ、そのさかさまで」

「さかさま。なんだい、それは……」

「つまり私の方が都築さんの御依頼である調査をさせて頂いているという訳です」

「へ、へえ。まさかあの人、結婚の為の身上調査を始めた訳でもあるまいね」

「そんなのんびりした話ではありません。急に蒸発されるという事態が生じまして」

「ジョーハツ？」

「つまり、そのう、早く申しあげますと」

「あんまり早くないな、あんたの話は」

「これはどうも、恐れ入ります」

「東京の実家へ引揚げたのとちがうのかい」

「あなたに、一言の挨拶もなくでございますか。然かもマンションの方も其のままなのです」

「何時、何処でいなくなったって——」

「それが、判然と致しませんので……」

「あんたが依頼されたってのは、何の調査かね。俺も関係してるのかい」

「はあ、まあ多少は」

「はっきりして欲しいな。でなければ帰って貰うよ。俺は二日酔いなんだ」

「依頼を受けましたのは御主人の死因に就いてです。無論、他言は無用の事です」

「死因？ 次郎は車にはねられて死んだんだ。今になって何を調べる必要があるんだ」

「他殺の疑いがあると言われるのですが」

「そんな馬鹿な、何か証拠でもあるのか」

「いえ全然、証拠はおろか手掛りさえありません。只、依頼を受けました以上は——」

「あんたも帰って休んだらどうだい。料金の請求は本人に願いたいね。いいかい、万一だな、そんな不審な点があれば房代さんは、真先に俺の処に相談に来る、そう言う事だ」

「それは私がお止めしました」

「なぜ……何故、止めた」

「玄人の私共でも手の出ない難問なのです。まして、血の気の多いお人だという事で、相手に反って警戒心を起させるような結果になる事も考慮に入れます……」

「バックヤロウ、このへボ探偵め」

それで雄吉は跳ね起きていた。妙な予感のような物が拡がり始めてきたからだだった。

「依頼を受けましたのは一日程前でした。危険だから、とお止めたのですが、自分でも調べてみたいということ、それでナナエに勧められるようになったのです。一昨日の晩、誠に残念ながら調査を打ち切りに致した」とナナエに参ったのですが、それ限り、つまり蒸発されたという訳です」

「……」

「多少きな臭い匂いもしておりますし、それであ、こうして足を棒にして歩き廻っておるような次第なのです」

「き、貴様、房代さんの身に間違いでも起てみる、ぶち殺してやる」

伊藤雄吉は完全に頭に来ていた。

9 地下室

薄暗い室の中には品物らしい物は何もなかった。只、巨大なモーターが二基据えられていて、時々思い出したように唸りを生じて回転する。壁には畳二枚分程の冷蔵庫にビール瓶がギッシリと詰め込まれてあった。

室の中央の、使い古された回転椅子の上に房代は坐らされている。金糸銀糸で牡丹柄をあしらった、幅太の襟のついた長襦袢姿の俣だった。それは接客用のものである。アリラン・スタイルとかチャイナ・ドレスであるとか、その季節々々によってホステス達は定められたユニホームを着用する。下着の着用はパンティを除いて一切無用、そういうシステムになっている。それはいい。今の房代はそれだけではなかった。太い麻縄が胸に二筋、両手は高々と後手に縛られており、足首にも無情に縄が絡んでいる。たった今、散々毒づ

いて出ていった、二人の男によって自由を奪われてしまったのである。眼前の蜜柑の空箱に杉田が斜めに腰を下して冷酷な視線を房代の軀に向けている。箱には冷えたビールが五、六本、既に一本は空だった。

「いいかね、俺のいうことに正確に答えるんだ。質問は、ええっと、三つだ。それであんたは解放される。解ったな？ 第一問、あんたと高倉の関係はどうなんだ。一緒に寝たことがあるのか、それともこれからか。第二問これは簡単だ。鈴木美沙子、知ってるな、あの娘との関係を知りたい。もう一つ、今日あんたは誠になった運転手を訪問した。何故だ。あんたが訪ねたことは一切報告されている。今頃になって、なんで死んだ亭主のことなど問い訊す気になったか。以上、三つだ。さあ、答えろ」

房代は黙っていた。殺されてもいってほしくない質問が二つある。

「俺は高倉のように人は殺せん。だが弱い女を苛めるのは妙に興味を持っている。あんたのように美しい女は、なおさらのことだ」のどの奥で乾いた笑い声をこもらせた。

「あたしは、なにも知りません」

「知らんことを、俺はきく程馬鹿じゃない」

杉田は腕を伸ばすと房代の胸元をはだけ始めた。

「ああ、いや、やめて……」

「おさわりさせるのは、ホステスの役目の内だろう。仰々しすぎるようだぜ」

上下を縄にくびられて張ち切れんばかりの双の乳房がまろびでた。

「綺麗な肌をしてやがる。高倉なんかじゃあ惜しい位なもんだ」

杉田はビール瓶を一本手にした。そいつを口の方から胸乳の下を締めつけている麻縄の間にねじ込み始めた。

「い、痛い。な、何をするのです」

「すこし、あたたかくしてやるのさ」

上の麻縄にも強引に差し込んでしまう。丁度、胸の谷間で瓶を抱かされた恰好だった。くるりっと椅子が反転した。背中には二本。

×の字に括り合わされた手首と肌着の間に容赦はなかった。もう一度、前を向かされる。

冷たさよりも、二の腕に喰いこんだ麻縄が房代の美貌を歪めていた。

「俺が今、何を考えているか解るかね」

「？」

「その俣で廊下に寝かせるか。背骨がキイキイ音を立てるぜ。それとも、もっと冷えた奴

を脚に抱かせてやろうか」

両手が同時に裾を割った。

「いや、やめて、おねがい」

「諦めるんだな。頼まれたって止めやあしない。俺はそういう男なんだ」

「お願い、あたしは、私は何も知らない」めくらめくような羞恥に、房代は只管哀願した。そうする以外に術はなかった。杉田の手がパンティを目標に動きだす。

「もう高倉の物なのか」

「ち、ちがう、ちがいます。あの人とは何の関係ありません。ゆ、許して……」

「ほう、そ奴は本当か？」

房代は大きく、うなずいた。

「ようし、一つだけ答えてくれたな。いいかいとくけどな、俺はあいつが嫌いなんだ。

俺の仕事はな、奴を失脚させることが目的なんだ。ボスの命令で奴の行動を監視しているのさ。あいつは平気で人を殺す男だ。その証拠をあげきだすのが今度の仕事だ」

「……」

「さあ、辛い思いをしたくなかったら全部吐け。それとも、こ奴を挟んでみるか？」

「ま、待って下さい」

「なんだ、早くいえ」

「鈴木という女^{ひと}のことは、何も知りません」
四本目の瓶が、必死に閉じ合わされている
太腿の上に無造作に転がされた。

「イイ、イイ」

冷たさを意識する余裕など房代にはない。

「俺を甘くみるなよ。ようし、今度は腹の中
からあっためてやるぜ」

杉田は、最後の一本の栓を抜くと、房代の
顎に指を喰いこませていった。

「さあ、口を開けるんだ。その綺麗な歯をへ
し折ってでも吞ませてやるぜ」

「知らないのです。あたしは会ったこともあ
りません。本当です。本当に知らない」

「じゃあ、なんで娘は、あんたのマンション
へ行ったんだ？」

「そんなこと、私は知りません。会ってもい
ないのに解る筈はありません」

杉田は、指先の力をゆるめた。たしかにそ
の通りではあるのだが、……では、あの娘は
一体、何者なのだろう？ サツの回し者だろ
うか。まさか、そんなことはあるまい。あれ
程の美女が婦警なんかである道理がない。

「まあいい、そいつはおいといて、もう一つ
の質問だ。なぜ運転手に会ったりした」

「あ、あなたは……」

喘えぎながら房代は問うた。

「支配人の高倉さんとは、何の関係もないの
ですか？」

「ないとはいわんさ。同じボスの身内なんだ
からな。ただ奴の正体をあばく、それが目的
だということ、今説明した通りだ」

「そ、それなら、私を助けて下さい」

「なぜ……だ？」

「あの人はあたしの主人を殺したのです」

「なんだって、そいつあ、本当か」

大袈裟に杉田は驚いてみせた。

「なにか証拠でも、もっているのか」

「ハイ、あります」

「そいつは初耳だ。よし今案にしてやるぜ」

太腿の上のビール瓶だけを取り除いて、房
代の体を後ろ向きにした。背中の瓶を手首を
持ちあげるようにして抜きとりながら、杉田
の眼が異様に光った。髪がアップにされて、
男心を魅きつけるような見事な襟足、なだら
かな首筋から肩にいたる曲線の艶やかさが、
杉田の欲情に火をつけるに充分な魅力で輝い
ていた。

「あんたのいうのが本当なら、あけみ、俺は
あんたの味方になるぜ」

「本当です、嘘なんかいいません。ですから

お願い、あたしを助けて」

「いいとも助けてやる。その代り、少しだが
条件がある」

「なんです。早く縄を解いて……」

「そいつは無理だ。今の処、俺と高倉とは表
面上だが味方どおしなんだぜ。とにかく、な
んとか理屈をつけてあんたを此処から連れ出
すのが先決だ。しかし、手放して解放する訳
にはいかんだろう。そんなことをしたら奴に
怪しまれて、下手をすると俺も危い」

「では、どうすれば良いのです」

「縄は一旦、解いてやる。しかし形だけでも
縛っておかなくては矢張り不味い。そうだろ
う」

「ここを出たら、許してくれるのですね？」

「勿論だ。ところで、もう一つ条件がある」

「なんでもおっしゃって下さい」

「証拠さえあれば、奴は明日にでも葬むって
やる。あんたが警察に突き出せというのなら
それもいい。そこでだ。俺も代償が欲しい。
はつきりいって、あんたのその軀を貰いたい
んだ」

「……」

「一度でいい、どうかね。お互い無理のない
取引きだと俺は思うが……」

「そ、それは……」

「いやかね。嫌なら俺は考え直す」

「……」

「あんたは俺の手中にある。もう一度、瓶を抱かせて、そうだな多少殺風景で気の毒だがこの室で自由にすることも出来るんだ」

「……」

「ついでに、今聴いた話を高倉に売ってもいいぜ。奴は喜ぶに決まってる。そうすれば、どうなるね。都築、次郎とかいったな。あんたも亭主と同じ運命に遭う……」

「あっ、ああ……」

それは房代の絶望の呻きに似ていた。前門の虎、後門の狼。そのどちらかを選ぶ以外に道は残されていないのだった。

10 寝化粧

美沙子は変な恰好で、化粧を強制されていた。後手に枷を嵌めたまま両手を前に出すように、おしのは命じた。美沙子は無言で睨み返した。この気狂いじみた同性の思いのままにされるのは耐え難いことであつたし、首枷で引き廻されない限り動く意志は全くなかつた。だが……

「あたしを馬鹿にすると痛い目を見るよ」

おしのは背後に回ると、左手の小指を持ちあげた。

「キヤア」

突然の激痛に、美沙子は悲鳴を挙げた。何をどうされたのか解らない、烈しい痛みが全身を刺し貫ぬいて、汗がどっと噴き出してきた。

「サア、いう通りになさい。もう一度これが欲しいのなら別だがね」

鼻先に突きつけられた物を美沙子は見た。

糸孔のない針だった。爪と皮膚の間に疼痛が残っていた。美沙子はおしこの残酷性に身震いした。思い切り肩を落し両手を腰の方からやっとの思いで太腿のところまでずらすことが出来た。枷の嵌った両足を抜く為には腰をおろすより方法はない。羞しさに頬を染めてそっと体を屈めた時に、おしのは美沙子を押し倒した。こうして両手で両足を抱いた惨めな姿の仰向けの恰好で化粧直しが始まったのだった。クリームで洗顔され、念入りに練化粧がパフで伸ばされる。美しい人形の顔をなお美しく引きたたせようと夢中になっている幼女の仕草にも似て執拗に、おしのは指先を動かしていった。アイシャドウをいれ口紅を塗ると、匂いの強い香水を一旦掌に受けて、

耳たぶから首筋へと擦りこみ、やっとなつた。

「綺麗になつたねえ。女の私でさえ見惚れてしまふよ。本当にお前は美しい娘だよ」

無理矢理に両足を折り曲げられて、手首を前に廻された。髪も油がぬられくしけずられて、緑色のヘアバンドまでも用意されていた。そして美沙子は、ベッドに仰臥させられたのである。

「さあ両手を頭の上におあげ。早くなさい」

「おばさま、お願いです。助けて下さい？」

「いやだよこの娘は。そんない方をされたら、いかにも私が悪人みたいにきこえるじゃないか。折角、綺麗にしてあげたのに……」

「お金をあげます。百万でも二百万でも」

「折角だけど、あたしはお金よりもこの方が好きなんですよ」

「あ、貴女だって女ではありませんか」

「そうだよ。少しくたびれてはいるがね」

「だったら、こ、こんな酷いことを……」

「とんでもない。ほら、先刻もいったでしょう。始めの内は、そりゃあ少し位は辛いこともあるけど。慣れてくるとこの世の極楽。嘘じゃあないよ。今にあんたの方から、縛ってほしい、苛めてくれえって、鼻をならして

立花の言によると、房代は一昨日、蒸発したということになるが、正確には今から三時間程前のことであつた。一昨日、店が退けると房代は予約しておいた新幹線を利用して、名古屋へ向つた。立花の調査で夫を死亡させ解雇された運転手の猿渡がそこへ移り住んでいることが判明したからである。もちろん立

花は本人に会っていた。しかし彼の調査によると猿渡に不審な点は見当らず、一カ月間の運転停止と三万円の罰金処分を受けている。ということだった。それでもなお房代は会ってみなければ気が済まなかったのだ。結果は同じことだった。

「私にも落度はあります。でも、もうこれ以上、責めないで下さいよ」

猿渡は、それだけいって深く頭を下げるだけだった。彼は、高級とよべる文化住宅に住んでおり、まだ就職も決っていない。それが変だ。といえはいえないこともないが……と立花はいつていたが、自分の場合と同じように親切な高倉支配人が相応の退職金でも支給したのだろうと解釈するより仕方はなかった。

傷心の房代は一人で名古屋の知人の家に泊した。夫が殺されたのではないか、という疑いが全く何の根拠もないものだ、ということとが解った今となつては、もうこれ以上、ナエで慣れぬホステス稼業を続ける必要はなかった。折を見て罷めさせて貰おう。そんな気持を抱いて房代は帰阪し、直接、ナエの更衣室へ入ったのである。毒牙が爪を磨いて待っていたのを知る訳は無論、なかった。

「現われたようですよ」

立花の声に雄吉は瞳をこらした。最新型のビュウイックが、通用口にピタリと停った。若い男が二人飛び降りて、四囲^{あたり}を見廻し、人気の無いのを確かめると、扉に向って手招きした。同時にもつれるようにして二つの影が現われ、後部シートに乗りこんだ。

「房代さんだ。間違いないぞ」

躍り出ようとした雄吉の袖を立花が攔む。「今出るのは不味い。相手は三人、それにハジキを持っている筈です」

「そんなこと関係ない、俺一人で片づける」「まあ待ちなさい。ほら、もう発車しましたよ。尾行しましょう、行先を突き止めるのです。多分、蟹浦の処でしょう。そうなれば、もう一人の蒸発者も助けられるかも知れん」

甲虫も発進した。

「もう一人の蒸発者？ あんたの身内か」

「違います。都築里絵、次郎君の実妹です」

「……」

「この事件の依頼者はその人なのです。一カ月前、東京から下阪してこられたのです。一通の封書を私に見せてね。……説明しましょう。その手紙は事故直前、次郎君が書かれたものです。当夜、次郎君はバンド・マスタ

ーに諒解を求めて九時少し過ぎにナエを出ています。それからナエの近くの憩^いという名の喫茶店で便箋を借り、妹さん宛に走り書きしました。おやっ、方向が違ふようだな」

「そ、その手紙は一体なんだ」

「簡単な物です。都合でナエを罷め、マンションを出る。連絡するまで待て。秘密だ。ただそれだけです。今私達が待機していた煙草屋で封筒と切手を買ひ、投函した後ナエとは反対の方角に歩いていったそうです。店の婆さんが（今日はどうなさったんです）そう尋ねたら早退けだよ。そんな意味のことをいって帰られたそうです」

「……」

「次郎君は、しらふだったんです。それがナエに引き返し泥酔の末、事故に遭った。しかも誰一人として彼に会ったものはいない」

「……」

「変でしょう。だが、殺される理由も解らんし、猿渡という運転手は故意に人を刎ねるようなことの出来る男ではない。つまり何の手懸りもなければ証拠もないのです」

「小池、運転を代ろう。尾^つけられてる」

「サツですか？」

「判らん、適当な処で停めてくれ」

房代は、ほんの真似事だが手首を縛られている。その手首のあたりを我物顔に撫でさりながら耳元に唇をつけるようにして、

「あんた例の件、警察に話をしたのか？」

杉田が問うた。房代は横にかぶりを振る。

車が停った。狭い道路である。ぶつつかる程の近くで追跡者らしい車も停った。房代は三人がかりで助手席に移され、杉田と小池と花田とは首をすくめて入れ替った。

「おい、どないしたんや。こんな処でエンコでもしたんかいな。とおられへんで」

立花が首を出して怒鳴って来た。

「杉田さん、あんたの勘違いらしいでっせ」

「仲々、野郎、味な真似をしやがる」

杉田は、一万円札を二枚、小池に渡した。

「今度停めたら降りてくれ。ほんの二、三分釘付けにしろ。頼んだぜ」

「合点だ」

小池は楽しそうに指を鳴らした。

「どうやら気づかれたようですね」

「どうする？」

「止むを得ません。こうなったら房代さんを救出するのが先決だ。いいですか、反対側を

追い抜きざま、運転台に引っ掛けます。頭を打たんように注意して下さいよ」

柄に似ず大胆な立花の判断振りだった。

「房代さんは大丈夫か。あつ、また停った」

二人が飛び降り、車は再び疾走した。

「畜生め、向うの方が役者が上かな」

「よし、二人は任せろ、あんたは房代さんを追ってくれ。俺は免許なしだ。頼んだぜ」

いうなり雄吉もまた、転がり出た。

ビュウィックは、ホテル美苑の駐車場に滑り込んだ。杉田は房代を引き出して貨物専用のエレベーターに駆けよった。

「お帰りなさいまし」

どこからともなく、ドアマンの制服を着た男が近づいて来た。男は房代の方をチラッと一瞥しただけで眉一つ動かさなかった。

「車は高倉の物だ、帰しておけ。その服は脱いで行くん。それから黒塗りのワーゲンに注意しろ」

どうやら立花は、まかれたようだった。

12 盲 獣

都築里絵。それが美沙子であることはうたがう余地はもうない。しかしそれを知っているものは今の処、誰もいなかった。ただ房代

だけは知っている。百万円を借りたのは、蟹浦に近づくための手段にすぎない。それがこんなにも早くおぞましい運命に見舞われることになったのだ。美沙子は、無惨な姿態を晒されている。空の冷気を、じかに肌で感じなければならぬのであった。蒼白く見える美しい顔が、眉を寄せ羞恥と屈辱におののいてい。首輪の嵌められた白い首筋が痛々しく肩から胸にかけての脂肪ののった肌、あらわな乳房、思い切り引き締められた二の腕から腋の下の素晴らしいふくらみ。腰、そして腿から爪先までのほっそりと繊細でありながら弾力をもった見事な曲線。

まだ誰にも見せたことのないその肌が拘束という残酷な手段によって、剥かれていったのである。鏡の周囲に設置されてある幾本もの蛍光灯が真昼の明るさを造り出し、天井の鏡の中に白い肌が燐光のように輝いている。唇と二つの乳首が燃えるように赤く、かすかに震えおののいていた。たった一つ、美沙子にも救いはあった。それはその肌を、まだ誰にも見られていないということだった。加害者である剛三は、妙な黒色の頭巾をかぶって入ってきたのだ。

「私には何も見えぬ。だから少しも羞しがら

ことはないのだよ」

それまで、必死に瞳を閉じ、引き伸ばされた全身の苦痛に耐えていた美沙子は、その声に目を見開いた。首をめぐらせるまでもなく四囲の壁に異様な剛三の影があった。くつろいだガウンの前をはだけて、老人とは思えない血色の良い肌で胸毛が房々と生えている。そして首から上を例の頭巾で蔽っているのだ。剛三は手探ぐりでベッドの方へよってきた。あらかじめ、おしによって聴かされてきたのであろうか。彼はハンドルを操作して美沙子の緊縛を少しだが楽にしてくれた。

「さあ、美沙子。生まれたまんまにしてあげるからね。温和しくしているんだよ」

「い、いやです」

「嫌だとはいわせない。お前は私の囚なのだから。否、断わるのは自由だが、それは空しいあがきにすぎん。わかったね」

「嫌です。やめて、触らないで……」

「聞き訳けない娘だね。では仕方がない。折角お前のためを思ってこんな物を被ってきたが強情を張るのなら止むを得ん。これを取って直接その肌を拝ませて貰おうか？」

「い、いや」

「嫌じゃ、嫌じゃでは話にならん。どうせそ

うされるのだ。よろしい、選ぶ特典を与えよう。このままか、それとも見られたいのか」

絶望が美沙子を襲った。こんな羞しめが現実に許されていいのだろうか。

「あなたは鬼です。ひとでなし」

「どうやら頭巾なしのが希望らしいな。鬼とよぶなら鬼らしく、むりやりに剥いでやる」

「ま、まって、待って下さい」

「まてんよ、私は鬼なんだぞ」

「そのままで、そのままで」

「このままで裸にして欲しいというのかね。はっきりと応えなさい」

「は、はい」

「よろしい。いいかね、反抗は君の自由だ。

その方が私も楽しい。お前は何故こんなことをされるのかと、多少の憤懣を抱いていようが、お前は金の必要もないのに、この私に金を借りて、つまり私に近づき、私の中から何かを探り出そうとした。それが許せん。それは追い追い追究することにして、取りあえず私は私の趣味を無垢であるお前の肌で満喫させて貰う。つまりお前は鬼にとらわれた人身御供だ。倅いお前には知性もあるし、教養もある。肌を晒すことの羞しさをもった清らかな肉体。近年稀な美少女なのだ。私は世間で

は悪人を通っている男だから、鬼とよばれても平気だが、お前のような教養高い娘が口にするべき言葉ではなからう。繰り返すが反抗は君の自由だ。だが絶対服従を前提とした、私を喜ばすための反抗でなくてはならん。このマスクも君のための物ではない。私の楽しみを、少しでも長引かせるためなのだ。楽しみは、長い方がいい。じわじわと時間をかける。そのためのものなのだ。わたしはね、色々な女をこの室で楽しんで来た。アルバイトの女学生もいれば、亭主に死別して喰うに困っている女もいた。じゃが目隠くしをするのは、わたしではなく何時も女の方だった。女共は縛られ鞭打たれ泣き喚いたが、二度と現われようとはしなかった。莫大な報酬を支払ったのにな。ただ一人例外がおった、それがあのおしのなんだよ、田舎で妾暮らしをしていたのが捨てられてな、わたしの処にきたんだが、あれだけがわたしを理解してくれたんだよ。だがもうお婆ちゃんだ。あんたはおしのに優る私の理解者にならねばならん。何故なら、もう二度とこの室を出ることは叶わんのだからね。時間を掛けて、仕込ませて貰いますよ」

耳をふさぎたい思いだった。だが蟹を思わ

せる剛三の毛むくじゃらの指が、ブラウスの
ホックを外しにかかっている。手さぐりの触
覚が余計に美沙子の神経を攪乱させる。見ら
れていないことは解っている、処女の本能
が無意識に身悶えるのは当然だろう。

「そうだ、もがくのだ。いっておいだろう、
うんと抵抗するのだ。その方が何倍も何倍も
私を楽しませてくれるのだ」

ピタリッと美沙子は動けなくなる。だが剛
三の手が襲いかかると、再び身をよじった。
「いやです、お願い。止めて、止めて頂戴」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか
いう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたらという御希望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時に、お手元までお届け致します。
○直接予約購読のお申込みを下さるのには

ストッキングが片方ずつ脱がされて、一片

の布切れに変じた。それらの物は足首のあた
りに一塊りに丸められ、スリッパがブラウス
と共に、乱暴に引き千切られていった。赤い
布にふちどられたブラジャーに包まれたふく
らみが烈しく喘ぎ、白い肌をより美しく際立
たせる。美沙子は突っ伏そうとした。だが剛
三は、それを許さなかった。蟹のような指先
が露わな腕の付け根のあたりを押えつけて獲
物の必死の抵抗を楽しんでいた。おぞましい
触感に鳥肌だっと思いだった。

「死のう。それしか方法はない」

美沙子は瞳を開いた。天井に、哀れな抵抗
をくり返している若々しい肢体がくっきりと
まるで他人の物のように美沙子には映ってみ
えた。黒い頭巾が蔽うように近づく。恨みを
のんで散らされるのか、薔の花。憎い。この
男が憎い。殺してやりたい程に憎い。

突然、剛三の動きが停止した。

「お前は実に素晴らしい娘だ」

再び例のハンドルが操作され美沙子の体は
硬直した。

(未完)

大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会
社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何
月号より何カ月分と御指定下さい。
○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願います。
○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ
になりましたので、予約購読料は三月分三冊
一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分
十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間
誌代の改訂はしない予定です。
○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。
○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送
料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御
送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読
者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。
何月号からとお書きにならないときは、重複
や欠号をきたしますので御留意願います。
○予約金が切れましましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切りの判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。
○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際にお受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で御受領願います
局での留置期間は十日間です。その間に
お受取りにならないときは、発送人に返戻さ
れます。



被虐の

空想的断片

三原 寛

特に探し求めなくとも、近頃の雑誌では、思わず首筋の熱くなるような記事に、たびたび遭遇致します。

『現代』八月号

遠藤周作、瀬戸内晴美の緑魔子嬢との対談で、

緑——（いたずらっぽく）わたし、男の人をいじめるのが好きなの。

瀬戸内——どんな男がいじめやすい？ た
たとえば遠藤さんなんかは……。

緑——わたしがいじめるのは、自分の恋人だけ。

瀬戸内——精神的にいじめるってわけ？

緑——ええ。

遠藤——そうじゃないの、オシッコをふかせたりするんだろ。

瀬戸内——おシッコをふいてもらうことがいじめることかしら。男は嬉しいんじゃないの。

——感想——

緑魔子嬢、名前からして最も理想的な印象を受けます。それに魔子嬢、以前にも座談会で「私は男をいじめるのが大好き」という発言されたのを週刊誌で拝見した記憶がありここでは前後の雰囲気、どうもでてしまつて誤魔化してしまわれたように思えますが、男を責めたいのは御本心のようにです。それから瀬戸内女史の御発言もずばり。もし私がその場に居合わせたら首筋まで赤くなるところで、緑様、瀬戸内様、どうぞ、どうぞ嬉しいどころか、雑巾の代りにどうぞ、私めの舌をお使いになって下さって結構です。とても申し上げたいところです。

『現代』二月号、表紙の女性

こういう女性は、その容貌そのものが、じつと見ているだけで、いじめられたい気分を起させます。同じ号に松永てるは嬢のグラビアがあり、網目タイツの長い脚を見せつけられ「身長一六五センチ、六〇キロのポリウムで……」「酒は軽く一升、最近ハイスキに転向……」等々というのを見ると、それだけで圧倒される感じが。

手元の雑誌を手当り次第に開いてみますと『ハイグリー』二月十七日号、グラビア頁——黒人の男をテーブル代りにして、レディ

三人がゲームを楽しむ——写真。同じ頁に、黒人の背中に乗っている白人女性の写真、それから男二人に肩車させて、ふんぞり返っている女王の表情は、何とも素晴らしいものでした。

『平凡パンチ』一月三十日号

野末陳平、堤玲子嬢との対談

陳平——童貞は見ただけでわかる？

玲子——そう、一目にらんだらわかりますよ。あたしのところには、美少年ばかり自然に寄ってきまして、命はともかく、童貞をささげたいといってきましたよ。

陳平——おたがいの好みがあうと、その日に寝ちゃうの？

玲子——早死させてはいかんですよ。ジリジリ殺していかに、楽しみがない。

陳平——童貞をオモチャにするわけだな。

猫がネズミをなぶるみたいに。

玲子——そうね、何もやらす、生かさず殺さず、ジリジリとのうち廻らせるとか……殺してしまったら、もう用はない。あたしは耳をそぎ、鼻をそぐ、そんな風な殺しかたが好きなんです。

——感想——

直ぐにもとんでいって、残酷なぶり殺し

にあつてみたい！

『プレイボーイ』五月二日号

「女子大生が泣く男を体験しはじめている」というテーマ。

女に捨てられて泣く男性達、実例特集号

男を捨てておいて「泣くなら、押入れに頭をつっこんで泣きなさい」と突きはなす里見絢子嬢。カッコよさと、ふんだんなお金のある別の男に乗りかえるのに「あの人の方が好きだから、あなたとは別れたいの」といったら、とたんに目に涙をためちゃって、可哀想に了解してくれたわ。そして……するとどうですの、腕にとりすがってオイオイ号泣はじめたのよ……。と捨てられて泣く男を嘲弄する中里妙子嬢の顔写真は、理想のヴァンプ型。思わず脆いて哀願したくなるような容貌ですが、彼女の表情から「変な男がきて、あたしの足にとりすがって泣きはじめるから、蹴っとばしてやったわ」ぐらいで、あっさり片付けられそう。

強くなった女性の前に跪く男性群像は更につづき、

藤原美沙子嬢——ところが、いい終らないうちに「そんなこといわないでくれよ」とワッと泣き出しちゃったの。ほかにチエも

ないのかしら？

目の前で男を乗りかえた北川律子嬢は——「Kは都内に自宅があるくせに、私のアパートの隣りに部屋を借り、私はほとんどの夜をKの部屋で過ごしたの」ところが、そのまた隣の部屋にいるTの方が気に入って「……そうするとKと別れたいし、Tを当分の間の支えにしたいと考えはじめた。そしてTは私のものになった……」

傍線の部分の表現には、それこそ随喜の涙がこぼれます。

「Kは未練がでたのね。静かな夜、耳を澄ますと、泣いているの……」

捨てられた男の部屋の隣りで新しい男と痴戯にふけりながら、捨てられた男の泣き声を楽しむ彼女の驕慢な心理状態を想像しますと興奮します。

泣く男を次々にフル女性達の仲間には「トイレと男なら、女はトイレを選ぶわよ」と仰言る草加栄子嬢。それから誌上に傲慢な顔写真の出ているカロリン・パロウィン嬢には、「私や多勢の人の見ている前で脆いて泣いてあやまった恋人」をもつ女友達がいったり「女の子にふられて泣きながら車をとばして、ぶつかって即死した男の子がいたわ。女の子は

ヤキモチやかせようと思って、わざとサヨナラいったのに」というようなことがあって、面白半分に男をいじめ殺した女友達。そして「私にも泣いて手紙書いてくるアメリカのボーイフレンドがいるわ」

『平凡パンチ』四月二十四日号では

「復活した女子プロレス」の記事で、小人対女レスラーのシーンでは、小人は投げられたり蹴とばされたり痛みつけられる役割りで、女の子に小人の男が、まるで玩具のように荒っぽく扱われるとのこと。今どこでやっているのか、是非観たし。出来たら小人のかわりに、しごかれてみたいものです。

プロレスといえば、私がアテネの映画館でみたフィルムで、日本に入っているかどうか知りませんが、原題はMILLION EYES OF SU-MURU という、世界の男を支配して奴隷にするのが目的のサド女性の秘密結社で、その女性会員達がカクテル・グラス片手に見守る中で、一人の大柄な女性が哀れないけにえの男を組み敷いて面白半分に絞め殺す場面。この女性会員達の制服が腰の締った網目タイツに黒革乗馬のマゾ好みで、中でも首領の女性の残忍な表情は身震いするほどで、裸の男を鞭打つ場面等、何度みても興奮を新た

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

にし、是非日本へも輸入して欲しいフィルムです。

次に、フランスのメンズ・マガジン『アダム』の五月号はマゾヒスト特集で、表紙はビザールな革上衣に乗馬靴の女性が、革鞭を手に立ちほだかった写真で飾られています。グラビヤにも、ピストル伯夫人の前に脆くマゾッホだとか、革鞭乗馬スタイルの女性が、餌食の男を踏みつけている典型的なドミナの図などが掲載されており、私に期待を抱かせま

したが、故意にか、あるいは編集者の理解不足でもあるのか、内容的には大したことはありませんでした。

とに角、一寸手許をみまわしただけでも空想の題材は溢れており、楽しいのだから情ないのだから、空想の一つでも実現出来るよう、緑様、玲子様、男泣かせのお好きなお嬢様方、プロレスのお姐様方、それから、外国映画輸入お取扱の方、どうか私の夜をかなえて下さいと、哀願してみましようか。



女性の乳房礼讃

御 木 本 三 郎

女性の最大の魅力はなんといっても乳房であらう。ふっくらと膨らみ始めた頃の少女の青い乳房。未熟ながらもすでに形を整えている可愛い乳房。女性として完全に熟れきった、みずみずしい乳房――。

いつの時代に於ても、女性の乳房は、女性を代表するものであり、羞恥の中心であるだけに男性にとっては最大の魅力の要点であり又、価値高い鑑賞部分なのである。責めの観点からしても、乳房こそは、最高の攻撃目標であることに変わりはない。

本誌に登場するモデルにも幾多の素晴らしい乳房の持主がいて、乳房を中心とした責めを展開して我々の目を楽しませてきた。

古くは『手袋』に始まり、その後も何葉もの乳房責めフォトが口絵写真に将又分譲写真

にと凄い迫力をもって発表されている。『手袋』は完全に近い傑作で一分のスキもないくらいに構成されていた。私の記憶している限りでは、本誌に現われたものの中で始めての本格的な乳房責めであった。

モデルの白い純肌の両の乳房に、背後からがっちり喰い込んでいる黒の皮手袋。見る人の視線をがっちり掴んではなさない迫力が溢れていて、妖しいムードが見る者をして夢心地に誘い込む責めフォトであった。モデルのなんともいえない悦虐におぼれた複雑な表情が私の胸を締めつけた。数多いフォトの中でも、不滅の傑作として長く残るものであった。刑部典子なんかによって、このアイデアを再現させてほしいものだ。きっと素晴らしいものが出来ると思う。

これと似た乳房責め写真が『黒い手袋』と題して発表されたことがある。モデルは美人モデルとして評判の高い絹川文代である。容貌のよさばかりか、そのスタイルの良さは定評がある。五葉から成る組写真で、完成された乳房責めであるが、その責め方が全く絶妙といってよい程巧みである。黒い手袋をした男の手によって美人の形良い左の乳房が、しっかりと握りしめられ、縄目からふっくらと盛り上っている白い肌が目の中に痛いように飛び込んでくる。

又、男の右手がモデルの額を押さえているのは、見逃し難いムードを醸しだしている。もう一つの一葉は、前葉とは逆に素手でもって上から押さえつけられ、激しく喘いでいるといった絶品である。口絵写真としては確か

に限界に近い作品であった。責めを加える手が乳房を握りしめたり押さえたりして、大きな効果を挙げていた。しかし、複雑な表情を巧みに描き出した『手袋』を最高のものとして讃美したい。

『黒い手套』に勝るとも劣らない一葉が外にある。最後まで素人くささのとれない大変新鮮な魅力を持ち続けた遠藤百合子をモデルとした乳房責めである。乳房のクローズアップがあり、上部にはタオルの猿ぐつわが少しあり、下部には肉づきのよい腹部をはっきりとぞかせて坐っているために、腹がぼっくりと盛り上っているといった文句のない構図。

そしてクローズアップされた彼女の右の乳房を横から男の手が乳首に向って拇指と人差し指とを使って、しっかりと押さえつけているのである。只惜しまれるのは、わずかなピントの甘さである。これでピントがシャープであつたら、もっと迫力があつたらう。しかしなんととっても遠藤百合子のボリュームのある新鮮な乳房なるが故に素晴らしい一言につきる乳房責めの写真であつた。彼女に対してはもっともっと力強い責めを加えてほしかったが、彼女が単なるお嬢さんであるだけに、誠に残念だった。

口絵写真として発表された乳房責めの中で迫力のあるものは、まだまだ外にも数多い。

中でも『柔膚は縄にくびれて』で見せる梨花悠紀子の女として完全に成熟した見事な乳房を縄で無惨に縛り上げ、女の乳房がこんなにも変形してしまうものかとうならせるような凄惨な縛り方が堪能させてくれる。

バックが黒一色というのも効果的だった。変形しきった乳房の上半分が縄目から乳首を下にして目の前に飛び出している。彼女も又素晴らしいモデルであつた。一時期の本誌の口絵グラビアは彼女によって精彩を放っていたといつても過言ではない。結婚するという話だが、あの素晴らしい乳房も肉体もただ一人の男性の手にゆだねるのは惜しい気がする。

その他、四方清美や竹野ひろ子が乳首をプライヤーでひねられて責められている。竹野ひろ子の最初の写真であつたか、恥しさで全身をおおいながら、逃げ腰になっている彼女のシュミーズからひきずり出された豊かな乳房がいたぶられているのがあつた。

四方清美の乳房責めは、見落すことの出来ない表情をキャッチしている。「いやいや」といったような、半ばあきらめて男の責めを待つような女の複雑な心理を現わしている。

垂れるような豊かな乳房、便々たる巨大な臀部で口絵写真を飾った桜井葉子も、囚衣からはみ出るようにのぞいた乳房の、大きく突起した乳首をプライヤーで無理に責められて喘いでいる。又、『私の愛読雑誌』の浣腸フットでは、発表の限界を越えたのではないかとと思われるような力作で我々の目を楽ませてくれた東浦ひかるが、クリップで鼻と両の乳首を責められている。乳首を喰いちぎるように喰い込んだクリップは痛々しい。

古いものには、愛川悦子の『ロープ・ブラジャー』がある。若い頃の彼女の乳房は隅々まで張り切っていて、ピンピンと弾むような感じである。ロープで両の乳房を締め上げたのは、彼女の乳房に対する最上のアクセサリではなかったか。その彼女が乳房の間に涎涙をたらされて苦痛にゆがんだ表情が発表されたことがあつた。実際に涎が彼女の柔肌にくっついて冷えてしまっているのだから、すさまじかった。

しかし、口絵写真はやはり口絵写真で止めてしまふ。店頭に於ける衆目を考えて自ら載せる写真にも限界がある。それを打ち破って一歩も二歩も突き進んでゆけるのは分譲品以外にない。さすがに分譲品は繊細な責めの構

図と解像力の素晴らしさで口絵写真の何倍かの迫力がある。その中でも超一級品は、四方清美に対する乳房責めである。

背後に回った男の右手がプライヤーを持ち彼女の右の乳首を思いきり掴み、又ひねり回して前方にひっぱっているのである。画面の解像力がよいので、ひねられた乳首に生じた皺や、ひっぱられてゆがんだ乳首の先までが手にとるように眺められた。それだけでなく

◎懸賞△原稿募集▽

▽内容△

一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッティッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性渾美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文献紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、

男の左手は女の柔かい左の乳房を無惨にも力いっぱい鷲づかみにしている。男の手はまるでゴムマリでも握るように無表情であるが彼女は儚ない女の性をまる出しにして悦虐に浸っている。

遠藤百合子の乳房責めがある。双丘を縄でくくり、その右の乳房を男の手が持ち上げているのである。左の乳房と比べてみると、その上り方がよくわかる。彼女は横を向いてい

新発足記念

シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最もお得意のものをお選び下さい。

▽規定△

一、賞金、入選作品、優、一篇五万円
入選作品、秀、一篇三万円
入選作品、佳、一篇一万円
選外佳作、一篇五千円 若干

一、作品はすべて未発表の自作作品に限り、引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は四百字詰原稿用紙にて三十枚以上百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。

一、締切日は毎月十五日。入選の分は次号の誌上に掲載発表いたします。

一、懸賞応募原稿は他の原稿と区別するため第一頁に△懸賞▽とお書き下さい。

一、御投稿の原稿で返戻の必要のあるものは返信料同封の上、その旨添記して下さい。

一、宛先は天星社内奇ク編集部宛。

るが、その可憐なプロフィールは彼女の持ち味をよく出している。

更にもう一人いる。本誌上でも、二、三度素晴らしく見事に張りつめた柔軟で弾力性のある乳房を披露した五月亜紀子である。彼女の乳房も又、最高の芸術品であった。本当に短い期間のモデルであったが、この豊かに膨んでいる恰好のよい乳房を思いきり責めてもらいたかった。掴みあげても、握りつぶしても又乳首をひっぱって、この乳房を変形させてみても面白かったと思う。きれいごとに終ってしまったのが誠に残念。男子一生のうち、これ程の絶品を目の前で見せてもらったら本望であろう。彼女の分譲品による乳房責めは、鴨居に両手を吊るされ、竹で乳房を押しつぶされている軽い責めであった。モデルは相変らずの無表情で他人が責められているみたい。又綺麗なレースのパンティも、せめておヘソが見えるまで下げてムードを盛り上げてほしかった。

以上が私が今迄に見た主な乳房責めのフォトについての感想である。勿論、その他にも多くのフォトが出ている。代表的なもの、私の特に気に入ったものの中から感想を述べさせてもらった。

会津のジャンヌダルク

中 康 弘 通



慶応四年二月十三日、江戸は和田倉の会津藩上屋敷から、三田の下屋敷へ檻送された一個青壮の士があった。先の軍事奉行添役、神保修理長輝である。

長輝は先に京都守護職松平容保に侍して京師に禁門を守ったが、鳥羽伏見の戦に際し、前將軍徳川慶喜に、東帰して謹慎待命すべきことを進言した。もとより当時大阪城に在った幕府側の将士は、修理の言を顧みず、非難は修理の一身に集中したが、慶喜はよくその言葉を容れ、会津侯容保、桑名侯定敬の両連将を伴い、海路東帰したのである。

ところが会藩の士は長輝を責めるに、鳥羽伏見の戦に際し西軍に通じたりとし、その因

を遠く彼が君命で崎陽に外国事情を探り、西藩に知己少なからぬに帰した。

長輝は一言の申し聞きもせず容保の理解を信じ、容保もまた彼を下国させたときの危難を案じ上屋敷に幽閉したまま時日を過した。

しかし、勝安房守がこのことを聞き、慶喜をして公命を以て長輝を召そうとしたが、このことが更に更に藩士を硬化せしめ、ついにこの日、身がらを下屋敷に移された。そこで彼を待っていたものは、切腹の仰せわたしであった。

長輝は、われもとより罪なし、しかし君命を奉ずるは臣道なり、と従容切腹の座についた。辞世に曰く

帰り来む時よと親のおもふころ

はなきたより開くべかりけり

徐々に刀を執り腹を割いて果てた。介錯に当たったのは黒河内勇右衛門。神保氏は家老職の家がらであるが、黒河内氏もまた会津の名門である。

長輝没するとき三十才。武は宝蔵院流の槍術を修め、居合術また極意に達し、文は少年より詩文に長じ、藩校日新館の秀才であった。のち芝白金三光町の興禅寺に葬むられた。

二

さて、表題の「会津のジャンヌダルク」とは、何人人も察せられる通り、会津娘子軍の一人を指すのであるが、軍中勇名の最も高いのは中野竹子である。しかしこの一文に挙げるのは神保修理長輝の妻、雪子、やはり家老格の家がら井上丘隅の三女で当年二十三才。

夫長輝が賜死切腹ののちは、人あって再嫁を説くにも耳を藉さず、粉色を去って寡黙専静の日を送った。官軍の会津進攻に先立ち、亡夫の遺志そのままに国老梶原平馬に恭順を進言して容れられず、心中覚悟を決めた。

八月二十三日、鶴が城が官兵に包囲されるや、実家に至り母トメおよび姉チカと共に自刃の決心を定めた。いよいよ鼎坐した折も折滝沢口より甲賀町へと敗退して来た、幼少組小隊頭を勤める父丘隅が帰来し、励声一番、「汝が家は一の丁にあり、馳せ歸りて生死を共にすべし。決してここに死すべからず」と諭した。けだし、神保家の人として終りを完うせよ、との意である。

雪子は背いて直ちに辞し去ろうとしたが、砲弾落下して危険極まりない。やむなく隣家の垣を超え西に走り、途上、坂下で遭遇した

娘子軍（正しくは衝鋒隊）の婦女と合して、髪を断ち薙刀を把り、男装して二十五日、鶴ヶ城の東南、涙橋の戦線に加わった。

この日、早朝、涙橋は土州藩軍監谷守部（後の陸軍少将谷干城）、小軍監安岡覚之助の率いる土州、長州、大垣諸藩兵が進入して来たところ。ここで安岡覚之助のほか、土藩池銅次郎、長州藩小隊司令心得入江正太郎以下三名、大垣の少年兵三名、計八名が戦没している。

二十余名の娘子軍もまた二名の死者を出した。一人は有名な中野竹子、いま一人は神保雪子である。雪子は薙刀を揮って敵中に斬込み、乱軍の中で娘子軍の主力とはぐれてしまった。

奮戦して大垣兵数名を傷つけたが、中でも小隊長九鬼内之助は薙刀で脇腹深く斬り込まれて倒れた。しかし、空腹と疲労に体力を消耗した雪子は、城南に遁れ小山田の溪間に至り、今は是までと袴を脱し、懐剣を執って将に自から刃に伏そうとした。

そのとき追尾の大垣兵が群がり囲んで武器を奪った。一身は危殆に瀕しながら、もはや起って闘う能わずと知り雪子は、

「武士の情け、縄目の恥を避けしめ給え。直ちに

に頸を刎ね、中野氏と共に黄泉に帰せしめよ」懇願したが、隊長を斬られた兵らの聴き入れるところとならず、ついに雪子の着衣を剥いで縄に就かしめた。

「悪漢め、何たる無情ぞ」悲憤の眦を裂いて、雪子は痛哭の呻きを発した。

三

土州藩小隊長吉松秀枝は、雪子が妙齡婦女の身で裸身縛に就くの惨状を見、彼女の勇烈奮戦の状を知るだけに、惻隠の情に耐えず負傷の手当を加え、いたわりつつ深更まで訊問し、また一方、彼女の手にかかった九鬼内之助の容態を見ていたが、遂に深更に至り九鬼は落命。雪子は姓名をすら告げぬままに死刑と決した。

しかし秀枝は、彼女の気品ある態度と勇烈の気概に打たれ、最後の希望を訊ねると、雪子は切腹を許されよ、と願い出た。女の切腹は稀有のことであるが、この女なら腹も切れようかと、吉松が脇差を与えると、雪子は悪びれず脇差を引き抜き、疲憊の身にもかかわらず力の限り腹かき切って果てた。介錯人は土藩、久特惠という。

雪子の切腹については、女の自刃は通常咽喉を突くか胸を刺すかであるから、戦闘に続き囚虜という異常な状況にあって、精神的衝撃で切腹を選んだものと憶測されている。

しかし拙見では、日暮の小山田溪間に袴を脱したとき、すでに切腹の決意は兆していたと云えまいか。咽喉や胸を突くのに袴を脱ぐ必要はあるまい。それより一刻も早く護身の刃をみずからに加えようとするのが女人の常であろう。思うにこのとき雪子は切腹と決心していたであろう。袴を脱し腹おし寛ろげて、心しずかに思うさま腹を割くつもりが、捕えられて水泡に帰し、心中無念の暗涙に咽んだのであったろう。

従って、いまわの望みを問われたとき、切腹して果てる以外に何んの望みも述べられなかったであろう。敵陣営中に従容割腹する雪子の姿は悲愴美を象徴する以外の何ものでもなかったろう。享年二十三才。あたらずかりの身で、亡夫と同じ切腹を選んだ心情は察するに余りあるものがある。

彼女の薙刀の師黒河内伝五郎は、神保修理の槍の師でもあった。同門の優秀と才媛、平時ならば偕老同穴の終りを完了したであろうに、共に君国のため切腹して果てた若い夫妻の悲愁は、会津の秀麗な山河と共に永久に忘れられないものである。

付記 本稿は福島県の郷土史家M氏の尽力に

より資料整い成ったものである。また題名は同じく福島県の若き女流剣士M嬢の発案になることを付記し、感謝の意を表しておきたい。

尚土佐人と会津人とは因縁浅からぬ。京都で会藩の少年柴司が割腹したのは土藩士を誤って傷つけたためであった。西郷頼母一家の婦女が悉く自刃したとき、真ッ先に現場に至り、死に切れないでいた一女を紹介したのも、土藩士中島信行であった。神保雪子をして素志通り屠腹せしめ天ツ晴の最期を遂げしめたのも土藩士である。志士よく烈女の志を知るものと、云えようか。

私の手製責具

皮革の魅力

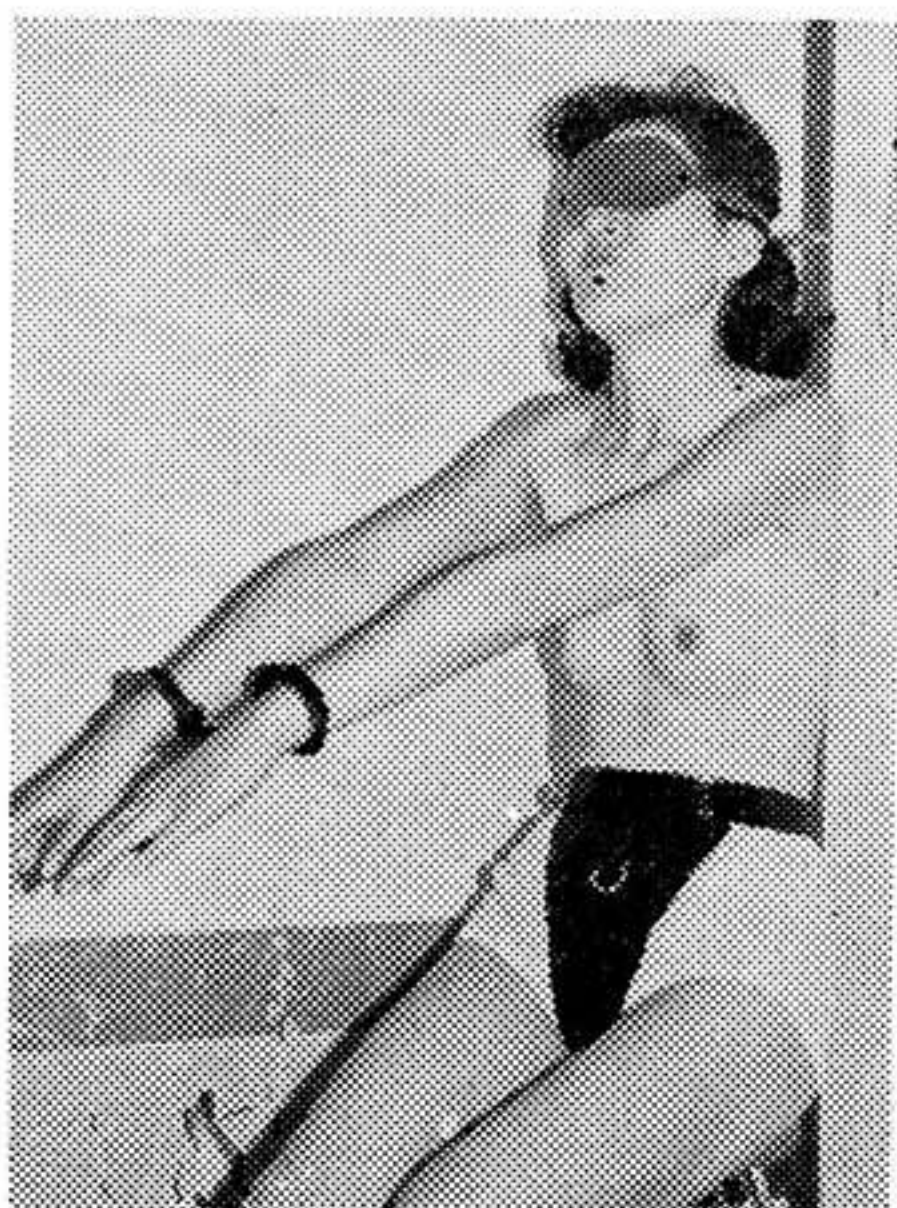
長田 実

私は皮製の責具に魅かれ、その製作を始めてから、早くも相当の日時を経過しまし

た。手錠。足枷。首枷。バタフライ型及びブラジャー型責具。全身拘束具。マスク型、眼

隠し型、頭部全面型等の拘束具も数多く手掛けて来て、最近ではアイデアに行き詰





てしまった感じです。細く切ってパンティ型にしようかとも思うが、責具としての効果は薄いようです。

皮は、いまさら並べたてなくても、見た目に美しく、よく締って強靱。使い方によって拘束と責具の両途使用出来ることはよく知られているところでしょう。しかし、皮にも数多い種類があつて、私など素人が加工するについては、それなりに苦心をはいました。勿論、最初のうちは失敗もくり返し、皮製品加工業者に相談して、上等のなめし皮や靴用の皮などより、普通カバンに使用されている程度のものが適してい

ることなどを知りました。ただ、拘束の目的だけならともかく、私は美観を尊重しなければ意味はないと思いますので、材料の適否、作り方には気を配ってきたつもりです。

材料の購入は、加工の業者にわけてもらふ場合が多いのですが、幸い、大阪には西成区に靴屋さんの集中商店街があり、皮革の半製品問屋もあつて容易に入手出来、近頃はカラー皮革も沢山に出廻つて楽しいものが出来そうです。けれども、私はやはり黒色が好きで一番よく使用します。

皮肉の薄い、キレイにナメシてあるものなどを使って作れば、理想に近いようなものも出来そうな気がしますが、業者の人が注意してくれたように、上等な皮は加工が難しくて仲々思うようには出来ません。

艶々とした皮独特の光沢を持つ拘束具。白い肌と黒い皮具のコントラストの美しさに魅せられて作り始めたのですが、凝り出すと、それ自体が奥深く、次から次へと不満が出てきますし、欲が湧いてくるのを感じてしまいます。女性に装着させたい

ために始めたはずが、時々、作る目的のために製作に没頭しているような錯覚に陥るようなことも時々あるのです。

対象がたおやかな女体で、憎悪による拘束ではないのです。といって、ただ形だけ自由を束縛しているように見える。というようなものでも意味ありません。

見た目に美しく、装着された女性に適切な被縛感を与え、必要に応じて責め本来の目的を果し得られ、尚且つ、従来の拘束具そのままの真似ではないものなどと、欲ばったアイデアを求め出すと、責め具といえども立派な芸術品だというような気持ちになってしまうから妙なものです。

とにかく、皮の責め具にとりつかれた私としては製作経験を生かして「皮製拘束具の作り方」などを書きたいのですが、御誌自粛を表明されている昨今「マニアの教科書」と誤解されて「奨励」しているような感を虞れ、あえて時機を待つことにして、私自身のレポだけにとどめたいと思うのです。同封の写真は、私の手製のものの内のごく一部ですが御覧下さい。モデル女性は強制したのでありません。念の為……。

濡れにぞ濡れし

—H氏とのプレイのことなど—

芳 野 眉 美



H 氏 夫 妻

五月はゴールデンウィークがあったせいから、奇ク誌友の方が六組ほど上京された。久し振りの方ばかりで、私の精神科の主治医であるところの沢井和雄ドクター、奇クサロンにMレポートを発表されている高岡久人氏、三年振り闘病生活に勝たれた野中氏。東南アジア旅行から帰られた森山美歌夫人とも一年振りの再会だった。

H氏は投稿されたことがないので、氏のペンネームをここに使用することができないから、H氏で話を進めることにした。氏とは、昨年、大阪で花田沙登子女王から二人して責められたことのある、いわば、神酒兄弟で、H氏とも一年振りの再会であった。

五月下旬の日曜日、H氏夫妻をホテルに訪問した。H氏夫人は三十六、七の、春川ナミオ画伯が好んで描くところの、グラマーな女王様のような魅力ある婦人である。

結婚なさったとき、すでにH氏の蔵書の中に奇クがあったという。

「主人は、私に読め、読めとすすめるのですが、そんな趣味がないものですから、読んだことありませんわ」

「でも、飲ませてもらったよ」

とH氏。H氏は根っからのM党神酒派である。

「ホントですか」

「仕方がないでしょう。飲ませろ、飲ませろ」

っていうことをきかないのですよ」

すばらしい奥様だと思う。H氏は甘党。だから、奥様と二人でビールを飲んだ。

「寝室で」

「ええ」

「どうやって」

「フフ」

奥様のをいつか飲ませて下さい、といううとしてやめた。私はとても気が弱いのです。

H氏に、それとなく苦しい胸のうちをうちあけたら、

「いいよ、奥さんがよければ」

なんて気軽におっしゃった。嗚呼、今夜は寝られそうにない。

ヌードモデルの弘美があらわれた。H氏、さては弘美から神酒を拝受するつもりだったらしい。が、奥様がいらっしゃるのでは、いささか勝手が違う。どうなることやら。

ビールを飲みながら四人で談笑。H氏、本当は、奥様を先にやすませてしまうつもりだったらしい。奥様の話はなかなか面白い。弘美も、すっかりうちとけてしまった。

弘美がトイレに立つ。だから、弘美にささやいた。

「どうせするなら、代用が二人もいるのに」

弘美は答えた。

「大丈夫よ。ちゃんと、とってあるわよ」

そんなに器用にできるものかねえ。弘美がミニスカートを捲り、可愛いパンティを脱ぐなり、さっと鼻先に差し出す。

「いい匂いでしょ」

甘ずっぱい匂いが鼻口をくすぐった。さんざん人にかがせておいて、また素早く穿き、すましてH氏夫妻の前に坐る。弘美はこんなムードのある子だ。まだ成人式を迎えていないかもしれない。

しばらくして、弘美はH氏のカメラのモデルになるためにミニドレスを脱いだ。パンティは穿いたままである。ヌードスタジオと同じ。

バネのように力強い伸縮を秘めた、弾力ある若いのびのびした肢体は、初出走のサラ三才を見ているようだ。ほっそりした肢体にかかわらず、胸の乳房はふくよかで大きく、くずれていない。

せっかくホテルにバスがあるのに、汗をかいていることはない。失礼して汗を流した。

浴衣をひっかけただけで部屋に戻ると、窓のガラス戸を開けて、タオルを胸に巻いた弘美が窓辺の椅子に坐っている。H氏はまだカ

メラの用意をしているらしい。何かいろいろと機械類を持ち出しているが、キカイオンチの私には、さっぱりわからない。

涼しい風がそよそよと入る。五月の夕暮はうるわしい。なんとなく私は弘美の前の床に坐った。弘美が笑いながら、足の指で私の顔をつつく。いたずらっぽく唇をこづく。

「舐めてもいいわよ」

お許しがでた。弘美の白い足を両手に受けた。細長い指の爪に丁寧にパールのペデキュアがされている。土踏まずまでは柔らかく、あたたかい。

「綺麗でしょう」

弘美が自慢するように、新月のようにほっそりした曲線も美しい足である。

「舐めなさい」

いきなり弘美が足の指先で、私の口をこじあけた。

「恥ずかしいの」

背後にH氏夫妻の視線が気になった。弘美の軟らかな足先を口に含んだ。不思議なことだが、無臭だった。いや、かすかな弘美の香りが感じられたといったほうが適切かもしれない。足の指、一本一本を丁寧に舐める。

弘美の遊んでいる足が上って、私の浴衣を

はだける。

「こんなもの脱いでしまえ」

コケティッシュな弘美の足の指。奇妙な氣持が湧き上った。足の指というだけのことがこれほどまでに刺激を受けるものとは思わなかった。

「浴衣をお脱ぎ。命令よ」

弘美は立ち上った。

いきなり、顔を弘美の足の裏で蹴とばされて、一足飛びに夜具の上に倒れ込んだ。弘美がタオルをとった。

弘美の馥郁たる香を秘めた小さな足裏が、顔に落とされた。

弘美のほっそりした足指が、上から口に浸入した。坐っている時とは違う。立ったまま、もろに押し込んでくる。小さな弘美の足は、すっぽり口に収まってしまふ。

「あら」

唾液があふれた。弘美の足首をつかんで力を弱めようとする。弘美はぐいぐい力を加えてくる。口の中を目茶苦茶に爪先でかきまわす。舌がおさえつけられて苦しい。

口の中が、なま暖かくなった。血が流れたらしい。弘美の足の爪で奥が傷つけられたらしい。

弘美が足を抜いた。思わず深い嘆息をついて舌をだす。犬のように荒い息をする。口の中が重く、痛い。

はっと思った瞬間、あわてて口を開ける。夜具の上である。汚してはまずい。

点滴は、やがて清流となって流れ込んだ。受けるのが精一杯である。H氏夫妻の視線など気にしているひまはない。無我夢中で淹を追う。

H氏夫妻から見れば、まるで雌犬と雄犬の共狂いのように感じたのではないだろうか。弘美の大胆な作動は完全にH氏夫妻の存在を忘れさせた。

淹はなかなか止まろうとしなかった。のどが激しく鳴る。息苦しい。鼻でかろうじて息を吸い、勢よく飲み込んでいく。苦しくとも淹つばを移動させることは出来ない。

弘美から解放されるまで、私は繰り返す三度、浴びせられたことを報告しておこう。

H氏は弘美の染^{しみ}一つない、なだらかな起伏の悩ましい肢体を、その後、カメラに収めたようだが、その結果は知らない。

奥様にえんりよしてか、弘美の恵みも受けて、私がピンチヒッターとして独占してしまった結果になった。申し訳ない。

弘美が帰ったあと、H氏夫妻と三人で、ニユーオータニのスカイラウンジで東京の夜景を楽しんだ。H氏はジュース、奥様はカカオフィズ、私はおとなしくジンフィズ。とにかく舌がかつたるく、口中がずきずきしてやりきれない。ウイスキーなら、しみただろう。「どうも、とんだところをお見せしてしまいましたね」

図う図うしさと羞恥と半々の複雑な氣持でH氏夫人に言った。プレイが始まると、どうなってしまうのか、自分にもわからない。流れのままにまかせるのが最高の方法だと思っている。

「始めてでしょう、あんなシーンを御覧になるのは」

「ええ、はじめてですわ」

神酒拝受をあからさまにH氏夫人に見せてしまったので、今度お会いしたときには、かえって気安く私の無理をきいて下さるかもしれない。そんな他愛のない甘い考えをいだきながら、H氏夫人のほんのり上気した顔を見つめていた。失礼しました。

H氏は夜景に八ミリを廻している。高速道路を走る車のヘッドライトが、ただ光線の流れとしかうつらないだろうが、東京の夜景も

又まんざら捨てたものではない。

弘美と私の間に、それ以上の関係はない。

その後の美歌夫人

森山美歌夫人のことをくわしく書くのは、あまり親しすぎて、プライバシーを犯すのではないかと思い、発表するのをためらってしまふのだが、誌友の方には、てっきり伝説的サジスチンだと考えていらっしゃる方も多いようなので、実在であることの証拠に少し書くことにしました。

五月初旬、美歌夫人から電話があったのが午後十一時。突然で驚いた。

東南アジアを旅行し、今日帰国してホテルで一息いれたところだという。

が、悩ましいふくみ笑いが多くて、電話はなかなか、はかどらない。S氏にかわってもらうと、

「あわ、あわ、あわ……」

S氏はどうやら猿ぐつわをされているらしい。S氏を責めながら、美歌夫人は電話をしているのである。甘い電話の声だけで血がたぎってくる。

「お会いしたいな」

というと、

「いらっしゃい」

ホテルのルームナンバーを教えてくれた。閉店。タクシーにホテルの名を告げる。

エレベーターは自動だから、誰にも会うこともなく、無人のホテルの廊下をルームナンバーをさがして歩く。分厚いジュウタンが足音を消す。

ドアの呼鈴を押した。ドアが開けられて驚いた。S氏を馬にして美歌夫人が出迎えたのである。ボーイに見られては困る。素早く部屋に入ってドアを閉めた。

美歌夫人の真紅のパンティを頭にかぶせられたS氏は、奇妙なところを縛られて、四つ這いにされ、女王様を乗せているのである。「おかえりなさい。旅行は楽しかったでしょう」

「あわ、あわ、わ」

どうもいけない。美歌夫人は二人のやりとりを見ておかしように笑っている。人間馬との対話はむずかしい。

コケティッシュな薄物をまとっただけの美歌夫人は、まったくハダカに等しい。ネグリジェではない。旅行のお土産の品だろうか。眼のやりばに困って、もじもじしていると、

「バスに入っていらいしゃい」

何気ない言葉だが、自然に遊びに導いてくれる。美歌夫人がすばらしいのは、このソフトなムードなのだ。失礼してスーツを脱ぐ。この二人に交って、スーツを着ている違和感から解放されて気が落ちつく。

(まるで逆のことを書いていようだが、招待されたら、その主人の意向に従うのが自然ではないのだろうか。ルールというしかめつらいことをいつているわけではない。いたずらに羞ずかしがっているのはパーティは成立しない。主人に対してかえって失礼にあたることもある)

洋式トイレとバスが一室にまとまっているのは、外国人の観光客向けのホテルだから仕方のないことだろうが、あまり好きではない。

全身に石けんをぬりつけて、頭からシャワーを浴びた。

タオルを巻いて部屋に戻る。薄暗い部屋に静かにミッドナイト・ミュージック流がれている。

ツインベッドの片方に、うしろ手に縛られたS氏が、押さえつけられて美歌夫人に責められている。浴衣の紐がS氏の口に喰い込んで呻めき声だけが響いている。

ベッドの間のジュウタンに坐って、二人のプレイを見守った。

どうもいけない、これ以上くわしく書くと編集長が心配してしまう。

発禁になってしまったが、「F6セブン」

の松浦促郎の「紋蝶四郎欲望帖」には、蝶四郎と弓絵の行動を見つめ、そのあと始末などをする上田という男がでてくる。

くわしく紹介出来ないのが残念だが空想していただきたい。

今年の夏、美歌夫人のマンションでお会いしたとき、上田にあたる妙齡の女性がひかえていたのに驚いた。

鎖で手足を天井から吊るされた私を責めたのもその婦人だったが、また、そのプレイを見ていて、お二人の世話をしたのもその婦人だった。

美歌夫人が私の口にしぶきを立てているとき、その婦人は私の足元に身を投げかけていた。

S氏が美歌夫人の男奴隷ならば、婦人は女奴隷の役を無言で実行していた。四人のパーティが終って、婦人のベッドに私が直進したのはいうまでもない。手足の自由を取り戻せばこっちのものだ。

床に坐って、S氏と美歌夫人を見ながら、一瞬、その婦人のことが私の頭にひらめいたのである。婦人はもちろんいない。

今、ここには、私、一人しかない。

特出し拝見

八月号に秋山夫妻のカメラハントが発表されたが、もしや上京しているのではないかとこの六月、一日と六日の日のショウのかわり目毎に、場末のミュージックホールにせつせと通ってしまったが、残念ながらまだ秋山夫妻の残酷ショウにお目にかかっていない。

その日、ステージにアゴをのせて見ていたと思し召せ。何枚も髪を重ねた薄もののネグリジェをまとったストリッパーの、サラ四才馬を見ているようなひきしまった流麗な肢体は圧巻で、私のM的感觉をくすぐるには十分であった。

三曲目で純白のゴージャスなネグリジェを脱いだ。おやつと思った。穿いているはずのツンパを穿いていないのである。腰のまわりのヒラヒラは、飾りだけであった。あまり暑いから、ツンパを略してしまっただけでもないだろうが、このスタイルは最高に刺激的なのである。

ただ、一本の糸だけが認められた。一糸をまとっているには違いない。

踊りながら、彼女は近づいた。私の目の前で勢よく足をあげた。眼をこらす間もない。彼女はすぐに足を下ろした。

私の頭に、ステージにアゴをのせて見ていた私の頭に、彼女のプラットフォームつきのかかとの高いハイヒールが降りた。踏んづけられたのである。

足台であった。

三十人ばかりの観客がどっと笑った。この珍妙なるカッコを演出されては、笑うのはあたりまえである。私の頭を踏みつけながら彼女は私を見下している。

「ついでに、シャットと、ひっかけてやれ」中年の声が叫んだ。望むところだが……。

その日、ステージにアゴをのせて見ていたと思し召せ。五、六匹の蛇を髪飾りにしたスネークショウは、蛇嫌いにはとても見てもらえない。彼女、片手で一匹つかんで振り廻すものだから、客は気味悪がって逃げた。う。縞蛇でしょう。私も蛇は大嫌いです。

その蛇姫様が、こともあろうに逃げおくれた私の眼の前にかがんだのである。私の肩に蛇が触れた。蛇は嫌いだが、それ以上に近間

の蛇姫様のほうが魅力的であった。経験者なら神秘的な感動を呼ぶことを知っているだろう。

こうなつては、蛇なんかを気味悪がつてはいられない。

「眼鏡がくもるわよ」

と彼女にいわれたつて、そんなことにかまっちゃいられない。

首すじに蛇が触れる。蛇好きの人は少いから、たいていの客が逃げてしまう。それが面白いのだが、こちらが逃げないから、彼女も意地になつたらしく、ジョジョに接近してくる。

横を向くと彼女の豊満な太腿にキスしかね

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

ないから動く訳にはいかない。前方をグッとにらんでいるより道はない。息をつめて不動明王に化ける。

と、彼女の髪にとぐろを巻いていた一匹の蛇が、すつと顔のところの下がつてきた。ペロペロと赤い舌を吐く。しかし、そんなことにかまっていられる余裕はない。眼の前の美しき脈動に気を奪われた。すばらしい。

姫様が蛇の鎌首をつかんだ。

「わたしの可愛い蛇にキスしなさい」

じょうだんでしよう。いやですよ。

でも、ダメでした。

あまりにも聖なる蛇様は接近しすぎていたので、わたくしの口に、蛇の鎌首が入ってし

載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮て御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

まったのです。キスなんてものじゃない。あ、あ、あ。気味悪い。しゃぶっちゃった。わあっと場内がどよめいた。まっくらになった。何か顔をおおったのである。

蛇のキスは無気味だったわりに味が無かったけれど、彼女のキスは刺激的なわりにとてもしョッパかった。汗をかいているのだから無理もない。

初めから首すじにいたきりの蛇が痛い。

「いたいよ」

といったら、

「蛇がアンタを気味悪がつて、鱗をたてたのよ」

ホントかしら。その蛇は一匹だけ縞蛇ではなかった。小さい。

終曲が近づいた。彼女はしばしお祈りをさげると、蛇をつまんだ指をいきなり、わたくしの唇にさっとなすりつけた。これまたショッパイ。

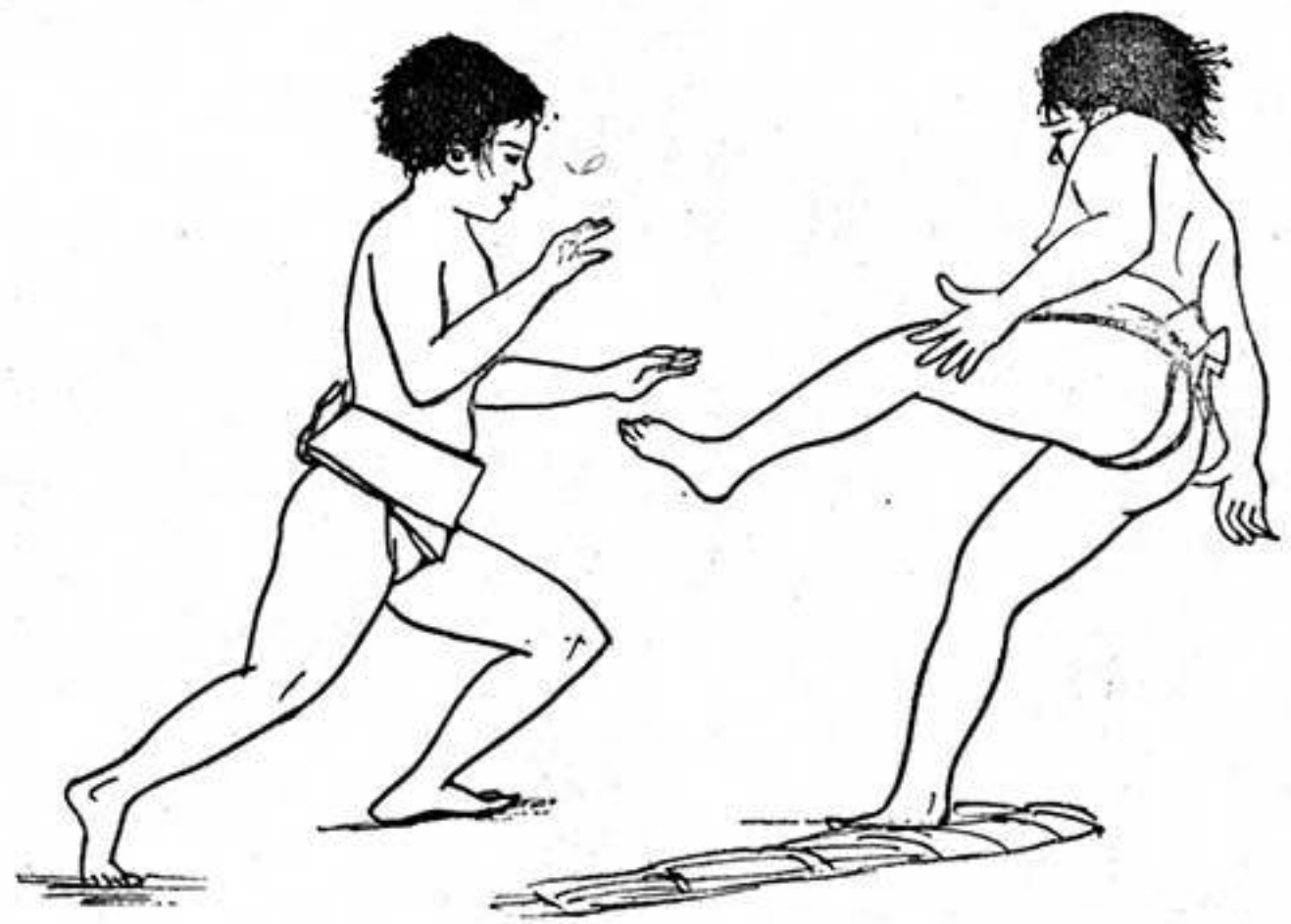
「スケベ」

と彼女がいった。

「スケベだから全ストを見に来ているの」私は、答えた。

スケベ、これまた、けっこう。

(終)



△女相撲物語▽

花の女斗美たち (13)

奮斗士 好太

れてきた今日までのことを映画を見るような
気持で思い出していました。

はじめてハダカになって、マワシを身につ
けた日のこと……。

ひろげて前に当てた分厚い布地の肌ざわり
に、まるで電気にでもふれたように激しいシ
ョックにおそわれて、思わずブルッと身ぶる
いが出たものでした。

そして、それを股を通しておシリに引き上
げながら、恥ずかしさとうれしさがごっちゃ
になって、急速調の心臓から送り出れる血液
が、それはものすごい速さで全身の血管の中
を駆けめぐって、カッと頬が燃え、目の前が
一瞬、赤く一色に染まって見えたことを、は
っきり覚えているのです。

それから毎日、基本、基本の繰り返しで
シゴかれた私たち新人の特別訓練。

そして、その課程をどうやら終えると、少
しのようしゃもないキビシイぶつかりげいこ
が待っていたのでした。

待ちかまえている上級生の胸へぶつかって
行くのも、最初のうちは、何だかコワくて、
それに肌と肌がふれ合うということも、く
すぐったくなって力が入りません。

頭をつけた上級生のひとの胸の汗のにおい
にも、生々しい生命の営みに直かに触れたよ
うなショックを感じます。

それまでは、いたずらして取っ組み合いみ
たいなことをしたことはあっても、こんな真
剣な一対一の勝負など身近な世界にはないも

塩をにぎって土俵の向う側を見ますと、相
手のひとは、まだ立ち上がったそのままの位
置で、今度は両ヒザに手を当てがって、屈伸
運動みたいなことをやっています。

「何をグズグズしているのかしら。ひとを待
たしておいて……早く上がればいいのに」

と、ちょっと腹を立てながら、その出を待
って立つ間に、私はふと激しい練習に明け暮

のでした。

裸と裸の一騎打ち——もう誰も頼ることはできません。

もう恥ずかしささえもふり捨てて、待ち構えている相手に向かって突進するのです。

待ち構えている相手は、もう上級生でも親しいひとでもありません。どうしても倒さなければならぬ敵なのです。

ぶつかっては転がされ、すぐに起き上がってまたぶつかって行くのを、何の手加減もなく突き飛ばされ、投げころがされ、そしてちよつとでも起き上がるのが遅れたりすると、たちまち、まわりから激しい気合いがとんでくるのです。気が張っているせいか、投げ転がされ、突き倒されても、そんなに痛さは感じませんけれど、息は切れ、目はくらみ、胸の中はくやしきでいっぱいです。

マワシひとつの裸身が水を浴びたように汗にぬれ、砂まみれのからだ中の関節がバラバラになり、心臓が口からとび出すかと思うほどの苦しきなのに、情を知らない上級生たちの気合いが遠慮なく声のムチになって浴びせかけられるのです。

汗と涙にかすんでしまう目には、ふだんはやさしいお姉さんのような今井さんや笠原さ

んの顔までが、鬼のように見えたものです。

もちろん、こんなことは私ひとりだけのことでではなくて、ヒロちゃんや津野さんや、そして松田さん、西田さんのみんなが、泣きながら上級生の胸にぶつかって行ったのです。

そして、私たちにきびしい指導を与えている上級生のひとたちだって、みんなこうした苦しい練習を経ってきたのです。

この苦しさには負けずに耐えて、それを乗り越えてきたひとたちだけが、名誉ある選手の青いマワシを身につけることが許されるのです。でも、全力を出しつくしたあとの気持はほんとうに素晴らしいものです。

この情知らずのコワイ上級生から放免されて、解け落ちそうなくらいに乱れたマワシさえ締め直す気力もなく、自分のからだか、ひとのからだかわからないほどにヘトヘトに疲れ切っても、私たちの若さと、全力を出しつくした満足感がそれを支えてくれます。

かわって土俵に出たひとの練習を眺めているうちに、また新しい元気が湧いてくるのはつきり感ずることができるのでした。

そして、さっきまでの苦しさも忘れて、突き転がされ、投げとばされてヘタばっている仲間の姿に思わず声援を送ったり、

「あそこは、ああやったら……」

などと、胸をはずませるのです。

そんなことを思い出にふけている私の耳に、審判のひとの声が聞えたようでした。

ハッと現実にはききもどされた私の目に、塩を取ってこちらに向き直った相手のひとの姿が映りました。

私が思い出にふけていたのは、ほんの五秒か十秒くらいの短い時間だったのでしょうが、思い出から急に現実に引きもどされた私には、この会場の人の目が全部、私ひとりに注がれているように思われて、マワシひとつの身には、その視線が一本一本、全身の肌を突き刺す針のように感じられるのでした。

「ハイ、見合って！」

審判が私たちふたりを、土俵の中央へさしまねきます。

塩をパッと形よくまきながら土俵の中央へ進み出て、まずそんきよの姿勢。

両ヒザがガクガクして、ちっとも力が入りません。伏し目で見る向うに、浅黒い肌の相手のひとの胸から下だけが見えます。

引き締まった肌は、どこも、すこしのたるみもなく、ピンと張り切った太腿はまるでバネが入ってでもいるようにたくましく、キリ

りと締め込んだ緑のマワシが、スゴク美しい色どりを添えているのでした。

見つめているうちに、だんだん気圧されてさっきまでの自信がグラつきます。

「敗れるかも知れない」

ふっとそんな思いが頭をかすめ、おなかの底の方に何かつめたい空気が流れ込んだような気持になるのです。

そんな私の耳に審判の声が入って、まず第一回目の仕切りです。

そんきよの姿勢から立ち上って、足を開き腰を落として構えをとろうとする、まだそんなところへ、相手のひとは、まるでマラソンのスタートみたいな恰好から、いきなり突っかけてきました。

これでは、受けることもできません。

相手のひとの手が私の体にふれる前に、審判が間に入って制止しました。

いくら機先を制するといっても、ろくろく仕切りの構えをとらないで突っかけてくるのですから、ヒドすぎます。

「まだ構えに入りもしないのに……、ムチャクチャだわ」

私は腹が立ってきて、それと同時に、こんなひとに当たった不運を嘆きました。

「相撲のルールなんか知らないんだわ、キツト……」

審判に止められたそのひとは、それがクセなのか、さっき名前を呼ばれて立ち上がった時のように、ちょっと中腰になると両手でグイと前マワシを押し上げ、その次にはおシリへ片手をまわしてタテミツのあたりを直し、そして今度は

「トン、トン」と、軽く足ぶみをするなど、せわしなく、からだを動かすのでした。

「ひとりで相撲してるみたいだワ、コセコセして……」

私は少しばかり氣勢をそがれたような気持になって、そんな動作を眺めるのでした。

タイミングが合わないので、気合いが入らないのでした。

私はいつの間にか汗ばんでいたのひらを横マワシのあたりへこすり、うしろの結び目に手をまわしてグツと引き上げてみました。

ぶ厚いマワシの肌ざわりが股にこころよい刺激を与えてくれます。

そして、さっき呼ばれて土俵へ上がってきた時には目に入らなかった審判のひとの顔も落ちついて見られるようになりました。

「どうやら、アガらないで、すみそうだワ」

と、もう一度そんきよの姿勢に入りながら相手を見ますと、上気した顔のキツイ目にピツタリと視線が合っていました。

真正面からニラムように見つめてくるその視線の強さに「ハッ」として、思わず目を伏せます。そして背筋のあたりにヒヤリとしたものを感じ、表情のコワばるのが自分でも、わかりました。あとから考えてみれば、私はもうこの時に敗けていたのです。

相手のひとの気迫に、完全に圧倒されて目を伏せてしまうようでは勝負になど勝てようはずはありません。

すっかり弱気になった私は、もう相手のひとの顔を見ることができないのでした。

伏目になった視線が、ようやく胸のあたりをうかがいます。

今井さんをすこし小型にしたような、ガツチリした体格に、胸のあたりは目立つほどではありませんが、ピンと張り切った肌は、きたえ込まれた筋肉の発達を包んで、息づかいにつれて上下に動くのでした。

さっき、津野さんの相手のひとのように、ダブダブした感じはどこにもありません。

パンと張った腰に、キリリと締め込まれた緑色のマワシも、スキのない感じですよ。

どこへ目をやっても、不安がつのるばかりです。

「もう勝負なんかどうだっていいわ。何でもいいから、早く終らせて……」

私は、すっかりミジメな気持ちになって、

「でも、このひとのお乳だって、そうボリュームのある方じゃないわ」

などと、ぜんぜん関係のないことを、頭の片すみでフツと考えたりするのです。

こんなことを書きますと、ずいぶん長い時間のように見えますけれど、ほんとうは、そんきよの姿勢で向かい合う、ほんの短かい時間のうちなのです。

そして、二回目の仕切り。

この時もまた、構えに入ろうとすると、もうつかけられました。

けれども、一回目の時よりも私の構えがすこしできていたのと、相手の人の気迫にさそい込まれるように、

「早いじゃないの」

と、ちょっと腹立たしさを感じながらも、つい中途半ばな体勢のままに受けてしまったのでした。

「アッ、しまった。受けるんじゃないか」という思いが、チラリと頭の中をかすめま

したが、その時はもう手おくれで、猛烈な突きを肩口のあたりにまともに受けて、アッという間に土俵ぎわまで飛ばされていました。

ヨロヨロと腰がくだけそうになったところへ、もう一発止めの突張り―これは軽くポンと押されたくらいだったのですが、何もしなくてもころぶところだったのを突かれたのですから、たまりません。

尻もちというよりも背中からひっくり返って、それでもまだ止まらずに、頭から一回転しながら、まさかさまに土俵の下まで、ころげ落ちて行ったのでした。

最初はおシりに冷たい地面の肌ざわりを感じ、そして、それが背中一面に移動すると、私の視野の中で、逆立ちしたまわりの建物がゆっくりと逆転して行くのを映画でも見ているような気持ちで眺めるのでした。

そして、さっきまで座っていた場所のすぐ前まで、まるで計算してワザとやったように突き飛ばされてころげ落ちて、もどってきたというかたちなのでした。

ドッと笑い声がわいたのが耳に入って、私は顔がもえ上がるかと思うほどに、カーッと血がのぼってきて、もう顔を上げることさえできません。

誰かが手を引いて助け起こしてくれましたが、それが西田さんだったのか津野さんだったのかを確かめるゆとりもなく、土俵へもどって一礼するのも夢中で、下を向いたまま逃げないように控えにもどりました。

腰を下ろしてから、まだ、みんなの目が私にだけ集まっているように感じられて、恥ずかしさに全身がはてる思いです。

せめて服でも着ていればまだ少しは耐えやすいのでしょうけれど、マワシひとつの裸身には、みんなの視線が針を刺されるように、ひとつひとつの毛穴からにじみ込んでくるのでした。

こんな裸のまま、みんなの取り組みが終わるまで、並んで腰を下ろしていなければならぬのが、まるで、昔の罪人が、大ぜいの前に裸にむかれて、さらしものにされているような、みじめな気持ちなのでした。

からだに付いた砂をはらい落す気力さえもなく、うつむいて足もとの土を見つめる、その視線がみるみるボツとかすんできて、涙が一つぶ二つぶ頬を伝って流れ下って行ったかと思うと、あわてて目ばたきした次の新しい涙に押されて頬をはなれると、足もとの砂に吸いこまれて行きました。

「あんなのヒキウだわ」

「そうよ、そうよ。あれが通るんだったら仕切りなんかいらないわ。相手より先につかけた方が勝ちなんだから」

と、不満をぶちまけるヒロちゃんや津野さんの声も、何か遠いところの話みたいにか聞えてきません。

「ア、やり直しになるらしいわよ」

松田さんの声がしました。

私はすっかりのぼせてしまい、それに転げ落ちてからは下を向いたつきりでしたのでわからなかったのですが、私がみじめな形で突き落された時、すぐに笠原さんが仕切りの不公平について抗議を申し入れたのでした。

私はそんなことも知らず、控えに戻って腰を下ろしてしまっただけですけど、その時は笠原さんや審判、それにF高側の人の間で討論がかわされていたのです。

ですから、興奮しやすいヒロちゃんや津野さんが、負け犬のようにすっかりしおれて私の傍で不公平さを非難している時、落ちついている松田さんは、その話し合いを注目していたのです。

そして話し合いはどうかやら私たちの取り組みをやり直すことにまとまったようでした。

けれども、もう私にはこれ以上、勝敗を争う元気など、とてもありませんでした。

一刻も早くマワシを解いて、この場からぬけ出したい気持ちでいっぱいなのでした。

ついさっきは、ひと巻きひと巻きすることに、

「どうか勝てますように……」

と、お祈りをしながら、しっかりと締め込んで、私の腰のまわりを、分厚い布地の力強い肌ざわりで、がっちり支えてくれていたマワシなのですよ……。

そんなマワシまでが、いまではもうすっかり私を裏切って、ただ重苦しいだけの圧迫で私のさまざまな敗戦を責めるのでした。

おなかのなかかえ返るようになってやきさと闇の中へ、たったひとりで、ほうり出されたようなさびしさ……。

そして悲しさが胸にツーンと、つき刺さってくるのでした。

おシリの下から地面の冷たさがにじみ込んできて、股のあたりのたてミツの肌ざわりが私の恥ずかしさを一層かき立てるのです。

私は石のように、からだを堅くしてジッとこんなメチャメチャな気持ちをこらえました。

「どうしたの？」

呼ばれても立ち上がろうとしない私に、笠原さんが近寄ってきました。

「ダメです」

と、云おうとしても泣き声になりそうで、私はただ首を振りました。

「あんなの、勝負じゃないんだから。さあ、もう一度、やるのよ」

笠原さんは、私の手を握って立たせようと思いました。

「やんなさいよ。あんなひとくらい、あなたひと突きてたくさんだわ」

「ナニよ、あんなひきょうなことして……」

ヒロちゃんや津野さんも、そんなことを私の耳もとでささやきながら、うしろから背中を押したり、マワシのあたりに手をかけたりして私を立たせようとしてくれるのでした。

でも私は、頑固に拒みました。

私にしても、それはもうやり直しをしたいのです。

いくらなんでも、相手のひとの体に指一本ふれないうちに土俵から転げ落ちるなんて、あんなみじめな姿のままでやめるのは我慢できないくらい、胸のはり裂けるくらいにやしいのです。でも、こんな泣き顔を見られるのは、もっと恥ずかしいのでした。

「いくら親切にすすめられても、ベソをかい
てまで、やり直しをしなくても……」

そう思って

「できません、わたし」

私は、ようやくそれだけ云うと、すすり上
げてしまいました。

うつむいた目から、また涙が、ふたつみつ
こぼれ落ちて砂ににじみました。

「そう、困ったわね」

笠原さんはちょっと考えていましたが、

「じゃ、不戦敗になるわよ。いいわね」

と云って、私がうなずくの見て審判席の方
へ行きました。

「とうとう……決まっちゃった」

そう思うと、また新しい悲しみがこみ上げ
てきて、涙が二粒三粒、うつむいた頬から足
もとへ落ちて行くのでした。

そして、そんな私をのけものにして、また
対抗戦が再開されました。

西田さんが負け、松田さんが勝ちと、正式
な勝敗の上では2対2だったのですが、私が
不戦敗になっているので結局2対3で、こと
しの凱歌はF高にあがったのでした。

取り組みを終えて、土俵をはさんで全員が
礼を交し、またさっきの控え室にもどりまし

た。

「あゝ残念、アタシもういちどやりたいワ」

室へ入るとたん、津野さんが大きな声でく
やしがりました。

きわどい勝負―それも相手の奇襲戦法にか
かって、ほとんど力を出さないうちに敗けた
のが、くやしくてたまらないのでしょう。

「あれでよかったのよ」

さっそく、ヒロちゃんが口を出しました。

ヒロちゃんの方は、苦しい勝負をネバリ勝
ちしただけに、津野さんとはアベコベに、ス
ゴクごきげんのようにでした。

「あんなデブちゃんの下敷きにでもなったら
あなた、そんなにしていられないワヨ」

「どうなるっていうの？」

津野さんがムツとして云い返すのへ、ヒロ
ちゃんはニコリともしない顔で、

「まあ、いまごろは救急車のごやっかいでし
ようネ」

ゲラゲラとみんなが笑い出して、津野さん
も怒るわけにいかず、

「ヒロちゃんにはかなわないワ。まったく口
だけは大了たもんだワネ」

「アラ、口だけじゃないワ。あなたさっきの
相撲みなかったの？あのネバリは高校選手権

にだってリッパに通用するワヨ、ねえニシコ
そうじゃない？」

ヒロちゃんは図に乗って、傍にいた西田さ
んにまで同意を要求するのです。

その西田さんは、自分よりひとまわりも大
きい人を相手に大奮闘して、結局、最後には
吊り出されて負けはしましたが、満場を沸か
すような大相撲だったのです。

激しい投げの打ち合いやら、それを残して
から大きな相手のひとの力まかせのつりをけ
んめいにこらえたのですが、ついに土俵から
足がはなれたのでした。激しい勝負を物語る
ように彼女のマワシはすっかりゆるみ、たて
前禪なども伸び切っていました。

「そうね、大したもんだわ」

と、相変らず西田さんの口数は少ないので
したが、ヒロちゃんは、

「ほら。ごらんなさい。このマジメなニシコ
さえ認めてるんだから、あたしの強さはホン
モノよ。ネエー」

と西田さんの顔をのぞきこんで、
「でも、あなたも相当だわ。あんな大きいひ
とを相手にして堂々と立ち向かうんだから……
実力から云ったらあたしの次くらいかな？」
「いいかげんになさいよッ。あんたのネバリ

が良かったんじゃないくて、相手のひとの方が軽かったのよ。うぬぼれるんじゃないのッ」

中川さんに云われて、ヒロちゃんは首をすくめ、今度は津野さんが真ッ先に笑い出します。

取り組みをする前の、何か胸につかえていような落ちつかない気持も消えて、勝ったひと、敗けたひとのちがいはありますけれどおたがいに張りつめた緊張感から解放されたことから、自然みんなの口が軽くなるのでした。

でも、私ひとりだけがそんな仲間にも入れず、暗い気持ちに囚われているのです。

「とんでもない恥をかいちゃった……。もう相撲部なんか居られないワ」

そう思うと、また胸がつまって涙が出そうになります。

キツチリと締め込んだマワシまでがうらめしく、

「こんなマワシを締めたりして、いい気になっていてバチが当たったんだわ」

と、ほかのひとたちが浮き浮きしてる中にくやしさと悲しさを噛みしめるのでした。

ドアが開いて笠原さんが入ってきました。

F高のマネジャーのひとや審判のひとたちに、あいさつをしていたのです。

部屋へ戻ってきた笠原さんは、みんながまだマワシ姿のハダカのまんまで、おしゃべりをしてるのを見て、

「さあ、帰るわよ。いつまでハダカでいるつもりなの？」

と、キリのないおしゃべりにピリオドを打ちました。

おしゃべりを止めたみんなが、マワシを解きはじめます。

「でも今日は、スコアは3対2だけど内容はだんぜん、わが方の勝ちよネ」

と中川さんはごきげんでした。笠原さんも

「そう、今まではF高を目標にしてやってきたわけだけど、もうその必要もなくなったらいいわネ。大きな声じゃ云えないけど」

と、おしまいの方を小さい声で云って、ちよっと首をすくめました。

みんながクスクス笑います。

中川さんも、

「今日なんか、むこうの怖がってたのがハッキリわかったワ」

のみたいだったわ」

「おたがいに初めてなんだから、ビクビクした方が負けよね。とにかく上できだったわ」

笠原さんのおホメのコトバに、みんなは晴れ晴れとした顔を見合わせましたー私だけを除いて……。

「たのむわ」

とヒロちゃんが、そんな私にちょっと遠慮するような様子で背を向けました。

うなずいて、そのマワシのはしを解きにかかりますが、その指先に力が入らず、さっき私自身が締めてあげた結び目が、なかなか解けないのでした。

横目で私の顔をうかがうヒロちゃんの視線を意識しながら、私はまた悲しみがこみ上げてきます。

マワシをはずしたヒロちゃんの色白な腰にうす桃色のあとが残っています。

そして、そのあとが消えてしまっても、彼女の肌には、今日の勝利の自信が、目に見えないマークとして残ったことでしょう。

めっきり肉づきがよくなったヒロちゃん。もともと巾広い体格だったところへ、厚味がついて、すっかりたくましい感じになったのでした。

そして、激しい練習にきたえ上げられた筋肉のすみずみにまで神経が行き届いて、彼女の動作につれて張り切った活動をするのです。

モリモリと肉のついた腰にキッチリと締め込んだマワシがすごく魅力的なのです。

やっぱりマワシを締めるには、ヒロちゃんくらいのポリュームがないと似合わないのかしら、と思うのです。

松田さんも、ヒロちゃんよりは太柄なのですが、どっちかというところ、スラリとした体格なので、マワシのほかにだってまだ似合うユニフォームがありそうな感じがですが、ヒロちゃんは、マワシが全く身についているのです。

プリプリと張り切った丸いおシリのポリュームは、思わずさわってみたいほどの魅力があるのです。

小林さんのおシリみたいな圧倒されるような大きさはありませんが、そのかわりもっと可愛いくて形がよいのです。

そして、マワシを締め込む時などは、腰にひと巻きしてギュッと引っぱる私の手に、ヒロちゃんの筋肉の弾みが伝わってくるのです。

プリプリした手ごたえに、つい手に力が入りすぎます。

「イタイワよッ：もちよっとゆるくしてッ」

ヒロちゃんが抗議しますが、

「文句を云わないでッ。あなたのおシリにはこのくらいにしないと締まらないんだから」と、ますます力をこめるのです。

これは、ほんとうにそうなのでした。

小林さんなどの時には、ひと巻きふた巻きしてギュッと締め込むのが、まるで小林さんの腰のあたりの肉に埋まりこんでいくような感じでグウーッと締まるのですが、ヒロちゃんの場合だと、ゴムマリにひもでも巻きつけるみたいで、うまく締まらないのでした。

小林さんは、大きなからだに似合わず、なかなか器用な方なので、マワシを締める時などでも、手伝っている私たちの引っ張るのにうまくタイミングを合わせて腰をひねってくれるので気持ちがいくらいグイグイ締まってこんな強く締め込んだら痛くないのかしらと思うくらいなのですが、小林さん自身は、そんなでないと気に入らないらしく、腰のまわりにマワシが埋まりこんでみえるほどに、きつく締めているのでした。

それに比べるとヒロちゃんは、不器用なの

か、まだうまくないのか、手伝っていてもタイミングが一致せず、気持ちよくギュッと締まって行くあの感じがなかなか得られないのです。自分ひとりで勝手に締め込んで行くような感じなので、手伝っているのではなくて、ただマワシを引きずらないように持たせられているだけみたいな感じなのです。

そのくせ、こちらのタイミングがうまく合わない、すぐに文句をつけたりするので、こちらもつい腹が立って思いつき、きつく締め込んでやったりするのです。

小林さんが、いくらきつく締め込んで平気な顔をしているのにくらべて、ヒロちゃんは、口ではきっちり締めてくれるように云っているくせに、実さいには少しユルフンぎみの方が好きらしく、注文どおりにきつくしますと、たちまち悲鳴をあげるのでした。

私たちの仲間のうちでは、ユルフン組はヒロちゃんと津野さんのふたりで、あとの松田さんも西田さんもきつく締めるのが好きなようでした。どっちかというところ攻撃型のひとがきつく締めているようなのですが、これは、敵にマワシをとられるとどうしても相撲が長びきますから、一気に勝負をつけたいひとはなるべくきつく締め込んで、相手の指先がち

よつとくらいマワシにかかっても、すぐにはひけないようにするのです。

津野さんもヒロちゃんも、くい下がり戦法です。自分のマワシをとられることにもそんなに気にしないのかも知れませんが、それにしても、やはりマワシをとられれば不利なものですから、きつく締め込んでいた方がいいと思うのですけれど……。

それに、相撲が長びいて、マワシがゆるんだり、ずり落ちたりしては、ほんとうにみっともないし恥ずかしいので、私は思いつ切りおなかをへこませて、息苦しくなるくらいにおへその下へカッチリと締め込んでいたのでした。

……でも、そんなことも、なんだか遠い昔のきごとのような気持ちにしかたれません。

そんなにして張り切っていた私と、今こうやってすっかりショゲかえっている私とが、まるつきり別の人間であるようにしか思えないのです。考えてもみなかったようなみじめな敗戦……。

突き飛ばされて土俵の下へ転げ落ちた時の背中に触れた土の感触が、たくさんの針を当てられたような感じで思い出されてきます。ドツと湧いた笑い声が、耳の奥の方でコマ

クにシミついているように響きます。

そして、津野さんや、西田さんや、ほかのひとたちが、何をおしゃべりしているのか、何を笑っているのか、音声の消えたテレビを見るように感じられてくるのでした。

ヒロちゃんが、はずしたマワシを片づけているうちに、私はひとりでさっさと、自分のマワシを解き出しました。

もう、こんな先輩たちの歴史のにじんであるマワシを、身につけていることが恥ずかしくて、たまらなくなったからなのでした。

うしろの結び目を解くと、「ズルッ」とマワシがゆるんで、腰のまわりをしっかりと締め上げていた重苦しさが消えます。

思わず「ホッ」とため息がもれて、気のゆるみが目がしらを熱くします。

泣けてきそうになるのを一生けん命にこらえながら、ワザとらんぼうにマワシをはずしてゆきます。

「アラアラ、下へひきずって……よごれちゃうわヨ」

ヒロちゃんがマワシをバッグへ入れながら云いました。

「ちょっと待ってなさいよ。あたしが手伝ってあげるから」

と云う声も聞えないふりをして、私はさっさとひとりでマワシをからだからはずしてしまおうと、下着をつけ服を着てしまいます。

だれの顔も見ず、そしてひとことも口をきかない私に、ヒロちゃんもさすがに手を出しかねて、だまって見つめていました。

そんなヒロちゃんに、私も心のなかでは、「悪いなア」と思っているのですが、からだの方が、そんな私の気持と反対の行動をとってしまうのです。

「まだ気にしてるの？」

ヒロちゃんは、そんな私の態度に、なぐさめの言葉をかけてくれるのでしたが、私はそんななぐさめをして貰うと、かえって泣けてきそうで、

「いいじゃないの。かまわないでちょうだい」と、らんぼうな言葉で答えるのでした。

「バカねエ」

ヒロちゃんも、さすがにムツとしたらしく何か云いかけましたが、その時、笠原さんが近寄ってきました。

「なにモメてるの。ふたりとも、そんな顔してさ」

「なんでもないんです」

ヒロちゃんは返事をしましたが、私は、だ

まって下を向いていました。

すると笠原さんは、

「テルちゃん、きょうはかわいいそうだったわねエ。せっかく張り切っていたのに」

私は、あんなにすすめてくれたのにとうとう正式の勝負をしないで敗けにしまいましたのを叱られると思っていただけに、こんなにやさしくなぐさめられてびっくりしました。

きっと叱られるでしょうし、どうせ私なんかもともと相撲部なんかへはいるのが間違っていたのだし……止めますと云ってしまえばどんなにサバサバするかしれない……。

そう考えていたのをはずされて、やさしい言葉をかけられた私は、それまで胸の奥にこらえていた悲しみがいっぺんにこみ上げてきて、固く合わせた歯の間から、おえつがもれるのでした。

「いいのよ、こんな時は泣いちゃうのよ」

笠原さんは、やさしく私の肩を抱いて、

「誰だって一度くらいは、あんな失敗はするもんよ」

と、なぐさめてくれるのでした。

私は、とうとうこらえられなくて、笠原さんの胸に顔を埋めて声をあげて泣き出してしまいました。

「運が悪かったんだワ」

津野さんの声もします。

「でもね」

と笠原さんは、

「泣いてもいいけど、反省もしなくちゃダメよ」

と、少しあらたまった口調で、

「そりゃ、あんな仕切りからいきなり突っかけてきたってことは相手のひとが悪いわよ。だけど、あなたの方だってはつきりしない態度だったわよ。受けるんだか受けないんだかはつきりしないんだから、あたしだって突き飛ばしちゃうわ。正直なところ抗議はしてみただけど無理じゃないかなと思っていたのよ。まあ顔合わせの試合だから取直してことにあったけど……。だからテルちゃんだって責任はあるわけよ」

私はなにも云えず、ただうなずくだけでした。

「だからこの次から、あんなことにならないように気をつけてちょうだい」

と笠原さんはいつのまにかお説教になっていましたが、急に私の顔をのぞきこむと、「こんなことで相撲部をやめるなんて云わないでしょうね。あなたはホープなんだから」

私は完全に先手をうたれてビクツとしましたが、でもこんないい先輩に恵まれたこの相撲部をやめようという気持は消えていたのでした。

「また、がんばりましょうよ」

松田さんが手を握り励ましてくれました。

西田さんもニコニコしています。

すると突然中川さんが大声をあげました。

「エーコノなんて恰好してるのッ」

びっくりしてその方を見ますと、私のことに気をとられた津野さんが、はずしたばかりのマワシを手にして、パンティもはかない素ツ裸のまま話の中に首を突っ込んでいたのでした。

「パチン」と中川さんにおシリをたたかれて津野さんは、

「キャッ」と悲鳴をあげると、あわてて自分の服のところへ駆けより、モゾモゾとパンティをはき始めました。

どっと笑い声が湧いて、緊張した空気がほぐれ、私もようやく笑顔が浮かんだのでした。そして、この次にはきっと悔いのない勝負をしよう。あの人を必ず敗かしてやろうーと、青いマワシに誓うのでした。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

背

信

の

記

堀

夏

彦

(由里という女)

人間誰もが、一生に一つや二つの秘め事をもつと言うが、私にも御多聞にもれずそれがある。しかし由里との事だけは一生私一人の肚におさめておくつもりだったが、齢四十を越して、そろそろ秋風を感じ始めたのと、今までどんなに苦しくても、自分の心に鞭打って圧えてきたのが、すでに無意味に思えてきて、一気に吐きだしてしまう決心をした。

いや、それよりはっきり言うとは悪性の心臓疾患が昨年、精密検査により発見され、いつこの世からおさらばするかわからぬ状態であることを悟るに及んで、そろそろ身の整理をしておく必要に迫られ、日記はとも角、由里との情痴やその心の苦悩を、大学ノート六冊に綴ったのは焼却しておきたい。それに代えて一つここで彼女との顛末を吐露し、さっぱりしておきたいというのが、本当の気持ちだろう。

× × ×

道楽らしき事も人並に？ 知り、時に偽悪者ぶり、相当数多く恋愛遊戯をやった私だが親爺の「素人娘に手を出すな」の処世訓をジメクスとして守ってきた。それが由里の出現によって見事に崩れ、それ以後の私の生き方——女性への対し方が大きく変っていった。だが、私の半生の中で、本当に愛した女性、



いつも受けてたつ私が彼女にだけは能動的にぶつかり、奪い奪われ、与え与えられた女性には由里だけだったかも知れないと今はっきり自覚できるのだ。単なる浮気や遊びでないものだけに、当時の夏彦は常軌を逸し、狂ったような状態だった。一人の女を手に入れることは易しいが、愛するということがいかに苦しく、妻子ある男が、妻以外の女性を愛することのいかに罪深いことを肝に銘じたのである。

しかも由里は妻の従妹に当り、自宅には結婚後も始終出入りしていただだけに、表現できぬ苦しさがあったのだ。妻とは幼い時から気の合ったという由里。知性的な細面の顔に、勝気そうな切れ長の美しい目をもつ彼女は、妻のおっとりした、しかも女大学を地でいくような堅い性格のどこが合うのか、よく泊っていったりもしていた。夏彦には兄貴として対し、よく文学少女じみた議論を吹っかけたり、時折不良じみた唐突なことを言ったり行なったりしたが、私は妹として対し、軽くあしらっていた。又出不精な妻をよく引張りだして芝居や映画に行っていたが、妻がしぶっている私を誘う。私を信じきっている妻はそんな私に自分から由里との相手を勧めたり

したのが、一層私と由里を接近させ、ついにあんな結果になってしまったともいえよう。平凡で常識的でのんびりした妻と、文学趣味をもち、ピンピン響くような神経の多少不良っぽい由里。そろそろお茶漬の味に飽きた私が、妻にない女の一面を由里に求めている。これが当時の私の心の深奥にひそんでいた偽らざる心理だったのだろう。

(ある情痴の追憶)

あれは約十年前、夏彦は三十そこそこ。由里が妻より三つ下だから二十才を過ぎて間もない頃の初夏、例によって妻にすすめられるようにして由里と日比谷の音楽会を聞きにいった日曜。有楽町で軽く食事をさせて帰し、折角の機会だから一人で羽をのばし上野あたりで一杯やっていたところとした。「どうせ兄上、まっすぐには御帰館にはならないんでしょ」ときた。

「ああ」

「飲むの？」

「うん」

「由里も、つきあおうかな」

「帰れよ。親爺がおこるぞ」

「かまわないわよ。あんな頑固親爺！」

「でも止めときな。俺の行くところなんか、由里さんみたいなの、お嬢さんの行くところじゃないからな」

「平気。そう言われると、よけい行きたくないっちゃった。連れてって！」

私は止むなく——のようにして、まず焼鳥のうまいと定評のある上野の縄のれん酒場に入った。枡でのませる日本酒を四、五杯空けただろうか。由里も、大衆酒場の雰囲気は珍しいのか、甘口の酒が口当りよいせいか、同じピッチで空けていた。でも顔には全然色がでず、むしろ青いほどに肌は輝いている。酔っているなと思ったのは、彼女が一度トイレに立とうとして立ち上ったときヨロヨロとした時である。切り上げ時だと感じ、その店をでると、

「お兄さん。このまま帰るのいいわ。踊りたい。この間お友達と行ったけど、フロリダってホール感じいいわよ。行きましようよ。昌枝姉さん、こわい？」と、からんできた。

「莫迦言うな。カアチャンのこわくない亭主がこの日本に何人いる。でも俺は平気さ。彼女、絶対信じているもの」

「それ、おのろけ？　じゃ、いいじゃない。行こう。ヘーイ、タクシー」

止まったタクシーの運転手の手前もあるの
で兎に角乗りこんだ。軀をもたせかけてくる
由里に何か生々しいおんなを感じ、危険な予
感もしたがホールで踊るぐらい何だ。無理に
断ったらかえって不自然で、いかにも由里を
一人前の女扱いするようでおかしいぞと、自
分に言い聞かせていた。

ラストまで一時間以上は踊ったろう。さら
めくダイヤグラスと楽器の交錯の中で、私の
神経は麻痺していった。渦の中心には濃厚な
カップルが殆んど動かず、熱い抱擁と感触に
しびれている。この時はまだはつきり由里に
野心をもった訳ではなかったと思うのだが、
夏彦のドンファン性は次第にその熱い渦の中
心にいつか由里を誘いこんでいた。いきぐる
しい抱擁の中で、ラストの螢の光がスローテ
ンポに感傷をゆさぶる。夏彦の心にふと悪魔
的な悪戯がひらめく。由里の両手をそれぞれ
彼女の腰でしっかり握り、そり返るような姿
勢をとらせながら、不意にすばやく唇を吸っ
たのだ。

五、六秒だったろう。かなり荒い動作で手
をふりほどくと、怒ったように足早にフロ
ントに行き、荷物を受取っている。彼女の気持
がかなり前から私に大きく傾いているのを承

知しながら、故意に、つかず離れず、小娘扱
いするのに彼女は焦れているのだと思う。し
かし今更こんな小便臭い娘とわずらわしい関
係をもつのが大人気なく思われ、酔いも手伝
ったがあんな行動にでて、それで彼女が恐れ
をいだいて去って行くなら、却って薬になる
――。

街頭にでて、新橋の駅にむかいブラブラ歩
き始めたが、由里の姿は見えない。(莫迦娘
奴！一生懸命、背伸びして大人ぶっている
が、まるっきり子供じゃないか。頭でっかち
のひよろひよろ娘。二度と俺の側に近づくな
！)

駅前のおでんやに入る。何となく後味が悪
いので飲みなおすつもりだ。二本目を手酌で
ついでいると、隣りの席に色彩と女の香りを
感じた。由里がニヤニヤしている。

「私にもおビールとって。おじさん、おビ
ールね」と、とぼけたように言う。

「何だまだウロウロしていたのか。お前さん
の方は私鉄だから電車、なくなっちゃうぞ」

「画のお友達の家泊っちゃうから平気」

「ちょいちょい外泊してんのかい。不良少女
め！」

「たまには親命をこらしめてやらなくては。

うるさいこと言ったら家出しちゃうわよ」

「俺がしかられるよ」

「音楽会でオサラバして、私が勝手に友達
家に行つて話がつきないので泊っちゃった
――。それでいいでしょ」

「それにしても、よく俺がここで飲んでるな
んてわかったな」

「フン……尾行して来たんだもの。面白か
ったわ」

「ひでエ由里さんだな。おこってる？ さっ
きのこと」

「兄貴も男ね。愛すべき男性だわ」

「家にきたとき、昌枝にペラペラよけいなこ
と云うなよ」

「言っちゃおうかな」

「莫迦！ 強迫すんのか」

周りにも客もいるので冗談めかせていたが
女同志の饒舌で妻にしゃべるかも知れないと
臍を固めた。

「よし言うなら言え。しかしもう絶交だ」

「莫迦！ 子供じゃないのよ私。誰がそんな
こと云える。兄貴、案外、憶病ね」

「ああ憶病だよ。昌枝を愛してるからね」

「もう言わないで！」

それまでの冗談調を破って強い真剣なまな

ざしで由里が叫んだ。私はハッとした。

由里の気持がわかっていただけに、これ以上彼女の心を弄んではならない。そんな女心の綾は、夏彦がさんざん経験してきたじゃないか。

× × ×

遂にホテルに入ってしまった。どちらが誘うでもなく眠い眠いを連発して、あれから五反田のGホテルにタクシーをとばしてしまった。画廊風の迷路のような、廊下のまがりくねった一室に案内されたとき、由里は一瞬ためらったようだが夏彦は一人で先に入ってしまった。帰るなら帰れというジェスチャーであつたが自信があつた。それでも夏彦は、たとえ彼女と一緒に泊っても、父譲りのジंकスだけは破るまいと、必死に自分に言いきかせていた。

由里がバスに入っている水音を聞きながら酔いが一気に睡りをさそい、ぐっすり、ね入ってしまった。

× × ×

明け方、ふと目を醒ますと由里がこちらを向いて寝ている。スリップ姿でこちらにむけた顔をジーツと見つめる。長いまつげのふるえと細い鼻筋の通った先端に柔らかく丸味を

もった鼻孔が、かすかにねいきをたてている。小さい唇のルージュがはげかかっているのが妙に艶めかしい。そっとおくれ毛のまつわりついている青味がかった襟足に唇をもつていった。ピクンと軀がふるえ、細い透き通るように白い指が、私の首にまといついてきた。ささやくような声で、

「お兄さん、しっかりだいて。苦しいの、由里。わかっていくくせに。余りいじめないで——」とぎれとぎれに言って身悶えしている。(もうこれまでだ!) 木石ならぬ身の俺は遂に理性を失っていった。……………

ところが意外にも由里はバージンだった。自分から積極的にでながら、いざとなると猛烈に苦痛を訴える。相当の経験をもつと自認する俺のことだから、慎重に事を運んだつもりだが、軀をそらせずり上り、終いには苦痛に堪えきれず哀願するように呻吟した。

平常、相当不良っぽいことを言い、経験のありそうなことをいっていた由里が、未知の娘であり、こんなに苦痛を訴えるとは、俺にとって本当に意外であり、喜んでいいのか嘆いていいのか一種当惑した気持になつていった。

「もうやめよう。悪かったね。驚いたな由里

さんが経験なかったなんて——」

一瞬、罪深さと憐みを感じて、俺は半ば諦めて身を放した。

「いやっ! 放さないで——。どんなにしてもいいから兄さんのものにして——」

「だって、君が余り痛そうで……」

「かまわないでいいの。私が声をあげても思いきって——」

そこまで言われると、夏彦は再び凡夫に戻って、飽くまで初志を貫く努力を重ねる外なかった。

何時間たったろう? 由里の呻きと、苦悶の姿態を攻め続けていく内に、酔いも手伝ってか烈しいサデステックな気分が高まり、一声鋭い由里の叫びを聞いてハッと自分を取り戻した時、浴衣の紐で彼女の腕をくくっていた。

由里にとって、初めての経験にしては、余りにも強烈でアブノーマルなものであつたろう。

せい一杯伸びし、頭でっかちな由里を思い切りこしめてやるというような心理から彼女、積極的にでれば出るほど反撥を感じ、こんなことになつてしまったという弁解してみるが、およそそんな遊び心がなかったとは

言いきれない。俗っぽく表現すれば「据え膳」食ったつもりであった。

由里にしても、文学少女的冒険心と、夏彦を男の大人^{おとな}として試験台に使ったぐらいの気持ではなかったろうか。

(狂った計算)

据え膳食ったつもりで夏彦であったが、その後、由里と交渉をつづける内、少しずつ計算の狂いを感じ始めた。

由里の新鮮な軀に魅かれ、二度、三度とデートを重ね、こっそり箱根や鶴巻に小旅行などしている内に、表面は今までと変わりなく、不良っぽく振舞ったり、冗談めかしているが、想像以上に彼女が直剣であり、熱の上っているのを感じ始めた。そうなると簡単に遊び心だったとは言えなくなったし、根はまじめで小心な男である夏彦は、次第に彼女のペースに巻き込まれていった。心にも軀にもバリエーションに富んだ由里に、量では知っていたもこれほど一途な真剣な愛情にぶつかったことの少ない俺は、始めて経験する恋愛の欲びとそれにも増して、胸をしめつけられるような苦悩に全く混乱してしまった。

大抵の女性とは、半年もてば長い方であっ

た夏彦が、由里とは約四年続いたのだから、確かに真剣だったと言えるし、それだけ秘かな愉悦と苦しみがあったと言える。

由里は会う毎に（絶対昌枝姉さんに話さないで）と言うし、俺は絶えず背信の罪の意識に苦しみ、酔って帰った時など、幾度、妻に告白してしまおうと迷ったか知れない。

半狂乱の俺——少なくともノイローゼ気味の顔や態度、おそい帰宅と時々の外泊に、いくら巧妙に言訳し、妻が全幅的な信頼をよせていたにせよ、全然気付かない筈はないと思っただが、全く変わらず、そんな言葉も気配も示さない。由里と話し合い、妻に気付かれぬ為にこれまでと変わらないように、時々由里が訪れては妻と仲睦まじく喋り、泊っていくこともあるが、由里と俺との視線の微妙な変化や、いくら演技してもかくせない言葉や態度のぎごちなさに、女である妻が気付かないのは不思議だったし、むしろ不自然であった。

いや、今にして思えば、たしかに気付いていたと思えるのだ。それを当時の夏彦は、妻の図々しさか、或は一種の狡さか、それとも機を見て思い切った復讐にでるのか、全く見当がつかず、いらいらし、肚をたて、そして

怯えてさえもいたのだ。結局、妻は利口だったのだ。あの頃、若し夏彦が告白しても、妻自身がそれを口にしても、その時は二人の家庭生活は終焉を告げていたであろうし、よし家庭は崩れなくても妻自身の心も由里の心も大きく傷ついて跡を残したに違いない。夏彦も兎に角、自分の口から告白したいのをこらえたことが、二人の女性の為にも、そして自分の為にも良かったかと思っている。

× × ×

由里とそんな関係に陥ちた始めの一年間ぐらいは、俺も彼女も、お互に表面の不良っぽさより相手の深奥にある一途なまじめさに付き、深刻な関係になるのを恐れていた。しかし、どちらからともなく無性に会いたくなり、会えば必ずそのままでは別れ難くなっていた。SEXを観念の中では嫌いながらずるずるとしたそんな関係の中で、由里は次第に女として目覚め、あの夜に端を発したSMの複雑な心理が徐々に開花していき、一層俺と由里を別れづらくしていったのだ。

二年目頃からは彼女は全く自分にも俺にも抵抗を捨て、すべての銜^{てら}気を去って、ひたすら恋に生き、献身を決意したようだ。未だに焼却できずに、秘かに会社に隠してある二百

五拾通余の鋭い筆蹟の手紙の束を、日付順に読み返すと、彼女の心の動きが痛いように心に響く。

そのころになると、すでに由里は奔放さも不良っぽさもなく、昔乍らの弱い一人の女に過ぎなくなっていた。俺を全身で愛そうとし、嫉妬し、悶え、憎しむ一人のおんなにすぎなかった。

彼女の手紙の結語に「憎らしい人」「エゴイストさま」「貴方の奴隷」という言葉が度々使われたが、それがこの頃の正直な彼女の心境だったと思う。

(SとMの開花)

夏彦は「蛇行録」に告白したように、廿六年以来の奇クファンだが、その頃はまだ観念派であつたし、初めての夜以来、言わず語りにその傾向をもった二人だったが、まだ由里自身は、そのアブの傾向に気付いていなかった。夏彦も意識してあからさまにはS傾向を口に出したり、最初からそれを導入としてSEXに浸ったりはしていなかった。ただごく自然に、SEXのテクニック、愛撫のバリエーションとして、軽く示していたにすぎなかった。

× × ×

俺と由里は定宿として五反田のホテルを使っていたが、ある初夏の一夜、ふとした心理のいたずらから、二人の性向を赤裸々に知り合う結果になった。半月ぶりに会った二人は烈しい狂ったような一刻に陶醉しきった。夏彦の導くままに様々なポーズの中に軽い欲びの鳴咽おえつをもらし、しなやかな輪郭のはっきりした軀を、蛇身めいてくねらせていた由里を堪まらなく可愛いく思うと共に、今は全く身も心も投げだして献身しきったような彼女を思い切りいたぶりたい不思議な欲求が突然頭をもたげたのだ。恰かも幼児が自分の愛着する玩具を時に思い切り残酷にいたぶる衝動のような。目尻に薄く涙の糸を引いて余韻に酔っている由里に、彼女が最も嫌う言葉をぶつけていった。

「由里、泣いているの?」

「……」

「又後悔しているね。前に君の手紙に『他人の夫を恋した報い』という言葉があつたね」

「……」

「君が本当に後悔しているんなら、俺はいつでも君の前から消えてやるよ」

「いや! そんなこと——いまさら」

「今からだっておそくないさ。君はまだ若いし、君の立場は何も保障されていないしね」「やめて、ひどい! もう言わないで。私の気持知ってるくせに——」

「でもわからないな。女の気持は変り易いし、この間も君『私——このままでは羽が生えて、ふわふわとんでいってしまうような気がする』って書いていたろ」

「でも、それは——」

「君は口では『何も求めない。ただ現在の純粹な自分を大事にしたいなんて』言っているが、長い間には必ず後悔するよ」

「しないわ。きっと」

「嘘だ! 君は心の中では女である以上、妻という座がほしいし、昌枝が死ねばいいと思っているんだ」

「ひどい——昌枝姉さんのこと——そんな。ひどい——」

一番彼女の嫌がることは二人で会っている時、妻の名をだすことだし、タブーであったがこの日は心と裏腹に次々と言葉がとびだしていった。由里は背を向けて泣き伏したが、俺はそんな彼女に、燃えるような新鮮で強烈なものを感じていた。

「昌枝とは別れないよ。この際はっきり言っ

とくが、あれは俺にとって女じゃない。妻なんだ」

「ほんとに、もうやめて——どうして今日はそんなに意地悪するの。もうこれ以上いじめないで——」

「いじめてやしないさ。しかし君はよく俺をエゴイストと言うがエゴはエゴなりに苦しいんだ。若し昌枝が君とのこと知ったら、彼女苦しむだろうな。死ぬかも知れない。それとも君を殺すかも知れないな」

「やめて……。……。殺されてもいいわ」

「調子のいいこと言うな。ほんとに殺される苦しみを味わってみろ。そしてそれ以上の心の苦しさをな！」

彼女の慟哭が一層大きくなり、背中が大きく揺れているのを見ると、ずしんとつき上げられるような衝動を感じてくる。

「もう、いや。いや！ いや！ 殺して——」

「よし。ほんとにいいのか。死の苦しみを味わわせてやる」

由里との初めての夜の刺戟の強いシーンが俺の頭をよぎると、夢中で由里に襲いかかっていった。それ以後の長い交渉の中でも自然なフォアプレイの段階や無理なポーズの中で苦痛に近い彼女の表情をひそかに楽しんだこ

とはあったが、その日は違っていた。明らかにSの衝動が第一義であった。その場にあるだけの紐を使って、手首と腕を力一杯、後手に縛り上げてベッドに突倒した。呻く由里の髪をつかむとぐっと顔を仰向かす。鼻と耳を

夏彦の口と手が執拗に責めた。閉じた瞼を割って夏彦の舌が強烈な刺戟を与えていった。苦痛とも陶酔ともわからぬ呻きをあげる由里を食べてしまいたいような愛欲の心の高ぶりと反比例して、俺の手や唇は旦念に、執拗に赤い痣を刻みながら下降していった。クック

ッと、泣くのか笑うのかわからぬようにすすり上げる彼女の胸と腹のさざめきの中で、足の指の股を万年筆の鋭い先端で責めた。そして次の瞬間には乱暴に由里を裏返した。

彼女は責められながら、その呻きの中に甘い響きをもち、明らかに喜悅していることを夏彦に知らしめていた。そうなると夏彦のサド性が更に拍車をかけられ、後から羽が締めにし、口と鼻を同時に圧迫して呼吸を止めさせた。

「ウーッ、ウーッ」

「どうだ。死ぬ苦しみというのは、まだまだこんなもんじゃないぞ。昌枝がお前に仕置してるんだ」

苦しがつて首をふり、足をジタバタさせると、今度は腰にまたがり人工呼吸の要領でリズムカルに背中を圧迫し、不意にそのリズムを狂わして苦しがらせた。

「さあ由里、今度はお前の最も弱いところをせめるぞ。弱音をはくなよ」

上下左右に揺れている由里のヒップの動きに意識的な甘えと、その姿態に弱い俺を唆うとしてゐる彼女の計算を感じると、俺は更にサディスティックな気持ちに駆られ、思い切り両肢を左右に、股裂きをかけるように押し広げた。始めの頃、彼女の最も恥ずかしがったポーズだ。軀の柔かい由里も余りの角度に呻きながら腰をもち上げようとするが、彼女の膝関節の内側を、夏彦自身の膝でしっかり圧え、少しずつ力を加えて、なおも外側に開いていった。由里の腕をヘッドロックの型でおさえこみ、わずかに首を左にしたり、右にしたり動かす表情の中に、夏彦ははっきりと彼女のM性を見た。

次の瞬間俺は腰を浮かすと彼女の足下の方にすべり降りて今度は両足首を握って再び力をこめて開いていった。青磁のように澄んだ彼女の豊かな双丘がふるえる。長い間をかけた、彼女に彼女自身の肉体の美しさ——特に

ヒップの美しさを賞讃してきたが、その日の夏彦は完全にアブの陶酔を追っていた。

万年筆、ルージュ棒、クリーム、そして彼女のハンドバッグにあるだけの棒状の器具とビンが悪魔の化身となった。

× × ×

「蛇行録」に始めて妻とA感覚の壁を破ったと先に告白したが、実は由里との間ではとくにこんな壁はとうり越していたのである。

ただ違う点は、由里との場合は、かなり始めから敏感な反応を見せ、その素質があったのを、長い間に自然にひきだし、いわば飼育していったので、割とスムーズにいったことだと思ふ。その後、由里は次第にアブに目覚め積極的になっていったのである。

女性には生来Mの素質をもつというが、特に由里の場合、夏彦の妻に対する背信の呵責が身を投げださせ、俺に責められることによつて、いくらかでも精神的な救いを見出そうとしていたのではないかと思ふ。自虐の気持が俺とのデートの場でも、常に離れなかったのだ。

由里とは月に二、三度必ずそんな会い方をしていたが、気付いても素知らぬ顔でいる妻に精神的に圧迫され、当時はうまくだましお

わせている気だったから、背信の重荷がたえず俺にもつきまといつていた。その苦しさから妻との交渉の時などに、今度は思い切り妻からいじめられたい、責められたいという複雑な欲求が強くなって、ポーズやフオアプレイなどにそれとなく要求するのだが、その気の全くない彼女は、こちらから強い限りのそんな欲求は満足させてくれなかった。その満たされない心が、そのまま背信の重荷となり、一層俺の心を苦しくさせるのだった。

（プリズム―夏彦の日記から）

――理性は命じる

「お互に熱の上がついている今、彼女は幸福だと言っている。お前は勿論悪かろう筈はないが、しかし彼女の立場に立って考えてみると、いかに由里が純粋な愛情をもつていようと、相手は妻子ある男なのだ。妻は「妻」という座にあって兎も角あらゆるものを保証されているが彼女は将来一体何を頼りに生きれば良かに苦しむに違いないのだ。お前という浮気っぽい男の愛情だけをバックボーンに生きることの頼りなさに泣くだろう。別れた方がいい。早く別れなければいけない。今に皆を不幸にしてしまうぞ」

――感情は応える

「いつまで変わらぬ愛情を彼女の上にもちつづけることはできない。だが俺は現在何と言われても彼女と別れることもできない。今の純粋さを信じ、愛情ということに夢中になれた俺の今の姿だけが、いとおしい。短い一生の中に輝く、さん然たる一点。この先どうなるかは解らぬが俺だって彼女の幸福を願うからこそ心が苦しいのだ」

――肉体は、うそぶく

「そんなお上手並べても駄目さ。事は簡単なんだ。お前は行くところまで行けぬ自分の軀に鞭打つてついに彼女をものにした。そして意外にもバージンだったものでお前は嬉しさと同時に負担を感じた。お前は口では随分女を知っているようなことを言うが、まだ案外初心なものだから、彼女に誠実を示そうとした。だがお前が誠実と思っていることは所詮お前の弱さの化身にすぎないのだ。だからそんな尤もらしい理屈をつけるより、どちらか自然に別れるような時の来るまで、お前も彼女もせいぜい情痴に耽り、アブの世界に遊ぶがいいのさ」

このアブがかつたしかし平凡な逢瀬が、結局俺と由里を別れさせ、同時に二人を救って

もくれたのだ。

(未完)

「後記」

由美から来たうず高い手紙の束と、俺の大学ノート六冊にぎっしり書かれた内容を何とかまとめようとしたが、心の焦るほど意をつくせなかったようだ。

これが俺の半生の記録であり、大した仕事も業績もなく、おさらばかと思うと我乍ら情ない気もする。

これを妻子が俺の真実の姿だと知ったら失望し嘆くかも知れない。しかし夏彦という一

応世間的には活動的で世話好きで明朗な性格な男の一面であることも事実なのだ。俺は長い間、自己の内部に住む二面性に苦しめられてきた。

しかし現在は、それを恥ずかしい事とも悪い事とも思わない。そのどちらも真実の夏彦という男の姿なのだ。虫の良い考えだが、こんな生き方をも、人間的な正直な生き方をした男だと妻子や親しい友にニヤツとしてもらえないかなと思う。

文中、愛憎の渦中にあった夏彦と由里がその背信の苦しさから、長い年月の中に倒錯し

た心理と愛情をもったことも、今考えると信じられなくも、涙ぐましくも感じられるのだ。

初夏の一夜を境にして妻昌枝の幻影を通して、加虐と被虐の苦痛と陶酔に目覚め、次第に、お互の欲求を認め合いながら深みに陥ちていったのも、詮じつめれば心弱い人間の真実の姿だったとも言えるのだ。

若し機会があれば、その後の由里との顛末も書きたいと思っている。莫迦な人間、正直な人間の結末として――。

(カット野江三郎・画)

愛 奴 讃 歌

(あいどさんか)

平 み どり

湯上がりのミチは、紺地に白い小花の刺しゅうが入ったブラとガードルを身につけた。大柄で白く引きしまった肢体の上下にぴった

り着装された紺の布地は、快いアクセントを示している。鏡の前に立ったミチは思わず満足のはほえみを浮かべた。そしてその上

からスリットを刺しゅうで飾ったスリッパを着ると、エレガントなムードが一層高まって心はずむのだった。

そして、これからの仕事？ を考えるとミチは自然と顔を赤らめた。大宮にいわれたとおり、ベッド・ルームをのぞき見るのが彼女

の役割りだった。洗面所を出ると廊下をしのび足で歩きながら、ミチは全身が熱くなるのを感じた。つきあたりの部屋のドアのノックに手をかけ、からだごと押し入れるようにして部屋の中に入った。そこは、もうベッド・ルームだった。室内は暗かったが、カーテンで仕切られた奥の方から、あかりが洩れていた。左寄りに進んで、カーテン越しにミチは内部の情景をのぞき込んだ。

真先に陶酔したようなマミの顔が写った。からだをベッドの上に投げ出して、顔はそのへりからやや下方に垂れていた。目をかすかに閉じ口を半ば開いて楽しげな表情だった。

身に纏うものはパンティ一枚きり、ロープが豊かに張った乳の上下に喰い込んでいた。両手が胴の下ぐらゐに廻されていることから、マミの手首をロープが後手に縛り上げていることがわかった。大宮は、そのそばでゆっくり煙草をくゆらしていた。おそらくミチのくるのを待っていたのだろう。マミの足が伸びているベッドの片側の椅子に腰を下ろして、その肢体を鑑賞している様子だった。

ミチは、カーテンのそばで立ちすくんだ。自分がこんな恰好で縛られてなぶり者にされたら、どんなに恥ずかしいだろうと何ともいえぬ気持ちになった。しかしマミの恍惚としているような表情をみると、不思議にからだはほてりだしてきた。

大宮は立ち上がった。ゆっくりとベッドを這って、マミが顔を垂れている方へ廻る。そして手にしたソックスをマミの口中に強引に押し込もうとしたが、マミが首を振って抵抗するので鼻を強くつまんだ。マミは息が苦しくなつて、思わず開けた口の中へ、ぎゅうぎゅうとソックスを押し込んだ。マミは苦しげに顔をゆがめた。大宮は、その上から用意したネクタイで猿ぐつわをかませた。声を立てられなくなったマミは足をバタバタ動かし、た。その動作が、ミチには、マミがもつとじめてほしいという気持ちを示しているように

も見えた。マミはベッドにうつ伏せにされた。足首を組まされてロープがからみついた。大宮の手にしたロープは更にのびて手首のロープと連結し、マミは海老縛りの姿勢になった。ロープは、なおも容赦なくマミのからだに巻きついて股間縛りにし、腹部にぐるぐる巻きついてようやく数センチぐらいの余りを残して蛇のような動作を停止した。ミチは始終その状景を眺めつづけた。そしてマミを憐れむどころか、むしろうらやむ気持ちで心の高ぶりを抑えることができなかった。ミチは自分の受難が始まるのを承知で、カーテンのかげから大宮の方へ接近した。

「先生、やめて。マミをいじめないで！」

大宮は黙ってマミの姿態をじっくり眺めていた。ミチは、どうしてよいかわからず突っ立ったままである。振り返った大宮は、はちきれそうな胸もとをスリッパに包んだミチのからだを見て、満足そうに微笑し、ゆっくり元の椅子に戻った。

「先生のバカ、イジワル。マミをこんな目に合わせて」

ミチは思わず、そう叫んでいた。

「君は何か間違っているようだね」

大宮の言葉が返ってきた。

「一つは、勝手に、この部屋へ忍んできたこと。もう一つは、マミがどんな気持ちでいるか

どうか確かめないこと。あとのことはマミの口から聞いてごらん」

ミチは、マミの傍へ走り寄ると、何よりも窮屈だろうと思って猿ぐつわをとくと、口中のソックスを除いてやった。

「サンキュー、ミチ！」

マミは、ほほえんでいた。

「さぞ辛かったでしょうね」

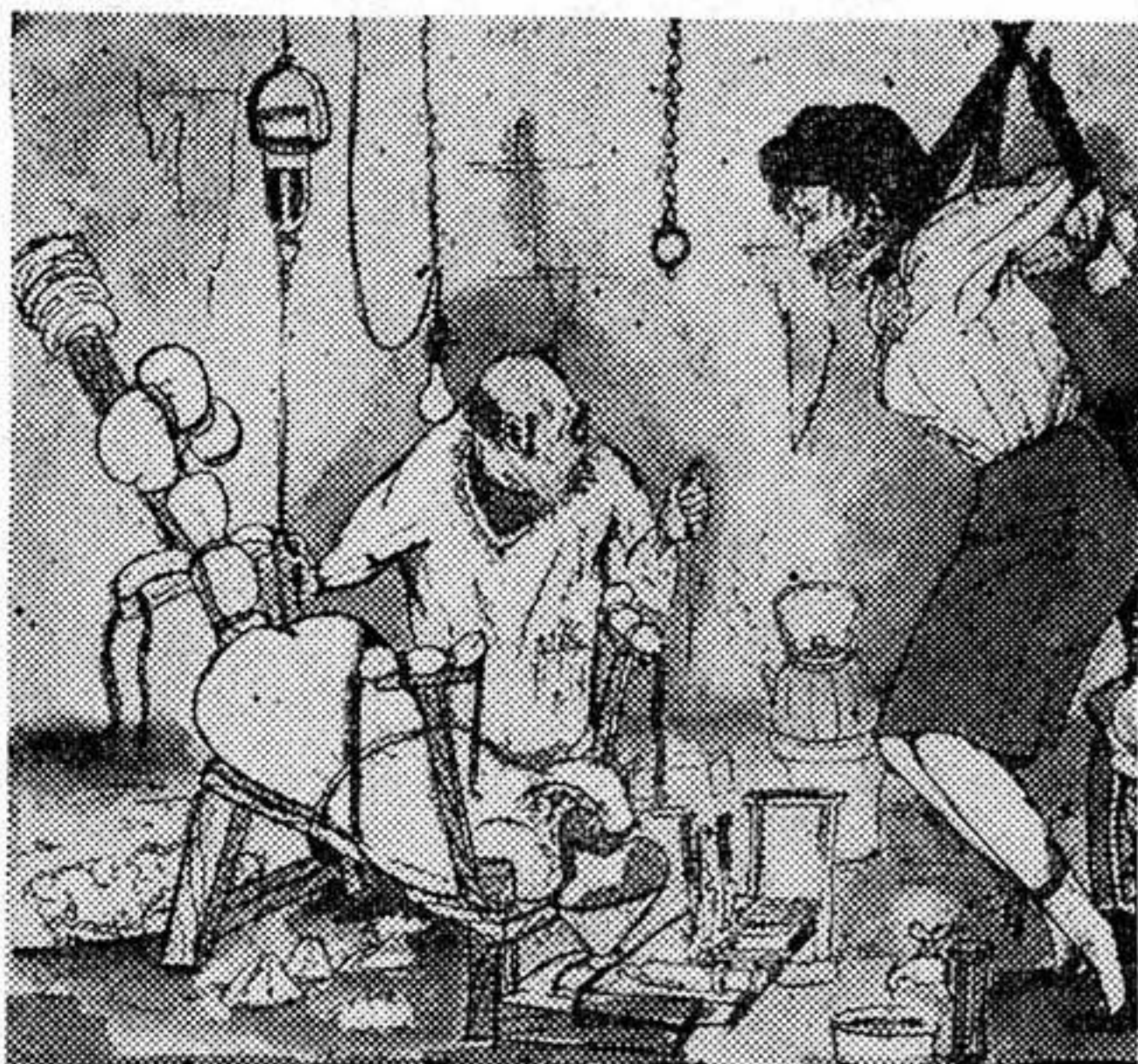
ミチのなぐさめに、マミはニッコリとして領いた。

「先生、猿ぐつわは苦しいわ。それに、こんな縛り方って始めてだわ。ミチが見ているんでハッスルしちゃったのね」

ミチは横目で大宮の顔をうかがった。大宮はウイスキーをあおりながら、ニコニコして首を縦に振った。ミチはマミの縄をときはじめた。しかし結び目が駒結びのために、マミのからだを自由にするまでは、かなりの時間がかかった。ミチがマミのロープをほどき終って、ぐったりしたマミのからだをベッドのマットの上に寝かせた。マミがいった。

「先生、もう一度、楽に縛って。それからミチがいじめられるところを見たいわ」

大宮が領いて椅子から立ち上った時、ミチは思わず被虐の注射針をからだに突きさされたように感じ、羞恥と不安におののいた。



背徳の記録

(ミモザ館より)

睦月笛一郎

カット・遠藤春一・画

窓際の日差しを求めて、読書に余念のない喜久の耳に、扉を叩くノッカーの鈍い音が断続的に響いた。

此のミモザ館の女主人は、^{あるじ}予め刺を通じてある訪問客以外には、誰とも逢わなかった。欧米風に、訪問時間は厳格に守られ、何かの都合で食事刻に^{どき}掛つても、客には一切、食事を出さない^{しきたり}慣習があった。

毎年、館ではクリスマス^{やかた}を盛大に祝い、贈

物を交換し合うが、新年はマダムに挨拶を静かにした後、召使い達は七草まで暇をとるのが例で、今日は誰もいなかった。

マダムは、都下のある婦人団体に招待されて、講演に出向いて留守だった。ブルーボリーの麻美は、スエーデンでの整形手術の疲れからか、殆ど階下に姿を見せなかった。

喜久が、ふと覗き窓から戸外を見ると、例の老医師が、ボルサリノの高価な帽子を手に

佇立^{たたず}んでいた。禁断のベールに包まれた館も、この医師だけは例外で、不時の来訪でも快よく迎えられた。

「久し振りだね。御元気ですか」

慈父のような老医師が、微笑を浮べて言う。喜久は、その肩に抱きすくめられたい衝動に駆られる。

喜久は慌てて、扉をあけて広間に通した。マダムが、いつも老医師を^{もてな}饗応するように、戸

棚からブランディの瓶を取り出し、グラスを揃えた。

「落着きなさいナ」

と、我が心に言い聞かせたが、指先が小刻みに震え、酒瓶に触れたグラスが共鳴して、いつまでも金属的な響きをたてた。

「医師とピアニストの指は、長ければ長い程良い。殊に、婦人科医は指先の力が何よりも必要なですよ」

老医師の自慢の指は、喜久も感心する程長く、しかも爪太でいて気品があった。

「まあ、ほんとうに」

喜久は、わざと大袈裟に感心する。

医師が、煙草の脂で琥珀色に染った指を、喜久の芸術品のような指に重ねると、倍近くも有った。それよりも、喜久は老医師に指を触れられただけで、単純に感動し軀に震えがきてしまう。胸の動悸を隠すために、うろたえて葉巻をとり、端をカッテングで切り取って医師に差出した。

「ある事で、マダムの御援助を願いたいと思つて、新年の挨拶かたがた、お邪魔したんだが……又、お伺いしようか」

喜久は、引き留めるのに一生懸命だった。

「おいやでなかったら、ごゆっくりと」

医師は、ポケットから小さく折疊んだ新聞紙の切抜きと、一通の野紙をとり出した。

「喜久さんは、この記事に見覚えが有りますかな」

新聞を手にとって見ると、半月程前に、本荘という産婦人科の開業医が、患者からある破廉恥な事件で訴えられ、警察沙汰になった事件が顔写真と一緒に載せられていた。

老医師が一昨夜、葛飾区の親戚を訪ねた帰りに、路傍で悪酔いのため、うずくまっていた中老の男を発見した。職業柄、放って置いた事出来ず介抱した上、その男の家まで肩を貸してやった。街頭の淡い光に浮んだ男の横顔は、何処か見覚えがあった。

男の自宅に連れ込んで、ニスの剥げた薬局兼用の受付と、診察室の中央に置かれた錆だらけの検診台を見て老医師は、この男が同業者で、しかも事件を起して産婦人科医仲間の話題になった本荘左右吉だと、はじめて覚った。

椅子に坐つて、本荘と向き合った時、孤独に堪え切れないこの男の弱さが、虚無感となつて表情の翳りが漂っているのを眺めると老医師の心に、持まえの同情の念が沸いた。

「喜久さん、背徳の罪をその人に背負わせて

やる事は容易いが、石でその人を打てる者は殆ど、いない筈ですよ。本荘君は、罪深き人である前に、同情すべき病人かも知れませんからナ」

老医師のくわえた葉巻から、紫の霞が部屋を流れ出て、甘い香りが喜久の気持を快よく擦った。

告訴状

被告 本荘左右吉 五十四才 医師

東京都葛飾区堀切町

告訴人 小川茂子 二十才 女工員

東京都葛飾区本町

告訴人小川茂子は、十一月三十日午後三時産婦人科医被告本荘左右吉に、受胎調節の指導を受けた際、本荘は調節用リングを挿入する為必要と称し、全身麻酔を施し三十分後に告訴人が意識を回復した時、当人の口腔内に破廉恥な行為を続行していたものである。

これは被告本荘の、職業を利用した極めて悪質な人道に許すべからざる行為であり、告訴人にとつても意識外の事件とはいえ、精神的な負担は大きく当人の将来を傷つけ、家庭内の不和を惹起した行為は許

せない。依て茲に本莊左右吉を告訴致します。

昭和四十一年十一月三十日

(一) 茂子の供述

私は、工員である現在の夫と二年前に十八で結婚した。幼い時、両親に死別した私は、葛飾の叔母の家に引き取られた。貧乏人の子沢山の例に洩れず、叔母は次々に子供を産み私はいつも赤ん坊を背負わせられて、少女時代を過ごした。

中学校を卒業すると、友達皆高校に進学した。私は、待ち兼ねたように直ぐ近所のゴム工場に女工員として働きに出た。

「求む、女工員さん。遇高給。出来るだけ既婚者を希望」

と、いった広告が示すように、衛生具を製造していた。

「茂ちゃん、これ何に使うか知ってるかい」女達は、オートメーションで次々に廻って出て来るゴムを器用に捲きながら、私をからかった。ゴムを捲く手つきが何かに似ていると言って高笑いした。

喰べる物もろくに与えられず、洗うような赤貧の中で育った私には、製造品が何であれ

一円でも他の職場より日給の良い方が魅力があった。

暇があれば、一日中、飽きもせず卑猥な話に打興じている女達から離れて、私は仕事に打込んだ。工場勤めがこんなに楽しくて、生活費を叔母に渡す外、お金が自由に使える事は、私にとって生れて初めての経験であり、有頂天になった。

わたしの軀は、少女時代の栄養不良にもかかわらず、皆がびっくりする程大きかった。人並の容姿の中で、私はオッパイだけが、自分の軀の中で一番嫌いだった。母の血筋をひいてか、若い癖に人一倍、大きくて垂れ乳だった。

しかし、軀のわりに、性の目覚めは遅く、十六になって初潮を見た。私は、突然の異変を見て、知識はあったが気が動転してしまった。

部屋の片隅で蒼褪めて唇を白くしている私を見た叔母は

「嫌だよ、この娘は。柄ばかり大きくて全くネンネエだから。どら、脱いでみなよ」

粗雑な言葉づかいだったが、こまめに仕末をした上に、T字帯まで当ててくれた。

翌朝、わたしは叔母が炊いてくれた小豆飯

を喰べた。

「叔母さん、どうして赤飯を作ったの」

「馬鹿だね、お前。茂^{しげ}が一人前になったお祝いじゃないか」

教えられた通り、脱脂綿を当ててT字帯を締めると、急いで表に出た。叔母が、襦袢の干してある下で隣の人に、昨日の出来事を声高に吹張っていた。流石に、気恥ずかしく聞き流して、足早に工場に向った。

工場で、お時さんに話すと

「今時、T字帯なんぞ、産後にしか使わないよ。いい若いもんが、みっともないね」

と、真剣な顔付で何か思案するふうだったが、昼休みに2号倉庫に連れて行ってくれた。

倉庫には、係の若い男が一人、ぽつねんと椅子に坐っていた。お時さんが、いつもの調子で材料を頼むと、人のよさそうな男は黙ってゴムの薄布と紐を持って来た。

お時さんは、器用に裁断し、糊付をして替ゴムをつくり上げた。巾広ゴム紐にミシンかけをして吊ベルトを作り、それにボタン孔をかがり替ゴムを嵌め込んだ。

「さあ、当てて見な」

わたしは、それ以後生理帯が必要になると

倉庫に行って材料を貰い、見様見真似で不細工なバンドを造るようになった。

無口な、若い倉庫係の面影が、いつの間にかわたしの心の中に巣くい、段々、胸一杯に拡がっていった。時々、映画に誘われ、後は大衆食堂で五目ラーメンを御馳走になるのが決められたコースのようになった。慎ましい、他人からは嗤われそうな交際^{つきあい}だったが、わたしは夢中だった。

二年後に結婚した。夫は、ゴムを加工する男達と同じように、不思議に酒が一滴も呑めなかった。

日常生活に真面目な夫は、夫婦としての交りも極めて淡泊だった。事務的というより義務的で、後は軒をかいて正体もなく眠りこけた。

女は、その時、男から優しい愛の囁きを期待しているものだ。嘘でもいい、

「お前は綺麗だ」とか、「愛しているよ」というたった一言が、女の気持を燃えあがらせる。わたしの、若く張りつめた肉体は、夫の淡泊さが物足りなく、婦人雑誌で読んだような妻としての恍惚感には程遠かった。

結婚して直ぐ月経が止まった。共稼ぎが出来ないとなると、生れて来る赤ん坊を含めて

三人の生活がおぼつかなく、わたしは嬰兒を育てるには若過ぎて余りにも無知だった。

工場と同僚に相談すると、本荘産婦人科医院を教えてくれた。この女達の間では、名の通った優生保護医よりも、配遇者の同意書も要求しない、買物姿を装って出入りできる本荘産婦人科の方が行き易い。又、腕は兎も角、中絶料が安い事でも人気があった。

只、本荘の噂が女達の話題に挙がると、眼配^{くは}せし合って、急に卑猥な嗤い声を立てた。

わたしは、夫に相談して中絶を決心した。工場を早引けして、本荘医院を訪ねた。

玄関の戸を開けると、受付も廊下も埃だらけで看護婦の姿はなかった。無精鬚を生やした本荘が、診察室から顔を覗かせて、わたしが未だ何も切り出さない内に

「処置料は四千元だよ。前金だ、用意して来たかね」

黙って千円札を四枚、皺を延してT字帯や脱脂綿と一緒に差出した。手洗いを済ませて検診台に載るように命ぜられた。俯き加減に下穿きを脱し兼ねていると、全裸になるように要求された。

羞恥が先立って、わたしには何故、この処置に丸裸にならねばならないか、本荘の言葉

を不思議に思う余裕がなかった。本荘は、わたしに背を向けて、手術器具を煮沸消毒していた。ぎごちなく仰臥したわたしの両脚は、思い切り左右に拡げられ、革ベルトで支脚器に緊縛された。ペタルが踏まれ、わたしの白い腰が宙に浮いて、生れて初めての恥ずかしい姿勢を明るく白日灯の下に晒された。検診台の上のわたしは、まるで四肢を縛られて宙吊りにされた猿のようだった。

「子宮は妊娠徴候のリビト色をしている。逆算すると三カ月を越しているナ。直ぐ、アウス（中絶）をするよ」

麻醉薬が静脈に注入されて、わたしの意識は霞み始めた。金属の触れ合う音が、幽かに響く脳髓に、紅彩が走り幻覚とも現^{うつ}とも判断がつかなかった。

――襦袢を当てがわれた赤ん坊のわたしに、母親姿の本荘が太い奇妙な乳房を含ませようとした。わたしは、嫌や嫌やをして首を振ったが、無理遣りに啞えさせられた乳房を、今度は力一杯吸い始めた――麻醉から覚めた時わたしは錆だらけの寝台に横臥していた。

反射的に、下腹に手を遣ると、T字帯をさした腰に当てられた、ネチネチとするゴムのオシメカバーに触れた。周期的に襲う鈍痛

と、皮膚を刺激するゴムカバーの感触に、電の掛っていた脳細胞が一気に我をとり戻させ神経が急に働いて身の毛がよだった。

慌ててわたしは起き、穢い物でも捨てるように、ゴムカバーを脱し、身繕いをして立上ると、目暈いがして躰の疲れが蘇えって来た。わたしは、逃がれるように本荘医院を出た。

帰宅した当座、わたしは医院での不可解な出来事を、夫に告白すべきか思いあぐんだ。夫は、疲れの出たわたしの心の翳りも忖度できず、最初は遠慮勝ちに軀を求めて来た。わたしが拒否すると、今度は強引に押倒した。夫との行為を累ねれば累ねる程、わたしの心は夫を離れ、妖しい幻覚を呼び起した検診台が思い出された。本荘の施術は、わたしにとって蟻を曳きずり込む蟻地獄のようなものだった。

半年後に、又わたしは二度と足を向けまいと決心した本荘医院に、中絶のため行かねばならなかった。一回目と同じように、検診台に緊縛された。麻酔に意識を失ったわたしは手術中に、又、不可解な幻覚に見舞われた。

蒼い顔をして働き出ると、同僚達が「茂ちゃん、中絶手術をやったんだろ」

と、言った。女が、女の生理を覗き見る眼の鋭いことに、わたしは戦慄した。下着の内側まで見透かされる感じがして、思わず両手で顔を蔽った。

「茂ちゃん、又、本荘かい。余り彼処^{あそこ}は行かない方がいいよ」

「本当だよ。あの先生の所へ産制指導を受けに行つてサ、皆、知らない間に何かされるっていうからね」

麻酔から醒めかかった時に、本荘の怪しい行為を臆げに見たという者が工場にもいた。

本荘は、当地に来る前も、千葉のある漁師町で破廉恥な行為が評判になり、夜逃げ同様に葛飾に来たという。

十一月三十日、わたしは道端で偶然に本荘に出逢った。会釈をして立ち去ろうとするわたしに本荘が声を掛けた。

「中絶を繰り返すと、若い女でも躰が保たなくなるぞ。避妊指導をしてやるから遠慮なく来いよ」

今思えば、その時のわたしの心理はどうかしていた。夢遊病者のように、本荘医院の玄関を跨ぎ、診察室でいわれるままに着物を脱いだ。前二回と同じように不様な姿勢を強制された。両脚を支脚器に固定され身動きが出

来なくなっただけで、何か身内の血が逆流した。本荘の指が触れるたびに緊張して、頭が痛くなって来た。触診を終った本荘が、わたしの頭上に廻った時、異様な表情を見て思わずわたしは悲鳴を挙げた。

「何をするのヨ。アーツ、いや、いや。放してエー」

本荘は、わたしの手を掴んで、手荒く検診台に縛りつけた。恐怖で口をあけたままのわたしの腰を、蜂の胴のようにくびれるほど、ゴムバンドを装着した。用意してあった千C C入りのイルリガートルの嘴管を挟んだ。

「高圧浣腸をしてやろう。ゆっくり這入るように躰から一米位高い処がいいだろう」

「受胎調節は、もう結構ですから降して。お願いだから手を解いて下さい」

本荘は、わたしが固定された躰を揺すって哀願するのを、冷ややかに見下しながらゴム管のクリップを脱した。

ガラス容器の中の液が、渦を巻いて下降し始めると、長いゴムの管がわたしの腹の上で蛇のようにうねった。腸がつめたい水洗に刺戟されるのを感じて、思いきり暴れてみたが、無駄だった。

わたしは、眼をつぶって歯を噛みしめた。

下降した液が五百を示すと、腹の表皮が裂け
 そうで、胃を圧迫して吐気を催した。

わたしは、のけ反り目茶苦茶に軀を振った。

「くるしい、苦しいヨー。もう駄目。やめて。許してエ」

恥も外聞もなかった。しかし、ぴたりと皮膚に吸いついたイルリガートルの液は、わたしの意志を無視して軀内を奔り狂った。

残酷な刑罰がようやく終わったとき、虚脱したように、わたしは喘いで天井を見つめた。

「こうして、腸を責めることによって、リングの設置がやりやすくなる」

「わたしにとって、浣腸なんか蟲酸が走るだけ。やめてよ」

「リングが入っている間は妊娠しないから、うんと楽しめるよ」

本荘は、医師にあるまじき、いやしいいい方をして笑った。

昔の墮胎は中条流の医者が消毒もせず、桑の枝や鬼灯ほおずきの根を使った。医学的な無知が子宮を穿孔して死亡させる例が甚だ多かった。

中条流の女医者は、患者が興奮する事によって子宮頸管を拡張、処術をやりやすくするために笑絵（春画）を見せた。本荘は、浣腸

によってわたしを興奮させ手術をやり易くするというのが、わたしにとっては地獄だった。

わたしの精一杯の抗議は、本荘が悪魔の水麻酔薬の入った注射筒を持ったことによって中断された。

本荘が、麻酔薬をわたしの腕に注射しながら

「ひとつ、ふたつ」

と、諭すように呟くと、わたしも催眠術をかけられたように遠い記憶の淵で

「ひとつおつ、ふたあつ」

と、数え始めた。わたしは、又

——嬰兒に還って、指を握り締めながら母の乳房を待った。その母がどこから現れた。

眼鏡をかけた奇妙な母親の姿であったが、乳房をわたしに咥えさせた。それは、不思議な

細長い乳房だった。わたしがまだ吸わない内に——突然、映写幕が切れたように、朦朧と

していた意識が半ば戻った。

検診台とは違う、冷たいレザーの台に仰臥させられ、本荘があられもない姿で、わたしの頭の上に跨り、両手を伸して肌を弄んでいた。

驚いて、わたしは顔を背けようとしたが、頭の芯が痺れて自由がきかなかった。本荘は

欲望を満足させると、わたしの腰にゴムカバーを当てた。わたしは、冷んやりとしたゴムの感触に軀の血が引く思いだった。

本荘は、わたしのそんな姿を愉しむようにゴムのオムツカバーの上を幾度も、丹念に撫でていた。やがて縛めを解き、老人とは思えぬ力で、わたしを軽々と抱き上げ、粗末な病室に運んだ。わたしは軀の自由を取り戻すと、疲労した足を引摺るようにして、最寄の警察署に駆け込んだ。

（二）本荘医者の供述

「私は疲れた。産婦人科医など罷めてしまいたい。こんな因果な職業を、何故、選んだのだろう」

私は、最初から産婦人科医を志望した訳ではない。

青春時代、私は満州に渡り南満州鉄道会社に奉職し、ハルピンにいた。旧制の中学校を出ただけでは、苦力相手の現場配置でうだつが上らず、かといって上の学校に行けるほどの学資もなく、私は煩悶の日々を繰返していた。

丁度その時、開拓民の診療を目的とする四年制の医科大学が各地に出来た。授業料は官

費で被服や手当までくれた。私は、直ぐ受験して佳木斯医科大学に入った。

卒業して半年後に終戦を迎えた。怒濤のようにソ連軍が侵入して来て、居留民の間に大混乱が起きた。掠奪と凌辱などの悲惨な光景が至る所でひき起された。ソ連軍は、全満の工業施設を根こそぎ持去り、代りに今度は国府軍が進駐して来た。

事態は、前より大分緩和されたが、日本人は益々困窮の度を加え、惨状は目を蔽いたくなるものがあつた。

私は、医師ということ、国府軍に徴用され、他の人達よりは多少、人間らしい生活を送った。

二十二年の春、コロ島から仙崎港に引揚げて来た。医師として就職しようとした私は、途方にくれた。私には、医師の資格がなかったのだ。

内地では、私の卒業した学校は、所謂、日本の学校令による医大、医専として適用されなかった。

政府が、臨時に登録（検定）試験を実施したが合格するまでの二年間、看護人という名目で産婦人科医院に住み込みで勤め、糊口を凌いだ。終戦後の混乱期、性の解放から中絶

手術を棚の品物を下すような気楽さで訪れる患者で、私は朝から晩まで、煙草を喫うひまもないほど多忙を極めた。

私が、産婦人科医を義務づけられる運命はここで決まった。

三カ月までの妊娠中絶手術は、看護婦の一人を助手にして簡単にキューレットのみで処置したが、四カ月を過ぎた患者は、人工的な流産を起させる為、メトロイリントル法やカテーテルでリバノールを注入して陣痛を促進する。手術は出血を伴うので、途中で唇が紫色に変わるチアノーゼ症状を呈し危篤状態になった女もいたが、殺したことは一度もなかった。酷使が技術を生んで、一流大学を出た医博の院長よりも信用を得た。自信を持った私は、医師免許が下附されると、院長の懇望を振り切って大病院に就職した。

しかし、地方のどんな病院でも、中央の大学の系列下に置かれ、私のような準医専出はいくら腕がよく、患者から信頼されても部長にもなれず、万年医局員でしかなかった。

私達のような検定医は、辺地の診療所長か保険医になるのが精一杯だった。

私は、中央での成功を諦めて、招聘されるままに僻地の診療所に落着いた。ここでは、

内科も、外科も、産婦人科もなかった。診療所は、私のような「なんでも屋」が重宝がられた。数カ所の診療所勤めで開業資金が出来た私は、房総のある小さな町で産婦人科医院の看板を掲げた。しばしの間は上手いき、患者が溢れ、面白いほど流行った。私の評判を妬んだ地元の開業医達が、私を無資格のモグリ医者のように中傷した。急に客足が途絶え、門前に蜘蛛の巣が張った。二カ所ほど土地を選んで開業したが永続せず、四年前に堀切町の小工場の多い地区に産婦人科を改めて開業した。

客は、分娩のため入院する者は殆どなく、中絶手術と悪質な性病患者が大半だった。検診台に載った女を診ると、十人に一人は何らかの型の性的な不満を訴えた。

女の悲しい宿命——月経、その前後は、理性を失って常規を逸した行為が見られる。

両脚を拡げて診察を受けることに病的な興奮を示す女や、ゴムや金属のカテーテルを用されることに歓びを示したり、必要があつての浣腸、それも多量に注入されるほど苦痛にのたうち快感に変貌するのを期待する患者もいる。

堀切で開業してからも、種々なケースの患

者が来院した。

ある工場主の夫人は、不感症を理由に診断を求めた。しかし内診の途中で、この患者の誤解が立証された。日頃、取澄した夫人が鼻を脹ませ、荒い息づかいをみせて驚かされた。聞くと、夫は無類の酒好きから糖尿病になり不能に近かった。

私は夫人に或る物を利用する事を教えてやった。以後、夫人の不感症は忽ち全快した。夫の許しを得て、房事の前に愛犬と戯れた。夫人は、私の信奉者となり、月一回は必ず来院し診察を受け、多額の謝礼をおいていくようになった。

又、月に二度、三度と訪れる二十九才のB Gは、帯下を理由に、必ず内診を希望した。検診台に上げられて、膝関節を固定されるだけで感情の昂り^{たかま}が激しくなるという異常体質を持っていた。台から降りるまで、絶え入りそうな媚態が続いた。

私は、医者としてこれらの患者に興味を抱いた。異常の内容によっては、積極的に幫助してやったこともある。

小川茂子が来院した時も、彼女の大きな眼の中に、眦の奥深く秘められてマゾの炎を、私は観た。茂子はこの種の、我が身を責め苛

まれることによって、快美を覚える女だと確信した。

彼女は、一年前に中絶手術のため私の処へ来た。看護婦代りの妻が、風邪をこじらせて休んでいたので私が顔を出すと、三千円を私の眼の前に突きつけた。

「これだけしかないんだから、三千円に負け」といって、早く墮してよ」

棚のリンゴを降すような言葉に、私は啞然とした。私はその心得違いを論じた。

「中絶は、不自然な行為だよ。生むようにしたらどうかね」

「私、子供なんか欲しくないわ。あんたが断るんなら、他所へ行くわよ」

茂子は、ガムを噛みながら深紅のスリッパ一枚になると、手洗に飛んでいった。帰って来るなり、私が何もいわないのに、全裸になった。検診台で抱石位を執らせると、流石に緊張して、大人しくなった。私は、足を支脚器に固定しながら茂子の軀付きを眺めた。茂子は、大きな魅惑的な眼を、きらきら光らせて天井を見つめていた。二十才の若い軀にしては皮膚の荒れが目立った。しかし千五百ワットの白光燈に限なく照し出されたその肢体は美事といえた。殊に胸の隆起は、女の軀を

見馴れた私でも、息を呑むほどだった。茂子の乳房は、熟れ切った果実のような、とても言うのか、頽廢の美があり、女を知り尽した私の氣持に動揺を与えた。

茂子の腕に、麻酔薬を適量の二十ccより少な目に入れた。施術に掛ったが、茂子は手術に伴う苦痛を少しは感じている筈なのに、だらしなく黄色い涎^{よだ}れを垂らし謔言を呟いた。

三十分で手術は終わった。看護婦がいなくて、汚血や汚物の処理までも一人でやった。下腹部に丁字帯を当ててやる時、誤まって手の甲がチョット乳房に触れた。私は、美を感じていた黒い乳頭に、ほんの少々戯れてやった。麻酔から醒めた茂子は、眼を細めて放心したように口を開け、私のなすがままになっていた。

私が戯れをやめると、茂子はいった。「そのまま続けて。それよりも猿轡を嵌めてもっと苛めて」

私は、手術用のゴム手袋を丸めて口の中に押し込み、茂子のナイロン靴下で猿轡を噛ましてやった。やはり私が最初に感じとったことは誤りではなかった。茂子は苦し気に眼を瞑り、青い脂汁をしたたらせた。そこには、

マゾヒストのみが知る恍惚の世界があった。解放してやると、不満気な顔で

「先生、特別診断に時々、来てもいい？」

茂子は、大柄な軀にしなを作っていた。

私は不同意ながら頷いた。これも治療の一つだと思った。

茂子は、隔月ごとに来院するようになった。そして、種々の責めを要求した。責めの極限に幻覚を生み、責められれば責められるほど無限に快楽の世界が広がるようだった。私はいつも、海豚イルカのような茂子の軀を持て余し気味だった。責めた後で、精根を使い果したような気分になるのは、きまって私の方だった。茂子は、責めの遊戯が終った後は、疲弊する筈の軀が瑞瑞しく生氣を帯び、ひとみに光があった。

私は、クモの糸に掛った昆虫のように、跳けば跳くほど身動きがとれなくなり、どちらが責められているのが判らなくなった。しかし、この治療？をやめる意志はなかった。茂子の被虐性にも好みがあった。被虐者の誰でもがそうであるように、神経質なほどムードを尊重した。浣腸する場合でも、露わに施術されることを嫌った。茂子は幼児の時、肉親を喪って、殊に母親の愛情に飢えてい

た。その潜在意識が小児願望になり、オムツカバーを当てられることを好んだ。責められると、ガラスが響くような大声で喚び出した。喜びが昂まると、必ずといってよいほど失禁した。いくら馴れているとはいえ、この始末をさせられるのには閉口した。私が金をやると、茂子はデパートに行き、病人用のゴムのオムツカバーを買って来た。当ててくれというので、いう通りにしてやると軀をちぢめて幼児のような表情になった。茂子にとってはあんなゴムの感触が好ましく思えるのか、オムツカバーを穿めたまま帰宅した。

茂子の一番要求する責めは、麻酔薬を適量よりやや少な目に注射され、朦朧とした意識の中で緊縛され、猿轡をされて、凌辱を加えられることであった。

六カ月後、又、茂子は中絶手術をせよといつて来院した。私は、彼女から求められた行為以外は、大時代的だが神明に誓って、潔白である。先日、道で偶然に私と出逢ったと申立てているそうであるが、私は隔月毎に、彼女の怪奇にして異常な要求を治療の一環として満たしてやっていたのだ。

問題になった、十一日三十日の事件といわれる経緯は、今思い出すと苦笑ものである。

私は、茂子が若さにまかせて、無防備のままの夫婦の性生活の放縦さを戒しめ、妊娠と中絶を繰返すことにより起る、弊害の恐しさをさとした。

茂子は、

「妊娠しない、何か良い方法があるの」

と聞いた。私はリングを使用することによって避妊の目的を達す方法もあると応えた。

「金がかからないようだったら処置して」

茂子は、そのまま私について来た。リングの挿入に麻酔薬を使わない人も居るが、私はいつも使うことにしている。リング指導は、習熟した私には時間は掛らない。処置を終って器具を消毒器に投げ入れて居ると、ぐったりと海鼠のように伸び切っていた茂子が、薄目をあけて声を掛けた。

「先生、何時ものように浣腸して」

女の浣腸愛好者は、記録上にも数少い。茂子は、私にとって貴重な研究対象だった。

いつものように求められるままに猿轡を噛ました。イルリガートルを懸架に掛けて浣腸の準備が終ると、子宮バンドを締めさせた。子宮バンドは本来、子宮前屈の匡正をするために必要な突起が前に着いている紐状のバンドである。市販されている痔疾用バンドの突

起が前面にあるものと思えばよい。これは、イルリの嘴管を固定するためには便利だった。白濁した液が、渦を巻いて下降し始めても、蠢めく茂子を私はいつものように無感動で見ている。茂子は例により、このおぞましい刑罰を愉しむようにうっとりしていた。暫くすれば、苦痛にのたうつ地獄絵図が展開する筈だ。廊下で物が軌しむ音がしたが、私は気にも留めなかった。部屋に鍵を掛けなかったのが、手落ちといえば手落ちだった。だが私としては、医師として処置をしているだけだから、別に施錠の必要はない。私が向きを変えた時、手術室の扉がかすかに開いて居るのを発見した。慌てて戸に近づくと、小柄な若い男が、靴のまま玄関を横っ飛びに表へ逃げた。

物音に、我に還った茂子は、その男の風態を、私にしつこく訊いた後、先刻の甘美に酔う表情は消えて真蒼な顔になった。衣服を着けると、大急ぎで歯を噛みしめながら、帰っていった。

私は、先刻の男が、たとえ茂子の夫でも医師としての範囲に逸脱してはいないつもりだ。

茂子が、その足で警察に行き、私を告訴したと聞いて吃驚りしている。夫に、自分の行

為を発見された瞬間、立場を良くする為の演技だと思う。私が職業を利用して、茂子を犯したと言われるのはまことに心外だ。麻酔中に幻覚を視ることは良く有る。私は、貧乏で看護婦が置けなかった。婦人科医は、処置の際には必ず看護婦に立会わせるのが例である。私は、貴方だけに告白したい。満洲で、ソ連軍に追われて逃げる途中、受けた銃創がもとで私は男性としては失格者になった。つまり不能者となってしまうのだ。

(三) 茂子の夫の供述

私が、茂子を初めて識ったのは、茂子が、お時さんに連れられて、昼休みに、私の勤務している倉庫へ入って来た時だった。

茂子は、顔は子供っぽいのに、体は所謂グラマーだった。特に、胸の隆起が作業衣に大きな突起を示して、圧倒された私は眼をあげる事が出来なかった。

お時さん達が倉庫に這入って来るのは、勿論、会社の材料をくすねて、手製の月経帯を作るためで、女達は、以前、会社が生理用品を製造していた時の経験で、現在でも手持の材料で、器用にバンドを作った。茂子は、いつまでも不器用だった。針を持って縫

うのを観ていると、まるで雑布を刺しているようだった。見兼ねた私が、ミシン掛けをして作り上げてやると、私の眼の前であるにもかかわらず平気で穿き替えたのには吃驚りした。年頃の娘だというのに、羞恥心というものがなかった。

それ以来、茂子は用もないのに、しばしば倉庫に這入って来て、媚態を示した。内気な私は、茂子の体に圧倒されて、唾のようになっちゃった。ある時、何かの拍子でお互の体が触れた。どちらからともなく抱き合ったが、私は巨大な胸の隆起に圧倒されて、生ゴムの板の上に倒されてしまった。驚に押えられた雀のようなものだった。勿論、茂子が驚で、私が哀れな雀か雲雀の恰好だった。小心な私は、歯がガチガチと鳴って上手く接吻さえできなかった。茂子は、「あんたア、わたしと結婚してくれるわね」と、私に有無をいわせない程、性急に事を運んだ。

私は、小柄で温順な女が好きで、茂子のような大女は好きな型ではなかったのだ。しかし、女と交ったのは茂子が初めてだったし、私に対し優しい態度を示して呉れたのも茂子だけだった。

生活に餘裕がなかったもので、式は挙げなかったが、私たちは結婚をした。茂子の叔母さんの家に、荷物を取りに行った時、叔母さんは白い眼をして

「お前さん、あんな女と一緒にあって大丈夫かね。何しろ、中学のときから男と外をほったき歩いてばかりいるのさ」

と、散々に毒づいた。茂子は、ガムを噛みながら平気な顔をしていた。

「小さな時から面倒をみてやったのに、工場に通うようになって、一円の金も家に入らず、物を買って来ても一人でそこそ喰ってしまうのさ」

叔母さんは見送りもしてくれなかった。世帯を持ってから、段々私は、茂子に体つきだけで無く、心理的にも圧倒されて、受身になってしまった。悲しい私の性格的な弱点だった。私は、茂子の眼を盗んで、夜間、時々家を留守にした。

恥ずかしいことなのだが、私は夜の探訪者として夜の街をさまよい忍び歩いた。覗きは私の身も心も身動きのとれなくなった茂子からの圧迫を逃れて、自由に泳ぎ廻れる唯一の秘めた楽しみだった。

私は、千葉県の小さな漁師町で育った。女

が男以上に稼ぐ土地柄で、気性の荒い漁師気質は、セックスに寛大で開放的だった。

漁師達は、長い海の生活を終って帰ると、申し合わせたように昼間から雨戸を締めた。

入口に魚籠を吊してある家には、訪問者も遠慮するという風習がある。若者溜りに集った私達は、たあいもない話に打ち興じた後、グループを組んで魚籠を目当てに「覗き」に出掛けた。「覗きは、此の界限の若者にとって好色よりも好奇心を満足させるスリルだった。友達、覗きが済むと、その足で好きな女の処に夜這いに出掛けた。私は、気の弱さから家人の寝ている中を意志も分らぬ娘の処へ忍ぶ勇気が無かった。自慢気に、翌日、仲間達が昨夜の冒険を誇張して報告するのを、片隅で黙って聞いているのが常であった。

そんな私にも、誰も知らない隠れた楽しみがあった。廃物の釣竿にテグスと針を工夫して、軒先に干してある女物の下着を、屏越しに釣り上げた。私達は、これを「タコ釣り」と謂っていた。私は、部屋に戻ると、釣り上げて来た下着を前にしてその家の女性の面影と体臭を嗅ぎとり、自慰と妄想に青春を燃焼させていた。

六年前に、この工場に就職した。下町の女

工員の浴せる卑猥な冗談を背にして、倉庫の中で湿った黴の様な毎日を送って来た。

茂子と初めて交渉を持ったが、正直の所、夢想していた悦びはなく、惨めな敗北感が身を噴んだ。

茂子は、半年で妊娠したが、

「赤ん坊なんか育てるの、嫌だわ」

と、いい張った。結局主張通り墮胎させることにした。茂子は、何処かの医院に手術科として六千円持って出掛けた。中絶手術後の茂子は、何故か夜の要求が目立って減った。

私は、いつとはなしに漁師町時代の夜の探訪を復活させるようになっていた。昨夜も、茂子が夜になっても帰って来ないのを幸い、目星を付けて置いた家へ、冒険に出掛けた。

ところが、予期に反して何事も起らず、足取りも重く帰宅する途中、産婦人科医院の前を通った。門は無く、玄関の戸が半開きに成っていた。誘い込まれるように、靴のまま玄関に昇った。

真暗な闇の中を、灯の洩れる方角に進むと、診察室と書かれた部屋の中から、女の呻く気配と、何か男の話し掛ける声が聞こえて来た。

私は、ドアを体で圧しながら、静かにノブ

を廻した。古びたドアは軋んだが、中の男は仕事に夢中で振り向きもしなかった。更に、少し開いたドア越しに部屋の光景を覗き見て吃驚した。

女の顔は、白衣の男の陰になって見えなかったが、奇妙な機械に縛りつけられ、両足を宙に舞わした恰好は、何ともグロテスクだった。台の横に吊ってあるガラス瓶の水が音をたてて減って行くに従って、女の呻きと身悶えが激しくなると、縛りつけられた肢体を揺

すって声にならぬ悲鳴を挙げていた。始めて見る奇妙な、私の心をそそる光景をもっと良く覗こうと眼を寄せた途端、ドアが大きな音をたてた。

白衣の男が、不意に振り返った。私はその男の横顔を見て、呼吸の止まるほど吃驚した。見覚えのある本荘医師だった。私の郷里で、産婦人科医院を開いていた本荘は、患者にいかかわしい行為を繰り返して、悪徳医師として、小さな町の評判になった。警察の手が

廻る前に、本荘は姿を消した。

私達グループは、当時悪評が高くなりかけた本荘医院に、未知の奇妙な世界を感じて、覗きに忍び込んだことがあったが、窓を物色している内に、本荘に発見されて、数々油を絞られた。危うく、警察に通報される所を、奥さんのとりなしで助かったが、その奥さんも、夫の愚かしい奇行に愛想をつかして、本荘と別れてしまったということを知った。

その本荘の顔を見て、私は肝を潰した。そして転がるように逃げた。奇妙な機械の上に横臥していた女は、一体、何をしていたのだろう。本荘は、私の顔を見覚えていた筈だと思う。警察に知らされたら、という心配が何よりも先に頭に浮かび恐かった。私は逮捕されるのだろうか。

茂子は、その夜遅く、蒼い顔をして帰宅すると、物もいわずに臥ってしまった。私の恥ずかしい趣味が、妻に知られたらと思うと、いたたまれない気持が一杯で、顔を合わせるのが恐ろしい。

老医師が語り終って、身じろぎをすると、灰皿の上に載せられたまま、白くなった葉巻が音もなく崩れた。

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部一〇〇〇円
略号 A美7V

全部最近撮影の力作！

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フオトの結集版（思わず息をのむ凄じポーズばかり満載）

このグラビア写真集の写真を撮影するため、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフオトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フオトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしていませんから直接発行所へお申込み願います。
△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

野坂昭如の作品

「好色の魂」について

久 我 庄 一

『小説新潮』十月号に第一回・二〇〇枚（次号完結）野坂昭如「好色の魂」がある春本作家の一生と副題され「官憲の弾圧に屈せず数多くの好色本を秘密出版し、春本界の鬼才と謳われ、エロ・グロ・ナンセンスの時代を開いた男の波乱に富んだ生涯」と編集部の鳴り物入りで発表された。いま迄、かの風俗出版界の異端児たる梅原北明については、数多くのエッセイが機会あるごとに種々な研究家の手によって執筆されてきたし、本誌でも新しくは、齊藤夜居氏の「性風俗資料入門」の中にも取り上げられている。

しかし、私の知る所、北明を長篇小説の素材として堂々と四つに組んだ物は無い。それに作者が名作と好き者の間で定評のある「エロ事師たち」を出版。黒メガネが表看板で異色ルポに小説にと、八面六臂の活躍をしているいま売り出しの異色作家、野坂昭如となると、興味もあり、だまっても居られないのである。小説とあるので、その資料的価値について、ヤボなセンサクはしない。ただ、面白かったという程度で感想を述べてみたいのだ。

作中、登場人物名は仮名を用いているが、

読めばすぐこの主人公が梅原北明で、それをめぐる人達であるのは判る。特に注目される個処は、この一回目では、北明（この小説では貝原北辰となっている）の晩年についての記述である。

○時こそ今、敗戦によって天窓を明けはなたれ、誰はばかることなき北辰の、思うさま翼はばたき、奔放に天駆けるべき世をむかえた。だが北辰は、訪れる出版社、金主、友人達の、出版界復帰、いやかつてあれほどまでに情熱かたむけて人間本来の欲望をあくなく追求した、その志のよみがえりをねがう言葉をすべて拒絶していた（本文167頁）

○かつてあれほど自分を苦しめ、家族をいためつけた国家のまさに崩れようとしている。仇敵の倒れつつある時の、あの虚脱感はなんだったのか。そしてそれは、北辰のうちに、今も後をひいていた（本文168頁）

○正午過ぎ、山岸義一が人の好い笑顔をのぞかせ、新橋で買って来たのだがと、芋の粉のむしパンを枕もとへ置く。「何かおもしろいアイデアないかねえ。今は本さえ出しや売れるんだもの、北辰さんが乗り出せば、濡れ手で粟ですぜ。実際……」来るといつも同じ言葉をくりかえし、神田の事務所へも現われて

口説きたてたから、でまかせに、「では釣りの本でも出すか」「釣り？」この食うや食わすの世の中に、そりゃ動物蛋白補給の意味なら話もわかるけれど、にしても人間の餌もままならぬ世に、殺人電車にゆられて太公望きめこむ暇人がどれほどいるやら。「エロでいきましようよ、エロで。私んとこにだって原稿の注文がくるくらいですからねえ。北辰さんさえその気になりや、闇でもうけてる三人なんかで、出版に金を出す奴はいくらもいるんだけどなあ」「なにも三国人に頼むことはないだろう」(本文188頁)

○「釣りの雑誌なら考えてみてもいい」くりかえして、いくらかは本気でもあった。この殺伐な世の中に、すました顔で魚拓ぎょたくのとり方や、竿のえらび方、擬似餌のつくり方の、まったくの絵空事、無用の雑誌を出し、毒々しいエロ本の間に、ならべてみたい気持はある。だが、これでは金主もつくはずもない。

(本文198頁)

○常に編纂者、好色文献収集家、好色出版企画者、一つくらいわが手になる著作、たとえば春本を残してもいいはずだ。いや残さねばならぬ。江戸時代まで、あれほど豊富な語らんと、たくみな表現で閨房けいぼうの描写を行い、纏てん

綿めんたる情緒をかもし出す作品があるのに、明治以後はまったくみられぬ——中略——明治以後の春本の代表作を、自分が完成させよう。あの多くの春本がそうであるように、作者の名前は忘れられても、人間から人間へ必ずうけ渡される春本を書き上げよう——中略——そのねがいは胸をときめかせた(筆者註、北辰の独白・本文218頁)。

引用した文章から、読者各位、それぞれの発見が生れてくると思う。本来ならば待ちにまった好機到来と梅原北明が風俗出版界に乗り出す。再起する。それがなぜ? そうしなかったか——という新発見。私なども、いま迄この小説をみるまでは、自由に出版活動の出来る前夜、急死してしまった北明を、実に惜しく残念でもあった。だが、そうでは無かった。短い終戦後の生存期間ではあったが、そのチャンスをあつたということ。ここからあのエロ・グロ・ナンセンス時代の背景と終戦直後のあまりにも「毒々しいエロ本」ハンランを背景とした、その両端をふんまえて立つ急死寸前の梅原北明像。そして彼の悲惨な私生活。また八月十五日の終戦、文中によると「天皇の読み上げる勅語をこのラジオで聞き、孝(筆者註・北明の子息、中学三年)は

戦いの終わったことを知ると「万歳!」と怒鳴って、北辰は思わずその横っ面を張りどばした。——中略——自分が海軍の嘱託をしているから、あるいは占領軍に殺されるかも知れぬと一瞬のうちに考え、怯えて、そして孝をなぐったのだと——中略——いや、やはり戦いに負けたことが口惜しくもあって、視界がかすんだ(167頁)。

——ここから、私はすぐ、安易に北明と日本精神だましなど結び付けるわけではない。官憲の弾圧に屈せず風俗出版を続けたエロ・グロ・ナンセンス時代を生きてきた、梅原北明の赤裸の人間像がうかがわれて、彼(北明)の昔の活動を知ってるだけ、終戦から急死までの秘められたドラマは、それが小説という形式を取っているが、その作品の真実性に感動する。

ともあれ、この野坂昭如の労作「好色の魂」は、梅原北明への、新しい発見をえぐり出した所に、出るべき物が出た——という拍手を惜しまない。

そして、この悪書追放の嵐の中に、「小説新潮」が、野坂昭如をして「ある春本作家の一生」を特筆大書して発表した意味に注目したいのである。

カメラ・ルポ

この女と

ひと



続・左近麻里子の巻

山本一章

私は、再びここに左近麻里子嬢をカメラ・ルポの対象に選んで、その美しい被縛の肢体を見ていただくため拙いペンをとった。九月号のカメラ・ルポで発表した「この女と」で彼女が好評だという箕田編集長の言に煽られたからでもある。

初回のプレイで完全に彼女の素晴らしさに魅了された私は、憑かれたように彼女を追ひ、二カ月程の間に数回デートする機会を持つことができた。その間、彼女は自ら志願して箕田氏のカメラの前にも何回か立った模様で、私とのデートの際に、前の縄跡が残っていたことも少くなかった。しかも彼女は、回を追う毎にM性を強く示し、情容赦のない強い縛りにも愚痴をこぼすことはなかった。左近麻里子嬢は飼育された女性ではなくて、いわば発掘されたマゾ女性と言えるだろう。私はその存在を貴重と思う。

続篇だからと言って初回のルポと同じような形式で、だらだら続けるのは能がないし、また読者の中には興醒めに感じられる向きもあろうかと想像し、角度を変えて女体の緊縛美と被縛の反応の描写に重点を置いてペンを進めることにした。従ってフォトもなるべく平凡なものを避け、数多いネガの中からムー

ドのあるものを選んでみたつもりである。左近麻里子嬢の、美しい肉体の表情を確認していただければ幸いである。

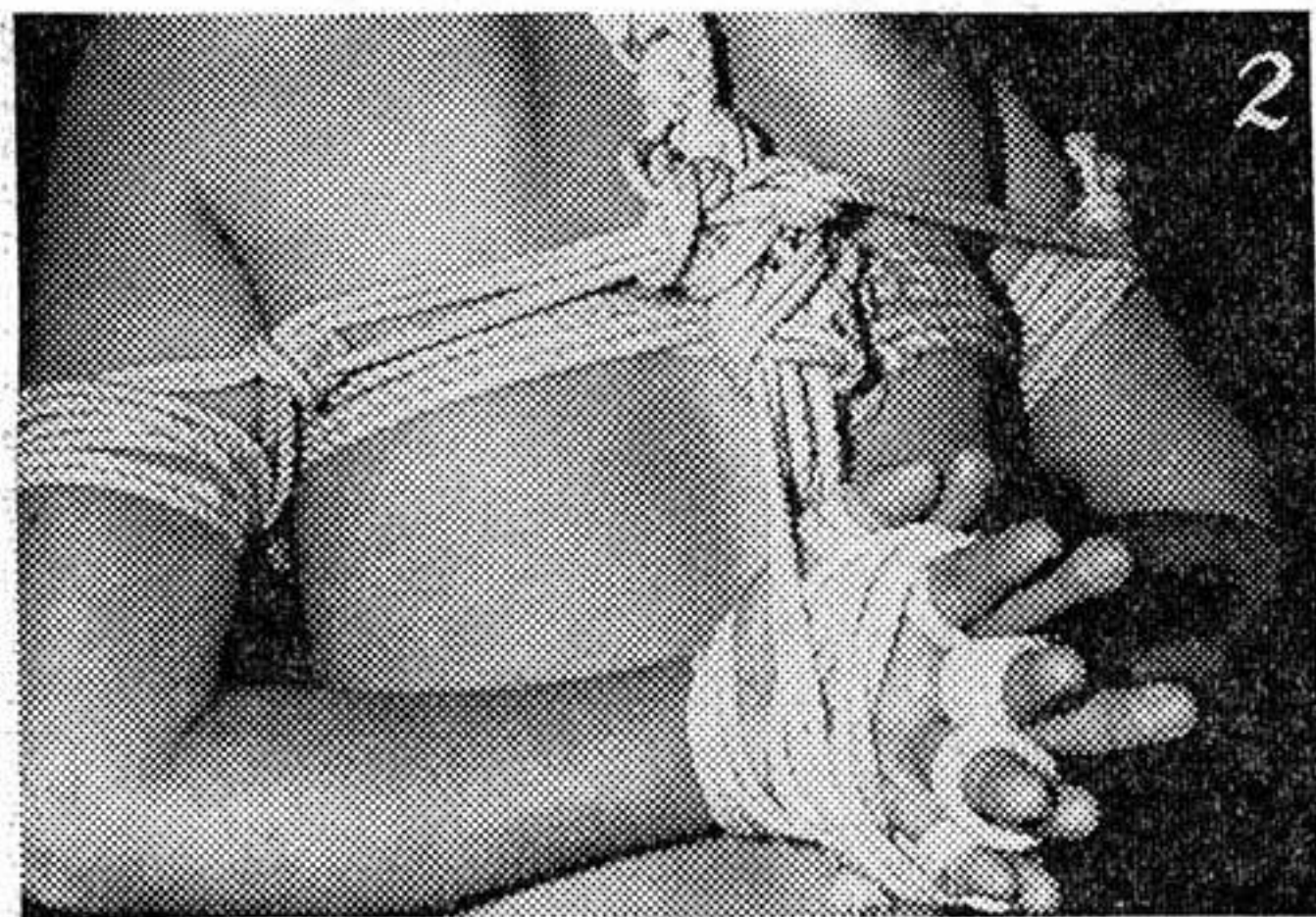
○

「ルポを拝見しましたわ。野外のフォトが綺麗に撮れていましたわねえ」

私は、九月号に発表したカメラ・ルポにも書いたように、初回から容赦のない緊縛を試み、磔から逆吊りまでも、強引に実行した

手前、或いは再び左近さんと逢えないかもしれないと一抹の不安と危惧を抱いていたのだが、私の呼び掛けに快く応じて来阪した彼女の口から、この言葉を聞いた時は、本当に救われたような気持ちになった。

「もう懲りて来てくれないんじゃないかと案じていたんですよ」
「そうね。あの翌日あたりから体のふしぶしがすごく痛んで困った



わ」

「じゃ、今日は駄目？」

「わざわざ呼んで置いて、そんな聞き方ってないでしょう」

彼女は笑いながら、いたずらっぽく私をにらむのだった。そんな左近麻里子さんの第二回目以降のプレイは、いつの場合もスムーズに進行し、じっくりと女体の緊縛美を狙いたいという私の意図が阻害されたことはなかった。

私は自分の趣好に従い緊縛には一切の着衣を許さなかったもので、ポーズによっては発表できないものがあったって聊か残念である。尤も私の場合、プレイもフォー

トも純然たる個人的趣味であって、ためにする仕事ではないので、その点御了解いただきたい。
それでは早速フォトを見ていただこう。先ず写真(1)と、その背面からのクローズアップ(2)である。乳房を締め上げ、二の

腕を引き絞り、掌を背合わせに合掌させて、指にまで強く縄を掛けた完成図である。

ぎっしりと掛けられた縄の量とたるみのない凄じい緊縛感を見ていただけたと思う。口には白い布を噛ませたが、下半身には殊更に縄を掛けなかった。凌辱的雰囲気を残して置くという狙いである。この縛りで彼女の腕から先がみるみる変色した。特に滅茶苦茶に縄を巻いた掌と指が白っぽく血の気を失って、痺れを直そうとするのか指先だけが微かに動くのが痛々しかった。しかし私は直ぐには解かず、ちよっといたずらっ気を出して美事に飛び出した乳房に唇を押し当ててみた。布を噛んだ口からわけのわからない呻きが洩れ、左近さんは胸を左右にゆすった。

この姿勢では胸を後へ引くことができないのである。はち切れんばかりの乳房の量感、男心を激しくゆさぶるものである。私は右手で縄の固く締った背を支え、左手でその二つのなま温い突出部を交互に押えてみた。目を閉じたまま左近さんは今度は頭を左右にイヤイヤをした。その悶えは、私にとって火に油を注ぐ以外の何ものでもなかったが、危うく自制した。

今度は後から背をぽんと突いて歩かせる。

この縛りでは歩行は自由ではなかった。下半身が自由なので、ちょっと考えただけでは自由に歩けるようだが、実際には尻を突き出してよろよろとしか歩けないのである。人間が歩くときには全身を使っているらしい。だからこの姿勢では全身のバランスがとれないのだらう。縄を解くと掌と二の腕にくっきりと縄の跡が刻み込まれていた。掌や指の感覚が殆んどなくなっているらしく、彼女は頻りに手を振った。

「こんな縛り方をされると、本当に身動き出来ないって感じよ。急所をがちりと押えつけられたようにね。それに山本さん、反則は

ずるいわ」

「反則って？」

「さわったでしょう」

「オッパイ位は、いいでしょう」

「わるい人！、突然だ

から、びっくりしちゃったわよ」

突然でなければいい

のかどうか。女心って

わからない。この姿勢

で真正面から写したものもあるが、顔があまり

りはっきり写り過ぎたので彼女の希望を尊重

して提供しなかった。因^{ちな}みに説明すると乳房の上下に

通した縄は両乳房の真中で

寄せ合わせ、乳房の上の縄

には別々に縄を通して両肩

に引き上げ背中中の横縄に巻

きつけてある。

次に写真(3)と(4)

である。両手首を後手にし

っかりと縛り合わせて、そ

の縄尻を天井の棧に通して

引き上げた。これ以上は無

理だという所まで引いたら彼女の肩の骨がゴ

キンと鳴った。しばらくは彼女、爪先立って

いたのだが、きつくなつたのか直ぐに踵をつ

いた。手首以外に縄を掛けられない縛りもいいも

のだ。彼女の美しい全身を、見ていただける

と思う。(4)は、その姿勢のまま左足を曲

げさせ、足首と腿とを密着させて固く縛った

一本足である。これで彼女は完全に動くこと

ができない。カメラ位置は(3)の反対側で

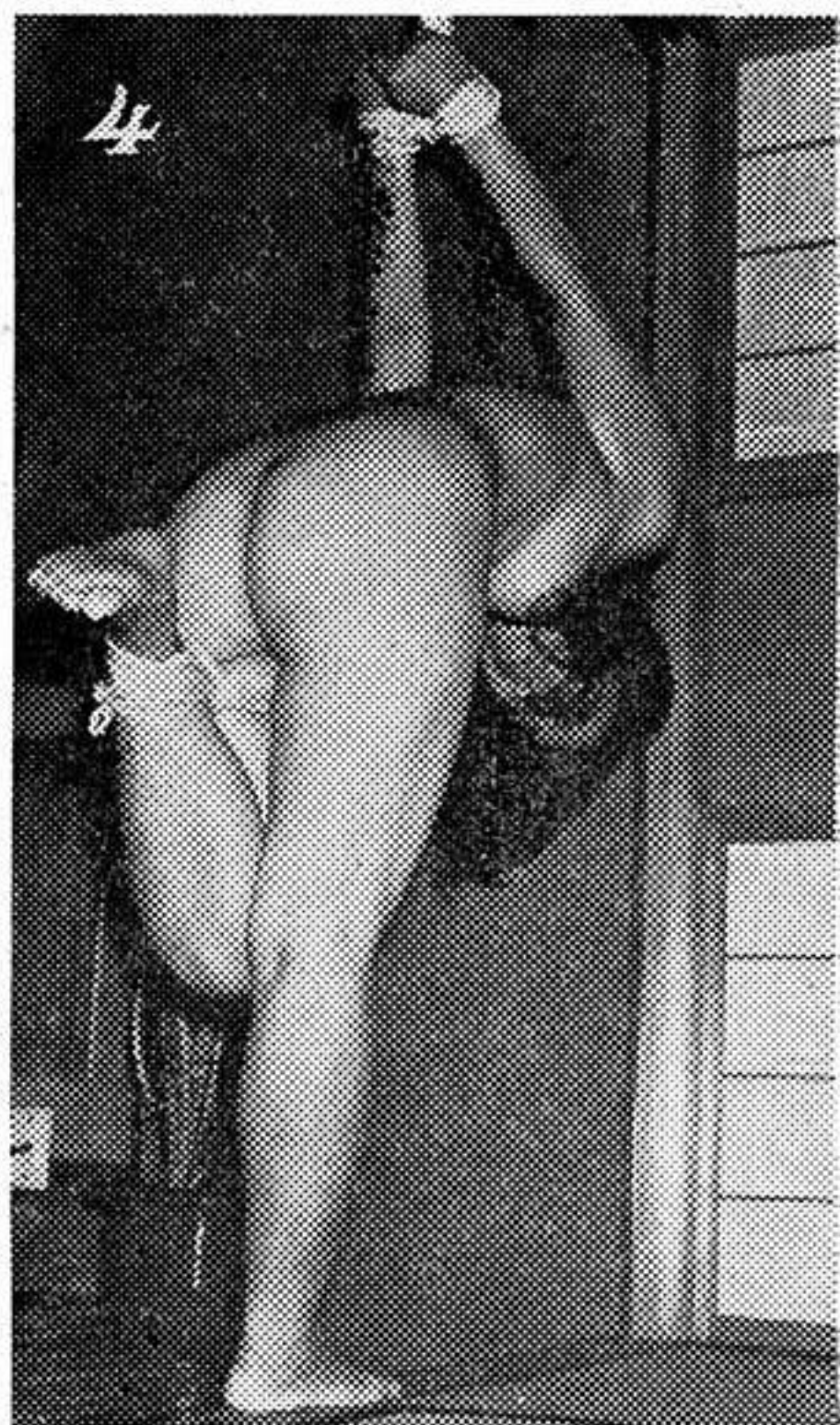
ある。

左近さんの体については、千軍万馬の箕田

氏すらプロポーションの良さを口にする程で

どんな位置から写しても間違いないようであ

る。私は特に乳房とバックが良いと思う。こ



の姿勢で直ぐに思いつくのは尻打ちである。

「ぶたれるのは、いやだわ」と言っていた左近さんではあるが、食わず嫌いってこともある。しかしいきなり無茶はできないので、私は濡れタオルで軽くその双丘を打ってみた。彼女は何も言わない。調子に乗って少し強く当ててみる。

「イタッ！」

小さな叫びだったので、私は無視して打ち続けた。白い皮膚に赤みが差す。打つ度に二つの肉塊にキュッと力が入るのが、妙になまなましかった。

「もう止してあげようか？」

「ええ、もう止して」

彼女はいつの場合も、自分から解いてくれとか止めてくれとは言わないようである。それだけに尋ねてみての答えを尊重してやるのが騎士道(?)というものである。この縛りは解くのが簡単である。

「腕がすごく痛かったわ。ちょっと無理な恰好だわね」

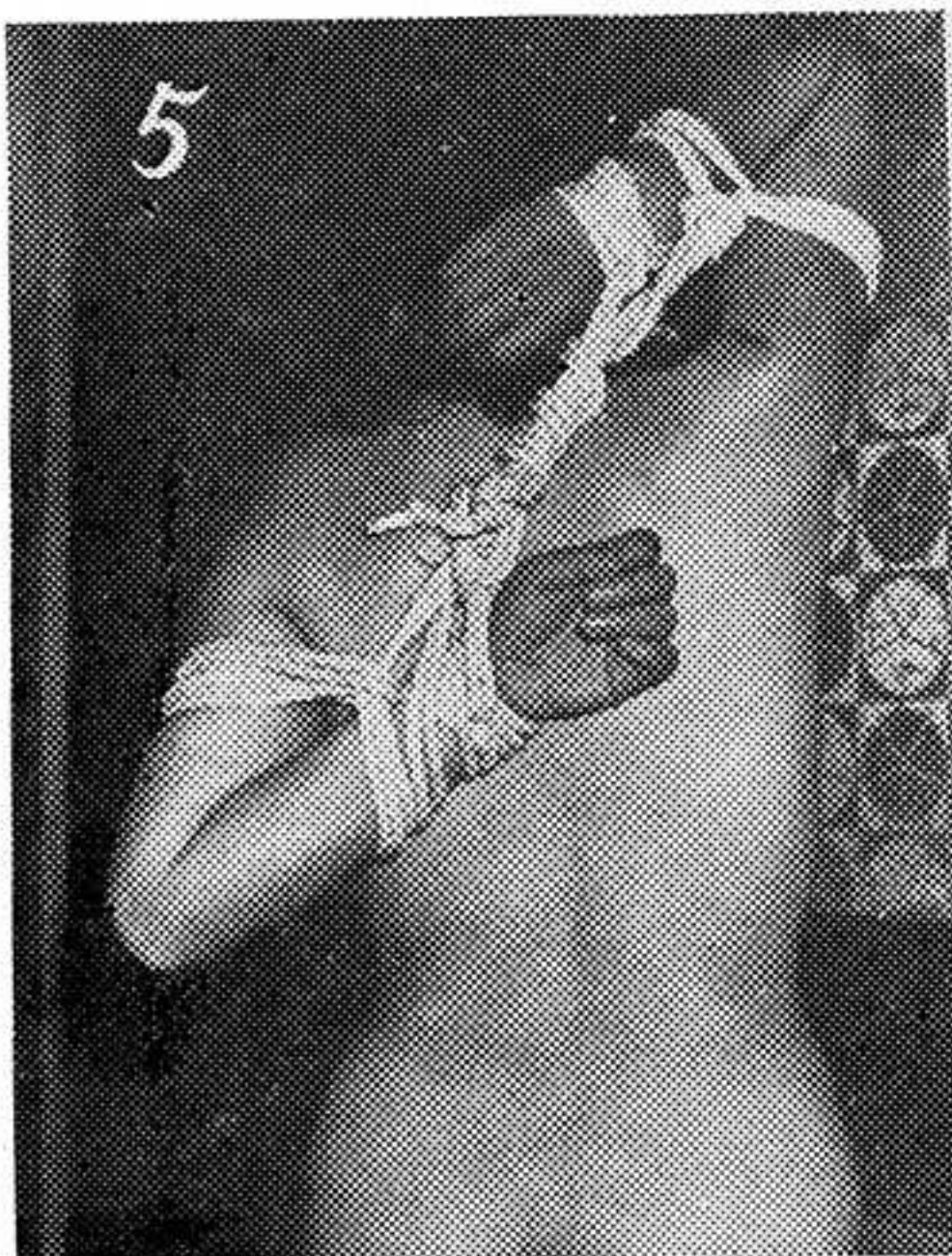
「打たれて、どうだった？」

「そりや痛いわ。でも括られて打たれるって、惨じめな気持ちね。よくわから

ないけど」

私は左近さんが鞭打ち愛好の可能性を持っているとみた。彼女の場合、恐らくそれは飼育によって目覚めさせるべきもののようである。Mの極致は吊りと鞭打ちにあると考える私は、いつかこの豊満な女体を本格的に吊り下げて鞭打ってみたいとたくらんでいる。

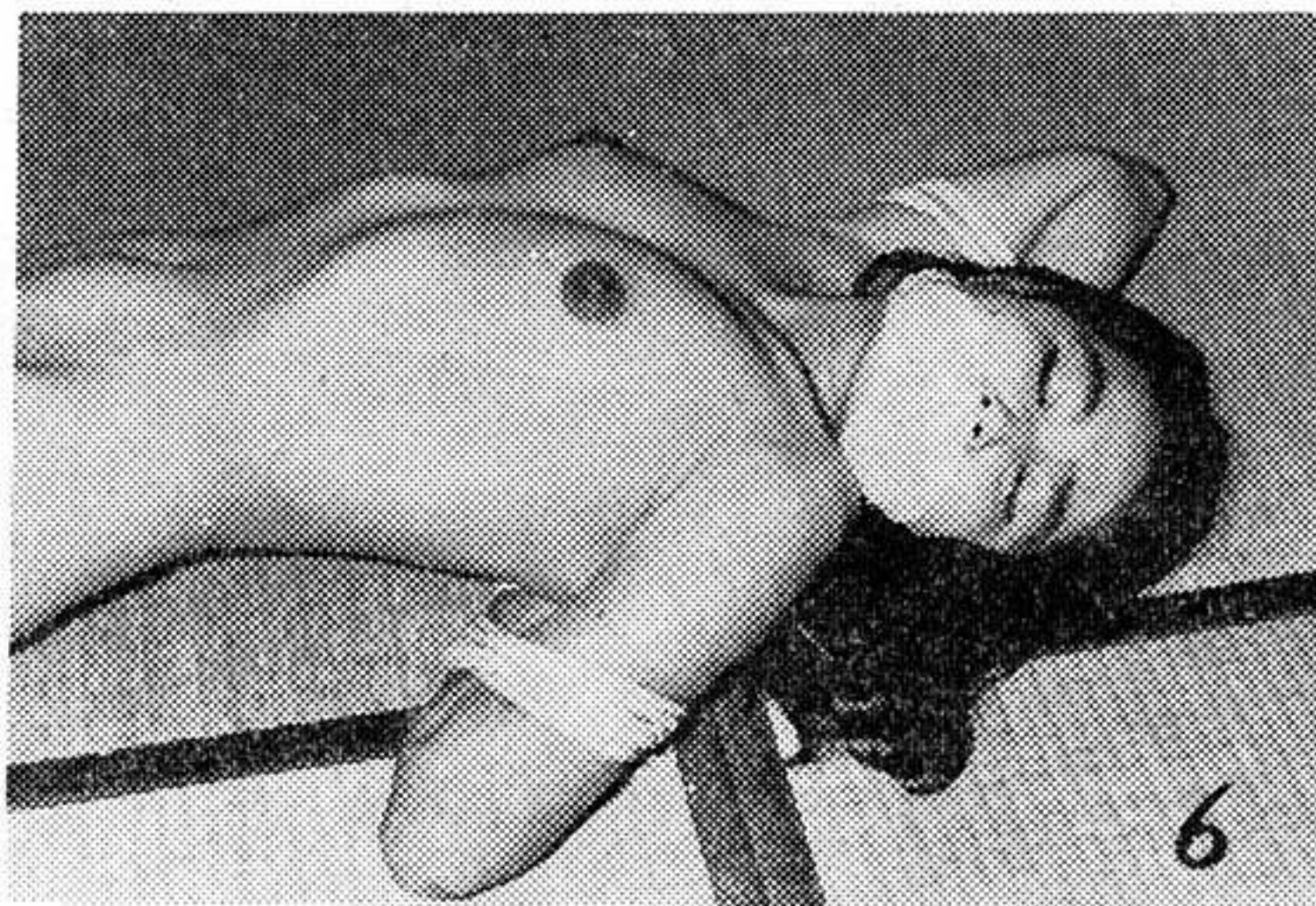
写真(5)と(6)を見ていただこう。立ったまま背面から撮ったのが(5)で、そのまま畳の上に横倒しにしたのが(6)である。両手がつくまで引き寄せてみたか、瞬間的には、これが限度だった。指で引張り合わせ



せるのは美容体操のような印象になるので止めた。手首と腕を一つにして縄を掛けたのが眼目だが、面白い縛りだと思う。女の抵抗を制するという意味からは勿論、そのまま次の責めが期待できるという意味からも恰好のものではないだろうか。

この縛りのまま立たせたり仰向けに倒したりしたが、特に無理な位置はなかった。勿論彼女にとっては相当辛かったようで、両の掌は直ぐにうつ血していた。この縛りで、鼻孔や口腔への責めも、乳房や腹部へのいたぶりも、そして腰や臀部への打擲もすべて容易である。足の束縛方法と腰の屈折具合によっては浣腸責めも面白いと思われる。

次に(7)と(8)に移る。私の好きな、そして、いささか自信のあるクローズ・アップである。左近さんの豊かな肉体の前面を、立たせたまま横と下から狙った。縄の直線と曲線がいい感じの模様となって、女体の厚みのある肉感を強調しているように思う。尤も縄や皮膚のデテールが印刷では、どれ程鮮明に出るか不安ではあるが。彫像のような女体のポリウムとバランスが、この種フォートとしては多少の芸術的ムードを表現しているのではないかと自負している。



御批評を得たいものである。

■実際左近さんの肉体は、そのプロポーションといい、肌のこまやかさ滑らかさといい、素晴らしいの一言に尽きる。ヌードモデルでも、彼女程の女性はそう多くないのではないかと思います。ましてやM女性というのであるから全く貴重な人だと思う。彼女に

魅了された私のひが目であろうか。このフォトの場合、縛りの説明は抜きにして読者の鑑賞に委ねた方がいいと考え、特に縄の行方を書かなかった。

最後に、フォトは割愛するが数多く試みた姿態の一例として少し説明すると、両腕を後へ強く引き絞り、そのために伸びた手首の縄尻で臀部を割って首縄に繋いだ縦縛りにしたのがある。顔の上に目かくしのために貼りつけた半紙が呼吸の度にヒラヒラしていた。この姿で私は部屋の中を引き廻わした。

次には平凡ながら海老縛りにし、そのまま横倒しにしたり仰向けにしたりしたのだが、発表は不可能。最初から転がすつもりで胴と腕は柔らかい縞の縄を使用したのだが、それでも手首と二の腕あたりに内出血の跡を作ってしまった。季節が夏だけに済まないことをしたと思っている。

あぐらをかいての海老縛りは、女性にとって羞恥に充ちたものであるが、それで転がされれば最も無防備で危険な体位になる。彼女がそこまで私に許してくれたことは感激で、それだけに私としても一切の反則行為をしなかつ

たことを蛇足として付け加えて置く。そして彼女の体のすべての部分が魅力的であったことも。私がもう少し若かったら、或はプロポーズしていたかもしれない。

「恥ずかしかった？」

「うん、でも、それどころじゃなかったわ。腕が痛くって」

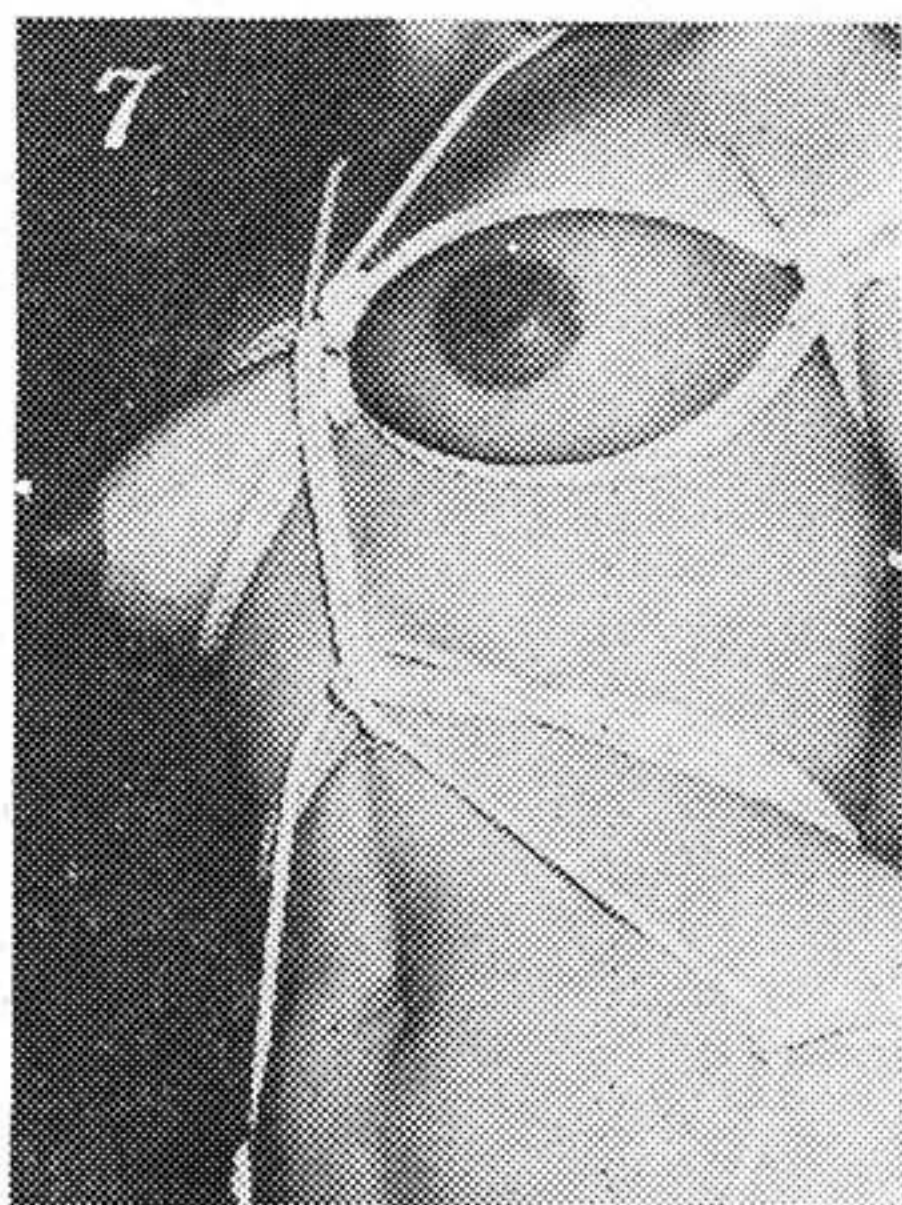
可愛い人である。

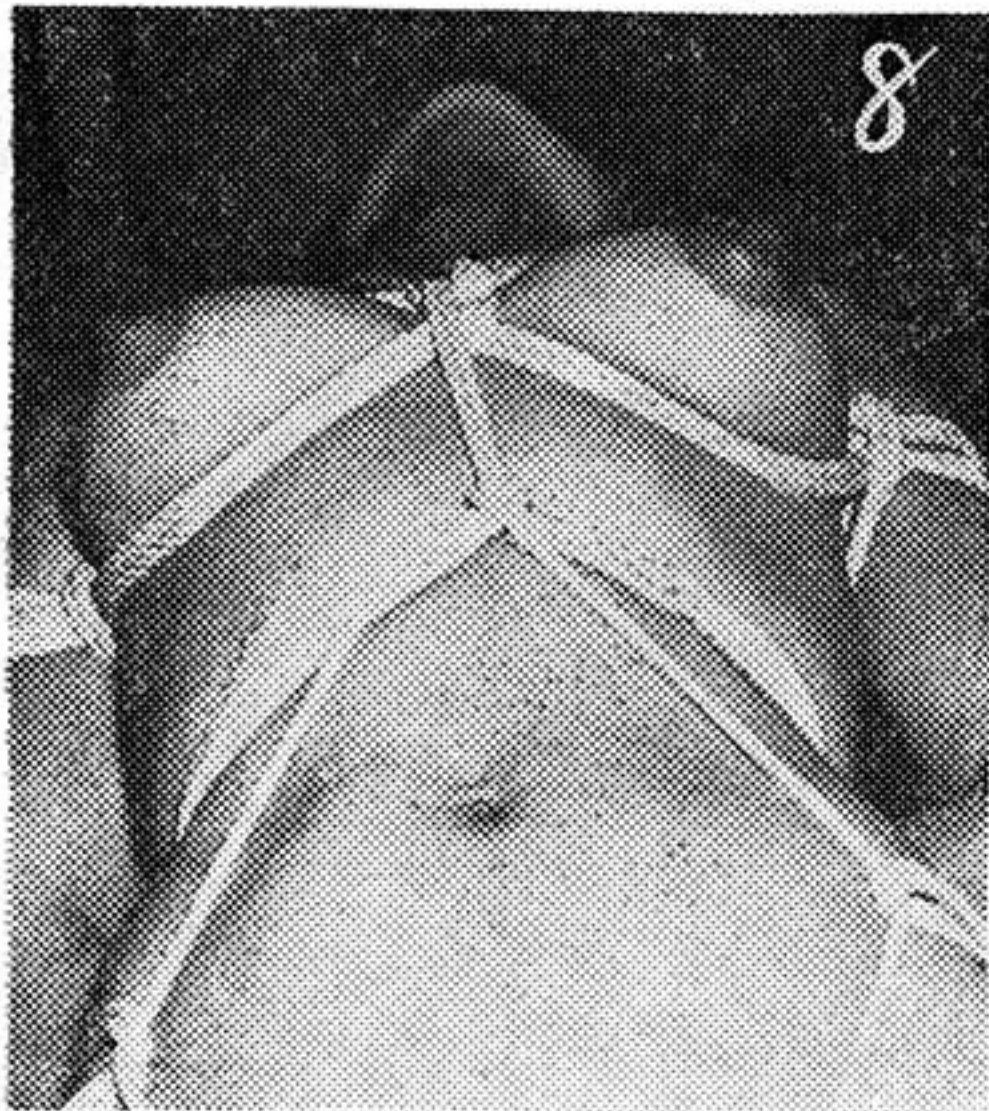
「山本さん、いろんな人を縛っていて辛抱できなくなるってことない？」

「うーん」

「反則ばかりなさってるんじゃない？ このウワキモノ」

彼女の白い指が私の腕を抓ったが、私は冷





静を装った。

「男だから、ないっていったら嘘になるな。」

左近さんには特に参ったなあ」

「じゃ、そんなときはどうするの？」

「どうもしないよ。最初から諦めることにしてるから」

「意気地がないんじゃないの？」

「そうかなあ」

左近さんは、ちょっと怒ったように横を向いた。私はそんな彼女を愛しく思った。顔を両手で挟んで私の方を向けさせ、その額に軽く口づけをしてやる。

「癪だわ」

彼女は笑いながら呟いた。

「誰か私を滅茶苦茶にしてくれる人っていないかしら。時々そんな気持ちになるの。でも変な男に本当に滅茶苦茶にされたら泣いて恨んじゃうだろうと思うけど。山本さんはどうして結婚してるの？それが癪なの」

私は、彼女の体の中で燃えようとしている若い血潮を敬遠する外なかった。平常はつましく、むしろ理性が勝ち過ぎていると思われる左近さんが、これ程切実に求めてきた理由として、この海老縛りの効果を認めざるを得ないのである。羞恥の最後のベールを剥がされた時、女は極端に大胆になるのであるのか。しかし私は、左近さんの緊縛モデルとしての価値を高く買っているし、まだまだ彼女の肉体で、傑作をものしたい意欲を持っている。だから女性としての彼女に深入りしてはならないのだ。それに私自身への不文律も守らなければならない。正直言って、何もかも捨て去って耽溺してしまいたい、と幾度思ったことであろう。

左近麻里子——何度会っても、何回縛っても、いつも新しい魅力を失わない不思議な美しさを持っている女性。

私は彼女がいつまでも奇巧の新しいアイ

ドルとして、数多くのマニアの方々から愛され続けることを願わずにはいられない。

今迄幾度かのデートで、その都度、大阪駅まで送っていった私は、いつも彼女の後姿に別れの切ない視線を送っている自分を発見して、愕然とすることがある。

ノースリーブのワンピースの上から、三の腕や手首の縄のあとをかくすため、長袖のカ―デイガンを纏ったこの娘が、ほんの一時間ほど前には、私の緊縛のもとに豊満な女体にくねらせていたのだと思うと、雑踏の中の人目もかまわず、私は彼女を力一杯抱きしめたという衝動に駆られる。

簡単な、それでいて親愛の情のこもった別れの挨拶を交わすと、彼女は改札口の人混みの中に姿を消してゆく。今までの楽しみが大きかっただけに、反射的に別れたあとの淋しさが私を虚脱させてしまう。

しかし、今、彼女は新しい緊縛の担い手を求めている。誰か彼女のよきパートナーとなるS男性の現われることを、私は心から願わずにはおれない。主観ばかり入り過ぎて、まとまりのないルポになってしまったが、読者諸兄姉の感想など、お聞かせいただければ、私にとっては望外の喜びである。(おわり)

告白

紐のある青春

予 世 場 良 三

奇クの小説なり告白なりを読んでいると、投稿者はS・Mを問わず、皆さん揃ってたいへんハンサムで、女にはモテモテのモテ——コレマタケッコウの印象を深くする。現代の若い女性から、住む次元が違うのよとばかりにつれなくされ、さすがに「オジイチャマ」ではないが、完全に「オジサマ」の部類に追いついて情けなく、シュン太郎になって、手鏡と毛抜を両手に白髪をホジクル私にとっては、実に羨ましく肚だたしい。

先日、飲み屋の女の子が、「オジサン」と

口走ったので、すかさず「若白髪だよ、ボク」といってみると、彼女、ニンマリして曰く、「シラガじゃないわ。シワよ」そしてすぐに打消して「ウウン、ちがうわ。貫録よ」と来た。「コンチクショウ！」忌々しかったが本気で怒るわけにいかぬ。それからの酒は、にかかった。

へオンナ百人片手で難いで……

やけくそで唄い始めると、パチパチと拍手がきた。その娘が叩いたらしい。そして私の横へにじり寄ってきた。「オレの唄もまんざ

らじゃないとみえる」私は少し気嫌がなおった。眼があうとニッコリしてビールを注いでくれた。「ハイ。オンチ賞」私が再びシュンとするのに、追い討ちがかかって来た。「お風呂の中だと、たいていの唄は上手に聞えるんですってね」

私のシュン太郎は大きな顔をして、私の全身をスッポリ包み込んだまま、私に腰を上げると盛んに尻をひっぱたく。

「若い小娘なんぞにモテたってしようがなかろう。モテたからってすぐ縛れるもんでもなし、OKたって、ただ縛りさえすればいいってもんでもなからうさ」……勿論、負けおしみて、ぶつぶつ呟きながら歩くのが常であるが、だからこそ誌上に現われるプレイ・ルポのモテるS族に羨望を覚えるのだ。

しかし、私たりとて、現在までモテずっぱりで来たわけではない。紅顔の美青年、行くところろ交通巡査あり——この意味おわかり？ おわकारの読者は教養高き人。あとで大学院から学位を贈られる——かどうかは別として私が街を歩く時には頭巾をかぶるようにとの依頼が、交通課からあって——もいい程、ゾロゾロと若い娘が群り寄って道路を遮断、従ってオマワリさんがその整理に……もう止そ

う。使い古された落語ネタじゃあるまいし、ね。

モテない男のたわごとを読まされるために大枚の金を投じて買ったのではないって？

ご尤も。でも、これもなにかの悪縁と思っ
ていたきたい。アナタ、今年の大掃除の時
ズルケていたでしょう。だから……。

——というわけで、ブツブツばやき乍ら、
南の繁華街を歩いていると、後から肩を叩か
れた。振り返ると美女がホホエんでいる。
中年の一年生ぐらいの年令とみえる女性だ。

「お久し振り」

水商売の女性でないことだけは、落着いた
奥様風の感じからわかるが、どうも思い出せ
ない。だから、いやにナレナレしいのが気味
悪い。

「お忘れ？」

女は、バッグから眼鏡を出してかけ、チヨ
ット顎を引きながら首を捻ねる感じで、小首
をかしげてニコツとした。

クセのあるクセだ。とたんに頭の中に一つ
の顔が現われ、目の笑顔と重なり、ほぼ合
致した。

「シロチャン？」

女性の笑顔が、よけいにほころびてコック

リコックリした。これも目憶えあるクセだ。

——というわけで、十年余ぶりで、私をタッ
クルしようと目の色を変え、数百人、いや数
十人、いやいや数人、——二人、そう、二人
のライバルとしてのぎを削った彼女に再会し、
ある天ぷら屋の小間に、向い合ったのであっ
た。——これからが、いいところ。

当時十九才。私をもふくめて読者好みのグ
ラマー。シロチャンというニックネーム通り
の白い純肌の持ち主。眼鏡がよく似合い、愛
らしく柔順で情熱的……というほどでもなか
ったが、そうしておいた方が都合がいい。

数百はウソだが、三人の適齢期の女性にモ
テていた私は、中でも、一番若いくせに早熟
ともいえたシロチャンを、十五、六回？ も
縛ってやったことがあるのだ。

最初はもちろん、現在のようなプレイ欲で
縛ったわけではなく、動機と理由がチャンと
あったのだ。最初、彼女に縄掛けしたときに
は、勿論ハダカではない。初夏に近かったと
思うが、たしかツーピースを着ていて、上だ
け自分で脱いだと思う。殆んど肩までむき出
しの腕に、縄による独得のくびれが深く出来
て、私をなんとも言えない気持に追い込み、
ポーッとさせた。その時の形容しがたい気持

と、彼女の被縛ポーズは、今でも思い出すこ
とが出来る。最初というだけに、それだけ印
象的だったのだろう。

理由は、この際あまり興味はないと思うけ
れど、彼女がライバルの二人（A子、B江と
でもしておこう）より、強いなにかを創り出
すための手段だったことはたしかで、A子に
頼んだ私のタイプ原稿を、隣席の彼女が隠し
て失敗せしめ、小騒動を起しておいて、次の
夜、A子ともども私の下宿に訪ねて来て、告
白した上で、無理に「お仕置」をしてくれと
いい出したのだ。その時の「謀略仕置」は約
一時間程、後手に縛られたシロチャンが、我
が意を得たとばかりに、艶やかなポーズで私
に流し目を注ぎながら、縄尻を畳に曳いて座
っていたに過ぎなかった。

プンプン怒っていたA子は、始め憎悪の表
情で縄（といっても、私の部屋にある紐類だ
ったが）を探すのを手伝ったくらいだった
が、しばらく眺めているうちに、慌てたよう
に早く解こうといいだした。しかし、受刑の
彼女が、まだ早いと否定し、いい争いの恰好
になって無言で眺める私の前で、解く、解か
せないで、やりとりしていたが、縛られた方
が押し強く、半泣きのA子がムシャブリつい

て、逃げ廻る彼女を「暴力的に解き放した」のだから奇妙なものだった。

「アタシ、あんな悪いことしたんやから、クラレルくらいでは済まへんワよ。それに、もう解くやなんて早すぎるワ」

「もう、あのことはええっていうてるやないの。あんたしつこいよ」

「アカン、もっとキツイお仕置を、予世場さんにしてもらはな、氣い済まんワ」

「あんた、そんなこと言うて、予世場さんの氣い、引こ思うてんでしよう」

「……………」

「ククラレて、哀れ氣な恰好を見せつけて、同情して貰おう思てんでしよう」

「やったら、どうやていうの！」

「……………」

「口惜しかったら、アンタもククつてもろてどっちが美しいか見較べてもろたら、エエやないの」

「……………」

「まだまだ、解かせへん。それに解くのも予世場さんに解いてもらうわ」

……というわけで、縛られたシロチャンの方が優勢だった。

翌日から、多分、A子より聞いたのである

うB江までが加って、三人のライバル意識が目立って表面化し、私は入れ替り立ち替りの攻勢を受け始めた。いやそのモテルことモテルこと。女の居ない国に行きたい……とまではいかなかったが、好男子はつらいものだ、という氣になったものだ。

先ず、シロチャン撃退のためか、共同戦線を張り、同盟を結んだらしいA子とB江が、翌日早速に下宿に乗り込んで来て、彼女の非を大いに鳴らし出した。いろいろ棚下しをしたようだったが、私の思い出の中に残っているのは『計画的な口実で、ククラレルようにし向けるなんて最も卑怯なテよ。想う人にククラレルことは、体で誘惑してるのと同じことで、フェアじゃない。直接的な、そんなことをする女は最低の最低のまだ最低』といやに最低に力を入れてのこき下しだった。

私としては、その最低さだけが、非常な魅力だった。モテル男としては、その三人の内で選ぶべきだとするような負い目はサラサラなく「来たるは拒まず」式で適当にあしらっていたが、シロチャンの、赤い腰紐を縫いつないだのを持参の「最低攻勢」だけは、内心待つようになり、日が重なるにつれて彼女の大胆さが徐々に素肌の露出度を大きくし始

めて、その縛り方も複雑に、入念に、そして強烈になり始めた。

そして、彼女は単にラブ達成の手段ではなく、天性のマゾ性保有者であることを私に悟らしめ、同時に私自身に、軽度ながらサドの血の流れていることを覚えさせたのだ。

さすがに若い頃からの紳士、知性と教養に邪魔されて（ホントはイクジなしだった）彼女が自ら脱ぎかけたことあるパンティだけは押し止めて、赤い紐痕が白い肌に残ったのをなぜながら帰る彼女を送ってから、かすかに後悔し、明日こそはと氣負い立って、又、その時になると同じことを繰り返していた。

そのパンティ一つの白い若肌に、赤いしごきを喰い込ませて夢中になっている態を、突然に闖入して来たA子やB江、それに下宿のオバさんや、その娘などにみられたことも一再ならずあり、妙な目でみられるようになってしまい、オバサンから「ウチはアイマイ宿じゃない」と皮肉タツプリの注意をされるようになってしまった。その娘も、三人に較べると大部オチルが、結構、私に親切だったのだが……。私はすぐに、そこを引き払いアパートに移った。当時、高かった保証金を工面するのに、課長や係長からも相当に皮肉

られたものだった。社内でも噂さの的になっていたらしい。出所はわかってる。急によそよしくなったA B両嬢の態度からも、叶わぬ恋の仕返しはテキ面である。尤も私に対してではなく、シロチャンに向けての標準だったろうと思うが、放たれた矢の被害は、当然だろうが私にも意外に大きなものだった。

それから何日も経ずして、彼女は退社した。そして私も極端に仕事やりにくくなった。風当りもガラリと変り、意を決して出した辞職願いも、待ってましたとばかりに、いとも簡単に受理されてしまったのだ。

六年ばかりだったが、下積み社員の苦勞を経て、年のわりに異例の昇進で係長次席のポストにいい気になっていた私は思い知った。そして自分の至らなさは棚に上げて彼女を恨んだ。彼女の為に「縛らされ」彼女の為に「退職させられた」と腹立たしく、憎悪しながら、赤い腰紐に噛まれた白い肌を想い浮べて悩み、生活は荒れていった。

「今度こそ本当にヒドイ仕置をしてやるぞ」薄暗い四畳半の万年床で、当然訪ねてくるものとして、彼女の出現を待った。

だが日を経ても、当然の訪問者は現われなかった。いらいらしながら私にも生活があ

る。夜の焦りと悩みを朝になると無理に押えつけて、新聞広告の求人欄に目を皿にせねばならなかった。

イヤハヤ、自信満々の好男子も哀れなモノで、モテた報いの手痛さに一たまりもなくK Oされ、履歴書片手にウロチョロしていた姿は、今、思い返しても冷汗ものだ。

以後、彼女とも、A B両嬢とも会うことはなかった。あれ程、熱心だった三人の美女たち？ 特にシロチャンの場合はどうしても私にはわからないが、ピタッと交流は途絶えてしまった。所詮は一時の恋愛遊びだったとしか考えようがなかった。それとも、彼女を縛るだけで、自分のモノにしなかったということが、彼女に、私に対する不信感を抱かしていたともい得るのだろうか。

——というわけで、音信不通だった彼女が、美事な変貌ぶりの奥様風となって、目前に微笑んでいることになったのだ。そしてはじめて知った。私の退職の直前に私を軽べつしきった顔で偉そうなことを並べていた課長のやつが、彼女を一晩中、縛り上げていたことを。そして現在でもパトロンの座に居ることを。私の胸に、待ちくたびれ、悩み、恨んだ当時の苦さが一瞬、想起された。

「貴方、もう少し無茶した方が……」

どういう意味か彼女は言った。

「課長、いや、今じゃもっと偉いだろうが、やはり紐を？」

思い切って訊いてやった。彼女は小さく、こっくりした。羞しそう……いや淋しそうな風情がみえた。縄をまとうための二号さん。そんなわびしさが漂っている感じだった。

それから、どうしたって？

それだけのことです。あの場合、私の出方一つで再び彼女を縛ることは出来ただろう。彼女の磨きのかかったマゾが、触れなば落ちん風情で、私の強引さを望んでいたかも知れないし、私の血も複雑な騒ぎ方をした。でも、現在は私にも、縄は極端に嫌うけれども妻があり、子供もある。私たちは、しばらく後に、握手もせず別れた。

チートモいいとこねえじゃねえかって？

ご尤も。しかしね、モテモテのモテ。大いにケッコウ。けれど、モテれば波。逃げれば風。無理な縛りは嵐、の場合もあるう。

こう考えるのもやはりトシのせいかな。『オジサマ』……『オジイチャマ』……コレマタ、オオイニケッコウ。

(おわり)

夜の徒然草

中

宮

栄

【白いポスト】

赤いポストが普通郵便使用、青いポストが速達郵便使用、そして白いポストは何んじやろ。

これこそ有名な『悪書追放運動』の△三ないポスト▽である。白ポストを人の目のつき易い場所に安直に設置した善良な人は、恐らく狸の腹のように大いにふくらんで欲しいと祈願している事だろう——よい子を育てる環境浄化はこれによって成し得ると。分別のある人のやる事だ。間違いないだろう。だが、真剣に思っている事かどうかは判らないが、どんな人間様が得々としてなさっている事か見てみたい——その人達の家庭を、パ

ーソナリティを。

一日何万人の乗降客があるのか詳しく数値上では知らないが、田園美破壊の反社会行為を犯しているマイホーム族が激増した影響で単なる遊園地行乗換駅となった『練馬』も昔日の倂げなく（人は面目一新、飛躍的發展というが）通勤時は飼育される緬羊の群の如くホームへの陸橋を渡る人で混雑する。その陸橋脇の交番前に、白いポストが設けられた。発車前のバスの窓から私はそれを眺めながら、果して内蔵物は如何なりや……と思う。平俗な云い方をすれば『悪書』とは警察の保安課あたりが睨みをきかす物であろう。立

番の巡査がいる前に“白ポスト”を置いておき、「さあ、どんどん入れなさい！」と奨励したからって、「はい、入れました。社会美化に協力しました」となるものだろうか。またそうした事をして得意満面、善行を褒賞して貰おうと考える者も、異常な神経の持ち主と云えるし、つまりは、その人が身近かに該当物を発見した事自体、その人の“愚”を嗤って面白い事だ。

『白ポスト』を容認する社会こそ、人間の捨て場となったスプロール現象を起しているメカロボリス
巨大都市の不健全さを表している。

×

×

×

『白ポスト』に読み捨て新聞を投げ込んで行ったホワイトカラー族の一人。活字に置換えるだけの内容がないから網版写真ばかり並べたスポーツ紙を揚げ混雑する電車の中で「俺の新聞読みを邪魔するな」とばかり、押されると反対に反り身になってたド阿呆。こんな公德心のない者を晒しとく白塗りの台でも造った方が余程マシだとは考えないものか。

× × ×

池袋西口、Tデパート地下への階段際に、白ポストがある。

気にくわない悪書なら、庭で焼き捨てるなり仕末すればいいのに、さもさも善行を実践するかのように、家からわざわざ其処まで持って来た夫人——

「あ、奥さん。それをお捨てになるおつもりですか？」

「は？（ジロジロと見て）……はあ」

「ああ、それなら、その雑誌を私に譲って下さい」

「……」

「教育ママさん達が目の仇にしている風俗誌を『研究上』集めている者なんです」



「はあ……。よろしければ」

「ふーむ……古本屋では、この一冊が、今の位しているか御存知ですか？」

「ゾンジませんです！」

「定価三百円とありますが、五倍もしてるんですよ！」

「……（驚きの目）」

「どうせ捨ててしまうつもりだったのですから、只で頂戴してもいい様な物ですが、五百円で取引きを、お願いしましょう。じゃ」

「いりません……とも云わず、却って千五百円もする物をタッタの五百円で！ てな目付きをして、紙幣を握ると夫人は地下の食品売り場へと急いで歩み去った——」

今、私の手許に、往日秘蔵してはあったがワイフとなった高潔な女性の手で焚書にされた昭和三十四年一月発行奇譚クラブ臨時増刊号『悦虐小説と緊縛写真』特集号Vがある。四馬孝氏が意気揚々と絵筆をとり、絹川嬢がニヤつき、大塚嬢が懸命な演技を披露し、未成熟な乳房の花坂嬢が身悶える写真特集が私の目を楽しませている。女の打算をありありと見せた夫人は、一夕の食膳を、悪書のお蔭で大いに飾った事であろうが……思えば思う程おかしい人間社会の挿話である。

× × ×

偏見のために、『本誌自粛の徹底』というレッテルまがいの御襦袢を当てていなければならぬ奇クは哀れだし、編集者の苦慮も並大抵なものでなく、御気の毒にも思う。

新しい風俗文献誌——というサブタイトルがあればこそ私は雑文を寄稿する気持になるが、飲み代稼ぎはしないつもりだ。読者通信の延長だとの御託宣が見受けられたが笑止である——遡って『夜の徒然草』を御読み頂ければ、巻末の四段組頁を避ける理由が御判りになるだろう。奇クに拠って筆のたつ者が、適当に楽しんでるソノ責任において、著述の暴走を戒しめ『発禁の書』の烙印をおされ

ぬようにしなければ、他の「倅せを希求する人々」を悲しませるようになるだろう。これが自省であり、他の寄稿者にもお願いしておきたい事柄である。

【売切れ御礼】

浜美枝のヌード写真で騒がれたPLAY BOY誌が日本では発売即日に飛ぶ様に売れて、海の彼方じゃヘフナー小父さんが笑っている御様子である。——何と日本人は謀略にかかりやすい事か。兎は狸より小賢しい。

このヌード・フォトを巡っての話題は既に尽きたようだし、疾うに忘れ去られた感があるが、リリース／＼契約書をたてに「強要」されたといい、泣く泣くヌードのポーズをとったという美枝の考え方と立ち場は調理してもよさそうだ。

P誌は何処で芸能界と結託し合っているのか知らないが、新人モデルをハリウッドに送り込んだり、人気の落ちた女優を裸にさせて人気挽回に協力する手を甚だ心得ている。それを知らぬ者はないから、P誌から「おおよばれにあずかれば……」と期待する向きも否定出来ない事実である。狡知な商売人のする事だから、話題が豊富に全世界にばらまかれる——ジェーン・フォンダの盗み撮り事件にし

ても浜美枝醜聞にしても、逆利用するつもりはないと言い切れるものだろうか……。

P誌のカラー・ヌード・フォトはアメリカ物としてはおとなしい。「ナイロン・ジャングル」「コクテール」「ハイ・タイム」等々パラメント社の男性雑誌で扱うモデルの雑多さと、スナップ・フォトなどが目に映ったら、女体の美なんて何んだらうと思うに違いない。それに較べると、P誌のピンナップにはまだまだセンスがあるというもの。F・ウオルフの浜美枝の撮り方は、公刊誌掲載の物として並の出来、どうって事のない無難さである。然し浜には裸になって写されるだけの美的なプロポーション欠除が曝かれた。この「曝かれた」という事を日本人はなれした水着の似合う女優としてのチャンピオンとてはやされていた彼女自身のショックとして理解する方が妥当のようである。ポーズにもよるが、猫背的でありバストが下り過ぎている——つまり観賞用ヌード・モデルのプロポーションではなかったという事である。私などには同じポンド

・ガールズの扱いのように載ったサリー・井上とか云う女性のヌードの方がいいし、スタイルに讃辞を与えたい。

婦人科カメラマンの大竹省二氏が、外人には平気で裸を撮らしやがって／＼と意気まいたそうだが、氏の云うところの「ラシャメン根性」は確かに日本女性にはあるようだ。一千ドルの報酬もまた魅力なのだろうし……。

何しろ、仲々発掘出来ない『緊縛モデル』とは違って、怖れを感じる事なく裸身をレンズに曝して『銭が手に入る』のだから、綺麗に見える女は幸福である。その我れ知らず北叟笑んだ事を、後になってとやかく云うのだから、女は頓馬というものだ。

条件としては「腰から上」と云って応じたのだそうだが、「ヘイ、カモン！」のお国柄



では菜食人種の我々と「裸」に対する感覚が違うのである。

地球の裏側の女性達、ブラジャーをはずす事には強い抵抗があっても、下は案外開放的——という俗信は真と心得えてよろしい。そういう世界で通用する通念として、乳房を見させたという事は、全てを見させる事なのだから、腰から上を条件にしたと云って半分だけのヌードなんて了解されるものでもなく、そっくり全部どうぞ……と云ったと同様なのだ。そこに浜美枝の無知があったと云われても止むを得まい。

× × ×

東京の或る大劇場——そこは舞台機構及び楽屋などの設備からして、外来のオペラ・バレエ団の公演には条件が合い、利用される事が多かったのであるが、公演に参加しているアクトレス達（女優諸嬢）の立居振舞いは、楽屋番の小母さん達をして小首をかしげさせたのである。それは今もって話の種となっているが、シャワーを浴び、廊下をスタコラ歩いて楽屋に引揚げて行く彼女等は、ブレスト辺りにタオルを巻いて、レスペクタブル（尊敬すべき）な場所はフリーであったのだ。

クロールプロマジン／＼麻酔告白薬Vによつ

てルームメイドの一人から見聞を引き出せたら、眉唾だァ……と思う話も納得出来るだろうが……。

× × ×

大体、日本人及び日本の週刊誌あたりのジャーナリストは「裸」を余りにも御大層に考へ、且つ餌にしたがる。

観衆の前に己れを晒す職業が俳優と呼ばれる職種である以上、裸身＝プライバシーと考へるのは誤りである。俳優（芸人）は、己れは見せ物の中の素材でしかないのだから、よりよく生かされた素材にならねば、ギャラを受け取る資格がないのである。

宣伝部のデッチ上げかも知れないが、首スゲ替えヌードで騒ぐ若尾文子より、「痴人の愛」の安田道代の立場を称賛する。裸にさせたらさぞかしいだろうと感じさせる容貌・端麗な容姿がなければ、誰も見たいとも、見せてくれないとは思わないものだ。

——いちいち腹立つのなら辞めちまえ、というのが、過激ではあるが私の言い分。

『007……』は大ヒットし、日比谷映画では開闢以来の大盛況——ここでも「御礼」が見られたのだから、話題をさらいたくてウズイテいる芸能人としては、「汝モツテメイス

ベシ」である。

【マジック・インキ】

手軽に、何にでも書けるという機能的な面はいいが、マジック・インキを使うフェルト筆記具は実際、味気ない物である。

心ある有名人は別として、色紙に書く文字までササッと仕上げてしまふスポーツ、芸能関係のサインを売り物にする「スター」達。彼等、彼女等のサインは、ゴム印を押した位にしか有難味を感じさせない。それだけに墨痕淋漓と毛筆の書を拝受すると珍しくもあり貴重にも思えて愉しい。

——旧号で誰方かもP誌の消された「部分」

のある写真の事について、触れておられたように思ったが、実際マジック・インキは無粋である。隠せば見たがる気持を、そそのかす「ヌーティスト」を撮ったこちら向きのスナップ一葉。税関指令と風紀取締規則の犠牲であるうが、何万冊か売れた雑誌を実に丹念に消したであろう、その事が滑稽ではないか。

マジック・インキは「絶対消えない」と云って売り出しているが、公正取引委員会に誇大広告の角で訴えてやろうか——シンナーで拭けば消えてしまふ代物なのだ。だから、アノ部分が余程見たいのなら、シンナーを使え



役得者人と思われる立場の者Vもいれば、それ故に苦勞する者もいる。兎に角、人間社会はおかしな所だ。

都下の新しく市制が施かれた町に住む編集部から紹介された緊縛モデル志望の夫人は、マジックで抹消するような労力も、修正用のスポッティング・カラーで白くつぶす必要もない。御主人の命により邪魔物は取除かれてしまっていた。関谷夫人同様に。

建売り分譲の新築家屋に招かれた私は、撮影機材一切をつめたバッグを提げて部屋に通った途端其処で思わず「シマッタ」と唸ってしまった。普段から家の中で撮影する時はストロボを使うが、電源をバッテリーに頼らず電灯線からのACコードによっている。当日もそのつもりでいたので、まだ東電のメーターが取付けられず認可されていないとは思ってもみていなかったのである。結果は我れ不成功……夫人が拷問にも等しい「いたぶり」に喜悅する様を、箱の上に点火したローソクの灯の中で瞞めているよりほかなかった。

夫人は、全身刺青を志しておられると云う——その機会には是非ノと云ったが日本的

な絵柄は厭で、ツルバラをビキニのブラジャーのように彫り、背面は「快樂の女性」の女刺青師のように……と云われる。そのため近々香港へ観光旅行を兼ねて、と計画されている由であったが、彼地の世情も不穩であるし……其の後の連絡もないし、どう過しておいでかと気がもめる。

× × ×

マジック・インキで肌を書く……という事は私もよく試みる方だが、今年の夏流行するかな、と思って見ていたが流行らず消えたものにフランス産れの「いたずら書き」があった。インスタントの刺青である。だが街を歩いていて腕に巾広く縋帯を巻いている「女の子」を見かけると、あの下にはインスタントでない刺青がされてあるのだろうか……と想って眺めたりする。矢張り恥しさと、後めたさがあったて隠す努力をしているつもりなのであるが、消せないものを肌に彫る事を、どんな気持でやったやら、と聡明さを欠くそれらの女性を見ながら考えてしまう。

【刺青雑感】

猟奇的な関心から、エロダク作品に限らず日活・東映・大映の、いわばノレンを誇る映画会社まで、手をかえ品をかえて刺青を見せ

ばいい。然しである——アート紙のグラビヤインキもまた、シンナーによってハゲてしまう事を忘れずに。

如何にも見せてはいけないから抹消した……という誇示的な処置の仕方ではなく、修正して存在を明らかにしなければよい、という寛大な取決めがあるのだから、それに馴された「日本人用」に、ボカしてしまえばいいのに……と思った所だったが、シンナーを気化して酔う「シンナー遊び」で絶命したオッサンチンがいた事だし、「部分」を消すためにシンナーでは……と惧れてそうしなかったんだらうと冷かす気持で眺めた次第である。

てくれる。

出来っこない、と分っていないながら興味本位から『オシロイ彫り』を扱った小森プロの『入れ墨お蝶』——フィルムは、嘘をまことしやかに真実性で売る。野川由美子を女賭博師に仕立てての映画でも、筆で描くだけで消えなくなる入墨とか云って御所車や花を施術したり、智恵出す事に銜ってはいるが、映画ファンはそれも『作りごと』とは考えない。今は一寸した刺青ブームだという。

平凡パンチ8/28号の陳平対談で関西在住の彫りもの師の話が面白い。未完成で終わっているつもりでおられるらしい山原清子嬢を奇クがバック・アップして、針の味に憑れた彼女を追って見たら如何なものだろう。

また、女性自身8/28号でも刺青をした女性の半生記と、剣持氏のカメラ・ワークの一端が披露されているが、その夫人の言葉に動かされるものがあった。御覧になるとよいと思う……読む、見る、買って、秘蔵されるとよい。

こうした多くの人々の目にとまる雑誌の中で、時たま『秘められた風俗』が覗くが、名人二代目宇之の仕事振りが、昨年十一月発売の毎日グラフ別冊「にっぽん女性一〇〇年」

にある。大変巧緻な労作であるが、名人の手になる作品も、完成したタブローとして保存出来ないのは彫り物師の宿命的なものとして哀歎を覚える……いわば一種の同情であるが、（東京大学には、なめし皮として標本にされ、保存されてあると聞くが、つてを得て拝観する機会に恵まれていない）

【貞操帯】

九月号では、おもだか・しの氏がデパート歩きして立寄られた『ソ連展』のルポを寄せられていたが、私が投稿を休みダブらず良かったと思っている。

九、十月の奇ク誌を調べてみて、女性自身7/24号のミニ・ニュースで伝えられた好事家ごのみの『貞操帯』について記述がなかったので、チョイと切抜くつもりになった。

戦後一度、貞操帯が売り出されたという国内ニュースは耳にした事がある。真鍮製の局部的なワクで、どうやって身につけさせる代物か詳らかに知らないのだが、友人の話では高橋コレクションには蒐集保存さ

れているとの事。同じ頃、自由国民社から出た特集雑誌に「貞操帯の作り方」などという記事もあって、扱われている型紙つき解説では、今で云うブラジャーであったので落胆した事を覚えている。——ま、その頃が私のアブへの関心の芽生えであった訳でもある。

女性自身の紹介では、小さいが写真入りであって、「オーダーだと20万円。さっそく広島と仙台から1点ずつ注文が……」と、実用品として完成したそれに飛びついた人がある事を報じている。オーダーする人も人だが、二十万円の手造り？ とは……一体何処から割出された代価であろうか。

イタリア映画で、ふざけた貞操帯にはお見にかかったが、こんな遺物まがいな物を必要



とし、需要に応じる二者の存在は呆れる。
「ヘルガーモ式の錠前」という事で、大人の玩具」としては私も扱った事があるが——42／1月号——商売にする堀グループが現われたのには苦笑した。

広島からの注文……では違ふな、と思ひながらも、「地位と金があるのをいうと、かくも若々しい美女が、Y氏の言葉一つでいつでも自由になるものかと」今更ながら驚き入った——サロン楽我記（第四十回）十月号——と辻村氏を慨嘆せしめた神戸市御影・苦楽園の初老の主Y氏をふと思った。金さえあれば己れの欲望を遂げ、満たす事は当然の権利とでも云うようなつぶやきが聞えたように思えたからである。



売られた貞操帯がどう使われているかは知らないが、それを施された女性が「こんなにまでして大事に思っていてくれるのか」と改めて考えたりするかどうか。「仕方ないや、好きなようにやらせておけば、お金になるもん」という様な、私の大嫌いな女の打算しかそこにはないとしたら、貞操帯に象徴される人間関係は愚しい。見直されたマルキ・ド・サドにしても、彼の存在が人間の歴史に残されているのは、悪徳といわれる事柄を繰り返す事・出来た地位と金権があったからである。サドを一介の犯罪者として断罪出来なかったのは、実に「女の打算」の為だ。

【影と目】

セックスと昇華されたエロスは、大切にしたいもの。えてして「人間活動疎外」の次元で享樂されるが、変質者や精神異常者は社会人としての自覚を喪失するから恐れ、当然限られる自分の生活範囲内の享樂なら、分に応じて發揮してよからう。欲求不満型や劣等感昂進型が八分別を求めても駄目であるが

エロスの垣根を巡り出すと犯罪となる。会員数何万、信者数何万と数だけ誇る宗教家といわれ、社会改善家と自称する人々が、「有難や有難や」の説法する時間の中に、科学的に解明された人間及び本能を云えるようになるだけで、この社会は大きく変わる。生活に自信のない男や女が余りにも多過ぎる。自分に勇気がないから底辺でうろつくのである。抑圧された……と感ずる事は、自分でそう仕向けた事なのである。

奇クに寄せられる既婚者からの、「夫婦でSMプレイをしました」「出来ました」という包みかくしような喜びの便りは、読んでいて楽しいではないか。また、中河嬢が被虐の巡礼（編集子の言）して手記を寄せられるのも、好読物となっている。そこには後めたさの影を怖れるものも、目を意識して萎縮する不自然さがない。

× × ×

男の匂いをASVとするなら、奇クを彩る女性がAMVに見えて来る本誌が、他の風俗誌のどれよりも好きである。それ故私の駄文雑談は、奇クのみ相手に語られる。「煉獄」の筆をおいてしまわれた黒井氏の袂別が哀しい。どうかお元気にお過しなされますように

——「何もうつとらん。フィルムはまっくろけや」と云われて有頂天をうちくだかれた御仁の捲き起した旋風が、またぞろ「悪書」

のマークを濃くして来たとの影響を察知しての見事な引退か……（シャッターが開いてなければ、フィルムは透明になる。固定焦点カメラのような旧型でなければ、フィルムは巻き上げられなきゃ、シャッターは切れない……いずれにしても、フィルムが真っ黒だという事は気持がはやりすぎて現像前にフィルムをカメラから取り出したか、代用の偽物をつかまされたかのどちらかである。そんな愚にもつかない事を書く人に、奇クは振り廻さ（れている）……貴殿のとられた態度は、正しいと云わなければならぬのかも知れない。

【昼 顔】

私の昼間の顔は居眠りまなこだ……夜更しするのが癖づいて、暑い盛りはベッドの上。昼と夜とが逆になった生活である。

真面目な読書欲を持つ少女達がふえて『千夜一夜』はよく売れ、コンパクトな西洋文学集も伸びがいいとの事。どちらがどう影響しあっているのか、映画までが文芸物のリバイバル流行りである。お蔭で「成人」のつもりでいる私の観たいと思う映画、J・フォン

テン小母様の若い頃のスクリーン顔が巾を効かせて、次回上映予告のまま「昼顔」の封切りがまたのびた。——ジョセフ・ケッセル原作ルイズ・ブニエール監督の東和提供の映画「何と今年度の芸術祭洋画部門参加ときた」『昼顔』は話題作だそうである。自国フランスでは、こちらがうずきたくなりそうな場面は、全部カットされたようだが、マゾヒストな人妻（カトリーヌ・ドヌーヴ）の情欲を満たすために昼間だけの売春婦として男性遍歴をする物語の中に、被虐願望のシーンがあるそう。——試写のおよばれがないので、今は確とした報告が出来ないでいるが『東和』というのれんが買い付けたアチラ物の事だし必然性云々を観終って語る事になっても、臍曲げる人も居るまい。精々コーヒーを倍程飲んで寝呆けた昼顔なしに観てみよう。浮世絵の感化かは知らないが、彼女を満たす事が出来た男性は日本人なんだそうだし、その取り合せもまた好々……セックス映画の中味の濃さを堪能してみようと思っている。

【池永夫人】
「秘かな願い」と告白を十月号に寄せられた池永敏子夫人に、前章記述のヒロインの面影を偲んでみた。……手鍋提げてまでもと、熱烈な恋愛の末に家庭を築いた夫婦と違い、今日見合結婚されたという方は、恐らく家具調度や住居にも恵まれた環境にある方だと推測しても、お怒りは蒙るまい。読書やテレビに平凡な日々を送ると、御自分でも云われる新妻の姿、好しくもあるが倦怠である。そうした生活の中から、子供が出来たら……と生活への期待を懸けるようになるとしたら、差し出がましいいらぬ御節介だと云われるだろうが、私のセンスとしては嫌味を覚えるものである。「奥さん、もっとほかの事で充実しなさい」と「悪魔」の囁きを吹き込んで上げたい衝動に駆られる。悪魔などと揶揄した文字を使ったが、知る事は制御だという生命活動について話し合い、退屈しなさんな、と励まして上げたいのである。

——サリドマイド禍を人は「アザラシ子」という『結果』を見て騒ぐが、薬に頼らねば本能である睡眠を満たされぬ生活は誰がつくったのか。社会の欠陥を指摘する前に、社会の単位である家庭自体の責を、問わねばなるま

い。空爆の神経戦略に怯えている時代ではないのだ。環境悪化を知らず知らずに深入りさせているのは、同情を買わんがために演技している、その人自身の生命活動の不認識にある。制約のある誌面での飛躍論法だが、家庭生活を充足感に昂めようとするなら、異性の本質を知る事に貪欲であっていいと思う。満たされた異性愛（夫婦）の存在があって、相互にたくましさ、美しさが輝き出るものではないだろうか。——生活の知恵、工夫は創造されるものだ。その創造のよき試案さえ涸渇した人間が、一時間も二時間も題目となえて苦痛とは感じぬ「立派な信徒」となる。珍なる世の中といわねばなるまい。

池永夫人の、よろめきを推奨しようと思う——不道德教育と思われる事が、咀嚼されて「一層激しい愛を注いでくれたらと——」という宿願に昇華されるように祈りたい。

【近況報告】

昼と夜との取違えた生活と書いたが、こ

待望の青木順子サディズム・ショウを、野田阪神の吉野劇場で見るチャンスを得たことを嬉しく思う。

さて今回の青木順子は、売春婦であった

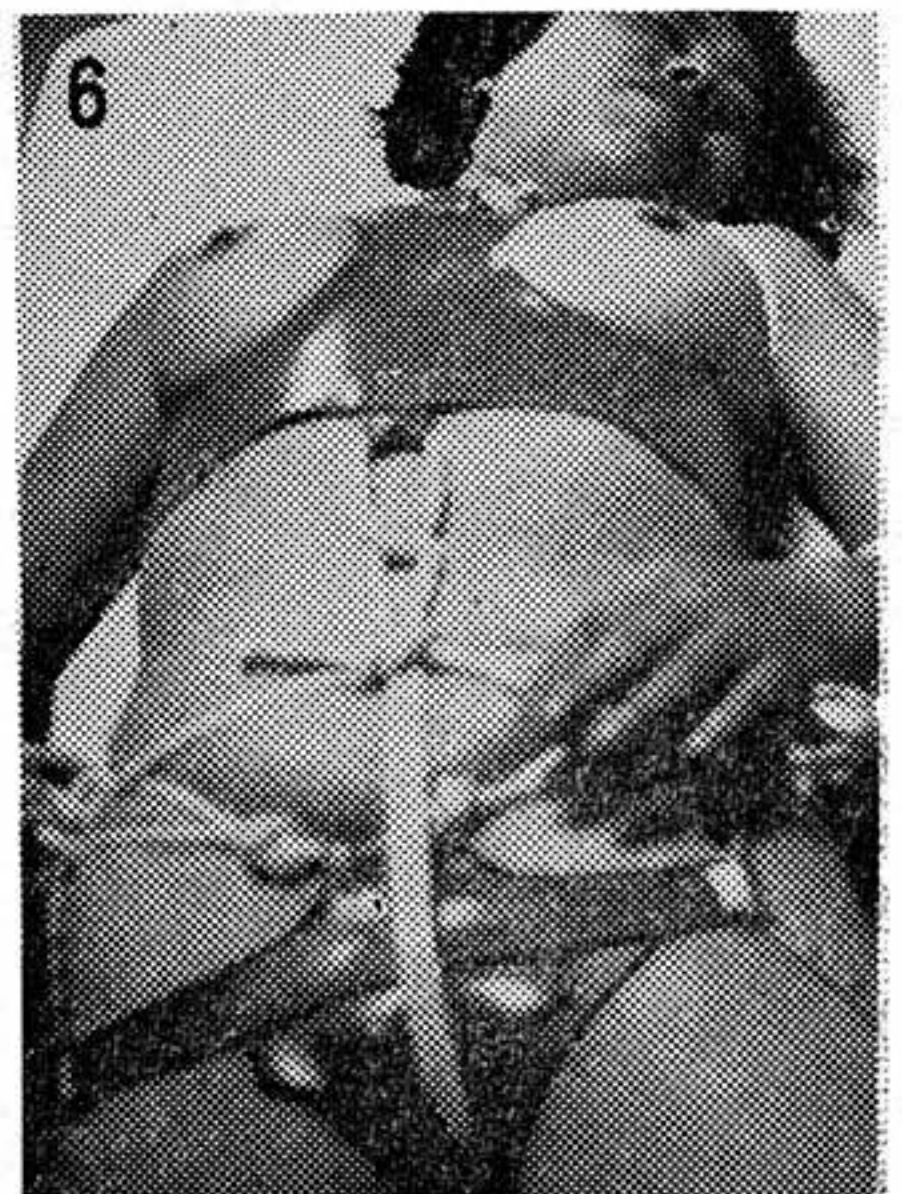
三日程は私にとって人並みの生活に一旦復帰した恰好であった——私の暮し振りが知りたくて、遊びに来た女性がいたからだ、本文中六葉提供したが同好の士のお気に召せば幸いである。

① 犬首環と鎖と鞭の生活が始められる。ランジェリーの上から鞭を振りおろす、手拭の猿轡では悲鳴は、つつ抜けである。

手首に鞭が流れて跡をつけた時「やめて！」と声があがる。明日あたりから……と思っていた生理が襲ったという。

② 彼女のタメの物が必要であった。この時とばかり縁なき品を買い求めに出る。蚊のなくような声で「お願いします……！」と云ったようだ。彼女はこの姿で待たされた。

③ 二時間後、午睡中の彼女に「特訓」再開。自転車の荷懸用ゴム紐での連打であ



る——口に詰め物をしての猿轡であるから竦った呻きで身悶えるだけ。

④ Sと云っても、Mに奉仕するようなものではないか……という編集子の言葉が思い出される。

⑤ 飼育名を、マジック・インキで記入。
⑥ 宴のあと……で。

(この項おわり)

が今は梅毒をうつされて商売も出来なくなつた哀れな女の役。舞台には四〇センチ程の高さのベッドが一つ置いてある。

日々をただ呆然と暮していた所に、突然酒

に酔った英国人？ が現われ、なにやら彼女に話しかける。たぶん『今晚お前の体を売れ』とでも言ったのであろう。それを知った彼女は、自分は病氣をもっているの

客はとれない、と盛んに話すが、まったく通じない。

男はヨタヨタしながら彼女に近づき、耳元で『サディズムプレイ、プレイ』とささやき、自分のバッグの中から一条の縄を取り出した。

彼女はその間、あきらめきったような表情で、ブラジャーとパンティのみの姿になって、うなだれる。

縛りは素早く行なわれた。男はやんわりと彼女の肩に手を掛け、さするように徐々に下げ、手首のあたりに来るやいなやサツと後手に組ませ、手首を二、三重に縛り、その縄尻を肩に持ち上げて一気に股間まで降ろし、手首に結びつけるというすばらしい股間縛り。秋山氏のような股間を通して前で左右に分けるのではなくズバリそのものである。これが全ストであつたら、なんとすばらしい眺めになったことだろうに。縄は、胸にも乳房をはさむようにして掛けられた。彼女を縛り終えた男は、彼女を立たせ楽しそうに、胸、肩、わき腹、尻等を平手で打ち始めた。ビシャという音と同時に、彼女はウツとうめき、大きく揺れた。

ショウの解説と感想

青木順子の

サディズム・ショウ

居眠偶太郎

打つのを止めた男は、彼女を床の上に突き倒し、顔や乳房、腹、モモ等を踏んだり、こじたりして、グッタリとなった彼女を満足そうに眺めていたが、乱暴に彼女を抱きかかえベッドの上に放り投げた。彼女は男のなすがままにされ、丁度ベッドから顔だけがはみ出し、ダラリと垂れ下った様な恰好にされていた。こうしておいて男はバケツを持ち出して来た。恐らく水責めにするのであろう。

だらしなく垂れた彼女の顔の下にバケツを置き、胸の上に馬乗りになり、いきなり彼女のアゴに手を掛け、グイグイと顔をバケツの中に押し込み始めた。ビクリした彼女は必死で抵抗するが遂にバケツの中へと没してしまった。息苦しさのため足は宙を浮くがごとくにあえいでいる。又バケツの中からブツ、ゴボゴボといかにも苦しんでいる様な音が聞こえていた。男の手が弛むやいなや彼女はサツと顔を出し大きく息を吸った。その顔は、長い髪は言うに及ばずアゴのあたりまで、ビッシヨリ濡れていた。

休む間もなく男は、火のついた太いロウソクを持ち出し、逃げる彼女を押さえつけて胸のあたりにロウを一滴二滴と落とす。彼女の口からは「ウッアッウ」とその苦痛にむせび泣くような声がもれてくる。

休むヒマなく責め続けられた彼女は、このロウ責めによってついに気を失い、男も責めを止め、彼女の縄を解いて襲いかかり、思いをよぎって去って行く。梅毒をうつされたことも知らずに。

秋山氏のショウと比較してみると、縛り方、速さ、形等はいずれもすばらしいが、責めにおいては秋山氏の方が良い。それに秋山夫人のあの声、あの動きが魅力だ。

青木順子の方はロウ責めが客席から観難くかった点が残念で、秋山夫人のようなあのうめき声？ があれば、より以上に充実したものになっていただろう。

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

略号
(しせ)

△時代物女体切腹図▽

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の凄艶な切腹美態
- 二、介錯を受ける覚悟の美しき娘
- 三、落城の哀史、切腹する美女
- 四、夫の眼前で切腹する若妻
- 五、愛人の手で介錯を受ける娘

浣腸美媚態

略号
(のゆ)

△女体浣腸の極美图▽

大判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸場面
- 二、女事務員の浣腸を覗きみる
- 三、女学生に対する浣腸の私刑

浣腸責め図譜

略号
(しき)

△強制浣腸場面五態▽

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸する
- 二、いちじく浣腸の恐怖に悶える
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女の痴態
- 四、硝子シンダーが乱舞する
- 五、イルリガートルが責道具

羞恥責め絵巻

略号
(しい)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、灌水による人工妊婦腹製造
- 二、浴槽の全裸の美女を責める
- 三、三角木馬で美女を責める
- 四、全裸のグラマー柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

浣腸責め図譜

略号
(しえ)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、美貌の踊子へのイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油による強制下剤
- 三、迸出する緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣を応用する
- 五、両足吊りイルリにて浣腸

女性切腹風俗

略号
(ゆい)

△時代風俗女体切腹▽

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、座敷牢の美女切腹を賜わる
- 二、介錯にて果てる切腹の美女
- 三、塗鴉籠の中の姫君切腹す
- 四、男装の美女小姓姿の切腹
- 五、美貌の腰元裸身の切腹

倒錯美緊縛画

略号
(えと)

△美女のいけにえ▽

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女体解剖台上に晒らす裸身
- 二、嫉妬に狂う夫と美貌の妻
- 三、美女の鼻料理に興ずる男
- 四、女体を真二つにする股間縛
- 五、山小屋の一夜、処女の受難

「花と蛇」画集

略号
(えに)

△傑作S小説の絵画化▽

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、京子に珍芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人へのあくなき汚辱
- 三、操り責めに泣きぬく美津子
- 四、片足挙げ縛りに悶える桂子
- 五、排泄を強要される京子の窮地

女体吊責画集

略号
(えほ)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、弓吊り女体にローソク責め
- 二、エビ縛りのままの宙吊り
- 三、股間縛りの吊り責め
- 四、美女の舌の先縛り吊り
- 五、股間縛りにて鼻孔吊り

浣腸排泄画集

略号
(えい)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸台で美女の浣腸

- 二、浣腸のあとのお楽しみ
- 三、百Cのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで無理に飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女の表情

美貌汚辱鼻責

略号
(えは)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女の美しい鼻をいたぶる
- 二、一本一本女の鼻毛を抜く
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた美女の顔
- 五、顔にラーメンを食べさせる

美女の責痴態

略号
(しお)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸責め今展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭園のハダカ責めシーン
- 四、全裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チエン・ブロックの女吊り

美少女羞恥責

略号
(しる)

大判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、蝋燭の火責めにあう美少女
- 二、ヨチヨチ歩き的美少女責め
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り責め
- 四、股間縛りに絶叫する美少女
- 五、鑑賞用美少女の緊縛美体

△可憐な美少女加奈子▽

◎お申込みは、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号 箕田京二へ。

新しいアイデアに依るSMフォト案内

浣腸にむせび泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島照代 略号 八つゆ
あらゆる浣腸用具を動員の上マ
ニアの大島夫人の臀部に挑戦して
浣腸の甘いムードに感泣させる。

身動き出来ぬ浣腸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島照代 略号 八つゆ
身動き出来ぬよう縛り上げられ
た大島夫人に迫ってゆくポンプや
イルリの嘴管の毒々しい光沢。

竹棒開股答打縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八つゆ
これは又珍しい関谷夫人に對し
て五本の竹棒を用い正面開股の厳
しい縛りで答打ちで悶えさせる。

後手吊りにもく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
川越美佐子 略号 八つゆ
嚴重な後手縛りの両手首を鴨居
に吊り上げてジリジリ引き締める
と長身をくねらせてもがく。

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
愛知葉子 略号 八つゆ
自分の縛りフォトを讀者にお見
せしたいと特に提供して下さった
逆エビ縛りの色々のポーズ。

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
愛知葉子 略号 八つゆ
一本棒のように逆さ吊りになっ
たり両手と両足を別々に吊られた
り両足を開股で吊られた葉子。

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
愛知葉子 略号 八つゆ
柔軟な肢体の葉子の片足が高々
と頭よりも高く吊り上げられ残り
の片足立ちで僅かに安定を保つ。

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
見事な真白い臀部をこれ見よが
しに投げだして後手に緊縛された
麻里子嬢の全裸身の美しい姿態。

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
階段下にその中段に豊かな肉づ
きの真白な縛りの肢体をうねらせ
て魅力的な媚をふりまく麻里子。

花瓶を太股で挟む

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
ガラスの花瓶を真白い太股で挟
んで全裸の優美な緊縛肢体をマニ
アの皆さまの眼前に御披露する。

麻里子裸身の総て

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
鮮鋭なるピンツのカメラによっ
て縄にさいなまれる麻里子の肌を
いきいきと息づくままに見せる。

柱立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
洋間の中央にある柱に肌をくび
るように縄がけした裸身をつなぎ
とめられた麻里子の美しい肢体。

絶妙の鞭打ポーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
両手と両足を思いきり開けて柱
と鉄柵に縛られた麻里子の魅力的
な臀部が突き出すように息づく。

悶える白肌を俯瞰

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八つゆ
階段下のカーペットの上に真白な
緊縛裸身を投げつけた妖美姿態。
を二階から狙いつけた妖美姿態。

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八つゆ
後手縛りの手首を鴨居に吊るし
両膝に縄をかけて引き上げれば思
わず両足が開いて宙吊りになる。

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八つゆ

揃えて縛った両手首を上から吊
って片足を縄で引き上げると一本
足の不安定な女体が揺れる。

両手吊りに悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八つゆ
両手首を揃えて吊り上げた全裸
の肢体は恵子の願ひ通り、その隅
々までをマニアの視線に晒す。

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八つゆ
一番好きな縛りポーズはこれだ
と彼女の望むままに大の字の正面
開股縛りで御機嫌をとり結んだ。

両手万才吊りの女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八つゆ
両手を万才型に挙げて吊り上げ
られた無防備の裸身に襲いくる操
りの触手とあくなき淫靡な視線。

遠藤静子の羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八つゆ
「花と蛇」の主人公静子夫人に憧
れてゐる彼女の前に「静子」の名
札をぶらさげて演じた羞恥責め。

雁字搦目にうめく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
川越美佐子 略号 八つゆ
瘦型の長身を大量の縄で喰いち
ぎれば細い身体をくねらせる。



（島根・森玉一生）

○ K K 九月号十
九頁、梨花嬢の
写真には息をの
みました。もし
私が結婚前に彼
女自身に会って
いたら、私の人
生は大きく変っ
ていたのではな
いかと思います
私は二年前、

○ 九月号拝見いたしました。山本
一章氏のカメラルポ「この女と」
毎日楽しく拝見しておりますが、
今月では先ず左近麻里子の美しさ
に目を見はりました。大変美しい
人です。特に一一九頁のY字型の
ハリツケポーズは素晴らしいもので
した。この人の変ったいろいろの
緊縛ポーズを拝見したいものだと思
います。次になつかしい梨花嬢の
ことが出ています。私は梨花嬢の
写真は殆ど持っておりますが、
9月号の18頁に出てくる美しいポ
ーズの写真は持っておりません。
腋窩の写っているのも彼女として
は珍しいものです。

心ならずもすすめられるまま、平
凡な結婚をいたしました。妻は
その方面はからきし理解がなく、
また一向に理解しようとする気も
なく、全くの門外漢です。家庭外
でプレイをしたいと思っても相手
がなく、日夜悶々の時を送ってお
ります。夫婦プレイを楽んでおら
れる方々を誌上で拝見するたびに
羨ましさを禁じえません。

（兵庫県・山県系二）

○ 本格的な猛暑が襲来、毎日うだ
るような暑さの中であぶあぶして
います。編集の皆様もさぞグロッ
キー気味だろうと思います。しか
し耽美の世界だけは暑さもふっ飛

ぶような魅力で、私達のハートを
捉らえてやみません。この頃は次
々と新しく若々しいきれいなモデ
ルさんを開拓して頂いて大いに楽
しませてもらっています。しかし
いささか目まぐるしく、以前のよ
うにモデル嬢一人一人について、
その特徴や緊縛方法を幻想する暇
がないように思われます。九月号
には遂に出る人が出たという感じ
の美川美美子氏、辻村氏に是非ハ
ントして頂いて誌上を飾ってほし
いものだと思います。辻村氏の麗
筆によって誌上に載った美川美
美子氏もさぞ満足だろうと考えま
す。

（京都市・洛東生）

○ 貴誌の熱心な読者ですが、最近
号を読んで感想を述べさせて頂き
ます。ここ二、三年は中々面白い
小説や読物が豊富にあつて、楽し
ませて頂いておりますが、山本一
章氏の「痴人の糧」が終ったのは
誠に残念です。近く続篇を執筆さ
れるよう大いに期待しています。
今までの分を単行本として発行さ
れることも希望いたします。「花
と蛇」は、十月号に『京子型愛好
生』氏の所論の如く八じゃや馬
馴しVの所、誠に面白く、その他
静子、桂子、小夜子ETCの平凡

で個性のない「深窓の麗人」をい
たぶる所は単なる弱い者いじめで
何か不愉快な気がします。むしろ
金持ちの嬌慢で権高な意地悪の美
女を、それに恨みのある人間が仇
討ちをするという筋書きにされて
は如何がかと思います。（十月号
には一寸そのような個所がありま
したが）。団鬼六氏の毎号の随筆は
大変面白く拝見しております。今後
も大いに期待しております。

（京都市・山本隆）

○ 遙々南紀の果てから上阪して、
吉野劇場まで出掛けてきました。
青木順子ショーを見るためにで
す。青木順子は白いロープでまっ
たくピシッと見事に縛られ、くっ
きりと喰い込んだ股間縛りが素晴
しかったです。天王寺発23時30分の列車
で帰ってきました。わざわざ、青
木順子ショーを見たいがための上
阪でしたが、ファンとして、失望
はしませんでした。

（和歌山・青木生）

○ 村中豊子様、九月号の記事、大
変失礼しました。あなたが豊中に
おられるので豊中のインターチェ
ンジを待合わせの場所に決めまし

たが、長い間同インターチェンジに行かないうちに全然附近の様子が変わってしまい驚きました。以前はインターチェンジ出口に名神バスの停車場がありました。が全然変わっているため私もこの附近を車で何度もぐるぐる廻りましたが、それも飛行場までの高速道路のおかげでまもなく、あなたも来にくかったと思われまふ。そのかわり今度あった時、期待にそむかぬよう充分、緊縛してあげますからよろしく願います。尚、もしよろしければ、九月二日、又は十月七日、午後四時から五時までの間、阪急宝塚線、岡町駅東口の方で待っております。目印に前と同様、車の後部バンパーにSのマークをつけておきますから、あなたもサンガラスを掛け週刊誌を丸めて持ってください。

(神戸・熊野一郎)

山下和子様、九月号通信欄、面白く拝読しました。僕は二十二才の一青年です。奇巧とのつき合い

◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中です。切手五十円同封

は九月で丁度一年になります。でも今まで一度もそうした経験をしたことありません。ですから今は何も知らない仕末です。一度経験してみたいなあと思ひ、思ひきってペンをとった次第です。どうか僕と一度会っていただけないでしょうか。いろいろとお話ししたいのです。僕は奇巧の中で好きなものは流腸とかオムツのような言葉に、もっとも興味があります。中でも特に「花と蛇」が一番好きです。そんなことをいろいろ話しませんか？又お手紙でもかまいません。会っていただけるといいでしょう。その日がだめでしたら次の日曜日(十月八日)でもかまいません。場所は国鉄神戸駅の待合室の入口近くで待っております。時間は十時から十時三十分までの間です。目印に手にハンカチを持っています。身長は一メートル七三センチぐらいです。その間お手紙下さってもかまいません。どうかよろしく願います。

の上、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号箕田京二宛御予約下されば完成次第第一号を直にお送りいたします。

(大阪・太井生)

K誌をめぐる内外の環境が一段ときびしくなったことは残念なことと存じます。採算が合わなければ遠からず廃刊の憂き目を見ることになるかねません。K誌編集者の方々は直接購読者の増加に力をそそいでいるようですが、その方法について提案したいと思ひ筆をとった次第です。K誌がすすめる方法は「局止め」を利用する方法ですが、これには難点があります。その一は、心理的なものですが、毎回の郵便局員との対話です。自分の名を告げなければならぬのは、何か後めいた気がして回りの客や局員に対して気まづい悪いものです。このため、この方法を利用しない読者も多いのではないのでしょうか。次は留置期間が十日しかないということ。K誌を受けとるときは毎月二十五日頃局に行けばよいのですが、分譲写真等を注文したときは、いつ頃局につくか分らないため、何度も足を運び、そのたびに自分の名を告げ、郵便物がついていないかと聞くことはつらいことです。直接購読の方法としては自宅に直送してもらう方法がありますが、これ

は「局止め」よりも、さらに困難が多くて、利用することが出来ない人が多数でしょう。そこで私の提案ですが、読者の方々に私書箱制度を利用してもらう方法です。私書箱なら最初の契約のときだけ郵便局員と話をすることで、後は自分の都合のよい時に郵便物を勝手に受けとることが出来ますし、留置期間等を気にしないでよいし他の人に対して気づかいをしないで利用できます。最初の契約の時も下宿が変わるからとか、長期旅行をするから等々の理由で契約をすればよいし、どんな郵便物がどこから送られてこようと他人には一切わからなくてよいから、心理的な圧迫もないと思います。さらに費用が年間三千円前後だと思ひますから、心理的な圧迫感がなくなることを勘案すれば、経済的負担も高くはありません。そこでK誌上で、私書箱制度の説明や、契約の仕方、受付窓口について、費用の額、特定郵便局でも可能かどうかなどを詳しく掲載してみたいかどうかをどうか。出来れば本誌の数ページを割いてみて欲しいと思います。K誌の繁栄のためにも、読者のためにも私書箱制度をK誌上に取り上げてはどうでしょう

か。
(与野市・浦野生)

○ 今春、地方から上京、貴誌を知り、すっかりとりこになってしまいました。今までこういう部類の雑誌を数冊読んでいましたが、好みに合うのは数えるほどしかありませんでした。その点、奇ク誌は最初から最後まで夢中になって読んでしまいます。特に私が真先に読むのは「カメラ・ルポ」です。現実のM願望の女性が辻村、山本両氏によって緊縛され責められる雰囲気ヒシヒシと感ぜられ、ついに自分が両氏になって責めているような錯覚を起こしてしまいます。私はS・Mに興味を持つ二十一才の写真学生です。私の傾向としてはS七、M三の割合でMは浣腸と精神的な責めを好みます。Sの方は身体に傷をつけるような強烈な責めは小説の中だけで実際は望みません。このような私とプレイを前提として交際して下さる女性の方、足代と食事代ぐらいでしたら私が負担しますので、いかがです。初めからプレイは出来ないと思えますので、文通又は交際した後、貴女が私を観察し、納得してから決めて下さって結構です。もちろん

お互いのプライベートを絶対守る人に限ります。ご迷惑でも十月一日午後十二時―一時、渋谷駅近くの映画館「全線座」の館内の一室に立っております。目印として肩にカバンを下げ、新聞紙を丸めて持っています。都内、近県の方勇気を出して会って下さい。もしあなたが当日、都合が悪かったならば読者通信を通じて場所、時間を指定して下さいれば喜んでまいります。
(東京・一ノ瀬英雄)

○ 二年前から奇クを愛読している広島の一M青年です。はずかしいことなのかも知れませんが、女性のパンティに興味を持ち、一度でもよいから女性の豊かな尻に敷かれて見たいと願っています。ただ広島にはなかなか小生を満足させて下さる女性は見つかりません。どなたか小生の希望を便りにでもかなえていただきたいのです。実際にお逢いできればこれほど嬉しいことはございません。奇クの九月号に春川ナミオ様の母娘蜂の直子のような女性を小生は求めています。編集部の皆様、毎日暑いですが、これからも良いM作品を掲載下さい。九月号の春川ナミオ氏の漫画「エリ子女王様」は良かった。

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
後手裸身柱縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大手札四枚一組	略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
縄目にあえぐ裸女	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
豊麗な裸身をくびる縄目	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
後手高手小手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
長襦袢の緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子	略号一〇〇〇円
緋の腰巻緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子	略号一〇〇〇円
猿ぐつわに呻く女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子	略号一〇〇〇円
柱宙吊り強烈縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子	略号一〇〇〇円
ポリウムを縛りあげる	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子	略号一〇〇〇円
縄に苦悶する裸女を狙う	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻着用姿態	大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子	略号八〇〇円
縄に悶える緊縛色模様	大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦 啓子	略号八〇〇円
真紅の腰巻着用縛り	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
華麗なる緊縛裸身	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
みだらな開股縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
責めに疲れた諦観	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻姿で緊縛	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
羞らしいの真正面縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
若肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
高手小手後手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円

たと思います。春川様、今後とも
頑張ってください。どなたかお便り
下さい。待っています。

(広島・西本守)

マゾという恐しいまでに甘美な
魔薬に全身全霊を蝕まれ、その快
美感に浸っている、その後の私に
ついて書いてみたいと思います。
アパートを引き払いオンボロです
が曲りなりにも六畳に三畳、台所
トイレ、それに物置き同然ですが
とにかく風呂場代りに使えるとい
った借家に五月中旬移転し、ほっ
と一息ついたのも束の間、私の余
りに度外れたM性ぶりにイヤ気が
さしたのか、遂には妻とは離別す
る破目に、なってしまうました。
流石の小生も、確かにショックに
は違いありませんでしたが、それ
でも尚、私は妻と訣別しても、こ
のMという名の魔性から逃れるこ
とが出来なかったのです。私は今
は完全にこの家を私ひとりの秘か
な宴の場、祭典の場となし、思い
きり快楽にふけることに意を決し
ました。それは大抵、土曜日の夜
に行われます。部屋を全部しめき
り黒いカーテンで外部から見えな
いように遮蔽し終ると、私は全裸
となり、いつものように首輪をは

め金色のくさり輝を、足に鎖つき
錠を装着します。そして正面に全
身の写る鏡を据え、しばらくは自
分のそのような奴隷スタイルを打
ち眺めます。やがて徐々にエキサ
イトした私は、ボール箱から最近
考えた新しい責め道具を取り
出します。それは大変精巧に出来
ている大人の玩具といふべきゴム
製(或いはビニール製かもしれま
せんが)の蛇、毛虫、ガマ蛙、ゴ
キブリ、イモ虫、などをならべま
す。私は、それ等の一寸見ると本
物そっくりの気味の悪い虫や蛇を
注射針で一個ずつ胸に刺し通しは
じめるのです。胸に針が貫通する
瞬間の痛苦は、まるで脳ずいまで
ジーンとくるような快感を私に与
えてくれるからです。やがて私の
胸には蛇、毛虫、ゴキブリたちが
まるで生き物のようにピッタリと
へばりついてしまいます。一本一
本の注射針が同時に私の胸の肉を
刺し貫いていくわけです。そんな
私の姿を、私は「人間昆虫標本」
と名づけてみたのです。やがて私
はクルリと尻を向け、鏡に写しな
がら皮のベルトで思いきり私自身
の尻を鞭打ちます。ピシッピシッ
という音が夜気をつん裂き、隣家
に聞えはしないかという懸念も一

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよV

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れにV

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れぬV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れのV

豆絞りの猿くつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

瞬私の脳裡をよぎります。昂奮し
た私はもう止まるところを知らず
十打、二十打と我と我が尻を鞭打
ち続けます。やがて鞭打ちの手を
休めた私は、足錠のくさりを音た
てながら、玄関のコンクリートの
土間に裸足のまま下ります。そし
て玄関の天井からぶら下げたくさ

りに首輪を吊るし、思いきり引き
上げます。両足の爪先がやっと立
っていられるぐらいに吊り上げる
のです。夜光時計の針を見ると午
前三時を過ぎていました。やっと
爪先で立っているのです、ともすれ
ば身体がグラグラします。すると
胸に刺した虫どもが一緒にブラブ

ラと揺れ動くのが、はつきりとわかるのです。私はやがて、そのまの姿勢で、全身を思いきりのけぞらせてしまいます。しかし私はぐったりした身体のまま、つまり首吊りの刑の姿勢のまま、日曜の朝、新聞配達がくるまで爪先で立ったまま奴隷としての喜びの余韻を楽しんでいました。私はもう自分自身で、どうしようもないM性に時折り、狂ったのではないかと思うことがあります。しかし私は間違いなく、昼間は一社会人として正業にいそしんでいる人間です。こんな私は、しかしやはりどうしてもMの魔手から生涯、逃れそうもなく、又逃れる気もさらさらありません。そして今は妻もななく系累もない私は、兼ねて念願の深い山中における最高のワンマンMプレイを行いたいと思っています。

(仙台市・秋田一郎)

吉村英子様、久々のお便り懐しく拝見しました。でも今の貴女の境遇は、少し残酷な気がいたします。もし僕に御相談頂けるのですしたら、いつでも豊橋まで参りますけれども……。とはいっても或は案外に満足してらっしゃるのかも知れませんが……。貴女のパート

ナーに男を感じてしきりにジェラシーを覚えます。未亡人、実は貴女の最愛の御夫君なのではありませんか？ それにしても一方通行は辛いですね。何とか直接お手紙書けるようにして下さい。さてマニア諸氏に楽しんで頂くために、角川版、現代女性講座、健康と美の為に、二四一頁―二四八頁「大腸機能と女性」四、五人の夫人に囲まれた医師が、例の問題に答えるという設定で「実は家のB子がねえ」「B子さん、長いことトイレでウンウンいつているのですか……」等と、ギクリとさせる対話からはじまって図解入りの楽しい記事です。変っているのは、大きさにいつてのとこで二十四頁のグラフのあとに「それからねえB子、このごろお通じが結するで血が出て、痛い痛いっていつてるんです」「アラ、私も経験するわ」「これもお気の毒ですが、御婦人方の病気ですね。私も四、五年前に調べたのですが、おシリの手術のときに、特別の器械で肛門の大きさを測ると、これが相当の個性があるんですね。この材料は全部おシリの患者さんですが、健康な人でも大体こんなものです。図を見ると裂肛の人は、平均して

〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円
逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円
竹棒開股強烈繋り	大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円
鼻責めと鼻孔大寫し	大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円
首縄後手強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円
全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円
菱縄縛り竹棒責め	大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円
柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円
豊満な全裸を弄る	大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円
逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円
黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円
大島 照代	略号「そや」 五〇〇円
菱縄縛りにあえぐ	大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円
牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円
全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円
菱縄しばりの表情	大手札四枚一組 略号「そな」 五〇〇円
八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円
菱縄縛りの全裸を晒す	大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円
奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円
菱縄強烈開股縛り	大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円
竹柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円
柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円
猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
木村 洋子	略号「きも」 四〇〇円

小さいことがわかりでしょう」

「そうすると肛門が小さいから裂けるのですか」——結論的にそうなります。半数ぐらいは生れつき肛門が小さいので、便秘のための固い大きい便が裂肛を作り、裂肛があるから痛いのでおトイレに行かない。便はますます固く大きくなる、これではたまりませんね」

○

(略) 以上のごとく面白いところを書きました。この他にもご夫人達の便秘の告白などあって、とても楽しいものです。マニアのご一読をおすすめします。(小林薦)

ご承知おき下さい。

(京都・田川生)

○

奇ク愛読の皆さん、お元気ですか。旭川奇クファン会代表の芳村です。時々このページにて呼びかけていますが、しかしお答えがなく、残念に思っています。きっと皆さんは以前の僕のように遠慮してというか、何だか恥ずかしい気持ちがあるのではないのでしょうか。でも同じ趣味の人達にとって、このような気持は必要ではないでしょう。か。浣腸、縛り、軽いムチ打ち等で、Sの方でもMの方でもぜひお便り下さい。そして暗い人生から、明るい太陽を共に探し、歩いて行こうではありませんか。僕に縛られたり、浣腸されることの好きな女性の方、反対に僕に恥ずかしい縛りをしてくれたり、思いきり手足を広げて浣腸をしてくれる女性の方、迷わずお便り下さい。なるべくなら道内の方、それも旭川周辺の方を希望します。又夫婦プレイを行っている方、お便りやアルバム等を交換してみませんか。僕は七月で二十四才になりました。職業は公務員です。今度思いきって告白しますが、僕は女性の下着が好きです。ブラジャー

パンティ、ガードル、生理帯、生理パンティ等、不用のものでも譲って下さい。では今日はこれで失礼します。奇ク編集部の方の皆さんの健康を祈っています。

(北海道旭川大町二・芳村一郎)

○

サジスト及びマゾヒストの発見法をお知らせします。一つは誕生日によって判別する方法。三月二日から四月二〇日まで生まれた方。ただし男性のみ。五月二二日から六月二一日まで。十二月二三日から一月二〇日まで。ただし男性のみ。以上の方はサジスティックな性格の持ち主。一方、二月二〇日から三月二〇日まで生まれた方。ただし女性のみ。九月二四日から十一月二二日まで。以上の方がマゾ的性格の持ち主です。これは光文社発行「西洋占星術」という本によりました。自分にあてはめてみて、当たっているようでしたら他の人に実行してみてもいいかです。例として、私の場合には当たっていました。私の考えでは、どのような人でもそのような性格を持つていて、それを自覚するか否かにあるように思います。もう一つは、女性をサドかマゾかを見分ける方法。サド女性は概して瘦

せ型で、それも一見ひどくキラキラと異様に輝き、服装の色も原色を好む。態度も総体的にギスギスしていて煙草を喫うのも男のように喫う。マゾ女性は全身の肉付きがよく丸顔の者が多い。その行動は万事控え目だが、服装だけは原色を好む。顔つきは総体的に目が細く豊満で色白。柄は大柄で性的魅力を発散している者に多い。以上のことから思いあたることは、K誌四月号の山本章氏作のカメラ・ルポの魔子さんが瘦せ型であると思像できたが、私の目が悪いのであろうか。関谷富佐子さんと比較してみても下さい。さて、東京横浜の男性に朗報をお知らせします。他の地域の方でも東京方面に行かれたら時間つぶしにどうぞ。新橋、烏森口側の「凱旋門」と錦糸町駅前ビル通りの「コンパル」あたり。以上が喫茶店で、バーでは池袋西口「ときわ通り」一帯のバー街。横浜では暁町「親不孝通り」のクラブ「港」。上に述べたところにくる女性客の八割強はサドかマゾかのどちらかであるとか。ある月刊誌の記事より。皆様のお役にたてばよろしいのですが。美川美子様、お元気ですか私の投稿を読んでくれますよう祈

秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女
大手札四枚一組 略号 (たな) 五〇〇円

髪吊りに悶える女
大手札四枚一組 略号 (たに) 五〇〇円

黒髪をふり乱して
大手札四枚一組 略号 (たね) 五〇〇円

股間縛りを熱演する
大手札四枚一組 略号 (たの) 五〇〇円

女馬を調教する男
大手札四枚一組 略号 (たか) 五〇〇円

尻帆立て縛りの実演
大手札四枚一組 略号 (たき) 五〇〇円

秋山式縛りに喘ぐ女
大手札四枚一組 略号 (たけ) 五〇〇円

熱演は柔肌を焦す
大手札四枚一組 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たあ) 五〇〇円
鞭と羽毛の揉み責め
大手札四枚一組 略号 (たら) 五〇〇円

早縄術を披露する
大手札四枚一組 略号 (たお) 五〇〇円

急所縄に慟哭する女
大手札四枚一組 略号 (たそ) 五〇〇円

熱気を帯びた実演
大手札四枚一組 略号 (たさ) 五〇〇円

強烈な緊縛プレイ
大手札四枚一組 略号 (たし) 五〇〇円

弄られる緊縛女体
大手札四枚一組 略号 (たす) 五〇〇円

鞭と縄に追われて
大手札四枚一組 略号 (たむ) 五〇〇円

◎お申込みは、大阪市阿部野局
私書箱第14号 箕田京二へ

っております。ところで美川さん
あなたは「どこ」の何というバー
にお勤めですか。できれば私に一
筆返事を下さい。もし遠方の地に
住んでおられても手紙のやりとり
ぐらいできることと思います。

(敦賀市・岸英徳)

十一年前よりの奇ク愛読者です
が、近頃とみに真の傾向のある方
と、模倣でないプレイをやりたい
との願望が押さえ難くなっている
ものです。私のアイデア(氷のう
責め(咽喉用長氷のう二個用意)

女を仰向けにして猿ぐつわの代り
に咽喉用氷のうに水を入れて口に
噛ませて首の後で縛り、もう一つ
は禪とする。好みに応じて腹の上
乳の上などに普通の氷のうをのせ
る。なお、この際、口で噛むとや
ぶれる恐れがありますから、あら
かじめ細紐で先に猿ぐつわをし
て、それを隠すように氷のうをあ
てて縛るといいと思います。禪の
方は細ひもで吊るようになります。
えび責め等で前から写す場合、こ
の氷のうを前にあてて局所を隠せ
ばいいと思います。この程度なら
公開可能となるのではないでしょ
うか。(二)ゴム責め。これはゴム製
のあらゆる着物、はき物などを一
度に全部つけさせ、夏の暑い時に
何か仕事をさせて汗でゴムが体に
ピチャピチャとひつつく気味悪さ
を強調したものです。先ず女性を
裸にします。そしてゴムの薄い生
地でおしめをして、その上にブル
マー式のゴムのオシメカバーをき
っちりとはかせ、ゴム引き生地で
作った責め衣を着せます。それか
ら手術用の薄ゴム手袋をはめさせ
て、ゴム引きレインコートを着せ
ボタンを全部とめバンドもしめま
す。それから口にくい込むような
チューブが何かで猿ぐつわをして

フードをかぶせ足にピッタリ合う
ゴム長靴をはかせます。この長靴
は勿論、中に布のはってあるのは
いけません。中もゴムばりのもの
を使います。最後に作業用のゴム
合羽を着せてベルトをしめ、胸ま
であるゴムの胴長ぐつをはかせま
す。これは漁場などでよく使っ
ているものです。そしてゴム引きレ
インコートのフードをかぶせま
す。これらを着ると家の中でも汗
が出てくると思います。又、素肌
の上にビニールのレインコートを
着せて後手にしてそのまま風呂に
入れて首まで水または湯に浸して
上げますと、ビニールが水にぬれ
て肌にぴったりとひつついて微妙
なしわを作りますから、それを角
度を変えてウィット具合などによ
り面白いものが出来るのではない
かと思えます。この前ヌードの本
を見ましたら、濡れたビニールを
巻きつけて、しわを強調した写真
がありました。大変よいと思いま
した。一度お試し下さい。今後とも奇
クの御発展を祈ります。

(島根・渡辺定春)

九月号発売と同時に書店に走り
買い求め、はやる胸を押さえてペ

ージをめくりました。一番先に見入ったものは春川ナミオ様の漫画でした。私の心を見すいたような画で、嬉しく何べんも続けて見ながら一人、思いにふける次第でした。私はM男性で又、生ゴムが大好きです。先日、ニューポート社からゴムパンティを買い、着用して、一人しずかに本誌を読みふけりました。しかし昔とちがって現在の本誌は何か物足りなく、淋しく思います。一般の読者の方々も私と同じ思いを抱いておられることと思います。もっと内容を、たとえばグラビアを多くして下さるとか写真もかんじんの下部がカットされているのが気に入っています。股間に縦縄が喰い入っているところが見たく思います。ズロースとかショーツを着用していれば公開してもいいと思います。漫画週刊誌のように、M男性がコテンコテンにS女性にやられていたり、ところを春川ナミオ様に画いて下さるようお願いいたします。S女性はグラマーの方をおねがいます。本誌内の母娘蜂は読んでいるうちに自分が一郎になったようで、何んだかこわいような、しかし一度私も一郎のようになりたい気もいたします。本当にS女性とはこわ

いのでしょうか。次号の発売を今から楽しみに首を長くして待つております。ぜひ、私の思いをかなえて下さることをお願いいたします。とりとめもないことを書きましたが最後に貴社の益々の発展をお祈りいたします。

(岸和田市・松田四郎)

美川美子様、小生も一年ほど前からKKの愛読者になったものです。九月号を読んでいて、投書をせずにはいられなくなりまして。もちろん投書は初めての、軽度のS的優男です。あの「女性肥満体の郷愁」を読んでいて、正にあなたこそ小生の理想にピッタリと感じたのです。肥り気味の女性には好感がもて、特にあなたが小さいパンツをはいているなんて、センスのよさに感激して独りで喜んでいきます。申し遅れましたが、小生は二十一才、身長百七十センチ、体重六十キロ弱といったところですが、あなたがこの人だかわからなかったもので、果して逢えるかどうかかわかりませんが、逢える日を一日千秋の思いで待つております。又、小生は浣腸にも興味を持っております。是非とも有意義な時を過ごそうではありません

か。もしよろしければ、早く小生のとこへ手紙を下さい。必ず返事はさしあげます。今も小生は、あなたのちきれるような乳房とお尻を求めております。他のM女性もどうぞ。

(東京・木村明)

常にSM小説の新しい開拓を叫ばれているK誌に、童話とSMを結びつけた斬新なアイデアによる鈴木省吾氏の「異聞・白雪姫」の登場は、氏の今後の執筆活動に大いに期待されるものがあります。これを出発点として、童話からひろったSMファンタジー・シリーズの読切り連載を切望したい。ただ、文章がいまのところは生硬で素材の割合には余情が余り感じられないのは惜しいし、説明調が目立ち、会話を少しは取り入れる必要も思われるが、とにかく、そのアイデアに、氏の才能を感じ、頼もしい限りです。カットは四馬孝氏より室井亜砂路氏にお願いしたい。

(K生)

十月号に黒田寿様の作品、それに通信で山下米晴様のお便りに接して嬉しく存じます。黒田様の作品には小生、圧倒されていますが、今回のもの、その筆力は、とう

てい私の及ぶものではありません。いつも美女の生血の臭いが紙面より漂ってくる如き思いをいたすのはさすが見事なもので、小生の作品が没になっていくのも全くだと感じ入っております。カットの桐原紫門氏の図は、サロンのものとともに、毎号楽しんでおります。それに先月、今月と続いて小妻容子様のフレッシュな、それについてピアズレイバリの妖しい無残絵は今後の活躍を期待させると共に、圧迫にめげない奇巧のバイタリティを支える支持者の層の厚さを感じさせているのも楽しい限りです。特に小妻氏には、女性の画く流血模様は、又ちがった無残美を出せると思い、今後に期待しております。山下様、小生も先に述べました如く、時々、裸女血斗をテーマにした作品を投稿したのですが、没になってしまいます。プロットのみ、簡単に記しますが、(大和撫子が紫ふんどし、島田に白鉢巻もりりしく金髪、紅毛碧眼の裸女どもとわたり合って、次々と打ち果し、紅毛のグラマー裸女達の屍の山を築き、生首をかき落とし、生血で勝利の乾杯をする)というもののなのですが、やはり小生の筆力の至らぬせいでしょうか、

中河恵子新趣向写真

大手札印画紙極鮮明焼付フット
片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

乱痴騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

八九月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号△とは▽
増田みゆき

九九月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号△とは▽
増田みゆき

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

没になっています。改めて京洛生氏の「大奥裸女血斗」を読んでも、ますます、やはりこの種の古典に今ではなっている価値を認識します。御守殿達が、ふんどし一本の姿で演ずる血みどろ模様の描写は全くいつ読んでも私にはフレッシュ

ユに感ぜられるほど強烈きわまりないものです。それに、その情景を想像するに、累々と山をなし、血汐を川とつくってたおれ伏す、ふんどし一本の美女の屍のような姿態。それらの屍を踏みこえふみつけ、わたり合う同じふんどし一

本の裸女達の姿態。いずれをとってみても絵にならぬものはありません。どなたか、この強烈なふんどし一本の裸女の血斗泥絵図をものにしたいだきたいものです。これは山下様はじめ、同好各位にとっても同じことと思います。又嬉しいニュースとしては先日週刊文春に劇団(赤と黒)の十月公演は、女の切腹、女同士の裸の決斗などと、全く奇巧がソースかと思われるような作品を報じています。十月は全くたのしいものになると思います。女と女の争いは、衣服をまといっているよりも裸の方が一層女の業(ごう)を描くことが出来ると確信しています。ふんどしをしめていいるという、これ等の倒錯美が更に高まると私は信じています。山下様はじめ同好各位のお便りをお待ちしています。

(東京日本橋・女斗彦七)

告白小説「千恵子という女」:

いやあ、まいった、まいった。編集される方が何とか文章らしいものにまとめてくれたとはいえ、告白だなんて、おそろしい気がします。全く女性には縁のない私が、こんな大それたことを出来るわけもないし、我ながら他人の作品で

はないのかと思えるほどの乱文ぶり。第一、女性の手を握ることすら私にとっては、死ぬか生きるかの問題につながる——大ゲサじゃないんです。笑わないで下さい。SMの世界は、未だ私にとっては単なる空想の段階にしかすぎません。普段、あまり相手にされないもので、コンチキショーという気はありますが、縄なんか手にしたらそれこそ気絶してしまうかも知れません。空想の世界で、かぎられたことを文章にする——これ又、よほどの勇気を必要とすることを痛感しました。頭の中に浮かんだ物ごとを、スラスラ文章に出来ると思ったら大まちがい。最後は、もうどうにでもなれという心持ちになってしまいました。「生びよう法は大ケガのもと」と、昔の人は、にくいことをいうものです。「千恵子という女」を投稿してから一週間ぐらい後になって、みっともないことをしたものだ、と、わびしくなりました。何はともあれ活字にされた自分の文章を正面きって読めるようになるには、未だ余程の時間を必要としそうです。前に一、二度、読書通信らんで呼びかけてみました私ですが、「千恵子という女」に出てくる「私」

は卒業できたところで、どなたか私と同じような気持ちの方。そして「千恵子」という女性の方、お便り下さい。社会人五年生、二十二・六才の少しやせた男です。よろしく。それから、つたない文章に手を加えていただきました編集部の皆様、すばらしい巻頭画をプレゼントして下さい。山田様、心より感謝します。今後とも、よろしく御指導下さい。

(東京・橘雅美)

読者通信に投稿される方の文を読ませて頂きますと、奇クを、S Mを、自分の生きがいとして、それに没頭しているような方が多いことに驚かされます。勿論、多少オーバーに書かれていることとは思いますが。しかし現在、小市民的な人間、利己的な人間が、あまりにも多いという事実。私達はこのような社会の中に、人間の本当の幸福が存在すると思っているのでしょうか。ベトナム戦争の恒久化、中東戦争の勃発、自衛隊員適格者名簿作成の進行、砂川、板付米軍基地の拡張。私たちは、このような平和を脅かす恐しい事実にも、かたくなに目を閉じ、口をつぐみ、耳をふさいでいられる人間

になってしまったのでしょうか。私は、彼等が自らを欺くが故に、人間の本能を隠すがゆえに、偉い役人のように、奇クが「悪」だとか「不健全」などというつもりは毛頭ありません。むしろ人間の身体はどこかにSを、Mを、あるいはFを求める心がある以上、これを理性によって敢えて隠しだてすることの方が、よほど「悪」であり「不健全」でありましょう。しかし、人間本来の生き方を忘れ、真の幸福の追求を忘れ、奇クに、S Mに、日々の糧を求めるのは、人間として余りにも恥ずかしいことではないでしょうか。(スミマセン、小憎らしいことを言って)私達は人間として生きるが故、真に生きるということを常に問い続けねばならないのだと思います。今日は随分、生意気なことを申し上げました。こんな偉そうなことを言えるのも、まだ一度も社会に出たことのない私だからかも知れません。どうぞ、お許し下さい。

(東京・北幸一)

奇クを手にして最初に見るのは水野香代夫人の新作分譲写真の広告、同夫人のカメラ・ハントの記事の有無。そして読者通信の同好

の士の投稿記事。十月号の佐藤朗氏の言は全く小生と同じ声であります。同じ京都の洛北生。高峰剣一両氏の同好の志士？が活字で訴えるもナシのつぶてのように編集氏は一向に……。それからあらぬかゴウを煮やして職業柄の特権を生かして、先日、大津のパノラマプールで半日がんばって、グラマーママを望遠ハントしました。いいですね。水に濡れた水着が豊満な肌にピッタリと、しかもカラードから。諸氏も来夏には、どうぞ。肥満女性については、まだまだ書きたいが。……「女性自身」八月二十八日号に刺青した三十六才の主婦の記事とカラーが。「特集漫画」十月特大号に外人女性の前後、横、全身刺青の素晴らしいグラビアが掲載してありました。最後に水野香代夫人の分譲写真を万難を排して実現して下さい。以前の「切腹」のように。

(滋賀・赤畑修造)

M女性よ。Mを軽べつしたり罪悪視したり、かくそうしたりしないで下さい。Mの特権を活用して下さい。普通の人が得られない喜びがあるのです。あなたはMの特権を生かしてこそ最高の生きが

いを感じるはず。見ようによつては、人間性を否定するが如き性癖ですが、これこそ人間性の回復と同時に真の自己を見つけたことができるのです。あなたはS性の男の目に映ってこそ美を発揮するのです。日常のあなたの美は虚偽の美です。あなたの美は苦悶の表情にあり、羞らひの表情にあるのです。今一度、鏡台の前に立って、あなたの股間縛り、乳房責めをやって眺めて下さい。そして四つんばいになって、メス犬になりなさい。いかがです。あなたの秘密は固く御守り致します。M女性の御手紙、御待ちしています。最後に奇クの編集者の皆様方の御健康を御祈りしてペンをおきます。

(京都・山本淳信)

奇クファンの皆様、お交りなくお越しのことと存じます。連載の「花と蛇」団先生の相もかわらぬ筆のさえに魅入らされています。十月号の清水様の「異常の門」も非常に興味深く読ませて頂きました。私(三十才を少し越した主婦)自身S的傾向があり、まるで私がそのヒロインになったような気持ちでした。私も一度、このように男性を責めてみたいと思います

が、ただムチを振うなどの肉体的な苦痛による責めは私の好みに合いません。どちらかといいますと精神的な苦痛、人間性を完全に無視し、獣以下の取り扱いによって相手に屈辱を与える責めが好みにあっています。若い人よりも、四十才以上の、肉づきのよい太った方。どちらかといえばデブプリした方で、外面的には紳士で、それも社会的地位も名声もあるような方を、奴隷の如く獣の如く責めることを夢みています。(S女)

○ 美川芙美子様。九月号のあなたの告白、楽しく読ませていただきました。私は奇クのファンの一人数ですが、以前からあなたのような方の出現を待っておりまして。一度でもよいから、太った女性を思いつきりいじめてあげたいと夢みながら奇クを読むことによって少しでも自分の性癖を押さえて参りました。いかがでしょうか、一度私にあなたをいじめさせていただけないでしょうか。あなたのご希望にかなうかどうかわかりませんがあなたのご満足いただけるよう努力をいたします。詳細は後日、お知らせしますが、もしご了解いただけますならご返事下さい。どう

かよろしくお願い申し上げます。ではご返事お待ちしております。(新潟 星良一)

○ 小生、数年前から女性用の物を着用するようになりました。嫁いだ長姉、次姉たちの使い古した物をしまっておきました。夜一人、それを着用しますと(百七十三センチ、五十八キロ)の私には、姉たちの物は小さくて身が締め上げられ、体にピッタリとはりついてしまします。そしてこんな事をしている時が、小生には一番のたのしみでした。つい最近、お産の時使われた兄嫁の物を、そっと盗み、着用しました。しかし先日、小生に転勤の命が出たのです。寮生活になると思いますが、一人一室になれる可能性は無いと会社の方で行われるので、荷物の整理がてら、これらの物も整理したいと思います。(ストッキング、メン・ス・バンド、ブルマー、短パン、パンティ、ブラジャー、スリッパ、ショーツ、ガードル、産後用バンド、水着、ブラウス、スカートなど数点あります)こんな不要な物でも、お集めの方がいられたら差し上げようと思います。果して御満足いただけるかはわか

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

りませんが。いささか御希望に
 えるように精一杯返信致します。
 最後になりましたが、数カ月後小
 生は、未知の東京に勤務致しま
 す。東京の香山玲子様、新井由美
 子様、中原久美子様、大宮の村ま
 り子様、お友達になつていただい
 ませんか、お便りお待ちしております。
 （有田徹也）

山下和子様、九月号の通信欄、
 うれしく拝見しました。小生は大
 の下着愛好者です。それも新しい
 ものではなしに若い女性が使用し
 たことのあるパンティが最もよい
 のです。あなたが、使用中のもの
 をさしあげてもよいといわれてい
 るもの、下着では駄目でしょう
 か。もちろん、お礼はいたしま
 す。同姓のよしみでお願いできま
 せんか。一度御返事ください。今
 までの読者通信欄でもパンティが
 ほしいとうつたえた方が二、三あ
 りましたが、皆それに対しての返
 事を書かれた女性はないようで
 す。下着愛好者のみなさん。もし
 妻帯されている方がありましたら
 奥さんのはき古されたパンティを
 お互に交換しあつてもよいとい
 うお考えはありませんか。あればお
 便りください。（大阪・山下浩）

私が奇クを知ったのは、今から
 丁度、三年前のことです。生れて
 始めて見る貴誌の表紙に目がびつ
 たりと吸い寄せられ、ページを繰
 る胸が高鳴りました。その時の強
 烈な感動は、今でも頭の芯にこび
 りついています。その日、私の目
 の前には新しい世界が開けまし
 た。以来、機会ある毎に奇クを読
 み漁り、夜になると、あれこれ引
 っぱり出しては一人でページをめ
 くらつて楽しんでおります。毎月、
 新刊の出る二十五日、いつもの書
 店へ足を運び、それを手にとるま
 での道程は、皆様、御経験のこと
 と思ひますが、一寸形容し難いよ
 うな妖しい胸のときめきが私を締
 めつけます。貴誌に登場する幾多
 のヒロインにも大分、なじみが深
 くなりました。カメラ・ハントに
 登場する素晴らしい女性達は、生々
 しい現実感をともなつて私に迫り
 ます。しかし、この三年間、私を
 全く奇クの虜にしたのは、何とい
 つても団先生の「花と蛇」です。
 新刊を買うたび真先に目を通しま
 す。美しい囚われのヒロイン達が
 繰りひろげる被虐の絵巻は、私に
 これあらばこそ奇クの存在価値も
 あるのだと思わせるほどの魅力で

開股縛りに喜悦する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 中河 恵子 略号 八はわ

悶える猿轡の裸身
 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 関谷富佐子 略号 八へも

全裸の女体立ち縛り

中河 恵子 略号 八はわ
 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 中河 恵子 略号 八はふ

ムチ打ちの陶酔境
 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 関谷富佐子 略号 八へさ

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 中河 恵子 略号 八はほ

両手吊りで痛める女身
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へし

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 中河 恵子 略号 八はあ

後手縛りの竹棒責め
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へす

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 中河 恵子 略号 八はう

強烈開股強制縛り
 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 大島 照代 略号 八へせ

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 中河 恵子 略号 八はさ

両手吊りであえぐ女体
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へゆ

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 中河 恵子 略号 八はめ

竹棒強烈開股責め
 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 大島 照代 略号 八へた

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 中河 恵子 略号 八はし

厳しき緊縛の正坐責め
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へち

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 中河 恵子 略号 八はも

責めの魔手に屈伏する
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へつ

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 関谷富佐子 略号 八へむ

竹棒の胴絞め責め
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へて

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
 関谷富佐子 略号 八へめ

竹棒開股胴絞め縛り
 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
 大島 照代 略号 八へと

次号(十二月号)は十月二十五日に発売します。

す。団先生の麗筆には、つくづく敬服し礼をいいたような気持ちです。しかし最近の「花と蛇」に歯がゆく思うことは、昔のような艶麗な挿画がないことです。こればかりは、ぜひ復活してほしいものです。また、団先生にお願いがあります。静子夫人は先生のおつきりになった最高のヒロインであり、先生の御愛着も一しおのことと思います。全く、静子夫人は「花と蛇」愛読者の最大のアイドルに違いありませんが、それにしても、他の女性達、特に桂子にはもう少し目をかけてやって頂きたいのです。この物語りの主人公は、美女が五人も揃ったところに最大の特色があり、また他の小説に見られない重味があると思うのです。どうか五人の美女を同じように可愛がってやって下さい。そして桂子にも、もう少し活躍の場所を与えて下さい。拙い文ですが思ったことを書かせて頂きました。「奇ク」と「花と蛇」の一層の発展を祈ります。

(岐阜県本巣郡 三橋ハジメ)

この欄を借りて別送しました拙稿の、着想を得た出典を明記しておきます。△薔薇と蜜蜂△は千一夜物語中の△若者ヌウルと勇まし△いフランク王女△からモチーフを得た翻案です。バートン版では第八百六十四夜―第八百九十四夜、マルドリユス版では第六百七十一夜―第七百十四夜にあります。(アラビア語の原典がちがうのだそうです。右記題名はコルドリュス版のもの)。翻案といえは聞えはいいが、要するに我田引水的に拡張したものです。内容(作者の意図)は低級なエロ読物の域を出ません。尚、同夜話からは他にもいくつか部分的プロットを借用しましたが、興味半減を避けるため、ここには記しません。

(京都・田代俊夫)

私、四年前、奇ク分譲品、妊婦腹のモデルになりました安原さゆりです。主人の強制で、あの様な羞しい姿をお目にかけましたが、今度も私の不都合で主人の貴重品を盗まれ、その罰として誰かにさゆりを買って貰って一日、羞恥責

に会い、弁償するよう申し渡されました。私の落度なので主人のいうことを聞くより仕方なく、筆をとった次第です。年は三十四才、二児の母です。やせていて乳房もヒップも小さく魅力なんてありません。体重も四十キロ内外です。こんな女でよろしかったら、どんなか一日(午前十時頃より午後四時まで)お願い申し上げます。私はSでもMでもありませんので、浣腸逆吊り、血の出るようなムチ打ちは好みません。他のことなら私は貴方のものですもの、どんなことをなさっても結構です。お便りお待ちしております。

(埼玉・安原さゆり)

九月に入り、ようやく秋らしい気候になりましたが、奇クファンの皆様いかがお過ごしでしょうか。私は奇クを愛読してまだ日は浅いですが、一日も速く皆様の仲間入りが致したく一筆したためます。奇クの十月号、楽しく拝承致しました。今月号の辻村氏のSMカメラ・ハントは素晴しかった。「甘い羞恥」その名の通りの記事でした。大島照代さんの美体に深い感銘を覚えました。私も、もちろん縛りは大好きです。でも、それよ

りもまして、浣腸プレイに大なる意を表するものです。女の縛り、それに加えられるクリスプレイ、これは女性にとって心よい羞恥ではないでしょうか。全国の女性諸氏、浣腸プレイに興味をもたれる方々、それから名古屋の川村順子殿、いづこかでこの文面が目にとまりましたら、御一報下さい。お待ちしております。では、この辺でペンを置きます。

(東京・石原哲也)

私達夫婦は五年ほど前よりSMプレイを知り、倦怠期らしきことを知らず楽しい日を過ごしております。最近では、SMは紙の裏表のようなもので、同一人の中にあつて、切り離せないものではないかと思ひます。と申しますのは、私自身、M的な面が強いと思ひついても、ある一面には相手をいじめめることにも快感を覚えますし、私をここまで調教した主人も、同じことがいえるようです。プレイの内容は、K・Kを大いに参考にさせて頂いておりますが、あくまできずのつくことはさけ、緊縛を中心に、操り責め、ローソク責め等を併用しております。それに股間縛り逆海老責め、開股責め、消

え入りたくなるような恥ずかしい
惨めな姿にされた時には、必ず大
きな鏡が目の前に置かれているの
です。そうした自分の姿を眺めな
がら、憧れにも似た幻想の世界が
つぎつぎと広げられていきます。
それは忘れることの出来ない映画
「日本拷問刑罰史」「拷問」等に
出てくる、あらゆる拷問に、のた
うち悲鳴を上げている女囚の姿で
あり羞恥責小説の涙を流しながら
恥ずかしさに堪え、責め抜かれて
いるヒロイン達、それが何時しか
そのまま私自身になっているので
す。こうした私達自身の姿を、い
ついつまでも眺めていたため、
どうしても写真に撮っておきたい

と思っておりましたが、写したフ
イルムを写真屋に頼まれず、とい
って現像、焼付は自分では出来な
い悲しさ、あきらめかけておりま
した。たまたま最近になって、ポ
ラロイドという現像、焼付けのい
らない写真（写真器の中に、その
専用のフィルムを入れ、引き出す
ときにその作用をする）写真機の
あることを知り、やっと念願をか
なえることができました。欲をい
えば夜間専用のフラッシュで写す
のですが画面が暗く鮮明でありま
せん。それに引延し、焼増しが出
来ないことです。それだけに一葉
一葉が我々夫婦においては得がた
い一瞬であり、記念でもあるわけ

です。縛られたそのままの姿で、
その写された写真を見る時、乳房
の上下を締め上げられ圧迫された
血管がとくとくと波打ち高鳴るこ
とを、どうすることも出来ないの
です。欲をいえば、きりがないと
はいえ貴誌に提出されている夫婦
プレイのフォトは皆、鮮明に撮ら
れていてうらやましく思います。
同好の御夫婦、又は同性の方で現
像、焼付けをして頂き、お互いに
フォトの交換をして頂けるお方と
御交際を望んでおります。尚、隣
県の南恵子様、読者通信でお呼び
かけ頂いた日時に、駅までお出迎
えに参りましたのですが、お会い
できなく残念に思っております。

（このことはお便りしたのですが
掲載されなかったのが為念）いつ
かお逢い出来る機会のあることを
祈り、お便りをお待ちします。編
集部様。同封の写真は夫婦プレイ
の皆様に刺戟され、はずかしさを
忍んで、不鮮明で掲載不可能かも
知れませんが送ってみました。御
笑覧下さい。でも前記のように焼
増しが出来ないで、御用済みにな
りましたら、御迷惑とは存じま
すが、御返送下さいませんか。勝
手を申してすみませんが、よろし
くお願い致します。今後、もし
良いのが撮れましたら、お送りし
て見ていただきたいと存じます。

（浜田市・志間みち子）

本誌既刊号在庫一覧表

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通
り在庫しておりますが、39年に発
行のものについては在庫の僅少な
ものもありますから、お早い目に
御注文願います。
○従来、雑誌の送料は当社にて負
担しておりましたが、今後は三カ
月以上予約注文以外（既刊号は
含まず）は一部につき送料二〇円
の御負担を願います。多数一括し
てお求めの際は八小包Vにて発送

昭和39年6月号	（送共二七〇円）
昭和39年7月号	（送共三二〇円）
昭和39年8月号	（送共三二〇円）
昭和39年9月号	（送共三二〇円）
昭和39年10月号	（送共三二〇円）
昭和39年11月号	（送共三二〇円）
昭和39年12月号	（送共三二〇円）
昭和40年1月号	（送共三二〇円）

昭和40年2月号	（送共三二〇円）
昭和40年3月号	（送共三二〇円）
昭和40年4月号	（送共三二〇円）
昭和40年5月号	（送共三二〇円）
昭和40年6月号	（送共三二〇円）
昭和40年7月号	（送共三二〇円）
昭和40年8月号	（送共三二〇円）
昭和40年9月号	（送共三二〇円）
昭和40年10月号	（送共三二〇円）
昭和40年11月号	（送共三二〇円）
昭和40年12月号	（送共三二〇円）
昭和41年1月号	（送共三二〇円）
昭和41年2月号	（送共三二〇円）
昭和41年3月号	（送共三二〇円）
昭和41年4月号	（送共三二〇円）
昭和41年5月号	（送共三二〇円）
昭和41年6月号	（送共三二〇円）
昭和41年7月号	（送共三二〇円）
昭和41年8月号	（送共三二〇円）
昭和41年9月号	（送共三二〇円）
昭和41年10月号	（送共三二〇円）
昭和41年11月号	（送共三二〇円）
昭和41年12月号	（送共三二〇円）
昭和42年1月号	（送共三二〇円）
昭和42年2月号	（送共三二〇円）
昭和42年3月号	（送共三二〇円）
昭和42年4月号	（送共三二〇円）
昭和42年5月号	（送共三二〇円）
昭和42年6月号	（送共三二〇円）
昭和42年7月号	（送共三二〇円）
昭和42年8月号	（送共三二〇円）
昭和42年9月号	（送共三二〇円）
昭和42年10月号	（送共三二〇円）
昭和42年11月号	（送共三二〇円）
昭和42年12月号	（送共三二〇円）
昭和43年1月号	（送共三二〇円）
昭和43年2月号	（送共三二〇円）
昭和43年3月号	（送共三二〇円）
昭和43年4月号	（送共三二〇円）
昭和43年5月号	（送共三二〇円）
昭和43年6月号	（送共三二〇円）
昭和43年7月号	（送共三二〇円）
昭和43年8月号	（送共三二〇円）
昭和43年9月号	（送共三二〇円）
昭和43年10月号	（送共三二〇円）
昭和43年11月号	（送共三二〇円）
昭和43年12月号	（送共三二〇円）
昭和44年1月号	（送共三二〇円）
昭和44年2月号	（送共三二〇円）
昭和44年3月号	（送共三二〇円）
昭和44年4月号	（送共三二〇円）
昭和44年5月号	（送共三二〇円）
昭和44年6月号	（送共三二〇円）
昭和44年7月号	（送共三二〇円）
昭和44年8月号	（送共三二〇円）
昭和44年9月号	（送共三二〇円）
昭和44年10月号	（送共三二〇円）
昭和44年11月号	（送共三二〇円）
昭和44年12月号	（送共三二〇円）
昭和45年1月号	（送共三二〇円）
昭和45年2月号	（送共三二〇円）
昭和45年3月号	（送共三二〇円）
昭和45年4月号	（送共三二〇円）
昭和45年5月号	（送共三二〇円）
昭和45年6月号	（送共三二〇円）
昭和45年7月号	（送共三二〇円）
昭和45年8月号	（送共三二〇円）
昭和45年9月号	（送共三二〇円）
昭和45年10月号	（送共三二〇円）
昭和45年11月号	（送共三二〇円）
昭和45年12月号	（送共三二〇円）
昭和46年1月号	（送共三二〇円）
昭和46年2月号	（送共三二〇円）
昭和46年3月号	（送共三二〇円）
昭和46年4月号	（送共三二〇円）
昭和46年5月号	（送共三二〇円）
昭和46年6月号	（送共三二〇円）
昭和46年7月号	（送共三二〇円）
昭和46年8月号	（送共三二〇円）
昭和46年9月号	（送共三二〇円）
昭和46年10月号	（送共三二〇円）
昭和46年11月号	（送共三二〇円）
昭和46年12月号	（送共三二〇円）
昭和47年1月号	（送共三二〇円）
昭和47年2月号	（送共三二〇円）
昭和47年3月号	（送共三二〇円）
昭和47年4月号	（送共三二〇円）
昭和47年5月号	（送共三二〇円）
昭和47年6月号	（送共三二〇円）
昭和47年7月号	（送共三二〇円）
昭和47年8月号	（送共三二〇円）
昭和47年9月号	（送共三二〇円）
昭和47年10月号	（送共三二〇円）
昭和47年11月号	（送共三二〇円）
昭和47年12月号	（送共三二〇円）
昭和48年1月号	（送共三二〇円）
昭和48年2月号	（送共三二〇円）
昭和48年3月号	（送共三二〇円）
昭和48年4月号	（送共三二〇円）
昭和48年5月号	（送共三二〇円）
昭和48年6月号	（送共三二〇円）
昭和48年7月号	（送共三二〇円）
昭和48年8月号	（送共三二〇円）
昭和48年9月号	（送共三二〇円）
昭和48年10月号	（送共三二〇円）
昭和48年11月号	（送共三二〇円）
昭和48年12月号	（送共三二〇円）
昭和49年1月号	（送共三二〇円）
昭和49年2月号	（送共三二〇円）
昭和49年3月号	（送共三二〇円）
昭和49年4月号	（送共三二〇円）
昭和49年5月号	（送共三二〇円）
昭和49年6月号	（送共三二〇円）
昭和49年7月号	（送共三二〇円）
昭和49年8月号	（送共三二〇円）
昭和49年9月号	（送共三二〇円）
昭和49年10月号	（送共三二〇円）
昭和49年11月号	（送共三二〇円）
昭和49年12月号	（送共三二〇円）
昭和50年1月号	（送共三二〇円）
昭和50年2月号	（送共三二〇円）
昭和50年3月号	（送共三二〇円）
昭和50年4月号	（送共三二〇円）
昭和50年5月号	（送共三二〇円）
昭和50年6月号	（送共三二〇円）
昭和50年7月号	（送共三二〇円）
昭和50年8月号	（送共三二〇円）
昭和50年9月号	（送共三二〇円）
昭和50年10月号	（送共三二〇円）
昭和50年11月号	（送共三二〇円）
昭和50年12月号	（送共三二〇円）
昭和51年1月号	（送共三二〇円）
昭和51年2月号	（送共三二〇円）
昭和51年3月号	（送共三二〇円）
昭和51年4月号	（送共三二〇円）
昭和51年5月号	（送共三二〇円）
昭和51年6月号	（送共三二〇円）
昭和51年7月号	（送共三二〇円）
昭和51年8月号	（送共三二〇円）
昭和51年9月号	（送共三二〇円）
昭和51年10月号	（送共三二〇円）
昭和51年11月号	（送共三二〇円）
昭和51年12月号	（送共三二〇円）
昭和52年1月号	（送共三二〇円）
昭和52年2月号	（送共三二〇円）
昭和52年3月号	（送共三二〇円）
昭和52年4月号	（送共三二〇円）
昭和52年5月号	（送共三二〇円）
昭和52年6月号	（送共三二〇円）
昭和52年7月号	（送共三二〇円）
昭和52年8月号	（送共三二〇円）
昭和52年9月号	（送共三二〇円）
昭和52年10月号	（送共三二〇円）
昭和52年11月号	（送共三二〇円）
昭和52年12月号	（送共三二〇円）
昭和53年1月号	（送共三二〇円）
昭和53年2月号	（送共三二〇円）
昭和53年3月号	（送共三二〇円）
昭和53年4月号	（送共三二〇円）
昭和53年5月号	（送共三二〇円）
昭和53年6月号	（送共三二〇円）
昭和53年7月号	（送共三二〇円）
昭和53年8月号	（送共三二〇円）
昭和53年9月号	（送共三二〇円）
昭和53年10月号	（送共三二〇円）
昭和53年11月号	（送共三二〇円）
昭和53年12月号	（送共三二〇円）
昭和54年1月号	（送共三二〇円）
昭和54年2月号	（送共三二〇円）
昭和54年3月号	（送共三二〇円）
昭和54年4月号	（送共三二〇円）
昭和54年5月号	（送共三二〇円）
昭和54年6月号	（送共三二〇円）
昭和54年7月号	（送共三二〇円）
昭和54年8月号	（送共三二〇円）
昭和54年9月号	（送共三二〇円）
昭和54年10月号	（送共三二〇円）
昭和54年11月号	（送共三二〇円）
昭和54年12月号	（送共三二〇円）
昭和55年1月号	（送共三二〇円）
昭和55年2月号	（送共三二〇円）
昭和55年3月号	（送共三二〇円）
昭和55年4月号	（送共三二〇円）
昭和55年5月号	（送共三二〇円）
昭和55年6月号	（送共三二〇円）
昭和55年7月号	（送共三二〇円）
昭和55年8月号	（送共三二〇円）
昭和55年9月号	（送共三二〇円）
昭和55年10月号	（送共三二〇円）
昭和55年11月号	（送共三二〇円）
昭和55年12月号	（送共三二〇円）
昭和56年1月号	（送共三二〇円）
昭和56年2月号	（送共三二〇円）
昭和56年3月号	（送共三二〇円）
昭和56年4月号	（送共三二〇円）
昭和56年5月号	（送共三二〇円）
昭和56年6月号	（送共三二〇円）
昭和56年7月号	（送共三二〇円）
昭和56年8月号	（送共三二〇円）
昭和56年9月号	（送共三二〇円）
昭和56年10月号	（送共三二〇円）
昭和56年11月号	（送共三二〇円）
昭和56年12月号	（送共三二〇円）
昭和57年1月号	（送共三二〇円）
昭和57年2月号	（送共三二〇円）
昭和57年3月号	（送共三二〇円）
昭和57年4月号	（送共三二〇円）
昭和57年5月号	（送共三二〇円）
昭和57年6月号	（送共三二〇円）
昭和57年7月号	（送共三二〇円）
昭和57年8月号	（送共三二〇円）
昭和57年9月号	（送共三二〇円）
昭和57年10月号	（送共三二〇円）
昭和57年11月号	（送共三二〇円）
昭和57年12月号	（送共三二〇円）
昭和58年1月号	（送共三二〇円）
昭和58年2月号	（送共三二〇円）
昭和58年3月号	（送共三二〇円）
昭和58年4月号	（送共三二〇円）
昭和58年5月号	（送共三二〇円）
昭和58年6月号	（送共三二〇円）
昭和58年7月号	（送共三二〇円）
昭和58年8月号	（送共三二〇円）
昭和58年9月号	（送共三二〇円）
昭和58年10月号	（送共三二〇円）
昭和58年11月号	（送共三二〇円）
昭和58年12月号	（送共三二〇円）
昭和59年1月号	（送共三二〇円）
昭和59年2月号	（送共三二〇円）
昭和59年3月号	（送共三二〇円）
昭和59年4月号	（送共三二〇円）
昭和59年5月号	（送共三二〇円）
昭和59年6月号	（送共三二〇円）
昭和59年7月号	（送共三二〇円）
昭和59年8月号	（送共三二〇円）
昭和59年9月号	（送共三二〇円）
昭和59年10月号	（送共三二〇円）
昭和59年11月号	（送共三二〇円）
昭和59年12月号	（送共三二〇円）
昭和60年1月号	（送共三二〇円）
昭和60年2月号	（送共三二〇円）
昭和60年3月号	（送共三二〇円）
昭和60年4月号	（送共三二〇円）
昭和60年5月号	（送共三二〇円）
昭和60年6月号	（送共三二〇円）
昭和60年7月号	（送共三二〇円）
昭和60年8月号	（送共三二〇円）
昭和60年9月号	（送共三二〇円）
昭和60年10月号	（送共三二〇円）
昭和60年11月号	（送共三二〇円）
昭和60年12月号	（送共三二〇円）
昭和61年1月号	（送共三二〇円）
昭和61年2月号	（送共三二〇円）
昭和61年3月号	（送共三二〇円）
昭和61年4月号	（送共三二〇円）
昭和61年5月号	（送共三二〇円）
昭和61年6月号	（送共三二〇円）
昭和61年7月号	（送共三二〇円）
昭和61年8月号	（送共三二〇円）
昭和61年9月号	（送共三二〇円）
昭和61年10月号	（送共三二〇円）
昭和61年11月号	（送共三二〇円）
昭和61年12月号	（送共三二〇円）
昭和62年1月号	（送共三二〇円）
昭和62年2月号	（送共三二〇円）
昭和62年3月号	（送共三二〇円）
昭和62年4月号	（送共三二〇円）
昭和62年5月号	（送共三二〇円）
昭和62年6月号	（送共三二〇円）
昭和62年7月号	（送共三二〇円）
昭和62年8月号	（送共三二〇円）
昭和62年9月号	（送共三二〇円）
昭和62年10月号	（送共三二〇円）
昭和62年11月号	（送共三二〇円）
昭和62年12月号	（送共三二〇円）
昭和63年1月号	（送共三二〇円）
昭和63年2月号	（送共三二〇円）
昭和63年3月号	（送共三二〇円）
昭和63年4月号	（送共三二〇円）
昭和63年5月号	（送共三二〇円）
昭和63年6月号	（送共三二〇円）
昭和63年7月号	（送共三二〇円）
昭和63年8月号	（送共三二〇円）
昭和63年9月号	（送共三二〇円）
昭和63年10月号	（送共三二〇円）
昭和63年11月号	（送共三二〇円）
昭和63年12月号	（送共三二〇円）
昭和64年1月号	（送共三二〇円）
昭和64年2月号	（送共三二〇円）
昭和64年3月号	（送共三二〇円）
昭和64年4月号	（送共三二〇円）
昭和64年5月号	（送共三二〇円）
昭和64年6月号	（送共三二〇円）
昭和64年7月号	（送共三二〇円）
昭和64年8月号	（送共三二〇円）
昭和64年9月号	（送共三二〇円）
昭和64年10月号	（送共三二〇円）
昭和64年11月号	（送共三二〇円）
昭和64年12月号	（送共三二〇円）
昭和65年1月号	（送共三二〇円）
昭和65年2月号	（送共三二〇円）
昭和65年3月号	（送共三二〇円）
昭和65年4月号	（送共三二〇円）
昭和65年5月号	（送共三二〇円）
昭和65年6月号	（送共三二〇円）
昭和65年7月号	（送共三二〇円）
昭和65年8月号	（送共三二〇円）
昭和65年9月号	（送共三二〇円）
昭和65年10月号	（送共三二〇円）
昭和65年11月号	（送共三二〇円）
昭和65年12月号	（送共三二〇円）
昭和66年1月号	（送共三二〇円）
昭和66年2月号	（送共三二〇円）
昭和66年3月号	（送共三二〇円）
昭和66年4月号	（送共三二〇円）
昭和66年5月号	（送共三二〇円）
昭和66年6月号	（送共三二〇円）
昭和66年7月号	（送共三二〇円）
昭和66年8月号	（送共三二〇円）
昭和66年9月号	（送共三二〇円）
昭和66年10月号	（送共三二〇円）
昭和66年11月号	（送共三二〇円）
昭和66年12月号	（送共三二〇円）
昭和67年1月号	（送共三二〇円）
昭和67年2月号	（送共三二〇円）
昭和67年3月号	（送共三二〇円）
昭和67年4月号	（送共三二〇円）
昭和67年5月号	（送共三二〇円）
昭和67年6月号	（送共三二〇円）
昭和67年7月号	（送共三二〇円）
昭和67年8月号	（送共三二〇円）
昭和67年9月号	（送共三二〇円）
昭和67年10月号	（送共三二〇円）
昭和67年11月号	（送共三二〇円）
昭和67年12月号	（送共三二〇円）
昭和68年1月号	（送共三二〇円）
昭和68年2月号	（送共三二〇円）
昭和68年3月号	（送共三二〇円）
昭和68年4月号	（送共三二〇円）
昭和68年5月号	（送共三二〇円）
昭和68年6月号	（送共三二〇円）
昭和68年7月号	（送共三二〇円）
昭和68年8月号	（送共三二〇円）
昭和68年9月号	（送共三二〇円）
昭和68年10月号	（送共三二〇円）
昭和68年11月号	（送共

提供して貰った。牧高志、千草忠夫、奮斗士
好太、中宮栄の諸氏等このところ暫く顔を
見せなかった常連が轡を並べて呉れた。
○ベテランや常連とは別に、読者の投稿によ
る佳品が今月は華やかに彩っている。常盤か
おる氏の「女装マニア」菅原敏夫氏の「ゴム
プレイ」山本羊子氏の「浣腸告白」御木本三
郎氏の「女性の乳房」平みどり氏の「愛奴讃
歌」予世場良三氏の「紐のある青春」と、フ
アンの方を飽かせないことと思う。

○芳野眉美氏の「濡れにぞ濡れし」は往年の
彼の片鱗を見せていて妙。千葉青鬼氏の「復
讐」は益々脂ののりきった感じ。じっくりと
噛みしめれば噛みしめるほど味の出る『稿談
性風俗資料入門』は、必ずや文献紹介の貴重
な資料として後世に残ることだろう。

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれてゐる夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもので自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記を願います。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したものでも結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

には賞金二千元以上を贈呈いたします。

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手難
 の方は直接代金御送付の上、御予約下され
 ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に
 重包装して確実に発送申し上げます。局
 の方々は二十五日頃受領して下さい。

十一月号
〔第二十一卷第十一号〕
通刊第二三三三号

昭和四十二年十月二十日 印刷
昭和四十二年十一月一日 発行

編集人 箕田 俊二
 發行人 田村 俊
 印刷人 北村 夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番
 (昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
 (昭和四十二年四月二一日)
 国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として發行を企圖しております、本系上、十八才未満の方には、絶対販賣下さらさないよう、特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。